

「鬼滅の刃」世界のあの世が「鬼灯の冷徹」世界だったら

淵深 真夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルそのまんまなクロスオーバー。

ところで無惨様をボロクソに語るのはアンチ・ヘイトになるんでしょうか？

※作中に「あの世コソコソ噂話」という設定集がありますが、そこに載っていないキャラクターは原作での情報が少なすぎて何も決められない・アニメなどで新情報が出る可能性があるのでその情報待ち・本編でネタにするつもりなので、ネタバレ防止のどれかです。

※「あの世コソコソ噂話」は本編のネタバレを防ぐためと、最新話リンクでの混乱を防ぐために、新しい情報を加筆した場合は基本的に最新話の前に移動しています。

目次

「俺達だって無惨大っ嫌いだよ!!」	1
「粕治さんが何をしたって言うんだよ!!」	12
「だから閻魔庁に来た瞬間、土下座しました」	21
「鬼灯様、愛してる!!」	33
鬼灯原作扱い短編集「粕治さんの日常」	49
無惨様の楽しい十六小地獄めぐり（等活・黒縄地獄編）	63
「あいつ、アホにはペイズリー柄の印象しか残せないのか」	77
「何で酒呑童子さんたちと一緒に倒してくれなかった頼光四天王!!」	92
「あなた達はもう結婚してるでしょ」	106
無惨様の楽しい十六小地獄めぐり（衆合地獄編）	123
「その礼儀はたぶん、芋にとっても迷惑です」	144
If：号泣地獄な浄玻璃の鏡上演会	159
無惨様の楽しい十六小地獄めぐり（叫喚地獄編）	179
「いい加減、腹をくくらないと私が今ここで甘露寺さんに求婚する!!」	195
「お館様も爆笑する派だから！ むしろ筆頭だから!!」	213
『なおさら気色悪いわ死ね!!』	223
If：西洋の混沌すぎる御伽噺	239
無惨様の楽しい十六小地獄めぐり（大叫喚地獄編）	253
「凄くにぎやか!! お疲れさまでした!!」	276
「何あれ知らない、怖い」	298
地獄の釜が開く時	314
「何なら今すぐにも休みを申請するよ」	335

無惨様の楽しい十六小地獄めぐり (焦熱地獄編)	352
「あなたが第三補佐官ですよ。私も忘れてましたけど」	380
「お前だけすつきりしてんじゃねー!!」	404
「全ての関節に同じことをされたくなければ、さっさと吐け」	429
「俺に突っ込み以外の仕事をさせろ!!」	461
「これを機に真人間になればいいじゃないですか!」	495
柱相関言行録 (あの世編)	508
原作小ネタ会話劇15連	528
「俺のハードルを無限に上げるな」	539
「原因は、暴投しているお前のアガペーだ」	562
「あれが育てたら、悪人にはならなくても真人間には育たない」	591
無惨様の地獄じゃないけど巡ってもらおう番外編	619
あの世コソコソ噂話【キャラクターの現在編】	644
あの世コソコソ噂話【質問回答&小ネタ編】	670
【仕事して】妹とその上司と同僚が洒落怖ハントする話【吉兆】	699
色恋沙汰のあれやこれ	730

「俺達だつて無惨大っ嫌いだよ!!」

「ん？ 何だこれ？」

「おい、茄子。何やってんだよ？」

地獄の資料室というのはもはや名分。

実際はいるかわからないかわからない物を取りあえず置き続け、流石に容量の限界を感じた部屋を鬼灯が手の空いている獄卒たちに指示し、そして言い出しつぺだからといって自らも通常業務の合間を縫って断捨離している最中に、茄子がそれを見つけた。

敏感肌で埃にも弱い唐瓜がマスクを着けたまま、「さぼるな」と幼馴染を軽く小突く。

茄子は「ゴメンゴメン」と軽く謝りつつ、彼はお迎え課スペースにあった「それ」を広げて見せた。

「見ろよ、唐瓜。服だ服。洋服。何でこんなのがあるんだろう？」

茄子が広げて見せたのは、黒い詰襟の上着。男子学生の学ランと言えはわかりやすいだろう。

やけに古びているものだが、それだけなら特に不思議ではない。地獄の獄卒たちは、時々仕事や研修で現世を訪れることもあるから、その為の変装用の服だろうで終わる話だ。

特にこの服が置いてあったのはお迎え課……、現世で死んだ者の魂をあの世に迎えに行く獄卒たちの部署だ。

役割上、基本的に彼らは生者には見えない状態で現世に降りるが、死体から魂が完全に抜けた後、そのまま逃げ出してしまった亡者を捜すのも彼らの仕事。そしてその亡者の目撃情報を生者から得る為に、実体化して現世に降りることも多々あるのだから、これは学校などで目撃される亡者を捕まえる為、潜入用の服だと唐瓜は判断し、茄子にそう言ってさっさとしまえと指示を出す。

「いや……これ多分学校の制服じゃないと思う。つか、そうだったら嫌すぎる」

が、茄子は唐瓜の言葉を、困ったようなとか困惑したような顔で否定するので、唐瓜も小首を傾げて訊き返す。

「? いや、どっからどう見てもただの学ランだろ。ちよつと……いやけつこう古いっばいけど。何がどう嫌なんだよ?」

「だって後ろ、こんなんだぜ?」

唐瓜の疑問に、茄子は見せていた詰襟をくるつと翻して、背中側を見せることで答えを示す。

そして背面を見て、唐瓜は深く茄子の言葉に納得しつつ絶句。

その黒い詰襟の背面には、大きくはつきりと「滅」と刺繍されていた。

「……いや、これなんだよ? なんでこんな物騒すぎる刺繍がされた服がこんなところに……」

「おや、懐かしい。鬼殺隊の隊服じゃないですか」

唐瓜が困惑真つ最中の中絞り出した疑問兼突っ込みに、思ったよりあつさり答えが返ってきた。

「鬼灯様!」

段ボールを三箱ほど抱えた鬼灯が、茄子が持つ詰襟を見てそう言った。

いつも通り仏頂面の見本のような無表情だが、だいぶ彼に慣れてきている小鬼二人には、わずかなその表情の機微に気付く。彼は確かに、何かを懐かしむようにいつも細い目を、わずかだが更に細めていた。

「鬼灯様、この服がなんなのかわかるんですか?」

茄子は無邪気に詰襟を掲げて鬼灯に駆け寄り、この服の由来を上司に尋ねる。

仕事中にすべきではないと、真面目な唐瓜は注意しようとしたが、彼自身も気になったからか、叱責の言葉はとっさに出てこなかった。気になったのは、あの刺繍の「滅」は何に対してのものかがすぐにはわかる隊の名前、「鬼殺隊」の所為だろう。自分たちの種族的に物騒すぎる名前の集団のおそらく制服が、何故ここにあるのかという好奇心はどうしても殺しきれなかった。

「ああ、最近のお若い鬼達ひとは知りませんよね。けれど、学校の授業で学ぶはずですよ」

幸いながら掃除をさぼって雑談していたことを咎める気は鬼灯にはなく、むしろ彼自身もそろそろ休憩しようと思っていたのか、抱えていた段ボールを下ろして話し始めた。

『鬼舞辻 無惨』には聞き覚えがあるでしょうか？ 平安時代に人間の手によって、人間の身で『鬼』となり、そして自身と同じ『鬼』を増やし続け、大正時代にやっと滅ぼされた、最低最悪最凶の極悪人。

それは、奴や奴の配下である鬼を根絶させるために生まれた、政府非公認組織の制服ですよ」

* * *

優等生の唐瓜はその「鬼舞辻 無惨」という名前で、学校で学んだ奴が犯した悪行、奴が元凶で起こった悲劇、そして奴に振り回された地獄の裁判関係者たちの苦労の数々が脳裏に浮かび上がり、手を叩いて「ああ！」と声を上げる。

しかし茄子の方はすぐには思い出せず、唐瓜の反応から一拍遅れて声を上げる。その遅れに唐瓜の気がやや抜けるが、茄子にしては一拍遅れで思い出せただけマシだということを、幼馴染はよく知っていた。

だが、この記憶の仕方はさすがに予想外だった。

「ああ！ あいつか！ やたらとペイズリー柄が好きなやつ！」

「どこを記憶してんだよお前!?!」

まさかの奴のやらかした数々の所業ではなく、教科書に載っていた姿絵で着ていた服の柄で茄子は記憶していたし、奴の印象も「ペイズリー柄が好きな奴」でしかなかった。

「そうなんですよね。何故かやたらとあれはペイズリー柄を好んでましたね。」

大正でも前衛的すぎるというのに、戦国時代でも着てましたし」

「マジですか、それ!?! 何のこだわりがあるんだよ、ペイズリー柄に!!」

しかし何故か鬼灯が茄子の記憶の仕方に、呆れのではなく深々と頷いて同意を示してから、唐瓜の困惑に追撃を掛ける。

どうやら教科書の姿絵に描かれたペイズリー柄のシャツやらバス

トやはらは、絵描きの好みとかではなくガチで鬼舞辻 無惨の特徴の一種だったらしい。

「あいつ、姿絵だとやたらとイケメンで落書きのし甲斐がありましたけど、実際はどうだったんですか？ あとなんかすっげー色っぽい女の人も一緒に描かれてたけど、それはあいつの奥さんですか？」

「姿を変えたので、どの時代でも通用する男前ですね。というか、顔を変える必要なんかなくくらいに素顔も整ってます。むしろ、皮肉な所で純粹に奴の褒められる所はそこしかありません。」

あとその女性は、珠世さんじゃなければたぶん無惨本人です」

「マジでか。唐瓜の初恋の人なのに……」

「黙れ！ マジで黙れお前!! っていうか鬼灯様！ この服が鬼殺隊の服だってことはわかりましたが、何でそんな服がこんなところに保管されてたんですか!?!」

嫌すぎる情報を知らされるわ、茄子に黒歴史となった自分の初恋を暴露されるわで散々な唐瓜が、茄子を締め上げながら話を無理やり元に戻す。

鬼灯も普段は表情の乏しい顔に憐れみを露わにして、それ以上この話題には触れずに脱線しまくっていた話を再開した。

「鬼舞辻 無惨と奴によって変貌させられた鬼は我々とは全く違う、むしろ海外の『吸血鬼』に近い存在であることはご存知ですよね？」

我々は獄卒どころかそこらの子供の鬼でも、普通の人間は手も足も出ない程の力を持っています。奴らも同じくらい力を持つだけではなく、純粋な鬼でも持っている者は珍しい、異能を操る者が多々いました。そして何より、奴らは強ければ強いほどに自己治癒や再生能力も桁外れに高いという、我々でも出来れば相手にしたくないような存在です。

そんな奴らに、家族や大切な人を殺され、食われた者。もしくは家族や大切な人が、身も心も化け物に変えられた者達、つまりは復讐者こそが鬼殺隊の隊士です。……ごくごく稀に、鬼が全く無関係で入隊する人もいますけど。金目当てや婚活で。

まあ、それはいいとして……、そのような目的で入隊するのですか

ら、鬼に対する殺意はあまりに高い。ですが、彼らはあくまで人です。特殊な訓練や剣技、呼吸という技術、そして日輪刀という特殊な武器を使っても、我々ですら手こずる相手に対しての戦績が良い訳はありません。

相打ちで大健闘、異能を操る鬼なら、10人犠牲に倒しても黒字という世界でした。……そんな訳で、鬼殺隊の殉職率は半端なかったんですよ」

そこまで言われたら、唐瓜はもちろん地頭は割と良いのではないかと思える茄子にもなんとなく、その続きとこの隊服がここにある訳に想像がついた。

「……お迎え課……襲われるんですね」

「ええ。状況によっては迎えに行っただお迎え課の方々より亡くなった鬼殺隊員の方が多くて、数の暴力でフルボッコにされることもありました」

青ざめた顔で唐瓜が自分の予想を口にすると、鬼灯は真顔で即答して、更にお迎え課が災難すぎるパターンまで教えてくれた。

「死後の裁判が嫌だからの抵抗なら、お迎え課ちも遠慮なく実力行使すりゃいいけど……」

「どういう経緯でその立場になってそれで死んだかを知ってりや、襲われても反撃しにくいよな。死ぬ前や死んでからすぐに、俺達は無惨の鬼じゃないことを知っとけなんて、向こうからしたら無茶ぶりだし」

「しかもその人達が死んだ状況って、十中八九が鬼との戦死だろ？」

鬼に殺されてすぐに獄卒おれたちが来たら、そりやまだぶっ殺すモードだろうよ……」

心の底から当時のお迎え課に同情しつつも、しかし鬼殺隊はもちろん、あの世側も対策のしようがなかったことを、唐瓜だけではなく茄子も悟って、思わず遠い目で呟く。

「その通りです。」

しかし、だからと言って向こうが話を聞いてくれるようになるままで、こちらがサンドバッグになる必要まではありません。っていう

か、彼らは鬼と戦うだけあって、そんなじよそこらの人間とは比べ物にならないくらい強いですし、武器がないからって戦意を失う人たちでもありません。武器がなければ、日の出まで相手にしがみついてかぶりついて心中する覚悟完了済みの方々ばかりです。

そんな人達のサンドバッグになど、それこそ命がいくらあっても足りないのですから、対策として取ったのが、既に裁判を終えた鬼殺隊の隊士をお迎え課のチームに迎えることです」

「やつぱりか」

ようやく地獄じごくに鬼殺隊の制服があつた訳が語られるが、それはもう二人とも理解できていた。

いくら鬼殺隊が根っからの鬼不信でも、現代ならともかく無惨がやつと討伐された大正ぐらいなら、「悪いことをしたら地獄に堕ちる」ぐらいの話を言い聞かされて育ち、「獄卒」という名は知らなくとも、罪人を懲らしめる役割の鬼という存在は知ってはいるはず。

なので、獄卒というか地獄の住人である鬼が無惨由来ではない事、人食いではない事さえ知れば和解は可能だ。

そのことを知ってもらうのが一番、迎えに行つた獄卒にとってはハードな条件なのだが、鬼相手なら聞く耳どころかぶつ殺すモードに入つてバーサークする相手でも、同じ隊士の姿があれば頭も冷えるだろう。

そう二人は納得しているところ、鬼灯はやや遠い目をしながらさらに情報を追加する。

「まあ、多少はマシになりましたが実、はあんまり効果的ではありませんでした。むしろ、お迎え課の味方をする事で裏切者認定されて、余計に加熱する事も多々ありましたね」

「だめじゃん!!」

地獄のチツ〇とデー〇が仲良く勢いも良く同時に突つ込む。

が、そんな突つ込みは、鬼灯含めて地獄で色んな人がやりつくした。「顔見知りならともかく、知らない相手から『この鬼は無惨とは無関係で、悪い鬼じゃない』と言われても、騙しに来ているようにしか見えないのはわかりますけどね……」

一番いいのは産屋敷の歴代当主に説得してもらおうことですけど、いくら早死にの家系とはいえさすがにお迎え課を全カバールできるほどはいませんし、そもそもこちらも自分が知っているお館様でないと、『誰だお前?』ですし。耀哉さんレベルなら、初対面でも落ち着かせることができたんでしょうけどね。

あと、柱と呼ばれる隊の最高位が殉職して、お迎えに行く時は本当に最悪です。

ただでさえ鬼殺隊は、格上と戦うことを常に前提としている人たちですよ？　そしてお迎え課は、拷問担当の獄卒と違って、荒事に慣れてません。鬼殺隊以外の亡者は普通、鬼^{わたし}たちを見て逃げることはあれど、襲い掛かりはしませんから。

死にこそはしませんが、柱相手だと一人でもお迎え課三人と説得役の元隊士さんがやられることもありました……」

鬼灯の目が更に遠くなって、昔のしなないよりはマシだけどしても面倒事が減らなかつた厄介ごとを語り、もう二人は「うわあ……」としか言えない。

「ただ流石にお迎え課と説得係の隊士も含めた4人組相手に、敵う方は柱でも滅多にいなかったのと、大勢の隊士が一度に死亡する事態も多くはなかつたので、穏便には無理でも獄卒返り討ちなんて、ほとんどありませんでした。」

……が、最後の最後、無惨の討伐成功した無限城での戦いが戦場でした。隊士たちはもちろんですが、お迎え課に限らず、地獄の獄卒全員にとつてね……」

鬼灯がフオローのつもりなのか、獄卒が鬼殺隊に返り討ちの事例はあまりなかったと語るが、彼の言葉を裏返せば、滅多にいなくても4人を単独で返り討ちにする人間はいたし、お迎え課が数の暴力で沈められるほどの死人が一気に出る事態もあつたということなので、唐瓜も茄子も突っ込む気力が出て来ず絶句。

その絶句している間に、懐かしみつつ思い出した当時の修羅場を鬼灯は、やや座った目で語り……いや、愚痴りだす。

「覚悟してました。覚悟はしてましたよ！　私も閻魔大王も他の十王

達も、獄卒たちや協力者の元鬼殺隊やその関係者、無惨によって無理やり鬼にされた被害者と言つていい亡者たちも、ここでやつと無惨を仕留められることを期待しつつ、犠牲は過去最大になることを覚悟してましたよ!!

けどですね！ 覚悟はしてましたけど予想なんてできませんよ!!
何で妻子巻き込んで自爆してんですか、鬼殺隊のトップは!!」

「そっち!? っていうかマジで何してんのその人!!?」

* * *

だんだんとヒートアップしてゆく鬼灯に怯えつつ、何とかなだめようとしていた二人が全力で突っ込む。

まさかの鬼灯がここまでテンション上げて愚痴るほど、決めていた覚悟以上の予想外の出来事をやらかしたのが無惨側ではなく、心情的に味方のはずの鬼殺隊トップ。

そしてそのやらかしは、当時の事をよく知らない若い鬼である二人でも確かに、何年たつてもソウルシャウトで愚痴りたくなる気持ちか理解できるほど、意味不明すぎる暴挙だ。

しかし、唐瓜たちを困惑させつつも言いたいことをぶちまけて少しすっきりした鬼灯曰く、この自爆行為は無惨に少しでもダメージを負わせる＋自分や家族が喰われて奴の養分にならないように＋その後控えていた人間化薬投与が確実に成功するように＋隊士たちの士気を上げるためにやらかした事らしく、しかもちゃんと妻子は納得済みでのことだった。

「すみません。知つても訳わかりません」

「むしろわかりたくない」

「でしょうね。無惨もあの時、パニくりながら内心で『妻子は同意してたのか?』と思つてましたし、浄玻璃の鏡で見てた我々も『……それな』と思いましたよ」

しかし説明されても、自爆の目的こそは理解できたが、なおさらにそれを実行する精神性も、納得して同意した覚悟の決まりぶりも、唐瓜と茄子はもちろん、鬼灯にも理解できなかった。

「ただでさえ産屋敷の人間は間違いなく善人なのですが、鬼殺隊の入

隊試験はハ○ター試験の方が死亡率は低いのでは？ という過酷なものを実施し続けているので、いつも判決を困らせていました。

そんな訳で、この自爆した産屋敷当主の耀哉さんは、無惨関係の裁判で三大判決に困った亡者の一人かつ、『天国行きにしているのか、こいつ』代表でした」

「でしようね」

鬼灯の評価に心から納得しつつ、唐瓜は内心「これと並ぶ判決に困る亡者が二人いるのか……」と顔を青ざめる。その頃の獄卒ではなくて良かったと、心の底から思っているのだろう。

そして実際に、その頃の獄卒は現場に出る者もデスクワーク担当の者も忙殺という言葉では生ぬるい惨状だったことを、またしても当時の修羅場を生々しく思い出した鬼灯の愚痴で知る。

「そんな産屋敷ボンバーで始まり、無惨由来の鬼も死ぬわ鬼殺隊も死ぬわ、三大判決に困った『地獄に落としていいのか、こいつ』代表も、『地獄行きは決定事項だけど、どこの地獄なら責め苦になるんだよ!』代表もほぼ同時に死ぬわ、拳句の果てに無惨は人間化菓を分解して復活してしまい、消耗を補うために鬼殺隊の隊士を貪り食うわ……」

……あの無限城の戦いで、靈感のある隊士さんがいらしたらすごい光景だったでしょうね。ただでさえ生者対鬼の阿鼻叫喚だというのに、羽交い締めてあの世に連れて行こうとしている獄卒を振り払って、亡者は何とか無惨に攻撃しようとするわ、説得役の隊士さんも無惨を前にしたら憎悪が蘇ったのか、役割忘れて参戦するわで……」

……最終的にはもうお迎え課も『俺達だって無惨大っ嫌いだよ!』と叫び、殉職した隊士たちに怒涛の勢いで、無惨に対する愚痴を語ったことで仲間意識が芽生え、もう亡者回収を後回しにして無惨討伐を最優先に協力しました。その結果、鬼殺隊と獄卒の間に絆が生まれ、無惨討伐後に多くの元隊士さん達が地獄に就職してくれたのが、救いと言えば救いでしょうか……」

先程とは違って当時の修羅場の疲労まで思い出しているのか、テンション低く語る鬼灯。救いと語る優秀な人員補充は本音だろうが、そう思わないとやってられないというヤケクソじみた感想も透けて見

えるので、唐瓜は「お疲れ様です」と今更すぎるが、当時の鬼灯や獄卒たちを心から労わった。

茄子の方も同じく労わり、同情もしていただろうが、それでも彼は幼馴染と違つて思考の切り替えが早い。

彼は想像するだけで疲労する当時の修羅場の話をさつきと変えて、ほがらかに自分が気になった部分の話題を持ち上げる。

「ということは、獄卒の中に当時の鬼殺隊の人とかいるんですね。柱とかには会つてみたいなー」

決して好戦的という訳ではないが、それでも地獄げんぼで拷問もこなすからこそ、多少鍛えていようが人間が自分たち鬼に敵わないことを知っているからこそ、4人がかりでも勝てなかつた柱に興味を持ったらしい。

そして「会つてみたい」と言つてから、彼も唐瓜も鬼灯が何かを答える前に、そもそも自分の知り合いというか上司こそが、その「柱」ではないかと思ひ当たる亡者しんぶつが一人、頭に浮かぶ。

「あー！ 鬼灯様、もしかして……」

「鬼灯様ー。すみません、大王がお呼びです。……その、さつき貰つた書類の内容について訊きたいことがあるそうで……」

思い浮かんだ人物の名を上げて、鬼灯に確認しようと思つたタイミングで、その張本人がひよっこり顔を出す。

そして鬼灯は、「っちー！ やっぱり話を聞いてなかつたな、あのジジイは」と閻魔大王に毒づいてから、彼はあまりに気が利いて素直で優秀だからついつい頼つて、もはや自分の個人秘書のような立ち位置にいる部下を掌で指して、茄子と唐瓜に言った。

「茄子さん、訊きたいことはわかつてますので今、答えます。

彼はあなたが思つた通り無惨討伐を期に就職しましたが……、改めて紹介しましょう。

狛治はくじさんこと、猗窩座あかさざ。

鬼舞辻 無惨が率いる鬼の最高幹部である十二鬼月の上弦の参、つまりは戦力No.3の鬼だった亡者ひとです」

「いきなり何で俺の黒歴史を後輩に暴露するんですか鬼灯様!？」

地獄の良心と名高い狛治が珍しく上司に向かって声を荒げて突っ込むのを、茄子と唐瓜は口をあんぐり開けてただ見ていた。

「狛治さんが何をしたって言うんだよ!!」

「……………ええええつつくくくく!!??」

しばし口を開けたまま呆けていた小鬼二人が、鬼灯の発言と狛治の「黒歴史」発言を理解したのか、今度は大声を上げて驚く。

言われた事は理解できても、納得は出来てないのだろう。その証拠に、フリーズが解凍された途端、二人は口々に自分たちにとって「狛治が何百人もの人間を食い殺した元悪鬼」であることが信じられない根拠を口にする。

「え?! 嘘でしょ鬼灯様! 狛治さんが!？」

大王の日課、煮え湯一気飲みを『そろそろやめましようよ』って止めてくれてる狛治さんが!？」

「鬼灯様が白澤様を全殺ししようとしてるのを、いつも全力で宥めて止めてくれてる狛治さんが!？」

「EU地獄のサタン様のナルシスト自慢話を、鬼灯様の代わりに毎回全部ちやんと聞いてくれてる狛治さんが!？」

「唐瓜の敏感肌とかに気を遣ってくれるし、喘息の発作の応急処置がプロ並みな狛治さんが!？」

「未だ夫婦ともにさん付け敬語で、もはや妬むのも辛いくらいの初々しい癒し夫婦で評判の狛治さんが!？」

「けど鬼灯様のフォロワー役に板がつきすぎてて、鬼灯様の嫁とも言われてる狛治さんが!？」

「信じられないのはよくわかりますが、その辺で。狛治さんが羞恥で死にそうなので。」

あと、誰だ最後の私の嫁扱いしている腐った輩は」

鬼灯の言う通り、何故か後輩からの褒め殺しのような状況に陥った狛治は、その場に頭を抱えてしやがみ込むので、鬼灯が待ったを掛けつつ、最後の冗談でも嫌な発言の主を茄子に問う。

「あ、あははは……。えっと、あの、……マジなんですか?」

鬼灯の問いを茄子は笑って誤魔化しつつ、狛治Ⅱ元十二鬼月上弦の参という情報の真偽を問うと、鬼灯の代わりに赤い顔でしやがみこん

でいた狛治本人が「……本当だ」と答えた。

それから彼は立ち上がり、どこか寂し気な笑顔を浮かべて小鬼二人に言う。

「ごめんな。失望しただろうか？ 俺は鬼灯様や閻魔大王様たちの恩情でここにいる、本来ならお前達の上司や先輩どころか、お前達に拷問されるべき立場の亡者にんげんなんだよ」

その笑顔と発言で、茄子と唐瓜は実は前から気になっていた、狛治に対する疑問が解けた。

彼は人間でありながらデスクワーク担当の獄卒どころか、拷問等の肉体労働担当の獄卒とも渡り合えるレベルの身体能力を持ち、なのに性格は穏やか温厚、目下への面倒見は良く目上には礼儀正しい、子供には優しく女性に対しては紳士的と、誰の目からみても完璧な人格者だというのに、狛治本人はいつも誰に褒められても「そんなことはない」と答えていた。

初めは普通に謙遜だと思い、謙虚な人だなと更に尊敬していたが、少し親しくなると狛治は他者に褒められても、照れている様子はなく、むしろ本気で困惑して申し訳なさそうなことに気付けた。

謙遜ではなく本心から「そんなことはない」と思っており、謙虚ではなく自虐的であることを唐瓜も茄子もすでに理解しているが、どうしてそんなにも自己評価が低いのかはわからなかった。

そんな疑問は、彼の生前の立場を知ってようやく理解できた。

「……お気づきでしょうかこの人、素の性格がこの善良さなので、裁判は十王全員が頭を抱えましたよ。

ちなみに言うまでもないかもしれませんが、この人が三大判決に困った亡者かつ、『地獄に落としていいのか、こいつ』代表でした」
「納得です」

狛治の自虐に鬼灯は呆れたような溜息をつきつつ、その善良さゆえの当時の苦勞を軽く愚痴ると、唐瓜たちは同時に深々と頷いて同意。

そして二人は心から慕い、尊敬しているからこそ狛治の自虐が許せず、彼らはわきやわきやと狛治にまわりつくようにして、彼の言葉に抗議して否定する。

「失望なんかするわけないじゃないですか！　むしろ、鬼灯様が罪人に甘い顔する訳ないんですから、どう考えても狛治さんが気にしすぎですよ!!」

「そうだよ。っていうかそもそも、無惨の鬼の罪って裁判ではどういう扱いなんですか?」

唐瓜のフォローに同意しつつ、茄子は首を傾げて鬼灯に尋ねた。

しかし唐瓜や狛治は茄子の問いの意味がよくわかってないらしく、こちらも小首を傾げる。

「どういう扱いって、鬼に変貌しても元は人間だし、そもそもあれって死ねば人間に戻るんだから、普通に人間としての罪で裁かれるだろ」
「そうだけど、けどさあ、人を食べちゃったのを罪に数えるのはおかしくない?」

食べなくちゃ生きていけない生き物に変わっちゃってたんだから、それは仕方がないことじゃん。食われたくないから人間側が鬼を退治するのは良くて、生きる為に食べた元鬼は死んだ後も罪扱いは変だろ」

首を傾げつつ唐瓜が、死ぬことで無惨の鬼は人に戻ることの証明である狛治を指して答えるが、茄子はさりごとんでもない発言をぶつ放す。

明らかに自分が鬼だった頃の罪を、必要以上に未だ重く抱えている狛治に対して、優しいと言えば優しいのだが、人間視点で見ればかなり残酷で、自分達のような純粋な鬼にとって人間は、家畜や野生動物と同じように思っていると勘違いされそうな発言だった為、唐瓜はギョツと目を見開いて慌てふためく。

唐瓜は茄子を殴って土下座で謝るべきかと考えるが、殴る前に「落ち着け」と言っ止められる。当の土下座で謝ろうと思っっていた狛治に。

「唐瓜、落ち着け。別にお前達のごとは誤解していない。俺はもう地獄で100年近く獄卒をしてる。亡者おれたちと鬼は友になれても、種族が違うのだからそういうシビアな視点で見られるのは、当たり前だとわかってるから気にするな」

振り上げた拳を軽くだが、まったく茄子に向かって振り下ろせない力加減で掴まれて止められ、狛治はいつも通り穏やかに笑って言う。その笑顔は、先ほどの自嘲の言葉の時とは違って寂しげではないことに唐瓜はひとまず安堵して、固めた拳から力を抜く。

唐瓜の殴る気が失せ、茄子も自分の失言に気付いて唐瓜と狛治に謝るの見届けてから、鬼灯はポリポリ頬を搔きながらポツリと言葉を零す。

「……まあ、そのあたりのことは茄子さんが正論です。

けど狛治さんの場合、鬼だった頃の罪を抜いても判決に困る人でした」

「え？」

鬼灯の零した言葉に茄子と唐瓜が同時に再び困惑の声を上げる。

そんな二人に対して狛治は困ったような苦笑を浮かべつつ、そつと目を逸らす。

鬼灯は懐から愛用の懐中時計を取り出し、時間を確かめながら言葉を続けた。

「気になるのであれば、食事でもしながら話しましょうか。ちょうどもう昼食時ですし。

狛治さんも、かまいませんか？ あなたの事ですので、話されるのが嫌なら遠慮せずに言うべきですよ」

「いえ。俺からしたら唐突な暴露だったから驚いただけで、全部隠してないので話されるのは構いません。俺の口から語るのも、客観性に欠けた話になりますし。

っていうか、何で俺の生前の話になったんですか？」

鬼灯がいつの間にかただの雑談になっていた倉庫整理を中断して、昼食を取ることを提案しつつ部下の過去話なので本人に許可を求めると、狛治は自分で言った通り別に嫌だったから最初に突っ込んだ訳ではないらしく、サラッと許可してついでに事の発端を尋ねる。

その発端である鬼殺隊の隊服を茄子が見せてからしまいなおし、唐瓜も鬼灯が運んでいた段ボールを手伝ってそれだけは片付けて4人で食堂まで向かった。

なお、3人は完全に素で忘れていた閻魔大王による鬼灯の呼び出しを、呼ばれている本人はすっかり覚えていたが、あえて無視していた。

* * *

「まず、無惨の鬼による『食人』は、基本的に罪に数えませんが。

理由は茄子さんが言った通り。鬼になって生まれる食人衝動に関しては、無惨も別に好きで与えている訳でも得たものでもないもので、罪に問うなら無惨を鬼にした医者ですね。……まあ、この人も治療途中に無惨の痲癩で殺されたので、やっぱり悪いのは無惨ですけど。

とにかく、そこを罪にしようかと、じゃあ人を食った熊はどうなんだ？ 人が家畜を食べるのは良いのか？ となつて来るので、割と早い段階で決まりました。

……そもそも、死ぬことで無惨の支配から解放されて体も心も人に戻るのだから、真つ当であればあるほど、罰など与えなくとも自ら背負ってしまうのですよ」

パチンと割り箸を割り、大もりの天井をもしやもしや食べながら鬼灯は語る。

最後はちらりと横の狛治、正確に言えば彼の昼食である愛妻弁当に視線をやつて。

同じようにそちらに視線を向けて、唐瓜と茄子は理解する。

狛治が未だに自ら背負っている罰を。

狛治の弁当の中身は、おにぎりとおひたしや漬物、厚揚げなどで肉類が一切ない。

今まで一緒に食事をした時は、愛妻弁当を羨ましがっていただけで気付いていなかったが、思い返せば狛治は弁当に限らず、常日頃から全く肉類を口にしてなかった。

「……俺はマシな方だ。衝動に耐えられず家族や友人を喰らつてしまいい、死ぬことで記憶を取り戻してしまった者よりはずっと……」

「そういう方はむしろ、舌を抜くなど簡易な罰をあえて与えましたね。そうでもしないと、転生で前世の記憶を失つても潜在的に何かしら影

響が出そうでしたので」

狛治はおにぎりを口にしつつ、悲し気な目で自分より悲惨な無惨の被害者を語り、鬼灯は淡々とその被害者はどうしたかを語った。

あえての軽い罰は、優しさだ。真つ当であればあるほど、誰も責めないからこそ余計に自分を許せなくなる。自分を許してやる方法がわからなくなつて、苦しみ続けるのだ。

だから目に見える形で罰を与え、人間の三大禁忌の一つを犯した罪悪感、自分の最も大切な人を、自分の手で最も悍ましい結末を迎えた絶望を、少しでも軽くさせてやろうとしたのだろう。

思つた以上の重い話に、唐瓜はもちろん茄子も定食に箸をつけることが出来ない。

そんな後輩二人を、狛治は困つたように眉を八の字にして何か言葉を、二人が気を病まずに済む言葉を探すが出てこない。

しかし狛治が探す必要などなく、鬼灯は口に含んでいた飯を飲み込んでからサラツと言う。

「ですが、罪として数えないのは『人間を食べた』という点においてだけです。なので、食べ過ぎなら普通に餓鬼道に落とします」

「鬼灯様、人間をそんなスナック菓子感覚、餓鬼道をライザップみたいに言わないでください」

鬼灯の鬼として、裁判関係者として正しいのだが、身も蓋もない発言に遠い目をしつつ、狛治は慣れた様子で突っ込んだ。

ちなみに鬼灯は重い空気をどうにかしたかったから、あえてぶつ壊した訳ではない。この鬼は全部、素だ。

「というか、狛治さんのように肉がトラウマになる人は、鬼の頃も食人以外の罪はほとんど犯しませんね。せいぜい弱いものを狙つて襲うくらいで、それも偏執的なまでに女子供などの弱者しか襲わなかったとかではない限り、生き物としては当然ですからあまり罪状に関係しません。

もちろん、度が過ぎればこちらも普通に等活地獄辺りに落とします。ああ、けど16歳の女性を執拗に狙つて食べていた奴は死後、人間に戻つても『女は16歳が最高で、それより上は全部ババアだ!!』と

裁判でも主張してたので、落とす地獄は等活か衆合かで審議が始まってしまいました」

「両方で良いんですよ、そんな下種。今から俺がその二つの地獄の拷問を、全部そいつに実践しましょうか？」

「それは午後からお願いします」

更にとのよなパターンが罪になるかならないかを教えるついでに、やけに印象深かった元鬼を思い出して鬼灯が語れば、狛治は真顔で吐き捨てるように怖いことを言う。しかも鬼灯、止めるどころか実行させる気しかない。

鬼灯がこういう、良くも悪くも空気ブレイカーであることは狛治だけではなく、まだ獄卒になって日が浅い方の小鬼たちも既に理解している為、とりあえず狛治がなんか怖くなったが、罪悪感はどうかに吹っ飛んだようならいいやと遠い目で思いつつ、食欲をなくす空気が粉碎されたので食事を始めた。

「で、話を狛治さんに戻しますが、この人は鬼としての罪状はないに等しいです。」

無惨の鬼の中では古株なので、犠牲者は余裕で3桁を超えますが、上弦ではぶつちぎりで最小。当時は弱者を嫌って見下してましたが、だからこそ自分から弱者を狙って襲いはしない。女性は論外。食い殺すどころか傷つけることすらできなかったので、母親などが家族を庇って前に出たりすれば、もうそれだけで何も出来ず、全員を見逃して退散してたので、逆にここまで最低限の食人で上弦の参だったのが怖いくらいですね」

天井を食べながら鬼灯は前提を語り終えたので、本題の狛治の過去について語り出す。

しかしこれもまた、本題の前提でしかない。

狛治は「そんなの、すぐくもなんともないですよ。炭治郎の妹は初めから誰も襲わず、食わず、稀血の誘惑にすら耐えきったのだから」と特例中の特例を持ち出して、自分を卑下する。

しかし無惨の鬼の強さは基本的に、食った人間の数と比例する。その法則の中、犠牲者最小でありながら実力はN0, 3で、しかも元鬼

の中で人間に戻っても、地獄の鬼たちと素手で渡り合える身体能力持ちは狛治しかないのだから、狛治も十分すぎる程に特例中の特例だ。

そんな彼の卑屈な自虐に、呆れたというより飽きたような溜息を一度ついて、鬼灯は話を続けた。

「なので、十王たちを悩ませたのは鬼になる前、人間だった頃の事ですよ……。」

この人、腕に刺青があるでしょう？ あれ、罪人の証の刺青です。罪状はスリなどの窃盗……ですが、それは病床の父親の薬代の為です」

「……もうそれだけで、十王たちの抱えた頭の重さがわかりました」

「狛治さんが何をしたって言うんだ……」

「スリだ」

鬼灯が狛治の腕を一周する三つの刺青を指して、その刺青の意味と入れられた経緯、そしてその罪の動機を端的に語り、それだけで「地獄に落としていいのか、こいつ」代表に選ばれた理由を唐瓜は理解して思わずゲンドウのポーズ。

茄子も心底、狛治の善良さと真面目さが、最も不幸な形で発揮するしかなかった過去を嘆くのだが、何故か当の本人が妙な天然で物を言う。茄子が気になっているのはそこではない。

「しかも父親は、息子を犯罪に至らせた後悔と自責の念で自殺してしまふんですよね」

「狛治さんが何をしたって言うんだ!!」

「だから、スリだ」

その天然にちよつと空気が和んだが、空気ブレイカーが今度は悪い意味で発動し、あまりに救いがない父親の最期をこれまた淡々と語り、今度は唐瓜も加わって力いっぱい小鬼は叫ぶ。そして本人はまだ、何かズレていた。

もう父親のくだりだけで胸が苦しいが、話はまだまだ序盤であり、鬼灯はどこまでも淡々と狛治の過去を語り続け、狛治はほとんど口を挟まず静かに弁当を食べていた。

「父親は真つ当に生きろという遺書を遺しましたが、刑罰も苦ではない程に助けたかった最愛の父を亡くしたことで自暴自棄になり、狛治さんは江戸を追放されるほどに荒れましたが、そんなねじ曲がっていた狛治さんを文字通り叩き直したのが、のちの義父である慶蔵さん。そして同じくのちの奥方、恋雪さんです」

「鬼灯様、それだと恋雪さんも俺を叩きのめしたみたいですよ」

しかし愛妻が盛大に誤解されそうな部分は、しっかり突っ込んで訂正を求めた。

「だから閻魔庁に来た瞬間、土下座しました」

ズビズビと鼻をすする音が食堂で鳴る。

昼食時の食堂でそんな音は普通なら顰蹙ものだが、音の主である唐瓜と茄子の小鬼コンビは幸いながら怒られずに済んでいる。

というか、実は近くの席に座っている獄卒は大体全員が似たような反応をしている。

そしてその食欲をなくす音の中心には例外が二人。

大もりの天井を食べ終えて、デザートは餡蜜か善哉かメニューを見て悩む鬼灯と、眉を八の字にして中腰でオロオロしながら辺りを見渡す狛治だ。

メニューから顔を上げて、困った顔で助けを求めるように自分を見ている狛治に鬼灯はやっぱり淡々と言った。

「相変わらず、狛治さんの過去は涙腺破壊兵器ですね。私も久々に語ってうるツと来ました」

「カラツカラですよ!!」

このすすり泣きながらも、食べないと午後の就業で体がもたないことをわかっている社畜の性で飯を食うという異様な光景を生み出した張本人がしれつと言い放ち、狛治は率直に突っ込んだ。

しかし嘘つきを許さない地獄の裁判関係者だけあって本心からの言葉だったらしく、鬼灯はちよつと心外そうに唇を尖らせつつも話を纏めに入る。

「まあ、そんな訳ですよ。狛治さんの過去は本人曰く、『なんともまあみじめで、滑稽で、つまらない話だ』と痛々しい自虐をするような、悲惨なものです。

そして本当に、裁判には困りました。情状酌量どころか、我慢しろ耐えろ許せと言う者こそ地獄に落とすべき無神経というくらい、彼に起こった悲劇そのものに彼自身の非はないのですから」

鬼灯の言葉に、目を真つ赤にさせた唐瓜と茄子がうんうんと頷きながら、もはや同情ではなく同調する。

「うう……狛治さんも恋雪さんもすっげー若い姿してるから、この若

さで死ぬなんて……って思ってたけど、まさかこんなにひどい話だったなんて……。

俺、午後の拷問は全力でやります」

「俺も。そいつら何地獄にいます？ 全力で拷問します。」

けど、改めて無惨はクソだなー。狛治さんの一番辛い時に付け込むなんて……」

「え？」

「え？」

恋雪と二人は面識がないので名前が上がらなかった慶蔵の死による狛治の悲劇にどっぷり同調して、元凶の剣術道場の連中を殺る気MAXな二人だが、茄子の何気ない感想に鬼灯と狛治が声を上げ、そして小鬼たちも同じく声を上げる。

4人の上げた言葉も、そしてそこにこもった感情も全く同じ。困惑がどちらからもありあり見て取れた。

よく見れば、狛治の過去話を聞いていた、聞こえていた周囲の獄卒たちも同じような反応。

ただし全員が懐く感情は困惑だが、その困惑の種類は二つに分けられる。

一つは鬼灯&狛治と同じく「何故そうなる？」と言いたげな困惑であり、こちらは古株の獄卒たちが主。

大して茄子と唐瓜は、「何に困惑しているんだろう？」という疑問が大半を占める困惑であり、獄卒歴は浅い者がほとんど。

その事に気付いたからか、鬼灯は「……ああ」と納得の声を上げて、茄子たちがしている勘違いを訂正する。

「すみません、私の説明が少し悪かったようですね。」

狛治さんは義父と嫁を卑劣な手段で殺されたから、自暴自棄になって無惨の鬼になった訳じゃありません。時系列が逆です」

『……………え？』

鬼灯の訂正にやや間を置いて唐瓜と茄子、そして彼らと同じ困惑を……勘違いをしていた獄卒たちがまたしても声を上げる。

今度も困惑だが、今のは「信じられない」という現実逃避の意味合

いが強い。

だが、氣遣い上手なのに何故か時々ビツクリするほど空気が読めない狛治が、鬼灯と同じく納得しながらその空気読めなさをこのタイミングで発揮してさらに補足。

「ああ。なるほど。確かにさっきの説明だと俺が鬼になったタイミングがよくわからなくて、俺が復讐の為に無惨様の血をもらって鬼になったようにも思えますね。

違うぞ。自暴自棄になって復讐の為に無惨様の鬼になったんじゃない。俺が鬼になったのは全部が終わった後で、剣術道場の連中を皆殺しにしまったのは、間違はなくまだ人間の時の話だ」

狛治の言う通り鬼灯の説明、「最愛の二人を殺された復讐心に駆られ、犯人である道場の連中を皆殺しにした」と話してから、「自暴自棄になってなかったら、無惨の鬼になってなかったら、どんなに長く見ても50年程で再会できたでしょうに」という個人の感想を口にしたのが悪かった。

その所為で起こった出来事の順序がやや狂い、狛治が無惨の鬼になってから連中を皆殺しにしたと茄子たちは勘違いしていたようだ。

いや……勘違いしていた要因はそれだけはないが。

「……あの、鬼灯様。狛治さん」

唐瓜が涙を引つ込め、挙手して尋ねる。

「……狛治さんって素手で、そして一人で……道場のバカ息子と門下生の……67人を皆殺しにしたんですよね？」

「……死体の原型がとどめなさ過ぎて、何年後かに作り話だろうって思われて記録が破棄されちゃったんですよね？」

唐瓜の問いに続いて茄子も問う。

この質問で、二人が勘違いしていたもう一つの要因にも気づき、狛治は気まずそうに目を泳がせ、鬼灯はやっぱりしれっと答える。

「お二人とも、狛治さんの身体能力は死後、あの世こっちで鍛えたからとか鬼だった頃の後遺症だと思ってました？ 先程話した通り、この人は素手で頭蓋を叩き割るわ、腹を殴って内臓を爆砕させるわと、生前から人間離れしてました。無惨と出会ってしまった理由も、人間技じやな

い殺戮なのに鬼の仕業だとしたら心当たりがなかったから、無惨が確認しに来たんですよ。

まあ、縁壺さんと比べたら普通どころか凡人中の凡人ですけど」「鬼灯様、対象がよりにもよって過ぎます。あの人と比べたら、鬼灯様も人間並の凡人でしょう」

無惨討伐後に獄卒になったことで、狛治の過去を知らなかった者達がしていた勘違い要因、人間技とは思えない殺害方法とその結果や規模を肯定しつつ、しかしこれより上がいたことまで語るのもはや若い獄卒たちは乾いた笑いしか絞り出せない、

狛治も比べたら凡人ではない「縁壺」という人物はかなり気になるが、唐瓜どころか恐れしらずの茄子ですら、鬼灯を比較対象にしても鬼灯が人間側に落とされる相手だという狛治の評に引いてしまつて訊けなかった。

「そ、それにしても、自分の鬼じゃないかもしれないから確認に来るって、臆病者なのか度胸あるのかよくわかんねー奴ですよ、無惨って。もしも俺達みたいな、地獄の本物の鬼だった場合はどうしてたんでしょう?」

「っていうか、本物の鬼とはあったことなかったのかな? 昔なら現世に行くのも規制はまだ緩かったのに」

これ以上、狛治の重すぎて悲しすぎる過去も、その重さも吹っ飛ばす狛治の規格外ぶりも精神衛生上よくないと判断して、唐瓜は結構無理やり話題を変えて、茄子もその話題に乗る。

だが、二人の無理やりだが中身などないに等しい話題が時を止めた。

「……? え? 鬼灯様? 狛治さん?」

何故か、「無惨が確認の為にやって来た」「本物の地獄の鬼にあったことはなかったのだろうか?」という話に反応して、餡蜜を食堂のおばちゃんから受け取って戻ってきた鬼灯と弁当を食べ終えて包み直していた狛治が同時に停止。

食堂内にいる獄卒たちが、いきなり「ザ・ワールド」でもくらったような二人に困惑する。

いや、よく見れば遠くの席にいた鬼灯の幼馴染、獄卒の中でも古株中の古株である烏頭と蓬は苦笑していた。

「……………ありますよ」

「え？」

1分ほどの間を開けて、鬼灯はポツリと呟くように言う。

「奴は、地獄の鬼に会ったことがあります。だからこそ、確認しに来たんでしょう。自分の知る鬼なら、そこらの人間全員を鬼にして始末するつもりで。臆病者だからこそ、もしもという可能性と不安に耐えられなかったんでしょうね」

鬼灯は席に着き、餡蜜をもしやもしや食べながら、唐瓜と茄子の疑問に答える。

だが、顔を上げない。基本的に人の目を見て、雑談でも威圧しているようにしか見えない話し方をする鬼灯が餡蜜だけを見て、顔を隠すようにして食べながら話す。

そして横の狛治は、ただただひたすらに気まずそうな苦笑をして顔を向かいの小鬼二人から頑なにそむける。

そんな反応をされたら、察することができる。

だからこそ、周りが既に察している事を鬼灯も察して、ヤケクソ気味に餡蜜を一気食いしてから顔を上げて潔く言い放った。

「室町時代に偶然、現世視察の時に見つけて叩き潰しましたが逃げられませんでした!!」

* * *

鬼灯の懺悔というには勢い良すぎる過去の暴露によって、食堂内に沈黙が落ちる。

鬼灯からも逃亡を成功させた無惨に、今更すぎる畏怖を思わず懐く獄卒たちだが、冷静に考えれば実はさほど驚く程の偉業ではない。

鬼灯は間違いなくこの地獄では最強格だが、彼は元人間だからか、妖術などといった異能は特に何も持ち合わせていない。

基本的に狛治と同じくフィジカルが鬼の中でも特に優れているだ

けなので、様々な異能を操り、そして異能を操る鬼を配下に統べる無惨なら、鬼灯を倒すのは無理でも逃げることは可能。

そこまで唐瓜は、一番早くに思い至れた。

だから、「無惨すげえ!!」といううしたくない感嘆や、「どうやって逃げたんですか!?!」という疑問を投げ捨てて、ほぼ脊髄反射で突っ込んだ。

鬼灯が鬼灯なりに気まずそうで、勢い良すぎるが懺悔のように過去の事実を告白した理由を、思いつきり。

「狛治さんの所に無惨が来たの、あんたの所為か!!」

「多分そうです。だから閻魔庁に来た瞬間、土下座しました」

思わず上司、地獄の黒幕を「あんた」呼ばわりだが、言われても仕方がないと思っっているのか、こういう所は鷹揚な鬼灯はサラツと流して、さらに衝撃的な過去も暴露。もう一回、食堂に沈黙が落ちるが、今度の沈黙は一拍だけで、すぐさま驚愕の声がそこらかしこで上がる。「……死後の裁判で法廷に入った瞬間、土下座で謝られたのもめっちゃくちや驚いたけど、一番驚いたのは獄卒になって、鬼灯様の正確な立場とか性格とかを知ってからだよ」

そして狛治も、やけに遠い目で乾いた笑みを浮かべてボソリと、当時の感想を述べた。

狛治の言う通り、鬼灯という鬼神にんげんを知っていれば、彼が土下座で謝ったなんて鬼灯自身以外が語れば、つくならもっとましな嘘をつけと言われるだろう。

しかし獄卒たちは鬼灯を恐れつつも、彼は某神獣という例外を除けば、自分の非は素直に認めて謝罪する鬼ひとであることもよく知っている。土下座が意外過ぎるのは、ただ単にそこまでの謝罪が必要な非をそもそも犯さないからだ。

なので取り逃がしただけではなく、自分の存在が無惨の臆病風を刺激してしまい、ただでさえ不幸だった狛治の人生を、何もかも失って終わりきっているのに、「猗窩座」という惨いエンドロールが続いてしまう要因になってしまったと知れば、そりゃ土下座くらいはするだろう。

ちなみに勇者、茄子が「鬼殺隊には謝らないんですか？」と訊けば、「縁吉さんでも逃げられたんですから、私自身がその事を不甲斐なく思いはしても、逃がしたこと自体に罪悪感はありません。私は私なりに、あの時の出せる限りの全力で叩き潰しましたが逃げられたのですから、そこを責められるいわれはありません」と言い切り、茄子と唐瓜の中で「縁吉」の謎が更に深まった。

「別に鬼灯様は悪くないだろ。」

仮に俺が鬼になってなくても、やっぱり縁吉さんがいたのなら無惨様は十二鬼月を作っていただろうし、自分で言うのもなんだが、俺の代わりの上弦の参が、俺より弱くて倒しやすい保証なんてなければ、俺よりもずっと人間を食う奴だったら、犠牲者の数は増えていたはずだ」

鬼灯はまったく気にせず、茄子の質問に答えていたが、むしろ狛治には当時の鬼灯を責めているようにも聞こえる。茄子の問いが気に障ったのか、少しだけムツとした様子で諭すように言う。

自分の不幸と、犯したくなかった罪を犯す要因さえも本心からフォロウする狛治のぐう聖っぷりに、改めて茄子と唐瓜は敬意を懐きつつ、「何でこの人、獄卒とはいえ地獄にいるの？」と本気で思い、鬼灯の方は何故かまたしても呆れと諦めが含まれた溜息をつく。

「……先ほど話した通り、狛治さんは人間時代に窃盗や他者に対する暴力、そして67人も人間を虐殺という罪があり、鬼になってからも他の鬼と比べたらないに等しいですが、厳密に言えば皆無ではありません。」

食人衝動に駆られてや、鬼殺隊を返り討ちという不可抗力に近いものだけではなく、無惨の命令で何の罪もない一般人を殺したこともありますから。

ですが、過去の窃盗は父親の為で、実際にそれくらいしか薬代を得る手段はなく、父を失ってから自暴自棄時代の罪は慶蔵さんにボコボコにされた事と、その後の生活で償われたと言っていていいでしょう。

毒殺犯どもの虐殺に関しては、条件が厳しいとはいえ仇討ちが容認されていた時代かつ、奴らは一番厄介な狛治さんを殺せなかったの

で、今度は道場を放火しようかなどといった相談をしていたことは、俱生神さんからの報告や浄玻璃の鏡でウラも取れてますから、正当防衛にしようかという話も出てたくらいです。

そして鬼になった要因に私の責任もあるので、それらを情状酌量として罪を相殺して無罪……、という判決に固まりかけていましたが、……本人がこれでしょう？

この人も何かしら目に見える罰を与えないと、自分はもちろん待ち続けていた家族も不幸になってしまいそうですから、一応は墮獄しました」

予想外の方向に脱線していた話を戻し、ようやく三大判決に困った亡者、「地獄に落としていいのか、こいつ」代表の結果が発表された。

それは、あまりにシンプルなものだった。

「落ちた地獄は、等活地獄。

そこで狛治さんは自分が殺した人数分、獄卒に殺されては体を再生し、蘇っては殺されるを繰り返しました」

目には目を。歯には歯を。

別の国とはいえ遙か古来から伝わる最もシンプルで平等な因果応報の贖罪が、狛治に科せられた罰だった。

* * *

「人数が古参かつ実力者の鬼にしては少なかったので、刑は1年ほどですみました。

そして、普通に獄卒向きな身体能力でしたし、当時は無惨の鬼だった亡者に対して、獄卒になった鬼殺隊が憎しみを捨てきれず、裁判中にトラブルが起ることも多々ありましたので、この人なら罪を償った元鬼代表として元鬼殺隊の方々と和解できるのではと思います、獄卒にスカウトした結果が現在です」

長かった狛治の話が終わり、何気に唐瓜と茄子が狛治のぐう聖ゆえに懐いた疑問、「何でこの人、地獄にいるの？」の答えももらった。

「ぐう聖なのに地獄にいる」ではなく、「ぐう聖だからこそ地獄にいる」だった。

「……なんつーか、改めて狛治さんのすごさを色んな意味で理解しま

した。鬼灯様、狛治さん、話してくださいあってありがとうございます」「うん。狛治さん、マジで凄すぎ。もう漫画の主人公になれるよ。

そんなでもって、無惨の色んな意味での酷さもなんかちよつと面白かった。鬼灯様たちには悪いけど、他人事だとクズ過ぎてバカすぎて面白いよな」

唐瓜が今までの話の感想と、話してくれたことの感謝を告げて頭を下げ、狛治はいつも通り「俺は全然すぐくない」と自虐するが、茄子の元上司に対する酷い感想と評価に関しては、曖昧に笑って目を逸らした。

沈黙は金なりというが、目が口以上に正直すぎて意味がない。

そんな狛治の雄弁な沈黙という反応が面白かったのか、茄子は更に無惨に興味を持ったらしく、鬼灯に向かって尋ねる。

「鬼灯様、面白いや結局無惨ってどこの地獄に堕ちたんですか?」

「普通に阿鼻ですよ。あいつの罪状は八大を網羅してますので、裁判なしで死んだ瞬間に火車さんが向かいました。……私と縁壺さんもご一緒させていただきました」

「……………その豪華すぎるお出迎えに関しては、自業自得とはいえ無惨様に同情してしまう」

茄子の問いに鬼灯は即答し、狛治は心の底からの感想を口にする。

そして茄子だけではなく、唐瓜も意外そうな声で訊き返した。

「え? そんだけ?」

「鬼灯様、無惨が『地獄行きは決定事項だけど、どこの地獄に落とせばいいんだよ!』代表じゃないんですか?」

「ああ。違います。それは狛治さんの同僚だった、上弦の弐の方です。無惨はむしろ、どこの地獄に堕とすかは誰も一切悩みませんでした」

どうやらまた二人は勘違いしていたらしく、その勘違いを鬼灯が正し、そして狛治は気まずそうな微妙な表情で、後輩たちに元上司の裁判結果の理由を語る。

「無惨様は……………変なところ人間臭いというか、人間味を捨てきれなかったというか……………、人としての善性が全部抜けてるけど、わりと感

性は普通なんだ。

少なくとも、痛いのが好きだとかそういう変な趣味はない。ごく一般的な感性で、嫌がりそうなことは普通に全部嫌がる人だから……」
「どの地獄でもあいつを反省・改心させるのは無理ですよ。けれどあいつに限らず、どの地獄の拷問でも反省しない輩はいます。」

地獄を罪人の矯正施設ではなく、現世での報いを罪人に与え、正しく生きた者が前世で懐いた理不尽や不条理を少しでも解消するものと考えれば、奴は普通に罪状に合わせての阿鼻で十分です。

まあ、阿鼻に落ちるまで2000年間ずつとほつとくのも癪なので、よく他の小地獄巡らせたり、新地獄や新しい拷問の実験台にしますが」

狛治が気まずそうだが、鬼灯に対してとは全く違い、フオローする気ゼロで無惨の小物っぷりを説明し、鬼灯が更に補足を加える。

やらかした年月と結果に対して、最下層の地獄とはいえ軽すぎないか？ と小鬼たちは思ったが、もちろん鬼灯がそれだけで済ませる訳がなかった。

「あいつ、本当にある意味すごいですよ。どんな拷問をされても、口先だけの反省や謝罪さえなければ、悪い意味で命乞いもしません。」

周りが自分を助けられないことにブチ切れて、獄卒たちを罵り続けるんです。そのくせ、自分を全力で棚上げしているとはいえ、割と頻繁に正論を吐くから、大変ムカつきます。

ですが、罪人にも人権を、拷問が残酷すぎるというクレームが入った場合は、奴が便利です。奴を見たら掌返してクレームを引つ込めて、拷問は必要なことだ、もつと厳しくてもいいと言ってくれます」
「……あの世で言うのもただけど、どんな人間でもやっぱり生まれて来たからには意味や価値があつて、人の役に立ってるんだなって俺は無惨様で学んだよ」

「狛治さん、しっかりして！ 目が死んでる!!」

鬼灯が真顔で尊敬していないすごい部分と、唯一と言つていい無惨の利点を語れば、狛治はやっぱり何一つ褒めていない無惨の価値を語り、その目の死に具合に唐瓜を本気で心配させた。

しかし唐瓜の心配はまだ終わらない。むしろ悪化した。

その悪化の元凶は、幼馴染。

「本当にとってもなく凄いのには、どうしようもなく小物だな無惨。

じゃあ上弦の式の方は結局、どこの地獄に落ちたんですか?」

シンプルかつ的確に無惨を言い表してから、茄子が改めて三大判決に困った亡者、「地獄行きは決定事項だけど、どこの地獄に落とせばいいんだよ!」代表の結果を尋ねた瞬間、鬼灯より先に狛治が反応した。

顔から一気に血の気を失くして、ガクガク震えながら頭を抱えて狛治は呟く。

「……あ、あの地獄だけは………あの地獄だけは嫌だ……あの地獄だけは……」

「ちよっ!? 狛治さん!?!」

自ら罰を求めて刑に服し、そして今も罪を背負い続ける狛治が本気で怯える様子に、唐瓜は心配やら引くやらでどうしたらいいのかわからないというのに、元凶の茄子はというと、「狛治さんもここまで嫌がる地獄? ……まさか、ゴキブリ地獄か!」と、想像しただけでも悲鳴が上がる地獄を口にする。

「あ、そういうえばそれは試してませんでした。盲点です。

ありがとうございます、茄子さん。今度、ぜひともやってみます」
「採用されちゃった!? つていうか、それやる獄卒いるんですか!?!」

しかも鬼灯がまさかの採用。とりあえず、その発言からして狛治も本気で怯える地獄の正体は、獄卒の98%が就業拒否する地獄ではないらしい。

そして全然全く知りたくなかったが、唐瓜の突っ込みで貴重な2%の一人が誰かを知る。

いや、彼女の場合はGが平気だからではなく、その地獄の対象が自分の最も憎い仇だからこそその志願だ。

「いますよ。童磨相手なら、技術科の毒物研究担当のしのぶさんが、喜んでゴキブリの品種改良もしてくるはずですよ。

あと、そういうえば茄子さんは柱の方に会いたがってましたよね。しのぶさんがそうですよ。

彼女は、蟲柱。柱というか鬼殺隊で唯一、鬼の頸が斬れない非力な隊士でありながら、毒で鬼を倒し続けて柱に昇りつめた、上弦の弍に殺され、そして殺した女性です」

鬼灯からもたらされた情報に、とりあえず茄子は率直な感想というかわかったことを口にする。

「その人、絶対に芥子ちゃん系の人でしょう」

「鬼灯様、愛してる!!」

「判決。胡蝶　しのぶは天国行き。」

ただし、己を慕っている栗花落　カナヲや蝶屋敷の養い子たちが悲しむとわかっていながら、怨敵である上弦の弐、童磨と心中する形で討伐し、特に目の前で恩人かつ姉を食われたカナヲの心に深い傷を遺したのは罪と言える。

なので……えーと……何だっけ？」

鬼を除けば自分が見てきた人間の中で一番大きい岩柱の悲鳴嶼も小柄に見える閻魔大王が、最初こそはその体軀に見合った威厳で判決を述べていたが、途中で何を言うべきかを忘れて横の鬼に尋ねる様子に、しのぶは思わずクスリと笑ってしまう。

その事を咎められるかとも思ったが、閻魔大王が尋ねた彼の側近らしき鬼は無表情だが不快感などはなく、そして特に何も言わなかった。

ただ、無言で持っていた金棒を閻魔大王の顔面目掛けて投げつけ、しのぶをビビらせた。

「……本来なら最初の裁判、秦広王の所で次の裁判に回す必要なしと判断されるところですが、しのぶさんは四九日である太山王の所まで死出の旅による試練を行ってください。」

その試練に問題がなければ、そこで結審です」

「は……、はい。閻魔大王様や他の十王様たちのご厚意に感謝します。」

……ところで、大王は大丈夫なんでしょうか？」

「もー、痛いよ鬼灯君！　しのぶちゃんも怖がってるじゃないか!!」

(あ、全然平気だ)

閻魔大王が忘れていた文言を代わりに伝え、しのぶは丁寧な礼を言いつつももじやもじやした髭に金棒が刺さっている大王を気にしたが、大王は金棒を引き抜きながら先ほどの威厳が全く残っていない、のほほんとした口調で迫力のない叱責を部下にする。

閻魔の頑丈さに一瞬ポカンとしてから、またしのぶは笑ってしまう。

今ので十分、深い信頼関係があるからこそなやり取りだとわかる閻魔とその側近が微笑ましいというのもあるが、「鬼」を目の前にしてここまで心穏やかである自分自身の変わりようもおかしく思えたからこそ、しのぶは笑う。

笑って、その心穏やかになれた理由を与えてくれた存在に、改めて礼を告げる。

「それから……えつと鬼灯様でしたよね。

私があいつと……童磨と戦っていた時に姉を連れてくるように指示を出したこと、まだ生きている私に姉の叱責や激が届くようにしてくれたこと、そして何より裁判の前に天国で姉や家族としばらく過ごす時間を与えてくれたことは本当に感謝しています。

本当に、本当にありがとうございます」

姉が「厳しいけどとても優しい、お館様とは別の意味でこの人についてゆきたいと思わせてくれる方」と語っていた鬼、閻魔庁の第一補佐官である鬼灯に歩み寄って、しのぶは深々と頭を下げる。

「別に気にしないでください。お姉さんを派遣したのはむしろあなたを信頼していなかった証拠ですし、無惨討伐は私達あの世側にとっても悲願でしたので、出来る限りの協力は当然です。

ご家族としばらく過ごしていただいたのも、無惨討伐関係の亡者でどこの裁判所控室も満員だったから、天国行きが決定事項の人たちは天国で待っていたただけですよ」

しのぶの礼に鬼灯はやはり無表情のまま、別に厚意ではなかったと答える。照れはその顔からはまったく読み取れない、おそらく本心からの言葉だろう。

しかし本心からそう思っただけで、しのぶの憎しみに捕らわれ続けていた心を癒す選択を取ってくれたのなら、きっと鬼灯は本質が優しいのだろうと思ひ、彼女はただ笑う。

姉のようになりたい、姉のようにならなくちゃと思っていた頃の笑顔に似ているが、間違いなくしのぶ本人の、本心からの幸せだから嬉しいからこそその笑顔だった。

その笑顔に閻魔大王はほっこり和んでいたが、鬼灯の方は無表情の

まま話を変える。

「ところで、しのぶさん。少しお時間よろしいでしょうか？　あなたの裁判とは無関係ですが、相談したいことがあります」

「？　はい。私にできることでしたら、なんなりと」

小首を傾げつつ鬼灯の頼みごとに応じると答えると、鬼灯は頭を下げて礼を言ってから本題に入った。

「ぶっちゃけ、童磨の奴はどんな地獄に墮とせばいいと思います？」

……自分自身を毒の塊にして自爆特攻するほど、憎しみで心を満たして心を病ませた元凶の処罰を、初めて無表情を崩して本気で困ったように尋ねる鬼灯を見て、しのぶは鬼灯に対する評価を修正する。

この鬼は本質的に優しいかもしれないが、それ以上に手段を選ばない合理主義だと貼り付いた笑みのまましのぶは思った。

* * *

被害者代表と言っているいい自分に訊くか？　と思ったが、訊きたくなる気持ちも童磨という鬼だった者の存在を知っていれば理解できるので、しのぶは頭痛を堪えるようにこめかみに指を当ててまずは尋ね返す。

「……それ、私に訊くってことは私の意思を尊重して希望通りの地獄に墮とすって意味ではなく、……どこの地獄の拷問も今の所、効果がないから効果的な拷問に心当たりないかってことですよ？」

「全くもってその通り」

しのぶの問いを即答で肯定し、鬼灯は深い溜息をついた。閻魔大王も「……彼、無惨よりある意味すごいよね」とだいぶ引いた様子で呟く。

どうやら何千年も罪人たちを見続けてきた彼らでさえ、童磨は許しがたい極悪人というレベルも超えて「何、あれ？」案件らしい。

「……罪状で考えれば大焼処だいしょうしょ（殺生を救済と説いて殺しを行った者が墮ちる地獄）を中心に、余罪に見合った小地獄をいくつかが妥当です。……しかし、大焼処で行われる刑は物理的な業火や妖術などによる業火の他に、己の内から『後悔の念』が炎となって生じて罪人を焼き焦がすというものなんです……」

「あいつには全く意味がない!! 絶対に線香ほどの火も出ない!!」
「ですよー」

鬼灯が一応、普通ならどのような地獄に堕ちるのかを説明するが、罪状に妥当な地獄こそがおそらくもつとも奴にとって無意味、反省を促すどころか被害者の鬱憤晴らしの苦痛すら与えられないことにならぬのが力いっぱい突っ込み、鬼灯も投げやりに同意する。

「……裁判官とか地獄の責任者としてしちやいけない事かもしれないけど、……あの子は本当になんて言うか……アレだから、もはや罪状関係なく地獄を一周して一通りの刑罰を受けさせてみたんだけど……」

「あれ、共感性どころか情緒とか、そもそも感情が欠落しているようですが、一応生理的な不快不快くらいは感じるようなので、肉体的な痛みによる拷問はまだ嫌がるんです。ですが、亡者は何度も肉体を再生しては拷問を続ける、生前の鬼と似たような状態なので、おそらく近いうちに肉体的な痛みには慣れて、ヘラヘラするでしょう。」

だから本当に何すればいいのか、今現在地獄で最大の悩みの種です。とりあえず、今は邪魔なんで阿鼻に堕としてますが」

まさかの無惨以上の問題児が地獄にやって来たことで、司法としてどうよ？ なことをやらかしていると閻魔は告白するが、これは閻魔を責められない。

そして鬼灯もとりあえず感覚で墮とすべき所じゃない所に厄介すぎる虚無の塊を放置しているが、これももはや突っ込む気にはなれない。

「ほとんど奴にとって苦しくないというのが癪ですが、八寒地獄に任せて永久に氷漬けという案も出しましたが、八寒地獄はうちの八大地獄とほぼ独立している形を取っているんで、奴の危険性を理解しきれずに甘く見て、恥ずかしながら逃がす可能性が否めません。」

奴は無惨と同じく、人の弱みに付け込んで誑し込むことに優れている為、人間に戻ったからとて油断はできないので、周りに奴の手駒となりうる人間がいる地獄というのがそもそも向かないですよね。

だから、奴一人が永遠に刑を服し続ける孤地獄が良いだろうという

所まで話はまとまっているんですが……」

「肝心の刑の内容が浮かばないんですね」

「どうやらとりあえず感覚で阿鼻は本当にとりあえずではなく、阿鼻に堕ちるまで2000年かかる深さを利用して、童磨が口車で他者を利用しないようにしているようだ。」

「独房か何かに閉じ込めるという手段を使わないのは、あれを見張らなければならぬ獄卒の多大すぎるストレスを配慮しているのかもしれない。」

「そんなことを思いながら、しのぶは心から鬼灯や地獄の獄卒たちに同情して言いにくそうな部分を尋ねれば、閻魔は何かを誤魔化すように気まづげに笑い、鬼灯は猫のように中空を眺めてから答えた。」

「いえ、まったく思い浮かんでいない訳ではないんです」

「?」なら、それを試しにやってみれば……、あの、もしかして私に拷問の協力をして欲しいって話ですか?」

「話が早くて何よりです」

自分の予想が否定され、ならば何故その「思い浮かんでいる事」をしないのかを尋ねようとして、途中でしのぶは察する。そして同時に、自分と姉の評価である鬼灯の「優しい」がだいぶ怪しくなってくる。

無惨の鬼、十二鬼月の上弦の式だった童磨という男は、表面上はひたすら軽薄で、言っていることが何もかも他人の神経をやすり使って全力で逆なでしているような男だが、その中身は閻魔や鬼灯が言う通り何も無い、虚無が人の形をして人のモノマネをしていると言ってもいいだろう。

しかしそんな奴が、死の間際に唯一の感情、情緒、精神が満たされる何かを得た。

……しのぶからしたら迷惑を飛び越えて意味不明だが、何故か奴はしのぶに恋をしたとのたまった。あの時のしのぶは、キレることも気色悪がることも出来ずに硬直した。

そして「一緒に地獄へ行かない?」と言い出したので、本心からだがどういった感情の発露だったか思い出せない笑みを浮かべて「とっ

ととくたばれ糞野郎」と言い捨て、ついでに童磨の頭を投げ捨てた。今になって思うと、自分が地獄行きであることを理解しているのが意外である。

「ご安心ください。あなたに童磨を甚振れとは言いません。むしろご希望されても止めます。拷問にならず、大歓喜するだけなのは目に見えていますから」

「……そちらも、話が早くて助かります」

虚無の塊である奴が、唯一執着しているであろう自分を利用するか？ という意味でしのぶがじつとりと睨んでも無表情だが、しのぶが一番危惧していたことをさせる気は初めからなかったらしく、そのおかげで「優しい」という評価はかろうじて撤回されなかった。

しかし、それなら余計に何がしたいのか、何をしのぶに訊きたいかがわからなくなってくる。

その疑問は、鬼灯より先に閻魔が非常に気まずそうに答えてくれた。

「あのね、しのぶちゃん。……実は君の許可を取る前に、野干とか化けるのが得意な獄卒が君の姿に化けて、童磨が追いついたら化け物や厳しい男の獄卒に変わって拷問するっていう、衆合地獄と似た形の刑を既にやってみたんだよ。でも……」

「あいつ、しのぶさんの姿に対して注文がうるさい、すぐに偽物と見抜くのはまだ予想してましたが、まさかの逆。

あなたの姿からどのような姿に変化しても、愛を語って拷問は悦に入っていました」

言いにくそうな閻魔に代わって、鬼灯が何の躊躇もなく虚しい結果を告げる。

しのぶは両手で顔を覆って、「ほんと頭にくる、ふぎけるな馬鹿、馬鹿野郎」と言いながら泣き出してしまった。

* * *

自分の許可を取らなかったのが不満だが、別にしのぶが損をするようなことではなかったのだからそれはいい。

だが、鬼灯の言う通りまさかの想定していた失敗より遙か斜め上な

方向にかつとんで効果がなかった。

どんな姿でもしのぶなら愛しているのなら純愛、本物の愛であると言えるかもしれないが、そもそもが幻術による偽物であることを見抜けていない、もしくははしのぶっぽければ何でもいいのなら、やはり奴は感情を得ても何もかもが薄っぺらい。

その事を鬼灯は指摘してみたようだが、「しのぶちゃんへの愛が大きすぎてしのぶちゃんが関わるもの全てを愛しているだけだよ」と、「しのぶっぽければ何でもいい」を自覚があるのかないのか不明だが肯定して言いきられた。

「そんな無敵お花畑恋愛脳状態なので、次策として用意していた『いかついおっさん獄卒にしのぶさんの格好をして迫ってもらおう』も喜びそうなんですよね」

「待って、それはあいつが嫌がっても拷問する側の方が絶対に辛いからやめてあげて」

唯一の付け入る隙と思えたしのぶに關しても、ハイパーポジティブを発揮して受け入れている為、没になった孤地獄第二案を口にしたら、しのぶが泣くのをやめて突っ込む。本当に、実行する前に没になって獄卒側も幸いだろう。

鬼灯も「そうですね。むしろ、罪人である亡者にやらせた方がまだマシですね」と同意しつつしのぶが想定していない方向にアイディアを発展させてしまう。しのぶはもはや、罪人なら別にいいやと思つて止めるのは諦めた。

「しかし、この案も没になると、後はカナエさんの案くらいしか有効そうなものがありません」

「え？ 姉さん？」

ことごとく拷問を無効化どころか獄卒たちをげんなりさせる童磨に、鬼灯はうんざりしながらまだもう一つだけ案が残されている事を語る。

その発案者が自分の姉であることを知って、しのぶはきよとんとした顔で続きを待つ。そして、訊かなければ良かったと後悔した。

「しのぶさん。富岡 義勇さんと祝言上げて、砂糖吐くくらいにい

ちやついてくれませんか？」

「何で富岡さんの名前が出るんですか!?　　っていうか、何それ!?　姉さんは何を言ってるの!?!」

鬼灯は真顔である意味童磨の告白並みにぶっ飛んだことを提案してきて、しのぶは叫びつつ脊髄反射なのか素手で蜂牙ほうがの舞い”真靡まなびき”を鬼灯の胸にぶちかます。結果、しのぶの手が痛くなっただけだった。

「ダメだよ、鬼灯君。こういうのは周囲がそつと自然にそれとなく空気を作ってあげないと、くつつくものがむしろこじれて……」

「閻魔様、叱る所はそこじゃない!!　くつつきません!　こじれません!　そもそもこじれるものが何もない!!　あと富岡さんにも選ぶ権利がある!　すぐく癩だけど!!」

説明!　説明を求めます!!　っていうか姉さん呼んで来て!!　訳のわからないことを言い出した姉さんを!!」

閻魔が困った顔で鬼灯のデリカシーの無さを叱責するが、しのぶからしたら前提がそもそも意味不明な為、鬼灯の岩のように固い胸を突いて痛くなつた手を撫でながら喚く。

涙目なのは、手の痛みかそれとも羞恥の所為か。

「奴は初めて執着するものを得た子供のような存在な為、その執着するものが既に別の誰かのもので、自分が欲しいものは全部その誰かのものだと知って悔しがれば良し。あなたが幸せであることを喜べたのなら、それはそれで奴を良い方向に誘導できるのではないかと言っていました。」

あと、『そろそろ素直になりなさい。お姉ちゃんは応援してるからね』とも言っていました」

「姉さんが一番、私の敵よ今は!!」

どうやら妹が憎悪に捕らわれないように拷問が成立してほしいという願い、鬼と和解したいからこそ何としても童磨に人間らしい感性を与えたいという思い、そして姉個人の感情からによる余計すぎるお節介が力オスな融合を果たした結果の提案だったようだ。

「しません!　祝言なんてあげません!　それなら適当な男とイチヤ

ついているフリをした方がマシです!!」

姉のお節介を真つ赤な顔で怒りながら、本心だが素直ではない妥協案を自ら出してしまおうあたり、しのぶの精神面は色んな意味でいっぱいいっぱいだろう。

そんなしのぶを微笑ましく思っているのか閻魔は「まあまあ」と宥めるが、鬼灯は何故か酷く不愉快そうな顔で考え込む。

「……………本当にそちらがマシだと言うのなら、ちよūdい『適当な男』がいます。あれが喜ぶようなマネはあいつの頭をねじ切りたいくらいにしたくないのですが、あのヘラヘラした軽薄なところが奴とよく似てますから同族嫌悪で効果が期待できますね。

……………ん？ 同族嫌悪？」

鬼灯の纏う空気が一気に怖くなり、明らかに機嫌が悪くなったことに気付いてしのぶと閻魔はちよつと怯えるが、しのぶは自分で言っておきながら「童磨と似た軽薄な男」という部分に反応して、彼女も怖い空気を纏いながら「誰ですか、それ？」と尋ねる。

彼女の中で憎い仇に苦痛を与える歪んだ愉悦と、その為にも最も自分が嫌うタイプの男と相思相愛の真似事をしなくてはならない屈辱を内心で秤にかけていたが、鬼灯の答えでその秤にかけていたものが両方ともどつかに吹っ飛んだ。

「あなたのお姉さんの上司です」

「……………はあ？」

しばし思考が止まるが、そういえば裁判が始まるまで家族と過ごしていた時に姉は今、天国の薬屋で働いて薬剤師を目指していると語っていたことを思い出す。

姉が「しのぶのようにたくさんの人を癒す薬が作れたらいいなって思ったの」と、自分が鬼を殺す毒だけではなく、鬼の血鬼術である毒も解毒する薬を作っていたことを知っていた、憧れの姉に憧れてもらっていたことが嬉しかったが、姉が就職した薬屋は日本の天国ではなく中国の桃源郷で、その理由は「従業員が可愛いうさぎさんなのー」と言っていたことまで思い出し、嬉し涙は一瞬でカラッと乾く。

「え？ ウサギ？ ……まあ、ウサギなら軽薄でも本心から好きになれる

「かもしれないね」

「違うよ!! 白澤君はウサギじゃないよ!!」

「どちらかというところ……牛ですかね?」

そして姉の就職理由を思い出した所為で、とんでもない勘違い発言をしでかすしのぶに閻魔は突っ込み、鬼灯は鬼灯で余計なことを言い出した。

その所為で一瞬また混乱するが、しのぶは「白澤」という神獣の名を知っていた為、なんとなく姉の上司の正体を察して今度は「普段の姿は人間なんですか?」とまともな質問をする。

「人間です。ですが、とんだ色情魔です」

「ちよつ! ころ、鬼灯君! そんなこと言ったらしのぶちゃんがカナエちゃんを心配しちゃうじゃん!!」

大丈夫だよ、しのぶちゃん。白澤君は確かに女の子が大好きでちよつと……問題はあるけど、天国の住人だけあって童磨とは違っていい子だから」

鬼灯はよほどその神獣を嫌っているのか、吐き捨てるように端的に言い放って慌てて閻魔がフオロー。

そして鬼灯もさすがに私情を出し過ぎたと思ったのか、無表情で同じくしのぶの心配を杞憂だと告げる。

「すみません、お姉さんへの心配を煽るようなことを言つて。」

しかし心配は必要ないでしょう。あいつは知識はありますがアホで、腕つぶしも全くないので普通にカナエさんの方が強いです。あと彼女はほわほわとしていますが我が強いので、あいつの押しに負けることもまずありません。

私も彼女があそこに就職すると聞いた時はとても心配しましたが、今ではむしろ店をカナエさんが牛耳って、奴の女癖の悪さが少しは改善されています。

そしてもちろん、カナエさんはあの白豚に恋愛感情はまったくありません。ただの世話が焼けて困るけど、薬の知識だけは確かな上司としか思つてませんね」

童磨に似た軽薄で女好きが姉の上司と知って懐いたしのぶの心配

を、閻魔と違って全く何一つ白澤をフォローせずに杞憂だと語り、鬼灯は本気でその白澤が嫌いなんだなと思いきなり知りながらしのぶはひとまず納得。

納得してから、しのぶはちよつと真剣に考え始める。

鬼灯曰く、白澤という神獣は女好きで二股三股は当たり前前のクズだが、恋人や夫がいる相手には「可愛いね、別れたら僕と付き合おうよ」と言うくらいに留める、最低限の節度はあるらしい。

そもそもそいつは二股三股を隠さず、「君だけを愛してる」などといった甘言で騙して関係を築くようなことはせず、女性に貢ぐことが大好きだが貢がせることはまずないと、クズである事は間違いないが、腐っても神獣だからか誠意は女好きのクズなりにあるようだ。

なのでまあ、我慢できないこともないなとしのぶが妥協しかけていた時……

「鬼灯様、灼熱地獄の報告書をお持ちしました。……あ、すみません。まだ裁判中でしたか」

何やら書類を持って入って来た女性を、反射的に振り返ってしのぶは見た。

女性は獄卒らしいが、どうやら鬼ではなくしのぶと同じく人間、亡者らしかった。

その亡者の女性から、何故かしのぶは目が離せなくなった。

彼女は美人で、系統で言えば姉のカナエに似ている。しかし姉は太陽のように朗らかで明るい澆測とした魅力に満ちた女性だが、彼女の纏う雰囲気は憂いと諦観に満ちていた。

しかしそんな雰囲気を持った者は、鬼殺隊という組織で鬼に家族を殺された者と関わり続けたしのぶからしたら珍しくない。

髪は緑色とかなり奇抜だが、しのぶの同僚は桜餅カラー。これも別にどうってことはない。

しのぶからしたら、別に特に気にするような要素などない女性のはずだった。

なのに、何故か目が離せない。胸の内から何かが沸き上がって来る。

そしてそれは向こうも同じだった。

相手の女性もしのぶと目が合ってから、瞬きもせずにとただ無言で見つめ合っている。全く同じ何か胸の内から湧き上がっているに戸惑いながら、向こうも同じだと確信している顔だった。

そんな女性二人に閻魔は「え？ 二人とも、どうしちゃったの？」と狼狽しながら尋ねるが、鬼灯の方は二人を見比べて、何かに気付いたように手をポンと打った。

「……そうか。同族嫌悪ならあの白豚よりもっと適任がいた!!」

先程、しのぶに白澤を推薦していた時に感じていた引つかりの正体に気付き、鬼灯は一人置いてけぼりで困惑しっぱなしの閻魔は放置して、見つめ合う二人に向かって言った。

「しのぶさん！ そして瓜子姫さん！ 童磨に対して効果的な孤地獄が思い浮かびました!!」

* * *

しのぶの四九日が終わり、無事に天国行きが結審されて数日後。

しのぶは地獄に訪れていた。

真っ白な何もない部屋で、広さは4畳半ほど。

そんな最小の孤地獄の中には、罪人である亡者と呵責する獄卒の二人だけ。

亡者は「万世極楽教」という宗教の教祖であり、十二鬼月上弦の式だった童磨。

そして、彼を呵責する獄卒は……

「うつわくく、趣味わつるくく。見た目はそこそこ、変な髪の色と目が減点で60点くらいだけど、女の趣味が悪すぎてもう0点でも高すぎくく。」

ブス専？ ブスしか興奮できない変態なの？ あくく、もうこんな奴と二人つきりにされるなんて、天探女デメメちよくく怖かったけど、それならあんしくん」

「……はあ？ 何言ってるの？ 鏡見たことないの？ あ、自己紹介

かなるほど。そんなのわかり切ってるからいちいち言わなくていいよ」

「きや〜、本当にブス専だ〜！ 気持ち悪〜い」

このやり取りを室外から妖術で見ていたしのぶは、無言で振り返ってうれし涙で瞳を潤ませて叫んだ。

「鬼灯様、愛してる!!」

「ありがとうございます」

思わず愛を伝える程、嬉しかったようだ。

童磨が、あのサイコパスも可愛く見える虚無の塊が、感情を得たら得たらでハイパーポジティブを発揮してきてどんな地獄も意味がないのではと思わせた変態が、演技ではなく心の底からイライラしているのが、嬉しくて嬉しくてたまらないらしい。

「彼女……天探女あめのさぐめは、性格的に言えば無惨の方が同類ですが、発言の何もかもが煽りになっていく所が奴とそっくりですから、淫獣より同族嫌悪を与えるのは適任でした。今になって思えば、あいつを使っていたら、自分と似ていることを前向きに解釈して、『しのぶあなただの好みはやっぱり自分なんだ』とか言い出しかねませんから、この配役で正解ですね」

「ええ、まったくです」

ニコニコ笑いながら、孤地獄内の様子を観賞してしのぶは鬼灯の言葉に同意。

童磨の孤地獄の内容は、ひたすらに「瓜子姫」という昔話に登場する天邪鬼のルーツである女神、心が読めるが嫉妬深くて陰険で身勝手な天探女が、童磨を煽り続けるというもの。

童磨が唯一執着しているのがしのぶなので、その内容は童磨よりしのぶに対して失礼なものなのだが、そこは全く気にならないらしい。「良かった……。本当に良かった……。あの頭も心も空っぽなあいっじゃ、やっぱり何にも響かないかもしれないって不安だったけど、あの糞野郎でもやっぱりこれはムカつくのね」

「あれは自然体で、自分が優れていることを前提に物事を見て、基本的に他者を見下してますからね。明らかに自分より劣っているものに、

ここまで見下されて馬鹿にされてるのは初めてなんでしよう。

また、彼女は自分の力を他者を貶めることにはかり使い、嫌がれば嫌がるほど煽ってきますが、効いてなければないでムキになって全力で嫌がらせをしてきます。

あなたに執着していなければ、彼女でも分が悪かったかもしれないが、おかげで良い攻撃材料となりました」

何だかんだで童磨は生理的な快不快は初めから感じ取れたのも、天探女が効果的だった一端。

彼女の外見は……、言っちゃなんだがブスとしか言いようがない。特別特徴的な部位がある訳でもないのに、絶妙に全てのパーツのバランスが悪い。

美人を好んで食べていたし、心の綺麗な者はペット感覚とはいえず命が尽きるまで傍に置いておこうと思つた童磨にとって、天探女は全てが「生理的に不快」なのだろう。

「ありがとうございます、鬼灯様。それから……瓜子姫」

「私はなにもしてませんよ、しのぶ。お礼を言うのは、私の方です」何を言い返しても馬耳東風。心が読める分、天探女の方が煽りは的確な為、ついには黙り込んだ童磨を満足そうに見てからしのぶは再び礼を伝える。

しのぶの裁判の日、法廷に報告書を提出しに来た女性獄卒、天探女の被害者である瓜子姫は優しげに微笑んで、彼女もしのぶに感謝を伝える。

「あやつはあれでも女神なので、裁きの対象外。だから報いもなくのうのうと日々を過ごし、罪人だけではなくそらの獄卒たちも不快にしています。だけど、あやつがこの孤地獄担当になったおかげであやつと顔を合わせる機会が激減！

それだけでも感謝してやまないのに……あやつは心が読める。だからこそ、口では何と言おうとも本当は理解しているでしょう。自分があああの亡者にどれほど見下されているのか。

あやつが黙り込まれてもああやつて煽っているのは、亡者が心の中で罵っているからムキになっているのでしょう。互いが互いを見下

し合って不快にし合う。何とも素晴らしい地獄です。

こういう感謝は不謹慎でしょうが、あの亡者を連れてきてくれて本当にありがとう、しのぶ」

どうやら、彼女たちが法廷で出会った瞬間に胸の内に沸き上がったのは、シンパシー。

最も憎い相手がまったく反省しないわ、報いを受けてないわという不満と憎しみをどこかで鋭く感じ取ったらしく、彼女たちの交流はあの日と本日とでまだ2回だけの間柄だというのに、既に信頼関係は親友だ。

だからこそ、しのぶは鬼灯が天探女というジョーカーを思いつくきっかけとなった瓜子姫に感謝してやまないと同時に、罪悪感を懐く。

この孤地獄で多少は天探女をムカつかせることが出来ているが、それでも瓜子姫のいうとおり彼女は女神なので、瓜子姫を殺した罰は受けていない。

しのぶは怨敵が最適な罰を受けてすつきりしたが、ささやかな嫌がらせで鬱憤を晴らすしかない瓜子姫が似た者同士だからこそ申し訳なく思い、自分だけすつきりしたことに感じなくていいとはわかってるが、どうしてもその「自分だけ」という思いが罪悪感となる。

だからしのぶは心に誓う。

瓜子姫の仇は、絶対に自分が取る。そのことに力は惜しまないと。

「十王の裁判は人間に対してのものなので、女神の彼女は裁きの対象外です。ですが、彼女は八百万の神からも嫌われていますので……、神のメンツ上、動かなくてはいけないという事態にならない限りは……」

地獄の黒幕からそんなお墨付きをもらったのが、しのぶの決心を更に後押ししたのは言うまでもない。

* * *

しのぶが死んでから約100年後。

あれからしのぶは、天国でのんびり暮らすのは性に合わないが、姉と同じ就職先は上司が確かに童磨より億倍マシだが嫌いなタイプであることには変わりないので務めていられず、鬼灯の「もし、気が向いたらいつでもどうぞ。歓迎します」という言葉に甘えて地獄の技術課に就職し、毒物研究を続けている。

そして、鬼灯から茄子のアイデアを伝えられた時、彼女はくるくる舞うほどに歓喜した。

「すばらしいアイデアですね！ やります！ やらせてください！！

ぜひとも天探女ごと、あの4畳半を黒い悪魔で埋め尽くしましょう！ あいつは私が集めて品種改良したと知れば喜ぶかもしれませんが、天探女は普通に気持ち悪がつてあいつに縋り着くなり盾にするなり、どちらにしろしがみつくはずです!!

天探女の全てを100年たっても慣れずに生理的に嫌ってる童磨にとっても地獄！ 天探女にとっても地獄!! 最つつ高じやないですか!!」

ハイテンションで喜々としてゴキブリ地獄に賛成しているしのぶと、具体的にまずはどんなゴキブリに品種改良するかのアイデアを出し始める鬼灯を粕治は遠い目で眺めながら、「今日も地獄は平和だな」と結論付けて、技術課を後にした。

獄卒を巻き添えにした地獄を止めないのかだつて？

あの性格に加えて、「祝言前の女性」を「身勝手な嫉妬」で「家族が少し家から離れた隙に殺害」という、粕治の地雷を実に丁寧に踏み抜いている天探女を庇うのなら、そもそも粕治は道場破り(文字通り)をやらかしはしない。

まあ、全ては日ごろの行いと人徳が結果という話だ。

鬼灯原作沿い短編集 「狛治さんの日常」

・1巻1話「鬼VS宿敵 地獄大一番」

等活地獄で、苛立った男の怒声が響き渡る。

「だからよお!! ここが一番強い奴連れて来いっつってんの!」

何故か地獄で道場破りのような要求をする男に、獄卒の一人は困り果てた様子で、それでもなるべく丁寧に対応する。

「困りますよお〜。そういうことはまず、受付を通していただいで……」

「つかーっ!! そういうことしか言えねーのかよっ! このマニユアル獄卒!」

しかし獄卒のそういう態度こそが男の苛立ちの種らしく、慇懃に対応すればするほど火に油で、他の獄卒たちも仕事にならず、どうしようかと頭を悩ませていた時……。

「どうしたんだ?」

『! 狛治さん!』

獄卒たちが一齐に「助かった」と言わんばかりの声を上げるので、獄卒にクレームをつけていた男がそちらに視線を向ける。

獄卒たちの反応からして、やっと自分の要求通りの「ここで一番強い鬼」が来たのかと思った。

が、その予測は外れてしばし男は呆気に取られる。

やって来たのは、筋肉質ではあるが細身で、その頭には一本もの角もなく、耳の先も丸みを帯びた自分と同じ亡者。

黒髪は女性のベリーショートぐらいに短いが、まつげが豊かで長く目も大きいので、その筋肉質な体が隠れる服を着れば女性と間違われそうなくらい見目は整っており、自分は室町時代ではイケメンの部類、今ではちよつとアレな容姿であることを自覚している男は、内心で嫉妬が少し沸き上がる。

そんな男の内心に気付いた様子もなく、狛治と呼ばれた男は小首を傾げて、自分と他の獄卒を見比べ、状況の説明を求めた。

「……これは、どういう状況だ?」

「いや、なんか急にやってきて道場破りのようなことを……」
「……………ああ、なるほど。わかった。他の獄卒は下がって、俺に任せろ」

尋ねる狛治に先ほどまで対応していた獄卒も、相手が何をしたいのかよくわかってないので、どう説明しようか悩みながら話し始めたら、狛治はたったそれだけで事態を把握したらしい。

流星は地獄の黒幕、閻魔大王の第一補佐官である鬼灯の側近と、獄卒たちは尊敬のまなざしを狛治に向ける。

「何だ？ お前は亡者にんげんだろ？ 俺は鬼に用があるんだ！ 下がってろ！！」

男は抜身の日本刀を狛治に向けて横暴に命令するが、狛治は真つすぐに男を見据えて言い返す。

「それは出来ない。お前の気持ちはわかるが、ここの鬼は丈夫ではあるが亡者と違って再生できないんだ！！」

鬱憤晴らしなら再生する俺が付き合うから、鬼への復讐はもうやめろ！！」

「何にもわかってねえよ！！ 何の話だ!? つーか、再生する鬼っていの!？」

しかし狛治の真摯な説得は、即答で突っ込み返された。

突っ込み返された狛治はまたきよとんとした顔で小首を傾げ、後ろを振り返る。

そして背後の脱力しきってる獄卒たちに訊く。

「……………無惨様関係の鬼の被害者が、何か勘違いしてこつちに来たわけじゃないのか？」

「……………違います」

どうやら、狛治はあれだけの話で事態を把握したのではなく、盛大に勘違いしていたようだ。

しかしその勘違いは、してもおかしくない。ここ十数年ですっかり見なくなったが、無惨討伐からしばらく後はよくあったのだ。

無惨討伐後の鬼殺隊隊士は、無惨を倒して無惨の鬼は全部奴と一緒に死んだことを知っているのです、その後には寿命を迎えて亡くなれば、

最初の方はお迎え課の鬼などに敵愾心を懐くが、すぐに無惨の鬼とは無関係とわかって、後は普通の亡者と同じく大人しく従ってくれるのだが、問題は鬼殺隊ではない無惨の鬼の被害者たちだ。

政府非公認の知る人ぞ知る組織な為、鬼の被害を受けて鬼の存在を知っても、鬼殺隊の事は知らないままの人間はもちろんいた。

そして鬼殺隊ではない故に、無惨の鬼に対する知識が中途半端やほとんどの場合が多く、無惨討伐後も鬼の存在に怯えて、もうこの世のどこにもいない鬼を憎み続けた者もいた。

そういう者達が死後、無惨の鬼と地獄の鬼を混同して、襲い掛かったりした事態が昔はよくあったのだ。

なので、狛治はものすごく久しぶりだけど、その類だと思ったのだろう。

もう無惨討伐から100年程経っているが、被害者が自分の子供に鬼の恐ろしさと憎悪を教え込んで、直接の被害者ではないが鬼殺隊並みに鬼を憎みに憎んでいた2世が稀にいたのも、狛治の勘違いに拍車をかけた。

なので、獄卒は脱力した気合いを何とか入れ直して、狛治に再び説明する。

「狛治さん、あいつは桃太郎で……」

「!? 桃太郎!? 本物だったのか!!」

『今更!? っていうか、何で偽物だと思ってた!?』

しかし説明はいきなり悪気なく出端がぶち折られ、説明していた獄卒どころか桃太郎とそのお付きである犬・猿・雉にまで総突っ込みを狛治はもらう。

これは突っ込まれて当然だろう。上記の通り、桃太郎はお付きの動物たちをフルメンバ―で連れてくるし、格好も全力で桃を主張した服装で、「日本一」と書かれた旗まで持っている。

だが狛治はものすごく気まずそうに、ほんのり赤くなった頬を掻きながら答えた。

「いや、偽物だと思っていたというか……ゲン担ぎかと思っていた。鬼退治の」

狛治の天然具合に、獄卒と桃太郎は同時にその場で膝をついた。ある意味ではピリピリした空気が一掃されたので、狛治の天然グツジョブ！ だろう。そう思わないとやってられない。

* * *

「ん？ けど桃太郎だとしたら、何で鬼が再生することを知らないんだ？」

狛治が自分の勘違いに恥ずかしかがって肩身狭そうにしていたが、相手が「鬼退治」で有名な桃太郎だからこそ、知っておかなくてはおかしい勘違いを桃太郎がしていなかったことに疑問を持つ。

「は？ むしろ、再生する鬼の方が普通なのか？」

「いや、現世で鬼退治したんなら、そう思うのが普通じゃないか？」

しかし何故か、桃太郎と狛治の会話は噛み合わない。その原因を知る獄卒が、狛治に耳打ちした。

「狛治さん、桃太郎が倒したのは地獄の瘟鬼おんきです。室町時代って何故か、妙に無惨も無惨の鬼も大人しかったので、むしろ地獄から現世に出た奴が調子に乗っちゃってたんですよ」

「……ああ。なるほどな」

今度は獄卒の言葉で、その獄卒が理解していない部分まで狛治は察して納得。

鬼灯に非はなくとも鬼灯の信用に関わるのであまり周知されてないが、室町時代に実は無惨と偶然にも鬼灯は邂逅している。

しかし現世の妖怪扱いだった無惨に、あの世側の役人である鬼灯が捕縛する法などなかったので、本来なら放置するしかなかったのだが、奴の所為で判決が難しい死者が増えまくっている事態にムカついていた鬼灯がケンカを売り、「正当防衛の結果」という建前で奴をあの世に送り込もうとしたのだが、無惨を素手で（現世視察だったので、金棒を持っていけなかった）叩き潰したのが災いして、肉片になっても生きてた無惨に肉片のまま逃げられてしまったのだ。

しかしさすがの無惨も自分をそこまで追い詰めた、自分以外の化け物の存在がトラウマとなったのか、何年も何年も様子見で逃げて隠れ続けたおかげで、室町時代は無惨も無惨の鬼も大人しかった。

が、その後にもまた調子に乗ったというか、「人間だから余裕余裕」でも思ったのだろう。戦国時代後期に縁壺と邂逅し、鬼灯以上のトラウマを負ったのが実に頭無惨らしい。

そんな元上司の馬鹿な遍歴までも思い出して遠い目になりつつ、狛治は今度こそ桃太郎の迷走に説得を試みる。

「なんか、色々勘違いしてすまん。けれど、この鬼はお前が退治した悪い鬼ではないのは確かなんだ。

だからバカな真似はやめてくれ。ただ単純に力試しがしたいのならば、終業後でいいのなら俺が付き合う。正直、俺も桃の呼吸や透き通る世界を持つ者には興味があるしな」

「いや待て、まだお前は絶対に勘違いしてるぞ!? 桃の呼吸って何!? 透き通る世界なんて持ってねえよ!!」

しかし、今度こそと思つた説得もまた盛大に突つ込まれ、狛治は目を見開いてポカンとした顔でしばし間を置いてから再び尋ねる。

「……桃太郎だから、桃から生まれたんだよな? もしかして、あれは何かの比喩か?」

「桃から生まれたからって桃の呼吸なんか知らねえよ!! 吐息が桃の香りなのかそれは!」

「……肺の動きや、筋肉の収縮をその目で見るように感じ取れはしないのか?」

「俺の目はX線じゃねえよ!!」

桃太郎としては訳のわからなすぎる勘違いと疑問だが、今度の訳わかってないのは桃太郎側だけだった。

獄卒たちは失望しているような、「そりやそうだよな」と納得しているような微妙な顔になって桃太郎を苛立たせるが、問うた狛治に至ってはうつむいたまま両手で頭を抱えてそのまま動かないので、本質的に英雄らしく善人な桃太郎は、普通に心配をしてしまう。

「お、おい、あんた。大丈夫か? 色んな意味で」

桃太郎とのお付きの獣たちに心配された狛治は、「……大丈夫だ」と一言告げてから顔を上げ、また訊いた。

今度は何かに縋るような顔と声音だった。

「……………縁壺って本当に人間なのか？」

「誰だよ!? 知らねえよ!!」

当たり前だが、桃太郎は全力で突っ込んだ。

* * *

その後、鬼灯により迷走していたプライドがぼつきり折られたのが逆に、一から再出発のいい機会となった桃太郎は、桃源郷の薬屋「極楽満月」に就職する。

そこで、白澤と姉弟子のカナエに鬼舞辻 無惨やその鬼の事、鬼殺隊の事、そして「縁壺」の事を教えてもらった彼は非常に遠い目で言っただそうだ。

「粕治さんの勘違いも疑問も無理ないわ。

桃から生まれた俺がこれなのに、人から生まれた縁壺さんってマジで何なの?」

+ + +

・7巻55話「恨み女の呪い事」

吼吼処。
こうこうしよ

大叫喚地獄の十六小地獄のうちの一つであり、恩を仇で返した者、自分を信頼してくれる古くからの友人に対して嘘をついた者が落ちる。

ここでの刑は、獄卒が罪人の顎に穴をあけて舌を引き出し、毒の泥を塗って焼け爛れたところに毒虫がたかるといふもの。

その吼吼処で本日、「日本の恨み女」をゲストに呼んで講演を開くという研修を行っていた。

そして呼ばれた恨み女は三人。

恨み女代表、出典は四谷怪談の於岩。

日本最古の恨み女、出典は古事記のイザナミノミコト。

そして恨み女ダークホース、出典はややマイナーな雨月物語内にあ

る「吉備津の釜」の磯良。

於岩とイザナミノミコトは地獄の、特に獄卒ならば知らないのは恥レベルだが、磯良だけはダークホースを自称するだけあって、獄卒内でも知らないものが割と多かった。

なので鬼灯がざつくりと「吉備津の釜」の内容を説明する。

その説明の最中、雨月物語を読んだことがあるので鬼灯のあらすじを聞き流していた獄卒が、鬼灯の後ろで講演の為のマイクの準備など、雑用をこなしている狛治に違和感を覚えた。

なんか妙に怖いと感じた。

狛治は真面目なので、仕事中や作業中に私語はもちろん、ちよつとした独り言もほとんど言わない。無言で黙々と行うのはいつもの事だが、何故か今日の狛治はまとう空気が怖いのだ。

これが他の者なら、虫の居所でも悪いのかな？ で終わる。社会人として自分の機嫌の良し悪しが駄々洩れなのはどうかと思うが、心の問題を隠し通せと言うのもまた酷なので、人に八つ当たりをしてない限りは放っておくのもまた、社会人としてのふるまいだろう。

だが、狛治は元々の性格が温厚な部類であるのに加え、あまりに悲惨すぎる過去や、元上司というべき存在がアレすぎる所為か、常人ならブチ切れる理不尽や不条理な事をされても言われても、「昔よりはマシ」とでも思うのか怒らないのだ。

生真面目で正義感も強いので、その理不尽に対して大真面目に真っ直ぐ戦いはするが、彼個人としては別に怒っていない、気にしていないことがほとんど。

さほど親しくなくてもそういう人であることが知られている狛治な為、彼の明らかにいつもと違う不機嫌というか、怒りを必死で押し殺しているオーラは、次第に獄卒たちが感じ取って徐々に謎の緊張感を孕む空気となってきた。

しかし狛治の様子や、この緊張感に気付いていない訳もないだろうに、鬼灯は狛治に「私情で周りを威嚇しない」という注意もなければ、狛治に配慮する様子もないまま話を続ける。

「地獄の場合、被害者と加害者の線引きって難しいですよね……」

「まあ、色々例外はありますが、磯良さんの事件に関しては元凶を処罰しましたね」

「オイ!!」

獄卒の感想に答えていた鬼灯に、抗議のような怒声が浴びせられた。

「さつきから聞いてりや、一方的な物の見方しやがって……。そいつら自己弁護が激しいだけじゃねーか!!」

元凶って何だよ！ そんなもん特定できるか!!」

鬼灯に抗議してきたのは、どの時代でも通用しそうなイケメンの亡者だった。

その亡者を見て、磯良は複雑そうに「正太郎さん……」と呟く。

どうやら彼は、妻である磯良から金をだまし取って遊女と駆け落ちして逃げたクズ男かつ、一応は被害者である夫の正太郎らしい。

「磯良く〜く〜。お前の所為で俺は地獄逝きだ。満足か?」

正太郎は、妻である磯良を睨み付けて恨み言を吐く。

その目にも言葉にも、自分が浮気三昧だったこと、金をだまし取って妻を捨てたことに対する罪悪感はなく、ただひたすらに自分の被害者意識を磯良にぶつける。

「そもそも俺は根っからの浮気性だ、親もそれをわかっていた。

現代じゃ性癖も嗜好も、度を越せば病になる。病と認められれば無罪になることもある。

俺だって苦しかったんだよ!! 何でこんな性癖なのか……!!」

そのままいきなり自己弁護をし出すので、獄卒たちはウザがってつまみ出そうとするが、何故かそれを鬼灯が手で制止。

「みなさん、下がちなさい。そしてメモなど、汚したくないものは仕舞いなさい」

そして訳のわからない指示を静かに出す。訳が分からないが、鬼灯の指示に逆らう者などいない。皆が困惑しながら後ろに下がる。

代わりに一人だけ、前に出てきた。狛治だ。

無言で静かに前に出て、鬼灯の横に並び立った部下に鬼灯は静かに言った。

「狛治さん。良いですよ。どうぞ」

「あの世の裁判なんて偏見の塊だ！ 十王の裁量一つで何故、俺が悪人で磯良は減刑ってことになるんだよ!？」

磯良たちを「自己弁護が激しいだけ」と言っていたが、その発言が完全なブーメランになっている事に正太郎は気付いているのだろうか？ いないだろう。だからこそ、これはまさしく自業自得の墓穴。

虎の尾を踏み、竜の逆鱗に触れたことも気づかない愚か者の末路として相応しい。

「――脚式、飛遊星千輪」

一足飛びで正太郎の懐にもぐりこみ、そのまま正太郎を蹴りで高く宙に打ち上げるようにして、連続して跳び蹴りがいくつもいくつも放たれた。

「全く、良い名前の技に反して汚い花火ですね。狛治さんに謝りなさい」

唐突……という訳でもなかったが、それでも獄卒たちにとっていきなりここまで……、人体がまさしく鬼灯の言う通り「汚い花火」となるほどの攻撃を狛治が、地獄の良心と名高い狛治がやらかすとは思わず、啞然とする中で彼に攻撃許可を出した当の本人は、わかっていたが狛治は責めずに汚い花火そのものになった正太郎を責めた。

「……何が、自己弁護が激しいだけだ。何が、一方的な見方だ。」

十王の裁判のどこが、偏見の塊だ?」

そして狛治は、爆発四散した体を再生させている途中の大変グロイ状態の正太郎に近づき、まだ半分潰れている頭をわし掴んで、正太郎の主張の最大の破綻部分を静かに、しかし壮絶にキレながら突き付けた。

「浮気性な自分に苦しんだ? お前、何で自分が吼吼処に墮とされたのか本気でわかってないようだな。浮気が原因なら、衆合地獄逝きだろうが! お前は、『恩を仇で返した罪』でここにいるんだ!!」

むしろ衆合地獄と併用して墮とされていけないのなら、お前の性癖を配慮して減刑されてるだろうが!! それとも何か? お前にとって

磯良さんから金を奪ったことは、当たり前のことすぎて罪だと認識できてないのか!!

性癖で苦しんだと主張するなら、逆に磯良さんに全財産を遺して駆け落ちしてから言え!!」

正太郎の主張で、獄卒どころか同じ地獄に堕ちた亡者たちもちよつと思つていた正論を、ヒートアップして絶叫しながら狛治は、何度も何度も地面の岩に正太郎の頭を叩きつける。

再生する端から腐ったトマトのようにグチャグチャにつぶれるので、狛治には悪いがたぶん正太郎は聞こえていない。

しかしそれを指摘する勇気のある獄卒はおらず、唯一出来るであろう鬼灯はというと、指摘はもちろん狛治の暴走を止める気ゼロで眺めながら、独り言なのかポツリと言葉を零す。

「……しのぶさんが狸退治当時の『力はないが智慧はある』芥子さんなら、狛治さんは『今現在』の芥子さんつてところですかね。

それと、芥子さんより狛治さんは我慢強いですけど、あの人は真面目で善良だからこそ潔癖な所がありますから、芥子さんよりもずっと地雷が多いんですね。この場合、恩知らずと妻を蔑ろにしたことが地雷でしたね」

その感想で、獄卒たちは気付く。

鬼灯は明らかに狛治を気に入っている。狛治の立場に合っていない優遇などは決して行わないが、キャリアアップの為の機会を多く与えるなど、自分の側近にするための教育を行っているとしか思えない行動が多々見受けられたし、本人もそれを認めている。

そうやって狛治の成長を期待する程気に入っている訳は、彼の真面目さや身体能力の高さなどが理由だと獄卒たちは思っていたが、今の鬼灯の発言と狛治の暴走で彼らは思い出す。

そういえばこの人、真面目なだけの獄卒より色んな意味でぶつ飛んだ奴に期待する人だったことを……。

「……あの子、伊右衛門さまにも会ったらブチキレそうだね」

鬼灯にか狛治にかどつちに引いているのかよくわからない様子の於岩がボソリと呟けば、鬼灯はそちらを見もせずと言った。

「もう既に汚い花火を製造しましたよ」

＋ ＋ ＋

・ 2巻10話 「精神的運動会」

「諸君、今年もこの大会がやってきました。

獄卒大運動会。新卒も先輩も一丸となって楽しんでください」

大王の始まりの挨拶を終えて、狛治は第一種目走者なのでそのまま指定の位置まで移動する。

その際に、見学と応援に来てくれた家族が声を掛けてくれた。

「狛治ーっ！ 頑張れよー！！ お前だったら鬼にも負けないからなー！！」

「無理だけはするんじゃないぞー！！」

義父であり師範である慶蔵が、豪快に声を上げて声援を送り、続いて実父が心配そうだが、それでも楽し気に声を掛けてくれた。

「ほら、恋雪！ お前も声を掛ける！！ お前が応援したら、それこそ狛治は絶対に1位を取るぞ！！」

そんな家族の声援に、照れくさいが泣きたくなるくらいの幸せを感じて獄卒関係者応援席の方に顔を向けると、慶蔵が大声で娘の恋雪にも声を掛けるように言うので、娘と義理の息子を同時に羞恥で顔を真っ赤にさせた。

娘はおおらかすぎる父親の肩やら背中やらを真っ赤な顔でぺちぺち叩いて、怒りを示す。

けれど、まだ顔を照れと羞恥で真っ赤にしながらも、彼女はか弱い気管支で精一杯、叫ぶ。

「は、狛治さーん！ が、頑張ってくださいーい！！」

愛妻のあまりに可愛らしい応援に、今すぐに抱きしめたい衝動を何とか押さえてつけて、狛治は所定のスタート位置につく。

その際、周りの獄卒たちに拝まれていたことを鬼灯が拡声器で、

「はい、狛治さんと恋雪さんの尊さを拝むのはいいですけど、そこ、お賽銭投げない。『病人が一番辛いのに、何で謝るんだ?』と素で言えるようになってから、恋雪さんのような嫁を欲しがりなさい」と注意されるまで気付かなかつたし、気付いたら余計に顔を上げられなくなった。

ところで、狛治は地獄の運動会に参加するのは初めてだったりする。

今までは裏方に徹していた。鬼と亡者にんげんの自分とじゃ勝負にならず、競技中に怪我でもして鬼側が罪悪感を懷いてしまつては、こちらの方が申し訳ないと思つていたからなのだが、鬼灯に「あなたの身体能力は鬼と比べても上位に入りますよ」と言われて、今年の参加を決めた。なので、大会委員長の鬼灯が加えた「工夫」が何であるかを全く知らなかつた。

知らないまま、狛治は後輩の唐瓜や茄子と一緒に第一種目「借り物競争」のスタートを切る。

スタート合図がライカンピストルではなくバズーカーであることに、「鬼灯様、何してんの!？」と内心でドン引きながら。

しかし、スタート合図で腰を抜かす獄卒もいる中、狛治は引きつってもトップを独走し、真つ先に借り物のお題が書かれた紙の所まで辿り着く。

それを拾い上げて裏返し、自分が借りるものが何であるかを読み取つて理解して……………、そのまま固まつてしまった。

「狛治さん!？」

「おい、どうした狛治!!」

その場で石のように硬直した狛治に、応援席の実父&義父、そして嫁は彼を案じて声を上げる。

その声が、狛治を動かした。

彼らの期待に応えたいという、狛治の想いが上回つたのだ。

「……鬼灯様。ちよつと阿鼻地獄まで行つてきます!!」

「行かなくていいです。っていうか、連れて来られても迷惑です」

本部席の鬼灯に、自分が引いたお題である「パワハラ上司」という

紙を掲げて、決死の覚悟で宣言した狛治に鬼灯は冷静に突っ込んだ。

* * *

その後も、唐瓜は「好きな異性^{ひと}」というベタな公開処刑をひくわ、その他も精神的に負担を伴うであろうお題の数々に、借り物競争走者は阿鼻叫喚の修羅場。

しかしそうなることを初めからわかっていた鬼灯は、彼らの「勘弁して!!」という切願をマルツと無視して、一番よりにもよってなお題を引いた狛治に対してだけ対応する。

「あー、あなたがそれを引きますか。前の上司ではなく、今現在の上司でパワハラだなどと思う者を連れてきて欲しいのですが……、無惨^{あれ}と比べたらあなたにとってはどんな上司も菩薩でしょうね。

仕方ありません。他のお題を私が引きますので、それを借りてきてください」

「あ、はい！ わかりました!!」

もうこんなお題を出す時点で鬼灯も十分パワハラ上司だろうが、阿鼻地獄から連れてこようと考えた無惨と比べたら、こうやって妥協案を出してくれるだけで狛治にとっては鬼灯の言う通り、菩薩レベルの恩情だ。

しつかりしろ、狛治。洗脳されてるぞ、狛治。

そんな事を周囲の獄卒たち思われつつ、鬼灯が余っていたお題の紙を適当に引く。

そして、今度は鬼灯が固まってしまった。

「……鬼灯様?」

困惑というか恐る恐る尋ねる狛治に、鬼灯は思わず固まってしまったお題を読み上げる。

「……………『死ぬほどウザい同僚』」

「……………孤地獄、行ってきます!!」

「だから迷惑ですのでもやめてください。元じゃなくて今の同僚でお願いします」

「同じ地獄にいます!!」

「そうでした。真に申し訳ありません」

あまりの引きの悪さに、鬼灯もつい謝ってしまった。

最終的に鬼灯が「もう好きな人でいいです、嫁をお姫様だっこしてゴールしてください」と言い出し、狛治は半ばヤケクソで、ただど嫁に対しては繊細なガラス細工を扱うように丁寧に抱きかかえて、「誰かのツラ」というお題を何の躊躇もなくもぎ取ってきた茄子に続いてゴールした。

なお、狛治はこの大運動会がリハだと知らない。

無惨様の楽しい十六小地獄めぐり（等活・黒縄地獄編）

「さあ、お待たせしました皆さん。

『頭無惨』から始まり、『ジョジョのラスボス要素豪華全部盛り、ただしカリスマや悪の美学という魅力スパイス全部抜き』やら『虎の尾の上でタップダンスし、竜の逆鱗でDJする』など数々の汚名を物にする、癩癩もちの臆病者、八大を網羅して裁判なしで阿鼻直行が決まった大罪人、鬼舞辻 無惨の楽しい十六小地獄めぐりを開始します」

鬼灯がカメラの前、無表情で声だけはバリトンを良く響かせているが淡々と無惨をボロクソに言い放つ。

そしてボロクソに言われている臆病者のくせに我慢が全くできない癩癩もちはというと……。

「むがー！・ むがっ！・ もががっ！・ もがーっ!!」

鬼灯の背後で簀巻き猿轡をされた状態で、びたんびたん魚やエビのように跳ねながら、皮肉なしで唯一褒められる顔に青筋をビキビキと浮かべて目を血走らせながら、何やら抗議してた。

「ええ、化け物ですよ。だからあなたの常識など通用しません」

猿轡を付けられていても、自分の所業やら今までの言動やらを棚上げしまくった無惨の発言を理解できたのか、鬼灯は地べたで跳ねる無惨を足で踏みつけ、見下しながら言う。

それでも猿轡を取ってやったのは、やっぱり何言ってるのかわかりにくいのなら動画の再生数は取れないとでも思ったのだろうか。

「この、化け物がっ!! 何なんだ、一体！ 私に何をさせる気だ!? 何故、愚かですっこの異常者どもがことごとく天国行きで、私がこのよくな目に遭わなければならぬんだ!」

猿轡を外した瞬間から、やはり突っ込みどころが満載過ぎて逆に言葉を失うレベルの自己弁護……ですらなく、本心から自分は悪くないと信じて疑わない暴言を無惨は吐き散らし、撮影係の獄卒をドン引きさせる。

しかし無惨の中身がない、ただただ自己愛のみで構成された言葉など鬼灯は聞き飽きているので、マルツと無視して撮影班の獄卒たちに

指示を出す。

「あ、ライブ感を出したいのでぶっ続けて撮影します。なので、黒縄地獄から巡りますのでもう少し待ってください。

順序で言えば等活から行くべきなんですけど、等活の最後がオチとして優秀なので」

「話を聞けーっっっっ!! お前のその尖った耳は笹かまぼこか!」

無惨の自己愛屁理屈は聞き飽きているが、最後の突っ込みはなかなか独創的だったからか、鬼灯は無視を止めて無惨に全くしてなかった説明をようやくしてやる。

「ああ、すみません。そういえば全く、何の説明もしてませんでしたね。大丈夫ですよ。規制の関係で黒縄で公開できる地獄は三つ、等活は七つだけですが、拷問はちゃんと全部処でやります」

「お前の頭が大丈夫じゃないわ!!」

しかしその説明はしなくていい所だけだったので、無惨にだけは言われたくない突っ込みを入れられた。

それにしても、「お前が言うな」「お前が原因だろ」と言われまくる無惨の神経やすりで全力逆撫で発言だが、更に癪に障ることにこいつは感性そのものはわりとまともだからか、発言内容は否定できないことが多い。現に、どう考えても鬼灯の頭は大丈夫じゃない。

そんな風に獄卒たちが遠い目で気まずく思っていたが、頭無惨に大丈夫じゃないと言われた当の本人はそのことを自覚している為、まったく気にせずに小首を傾げて「一体何がそんなに不満なんですか?」と素なのか煽りなのか不明なことを尋ねている。

「何もかもに決まってるだろ!! 強いて今一番不満で疑問なのは、何だこのカメラは!? 何を撮影する気だ!!」

「あなたの楽しい小地獄めぐりですよ」

「楽しい訳あるか!! 楽しいのは貴様ら異常者の化け物共の方だろうが!!」

「まあ、それは否定しません。現にこのカメラは、あなたの地獄めぐりを面白おかしく実況しつつ小地獄の内容を紹介して、地獄の獄卒を募集しようという試みでの動画撮影です」

ようやく本日の主旨を説明されて、無惨はまたせつかく唯一と言つていい美点の顔に青筋をもちやメロンのように立てながら「この、異常者の化け物が!!」と罵った。

「人の不幸がそんなに楽しいか!? 人の苦痛を笑いものにするとは下劣な趣味だな! さすがは地獄の鬼だ!! 私などと比べ物にならぬ、悍ましい化け物だな!!」

そんな化け物に気に入られて、私を嘲笑う鬼狩り共もやはり同類の異常者だ!! ああ、嘆かわしい嘆かわしい! 異常者共が異常者だからこそ優遇されるあの世が嘆かわしい! あの世に鬼はいても神も仏もないことがよくわかったわ!!」

またしても全力で自分を正当化して、地獄の鬼たちを罵倒するのは実際に感性が人間とは違っているのだからまだ仕方がないと言えるが、無惨がやらかした所業の被害者だからこそ異常者になるしかなかった鬼殺隊を見下し、罵る無惨に獄卒たちもキレかける。

が、鬼灯は無惨の傍らにしゃがみ込んで淡々と言い返したので、獄卒たちによる無惨の集団リンチは何とか回避。

「いえ、元鬼殺隊の方々はこの動画にあまり興味を示しませんでした。死後、鬼に殺されたご家族や友人などと再会したことで鬼に対しての憎悪が薄れたのと同時に、興味も失ったようです。

あなたに対しては許す気はまったくありませんけど、最近ではあなたを思い出すと憎悪より、ことごとく裏目に出るようなことばかりしてきたあなたの思考が本気で理解できない所為か、『変な生き物だったなあ』という感想しか浮かばないと言っていましたね」

「あの異常者どもがあああああっ!!」

獄卒たちからのリンチは回避したが、鬼灯からやはり素なのか煽りなのかよくわからない事実を教えられ、ブチ切れる無惨。

未だに自分以外の全てを下等だと見下しているのです、今も鬼殺隊に憎まれているのは迷惑な逆恨みとしか思わないようだが、「どうでもいい存在」と自分が見下されることも忘れ去られた、路傍の石以下の存在と扱われるのはプライドが傷ついたようだ。

「……あ、すみません。最後の珍獣扱いな感想は、鬼殺隊ではなく狛治

さんの感想でした」

「猗窩座あああああつっ!!」

そして鬼灯からさらに屈辱的な情報が追加。

自分の手足どころか道具、それも役に立たないが恩情で使ってるから感謝しろとぐらい上から目線で思っていた元部下から、まさかの珍獣扱いという真実を知らされ、再びエビのようにビチビチ跳ねながら無惨は昔の名前で部下に対してキレた。

ちなみにその元部下は、本日は有休をとって嫁と天国でデート中である。

鬼灯のナチュラルな精神攻撃に、キレかかっていた獄卒たちもクルダウン……というか、改めて無惨を「アホだな、こいつ」と呆れかえってしまったが、やっぱり鬼灯は一人マイペースにこのカオスな空気の中で物事をさっさと進める。

「はい、それでは黒縄地獄に移動しますよ。今日はとりあえず二つの地獄を巡りますから、忙しいですね」

「おい待て化け物!! そもそも、そもそもだ! 私が阿鼻地獄という時点で不当で不満しかない判決だが、一度刑が決まっているのに、何故私は別の地獄の刑を受けなければならん!!」

手を叩いて獄卒達スタッフに移動を指示すると、狛治に対して逆ギレを喚いていた無惨がまた、どの口がそこまで自分を正当化出来るのか、いっそ凄いわお前と思わせることを言い出す。

しかし当然鬼灯は、「何言ってるんだこいつ?」程度にしか思っていない表情で即答。

「あなた、八大だけじゃなくて各地獄の小地獄の罪状もフルコンプしていますから大丈夫ですよ」

「してる訳ないだろ!!」

前半の阿鼻地獄逝きに対する不満はともかく、実は後半の抗議に関しては普通に無惨の方が正論なのだが、鬼灯はナチュラルにゴリ押しした。

実際、「いや、これはさすがに無惨もしてないよ」という罪状で墮ちる小地獄はそこそこあるのだが、他の獄卒たちは曖昧に笑うだけで否

定せず、機材と喚く無惨を抱えて予定通り黒縄地獄に向かつて行った。

* * *

・黒縄地獄の十六小地獄

「はい、まず最初の地獄は黒縄地獄の『等喚受苦処』とうかんじゅくしよです。

黒縄地獄がそもそも窃盗に関する地獄であり、この小地獄が対象とする罪は生前に間違った法を説いた者、崖から投身自殺した者です」「初っ端から私は関係ないだろ、この地獄!!」

一般公開できる地獄が三つしかないので、等活と順序を逆にしてまず最初に訪れた地獄の内容を説明していたら、さっそく無惨が突っ込んだ。

「関係ないのは、投身自殺した部分だけでしょ。

色々ありますがとりあえず下弦を解体した時の『私は間違えない』が思いっきり、『間違った法を説いた者』にあたりますよ」

「あいつらが弱くて無能なくせに、向上心も忠誠心もない、その場しのぎの為にできもしない事しか言わないのが悪いのだろうが!! 私は間違ってるない!!」

「……ブラック中のブラック企業思考ですが、気持ちだけはわかるのが辛い」

無惨の「お前は何を言ってるんだ?」としか思えない発言に、呆れかえって鬼灯が言い返せば、無惨は悪びれずに下弦に全責任を転嫁してまた自分を正当化。

そしてその発言を肯定こそはしないが、部下に対する不満に関しては鬼灯が同意したので、他の獄卒たちは怯えて気を引きしめて背筋を伸ばす。

これ以上無惨に何かを言わせたら無惨のように私情による理不尽はないが、厳しさは同じくらいの鬼灯が「そこだけは同感だから見習おう」とぶっ飛んだ感心しかねないので、獄卒たちは慌てて等喚受苦処の刑罰である、燃える黒縄で無惨を縛り付け、計り知れない程高

崖の上から鉄刀が突き出す熱した地面に突き落とす準備を始める。

「おい！ やめろ！ 離せ化け物共!!」

おい！ その一本角!! せめてこれだけは答えろ!!」
「何ですか?」

暴れてもがいて抵抗するが、死して人間に戻った無惨は普通どころか病弱ひ弱な体の為、獄卒たちにあつきり燃える黒縄に捕縛されるが、それでも熱さと痛みに呻き、喚きながらも鬼灯に対して尋ねた。

「……黒縄は窃盗の地獄のはずなのに、ここに堕ちる罪状に窃盗が無関係なのは何でだ?」

「……さあ? 前の補佐官イザナミさんが眠くてミスったまま、設立しちやっただじゃないでしょうか?」

何故かすこぶるどうでもいいが、確かに謎な部分を割と素で不思議そうに尋ねる無惨に、鬼灯もこれまた素で答えつつ、崖から突き落した。

* * *

「お次は『梅毒処』せんだしよ」。

対象は病人が用いるべき薬品、麻薬の類を病人でもないのに用いた中毒患者。刑罰は烏、鷲、猪などが罪人の眼球や舌をつついて抜き出し、獄卒たちが杵や大斧で罪人を打ち据えます」

「だから! 私は無関係ないだろその罪状!! むしろ私は訳のわからん薬を投与された被害者だろうが!!」

またしても無惨が突っ込むが、今度はものすごく、とてつもなく、心の底から癩だが、真正銘無惨の方が正しい。

無惨は癩癩起こして医者の頭を鉈でカチ割った阿呆だが、まさか自分を一度鬼という人外に変質させることで病を癒してから人間に戻すなんて治療法をされているとは、阿呆とか頭いいとか関係なく想像できる訳がない。

っていうか、無惨ほど頭無惨な癩癩もちの患者じゃなくても自分が人外に変貌させられていると知れば、後で人間に戻すと言われてもパニックを起こして医者を殺してしまっても無理はない。

……医者は善良だったかもしれないが、どう考えても無惨より頭が

おかしい。

そんな事は鬼灯だつて百も承知。

むしろ百も承知だからこそ、鬼灯はガチギレしながら言い返す。

「その通りですよ！あの医者をごくに墮としておけば、少なくともさつさと転生させておかなければ、お前をもつと早くにどうにか出来たのにも思つて後悔しつぱなしですよ!!」

けれど、想像つくか！妖術も神通力も無関係、ただ純粹な技術で人間を鬼に変貌させる薬を作り出して、しかも純粹な善意で治療の一環で使う医者があるなんて!! 何だあの、医術界の縁吉さんは?!?!」

叫びつつ、完全な八つ当たりで鬼灯は自分の身体よりでかい杵で無惨をプチつと潰した。

これにはさすがに獄卒たちも無惨にちよつとだけ、ミトコンドリア程度に同情しつつ、それ以上に鬼灯に同情した。

鬼灯の言う通り、予測できるか。そんな医者。

* * *

「公開できる黒縄地獄で最後の地獄は『畏熟処』。もしくは『畏驚処』。

対象は貪欲のために人を殺し、飲食物を奪つて飢え渴かせた者」

「私は……」

「飲食物奪つたはまだしも、貪欲の為の殺生はしただろ。むしろ、お前の1000年は全部それだろ。さすがにそこは自覚しろ」

懲りずに自分はそんな罪を犯していないと主張しようとした無惨に、金棒で頭を叩き潰して鬼灯はデフォルトの敬語を捨てて突っ込んだ。

そして無惨が空つぽの頭を再生している間に、鬼灯は畏熟処の刑罰内容をカメラに向かって説明する。

「この刑罰は鉄の棘が生えた地面を杖、火炎の鉄刀、弓矢などを持った獄卒に追い回され、休む間もなくいつまでも走らされます。そして転倒すると金棒で何度も殴られ、水をかけられることですが……前かから思っていたんですが、この刑罰はどうも地獄の中では甘い方ですね。

なので、試験的に罪人を追いかけ回す獄卒にこちらを使つてみま

す。お願いします。特別ゲスト、五道転輪王の補佐官、エンジェル朱色のモデルでもあるチュンさん」

「あいなー」

お団子頭にチャイナっぽい服装、可愛らしさと妖艶さが共存した美少女が鬼灯に呼ばれて登場。

そして彼女は紙に何やら、サラサラと描く。

「くっ……。暴力に訴えるしか能がない、低俗な化け物め」

潰された頭を再生させて、見事に発言のブーメランが刺さることを言い出す無惨が起き上がる。

そして、ずももももつと自分の背後でえらく不穏な音がしている事に気付いて振り返ると……

「!??! 何だこれは!?! ムカデ? ね……猫? いや絶対に違う!! と

にかく何なんだこれは!?!」

「……何なんでしょうね?」

チュンがエンジェルクロツキーのモデルとなった、正式名称はしらがそこそよく見る描いたものが実体化する技で具現化した、山ほどある巨大ムカデっぽい何かに白澤のオリキャラ猫好好マオハオハオの顔がくつついたキメラを目の当たりにしてた無惨は取り乱し、鬼灯も遠い目で彼の疑問に同意。

なにげに、即行で否定したが猫好好が猫だと気付けた無惨は凄いかもしれない。

しかしもちろんそんなどうでもいい凄さに無惨は気付ける余裕などある訳もなく、病弱ひ弱な体でそれでも鬼灯や縁壺から逃げ続けた生き汚さを発揮して、ダッシュで逃げた。

「……他の亡者には効果的かもしれないかもしれませんが、無惨には普通の刑罰の方が良さそうですね。体が大きすぎて、逃げるのが上手い奴相手では、あのムカデは不利なようです」

逃げ惑う無惨を見ながらそんな結論を鬼灯はメモをとり、仕方がないので転倒した時の刑を水ではなく熱した銅か屎泥処の汚物にするように指示を出した。

・等活地獄の十六小地獄

「それでは等活地獄に移りまして、こちらも全ては公開できないので紹介できる地獄は七つ。

まず最初は、『屎泥処』^{しでいしよ}。

対象は鳥や鹿を殺した者で、刑罰は沸騰した銅と糞尿が沼のようにたまっている中で苦い屎を食わされ、金剛の嘴を持つ虫に体を食い破られます」

「だから！　ないわ!!　病弱だったから狩りをしたことがなく、鬼になつてからは昼間は出歩けないのだから、ないと言い切れるわ!!

というか、なんだこのピンポイントすぎる罪状は!？」

地獄を黒縄から等活に移つて最初の小地獄で、相変わらず無惨が元氣よく突つ込む。そして今度もまた、無惨の方が正論だったりする。「ええ。だからこの地獄は改定されて、特に小さくてか弱いものをいじめ殺した者が墮ちることになりました。

……つまり、あなたが虫けらだと見下していた人間、鬼殺隊の方々を殺した罪ですよ」

だが当然、その辺の突つ込みなどこの合理主義がしていない訳がなく、とつくの昔に改定済みで無惨が逃げられない罪状が対象になっている。

なので躊躇なく、鬼灯は屎泥に満ちた沼に無惨を蹴り落とす。

「虫けらなどいちいち殺したことに気付けるかーっ!!」

「……相手を見下していたことを否定しないまま、責任転嫁するのは本当に流石ですね」

落下しながら、鬼灯の言う通り、本心から見下していたことを口先だけでも否定せずに責任転嫁で「自分は悪くない」と叫ぶ無惨に、鬼灯は全く敬意を懐いていない感心を口にした。

「お次は『刀輪処』^{とうりんしよ}。

対象は刀を使って殺生をした者。約70キロ四方の面積が鉄の壁

に囲まれており、地上からは猛火、天井から熱鉄の雨が亡者を襲います。また、樹木から刀の生えた刀林処があり、両刃の剣が雨のように降り注ぎます」

「私は自分の手で殺してきたから、刃物など使った事がない」

「一番最初に医者頭の頭を鉋で力チ割っただろうが」

真顔で言い切った無惨に、こちらも真顔で鬼灯が鉋で無惨の頭を力チ割った。

* * *

「こちらは、『瓮熟処』。

……刑罰は獄卒が罪人を鉄の瓮かめに入れて煮ます」

「おい待て。対象の罪状を何故言わん？」

いくつもの瓮が並ぶ地獄で鬼灯は説明するが、無惨の突っ込み通り、何故かこの地獄の対象である罪状は言わない。

「この地獄も生ぬるいですよね。『鉄てつ処じょ』のように、瓮の中身を変えましょうか。」

屎泥処が近いので汚物が良いでしょうか。けど、それだとまんま屎泥処と刑罰が被りますし……難しい所ですね」

「話を聞け！ こっちを見ろ!! ここに堕ちる罪状は何だ!？」

何かを誤魔化すようにここでの刑罰内容の改定案を思案しだす鬼灯に、無惨はキレた。これは無惨も悪くない。

なので鬼灯も諦めて答える。

「……対象は動物達を殺して食べた者です」

「人間全員が対象になるわ!!」

ド正論の突っ込みが入った。これには獄卒も苦笑い。

「だから今では逆に、食べる為でもなければ生活の為でもない、己の楽しみみの為に殺した者が対象です」

「最初からそう言え!! そして私はやっぱりこの地獄に堕ちるのは不当だろ!! 何だ!? 竈門 炭治郎の家族を残さず全部食べていれば無罪だったとでも言うのか!？」

「んな訳あるか」

そしてやはりこれも現代どころか肉食文化が広まった明治時代か

ら無茶苦茶理不尽なので、とつくの昔に改定されていたが、その改定内容にも無惨が噛みつき、鬼灯は端的に否定してボコボコと沸騰した灼熱の湯の中に無惨を叩き墜とした。

これに関しては、もはや無惨と鬼灯どっちが理不尽なのがわからなくなつて獄卒たちは頭を抱える。

正解は、どっちも理不尽だ。

* * *

『多苦処』。

対象は人を縄で縛つたり、杖で打つたり、断崖絶壁から突き落としたり、子供を恐れさせたりと……、ようは人々に大きな苦痛を与えた者。

その名の通り多い苦しみ、十千億種類の苦しみが用意されており、生前の悪行に応じた形で苦しめます」

「私は杖で打ちも、断崖絶壁から突き落したりも、子供を恐れさせたりもしていない。むしろ、子供には頭の悪いクソガキにも優しくしてやった」

「だから、それは例えでようは大きな苦痛を与えた者だつて言つてんでしようが」

またしても真顔で、自分はこの地獄に堕ちる罪状はないと言い切る無惨に、鬼灯も真顔だが面倒くさそうに言い返して、生前の悪行に相応しい「テイラノザウルスに食べられる」刑を執行した。

* * *

「ここは、『闇冥処』。

対象は羊や亀を殺した者」

「だから!! 関係ないわ私は!! またしてもピンポイントだな!!」

最初の屎泥処並みにピンポイントな罪状に、もう一度無惨は突っ込んだ。

そして鬼灯も、「……何でこの地獄を作つたんでしたっけ?」と首を傾げている。

「まあ、あなたにとつちや羊も亀も人間も同等でしょう。とつとと逝け。刑罰は、その名の通り真つ暗闇の中で、闇火や熱風あんかに晒されるこ

とです」

「お前、ただ単に私を甚振りただけだろ!! せめて建前を用意しろ!!」

「当たり前だ。というか、もうそろそろ面倒くさい」

しかしもはや、罪状を改定してこじつけて無惨が堕ちるべき地獄という建前を作るのも鬼灯は放棄して、本音をぶちまけて無惨を闇冥処に投げ入れた。

これには流石に、無惨の方に同情した獄卒多数。

しかし暗闇の中でもひたすら鬼灯を罵り続ける元気な無惨の声で、「やっぱり同情しなくていいや」と秒でその同情は消え去った。

* * *

『不喜処』。

対象は法螺貝を吹くなど、大きな音を立てて驚かせたうえで、鳥獣を殺害した者。昼夜を問わず火炎が燃え盛り、熱炎の嘴の鳥、犬、狐に肉や骨の髄まで食われます」

「法螺貝など吹いたことないわ!!」

だんだん恒例となってきた意外と無惨の方が正しい突っ込みだが、もちろん鬼灯は揺るがない。真顔で言い放つ。

「大ボラはいつも吹いてるでしょうが」

「ないわ!!」

「マジでか」

「意味が違うわ!!」みたいな突っ込みを予測していたら、これまた真顔即答で「ない」と言い切られ、これには鬼灯も驚愕する。無表情で。

そしてこれまた無惨も真顔で言い切る。

「私は生まれてこの方、一度も嘘などついてない」

「人間社会の人脈や社会的立場を利用するためにしたことは何だ？」

真顔で半天狗ばりに自分の所業をすつかりキレイさっぱり忘れて言い切る無惨に、これまた皮肉ではなく真剣に疑問として鬼灯は問いながら、不喜処の動物たちにGOサインを出した。

「……狛治さんの言う通りですね。もはや腹が立つとか憎いとか以前に、頭の中が理解出来なさ過ぎて『変な生き物』としか思えない」

ボリボリと動物たちに貪り食われる無惨を眺めながら、鬼灯はしみじみと奴の元部下、自分の現部下が以前言い放った感想に同意する。

* * *

「はい、それでは本日最後の小地獄は『極苦処』ごくくしよ」

ここでの刑罰は、あらゆる場所で常に鉄火に焼かれ、獄卒に生き返らされて断崖絶壁に突き落とされることです」

瓮熟処と同じく、墮ちる対象の罪状を語らずに刑罰を先に語るが、今回は無惨に語りたくなかったからではなく、断崖絶壁に立たされている無惨から距離を取りながら、鬼灯は対象を語る。

「この対象は、生前にちよつとした事で腹を立ててすぐに怒り、暴れ回り、物を壊し、勝手気ままに殺生をした者。」

……つまり、まさしくお前の為の地獄だ頭無惨ーっ!!」

「貴様も対象になるだろうがーっ!! この、パワハラ闇鬼神!!」

鬼灯が順番を前後して最後に回した「オチに相応しい」と語った訳である罪状を叫びながら、十分にとった距離で助走をつけて無惨に全力のドロップキックを決めて断崖絶壁から突き落すが、胴体が真つ二つになりそんなドロップキックを決められながらも無惨は鬼灯を罵って墜ちていった。

本当に、歪みなさ過ぎて尊敬しないけど凄すぎない？ さすがは頭無惨様。

「……さて、本日の地獄めぐりはこれにて終了」

無惨を突き落として少しすっきりした様子で鬼灯はカメラに向き直り、今回の動画のまとめと次回予告を口にする。

「今回は衆合地獄の小地獄めぐりを予定しております。」

性犯罪に関係する地獄なので、刑罰も下に関係するものが多いです。いったい無惨の無惨が何本すっぽ抜かれるかが楽しみですね」

「鬼灯様！ この動画、全年齢!! その発言はヤバい！ ピー音がいる!!」

鬼灯のセクハラ……？ 発言に獄卒スタツツが突っ込みを入れて待ったをかける。っていうか、これが全年齢ってマジか。

そして突っ込まれた鬼灯は困ったように顔をしかめて呟く。

「そういえばそうでしたね。ということは、次回は年齢規制と放送倫理規制などというコンプラとの戦いになりそうですね」

「どうやら、衆合地獄めぐりを取りやめにする気も、年齢制限を掛ける気も皆無のようだ。」

「ピー音とモザイクで何やってるかわからない動画にならないことを祈る。」

「あいつ、アホにはペイズリー柄の印象しか残せないのか」

「唐瓜さん、茄子さん。次の休みに予定がなければ、受けて欲しい講習があるのですが」

就業直後に鬼灯から言われて言葉に対して、茄子はもちろん、優等生な唐瓜もちよつといやそうな顔を隠しきれなかった。

休日に予定がないから講習なんて、そりゃ普通は嫌だ。

そんなことはわかり切っているので、鬼灯は唐瓜や素直すぎていっそ言葉にしろよな顔をしている茄子を咎めず、話を続ける。

「もちろん、嫌なら断ってください。受けなかったからといって、査定に影響は当然ありません。」

ただ、正確に言う講習の前準備という段階なので、優等生代表と勉強嫌い代表が参加してくださいれば、こちらは大変助かります」

その発言に結構失礼なことを言われたが、その通りなのでまったく気にしていない茄子の方がむしろ「講習」に興味を持った。

「鬼灯様。一体何の講習を始める気ですか？」

「鬼舞辻 無惨と鬼殺隊の歴史についてです」

茄子の問いに、鬼灯は即答。

そしてその答えで、つい数秒前とは打って変わって茄子は目をキラキラ輝かせ、ぴよんぴよん跳ねながら更に尋ね返す。

「え!? 無惨とか鬼殺隊の話が聞けるの!? もしかして、鬼殺隊の柱にも会える!?!」

「はい。とりあえずしのぶさんと、柱どころか鬼殺隊でもありませんが狛治さんは確定です。あと、呼べる人は一応呼んでおきましたけど……確実に来れそうなのは二人くらいですね」

鬼灯に対して敬語も忘れてはしゃいで尋ねる茄子に、唐瓜は叱りつけつつ彼も鬼灯の肯定に、少年のような楽しみが隠し切れずに目が輝きだす。

どうやらつい先日の倉庫整理が発端で、学校の授業では習わなかつ

た歴史の裏話や当事者からの話が、未だに彼らの好奇心を刺激し続けていたようだ。

なので唐瓜も「行きます行きます!!」とはしゃいだ返答を内心でするのだが、流石に彼は見た目は小学生くらいだが中身は立派な社会人なので、自分の内心をそのまま表す幼馴染を押しえつつ、根本的な疑問をまずは一応、訊いてみた。

「それは楽しみだからいいんですけど、でも何でそんな講習……の前準備を？」

「……先日、あなた方に無惨や鬼殺隊の事を話して痛感したんですよ。たった100年ほど前でも、今時のお若い獄卒達ひとにとってあれは過去に起こった出来事ではなく、テストの答え程度のものなんだと」

唐瓜の質問に、鬼灯はやや遠い目をして答えた。

テストで珍回答連発常連だった茄子はともかく、子供のころから優等生だった唐瓜ですら鬼殺隊の事も無惨の事もよく知らなかったのが、どうやら相当鬼灯にとってはショックな出来事だったらしい。

鬼灯に言われて、唐瓜は無邪気にはしゃいだ自分に反省する。

鬼である自分たちにとって100年前は人間という数年前、鬼灯のような神代の頃から存在している古参にとっては数か月前レベルと言ってもいいのに、それなのにもう既に風化しかかった過去の出来事としか思われていない事が嘆かわしかったのだろう。

自分も100年前なら既に生まれているので、あまりに無関心だったことに唐瓜は反省していた。

鬼灯が無惨の犯した悪行も、奴の所為で起こった悲劇の数々も全て忘れられて風化していくことにショックを受けている、嘆かわしいと思っていたからこそその反省なのだが……。

ショックだったのも嘆かわしいと思っっているのも事実だ。けれど、その理由はそんな繊細やよで慈しいものである訳ないだろ、このDS補佐官が。

「……風化させる訳にはいかないんですよ。あれは……無惨関係の面倒事は全部、『まさかここまでとは……』の連続だったのですから。

あそこまで医者が縁吉さんだとは思わなかったし、無惨もあそこま

で阿呆だとも思いませんでしたよ！

けれど、予測は出来なくとも念には念を入れて、どんなに『……まさかな』『さすがにここまで……』と思つて可能性を排除せず、『かもしれない行動』を徹底的に取つておけば被害や負担は最小限に抑えられたのかもしれないのです！

無惨の事なんか風化して吹き飛んでもいいですけど、現実には小説よりも奇なり、想定外の出来事なんかゴロゴロその辺に転がっている事だけは、想定のはるか彼方にぶつ飛んだことしかやらかさなかった実例を、茄子さんのような阿呆でも把握しているレベルで周知させなければならぬのです!!」

鬼灯にとつてショックだったのも嘆かわしかったのも、そして無惨や鬼殺隊に関する講習を行うのも、全部は無惨のやらかした数々による面倒すぎる仕事かどうもトラウマっぽくなっているからのようだ。

後になってから「ここでこうしていれば……」なんて後悔は、生きている限り尽きないものだが、無惨関係の数々は本当に当時では予測できる訳もないことの連発だからこそ、「特殊すぎて応用が利かないけど、目の当たりにした時にパニックにならずに済む前例が出来たぞ、喜べ」なものという認識なのだろう。そう思わないと本当にやっていけなかったほど、当時は大変だったらしい。

だが、その前例が忘れ去られては意味はない。

だからこそ、現在の地獄の義務教育にも取り入れる為、獄卒の研修として学ばせる為にまずは一般的にどの程度の認知度なのか、そしてどのような教えたら茄子のようなタイプも学んでくれるのかを知りたいからこそ、鬼灯はこの小鬼二人に声を掛けたことが、鬼灯の怒涛の愚痴と決心でようやく判明する。

「……お、お疲れ様です」

「……俺、柱とか無惨の残念エピソード目当てじゃなくて、頑張つてちゃんと講習受けます」

声かけの動機を理解して、唐瓜はひとまず上司を労わり、ミーハーな動機で参加を決めていた茄子が真面目に受けると宣言する。茄子が怯えてではなく、心から真面目に勉強すると発言するほど、当時の

苦勞を語る鬼灯には迫力と同時に悲壯感があった。

しかし時々瞬間沸騰のようなテンションになるが、同時に瞬間的にすぐに冷める鬼灯は、決心を宣言したらいつもの素に戻って言い切った。

「無惨の話に関しては残念エピソードしかないので、たぶん頑張らなくても大丈夫ですよ」

そう言いきられるラスボスが1000年も討伐されなかったのだから、本当に無惨に関することは想定外の連続だったことを小鬼二人は思い知った。

* * *

「聴講生が豪華!!」

数日後の休日、指定されていた時間の10分ほど前に閻魔庁の会議室の一つに唐瓜が入室した瞬間、まず突っ込んだ。

「おはよう、唐瓜さん、茄子さん」とあいさつしているシロを初めとした桃太郎ブラザーズは、3匹に悪いが豪華の内には入らない。

この3匹に関しては、鬼灯が「他に受けてくれそうな方がいたら誘ってみてくれませんか?」と頼まれて一応程度で誘ったので、そもそもいる事を予想していたからだ。

そして彼らが来ているのなら、彼らの主である桃太郎が来ているのも別に不思議ではない。

予想外だが、桃太郎が来ているのならまだ納得できるのが、白澤だ。鬼灯と犬猿の仲だが、どうしてかこの二人は嫌いだから徹底的に相手と会うことを避けるということはしない、むしろ自ら喧嘩を売りに行くことも珍しくないのです、何かしらの興味……おそらくは驚異的な可愛い女の子センサーが働いて来たのだらうと、唐瓜は勝手に納得する。

だから唐瓜が「豪華!!」と断じたのは、正確に言えば二人に対してだ。

「わあ~~~~! マキミキだー!! サインくださーい!」

唐瓜の後ろからひよっこり顔を出して、茄子が無邪気にはしゃいでそのたった二人で「豪華」と言い切られた女性たちに走り寄る。が、慌てて唐瓜に「失礼だろ!!」と首根っこを掴まれた。

そしてその「豪華」と称されたアイドルユニット「マキミキ」である鬼女のマキと野干のミキは、「……何故、私たちはここにいるのだろう?」と言いたげな困惑の苦笑をしつつも、恥ずかしげに顔を赤くして俯いている狛治と、同じような反応をしているモヒカンっぽい髪型の少年に書いたサインを渡していた。

後で鬼灯に「よくアイドルなんて呼べましたね?」と唐瓜が訊けば、一般人というか獄卒以外の地獄の住人の周知度を知りたかった為、ダメ元で誘ってみたらどうやら鬼殺隊を基にしたドラマ企画があるらしく、そのキャラ作りに良いかもとマネージャーが判断して送り込まれたらしい。

「あ、ありがとうございます!」

「狛治って、アイドルとか知ってたんだ」

「いえ、どう考えても奥さんがファンだからもらっているんでしょう。この人が奥さん以外の女性にうつつを抜かすなんて、想像できませんよ」

「お、俺だつて兄弟がファンだから……」

「え? 実弥さねみ、マキミキのファンなの?」

「意地張りました、ごめん! 兄弟がつてのは本当だけど、俺もファンです! 兄ちゃんは無関係ない!!」

「というか……何故下の兄弟ではなく実弥が先に出た?」

マキミキからサインを受け取って礼を伝える狛治を眺めながら、唐瓜や茄子が知らない亡者が口々好き勝手に話している。

和気藹々としたやり取りなので狛治の友人たちなのだろうと、少し前の二人ならそう思えた。茄子なら、「狛治さん、その人たち誰?」と無邪気に近づいて尋ねているはずだ。

しかし、つい最近知った狛治の生前のあれやこれやと、そしてニヤニヤしながら白澤が呟いた「しのぶちゃんが参加するって聞いたから僕も来たけど、マキちゃんとミキちゃんもいるなんてラッキー」とい

う発言……、狛治の愛妻家っぷりを微笑ましそうに語っていた女性が「しのぶ」であることを理解したことで、二人はその場で固まる。

「お二人とも、どうしたんですか？ 早く入って席について……」
「うわっ!? 何で泣いてるんだお前達は!？」

講習開始時間の数分前となったので鬼灯がやってきて、何故か会議室入り口から動かない小鬼二人に入るよう促すが、彼らの様子に気付いてさすがの鬼灯もちよっと困惑して言葉を失う。

そしてそのやり取りに気付いて振り返った狛治が、涙をだらだら流している後輩たちにも気づいて、彼は引きつつも自分の手ぬぐいを渡してやる。

「……良かった。狛治さん……鬼殺隊の人たちとちゃんと和解してて良かった……」

狛治の手ぬぐいは断って自分のハンカチで涙を拭きながら唐瓜は思わず感涙した理由を語り、狛治の過去を知らないマキミキと動物組以外の表情が、ドン引きから納得の苦笑に変化する。

「なんか……心配させて悪かった……」

「後輩に慕われてますね、狛治さん」

「まあ、ちゃんと罪は償ってるし、100年も経ってるんだからそりやもう憎んでないよ。煉獄さんのおかげってのもあるけど」

「いやあれはおかげというか……所為というか……」

「というか、煉獄さんは来ないの？」

狛治は困惑したまま安堵の号泣する後輩たちに謝罪すれば、しのぶはおかし気にクスクス笑う。

そして14, 5歳と思える中性的な少年は独り言のように自分たちが狛治に敵愾心を懐いていない訳を語れば、モヒカンの少年が控えめツツコミを入れる。しかし中性的な方の少年はマイペースなのか、モヒカンの突っ込みを気にせず自分の訊きたいことを鬼灯に尋ねている。

誰がどう見ても、狛治だけ元敵だと思えないなじみっぷりである。

「平日の昼間に教師が来れる訳ないでしょう。そしてお二人は早く席につきなさい。」

あと、茄子さん。それをせめて洗濯してから返却しなさい。狛治さんも、受け取らずに叱りなさい」

鬼灯は少年の質問を端的に答えて切り上げ、小鬼たちに着席を促す。

ついでに、自分の手ぬぐいで躊躇なく鼻をかまれて困っていた狛治の代わりに、茄子に注意するいい上司だ。ただ、鬼灯以外と面識がほとんどないマキミキにそれぞれを紹介する時、白澤だけ白豚と紹介して大人げ皆無なのに被害は甚大な喧嘩が勃発しかけたが、まあそれはいつもの事。

「で、皆さんが一番気にしているであろうメンバーですが、こちらの女性が胡蝶こちょう　しのぶさん。無惨討伐時、鬼殺隊の蟲柱であり、現在は地獄の技術課で毒物研究をしています。

こちらの小柄な少年が時透ときとう　無一郎さん。同じく無惨討伐時の霞柱。入隊から2ヶ月で柱に上り詰めた天才剣士です。そしてこちらが、不死川しなずがわ　玄弥げんやさん。柱ではありませんが、鬼を食うことで一時的に鬼になれる特異体質で、その体質を生かして十二鬼月上弦の壱討伐時のMVP。このお二人は、お盆前などの繁盛期に人手が足りない現場での拷問などの短期アルバイトとしてたまに来てくれます。

最後が、狛治さん。この人だけ鬼殺隊ではなく彼らの敵、十二鬼月上弦の参でその頃の名前は猗窩座です」

天国組と地獄組を紹介し、最後に聴講生というより講師役として呼ばれたメンバーを紹介し、今更ながらマキミキ、そしてシロたちはその関係性に驚愕し、唐瓜たちの反応に納得した。

「あく……、言ってる感じからして元敵なのはわかってたけど、そこまでの立場の人だったのかニヤ〜ン……」

「つていうか、十二鬼月つて名前も上弦の何とかがつてのもカツコイイ……」

一般人枠の優等生代表のミキと、残念代表のマキがそれぞれどうして自分はそちら側代表なのかがよくわかる反応をし合っていると、シロが元気に無邪気に挙手して質問して来た。

「ねーねー、どうして昔の名前は『アカザ』つていうの？　今の名前と

全然違うよね？ 昔は狛治さん、赤鬼だったの？」

「あ、それは俺も気になった。何か意味あるんすか？」

動物界の残念代表の質問に、シロほどではないがどちらかというところ残念よりの柿助が追い打ちをかける。

優等生枠のルリオもさすがに人間の文字、特に漢字は詳しくないと、そもそも鬼灯は口で言った為に「アカザ」という名前に漢字を当てはめることが出来なかった為、二匹を止めることは出来なかった。

結果、動物組と同じく「アカザ」の漢字を把握していないマキミキと桃太郎以外全員の空気が一気に重くなった。

「え!? 何この空気!? お通夜? お通夜なの!？」

「地獄というかあの世でお通夜や葬式はありませんよ」

困惑するシロに鬼灯は淡々と突っ込む。そして自分が答えるべきかどうか迷っていたら、狛治が自ら答えてくれた。

「……俺は鬼になってすぐに人間だった記憶を失ったから、無惨様がその名前を付けたんだよ。」

意味は……『猗』は去勢された犬で、『窩』は空っぽの穴、『座』はそのまま座ってるだから、通して俺の本名で意識すると『役立たずの狛犬』ってところだ」

死んだ虚ろな目で狛治の語った蔑称にしても酷すぎる由来の名前に、今度こそ会議室全体の空気が鉛のように重くなった。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!」

「すみませんすみませんすみませんでしたー!!」

「ごいつら止めなくてすみません!! 本当にごめんなさい!!」

「うちの馬鹿犬とアホ猿が本当にすみません!!」

重すぎる沈黙の空気の中、尋ねた当人たちだけではなく桃太郎一味一丸となつて勢いよく土下座で語らせたことを謝った。実は「アカザ」って名前も何かカッコイイな」と思っていた脳が個性的なアイドル、ピーチ・マキもとつきに土下座しかかった。

狛治はもちろん、相手に悪気が一切なかったことはわかりきっている。「気にするな」と言つて快く許す。が、目の光は戻ってこない。「そ、そういえば姉さんがいないってことは、姉さんは店番なんですか

桃太郎さん？」

このままだと重すぎる空気の中、それを一切気にしない鬼灯が講習を始めかねないので、なんとか空気を入れ替えようとしのぶがひきつった笑みのまま桃太郎に全然別の話を振った。

「え？ あ、はい。カナエさんも行きたがってましたけど、俺も白澤様も行きたいと言ったら店番を買って出てくれました」

「真面目だよなー、カナエちゃんは。一日くらい休んじやってもいいのに」

「あんたがそんな風にしょっちゅう、酔いつぶれたり遊郭から帰ってこなかったりで休むからカナエさんが気にすんだよ！ あんたはもう少し気にしろ!! 休むな!! 今からでも帰ってカナエさんと交代してこい!!」

しのぶの問いに桃太郎はまだ狛治を気にしながらも答えるが、ただ女の子目当てでやって来た上司がヘラヘラして言うので、もう狛治や胡蝶姉妹に対しての申し訳なさも吹っ飛んで、上司に対して割と遠慮なしに叱りつける。

御伽草子の英雄と神獣のやり取りに呆れてるんだか引いてるんだかな顔をしつつも、しのぶの意図を汲んで玄弥も同じような話を無一郎に振る。

「と、時透さんのお兄さんは来なかったんすか？ 鬼灯さんの意図じゃ、ある意味お兄さんの話も貴重なんじゃないんすか？」

「兄さんは『嫌なことをわざわざ思い出しに行きたくない』って言ってたよ。けど、たぶん鬼灯に会いたくなかっただけだと思う。兄さん、自分が死んだ時に生き返らせる、現世に戻せさせてごねて、鬼灯にしめられたらしいから」

年下だが元は上司に当たる柱なものと、上弦の肆の時も上弦の壺の時も世話になったからか、未だにやや雑とはいえ敬語で尋ねる玄弥とは対照的に、鬼灯すら呼び捨てにした無一郎はぼんやりとした調子で双子の兄、有一郎のたぶん語られなくなかったであろう過去とトラウマを自然体で暴露。

その暴露に玄弥はどういった反応を返せばいいのか困惑している

「はい、それでは雑談はさすがにここまでにして、さっそく無惨のやらかしとその被害者たちによる想定外すぎる歴史と私たち獄卒の修羅場を語っていききたいと思います」

『大変ぐ迷惑をおかけして、申し訳ありません!!』

鬼灯がホワイトボード前に立ってそう宣言すると同時に、元鬼殺隊と粕治が座ったまま深々と頭を下げた。

獄卒として働いている彼らだからこそ、「元凶は無惨だし」という責任転嫁は出来ないようだ。粕治は全く別の意味合いだが、鬼殺隊は自分達の「無惨絶対に許さないぶつ殺す」精神が何も悪くないお迎え課に迷惑かけまくったことや、お館様の隊士にバフかける為の産屋敷ボンバーを、今更だが本当に申し訳なく思っているのはしのぶや玄弥だけではなくマイペースすぎる無一郎まで謝っている事からよくわかる。

「こちらこそ、何かと未だに気を遣わせてすみません。

それでは、まず最初にマキさん。あなたは鬼舞辻 無惨についてどの程度知っていますか？」

別に嫌味の意図はなかったらしく、鬼灯も謝罪で返してからいきなりマキを指名してどの程度の知識があるのかを確かめる。

だが、マキも自分の脳がだいぶ个性的であることを自覚してそれを売りにしているとはいえ、完全に開き直っている訳ではない。むしろそのキャラを脱却したいと思っているからこそ、少しばかりは努力している。

そう、彼女だつてミキと同じくちよつとばかりは予習して来たのだ！

だからマキは自信満々に手を上げてとてもいい返事をしながら立ち上がった、堂々と答えた。

「はい！ すつぐいいイケメンでペイズリー柄が似合う人です!!」

「あいつ、アホにはペイズリー柄の印象しか残せないのか」

マキの脳の個性を単刀直入に言い放って、鬼灯はもはや感心したような感想を呟く。

一応、「無惨」が誰のことを指しているのかがすぐにわかっただけで

も予習の成果は出ているだろう。そう思っておいてあげて。

さすがの白澤もややひきつった笑みになる答えを言い放ったマキを着席させて、今度はミキを指名して同じことを問うと、ミキは安定の優等生ぶりを発揮して答えてくれた。

「はいだニャ〜ン。」

えーと、私が学校で習ったのは現世で元人間が鬼になって、そのまま自分と同じ鬼を増やし続けて、大正時代に人間の手で討伐された悪鬼だっただけのことくらいですニャ〜ン。

あと、今日の講習の為に予習して知ったのは、無惨は自分を倒した鬼殺隊の当主である産屋敷家の先祖にあたることと、体内に7つの心臓と5つの脳を持っていたことですニャ〜ン」

「素晴らしい。特に心臓と脳の数まで知っている方は、当時を知る獄卒の中でも珍しいですよ」

ミキの答えに鬼灯は拍手して褒めたたえる。

そして体内の心臓や脳の数に動物組は「すごいな、そいつ」「タコかな?」「再生するらしいし、タコっぽいよね!」と驚嘆しているのかわかっているのか、彼らの主は非常に遠い目をして呟いた。

「……脳が5つあんのに、あんななのか」

『あんななんだったんだよ・です』

桃太郎の呟きに、白澤と鬼灯、鬼殺隊組に粕治が真顔で深々頷いて更に念押しする。

どうやら桃太郎は、白澤やカナエから多少は無惨に関してのエピソードを知っていたようだ。

「あんなんって……」

「一体、どんななんだったんですか?」

「端的に言えば、『残念な脳が5つあっても5倍残念なだけ』だと思ってる感じですよ」

「俺的には烏頭さんが言った『直列思考』がわかりやすいと思います。脳が5つあっても、あんななんだった訳は」

ミキとマキが引きつつ尋ねると鬼灯は即答で脳が複数あっても意

味がない理由を答え、更に狛治が真顔で追撃をかけてしのぶたちを吹き出させた。

「あんなだったと言われる所以が一番わかりやすいのは……やはり奴が鬼になった経緯ですね」

鬼殺隊にも挑発や嘲りの意味合いはもはやなく、素で笑われる無惨の残念さにアイドル組は困惑しっぱなしだが、その困惑を解消させる為の話で鬼灯は始める。

「奴は平安時代の貴族でした。しかし病弱で二十歳まで生きてられないと言われていた体でしたが、……とてつもなく、本当にとてつもなくとんでもなく腕のある医者善意で奴を治療していました。」

ですが、奴は治療の成果が出ていないと思つて癩癩を起こし、医者頭を鉋で叩き割つて殺害。そのしばらく後に病が治り体質も超常的なものになりました。そう、医者が奴に施していた治療は人を鬼に変えるという、頭どころか何もかもがおかしい治療法でした」

鬼灯の語りは淡々としたものだが、どこかしら怒りや苛立ちが感じられるものだったので聴講生たちが怯えですが、その怒りと苛立ちの原因は簡単に判明。どうりで、医者腕を「とてつもない」「とんでもない」と強調する割に「名医」だとは言わなかった訳である。

「……それ、無惨の癩癩のインパクトでつい見逃しがちだけど、医者がマジで色々とおかしいよな」

鬼灯と犬猿の仲である白澤でさえも、なんだか心から同情しているような声音で医者異常さを言及すれば、鬼灯がまた昔の苦労とか後悔とかいろんなものが爆発してキレた。

「おかしいどころじゃないですよ！」

こんな治療法を思いついて実行するってだけでもサイコかマッドとしか言えないはずなのに、善意ですよ善意!! しかも、無惨以外にはその善意が報われる結果を出してるんですよ!!

っていうか、何よりおかしなのは鬼化の薬に妖術とか神通力とかが使われていない、材料さえそろえば普通に再現できる『科学』だつてことだ!!」

『マジで!?!?』

鬼灯のマジギレの愚痴に、白澤としのぶ以外の全員が驚愕の声を唱和させた。

「……マジなんですよ。これが。今はもう絶滅した薬草とかを使っているらしいので、再現は不可能っていうのが救いですね」

「……それも十分凄いけど、その医者のおかしい所はそれを人体どころか動物実験すらせず、ただ材料を見ただけでそういう薬が作れると確信して調薬して、本当に作ったことなんだよねえ」

仕事の関係上か、前々から知らされていたしのぶが「冗談です」という言葉を求めて視線を向けてくる皆から目を逸らして気まずげに肯定し、更に白澤が余計に信じられなくなる情報を補足する。

「何なんですか、それ!?! 本当に人間ですかそいつは!?!」

「薬の神の使いか何かじゃないの、その医者」

当然、そんな存在が信じられる訳もなく唐瓜と茄子が突っ込み、マキミキとシロたちは地震中の赤べこのように激しく頷きまくる。

しかし鬼灯は、「そう思っていたからこそ、今の後悔です!」と言い放って、「有り得ない」と否定しまくる連中を黙らせた。

「信じられないのは無理ありません。しかし、その『ありえない』が実際に起こったのにその事を認めずにいたからこそ、無惨をのうのうと1000年も現世にのさばらせてしまったのです。」

だから、どんなに『ありえない』と思っても勝手に自分で納得できる解釈にしてしまわないで、現実だと受け入れることは大切なんです。どうしても納得できないのなら、こう思いなさい。

あの医者は、医療界の縁壺さんだと」

当時の愚痴をぶちまけてまた瞬間的に冷めた鬼灯が、滔々と医者の方非常識ぶりを受け入れろと言い聞かせる。

そしてどうしても納得できない場合の最終手段まで語るが、それは大体の聴講生にとって「誰!?!」と言うしかない知らない人の名前だった。

が、彼らが突っ込む前にその名前を知る人物たち、具体的に言うとお泊治と鬼殺隊、白澤と桃太郎が深々と頷きながら「ああ!!」と非常に納得した声を上げたことでツツコミが変化する。

『縁吉さんって何者!!?』
そんなの、こつちが知りたい。

「何で酒吞童子さんたちと一緒に倒してくれなかった
頼光四天王!!」

「縁壺さんが何者かなんて、私や八百万の神、そしてなにより巖勝みちかつさんが知りたいですよ」

縁壺に関しての情報がほぼない連中からの突っ込みに、鬼灯は言われまくってうんざりしているのがよくわかる顔と声音で答えて、更に疑問を深めた。

「悲鳴嶼さんの『例外』発言の反応って、今になって思うと凶星だったからというより……」

「……人間かどうか悩んでたよね、絶対」

ついでに玄弥と無一郎がヒソヒソと話し合う内容もまた謎を深めるが、もう謎しかないのに多分知らない方が平和そうな事だけはなんとなく全員が察する。

なので、空気を換えようとルリオが翼を上げて気になった所を尋ねる。

「あの、そもそも何で無惨に関してはあの世側は動かなかったんですか？ 現世で瘟鬼おんきが暴れてた時は、わざわざ桃から桃太郎を生み出してるのに」

「はい、そこを疑問に思われるのは当然です」

桃太郎が迷走して地獄に道場破りみたいなきことをした時の狛治の反応時点で、どうやらルリオは「とてつもなく厄介な鬼がいた」ことと、「けれど桃太郎のような英雄に倒された訳ではない」ことを察しており、だからこそ気になっていたらしい。

そして鬼灯も自分で言ったように予測済みの質問だった為、よどみなく答えてくれた。

「まず、先ほど私がキレた通り無惨の鬼化は本人の怨念や執念、何らかの妖術や神通力など超常的なものの成果ではありません。

……その所為で、まず最初の段階であの世側が現世に介入する理由がないんですよ。むしろ、介入したら越権行為になります」

『……………あゝ〜』

その答えに、聴講生たちが納得の声を唱和させた。この納得は、あの世側が動かなかったことに対してというより、鬼灯のキレ具合に対しての割合が強い。

鬼灯がやたらと医者に対してキレていたのは、どうやら無惨という厄介すぎる頭無惨を生み出した事よりも「科学」で鬼という存在を生み出したことが原因だったようだ。

しかし鬼灯の答えは、言ってみれば現世の被害者たちのことを考えていないあの世側の都合と理由なので、今度は「それ、無惨の被害者の前で言っちゃっていいの？」という疑問が茄子・シロ・マキのアホトリオ以外の全員に浮かんだらしく、非常に気まずげに彼らへとそれぞれ視線を向けると、しのぶが代表して苦笑しながら答えてくれた。

「あ、私たちは気にしてませんよ。というか、そのあたりのことはあ^この世^ちに来てすぐに説明されましたし。

そりゃ、最初は理屈としてはそうだとわかってても不満がありました。だが、十王の裁判は厳しくも公正であることは身をもつて知りましたから、私たちの不幸の元凶である理不尽には相応の報いを期待できま^すし、自分たちの正しさを断言してもらい、現世では叶えられなかつた幸せを与えられたのだから、そんな不満はすぐに消し飛びましたよ」

玄弥と無一郎はしのぶの言葉にウンウンと頷き、等活地獄で罰を受けた狛治でさえも穏やかに笑って頷いたので、彼らは本音であるあの世側が動かなかったことに関して気にしていないらしい。

そのことに彼らのことを案じていた者達がホッとしたが、無一郎は相変わらずぼんやりとした様子でボソツと、しのぶの言い分に付け加えた。

「……………まあ、動かなかったことで怒るとしたら鬼灯や大王より、アマテラスとかそのあたりの神に対してだよな」

『え？』

相当不穏なことを言い出され、今度はアホトリオも含めてまずは無一郎を注目してから、他の3人や鬼灯に視線を向ける。

玄弥やしのぶは無一郎の眩きに「あく……」と気まずそうな納得しているような声を上げ、周囲の視線から自分の視線を明後日の方向に逃がす。

粕治は相変わらず、穏やかに笑っている。

が、その目はやけに怖い。煉獄あたりがこの場にいたら、「猗窩座の頃と同じ目をしていた」と答える程、その目は虚ろでありながら深い怒りや憎悪の熱を孕んでいた。

「そう言ってもらえるのなら、幸いです。」

……言い訳にしかありませんが、一応他にも動けなかった、動かなかった理由はあります。

まず人が鬼に変化すること自体は、そう頻繁ではありませんが稀とは言えない程度にありました。なので、『鬼に変化した』こと自体はそれほど重視されなかったんです。

それに加え、無惨の生まれた時代は平安時代。酒吞童子さんや茨木童子さんという有名所が暴れていたこともあって、医者証言や？生神さんからの報告で『日光が致命的』という弱点を持つていた無惨は、彼らと比べるとそこまで警戒する必要はないように思えてしまったのです。

………何で酒吞童子さんたちと一緒に倒してくれなかった頼光四天王!!」

鬼灯はしのぶのフォローと無一郎の発言に感謝を示しつつ、更に当時の事情を話していたらまたキレて両こぶしをテーブルに叩きつけて、テーブルはもちろん粉砕。

粕治はそれを、慣れた調子で掃除して片づけた。その時には目がいっもの「ああ、またか」と言わんばかりの苦労人の目に戻っていたので、一同はちよつと安心する。

「鬼灯様、気持ちわかるけど落ち着いて!」

「気持ちわかるけど、頼光四天王に期待しすぎだろ!」

「いえー! 当時の無惨なら血鬼術も捨て駒の鬼もおらず、爆発四散して逃げる術もないので四天王と頼光さんの5人でタコ殴りしてれば夜明けで焼き殺せました!!」

唐瓜と桃太郎が鬼灯を宥めているのかただの突っ込みなのかよくわからないことを言うが、鬼灯にとって本当に頼光四天王は自分が無惨とエンカウントした時、そして縁壺の存在並のビクチャンスだったらしく、諦め悪く主張する。

その主張、まだ無惨はろくに自分が得た力を生かしていなかったことを知って、鬼灯がここまで悔しがっている訳を理解し、聴講生たちは元鬼殺隊と同じく同情の視線を送る。

だが、他国のこととはいえ知識の神いつもは残念神獣の白澤と、普通に勉強ができる優等生迷走系アイドルのミキは気付いていた。

……無惨は討伐された大正初期で鬼となって約1000年なら、頼光四天王が活躍した時期と鬼になった直後の時期は微妙にずれる。

そのずれは精々30年ほどだし、そもそもが相当大ざっぱな計算なので、無惨が鬼になった正確な時期がその頃なのかもしれないが、鬼灯は一言たりとも「鬼になってすぐ」だとか「日が浅い」という類の言葉を使っていない。

つまり、奴は30年かけてもその程度だった可能性が非常に高いということにも気づけば、更に鬼灯に対しての同情度が上がった。

そりゃ未だにブチ切れるのもわかるほど、その時に討伐していて欲しかっただろう。

* * *

「……あいつは変化が嫌いなだけあって、この当時からヤバいと思ったらガン逃げスタイルだったんですよ。だからこそ平安時代は比較的大人しくて、鎌倉時代あたりから活動的になりました。この頃くらいに自分の血を与えたら人間が自分と同じ鬼になることを知ったのでしょうか。」

奴は太陽を克服するための実験台、もしくはただの下僕として使う為に人間を鬼にし、その鬼が人間を喰らうことで無惨の被害者が増加。……それでも神々の判断は、『現世の問題なのだから現世に任せて干渉するな』でした。

現場を知らないエリートに、あれやれこれやれと合理性も実用性もない指示を出されて動かされるのも業腹ですが、明らかにヤバいから

報告しているというのにそれを理解しない頭極楽とんぼ桃源郷には殺意を覚えましたよ。

その癖、もつと後になってから医者天国行きでも地獄行きでもなく、転生させたことを責めてきますしね」

更にあの世側が動かなかった理由を今度はキレずに鬼灯は語ってくれたが、いつそキレて叫んでほしいほどに霧囲気が怖い。背後から八大地獄名物「漆黒の炎」が燃え盛っているように見えるのは、間違いないその場の全員だ。

殺意を視覚的に表現して見せた鬼灯の怒りで、無一郎の発言と他の無惨被害者たちの反応を聴講生たちは理解する。

彼らがああ世側に対して怒っていないのは、少なくとも鬼灯は積極的に動きたかったのに、鬼灯の言う通り現場を知らない頭でつかちの神が、事態を樂觀視していたからか特例的に動く許可をくれなかったから。

その為、鬼灯だけではなく鬼殺隊や狛治の霧囲気も怖くなってしまう。彼らも現場で動きまくった叩き上げ実力者だからこそ、自分たちの悲劇を抜いても神々の「現世に干渉するな」という判断に怒りが湧くようだ。

「あ、あの……医者^{エリート}の判決は転生だったのは何ですか？

無惨を生み出したことを考えたら地獄行き。わざとじゃない、病気を治すための善意が無惨の痼癩で最悪の事態に陥ったことを考慮したのなら天国行きになりませんか？」

室内人数の約1/3の霧囲気が怒りによる漆黒の炎になり、その炎なのに八寒地獄並みのブリザードと思える空気に耐えられず唐瓜が何とか少しでも話題を逸らそうと、鬼灯が最後に語った「(ある意味元凶な)医者への判決」について尋ねる。

唐瓜の願いは叶った。ある意味では。別に叶って欲しくない方向で。

「……唐瓜さんの言う通り、当初は天国行きの予定でした。あの医者は私財を投じて貴族はもちろん、平民も治療していた功績もあるのと、先ほども言った通り人間が鬼になることはたまにあつたので、医

者を罰する理由が当時はなかったんですよ。

ですが……この医者は本当に平安時代の縁壺さんでしてね。スベックが異常なのに性格は善良この上なかった為、自ら自分の非を語って、天国行きはふさわしくないと抗議してきたんです。

医者は無惨に施した治療によるデメリット、食人衝動などを理解していたからこそ、そのデメリットを抑える代わりにメリットである治療能力も最低限になる薬を同時投与していました。

だから、無惨が癩癩を起さなくても何らかの不幸で医者が突然死してしまえば、同じような事態に陥っていた。そのことを全く想像せず、対策していなかった自分が天国行きなんておかしいと主張したんですよ。

で、その主張は正論だったので、『ならばその後悔と反省を魂に刻み、再び人間に転生して生き抜くことで生かしてみせよ』が医者への判決でした。

……私達の判断が甘かったことは認めますよ。認めてますよ。

けど、言わせる!! この当方で、医者が現代に至っても異常すぎるってことも、無惨のその後も想像できる訳あるか!!」

いっそキレて欲しいという願いは叶った。そして元鬼殺隊も狛治も鬼灯のキレ具合、叫びながら壁を殴って大穴を開けた勢いと迫力に押されて、怖い雰囲気は消え去ったのは良い。

けれど、今度は壁ドンでは気はすまなかったらしく、更にその穴を広げるように壁を殴り続ける鬼灯に全員が引きに引いているので誰も止められない。今、宥めようと声を掛けたら確実に穴が開くのは壁ではなく自分の体か頭だと全員が理解していた。

なので、皆がドン引きつつも同情そのものの視線を送り、気が済むまで放っておくことにした。

「医者が死んだ平安時代は、私達はもちろん現世の人間も『科学』なんでものは理解どころか認識してなかったんですよ! ぶっちゃけ、無惨の鬼化は医者が無自覚に何らかの妖術を使っていたと思いきいで何が悪い!」

鎌倉後期あたりで無惨の被害が『現世の妖怪のことだから』という

範疇に納まらなくなってきて、神に報告するために浄玻璃の鏡で医者
の調薬シーンとか見直して驚愕しましたよ！

安倍晴明さんにも見てもらって断言されたんですよ!! 『妖術の類
は何一つとして使っていない』と!!

無惨があそこまで生き延びるとわかっていたら！ 私たちが介入
できる理由がないと初めからわかっていたら！

少なくとも転生させる前に、人間に戻す方法を聞き出すか編み出さ
せるかして、その情報を何とか鬼殺隊か珠世さんあたりに託してまし
たよ!!」

どうやら医者 of 裁判の時点では、医者は善行しかしていないし妖術
の類は時代柄珍しくもない、そして医者は自分の非を自ら主張してい
たが、全く自分の異常性に自覚がなかったのもあって、浄玻璃の鏡に
よる事実確認をほとんど行っていないかったらしい。その所為で、無惨
の鬼化をあの世側は長らく「妖術によるもの」と勘違いしていたよう
だ。

これは、鬼灯や閻魔大王の怠慢だと責められない。

「科学」なんて言葉すらなかった時代なのだから、医者自身も「実験も
せずに欲しい効果の薬を調薬できる」なんて頭縁壺な己のやらかしも
その結果の薬も、妖術だと思いついていたと考えるのが妥当。

そして鬼灯も自分が死後とはいえ人間から鬼になった事例だから
こそ、無惨も似たようなもの、つまりは「人間が本来なら持ち得ない
力を使って生まれた存在」だと思いついて、いざとなれば自分たちが対
処すればいいとも思っていたのだろう。

だが、いざその対処をしようと思つたら、無惨自身は妖怪としか言
いようがない存在に変貌しているが、その変貌させた手段そのものは
「科学」だった為、手の出しようがなかった。

つまり、自業自得と言うには惨いが鬼灯のある意味楽観的な考え
が、事態を泥沼化させた一端でもあることを自覚しているからこそ、
解決して1世紀が経過しても怒りが風化も劣化もしない程の後悔ら
しい。

「転生させなければ良かった！ 天国行きどころか梅毒あたりせんだしよに墮

としておけば良かった!!

いつそ転生した医者の特クが来世でも受け継がれていれば良かった!!

なんで転生したら人並みになってんだ!! その所為と平均寿命が短いから転生サイクルが早くて、あの医者の特クの異常性に気付いた時には、元医者の魂が今どこで何やってるのかわからなくなっていたことを一番悔しく思ったのは私だ!!!

「わかった! 本当にもうわかったから! わかりすぎたから落ち着け!!

僕がお前は悪くないって断言してやるから、マジでいい加減落ち着けて!!」

だからか、いつまでたっても鬼灯の気が済まずに壁に穴どころかもはや隣の部屋とくっつけて一部屋化する拡張工事ですか? 状態になってしまったので、ビビりまくっているマキミキや勇氣を持って鬼灯を宥めようとしたしのぶを庇ったのか、それとも吐くほど嫌いな取引先相手でも本心から同情しているからか、白澤が鬼灯を「悪くない」と断言して宥めて事態の収拾を試みる。

「持っている知識は縁壺さん並のチートなのに、それを全く生かしていないお前に断言されても説得力ないだろうが」

「急にいつものテンションに戻んな!! つか、どういう意味だアカミミガメ似釣り目!!」

だが鬼灯からしたら、白澤に同情させるのはこの上なく屈辱的だったようで、白澤が言うように急に素に戻ってかなり理不尽なことを言い出したので、白澤も素でキレていつもの喧嘩が勃発。

鬼灯が騒がしくなくなった代わりに白澤がギャーギャーと騒いで鬼灯を罵り、鬼灯もまた先程とは別の意味で苛立ち始めて事態はより悪化。

持っている金棒や近くにあるホワイトボードで白澤を殴るのならいつもの事だから全員が放置するだろうが、鬼灯がとっさに手を伸ばしたのは窓側の壁。この鬼神、壁をもぎ取って白澤を殴り潰す気だと察した全員は、鬼灯のことを理解しすぎている。

だが、鬼灯のことを理解出来ていても対処法まで反射レベルで行える者は、さすがに一人だけだった。

「そういえば、シロたちも言っていましたが無惨様の脳と心臓の構造ってほぼタコと一緒にですよね！ 鬼化の薬の材料はタコだったんでしょうか!?!」

「いや・いえ、タコの方が賢い」

マキミキは怯え、獄卒たちと桃太郎も怯えているがなんとかマキミキだけでも巻き添えを食わないように周囲を囲んで庇い、そして鬼と戦い続けただけあって度胸が据わりすぎている元鬼殺隊たちが二人の間に入って止めようとしたが、それより先に粕治が訳のわからない事を言い出した。

唐突すぎる粕治の疑問というか無惨への悪口なのかもよくわからない発言に、もちろんほぼ全員が困惑するのだが、何故か粕治の発言に喧嘩（というには既に白澤が一方的にボロ負け）していた張本人たちが同時に即答して、余計に周囲は困惑。っていうか、即答してるがその答えは粕治の疑問に何も答えていない。これこそただの悪口だ。「粕治さん。タコの脳は9個。つまりはタコの方が多いのですから、タコの方が絶対に賢いですよ。無惨と比べたらタコに失礼です」

「そうそう。煮ても焼いても美味しい、ワサビにつけたらもう最高のタコの方がずっと偉いよ」

しかもそのまま、粕治の発言を軽くだが咎める。タコに失礼だと。「っていうか、あいつの脳は5つあるんじゃないやなくて元の1つを5等分してるんじゃないの?」

「ああ。その方が納得ですね。あれに脳なんて複雑怪奇なものを複製できるとは思えませんし」

「心臓は7つあるし、人を食べるんだから消化器もあるのに、人並みの大きさの脳なんてもう体に入る余裕はないだろ」

「消化器を丸々抜いても体に入るのは2つかギリ3つって所ですよ。後はどこにあったんでしょう? 尻?」

「ああ……。そこなら座るだけで脳みそ踏みつけている状態になるから、あの残念さに説明がつかない……」

挙句の果てに二人は先ほどの険悪さなど綺麗さっぱり忘れたように、和気藹々とは言われないがかなり普通にただの世間話としてのテンションと空気でそのまま、無惨の頭無惨さとその原因について語り始める。

もちろん、他の者達からしたら狛治の発言以上に訳のわからない結果と状況に、まん丸い目で全員が狛治を見る。

その説明を求める視線に、狛治は魂から苦勞人であることをにじませた遠い目で語った。

「……良い機会だから、覚えておいてくれ。」

この二人が険悪にならずに長時間続けられる話題は、無惨様に関してのことだ。だから二人が険悪になって周りに被害が出そうになったら、無惨様のことを話題に上げろ。

ちよつと無惨様を褒めているように聞こえる話題がベストだ。それなら、頭に血が上った状態でも一瞬で素に戻って否定するから」

どうやら狛治にとって、無惨をタコと同列に扱うのは褒め言葉の部類だったらしい。マジでか。

しかしその効果の絶大さを目の当たりにしたので、全員が激しく首肯して心の最重要事項用のメモ帳へ特に目立つるように書き込んだ。

書き込みながら、マキは隣の部屋が良く見えるようになった元壁を死んだ目で眺めながらボソツと呟いた。

「……これって講習とか勉強会というより、ただ単に鬼灯様が愚痴を語る会な気が」

マキの呟きに、無惨について真顔で悪口のつもりはなかったただの純粋な自分の感想や疑問を語り続ける鬼灯と白澤以外の全員が、生ぬるい目をして静かに唇の前に指を一本立てるジェスチャー……「沈黙は金」と告げる。

そんなの、言うまでもなく全員が知っていたことだった。

「すみません。皆さんのお時間をもらっておきながらただの私の愚痴

を語る会になってしまった」

マキの眩きが聞こえていたのか、それとも初めから自覚していたのか鬼灯は自分から言っただけで頭を下げる。

愚痴りたくなる気持ちは嫌になるほどわかる話だったので、白澤以外は苦笑しながら「そんなことない」と大人の気遣いを見せた。白澤は「もちろん、「お前には言っていない。そもそもお前は誘っていない」と言い返されて、ホワイトボードの角が頭に刺さる。

白澤の惨状に関してはいつもの事なので、全員が放っておく。

「というか、本日の聴講生たちは「次、講習があつたらどうしよう？」という考えで頭が一杯。白澤の安否を考える余裕などない。

ひたすらに鬼灯がキレまくっていたが、話としては面白い部類だったのでアホトリオも勉強への苦手意識はなく、本音でまた聞ける機会があるのなら聞きたいと思っっている。

しかし、初めからわかっていたことだがこの「無惨や鬼殺隊の歴史」は端的に言えばあの世の失敗や後悔の歴史でもある為、どうしても話している側の鬼灯が過去のトラウマやら未だに諦めきれない後悔が鮮明に思い出されてしまい、おそらくこれからの講習も似たような瞬間沸騰ギレは容易く想像できた。

白澤でもないかぎり、鬼灯は人や動物に八つ当たりをぶつけはしないが物には容赦なくぶつけるし、そもそも鬼灯は「怒」以外の感情の振れ幅が少ない所為でわかりにくい、仕事だとか人前だとかという理由で自分の感情を押さえつけて隠すという真似はしない。意外とこの鬼は、感情がいつも駄々洩れなのだ。

学校の授業などでは教えてもらえないし、これから周知してもらおうための実験的な講習なのでTVなどの雑学系番組でも知ることができない歴史の裏話を当事者たちから教えてもらうメリットと、本日のような怖い空気に怯えなくてはならないデメリット。

それらを聴講生たちが頭の秤にかけて重さを確かめっていると、白澤を踏みつぶし飽きた鬼灯が再び皆に向き直って語る。

「結局、本日は予定していた話の大半が語れなかったのもまた後日、講習を行いたいと思います。同じく、参加はご自由ですので他に予定が

ある方はもちろん、今日の話で興味が湧かなかつたり私の不備が不満だった方は遠慮なく断ってください。

ただ、本日の講習で私も学習しましたので、次回はこのような愚痴と八つ当たりばかりにならないことを約束します」

自分の非をちゃんと自覚しているだけあって、鬼灯はもう一度頭を下げる。そしてその場のノリと勢いで暴走も好きだが合理性の塊でもある為、鬼灯はしつかり本日の反省点も次回への改善案も纏めていた。

なので全員が「それなら」と納得して期待して、鬼灯の改善案を聞く。

が、甘かった。

このドS補佐官の改善案は全く「改善」ではない、「改造」なら良い方で9割方「改悪」になっていることを、付き合いが長い粕治でさえも疲れているのか忘れていた。

「ひとまず、医者に関しての事は語りつくしたので医者への愚痴はもうありません。たぶん。他の方々の愚痴は瞬間的に叫んで突っ込むか、せいぜい机を壊す程度で押さえる自信はあります。

そして一番の問題である無惨は、前回撮影した等活・黒縄地獄編と近々撮影予定の衆合地獄編の小地獄めぐり動画を横で延々と流しておきます。あいつの拷問の様子を見ていたら、少しはストレスが緩和されますので」

やっぱりこの鬼は自分の不機嫌や苛立ちといった、周囲を畏縮させてしまう感情を押さえつけて隠す気は一切ないようだ。

鬼灯の語った改善案は、いかに鬼灯のストレスを減らすかであつて、聴講生が話に集中できるかどうかは全く考慮していない。おそらく聴講生のことを考えていないというより、ただひたすらに無惨を虚仮にしたいという鬼灯の希望も合わさってこの結果なのだろう。

そんなある意味では今回以上に参加したいような、流石に無惨が可哀相に思えてくるので見たくないようなという迷いが聴講生全員の頭をぐるぐる駆け巡るのだが、鬼灯の案に異を唱える勇気がある者はいない。

しかし、聴講生にはいないが本来なら講師役だったが本日は完全に聴講生となってしまうていた者達、元鬼殺隊がそれぞれ鬼灯に向かって言った。

「鬼灯様……。それだと聴講生が元鬼殺隊だけになりますよ？」

まず代表としてのしがぶが突っ込み、それに続いて無一郎が「少なくとも、お館様が最前列ど真ん中にいるね」と同意し、玄弥は遠い目で「そうだな……。等活・黒縄地獄編の動画を腹抱えて酸欠になってあまね様に引かれるくらい笑って見てたからな」と、何気に深い産屋敷の闇を軽やかに暴露する。

「そうですね……。新作動画を先行上映してしまうと、鬼殺隊の方々が間違いなく殺到しますね。」

仕方ないですが、延々と流すのは等活・黒縄地獄編だけにしましよ
う」

そして鬼灯も、彼らの意見に深々と頷いて納得。

それらの様子を見ていた聴講生たち、代表して桃太郎がひきつった顔で尋ねる。

「ただだけ未だに嫌われてるんすか、無惨は」

講習中のしのぶたちの反応からして、もう1世紀は経っている事と、鬼に奪われた家族らと再会している事からして、鬼に対しての恨みはほとんどなくなっているように彼らには思えていたのだろう。

だがそんな訳がなかったこと、ある意味では鬼灯のようにわかりやすい恨み骨髄ではなく、もはや恨んで憎んで酷い目に遭うことを望んで呪い続けるのが呼吸同然レベルである者がまだ大半であることを知って、かなりドン引いている。

そんなドン引き勢から目を逸らし、狛治は遠くを眺めて乾いた笑みを浮かべて言う。

「……無惨様以外の鬼に対しては、別にもう何とも思っていない者の方が多いぞ。無惨様に関しても、杏寿郎や炭治郎みたいに『好きの反対は無関心』を地で行っている者も結構いるが……。無惨様は無限城で鬼殺隊に『自分による被害は天災だと思つて諦める。諦めないお前は異常者だ。しつこい異常者の相手はもううんざりだ』みたいなこと

を言ったんだよな……」

一応、この3人レベルではない鬼殺隊の存在を語りつつ、未だに生命活動同然レベルで憎まれている無惨の、そこまで憎まれる理由の一端として一番わかりやすい事例を語れば、聴講生たちは粕治と同じ目になった。

他人事でも瞬間的に頭に血が上るくらいどころか、「聞き間違いかなんかかな？」と発言そのものを脳が理解を拒否してしまうレベルの「お前が言うな!!」発言である。

彼らの憎悪には納得しかない。

とりあえず、聴講生たちは次回の講習に参加するかしないかはともかく、無惨の十六小地獄めぐり次回作の衆合地獄編を楽しみにすることにした。現実逃避とも言う。

「あなた達はもう結婚してるでしょ」

「は〜い。今から裁判行く人はこっちの道なき暗い方よ〜」

「そこに案内図があるから良くご覧なさい」

地獄と天国、現世と常世を繋ぐ狭間の門番である牛頭と馬頭が、いつものように亡者たちに声を掛けて案内していると、天国の門から小柄な人影がテコテコと可愛らしく歩いてくる。

その人物に気付き、牛頭と馬頭は楽しげであり微笑ましげでもあり、何より羨望を込めて話しかける。

「あらっ、やっだ〜！ 恋雪ちゃんじゃないの〜！」

「ちよつと久しぶりね〜！」

「こんにちは、牛頭さん、馬頭さん」

紅梅色の着物に身を包み、雪の結晶のかんざしを付けた愛らしい少女、だが夫一筋数百年の既婚者である恋雪は自分の3倍はある巨体の獣面人身に臆した様子もなくにこやかに笑いかける。

そんな恋雪に牛頭馬頭たちもほがらかに笑いながら、亡者がちよつど途切れているのもあつてそのままガールズトークを開始。

「今日はどうしたの？ 忘れものでも届けに来たの？ それとも狛治さんが早帰りだからデートかしら？」

「あ、い、いえ……。今日は一日中内勤だと言っていましたので……。お、お昼をその……。一緒に食べさせてもらおうかと……」

馬頭が恋雪の用事、完全に地獄に用ではなく彼女の夫に用があると決めつけて尋ねると、恋雪は着ている着物と似た色に頬を染めて、弁当らしき包みを抱えてもじもじと答える。

どうやら現場での拷問やら裁判の雑事、他の十王庁への出向などで、決まった時間に食事がとれないことが多い狛治が、本日は一日中デスクワーク予定な為、一緒に昼食を取る約束でもしていたようだ。

「やくん、もお〜！ 相変わらずラブラブで羨ましいわ〜」

「狛治様が旦那様つてのも羨ましいけど、こんなに可愛くて健気な恋雪ちゃんがお嫁さんつてのも羨ましいわ〜！」

恋雪の初々しい様とひたすら尊い夫婦の予定に、牛頭と馬頭も自分

の身を両腕に抱き、くねくね悶えるようにして地獄で評判の癒し系夫婦に萌える。

二頭に悪気なく囃し立てられて、恋雪は更に顔を赤くして俯いてしまいが、その口元は笑っている。気弱で恥ずかしがり屋なのでこういう状況は苦手だが、狛治を褒められること、そして自分がそんな狛治の嫁であることを「羨ましい」と言ってもらえることが、何より嬉しいのだろう。

その後もしばし牛頭馬頭に恋雪は囃し立てられたが、また亡者がやってきたので話を切り上げる。

「あ、お仕事かなのにすみません」

「いいのよお。気にしないで〜」

「今度は一緒にゆっくりお茶しましょうね〜」

二頭に頭を下げ、恋雪は地獄の門を通り、100年近く通い慣れた道を恋雪は歩く。特に今日は牛頭たちから褒められたから、気分は上々。

しかし閻魔庁に近づくにつれて、真っ直ぐ上げていた恋雪の顔が俯き加減になり、上がっていた口角も下がってしまう。

もちろん好きで好きでたまらず、実は未だに5秒以上真っ直ぐ顔を見ることなど、よほどの覚悟を決めてないと出来ない夫に会いたくない訳はない。

むしろ夫が、狛治が好きすぎるからこそ恋雪は時々、情緒不安定になる。

先程、牛頭馬頭に褒められた、羨ましいと言ってもらえたのは嬉しかったが、今はその反動で卑屈な思いが胸の中にモヤモヤとたまり、頭の中で自問自答がぐるぐる回る。

本当に自分は狛治に相応しいのか？

自分が狛治と結婚したいと言わなければ、狛治は自分自身を一生許せない罪を負わずに済んだのではないか？

自分が父や狛治に守ってもらっただけの弱者でなければ、何もかも終わってしまったはずなのに、あんなにも惨い「続き」を空っぽのまま行う約束など交わさずに済んだのではないか？

自分の看病疲れによって母親が自殺してしまった過去を持つ恋雪は、自己評価がどうしても低い。それに加え、剣道道場からの外道極まりない行いと、狛治のあまりに悲しい凶行が、死して魂だけの存在になって尚、癒えぬ傷として痛み続けている。

狛治と再会し、生前叶わなかった夫婦として過ごしてもう100年。寿命が延びた現代人でもあり得ないほど長い年月一緒にいても、恋雪は幸せだからこそ不安になって悩み続けてしまう。

(いけないいけない！ こんな考えは狛治さんに失礼だ！)

私自身を卑下にするつてことは、私の求婚に応えてくれた、私を選んでくれた狛治さんの価値を貶めていることになる。そんなのはダメ！)

しかし、それでも数百年ものの洗脳をされていた夫を、愛で無惨というブラック企業から寿退社させただけあって、恋雪は芯がとても強い女性だ。

自分のことは好きになれなくとも、それが狛治を侮辱することだと思えば俯いていた顔が上がり、せめて夫に心配をかけぬように、陰気な嫁だと周りに思われぬように背筋を伸ばして、顔見知りの獄卒に挨拶を交わしながら、関係者以外も利用可能な食堂まで歩く。

「あら、恋雪ちゃん。お久しぶり」

「あ、お香さん。お久しぶりです」

その途中、恋雪にとって理想の大人の女性として憧れているお香と出会う。

「今日はどうしたの？」と尋ねられたので、恋雪は牛頭馬頭たちの時と同じように照れながら予定を告げると、お香も彼女たちと同じように微笑ましそうに笑いながら、持っていた巻物を掲げて言った。

「狛治様なら、たぶんまだ法廷でしょうね。午前の裁判はもう終わってるけど、あの方のことだから鬼灯様の手伝いをしてると思うわ。」

私はこの書類を鬼灯様に届けに行くところなんだけど、良ければ一緒に迎えに行く？」

お香の提案に初めこそ恋雪は遠慮して断ったが、お香はやんわりと自分がすることは変わらない、迷惑などではない、迎えに来てくれた

ら狛治はきつと喜ぶと、恋雪の遠慮を丁寧に剥がして行って、最終的に恋雪は控えめに頷いた。

お香は知らないが、実は恋雪がお香の誘いを断ったのは遠慮だけではない。

恋雪は自分の死後の裁判がどのような進んだかを覚えていない。その時は現世に遺した狛治の事で、泣き続けていた記憶しかない。しかし狛治の凶行と、無惨による残酷すぎる死の延長を知ったのは閻魔庁だということだけは覚えていたので、恋雪にとって閻魔庁の法廷はある意味トラウマそのものだった。

そんな苦い記憶が蘇る場所だから忌避感があったのだが、狛治が家で閻魔庁の仕事をいつも「やりがいのある仕事」と笑って語っていたことを思い出し、自分のトラウマが少しでも上書きされることを期待して、そして何より1秒でも早く会いたい、1秒でも長く一緒にいたいという気持ちを抑えられなかったから、お香の言葉に甘えて恋雪は法廷まで足を運ぶ。

そして、お香が開いた扉の向こうで目撃してしまう。

「ねえ、狛治様。たまにはあなたがエスコートして欲しいわ」

夫の腕に抱き着く、金髪ショートカット巨乳の超美人を。

恋雪は抱えていた弁当を落とし、その場で固まった。

* * *

物を落とす音に反応して、狛治が自分の腕にしがみついて離れない女から、「面倒くさい、しつこい、うんざり」といった感情を隠す気がない表情のまま、そちらに顔を向ける。

そして音の出所が誰であるかを理解した瞬間、狛治の顔から血の気が一気に引いた。

サアアアアアッ！ と音が聞こえそうな勢いで真っ青になった狛治が、もはや外交や女性に対する礼儀など彼方に投げ捨てて、EU地獄ベルゼブブ長官夫人のレディ・リリスを引きはがし、ダツシユで自分と同じく真っ青な顔色で、今にも泣きそうな愛妻に駆け寄り、言う。

「ち、違います！ 違うんですよ、恋雪さん!! 違います！ 本当に違

うんです!!」

狛治も既に涙声でパニックになっているのか、彼女が何者なのかといった説明が出来ず、ただひたすらに「違う」を繰り返すように連呼する。

そして恋雪の方も、実は初めから誤解などしていない。というか、「夫に好意を向ける超美人」という存在だけで、自己評価が最低に近い恋雪はショックのあまり思考停止していたので、そこから「夫の浮気」という発想に発展していなかった。

しかし狛治が泣きそうになりながら「違う」と主張することで、浮気だとも思っていなかったのにただショックを受けた自分を、狛治を信じてやれなかったとネガティブに責めて、彼女もまた両目に涙をにじませて、「ご、ごめんなさい! 狛治さん、ごめんなさい!!」とこちらら謝罪を連呼。

そして、恋雪と似た過去を持つ狛治もまた自己評価が低い為、嫁の謝罪が更に罪悪感を煽って「謝る必要なんかありません! 恋雪さんは何も悪くない! 悪いのは俺の方だ!!」と彼も主張して謝りまくる。

狛治が謝れば恋雪も「いいえ! 私が悪いんです! 狛治さんを信じられなかった私が!!」と、もはや何の勝負だ? と訊きたい謝罪合戦が続く。

「お、落ち着いて二人とも! ほら、お弁当も落とすから拾わないと……」

互いに自己嫌悪で泣きそうになりながら、自分が悪いと主張し合つて謝りまくる夫婦に、ある意味元凶その1であるお香が何とか仲裁しようとして声を掛ける。

言われて二人は、「狛治さんのお弁当を落とすってしまった!」「恋雪さんに弁当を落とさせてしまった!」と、これまた夫婦仲良く自分を責めて、せめて早く拾い上げないとでも思ったのか、二人同時にしゃがみ込んで手を伸ばしたので、その手はお互いの指先に触れる。

そして触れた瞬間、二人は弾けるように自分の手を引く。

……信じられないというか予想通りというか、この夫婦は100年たっても事前に覚悟を決めてから、「手を繋いでいいですか?」と訊い

て、相手から了承をもらってから手を繋ぐのだ。つまり、不意に触れたらいつもこんな感じ。

いつも通りなのだが、この時は互いにネガティブスパイラルにどっぷりはまり込んでいる状態な為、どちらも「触れられたくないと思われるほど嫌われた!」「触れられたくないと誤解されてしまう!」という不安と後悔で頭が一杯になり、ついに恋雪の涙腺が決壊してしま

う。
最愛の女性の涙を目にして、何度も誓ったのに全く守れていない、恋雪を泣かせない、守り抜くという誓いを果たせない弱い自分を殺してやりたい気分になりながらも、心の弱さゆえに最悪の結果と続きを迎えた生前があるからこそ、狛治は自分の後悔と不安と弱音をねじ伏せ、一度引いた自分の手で恋雪の両手を掴み、包み込んで叫んだ。

「俺が好きなのも、愛しているのも、結婚したいのも、恋をしているのも恋雪さんだけです!!」

「!? わ、私も狛治さんと結婚したいです! 狛治さんがいいんです! 狛治さんじゃないとダメなんです!!」

「あなた達はもう結婚してるでしょ」

自分の弱さをねじ伏せた結果が、狛治の急に熱烈すぎる告白宣言であり、恋雪もつられてこれまた熱烈な返答をし、そして実は最初からいる鬼灯が冷静に突っ込んだ。

鬼灯の突っ込みで、ある意味二人の世界に没入していた狛治と恋雪が我に返る。

そして現実を認識し、自分たちが鬼灯やお香、リリスや閻魔大王、他の獄卒たちなどから気まずげだったり困惑だったり微笑まじそうだったりな視線を向けられている事によく気がき悶絶。

お香や大王はもちろん、流石の鬼灯も真っ赤になった顔を両手で覆い隠して固まっている二人に何を言えればいいのかわからず、しばし法廷内に沈黙が満ちる。

その沈黙は、ぷつと吹き出す声音がきっかけで破られた。

「ふふっ! あははははっ!」

あー、おかしっ! けど、納得! 狛治さまがアタシになびくどこ

ろか、いつも迷惑そうな訳だわ！」

我慢しきれないと言わんばかりに腹を抱えてリリースは笑い、笑い過ぎて出た涙を指先で拭う。

そんな彼女を一度睨み、鬼灯は疲れたような溜息を一度吐いてから、困惑している恋雪に彼女を紹介した。

「恋雪さん。彼女はEU地獄長官の奥方で、誘惑の悪魔であるリリースさんです。」

狛治さんがしがみつかれてもそのままにしてたのは、外交とかを気にして遠慮していたからで、彼はリリースさんと二人きりになったことは数分程度さえもないですよ」

鬼灯の説明で元々狛治のことを疑っていた訳ではない恋雪は、相手が他国の要人であることを理解して、安堵どころかまたしても顔色が悪くなる。

恋雪が「夫の仕事の邪魔をした」という罪悪感のあまり、その場で土下座しかねないと思ったのか、狛治は妻を庇うように前に出て「お、お見苦しい所を見せてすみません！」と先手を打って謝った。

「気にしないで。アタシの方もごめんなさいね。えっと、恋雪ちゃんだったかしら？ あなたの旦那様に馴れ馴れしくして。」

けど大丈夫よ。狛治様はとっても素敵な殿方だから、日本に来るたびに誘ってるんだけど、一度もいい返事どころかいつも迷惑そうにあしらわれてるの」

そんな二人の様子を微笑ましげに笑ってリリースは、掌をひらひら振って自分に対する無礼は不問にし、自身の非も一応ちゃんと謝った。

本心から気にした様子がないことに恋雪はホツとするが、自分の不始末を全部夫にフォローされている至らなさが、また自己嫌悪として積み重なる。

「ごめんね、恋雪ちゃん。せつかく来てくれたのに、驚かせて。狛治君、お昼行っておいで。ゆっくりでいいからね」

「！ いえ、大王様！ 俺はまだ仕事が残って、恋雪さん、すみません。が待って、いや待て違う先に食べてって食べ終わった後はどうする

んだ」

「落ち着いてください、狛治さん。気にせず、恋雪さんと昼食をとつてきなさい。約束していたのでしよう？」

狛治の後ろでまた自分を嫌いになりながら俯いていたら、閻魔大王が優しく笑って自分たちを気遣ってくれた。

狛治の言葉からどうやらまだ仕事がある、それも急ぎらしいものが残っているようで、狛治は仕事と恋雪との約束に板挟みになって軽いパニックを起こし、鬼灯がそれを宥めて大王と同じく「気にしなくていい」と言ってくれた。

しかしそこまで気遣われたら、狛治も恋雪も真面目だからこそ、その厚意は受け取れない。

「迷惑をかけた」と思って気にすることをわかっていたので、夫婦は結論を出せずにワタついていいる所、パンと高い音が響く。

「恋雪ちゃん。待っている間、暇ならアタシの相手をしてくれない？ ちょうど、新作コスメのサンプルをいくつか持ってきてたから、モニターになって欲しいのよ。」

ね？ 狛治様もいいでしょ？ あなたの仕事が遅れて残っているのは、急に来たアタシの所為なんだから、奥様に迷惑かけるようなことはしないわ」

手を叩いて朗らかに「名案！」と言わんばかりのリリスが提案する。リリスは悪魔だが、無邪気で天真爛漫な性格であることを狛治も知っているの、提案自体に悪意を疑っていない。本心から恋雪に興味を持ったのと、自分の自由さで迷惑をかけているお詫びだとわかっている。

しかし、彼女の悪魔としての本分からして、悪気なく余計なことを吹き込みかねないので、ちよつと嫌な顔になる。

だが、お香が「私もお付き合いするわ」と言ってくれたのと、恋雪が「私は肌が弱いので……」と遠慮していたが、リリスの「新作コスメ」という単語に一瞬だけだが反応したことに、狛治はすっかり気付いていた。

「あら、だったらなおさら好都合よ。子供とか化粧品に興味を持ち始めた子にお勧めする新シリーズを展開しようと思つて作ったサンプルだから、全部肌に優しい成分で出来てるわよ」

恋雪の遠慮にリリスがにこやかに言つたフォローがトドメとなつて、狛治は折れてリリスに恋雪を頼む。

しかし恋雪の方はまだ、遠慮の塊だ。化粧品にもリリス自身にも興味がある為、リリスの提案を嬉しく思っているのは本心だが、人見知りなので初対面のリリスと憧れの人お香は、恋雪にとつて緊張で何を話せばいいのかわからないので、遠慮しておきたいのもまた本心。

だが、狛治の何気ない素の発言で恋雪はもう何も言えなくなつて、そのままニマニマ笑う女二人に連行されていった。

その、恋雪を一撃ノックアウトさせた狛治の発言がこちら。

「けど、恋雪さんがモニターでいいんですか？ 地が綺麗だから、化粧の効果が全くわからないでしょう？」

恋雪の死因：夫がイケメンすぎた。

「はい。こちらがリリスのルージュの新シリーズ。リトル・エンジェルシリーズよ」

食堂の一角でリリスが持つてきていた新作コスメを並べ、紹介する。

そのシリーズ名にお香が「悪魔なのに？」と、恋雪も真つ先に思つたが言えずにいたツツコミを入れてくれた。そしてリリスはケラケラ笑つて、「悪魔は元がだいたい天使なんだから、子供向けがエンジェルはふさわしいでしょ？」と返す。

納得していいのかどうかよくわからない理屈だが、深く考える意味もない話題なので、お香はさっさと話の方向をコスメに移す。

「今までのとは違って、全部可愛らしいわあ。恋雪ちゃんにとつても似合いそう」

リリスが「子供向け」と言うだけあつて、そのコスメは蠱惑的なイ

メージが強い、今までのリリスのブランドとは対極のパステルカラー基調で可愛いデザイン。お香の言う通り、恋雪に似合いそうだ。

子供向けが似合うなんて怒ってもいい評価かもしれないが、実際にそれは恋雪の好みど真ん中な為、まったく気にせず目をキラキラと輝かせてコスメを見つめている。

だが、恋雪は最初に遠慮した通り肌が弱く、結構前に貰い物の白粉で酷くかぶれたこともあってか、未だに遠慮というか少し怖がっている様子が見て取れた。

その事を察してお香が、リリスに詳しく化粧品の成分などを尋ね、リリスも道楽半分とはいえ自分で立ち上げたブランドに誇りを持っているからか、しっかり天然由来の材料でアレルギージェックも厳しく行つてクリアしている事を説明。

それを聞いて、恋雪はようやくホツとしたように淡く笑つて、遠慮しがちだがコスメを一つ一つ手に取るようになる。

ちなみに恋雪の肌が弱いのは事実だが、肌がかぶれた原因の白粉は、かぶれやすい成分をわざと混入したものだつた。

それを渡したのは、衆合地獄の獄卒。誘惑係の鬼女が亡者ではあるがイケメンで、鬼灯など上層部からの覚えが良くて将来性ありの優良株である狛治に目を付け、恋雪に嫌がらせとして「お香から渡してくれと頼まれた」と騙して使わせたものという真相があったりする。

もちろんこの嫌がらせはすぐにはばれて、狛治は生前のトラウマを盛大に踏み抜かれた為ガチギレしたが、同時にそのトラウマ故に女性には手出しできない為、生前の罪状を繰り返すことは幸いならなかつた。

というか、狛治が恋雪のフォローをしている間に鬼灯とお香が先にやらかして、狛治が真相を知ってキレた時には、狛治も満足な末路を元凶が既に辿っていた。

被害者がお気に入り部下の愛妻という私情を抜いても、その鬼女のやらかしは鬼灯の立場として看過出来る物ではなかったため、遠慮も躊躇もなく鬼灯はその鬼女をフンコロガシ課に丸1年間お左遷し、その後も鬼女にとって花形である衆合の誘惑係に戻さず、鬼女の間で

一番不人気部署の屎泥処で今も雑用係をさせられている。

辞めればいいのと思うかもしれないが、その逃げ道はすっかりお香が潰している。

彼女は女性の噂ネットワークを駆使して、老若男女問わずに鬼女の悪評をすっかり広めて周知させた為、鬼女の「毒殺された美少女亡者に毒白粉を騙して使わせた外道」という悪評が届かない地は、おそらく八寒地獄くらいしかない。

なので下手に辞めて逃げても、余計に自分の悪評が広まるだけと判断する頭くらいはあったのか、その鬼女は真面目に雑用をこなし、お香に「反省している」という評価を広げてもらうことを期待しているようだ。

一応、本当に反省しているようならちゃんとそうするつもりだが、まだまだ反省がお香の合格ラインに達していない鬼女のこととは忘れて、お香はニコニコ笑って姉のような心境で、リリースからコスメの説明を真剣に聞いている恋雪を眺める。

相手が勝手に自分の名前を使っただけとはいえ、年頃の女の子が興味はあるのに化粧がトラウマになる一因は自分だと思っていた為、今の楽しそうな恋雪はお香にとって救いでもあった。

しかし、お香は知らない。

実は恋雪にとって化粧がトラウマなのは、その嫌がらせによるかぶれの割合など些細な物であったことを。

その事を、リリースとの会話でこの後すぐに理解する。

「ごめんなさい、リリースさん。お化粧の事、本当に全然何にも知らなくて……」

「いいのよ、気にしないで。だって狛治様の言う通り、お化粧の必要性が全くないくらいに可愛いものだから。」

あー、狛治様が羨ましい。狛治様のお嫁さんじゃなければ、メイドにスカウトしてEJに連れて帰るのにー」

リリースにかなり初歩的な使い方の質問ばかりなだけでも、迷惑かけていると自分を卑下してしまう恋雪は、リリースが自分から喜々としてサンプル品で薄い化粧を施してくれることも申し分けなく思っ

罪。だけどリリースはからかうように笑って、どこまでが本心かわからないことを言い出す。

リリースのからかいに、つい先ほどの夫からの一撃必殺を思い出し、真っ赤になって恋雪が固まってしまったので、お香が代わりに応えて恋雪をフォローした。

「恋雪ちゃんは江戸時代の生まれだから、未婚の間は化粧なんかしないからわからないわよね。」

こつちで狛治さんと結婚してからも、現世が大戦とかで情勢が悪かった影響で、あの世でも化粧とかお洒落とか華やかなものは非難されちゃう時期だったもの。けど、今は平和なんだから、好きなお洒落をすればいいのよ」

恋雪の母が早世して、そういうことに疎かったという事情もあるが、そこらは上手く触れずにお香は、知識がないことにコンプレックスはもちろん、化粧やお洒落に罪悪感を覚えなくていいと恋雪に伝える。

その思いやりを恋雪は正しく受け取って、感謝する。だが、恋雪が化粧に関して興味はあっても避けがちな理由に、劣等感や罪悪感もまた些細な一部。

なので、何だかここまで気遣ってもらいながら、自分が化粧を避けがちな理由を黙っている事に感じなくていい罪悪感を覚えてしまったのか、恋雪はだいぶ赤みが取れた顔を上げ、やけに遠い目で語った。「……お香さん、お気遣いはありがたいのですが……私が化粧を苦手に思うのは……あの、なんていうか私、とんでもない間違いを犯してしまいそうで怖いからなんです」

「とんでもない間違い?」

恋雪の唐突な告白に、お香もリリースも異口同音にオウム返し。

そして恋雪はさらに遠い目になって、語る。何故か脈絡なさそうな、狛治の死後の裁判が終わって、刑に服す直前のやり取りを。

「……100年程前、狛治さんの裁判が終わって、狛治さんが刑に服す前、大王様や鬼灯様のご厚意で狛治さんと話をさせてもらう機会を与えてもらいました。」

その時、狛治さんの刑罰は1年程で終わることを教えられ、狛治さんは私に何度も何度も謝りながら、自分のワガママで断られて当然だと言いなながらも、私に待っていて欲しいと言ったのです。

1年後、今度こそ祝言を上げて夫婦になつて欲しいと狛治さんは言ってくれて……、私、それが嬉しくて嬉しくて、泣きながらこう返事をしました。

………待ってます。待ち続けますから、私に絶対……お歯黒させてくださいねって」

惚気にしか聞こえない内容かと思つたら、最後のとてつもなく遠い目で語つた、狛治からのプロポーズに対する恋雪の返答に、思わずお香は非常に、非常に優しくどこか切なげな哀愁ただよう笑顔で「……ああ」と納得の声を上げる。

恋雪曰く、お香の笑顔は自分のその返答直後の狛治の笑顔と非常によく似ていたらしい。

「オハグロ？」

リリスの方は「オハグロ」が何のことかわかつていないようで、小首を傾げている。なのでお香は優しい笑顔のまま、恋雪は100年前の自分を「馬鹿なの？」と言いたげな目のまま説明する。

お歯黒とは、その字の通り歯を黒く染めること。江戸時代当時は既婚者女性の証（公家などでは男性も行っていたらしい）であり、身だしなみの一種である。

つまり、恋雪のセリフは「ウェディングドレスを着させてくださいね」くらいのニュアンスで、普通に良い話だ。……良い話なのだが、「お歯黒」がどんなものか詳しく知っていれば知っているほど、二人の表情の意味がわかるだろう。

まず、お歯黒の材料はお歯黒水と五倍子粉^{ふしのこ}。

お歯黒水は時代と地域によって材料や作り方に差異はあるが、基本は米のとぎ汁・酢・茶汁・古鉄・酒などを混ぜて、数か月発酵させる。その所為でただでさえ臭いのに、使う際は使う分だけに火にかけて温めるので、なおさら臭い。そして材料でわかると思うが、普通にくそ不味い。

五倍子粉は、日本中に自生するウルシ科のヌルデという植物の葉に寄生する、「虫こぶ」を乾燥させて粉にしたもの。……虫こぶという名で既に察しが付くだろうが、その正体はヌルデミミフシアブラムシという、ゴマ粒くらいの大きさの虫である。

それら、お歯黒水を歯に塗ってから五倍子粉を塗ると、二つの成分が反応して黒インクと同じ成分になるらしい。

もうこの材料の時点、特に五倍子粉の正体時点でリリースはドン引きだが、そのお歯黒は明治時代を境に廃れて、狛治が無惨の呪いから解放されてやっと死ねた大正時代にはもう誰もやっていなかった理由を聞き、素で言い放った。

「何でもっと早くに気付かなかった？」と。

廃れた理由は開国で、外国人との交流が増えたから。

そしてその外国人に、今のリリースと同じくドン引かれたからだ。

当たり前だ。どう考えても、お歯黒は不気味だ。怖い。しかも、当時の既婚者の身だしなみには、眉毛全剃りもあつたりする。あと、顔の化粧も能面ばりに真っ白、白粉ぬりたくりが普通だ。

想像して見て下さい。眉毛のない真っ白い顔の女の口の中が、歯が全部真っ黒なのを……。

どう見ても妖怪です。本当にありがとうございます。

「私……、狛治さんがしてはいけないことをしたと、償わなければならぬ事だとわかっていても、地獄の刑罰の中ではかなり軽くて短い刑であつたとしても、それでも私は狛治さんに傷ついてほしくなかつた。一秒でも早く、一緒になりたかつたんです。

……けど、私個人の勝手な都合とわがままで最低な発言だとわかつていますけど、私、狛治さんと祝言上げるのが1年後で良かったと、心から思っています。1年、周りを見る機会がなかったら、私は江戸時代の価値観のまま、眉毛そり落としてお歯黒してましたから……」

恋雪や彼女の父親、そして狛治の実父は、猗窩座が狛治の記憶を取り戻した時に霊界通信を積みかければ、そのまま正気に戻った可能性が高いと判断され、本人たちの意思もあつて裁判の後は狛治(猗窩座)の守護霊のような状態だったらしい。

文字通り、変わり果てた狛治を一番間近で見続けていた恋雪には当然、お齒黒が廃れたことに気付く余裕などなかった。狛治の死後、裁判が終わるまでもそうだ。

狛治の刑が確定し、1年後に生前では叶わなかった幸福が今度こそ約束された事で、ようやく恋雪は周りを見る余裕が生まれ、そこで「あれ？」と自分の常識の大半が既に、現世はもちろんあの世でも通じなくなっている事に気付いたのだろう。

だからこそ江戸時代の価値観のまま言い放った発言が、恋雪にとってまさしく黒歴史。

そして自分の「もしも」を想像してしまったのか、恋雪は青い顔色のまま両腕で自分を抱きしめてそう締めくくった。傍から見たら不気味でしかないお齒黒も当たり前だった時代ならともかく、もう誰もやっていないのに齒を黒く染めている自分、しかもそれを最愛の人にドヤ顔で見せつけている自分なんて、悪夢以外の何物でもない。

「う……うん……。確かにそれは、お化粧するのも怖いわね」

恋雪の「とんでもない間違いを犯しそう」という不安の意味を理解して、リリスは苦笑。

けれど、彼女は丁寧に恋雪の頬をパフで叩き、淡いチークで彩りながら言った。

「でも、本当に羨ましいわ。だって狛治様はたぶん、お齒黒はもう廃れてておかしいことをわかっていても、やめろなんて言わなかったんでしょう？」

実際の見た目はどうであれ、あなたが自分の妻になった証を喜々として望んでいるのが、彼にとっては嬉しかったんでしょね」

この時のリリスの雰囲気、少しだけいつもと違うようにお香は感じた。

何度もリリスは羨ましいと言っていているし、それはお世辞ではなく本心からの言葉だと思えたが、同時に無邪気すぎて、それほど深い意味のない言葉だった。

けれど今の「羨ましい」は、本心中の本心ではないかと思えた。

そう思った理由は、彼女の最初の離婚の理由。

原初の人間であり彼女の最初の夫アダムと、上か下かという下品と
いうかしょーもない理由が原因での離婚だが、神はリリスを悪とし
た。しょーもないからこそ、どっちが悪い正しいなどない事を、ただ
「女」であることだけを理由に「男に逆らうな」と命じたのだ。

だからか、彼女は本心から恋雪と狛治という夫婦を羨望しているよ
うに、お香には見えた。

どちらも相手を尊重し合い、だからこそ謝罪合戦になって收拾がつか
なくなるけれど、互いに愛し合っている事を伝え合うこの夫婦に、
今はもう絶対にありえない昔の夢を見たのかもしれない。

そんな風にお香が思っていたら、恋雪が不思議そうな顔で言った。
「羨ましい？ ……リリスさんが私を羨ましがる理由なんてないので
は？」

恋雪は、リリスがどのような悪魔なのかを全く知らない。悪魔に
なった経緯、つまり離婚の理由がアレな為、狛治が笑顔で情報を全力
ガードしているからだが、しかし彼女はリリスの夫、ベルゼブブとは
実は会ったことがある。

本日と似たような経緯で、鬼灯を嫌っているベルゼブブが、仕事は
全部狛治としようと思っただけで離れなかった為に、出会って挨拶を交わし
た程度だ。

けれど、その程度のやり取りでもわかることはある。

「リリスさんの旦那様、リリスさんの事ばかり話していましたよ。
とっても美人で優しく素晴らしい、自慢の妻だって。本当に、その
通りですね。」

私はリリスさんが羨ましいです。旦那様にあんなに自信を持って
自慢される奥さんであるリリスさんが羨ましくて、憧れます」

あまりに真っ直ぐ、純粹に言われたので、思わずリリスも頬を朱に
染めて固まる。

リリスの硬直に、恋雪は困惑してお香に助けを求めようと顔を向
けるが、お香はにっこり微笑んで恋雪の頭を撫でてから、何も言わず
にリリスに代わって恋雪の化粧の続きを施してやる。

実際のところ、ベルゼブブのセリフは狛治と恋雪の相思相愛夫婦が

羨ましかつたからこそその、嫉妬全開なマウントであつたことをお香は察しているが、その事はもちろん指摘しない。恋雪はずっとこのままでいい。

なので、恋雪にはちよつと悪いが彼女の困惑は無視して、同じくマウントであることを察しているであろうが、それでも何かしら思うことがあるのか、自分の指先を赤い顔でいじっているリリスにお香は提案。

「リリスさん。日本地獄には恋雪ちゃんと狛治様夫妻を見守る会というのがありますけど、入会しますか？」

「……するわ」

「何ですか、その会!? 初耳ですよ私!!」

本人たち非公認のファンクラブの存在をサラッと明かされてさすがの恋雪も突っ込むが、もちろんニコニコおっとりしているが我は結構強いお香と、西洋初の悪女であるリリスに敵う訳もなく、恋雪の羞恥による抗議はなあなあに流された。

* * *

そしてその後、急いで仕事を終わらせてきた狛治が、リリスとお香によつて化粧……ナチュラルメイクではなく、本当に最低限の身だしなみ程度の薄化粧を施された恋雪を見た瞬間、その場で膝から崩れ落ちて悶絶。亡者でなければ死んでた。

狛治の死因：嫁が可愛すぎた。

無惨様の楽しい十六小地獄めぐり（衆合地獄編）

「視聴者の皆様、お待たせしました。

想像以上に好評だった『汚いカー〇イ』『眠れる獅子専用目覚まし時計』『お薬飲めなかったね』と、数々の汚名を今なお増やし続ける立てば無惨、座れば無様、歩く姿は生き恥そのものな鬼舞辻 無惨の楽しい十六小地獄めぐり第2弾、衆合地獄編を開始したいと思います」

「勝手に増やしていつてるのはお前だろうが!! もはや汚名なのかそれか!?!」

鬼灯が相変わらず無表情でカメラに向かって口調だけは実に明るく、内容は陰険なのかもよくわからない悪口を言いきくり、そして無惨も無惨で相変わらず獄卒に拘束されながらも懲りずに喚き散らして突っ込みを入れる。

今回、無惨の口がふさがれていないのは、前回の動画で無惨の突っ込みが面白かったと大変好評だったからだ。

しかし無惨の突っ込みが好評なのは、あくまで奴がどんなに自分を全力全開で棚上げしても、鬼灯がその上げた棚ごと無惨をぶっ潰す勢いで突っ込み返し、もしくは無惨以上の理不尽で物理的に叩きのめすからだ。

なのでもちろん、鬼灯は視聴者の期待と自分の心からの欲求に素直に従って、喚く無惨の頭を金棒で叩き潰してひとまず黙らせる。

「さて、今回無惨が巡る地獄は衆合地獄。

邪淫……つまりは性犯罪がらみによる地獄の為、罪状はもちろん刑罰もそれに関することがほとんどです。

ですが、この動画は全年齢対象！ 親御さんが安心して将来の獄卒を目指す子供に見せられる刑場紹介の為の動画です！

なので、罪状と刑罰の内容を若干濁して紹介します。気になる方はぜひとも義務教育を卒業してから、自力で調べるなり、地獄に見学に来るなりしてください」

「おい待て！ 前の動画がそもそも規制なしだったのか!?!」

頭を再生させた無惨がすかさず突っ込むが、鬼灯はいつもの事とし

て、他の獄卒も無惨の突っ込みが理解できないと言わんばかりに首を傾げた。

その獄卒たちの様子に無惨は全力でドン引いて「化け物共!!」と罵った気持ちは、実に癪だがわかる。

けれど実際、獄卒たちには無惨の突っ込みの意味がよくわからない。そもそも、罪人に拷問する獄卒という職が公務員なのだから、価値観を亡者にんげんと一緒にする方がおかしい。

ここに狛治がいたら、「人間の感性からしたら、拷問内容は規制がかかります」と突っ込み兼指摘をしてくれただろうが、残念ながら本日も狛治は欠席だ。「他のどの地獄でもそうですけど、この地獄の刑罰は一番見ていていたたまれない」と本人は言って、参加を断固拒否していた。

地獄の良心が元とはいえ、上司の無様さをいたたまれないと思ってくれているからこそ、この動画は悪乗りをし続けることになっている事を無惨は知らない。

そんな訳で、今日も突っ込みが無惨以外不在のまま撮影は続行。

この地獄で注意すべきなのは、グロではなくエロによる規制。こちららは現世と同じくらいに規制がかかる。

だからこの地獄で動画は諦めるか、ここだけ年齢制限をかけるかした方が良いという意見も出たが、鬼灯は「年齢規制なしで行きます」とゴリ押しした。

理由？ 一人でも多くに無惨の無様を見て欲しいからに決まっている。

その意見は元鬼殺隊の獄卒はもちろん、無惨に騙されたり襲われたりして鬼になった被害者たち、そして地獄の住人である鬼の獄卒たちからも支持を受けて、見事にノー規制で行くことが決まってしまった。

なので、鬼灯も撮影獄卒スタッフも真剣な面構えで撮影に挑む。

今回の動画撮影の合言葉は、「俺達の（コンプライアンスに対する）戦いはこれからだ！」である。打ち切りにならない内に勢いだけで乗り切る気しかないな、こいつら。

「なので、無惨。あなたも発言に気を付けてください。あまり下品なことを言うようなら、あなたの顔面を猥褻物扱いでモザイクかけます」

「拷問がモザイクなしだから、モザイクかかった時点でそれが自動的に猥褻物扱いか!! おかしいだろ、どう考えても!!」

「というか、私はその地獄に堕ちる要素は一切ない!! 女の方が勝手に寄ってきたから相手にしてやったのであって私は「コンプライアンス」」

一応程度に鬼灯が無惨にも注意を促すが、もちろん無惨は割と普通の感性で納得せずに突っ込みを入れ、そして早速規制に引っかかりそうな発言で自分を正当化しようとしてきたので、鬼灯が実に気合いの抜ける掛け声でもう一回、無惨の頭を叩き割った。

「どうやら、モザイクやピー音の順番はなさそうだ。たぶん、必要になりそうになったら鬼灯がこれで全部誤魔化す。」

のちに完成したこの動画を見た桃太郎は、こう叫んだ。

「エロ規制をグロで上書きすんな!!」、と。

* * *

・ 衆合地獄の十六小地獄

「はい、まず最初は『大量受苦惱処』たいりやうじゆくのうしよです。」

「この地獄は性………フアイト一発の方法が異常だったり、それを覗き見して真似した罪に対応するもので、炎の剣で肛門から腰にかけて串刺しにされ、男は辜丸、女は卵巣を抜かれます」

「待て。色々言いたいことが多すぎて今、かなり困っているがまず言わせろ。」

「この地獄で年齢規制なしは無理だろ。ぼかして言ったら最初から罪状が意味不明すぎるわ」

無惨が怒鳴るでもなく素の困惑しているトーンでガチの正論をぶつこんできて、鬼灯もマジで返答に困って目を逸らす。

それに調子づいたのか無惨は鬼灯を鼻で笑って、余計なことを言い出す。相変わらず、死んで100年たっても学習しない、墓穴掘り職人具合だ。

「はっ！ 自分の欲求を優先して周りを見ないから、こうやって自分の浅はかさや愚かさを露呈させるのだ。恥ずかしいものだな」

「ここまで自分の発言全てがブーメランになる亡者ひとって、本当にあなたぐらいですよ」

当然、先ほどの突っ込みは言い返せなかったが、こちらは言い返す必要もなく無惨に戻ってきているので、鬼灯がすることは刺さったブーメランをさらに深く埋め込むこと。

なので炎の剣を構えて無惨の尻に狙いを定めるが、無惨は両手で尻をガードしながら慌ててまだしつこく抗議した。

「待て！ そんなもの『異常な方法』とは何を指すんだ!? そんなもの、それこそ個人の勝手だろうが！」

「相手の同意なしなら、全部『異常な方法』でいいんですよ。それならどうせ、あなたは絶対に何かしらやってるでしょ」

「勝手に決めつけるな!!」

これまた正論で突っ込むが、鬼灯も正論だが理不尽すぎることを言って剣を離さない。が、実は前から思うことはあったのか、無惨の抗議は無視して一人勝手にブツブツ呟き始める。

「……しかし、確かにどのような行為が『異常』なのかは、線引きが難しいですね。本気で嫌がってるのを無理やりが罪になるのは当然としても、乗り気ではなかった程度でもさせた方を罪にするのは酷ですし。」

「………とりあえず、喪服は別に異常に入りませんよね?」

「知るか!! 知りたくもなかったわ、お前の性癖など!!」

その「思うこと」を何故かいきなり真顔で尋ねてこられたので、無惨はマジギレで返す。

しかし、鬼灯の発言で他の獄卒たちも自分の秘める嗜好が世間一般

で、「趣味の範囲だよな」か「犯罪レベルの異常」なのかが心配になってきたのか、ザワザワと小声で騒ぎ始めた。

「学生じゃなくて制服そのものが好きなのは、セーフだよな？ 着せてるの嫁にだし……」

「ふ、踏んでもらうのはちゃんとその手の店でお金払ってるから……同意の上に入るよな？」

「だ、大丈夫だ。大丈夫。俺はエロ動画とか二次元で発散してる。だから痴漢ものもきつと大丈夫……」

「おい！ 今、私より絶対にアウトな奴がいたぞ!!」
「ええ。示しがつかないので、まずは先にあいつをヤリます」

その聞きたくもない性癖博覧会状態のささやきの中から、完全にこの地獄に堕ちる罪人予備軍と思わしきものの暴露が無惨が耳ざとく見つけて指摘し、そして地獄耳の鬼灯もすっかり気付いていたので、鬼灯の狙いが無惨からうっかり自白した獄卒に移る。

獄卒の尻がどうなったかは、残念ながら動画では確認できなかった。

無惨？ しつかりぶつ刺されて、ゴールデンボールも引っこ抜かれたよ。

つていうか、このシーンは本当に無修正でいいんか地獄。

* * *

「こちらは、『割剝処』^{かっこしよ}。

罪状は………口を使ってニヤンニヤンすることです。つて、これこそ同意の上なら好きにさせてやれ！ 私たちの方も裁判で確認したくないわ！

けど、これこそ確認する必要なくお前はやらかしてるだろ！ 刑罰は口に釘を打って頭から貫通させ、それを急に抜き取り、今度は口から耳へ貫いて抜き取りを連続で繰り返して苦しめること。または、溶けた赤銅を口から注ぎ込んで内臓を焼くことですので、さっさとしてしましましょう」

鬼灯がかなり頑張って規制がかからないように濁して罪状を言ったが、普通にその罪状が理不尽だと鬼灯自身も思っ、突っ込みを先

回りで入れる。

それでもつてやっぱり決めつけで、釘と金槌を構えて無惨に打ち込む準備を開始するが、そんな鬼灯を前にしても臆病者なのに癩癩持ちだからか、妙な度胸だけはある無惨が堂々と、鬼灯様の決めつけに反論してきた。

「だから決めつけるなど言っているだろ、ムツツリ鬼が!!」

私は口など使った事ないわ! いつも使わせて「コンプライアーンスっ!!」

しかしまたしても最後まで言わず、鬼灯は金槌と五寸釘を使つて、ノック打ちの要領で無惨の眉間に打ち込んだ。

地獄めぐり前の発言より直接的にヤバいと思つたのか、今度の掛け声には気合いが入っていた。どうでもいい。

* * *

「コンは、『脈脈断処』。

男性にエロいことを迫つた女性の罪に対応する、ある意味男の敵な地獄です」

「無関係すぎるわ、私!!」

「あんた今、ゴールデンボールがないでしょ?」

「最初の地獄でのことか!? もう生えたわ!! そもそも地獄に堕ちてから抜かれたのなら、やっぱり無関係だろ私は!!」

やりたくても出来る訳がない罪状を述べられたので、無惨はこの動画名物の認めたくないが認めざるを得ない正論で突っ込み、そして鬼灯も視聴者の期待通り、つていか期待されてなくてもやる、めっちゃくちゃかつ雑な屁理屈で無惨を罪状に当てはめようとする。

「まあ、この罪状はとつくの昔に女性差別なので、性別は無関係になっています。男女問わずセクハラした者が堕ちる地獄なので、当然お前は堕ちる。」

つていうかあなたは無惨子になれるんだから、元の罪状でも当てはまるでしょうが」

「決めつけるなど言ってるだろうが! というか、名前もうちよつと何か考えろ!!」

しかし最初の屁理屈は無惨への嫌がらせでしかなかったようで、現在の改定した罪状を教えつつ鬼灯は、刑罰に使う溶けた銅を用意する。

そして、その銅を飲ませる漏斗の役割の筒も持って向きなおり、改めて刑罰を説明開始。

「ここでの刑は、筒を通して口の中に溶けた銅を流され、『私は今、孤独です』と大声で叫ぶように促される事です」
「なんて？」

自分のTSバージョンの名前の適当さ加減にキレていた無惨が、素で突っ込んだ。いや、素で訊き返しているのかもしれない。

「……筒を通して溶けた銅を」

「そこじゃない」

「……………」『私は今、孤独です』と大声で叫ぶように促します」

「ここだけ、拷問の主旨がなんか違うのか？」

「私もそう思います。前の補佐官、イザナミさん本当に眠かつたんでしょね」

思わず両者が素になるほど、唐突かつ毛色が違う辱めに鬼灯は遠い目で語りながら、それでも躊躇なく無惨の口に筒を突っ込んで、銅を流し入れた。

「私は今、孤独です」と叫ばせたのかどうかは不明。

* * *

「こちらは『悪見処』あくけんしょ」。

他人の子供に性的虐待を行った罪に対応するもので、自分自身の子供が串刺し（意味深）になる様子を見せられます。そして本人には肛門に熱した銅を注いで、肉体的苦痛も与えます。

無惨には、梅さんを遊女として利用し続けていたことがこの地獄の罪状に当てはまります。彼女は鬼になった年齢のまま精神年齢も止まっています

「あれの頭の悪さからして、それ以外の生き方など出来る訳ないだろ！ 優しくしてやっただけ、感謝して欲しいくらいだ!!」

無惨が絶対に「自分は当てはまらない」と言い出すことはわかっていたので、先回りで鬼灯が答えておいたがそれでも無惨はやはり、利

用して貶めてきたものを更に貶めて罵り、自分を正当化させる。

けれどそんな反応はわかり切っていたので、鬼灯は無視してそれよりも困った部分を注目して、軽く愚痴った。

「けど、この刑罰は無惨には無意味なんですよ。こいつ、実子がいるいない以前に、自分の為なら実子も躊躇なく身代わりにするタイプですから」

「そうですね。なら、ここは銅をケツに注ぐだけですか？」

幻覚とはいえ「親の因果が子に報い」が刑罰になっている為、自己愛の塊である無惨には通用しないことを残念がるように鬼灯が呟き、他の獄卒も同じく残念そうにしながらも銅を用意。

だが、鬼灯は真顔で言った。

「いえ。串刺しも行いますよ。無惨の息子で」

「は？ 何を言ってるんだ、貴様は。おらんわ、私にそんな………まさかお前!？」

存在しない「息子」を串刺しにすると言い出し、無惨は「またこの頭おかしい鬼は訳のわからんことを言い出した」と思っていたが、鬼灯の視線が自分の下半身に向いている事に気付き、顔から血の気が引いて内股になって叫ぶ。

鬼灯は何も答えない。無言で彼は懐から大きな、実によく切れそうな裁ちばさみを取り出した。

串刺しにされる前に、無惨の息子はちよん切られましたとき。

っていうか、本当にこのシーンは修正なしでいいのか地獄!？」

* * *

『だんしよ団処』。

罪状は牛や馬を相手にファイト一発「ないわーっ!!」

鬼灯の説明を最後まで言わず、無惨が全力で叫んで否定する。当たり前前だ。今までとは違ってこれはマジで拷問を受けたくないからではなく、正真正銘してないと否定したいだろう。

「ない! これは正真正銘、ないわ!!」

「あなた、最終決戦で下半身が獣っぽかったじゃないですか」

「関係あるか!! というか、それは服がなかったからだ! あったら

普通に人間の足で出てきてたわ!!」

しかし鬼灯は当然、見逃すわけがない。

屁理屈ですらない無茶ぶり、流石の無惨も全裸で再登場はしたくなかったからこそ、何とかした決戦時の下半身を理由にしてももちろん墮とす。

だが、鬼灯の無茶ぶりは残念ながら意味なかった。

「……鬼灯様。さすがにこの地獄で規制なしは無理ですよ」

「あー……ですよ。拷問内容が、地獄産の体内が炎の牛馬に罪人が生前やらかしたことをやることで、罪人を焼き尽くすものですからね」

他の獄卒が初めからわかっていたことを指摘し、鬼灯も認める。

性関係には規制がかかる為、焼ける無惨はともかくその前がどうしても映せないのだ。

「そもそも私はそんなことしない!!」と主張する無惨は無視して、鬼灯は実に残念そうに言った。

「それもあつて、この地獄の刑罰は無惨には効果ないんですよ。なので、ここはミノタウロス形式で行きます」

「は?」

無惨の言う通り、動画に出来るかどうかの問題を横に置いて、そもそもそんな性癖はない無惨にはこの刑は全くの無意味だ。

だからこそ鬼灯は初めから別の方法を考え、準備していた。さすがは孤地獄が一番好きな地獄と答えるワーカーホリック。

獄卒が用意したのは、ハリボテの牛。それは人が一人……無惨くらいが入れる大きさのもので、その人が入れそうな扉っぽいもの（外に南京錠つき）の他には穴が一つ空いている。

その穴の位置は……察して欲しい。

「それでは視聴者の皆さん。『ミノタウロス式』が何の事かわからなければ、ギリシャ神話を調べてください」

無惨をハリボテの牛の中に押し込むのを背景に、鬼灯はそれだけを言っただけで動画は暗転。

気になる方は、自己責任で調べてみよう。「ミノタウロス」「母親（パ

シパエ)」あたりを検索ワードにして。

* * *

「ここは『多苦惱処』たくのうしよ。」

男同「ある訳ないだろ!!」

またしても、先ほどよりも早く割り込んで無惨は否定。尻を押さえ
ているのは見ないであげて。

「あなた平安時代から大正まで生きてたんだから、そこまで全力否定
する程の事ですか？ 同性間がマイナー扱いになってきたのは明治
後半からで、それ以前はちよつとその時代のことを調べたら、その手
の貴族や武士の話がゴロゴロ出てきますよ?」

無惨の全力否定ぶりに、鬼灯は割と本気で意外そうに尋ねる。

そのマジで自分がそういう趣味だと思っている鬼灯にムカついて、
無惨は「じゃあお前はその時代、男に手を出したことあるのか!？」と
反論すれば、「ある訳ないだろう!!」と言い切られた。

その時代や土地によって同性愛が普通に認められていたとしても、
そういう嗜好がない者はないのだ。差別はいけないけど、強要や偏見
だって同じくらいにいません。

「普通に男にも手を出してると思っていました。すみません。

けど、この地獄はぜひとも落としてほしいと、婦女子……いえ腐
女子の方々から希望が殺到していたので、墮ちろ」

「最初の謝罪に何の意味があつたんだ!? そしてその希望を出した奴
らは焼き払え! 腐海に還せ!!」

無惨の言う通り、まったく意味のない謝罪を口にしてすぐに理不尽
すぎることを言い出しながら、鬼灯は無惨に紹介する。

腐った方々が、この地獄に顔と声だけは皮肉なし純粹に褒められる
無惨を落としてほしがった訳を。

「さて、紹介しましょう。こちらの獄卒が多苦惱処名物、燃えるイケメ
ン(注：本当にいます)！」

そしてここでの刑罰は、生前に愛した男が燃やされている幻影を見
せられます。罪人がそれを抱く(意味深)と相手の男から発する炎で
共に焼き尽くされるを繰り返すことです。

……こちらは無惨の方から抱き着く訳がないので、獄卒の方から追いかけて抱いて（意味深）もらいましよう。さあ、鬼ごっこの始まりです」

「来んなああああっつっ!!!」

縁壺からも逃げきっただけあって、人間に戻っても逃げ足は割と早い無惨を、燃えるイケメンたちは貼り付いた笑顔で追う。

そして再び、動画は暗転。しばし真っ暗な画面に「や○ないか」という替え歌で有名になってしまった曲がBGMで、無惨の悲鳴が聞こえるまで流れ続けた。

* * *

『忍苦処』です。

戦争などで手に入れた他人の妻を寝取ったり、それを他人に与えたものが堕ちます。刑罰は、獄卒たちが罪人を木から逆さ吊りにし、下からの炎で焼き、息をすると肺まで燃え上がるような苦痛を与えて焼き殺すことを繰り返します。

……まあ、つまりは珠世さんにやらかしたこと辺りが、当てはまりますね」

「あれは勝手に自分で夫と子を殺して好き勝手人間を喰らっておきながら、私に逆恨みしてただけだろうが!!」

またしても尻を押さえながら、吐き捨てるように無惨は珠世を罵った。

彼女を知る獄卒たちから一斉に敵意を向けられるが、鬼灯の方は何も言わない。彼女が反省して贖罪し続けている事は知っているし、それを評価はしているが、やけっぱちになって多くの罪なき人を自らの意思で食い殺した過去があるのも事実なので、鬼灯は彼女を擁護してやる気はない。

「別に珠世さんの事がなくても、心当たりは山ほどあるでしょ。」

あなた絶対に入った女は囲うって思われてますから」

「誰にだ!?!」

「……夢女子?」

『何だそれ!?!』

しかし無惨の発言を認める気はもつとないので、やっぱりゴリ押しで罪状を押し付ける。が、その根拠が他力本願過ぎて、最後は無惨どころか獄卒たちからも突っ込まれた。

それでも鬼灯は揺るがない。いや、少しは揺るげや。

「腐女子はなんとなく意味を理解してたようなのに、夢女子はわからないんですか、65位」

「何の話だ!? というか、何だその順位は!?!」

「ちなみに、ワンパチという犬キャラに負けてますよ。ワンパチさんは15位でした」

「全く意味がわからんが、大概はその犬に負けてるだろその順位じゃ!!」

無惨を逆さづりにしながら、まったく詳しいことを教えず、とりあえず屈辱的そうなことだけを教えてそのまま燃やす。

ちなみに、ワンパチに惜しくも負けた16位は風柱、不死川 しなずがわ 実弥 さねみ

……。ドンマイ! っていうか、ワンパチ高すぎない?

* * *

『朱誅処』。

羊やロバ「ないと云ってるだろうが!! というか、統一しろ!! 何故分けた!?!」

「一応、仏を敬わなかったって罪もあるからですかね?」

「仏が何の関係あるんだ、これ!?!」

団処と同じタイプの罪で墮ちる地獄だと察した瞬間、無惨は全力否定。

鬼灯は本当に一応程度の団処とはわざわざ別の地獄として分けている訳を話すが、無惨の言う通り仏は何の関係があるかはわからない。

わからないし、鬼灯としても一つに纏めてしまいたいのだが、纏めなかった理由はある。

その理由を、鬼灯は金棒フルスイングしながら答えてくれた。

「お前を墮とす地獄が一つでも多い方が良くから纏めなかつたんだよ!!」

「私が堕ちる要素ないのに、わざわざ残すな!!」

肉や内臓、骨まで残さず喰らい尽くす鉄の蟻の所まで鬼灯は金棒で無惨をぶっ飛ばすが、ぶっ飛ばされつつも無惨は文句を忘れない。

本当にこいつある意味すごいなと獄卒たちは、したくない感心をしながらかつ飛んだ無惨を見送った。けど、仏を敬わない罪でも堕ちるので、ここの地獄には堕ちる要素あるぞお前。

* * *

「お次は、『何何奚処』」

兄弟、姉妹を相手にやらかした者が堕ちます。刑罰はシンプルに、燃え上がる炎に焼かれて鉄の鳥の大群に食い尽くされます」

「だからー・私に関係ない!!」

これもまた無惨は全面的に否定するが、動物相手の団処・朱誅処、同性相手の多苦惱処ほど早く全力で全否定しないあたり、こいつの倫理観の低さがよくわかる。

なのでもちろん、最初からだげ遠慮しない。これも屁理屈をこねて、叩き落とす。

「あなたの血を分けた鬼という時点で、あなたの身内みたいなもんでしよう。で、絶対にお前は気に入った女は鬼でも人間でも手を出すし困うから、この罪状は当てはまりますよ65位」

「だから、その順位は何だ!?!」

まだしつこく夢女子から選ばれた、名譽的なのかそうじゃないのかなり微妙な順位を弄りながら、鬼灯は鳥獄卒たちにヒツチコツクを実演させた。

* * *

「『涙火出処』です」

禁を犯した尼僧と、ニヤンニヤンした者が堕ちます。行われる拷問は、獄卒に毒樹のトゲを目に刺され、鉄のはさみで肛門を裂かれ、そこに溶けた白蠟を流し込まれますが、ここは土地そのものが特殊で、ここで流した涙はその名の通りに炎となって、当人を焼きます。なのでついでに、玉ねぎを用意してください!!」

「ついでで拷問を増やすな! あと、この地獄変だろ! 禁を犯した

尼僧の方を罰しろ!!」

サラツと拷問を増やす鬼灯だが、当然無惨は流さず突っ込む。ついでに神経質だからか、増やされた拷問より流してしまいそうな、おかしな所にもしつかり突っ込みを入れた。

「尼僧の方は、普通に脈脈断処に堕ちますよ。」

この地獄は正確に言うところ、「向こうから誘って来たのだから、誘いに乗った自分は悪くない」という考えを罰するものです。なので現代では当然、相手は尼僧とは限りません。援助交際はモロここに当てはまりますし、水商売や風俗関係にのめり込む者もここに堕ちるでしょう」

「ああ、なるほどな。だから『禁を犯して尼僧と』ではなく『禁を犯した尼僧』なのか」

「前者の場合なら、『何の非もない真面目な弱者に対する乱暴』ということで、より重い罪となり衆合どころか大焦熱地獄行きになりますね」

説明しながら、実は無惨に突っ込まれるまでこのあたりはよく新卒が勘違いしていたりするので説明しなくてはと思っていたが、無惨をどうやってこの地獄に堕とす屁理屈をこねるか、そしてついでにより苦しむ拷問は何かに気を取られて、すっかりそのことを忘れていたことを鬼灯は思い出す。

一応は刑場紹介が主旨という建前（本音は無惨を笑いものにする、もしくは鬼灯のストレス発散）の動画なので、説明不足では格好がつかない。

なので、神経質で揚げ足取りの為なら細かい所をよく見ている無惨の突っ込みに、実は感謝していた。

だから鬼灯は、その感謝をもちろん口にも態度にも出さないが、ついでに追加しようと思っていた「ねりワサビを鼻に詰め込んで泣かせる」はやめておいた。

玉ねぎの方はやった。

* * *

「ハハハ、『一切根滅処』」

女性の……おいど……だと尻だから意味が変わって来るな
……『こ』か『ア』で始まる部分を使つて、やらかした
者が堕ちます。刑罰は獄卒が罪人の口を鉄叉で広げて熱銅を流し込
み、耳に白蠟を流し込みます。そして鉄の蟻が罪人の目を喰い、刀の
雨も降ります」

「もう年齢制限なしは諦めろ」

ものすごくものすごく鬼灯は頑張つて、罪状を濁してぼかして何と
か全年齢対象にしようと思つたが、流石に無理がありすぎた。

その為か、無限城で炭治郎と義勇に向かつて言い放つた「しつこい」
「異常者」発言の時と同じように、無惨はうんざりしつつもあまりの異
常者ぶりに引いて憐れんでいるような顔で、これまた正論を言うので
鬼灯は刀の雨を自力で降らせた。

ついでにさっきの地獄で使わなかつたワサビも、結局使つた。

* * *

「無彼岸受苦処」です。

ここはシンプルに、不倫・浮気の罪で堕ちる地獄です。刑罰もこれ
またシンプルに火責め、刀責め、熱灰責め、病苦による責めなど、次
から次へと責め苦がやってきます」

「不倫も浮気も私はしていない！ 周りにいたのはただの処理道具だ
!!」

「今、新たに『モテない男からの八つ当たりと言うには真っ直ぐな憎悪
を込めた責め苦』が刑罰として追加されました」

無惨の相変わらず過ぎる発言が見事な自爆を果たして、鬼灯の言葉
通り新たな刑罰が爆誕する。

皆様、「自業自得」と「口は禍の元」とはこういうことを言います。
よく覚えて、反面教師にしましょう。

* * *

「こちらは『鉢頭摩処』です。

僧となりながら俗人だったときに付き合っていた女性を忘れられ
ずに夢の中で関係し、さらに淫欲の功德を人々に説いた者が堕ちま
す」

「昔の女などむしろ覚えてないわ！　そして後半はともかく、前半は夢の中なら放っておいてやれ！」

一つ前の地獄で余計すぎる自己弁護で新たな刑罰を生み出していたのに、まったく学習せずに最低すぎる自分の所業を根拠に、無関係を主張する頭無惨加減。今度は獄卒たちも、ムカつくよりドン引きが勝った。

しかし鬼灯の方は、実際にこの地獄に堕ちる罪状はほぼ無惨無関係なので、余計なことを喚くのはありがたい。無関係でも、ここまで屑ならどこに叩き落としてもクレームが一切ないからだ。むしろ、落とさない方がたぶん炎上する。

「私もそう思います。なので今では解釈を広げ、『昔、関係があつた相手のことを忘れられずにストーカー行為を行う者』が対象です。」

刑罰は、獄卒に瓶の中で煮られて鉄杵で突かれます。そしてあそこに池があるでしょう？　苦しむ罪人を見ると、あの池の中に蓮華が見え、そこに行けば救われると思つて走り出すんですよ。しかしそこまでの道のりの地面には、敷き詰められた鉄鉤があり、それに足を引き裂かれ、やつとの思いでたどりつくとき背後に控えた獄卒に刀や斧で散々に打たれる。

鉢頭摩とは紅蓮華のことで、あたり一面その赤色をしているのは、その所為です」

「刑罰の説明より、私の何がこの地獄に堕ちる要素だったかを、せめてイチャモンでもいいから説明しろー!!」

なのでまったく気にした様子なく、無惨を瓶の中に放り込んで鉄杵でつきまくり拷問実演しながら、現在の堕ちる罪状と刑罰の説明を鬼灯はして、まったく無惨が堕ちる理由に関してはノータッチであることに無惨がキレル。

キレつつ、鬼灯が説明したのに鉢頭摩と呼ばれる罫でしかない蓮華の池まで逃げ出すのだから、本当に視野が狭くて目先の事しか見えない。

「拷問のし甲斐があるのかないのか、本当によくわからない生き物ですわね」

狛治が以前言っていた感想に深い同意を眩き、鬼灯は池で獄卒にボコられる無惨を眺めた。

『摩訶鉢特摩処』。

出家僧ではないのに僧であると偽り、しかも戒律に従わなかった者が堕ちます。詐欺宗教学人はもちろん、定義を広げて結婚詐欺もこの地獄の罪状に含まれます。

刑罰は熱した白蠟の河に、罪人を落とします。ここに落ちると身体がバラバラ、骨は石に、肉は泥になり、最終的には魚になり鳥についばまれます」

「その謎の進化論にも突っ込みを入れたいが、私より童磨堕とせ。間違はなくあいつはここ行きだろうが」

「試しに堕としてみましたが、魚になったのは良い体験だったとか、ヘラヘラしてたんですよ……」

不気味な魚がうごめいて泳ぎ、鳥に比べられる白蠟の河を眺めながら、無惨が自分の言うこと聞くのと強さだけを評価して、それ以外は心が読めるからこそドン引きし続けた部下の名を上げて堕とせと言うが、鬼灯は遠い目になってもう既にやってみただけの意味がなかったことを告白。

鬼灯の告白に対しまさかの無惨から同情と、「……ああ。わかる」と言いたげな理解の視線をもらってしまった。

もちろん友情など芽生えるはずもなく、鬼灯は無惨を河に蹴り落とした。

『ここは』火盆処』。

元は出家僧ではないのに僧のフリをして、そのうえで女性に興味を持つたり、身の回りの生活用品に執着し、正しい法を行わなかった者が堕ちる地獄でしたが、僧を名乗る詐欺宗教学系は先ほどの摩訶鉢特摩処に統一し、ここは医者や教師、警察など信頼第一の立場であることを利用した性犯罪者を、今は対象にしています。

刑罰は蠟燭のように罪人自身の身体が炎に包まれ燃え盛り、泣き叫

ぶたびに口や目鼻から炎が体内に入り、骨まで燃やし尽くします」
「だから、私は無関係だ！ 女を相手にするのにわざわざ、立場を利用したことなどない!!」

魚から何とか人間に戻ってすぐだと言うのに、相変わらず元気に無惨は自分の無関係さを、モテない獄卒を敵に回しつつ主張。本当に少しは学習しろよ、お前。

「そうですね。どちらかと言うとお前は、自分の表向きの社会的立場を得る為に、女性を利用してましたね。

だから、とつとと燃えろ」

そして鬼灯も慣れた調子で、一応は無惨の主張を認めつつ、けれど見逃す訳もなく、もつと最悪な所業を上げて金棒フルスイングで燃え盛る火の中に無惨を叩きこんだ。

* * *

「衆合小地獄、最後の地獄は『鉄末火処』てつまつかしよ」。

出家僧だと詐称し、そのフリをしたまま、女性の舞いや笑い声、装飾品に心引かれてみだらな想像にふけた者が堕ちます」

「私を堕としたいから、また纏めなかつただろうこの地獄!!」

「当たり前だ！ お前が苦しむ地獄を減らすわけないだろ!!」

先程の火盆処、そしてその前の摩訶鉢特摩処と同じような罪状で堕ちる地獄なのに、現代に合うように改変した内容を言わない事で、無惨がその理由を団処と纏めなかった忍苦処と同じだと察してキレる。

そして鬼灯もキレて、炎の熱鉄の雨が降りそそぐ刑場にソバットで無惨をぶち込んだ。

どう見ても、鬼灯の逆ギレである。しかし誰も、無惨に同情しない。マジである意味すごいな無惨。尊敬しないけど。

* * *

「さて、前回は公開できる地獄が少なかったので物足りない方が多かったでしょうが、今回は無事、全ての小地獄を紹介出来ました。……一部、暗転があつたのは大人の事情だと、理解していただけたらありがたい。」

まあ、あの暗転シーンを生で見たい方がいましたら、ぜひとも義務教育を終えてから現場に見学、もしくは獄卒に就職してください。特に多苦惱処は男性獄卒が就きたがらないので、腐ったお嬢さん方は歓迎します。お仲間と和気藹々、薄い本のネタとモデルにどうぞ」

「お前は何を勧めているんだ!？」

無事(?)コンプライアンスとの戦いを終えた鬼灯による、訳のわからん勧誘になっている締めめ挨拶に、無惨が突っ込む。

前回は撮影が終わったら、再生も待たずに阿鼻にポイッと落とされていた無惨だが、今回は何故かしっかり全身を完全再生させてから、まだここにいる。

その理由は、さっさと明らかになる。

「無事に全ての刑場紹介を終えましたが、おそらく皆さん思っているでしょう。オチが弱いと。」

前回のこいつの為としか思えない罪状で墮ちる地獄、極苦処の存在がオチに丁度良かったのですが、今回は微妙ですよね。回る順を変更して、多苦惱処を最後に持って行こうかとも思ったのですが……ふと、私は気付いたのです。

こいつ……無惨は八大地獄を網羅している大罪人だからこそ、火車さんのお迎えで阿鼻直行だった為、死後の十王裁判をどこも受けていないことに」

無惨の突っ込みをガン無視して、鬼灯はカメラに向かって語る。

オチ扱いされている事にも無惨はキレて後ろで何か喚いているが、それも無視して語る鬼灯に何やら不穏なものを感じ始めたのか、その勢いは徐々に衰える。

気付いたのは、不穏な鬼灯の雰囲気だけではない。無惨の目は、一度気付いてしまったらもうそれから離せなくなった。

「なので、最後はこちらにお願いしたいと思います」

そう言つて、鬼灯は無惨が目を離せなくなっている「それ」を指さし、カメラも勢いよくそちらを向いてライトが輝く。

「ご紹介しましょう！ 宋帝庁の名物猫獄卒！ 漢さんです!!」

「それ、猫!？」

「猫ですよ！ どう見ても!!」

「私を知っている猫と違う!! 火車の方がまだ普通の猫に見える!!」

ライトに照らされて登場したのは、ふかふかのクッションの上に足を組んで腕も組んで座つて無惨をガン見している、やけに眉毛っぽい柄も顔の濃い……猫？ だった。

無惨が猫かどうかを本気で疑う気持ちはわかる。その猫、漢は手足が長くすらつとしていて、背筋も「お前、猫背はどうした？」と訊きたいほどに良いので、なんか妙に人間っぽい。あくまで猫獄卒、尾も一つなので猫又ではない、つまり妖怪ではないはずなのに、無惨の言う通り妖怪である火車の方が、ずっと普通に猫らしい。

「猫ですよ！ 少なくとも白澤さんと茄子さんが量産する、あのハイチュウのお化けみたいなのと比べたら立派な猫です!!」

「何と比べてるんだお前は!？」

この無惨の主張に関して内心では割と同意しているのだが、鬼灯は最も猫に見えない物体を例に上げて、漢が猫であることをゴリ押し。この後結構長い間、無惨は漢と比較された「ハイチュウのお化け」の謎に頭を悩ませた。

「まあ、漢さんが猫であるかどうかは、今はどうでもいいことです。それより彼をゲストにお迎えした理由は……、漢さんの正確な所属は宋帝庁ではなく衆合地獄。宋帝庁は、主に邪淫罪に関して詳しく取り調べる庁なのです。

……そして、漢さんの役割は亡者の目を見て真偽を見極め、有罪の場合——」

じつとやたらと濃い顔で無惨を見つめていた猫、漢がゆっくりと立ち上がる。二足歩行で。姿勢もやっぱり、舞台俳優やダンサーのようにやたらと良い。

「鬼灯殿、わかったぞ。まったく罪の意識がなかったから少しわかり

づらかったが、まあわからないのならとりあえず有罪にしとけばいいだろう」

猫じゃなかつたら大問題すぎる全然わかっていない発言をかますが、言ってるのが漢なのと言われているのが無惨なので、鬼灯は当然、他の獄卒も突っ込まない。無惨も漢に引きに引いているからか、言っていることが頭に入らず、突っ込みも出てこない。

そんな無法地帯状態なのを良いことに、漢は尻尾をゆらゆら揺らし、直立不動を止めてようやく猫らしく四つん這いになる。

……無惨に向かって真つすぐ向き合い、頭を下げた尻を高く上げる、いわゆる狩りの姿勢を取った。

「は？」

無惨の困惑の声の直後、鬼灯の言葉と漢の行動は同時だった。

「有罪の場合——、亡者のあそこをお噛みするのが漢さんの仕事です!!」

「裁判時点でそれか!? ジャブきつすぎだっ!?!?」

弾丸のような勢いで飛んで来た漢のジャブに、全部言えず無惨は悶絶。

結果はわかっていたが、鬼灯以外の男獄卒はその強力すぎるジャブに思わず内股になった。

「その礼儀はたぶん、芋にとつても迷惑です」

唐瓜と茄子は、食堂の入り口で困惑していた。

「うまいー！ うまいー！ うまいー！」

食堂に入る前から、「……なんか変なのがいる」と思っていた。

普通に唐瓜たちも地獄の社食は美味しいとは思っているが、そんな食堂の外にも聞こえる程、そして連呼する程ではないことを知ってるし、例えそう叫びたいほどのうまさだったとしても、料理漫画じゃないんだから、そんなこと酔っぱらってない限り普通はしない。

なので、唐瓜は「……今日は外で食べようかな」と全力で引きながら思ったが、茄子が好奇心で誰が叫んでいるかが気になって見たいと言いつ出したのと、聞き覚えが全くない声だったので一応は確認して、鬼灯に知らせた方が良さそうだと元来の真面目さを発揮して、結局Uターンはせずに食堂までやって来た。

そして、おそらく茄子と同じ好奇心、唐瓜と同じく確認して報告の為に来たであろう獄卒たちと同じように、「……なんだ、これ？」と言いたげな顔で小鬼二人も困惑の棒立ちギャラリーに追加。

「うまいー！ うまいー！ うまいー！」

そんなギャラリーが出来上がっている事に、ギャラリーを生み出し続けている元凶は気付いた様子もなく、食堂の天ぷら盛り合わせ定食（大盛り）を気持ちが良いくらいにむしゃむしゃ元気よく食べている。

食堂は閻魔庁内では比較的誰でも入れる、現に粕治と恋雪夫婦はたまにここで一緒に昼食をとったり、唐瓜の姉も「弟の顔を見に来た」という名目でちよつとした相談やら愚痴をここで唐瓜に零したりする。なので相手がたぶん獄卒ではないこと、そして髪の色が毛先は赤い金髪というだいたい奇抜な色なのでちよつとわかりにくい、鬼ではなく亡者であること自体に疑問を持っている者はおそろくない。

簡単に入れるといってもあくまで法廷や刑場と比較した話であつて、閻魔庁内に入る事自体にそこそこ面倒な手続きが必要だ。獄卒の身内や出入り業者ならまだ気軽だが、あの世の一般住人が散歩感覚でふらつと来て見学や、レストラン代りに食事できるような場所ではな

い。

だからこの「うまい！」しか言っていない、不審というかただひたすらに変な人という印象を与えるその亡者も、身元がすっかりした人なのだろう。

実際、困惑しつつ見ていると少なくとも悪い人には見えない。

食堂のおばちゃんが笑顔で持ってきてくれたご飯のお代わりも「ありがとう！ ご婦人！」と元気よく礼を言うし、そもそも彼の「うまい！」連呼に困惑しているのは新卒や比較的若い鬼ばかりで、古参の獄卒たちは自然体でスルーか、「またやってるよ……」と言わんばかりのあきれ顔だ。

職業柄、悪人に容赦する訳ない者達ばかりなので、彼をおそらく知る者は全く警戒していない事からして、その亡者はただ単に変な人なだけだろう。

そう思っ自分たちもスルーしたいのだが……、その人はとことん変な人だった。

「うまい！ うまい！ うまい！ !! わっしょいわっしょいわっしょい!!」

『!?!』

前にも隣にも誰も座っていない状態で、食堂のTVでも自分が食べている定食でもなく、真っ直ぐ前だけを向いて食べ続けるという、悪い人ではなくても何かやたらと怖いことを、「うまい！」という感想でなんとか印象をホラーからコメディに緩和させていた変な人が、急に神輿でも担いでいる掛け声を上げ始め、ギャラリを更に困惑の渦に叩き落とす。

「わっしょいわっしょいわっしょいわっしょい!!」
「うるさい」

そんな困惑ギャラリをよそに、一人で祭りの掛け声を連呼し続ける人の頭を、いつからいたのか鬼灯が背後から金棒で殴って止める。

金棒で殴ったと言っても、棘の部分ではなく持ち手の部分を強めに上から後頭部に置いたというレベルであり、鬼灯にしては相手が獄卒でも罪人でもない亡者であるというのを抜いても、優しい対応だと唐

瓜には思えた。

実際の所、別に地獄の関係者じゃないから手加減した訳ではなく、むしろ金棒で普通に殴っていたら、そのまま避けられるなら良いが、下手したら食堂のテーブルでも使って応戦しかねないから、それはさすがに周りにも食堂にも迷惑だからしなかっただけ。

今のだって、相手に自覚はないが気付かなかった・避けられなかったのではなく、殺気や敵意の類はなかったから、甘んじて受けたようなものであることを鬼灯は知っている。

「まったく……何しているんですか、杏寿郎さん」

「おお！ 鬼灯殿！ 久しぶりだな！」

鬼の中でも最強格である鬼灯から見ても、それぐらいにこの元鬼殺隊炎柱である煉獄 杏寿郎という男は規格外な存在なのだ。……色んな意味で。

* * *

「なんというか……色々訊きたいことはありますが、とりあえず、あの『わっしょいわっしょい』は何だ？」

振り返った煉獄が朗らかに鬼灯と会ったことを喜ぶが、鬼灯の方は疲れているような呆れているような面倒くさそうな顔をして、自分の昼食である生姜焼き定食をテーブルに置いてから、たぶん食堂にいる者全員の疑問を代表して訊いてくれた。

その問いに、煉獄は最初の独り言から変わらず明朗に言い切る。

「美味しいものを食べたなら、その食材とそれを作ってくれた者を労わり、感謝を示すのが礼儀だと俺は思っている！ そして俺はサツマイモが好物で、この芋の天ぷらを食べたらつい感謝の気持ちと美味さの感激が極まって『わっしょいわっしょい』と言ってしまった！」

「その礼儀はたぶん、芋にとっても迷惑です」

そしてこれまた、煉獄以外全員を代表した感想で突っ込む。

前半の「礼儀」で「うまい！」連呼の謎は解けたが、後半がシンプルなようで結局意味不明だ。いや、前半も後半よりはマシに見えるだけで、やっぱり「うまい！」をあんな大声で連呼するのは、食材はともかく作った人に対しても迷惑である。普通にうるさい。けど褒め

られてるから、苦情を言いにくい。本人的には感謝を表しているのだろうが、結果が優秀な嫌がらせすぎる。

そんな感じのことを獄卒たちが心の中で総突っ込みしているのだが、煉獄自身はわかかっておらず不思議そうに首を傾げていた。

相変わらずの天然というか変人具合に、鬼灯の方はもう既に慣れ切っているのに気にせず、慣れていないからこそ未だに困惑しているギャラリーを見渡し、そして言った。

「皆さん、お騒がせしましたが見ての通り、この人はただ単に変な人です。身元や人柄は私が保証します。」

です。ので気にせず、食事なりなんなりしてください」

この地獄で最も発言権のある鬼灯に言われたら、まだ困惑は残しつつも納得するしかない。というか、鬼灯からの「変な人」断言で、力技だがほとんどの獄卒が「あれは説明が不可能だよな……」と納得してしまった。

しかしそこで引き下がらず、そして鬼灯相手でも無邪気に懐いている者はテコテコ近づいて、普通に訊く。

「鬼灯様。結局、その人は誰なんですか？」

言うまでもなく、それは茄子である。幼馴染の躊躇の無さに呆れるやら尊敬するやら複雑な感情を抱きつつも、唐瓜も便乗して「獄卒じゃないですよね？」と尋ねる。

そして鬼灯も別に詳しく語れない事情があるから「変な人」で説明を終わらせた訳ではない為、訊かれたのなら普通に答える。

「元鬼殺隊の柱、炎柱の煉獄 杏寿郎さんです。この間、講習でお会いしたしのぶさんや無一郎さんの同僚にあたります」

「うむ！ 無惨を討伐した世代の柱となれたのは俺の誇りだ！ まあ、俺は無限城の戦いのだいぶ前に殉職してしまっただがな！」

鬼灯の答えに煉獄は腕を組んで胸を張って明朗に言い切り、唐瓜はもちろんマイペースな茄子も返答に困らせた。

死んでから死後の裁判も経てあの世の住人にまでなってしまうえば、自分の死んだ経緯など気にしなくなる者の方が多いものだが、彼の生前の職業と「殉職」という情報から考えたら相当壮絶な死に方であっ

ただろうに、ここまで堂々と言いきられたら、そりやどう反応したらいいかわからない。

小鬼たちが困惑している理由を鬼灯はわかっているだろうが、もう煉獄に「反応に困ること言うな」と突っ込むのも面倒なのか、彼の発言はスルーしてそのまま説明を続ける。

「獄卒だった時期はありますが、今は地獄の焦熱小学校で社会科教師をしています。」

社会科見学の引率などで、年に数回閻魔庁に訪れることがあるので、顔と名前は覚えておいた方がいいでしょう」

「教師？」

唐瓜の「獄卒じゃないんですか？」という問いに対する答えに、反応に困る話はどう投げ捨てて忘れて唐瓜はオウム返し。

そのオウム返しにも煉獄は「うむ！」とまず肯定してから、どこまでも明朗快活に発言する。

「50年ほど前までは獄卒で、罪人たちを呵責していた！ だから君たちの先輩にあたるな！ しかし、罪人といえど一方的に人を甚振るのは性には合わないと感じていたんだ！

それに、その頃は現世の大戦が終わって日本も平和になってきた頃だったからな！ 罪人を呵責する獄卒も必要で重要な仕事だと思っ
ているが、せつかく平和になったのなら、誰かを傷つけることより育てる仕事に就きたいと鬼灯殿に相談した所、小学校の教師を勧められたのだ！

鬼灯殿はあの世の住人に、無惨や鬼殺隊の歴史を知って欲しかったらしいから、俺の希望と我が家が代々鬼殺隊の剣士であった為、代替わりが激しいお館様より記録がよく残っていて把握もしていたからこそ、適任だと言ってもらえたから奮起して、今もこうして教師をしている！」

今度は反応に困るような回答ではなく、普通に立派過ぎる動機と経緯の解説だった。

ただ本日は平日なので、現役の小学校教師が真っ昼間に地獄の食堂で食事している謎が地味に生まれたが、唐瓜と同じく疑問に思ったら

しい鬼灯が尋ねると、「先日行った運動会の代休だ！」とこれも普通に納得する答えが返された。

そしてそのまま、彼は自分の生徒が可愛くて仕方がないと言わんばかりに、その運動会について語り出す。

なんか勢いやら圧やらが凄いと思いつつ、初めの印象通り悪い人では絶対でない、むしろすごく良い人なんだろうなと思ひ、小鬼二人は苦笑しつつ自分たちの昼食を注文しに行く。

「いやあ、騎馬戦は実にいい接戦だった！ 授業で何度も指南した成果を皆、余すところなく発揮してくれて俺は鼻が高かった！」

「あんた、担当科目は社会科ですよ？ 何で授業で騎馬戦を教えるんですか？」

背後でやつぱり反応に困る奇行を、もはや明朗快活というより威風堂々という熟語の方が似合いそうな勢いで言い出しているのを聞きながら、茄子は唐瓜に「早く注文して、あの人の話をもっと聞こうぜ」という誘いに、唐瓜は実に複雑な感情をブレンドした曖昧な表情を浮かべた。

* * *

小鬼たちがそれぞれ昼食を持って煉獄の方に戻り、「前、いいですか？」と尋ねたら煉獄は、喉大丈夫か？ と心配になりそうな勢いで「いぞぞ！」と快諾。

そして鬼灯は、多少は面倒くさいとは思っているだろうが嫌ってはいないのか、それとも茄子なら間違いなく彼に興味を持って自分に話を聞きたがるのをわかっていたからか、煉獄の隣で生姜焼きをむしやむしや食べていた。

そんな鬼灯に煉獄は、茶を一杯飲み干してから尋ねる。

「そういえば、鬼灯殿。狛治はいないのか？」

「他の十王庁に書類の提出などで出向してもらってます。帰庁予定はありますが、具体的な時間は未定ですね」

「そうか。久々に会えると思ったが残念だ」

「狛治さんと知り合いなんですな」

鬼灯の返答にやはり明朗ではあるが、先ほどよりは少しだけ大人し

い声量になったのは、本心から残念がっているからだろう。

そんな煉獄の反応に唐瓜は少し微笑ましく思いながら訊き返すと、煉獄のテンションは復活。

「ああー。生前は敵対していたが、今では親友だ!!」

「親友」という関係に、一瞬唐瓜と茄子は「マジか?」と言わんばかりの曖昧な笑みを浮かべる。

が、そこを疑問に思ったのは、彼らの生前の立場は関係ない。ただ単に、騒がしい煉獄と穏やかな狛治のコンビが想像つかなかったただだ。

しかし竹を割ったような性格の見本な煉獄と一見対極に見える狛治だが、彼は生前の不幸・不憫すぎるあれやこれの所為で卑屈になっているからであり、素は煉獄と同じ快男児と言える性格であることも知っているのです、すぐになんだかんだで相性はいいのだろうと納得してきた。というか、唐瓜に至っては狛治が自分と同じ自由人な親友のフオロー役であることを察して、遠い目で「狛治さん、頑張れ」と内心で応援する。

そんな小鬼たちの考えは間違っていない。全面的に正しいのだが、一つ大きく勘違いしている。

その勘違いに気付いている鬼灯が、みそ汁を飲んでから勘違いを正す事実を口にした。

「生前、敵対どころか杏寿郎さんを殺したのは、狛治さんこと猗窩座ですよ」

「え?」

「? そうだが?」

鬼灯の発言に、箸が止まって硬直する小鬼たちに煉獄は小首を傾げつつしれつと肯定。

唐瓜たちが二人の生前は敵対関係だったのに今は親友という関係に疑問を思わなかったのは、狛治の善良さと100年という年月だけではなく、煉獄が最終決戦前に殉職したという発言から、狛治と生前は直接的な面識がなかったからだと思っていた。

その前提をちやぶ台返しする鬼灯からの情報と煉獄本人の肯定に

しばし間を置いてから、二人は「すげえな、あんた!!」と敬意はあるのに敬語を投げ捨てて突っ込んだ。

だが、煉獄はあんた呼ばわりを気にしないが、同時にそんなことを言われる理由も理解できないのか、傾げる首の角度をさらに深くして「何がだ?」と訊き返す。

「……狛治さんの過去と素の性格があれですから、殺されたことを根に持っていない、許しているのは納得ですが、普通その関係で親友にはなれないというか、心情的にはそうであっても口には出せないものでは? 現に狛治さん、いつもあなたの親友発言に困惑してますよ」「何故だ?」

もはや呆れるのも飽きたのか、鬼灯は真顔で食事を続行しながら、小鬼たちがすげえと言いつつ突っ込みを入れた最大の原因を指摘するのだが、煉獄の方はまだ理解も納得も出来ず、今度はやや懽然としつつ訊き返す。

「禊が済んだ罪を責めるのは、俺のような被害者側はもちろん、加害者本人であつてもしてはならない、大きな間違いだ。だから狛治が、俺を嫌っているからではなく俺に遠慮して、親友どころか友人であることも否定するのは常々不満だな。

それに、鬼灯殿。俺は狛治が真摯に己の罪を後悔・反省し、どのような過酷な呵責も贖罪として受け入れやり遂げた事と、鬼になったことで歪んだものではない彼自身の武に対する考えや姿勢に共感したからこそ、改めて縁を結びたいと思ったのだ。

そこに、狛治の過去を知ったか知らないかは関係ない」

尋ね返しつつも煉獄は、今度はどこを見ているのかわからないものではなく真っ直ぐに鬼灯を見て、迷いも躊躇もなく自分を殺した悪鬼だった者を「親友」と言い切る理由を語る。

唐瓜と茄子はあの屈託ない親友発言は、過去のことを少しは気にしろと言いたくなる大ざっぱさからくるものだと思っていたが、思っていた以上どころか自分たち以上に「狛治」の全てを見て、受け入れた上での発言だったことを知り、アホかあんたという気持ちしが結構あつた突っ込みを恥じ入る。

が、ここまでまつすぐだからこそ狛治を煉獄が気に入る理由も、だからこそ狛治が親友扱いに困惑しているのも理解できたが、一点だけ理解できない謎が新たに生まれた。

「ああ。そうでしたね。あなた、浄玻璃の鏡で狛治さんの鬼になる経緯上映会で唯一、最後まで泣かなかった人ですもんね」

「そんなもんやったんですか!?!」

「っていうか、あの過去を映像付きで見て泣かなかったって、涙腺機能してる!?!」

その理解できない新たな謎、自分の狛治に対する友情に彼の過去は無関係という発言を補足する鬼灯の言葉に、小鬼たちはまたしても条件反射で突っ込む。しかも鬼灯に突っ込んだ唐瓜はともかく、泣かなかった煉獄に突っ込む茄子は、またもや失礼すぎる発言をする。

だが煉獄は、「問題ない！ 目がいつも見開いているから、ドライアイになってないか心配だとはよく言われているが、しのぶ君や珠世殿が首を傾げる程にその心配はないというお墨付きをもらっている！」と斜め上の答えを返す。小鬼たちはこの男に対する「大ざっぱ」という評価を覆さなくていい。

「狛治さんの刑罰は1年程で終わってしまったので、獄卒に就任した頃はまだ、鬼殺隊の鬼に対する憎悪が生々しかったんですよ。」

なので、そこらのヘイトを少しでも抑える為に、柱や無限城の戦いで特に活躍し、他の鬼殺隊に対して発言力のある方々に見てもらったのですが……。結果は成功しすぎて阿鼻叫喚でした。

伊黒さんは感情移入しすぎて真っ先に号泣するわ、悲鳴嶼さんは恋雪さんの末路を察した時点で逆に泣けなくなって、愛染明王に祈り出すわ、毒使いのしのぶさんは抱かなくていい罪悪感を抱いて、終わるまで『卑怯者でごめんなさい』と謝り続けるわ……。

あと……意外と感受性の強い伊之助さんは、その後しばらく狛治さんを見るたびに無言で泣き出すようになり、炭治郎さんは狛治さんの過去を知った直後、スライディング土下座してましたね」

「下手な刑場より地獄絵図……」

「狛治さん、出会い頭によく土下座されるな」

唐瓜の突っ込みに対し、鬼灯は遠い目をして狛治の悲劇としか言いようがない過去の上演会をやらかした理由とその成果を教えると、上がった名前はほとんど知らない相手でもとてつもなくカオスな状況だったことは想像ついたので、唐瓜も遠い目になって率直な感想を零し、茄子はそれ以上に率直すぎる感想だった。

そしてやはり、憎しみを消化しきれていなかった頃の鬼殺隊でも、狛治は過去を見てしまえば号泣必至で、罰を受けて罪を償っているのなら個人的感情からも許す、っていうか罰いらないだろ！ といった具合であることを理解すれば、なおさらに煉獄が泣かなかったことに對して疑問を抱く。

彼の言動からして、煉獄自身がまさしく被害者代表なので同情できず泣かなかつたはあり得ない。

逆に狛治の過去に深く同情しつつも、犯した罪は償わなければならぬという信念をもってして、私情を殺して滅刑嘆願は決してしなかつたというのなら納得だ。

しかし当の本人の煉獄は、やはり自分の反応が一般的ではない自覚がないのか、また小首を傾げて唐瓜の「何で泣かなかつたんですか？」という問いに答える。

「どうしてと言われてもな……。思うこと自体は色々あつたし、他の連中が泣いたのは当たり前だと思っっているぞ。」

特に、事情を知らなかつたとはいへ、俺は狛治が猗窩座だつた時、『老いることも死ぬことも、人間という儂い生き物の美しさだ。老いるからこそ、死ぬからこそ、堪らなく愛おしく尊い』と言つたことは申し訳なく思っている。実父どころか嫁と恩人の師にして義父をあのような経緯で亡くした相手に、死ぬからこそ尊く愛しいなんて無神経にもほどがあつたから、竈門少年のように土下座しようと思つた。むしろさせてもらえなかつたがな」

流星に感性がおかしくて、泣くようなことだと認識していない訳ではなかつたことに唐瓜はホツとしたが、実は煉獄自身も泣かなかつた理由をきちんと把握していなかつたらしく、彼は腕を組んで首を左右

に傾げ考えながら答える。

「同情は……していたな。母上が狛治の父と似たような状態だったしな。むしろ金には困っていなかったのだから、俺が同情するのは傲慢か。だから俺が泣かなかったのは……ああ、そうか。なるほど分かった。」

「ありがとう、小鬼の獄卒くん。ようやく理解できた」

「はい？」

改めて自分の思いや感情を口にしながら考えたことで整理がついたのか、煉獄は思い悩むような顔から清々しい顔になって唐瓜に礼を述べる。

そして困惑する唐瓜をまったく気にせず、彼は最初と同じく明朗に言い切った。

「俺が狛治を親友と思うのは、そうありたいと願うことに狛治の過去は無関係だと言ったが、あれは正確ではないな。むしろ、俺は『狛治』と『猗窩座』を他の者ほど分けて考えていない。」

だからこそ、俺は狛治の過去を知っても泣けなかった。同情より、腹が立って泣くことができなかったのだろう」

煉獄の答えが更に小鬼コンビだけではなく、三人を放置して食事を続行していた鬼灯もきよとんと眼を丸くしている。

そんな彼らに説明してやっているつもりはもちろん、煉獄にはない。ある意味教師としてダメな察しの悪さを発揮しつつも、彼自身はまだ整理しきれしていないからこそ、自分の考えを煉獄はそのまま続けて口にした。

「狛治……猗窩座は俺に、『鬼になれ』としつこいくらいに誘って来たのだ。言い換えれば、俺に生きろと懇願するように言い続けていた。狛治を見て知れば、鬼になったことで酷く歪んで変わり果ててしまったことはよくわかるが、俺にはあの言葉が、行動が、猗窩座になっても失えずに残っていた狛治の心に思えて仕方がない。」

好ましいと思ってくれた俺を殺したくない、死んで欲しくない、生きていて欲しいと願った猗窩座と狛治を、俺は分けて考えることができないんだ。

だからこそ、俺は浄玻璃の鏡で狛治の過去を見て、知れば知るほど悲しさよりも、傲慢だとはわかっていても怒りが上回って泣くことが出来なかったのだろう。

……耐えて欲しかったのだ。家族を殺されても、その憎悪のままに暴れるのではなく、耐えて欲しかった。鬼にされても、『どうでもいい』と諦めてしまうのではなく、誰も食わない、殺さない道を選んで欲しかったんだ。

彼なら……あそこまで空っぽになり果てても、誰かに『生きていて欲しい』と願える心を遺していたからこそ、……猗窩座にとつて無価値なはずの、弱者である女性を殺さない心が残っていたからこそ、狛治なら竈門少年の妹……禰豆子くんのように人を食わぬ鬼になれる心の強さを持つていたと確信しているから……、俺は傲慢だとわかっていても、それでも願わずにはいられないのだ。

泣けないほどに、俺は最初から狛治とは敵として出会いたくなくなかった。何の負い目もない、対等な友になりたくてしかたなかったんだらうな」

* * *

最初の頃のように明朗だが、騒がしさは一切なく穏やかに煉獄はそう言葉を締めくくり、唐瓜と茄子は言葉もなかったただ煉獄を見つめ返す。

煉獄の言う通り狛治に「耐えて欲しかった」というのは、当事者である恋雪たちでも望むべきではない傲慢だ。

けれど、ただただ彼の境遇に同情して憐れむのは、一種の見下しだ。鬼の猗窩座と人間の狛治。別人と思えないほど変わり果てていた彼を知った上で、皮肉や嘲弄としか思えなかったであろう言動にも人として尊い部分を見出し、狛治の強さを信じたからこそ耐えられなかった結果を惜しみ、その結果に怒りを抱いてもやはり狛治に「どうして耐えなかった」と酷い八つ当たりをするのではなく、友になりたいと望む煉獄は、間違いなく厳しくも誰よりも何よりも優しい。

獄卒ではなく人を育てる者、教師に相応しい人物であることを二人は心から思い知り、彼らの目にはもう煉獄を「何だこいつ……？」と

いうドン引きはない。

あるのは純粹な敬意だ。

二人のまさしく「兄貴と呼ばせてください!!」な憧憬の視線に、煉獄は微笑みつつ首を傾げている。彼にとつてこの手の視線はいつもの事だが、いつもの事なのに察することは出来ないらしい。謙虚なんだか、ただ単に大ざっぱなだけなんだか。

そして隣の鬼灯は、「こいつは何人、弟分を増やす気だ?」と言いたげな視線を送って食後の茶を一杯飲んでいたが、その視線が煉獄から食堂の入口の方に移る。

鬼灯が気付いた少し後に相手の方も気付いたらしく、彼は真つすぐに鬼灯たちの席に向かって来て鬼灯に会釈してから、呆れているような困っているような苦笑と声音で煉獄に尋ねる。

「……杏寿郎? 何で平日の昼間にお前がここにいるんだ?」

「おお! 狛治! 今日には会えないかと思っていたが、俺は運が良かったようだな!」

他の十王庁に出向いていたはずの狛治が、午前中に回り切ったのか、まだ途中だがたまたま閻魔庁近くに戻れたのか、どちらにせよ昼食を食堂で取ろうと思つてやってきたらしい。

そして煉獄の職を知っていれば当然の疑問を口にするが、煉獄は悪気なくその質問を無視して一方通行気味の友情を示す。

想像通りの狛治が煉獄に振り回されている関係なのが、たったこれだけのやり取りで十分すぎるくらいに理解できたが、唐瓜たちが懸念したほど狛治には煉獄に対して罪悪感による卑屈さはない。

避けるのではなく自分から近づいて話かけるだけ、狛治は自分自身を許していることをまるで自分の事のように喜び、小鬼たちは無言で感涙しだして狛治をいつも通り困らせたのは余談だ。

「!? どうしたんだ、唐瓜! 茄子!」

「!? 一体何事なんだ、旨そうな名前的小鬼くん達!」

「ただ単に狛治さんが幸せそうなのに安心して、感涙しているだけですよ」

泣き出した二人に狛治だけではなく煉獄も慌てるが、鬼灯が淡々と

端的にその理由を指摘すると、狛治は恥ずかしげに頬をやや朱に染め、煉獄は腕を組んで「良い部下に恵まれているな！　さすがは俺の親友だ！」と胸を張る。

その主張に眉根を下げた苦笑を狛治は返す。表情からして、「俺はお前の親友になれるような存在ではない」と思っているのがよくわかるが、それを口にしないのは、口にした方が煉獄に対して非礼だからか、それとも彼自身が「今は肯定できないが、いつかは必ず自分も胸を張ってそう名乗りたい」という思いからかなのかは、小鬼たちには知り得なかつた。

だが、躊躇いなく煉獄の隣の席に腰を下ろしたのだから、後者の思いはわずかでも必ずあるのだろう。

「なんか……また俺の黒歴史で妙な気を遣わせたようだな。詫びになるかどうかはわからないが、良かったらこれを飲んでくれ。恋雪さんが、皆さんにもと言って多めに入れてくれたんだ。」

鬼灯様、杏寿郎も良かったらどうぞ」
席について弁当と一緒に取り出した数人分は入りそうなスープジャーを掲げて、狛治は部下と上司、そして彼にとつては酷く曖昧な関係の煉獄に勧める。

実父と義父が天国で趣味の一環として菜園をしており、そこで収穫した野菜の処理に恋雪が困っている事を照れ笑いしながらのろけ、煉獄もリア充に対する嫉妬は一切なく爽やか純粹微笑ましげに笑う。

「相変わらず、家族仲が良いようで何よりだ。ありがたくいただきます」
言つて煉獄は空になつていたみそ汁の椀を差し出し、狛治はそれにジャーの中身を注ぐ。どうやら、スープジャーの中身もみそ汁のようだ。

そのみそ汁を一度机の上に置き直してから、煉獄は両手を合わせて「いただきます」と丁寧に言つてから口をつける。

その言動に唐瓜と茄子は「育ちが良さそうな人ですね」と語り、鬼灯と狛治が実際に煉獄は名家と言える家であることなどを話していたのだが……。

「……………わっしよいわっしよいわっしよいわっしよいわっしよ

いわつしよい!!」

「!? どうした杏寿郎!? 祭りの神みたいになつてるぞ!」

「そのツツコミだと、宇髓さんが常日頃わつしよい連呼してるみたいですよ」

……どうやら、狛治家の家庭菜園で豊作なのはサツマイモ、みそ汁の具が煉獄大好物の芋だったらしく、煉獄はみそ汁を飲み干してから芋に対しても迷惑な礼儀をまたしても発揮して、初見だったらしい狛治は盛大に困惑、鬼灯も鬼灯で訳のわからない感想を口にする。

そしてまた始まった煉獄の奇行に、小鬼たちは敬意や兄貴と言つて慕いたい気持ちこそはなくなりはしてないが、煉獄の印象が第一印象の「ものすごく変な人」に舞い戻ってしまったことに何とも言えない感情を抱き、やや死んだ目で気が済むまでわつしよい連呼する煉獄を眺めていた。

……唐瓜と茄子に留まらず獄卒の大半が、「鬼殺隊の柱は変人揃い」という先入観を懐いてしまったのは、間違はなく煉獄が元凶だろう。

だが煉獄がいなくてもそうなっていただろうし、偏見ではなく事実なので、結局は遅いか早いかだけの無意味な違いだというのが何とも虚しいと、のちに比較的常識人枠の不死川、伊黒、しのぶが顔を覆つて項垂れて口にしていた。

If：号泣地獄な浄玻璃の鏡上演会

「本日はお集まりいただき、ありがとうございます」

閻魔庁の法廷で、まず最初に鬼灯が集まってもらった人たちに礼を言う。

人と言うのは便宜上ではなく鬼灯が集めたのは全員亡者であり、かなり珍しいことだが現在の法廷は鬼より人間の方が多い。

その数、15人。

そして、集められた者達は一見すると共通点がないように見える。それほど容姿も雰囲気も、そして年齢も比較的全員若くはあるがバラバラだ。せいぜい性別が男に偏っているくらいだが、女性も4人ほどいるので、やはり一見するだけでは何の集団かわからない。

しかし、本日の業務に関わるとかそういう問題ではなく、この集められた15人の共通点に気付かない獄卒はいない。

「前置きは良いから、さっさと話してくれねーか？ ……俺達をわざわざ集めたつてことは、面倒なことが起こってんだろ？」

鬼灯の言葉をバツサリ切って、下手なそこらの獄卒以上に迫力がある、全身傷だらけの男がそう言った。

皮肉げに、苛立ちを押し殺すように犬歯をむき出しにして嗤って、不死川 実弥は鬼灯の目的を予測して語る。

「無惨の呪いを外していたのか、太陽を克服したのか、そういう厄介な生き残りの鬼でも見つけたのか？」

俺達、最後の鬼殺隊を集めたつてことはそういう事だろ？」
「いえ、全然違います」

先走り過ぎて全開で勘違いしていた不死川を、雷の呼吸の壺ノ型並みに鬼灯がバツサリ切り捨て否定。

不死川、皮肉たつぷりな笑みのまま、硬直。

蜜璃と伊黒、悲鳴嶼は腹筋に力を入れて必死で笑いをこらえるのだが、宇髄と善逸、伊之助が遠慮なく指さして笑い出し、オロオロと狼狽えるカナヲと禰豆子をしのぶが苦笑しながら「放っておきなさい」と忠告するし、弟の玄弥は「兄ちゃんを笑うな！」と爆笑する3人に

キレル。

「不死川は相変わらず真面目で行動も早いな！　だが、人の話は最後までちゃんと聞いてから発言した方が良いと思うぞ!!」

「そ、そうだな。不死川、おはぎがあるからそれを食べながら鬼灯の話聞いて聞こう」

「こしあんもつぶあんもありますよ!!」

「お前らうっせーっ!!　特に富岡と竈門は黙ってる!!　お前ら、慰めてるのかどうかもわかんねーよ!!」

そして煉獄は不死川を褒めつつ欠点を指摘し、それに便乗するように懐からおずおずと義勇がおはぎを差し出し、炭治郎が追撃してようやく不死川の硬直が解けてブチ切れる。ただし、顔は羞恥で真っ赤である。

「まあ、面倒事と言えばそうですけど、とりあえずあなた方の戦力が必要と言う訳じゃありません。というか、あなた方に実体を与えて現世で鬼退治してもらおうくらいなら、縁壺さん一人を派遣した方がぶつちやけ手っ取り早いので、不死川さん。恥ずかしいのは自業自得だから、暴れるな」

更に八つ当たりなのかどうか微妙な所だが、爆笑してた奴と悪気なく恥を煽ってきた計6人に向かって暴れ出した不死川に、鬼灯は金棒をブン投げて身も蓋もない追撃を更にかける。

金棒は難なく避けたが言葉はぶっすり不死川に刺さったらしく、そのままぶっ倒れてるのだがもちろん鬼灯は気にせず、玄弥の「兄ちゃん、しつかりしろー!」という呼びかけをBGMにして話を続けた。誰も話に集中できないから回復するまで待つてやれよ。

なお、最初からいたが全く何のリアクションも起こさなかった無一郎は、もちろん放っておいてやるのが優しさだと思った訳ではなく、初めから彼は閻魔庁の隅の蜘蛛の巣と蜘蛛をぼんやり眺め続けていた。

* * *

鬼灯は法廷内に設置された巨大な鏡、浄玻璃の鏡を手で示して言う。

「今回、集まっていたいただいた訳は皆さんに見て欲しい映像があるんですよ」

鬼灯が語った目的に、不死川の精神悶絶瀕死状態を気にしながらも集まった者達はそれぞれに「映像?」「え?」「何の?」「というか、浄玻璃の鏡で見せるつてことは誰かの過去?」と疑問を口にする。

そして鬼灯は「誰かの過去?」と首を傾げるしのぶの疑問を、何の躊躇もなくしれつと答えた。

「はい。皆さんに見ていただきたいのは先日、刑を終えて地獄の獄卒として就職を希望する元上弦の参こと猗窩座。本名、狛治さんの鬼になるまでの経緯です」

「ちよつと待てえ! ゴラアっつ!!」

皆が、「つい先日、刑を終えた」者が「上弦の参」と言われた時点で、言われたことが理解できないから、もしくは理解できたからこそ言葉を失っている中、最も早く反応したのは早とちりの勘違いで悶絶していた不死川だった。

「刑を終えたって何だ!? まだ、あの無限城の戦いから1年しかたつてねえつてのに、他の雑魚鬼たちならともかく上弦の鬼がたった1年程度で刑が終わる訳ねーだろ!!」

「上弦なのに1年で十分だったくらい罪なんですよ、狛治さんは。それを証明するための上演会です」

戦闘狂だとか自分の戦力に自信があるからではなく、ひたすらに鬼を憎んで、鬼がいない世界を目指していたからこそ最初の勘違いをしてしまっただけあって、今度こそ皮肉げに笑う余裕もなくブチ切れる不死川だが、鬼灯は不死川と彼の言葉でようやく最初のセリフの意味を飲み込んで来た者達が、言葉にせずとも発する「有り得ない」という猜疑と、憎い鬼だった者がたった1年で自由の身になるという不満を無視して、全く動じず淡々と言い返す。

もちろん、それで納得できる者はこの場にはいない。鬼に対して個人的な恨みや因縁がない蜜璃でさえ、猗窩座は自分の師であった煉獄の仇な所為か、やや険しい顔をしている。

が、次に続けられた鬼灯の言葉でもう一度皆が目を丸くする。

「ちなみに、狛治さんに下された刑罰は自分が殺した者の数だけ獄卒に殺されるという、実に単純なものですよ」

『……え？』

猗窩座こと狛治が服し、そしてやり遂げた刑の内容に最初から話を聞いているのかも怪しかった無一郎さえも目を丸くして困惑の声を上げた。

刑の内容自体は、別に驚くものでも困惑するものでもない。地獄の中では生ぬるい部類かもしれないが、鬼灯の言う通り最も単純でまさしく因果応報な罰だろう。

皆が困惑したのは、その刑罰を終えるまでに要した期間が1年だということだ。

「……え？ その人、一日何回死んだの？」

善逸が戸惑いながら、尋ねる。最低でも1000年ほど前から鬼であり、そして人を食えば食うほど強くなる無惨の鬼の性質からして、猗窩座の犠牲者の数は1000を優に超えているとでも思ったのだ。そしてそれは他の者も同じ。

むしろ1000でも少ないくらいに思っているからこそ、繰り返し殺される苦痛を1年で終わらせるには、一体1日でどれほどの数だろうと思つたから慄きつつも尋ねたのだが、鬼灯の答えは善逸達の予想をはるか彼方に裏切る。

「多くて3回もないと思いますよ。あの人、一切の抵抗どころか反射で頭を庇うとかそういうこともせず、肅々と獄卒に殺され続けたので、呵責する方の精神がくるんですよ。だからもつと早く終わらせてやりたかったのですけど、結局1年もかかってしまいました」

『何でそいつ上弦の参なの!?!』

まさかの善逸達の予測を裏切り、むしろ長引いた方だった。それほど、数百人単位ではあるが猗窩座の鬼歴とその強さからは信じられない程に少ない数だったことを暴露され、善逸を筆頭に不死川兄弟、伊黒、しのぶ、宇髄が突っ込む。

炭治郎も顎が外れたのかと妹やカナヲに心配されるほどに口を開けて唾然としていたが、じわじわと鬼灯の言葉がああ無限城での戦

い、猗窩座の最期に結び付く。

「……そういえば、あの鬼の最期は自殺じみていたな」

義勇も思い出したのか、ボソリと呟く。

あの当時は首の弱点を克服しかけていたが、結局しきれずに暴走しての自滅だと思っていた。そうとしか思えなかった。自ら自身の身体を破壊しつくして死を選ぶ理由など、想像できなかった。

知る事など、出来ないはずだった。

「……鬼灯さん。その鏡で見れば……わかるんですか？」

猗窩座が最期……感謝の匂いをさせていた理由が」

炭治郎の問いに、鬼灯はどこまでもそっけなく他人事のように答える。

「わかりますよ」

他人事のように、淡々と、けれど真っ直ぐに縋るように見つめて問う炭治郎をこちらも真っ直ぐ見据えて即答した。

しばし法廷内に沈黙が落ちる。

沈黙を破ったのは、いつでもどこでも死んでも変わらない明朗な声。

「よし……なら、見ようではないか！」

煉獄が腕を組んでそう宣言して、浄玻璃の鏡のど真ん中に鎮座する。

その言動に、煉獄のことをよく知らないが猗窩座に殺された当の本人であることは知っているカナヲと玄弥は困惑するが、他の連中は煉獄のことを知っているからこそこちらもこちらで困惑。

煉獄は自分を殺した相手だからといって、相手の全てを貶めて否定して拒絶するような人間でないことをよく知っているが、知っているからこそ「いや、そこがお前の良い所だけど少しは気にしろ」と思っているのだろう。

そんな鬼殺隊どころか鬼灯含めて困惑させている煉獄は、まったく周囲の戸惑いを気にせず、自分の隣の床をバンバン叩いて他の者達を誘う。

「どうしたんだ、皆！ 竈門少年！ 猗窩座の最期の感謝がわかるの

なら見るべきだ！ 感謝されているのに、その感謝の意味がわからな
いからこそ猗窩座を殺したことに罪悪感を抱いているのなら、なおさ
らに見て知るべきだ！ 感謝は笑って受け取るべきものだからな！

伊黒！ 不死川！ しのぶ君もぜひ見るべきだ！ お前達は優し
いからこそ鬼が許せないが、罪を償って人としてこちらで生きる者達
を許せない自分こそをもっと許せないのだろうか？

なら、猗窩座という鬼ではなく狛治という人間の人柄を知ればい
い！ お前達なら知った上で理不尽な恨みなど懐けないのだから、きつ
と恨みがなくなつてすつきりするぞ！ 鬼灯殿もそのつもりで、俺達
を集めたのだろう？」

相変わらずうるさい大声で、どこまでも自分の仲間を、人の善性を
信じ切つて笑顔で「狛治」という人間の過去を見るべき理由を語る。

その語られた理由にまた全員がポカンと固まってしまふのだが、そ
れは一拍ほど。

一拍ほどの間は開いたが、炭治郎は煉獄と同じくらいの笑顔で、妹
の手を引いて彼の隣に座つて言った。

「はい!!」と力強い、肯定の返答。

その返答にしのぶが和んだように微笑んでから、カナヲや善逸と伊
之助に座るように促す。

不死川は煉獄に何か言い返そうとしたが、結局は言葉が見つからず
舌を打つて、その場に胡坐をかく。

伊黒は不死川以上に何か言いたそうに、「お前を殺した奴の罪など
許したくない!!」とでも叫びたがっているのがわかる悲痛な顔をして
いたが、蜜璃が「伊黒さん、私はその人がどんな人か知つた上で許す
か許さないかを決めたい」と言われたからか、結局無言で座つた。

「その意図は否定しませんが、私としてはただ単に狛治さんが獄卒を
希望している為、元鬼殺隊の方々との確執を少しでも解消したかつた
だけですよ」

鬼に対して特に強い反感などを懐いていた連中が一応は納得した
ことで、残りの者達もそれぞれ鏡の前に腰を下ろして視聴の体勢に入
る。

そして鬼灯は煉獄の好意的すぎる解釈に若干の修正を加えつつ、獄卒に指示を出した。

出した指示は、浄玻璃の鏡の操作ともう一つ……。

「鬼灯様。手ぬぐいは一人3枚でしたっけ？」

「いえ、5枚は渡してください。あと、悲鳴嶋さんと伊黒さんには倍……で足りるか？」

『おい待て今から何が始まるんだ？』

何故か全員にやたらと多い枚数の手ぬぐいが配布された。

のちの、具体的に言えば100年後ぐらいの鬼灯は伊黒とこんな会話をしたという。

「あの当時、バスタオルが普及してたら一人2枚くらいで済みましたのに。あと、瞬乾バスマットというのも欲しかったですね」

「おい、俺と悲鳴嶋にバスマット渡すな」

* * *

「悲鳴嶋さんは目が見えないので、音声ではわかりづらい所は私が説明しますね」

鬼灯が言うと同時に鏡がまず最初に映し出したのは、奉行所。

そこで役人に取り押さえられながらも、粕治は「次は手首を切り落とす」と言われても奉行に啖呵を切る。

《斬るなら斬りやがれ！ 両手首斬られたって足がある！ 足で擦ってやるよ、どのみち次は捕まらねえぜ!!》

(これの何を見て許せと!?)

いきなり擁護のしようがない光景を見せられ、鬼ぶっ殺精神が特に旺盛な不死川・伊黒・しのぶが内心で激しく突っ込む。

炭治郎も予想外過ぎる出だしに茫然。

悲鳴嶋、「ああ、半端な罰故にさらに罪を重ねるなんて憐れな子だ。

いっそ最初に斬首してやればいいものを」とまだちよつと残ってたトラウマ故に、過激すぎる慈悲を見せつつ早速手ぬぐいを1枚消費。

《お前がまた捕まったと聞いて、親父さんが首くくって死んじまった

！》

「あ、こゝろ見えにくいので拡大して一時停止してください。

狛治さんの父親の遺書です。内容は『真つ当に生きる。まだやり直せる。俺は人様から金品を奪ってまで生き永らえたくはない。迷惑かけて、申し訳なかった』

しかし、狛治が奉行所で犯罪を続けるという啖呵を切った理由、病身の父の薬代の為だったこと、そしてそこまでして助けたかった父親が自殺したこととその遺書の内容が公開される。

鬼ぶっ殺3人組、同じような状況なら同じことをしてでも助けたい人がいる為、速攻で掌返して「ごめんなさい!!」と内心で土下座。

というか、狛治の「何で悪くない親父が謝るんだ?」「刑罰なんかつらくなかった」という心情まで鬼灯が説明した為、最初のシーンで引いた者、つまりは全員が内心で土下座。

その後も父親の死で自暴自棄になっている狛治の姿がしばし続く。喧嘩を繰り返して相手を半死半生にまで痛めつけるが、その相手は何の非もない相手にいちやもんをつけてではなく、向こうから絡んできた者や、自分と似た立場の貧乏人を虐げていた者に限ることに説明されるまでもなく気付いている為か、全員の表情が痛々しい。

《おーおー、大したもんだ》

しかし、慶蔵登場でまたしても全員茫然。

っていうか、笑顔で狛治をボコボコにした慶蔵に普通に引く。例外は煉獄。一回ビックリしてからいつも通り明朗に、「やはり武道の玄人には敵わないものなのだな!」と感想を言っつこつちもこつちで引かれていた。

《けほっ》

恋雪登場。

(もうやめて!!)

鬼殺隊、「狛治」が「猗窩座」になった理由を察する。

ただしラブの波動だけを受け止めた蜜璃だけ例外。なんか一人だけドキドキわくわく顔して、隣の伊黒が頭を抱える。

その後しばらく、狛治の穏やかな日々が続く。

狛治の悲劇をなんとなく想像ついたのでむしろその穏やかな日々こそ、蜜璃以外がいつ壊れるかを恐れてハラハラしながら見ていたのだが、あるシーンで全員が察したことをいったん綺麗に忘却。

「何この人！ 最低最低最低最っつ低!!」

「自分で連れ出してにおいて、発作が起きたら放置!? 信じられない!!」
「ね、姉さん……。だ、大丈夫ですよ？ 恋雪さん、大丈夫ですよ？」

「だ、大丈夫よカナヲ……。大丈夫ですよ、鬼灯様!!」

「狛治！ そいつ埋めろ!! 俺が許す!!」

「穴なら10尺(約3m)くらい俺が掘ってやる！ 誰か、墓石と卒塔婆用意してくれ!!」

「いらねえよ、そんなの！ かまぼこ板でもこいつにはもつたいねえっ!!」

隣の剣道道場の息子が恋雪に恋慕と言うにはあまりに身勝手な執着を懐いており、彼女が病弱なのを知っているながら勝手に外に連れ出した挙句、喘息の発作が出た恋雪に怖気ついて放置して逃げ出したことに、女性陣を筆頭に全員がバカ息子にマジギレ。

なお、「埋めろ」発言は伊黒。そこに続いたのは善逸と宇髄。

そして視聴者たちと同じくらいキレていた狛治と慶蔵が剣道道場に殴り込み、そのまま試合開始。

『割ったーっっ!!??』

「……あれ、人間の頃からの得意技だったのか」

「お前ら、よくあれに勝てたな」

「……むしろ何で勝てたのかわからなくなってきました」

その試合で狛治無双に視聴者大盛り上がり。完全に、当初の察したものを忘れている。

《この道場を継いでくれないか、狛治。恋雪もお前の事が好きだよ
言っているし》

《……は?》

《私は、狛治さんがいいんです。私と夫婦になってくれますか?》

《——はい。》

俺は誰よりも強くなつて、一生あなたを守ります」

恋雪の逆プロポーズと狛治の返答に禰豆子とカナヲが手を取り合つて喜び、蜜璃と煉獄は拳を突き上げ「えんだああああっ!!」と謎の歓声を上げる。

善逸は「うらやま妬ましい一生幸せになればバカヤロー」と泣きながら呪いと祝いを同時に吐き出し、伊之助はなんだかわからないぼわぼわしたあたたかくて心地よいもので胸いっぱいになる。

それ以外の皆様方、察してたものを思い出して無言。

煉獄も歓声後は無言。歓声上げてから思い出したのか、それとも察していたけど喜んだのかは不明。

狛治が実父の墓参りに出向き、墓前に祝言のことを報告してから道場に帰るまでの間、悲鳴嶼は既に手ぬぐい8枚消費するくらい泣いていた涙が止まり、状況的にミスマッチなのかベストチョイスなのかよくわからない愛染明王に祈り続け、不死川としてのぶも手を合わせて何故か謝り続ける。

炭治郎と玄弥、無一郎は正座したまま怯えるようにガタガタ体を震わせ、義勇と宇髄も同じように震えそうな体を押さえつけて真っ青な顔で鏡の映像を見続ける。

微動だにしないのは煉獄と伊黒。

しかし煉獄は、腕を組んで笑みこそは消えたが最初から変わらず真っ直ぐ自分の意思で映像を見ているが、伊黒は金縛りにでもあったように顔面蒼白のまま自分の意思とは無関係で目が離せなくなって、鎚丸に心配される。

流石に彼らの様子に気付き、カナヲ・禰豆子・善逸も察したものを思い出して、彼らも血の気を引かせて「このまま祝言上げて終わって……」と祈り出す。

そしてまだ察しない蜜璃と伊之助。

墓参りから帰ってきた狛治を迎えるのは、慶蔵と恋雪ではなく道場前に集まる人々。医者らしき人物が駆け寄ってくることで、察している人たちは映像の狛治と同じく聞く前から横隔膜が痙攣するような嫌な予感に襲われていたが……。

《誰かが井戸に毒を入れた……！ 慶蔵さんやお前とは直接やり合っても勝てないから、あいつら酷い真似を……！》

惨たらしい……あんまりだ！ 恋雪ちゃんまで殺された!!》

『え?』

察してなかった二人より、察してた者達が言われたことを理解できず呆気に取られる。

「狛治が無惨によつて鬼にされて、恋雪たちを食い殺してしまった」か、「帰つて来た頃には恋雪たちが鬼に殺されていた」あたりの悲劇を想像していた為、「無惨も鬼も無関係」という完全なる不意打ちで頭が真つ白になったタイミングでお出しされる、こと切れた二人の遺体。そして、恋雪に抱き縋つて泣く狛治。

「あああああああああああああああああつつ!!!!」

伊黒・蜜璃・禰豆子・カナヲ・しのぶ・悲鳴嶼・伊之助、陥落。

特に伊黒は狛治と恋雪に自分と蜜璃を重ねて見ていた為、真つ先に悲鳴のような声を上げてその場に突つ伏し号泣。

実は他の連中もこの時点で泣きそうだったが、伊黒の号泣つぷりに驚いて涙が一旦吹っ飛んだ。

「……なあ……何で……恋雪は起きないんだ? ……狛治が……泣いてるのに……。なあ……何で……。どうして……」

しかし伊之助がボロボロ泣きながらたどたどしく、起こつた事実を受け入れられずに縋るように他の者達に尋ねたことで、炭治郎・善逸・玄弥・宇髄が撃沈。一旦吹っ飛んだ涙が光速で戻ってきた。

その後、二人を殺した隣の剣道道場に狛治は憎しみのまま再び殴り込み、道場を継いだバカ息子と共犯の門下生たちを虐殺。

その虐殺シーンで、有一郎が鬼に襲われて我を忘れた自分を思い出し、無一郎がホロホロと無言で涙を零す。

義勇は、その虐殺の手段から間違いなく狛治が「猗窩座」であることを理解すると同時に、彼の技名が花火の名前であったこと、破壊殺の時に浮かび上がっていた雪の結晶は恋雪のかんざしだったことなど、猗窩座が残していた「狛治」の名残にも気づいてしまい、耐えきれずに彼も陥落。

不死川は唇を噛みしめ、掌どころか骨に達するのではないかというくらいに拳を握りしめて泣くのを堪えるが、最後の最後、何もかも終わった後にやってきて空っぽの狛治を薄ら笑いで鬼にした無惨でダメだった。

「くそがあああああっつっ!!!」

無惨の仕打ちに不死川が泣きながらキレて叫び、映像は終了。

そして煉獄以外号泣、泣きすぎて吐きそうになっている者も続出し、泣いていない煉獄も自分たちの姿しか映していない鏡を無言真顔で睨み続ける不穏な空気に獄卒たちが戸惑うやら怯えるやらの中、相変わらず鬼灯はマイペースだった。

「炭治郎さん、狛治さんの感謝の意味と理由はわかりました？」

「鬼がためえはあああつっ!!!」

鬼灯の確認の問いに炭治郎ではなく不死川が、全部が濁音になっているような声で泣きながらキレて突っ込む。しかし鬼灯はまったく気にせず、「鬼です」といつもの回答。

炭治郎は泣きじやくる禰豆子と伊之助を慰めるように抱きしめつつ、自分も泣きながら「わかんないです！俺が狛治さんに土下座で謝らなくちゃいけない事しか今はわかりません!!」と正直に返答。

「そうですね。なら、ちょうど良かったですね。今から、狛治さんが来ますよ。獄卒の新人としての挨拶と、鬼殺隊の皆さんに許されなくとも謝罪をするために」

「えっ？」

炭治郎の返答に対して本当に良かったと思っっているのか、無表情でまたしてもとんでもない予定を告げ、号泣中だった全員が顔を上げる。

同時に、「……失礼します」と先ほどまで鏡で聞いていた声の肉声
が、法廷内に響いた。

* * *

法廷の扉の前で、狛治はまず深呼吸で緊張による胸の動悸を抑え

る。

深呼吸を繰り返しながら、自分が鬼殺隊に伝えるべき謝罪の言葉を整理するが、整理も何も「ごめんなさい」以外何も浮かばないことに気付いて、また更に気が重くなってしまった。

謝罪をしたくない訳ではないし、許されないことが怖いわけでもない。

むしろ狛治は許されることなど望んでない。もつともそれを望むべきではない、望むことは傲慢だったはずの恋雪に泣きじやくつて縋って望んだのに、恋雪は自分に失望せず彼女も泣きながらも笑って許してくれたのが望外の幸福すぎるのだから、鬼殺隊には何度殺しても飽き足りないくらい憎まれて恨まれ続ける覚悟くらい決めている。

狛治の気が重いのは、自分の謝罪したいという思いは自分の自己満足で、相手からしたら余計に不愉快になるのではないかという不安によるものだ。

許されなくてもいい、憎まれ続けるのは仕方がないが、せめて自分の謝罪が不快感を与えるものにならないよう努力したいのだが、そう思えば思うほどに「ごめんなさい」以外の言葉は自己弁護の言い訳にしか思えず、結局は「ごめんなさい」と何度だって告げて土下座する以外の答えは浮かばない。

「……ここでウジウジしていても仕方がないな」

いくら悩んでもそれ以外の答えしか出ないのなら、もうそれを貫き通す。そんな若干ヤケクソとか開き直り気味の答えを出し、狛治は法廷の扉を開き入室。

「……失礼します」

入ってきて、まず最初に目に入ったのは自分の最期を決定づけた、恩人と言っている少年。

慶蔵によく似た真っ直ぐで曇りない目に、その目と同じ真っ直ぐな心の持ち主。

不意打ちが出来ないからこそ、あの宣言ありの拳のおかげで全てを思い出し、自分を「猗窩座」から「狛治」に戻してくれた。

その事を思い出した狛治は、用意していた「ごめんなさい」という

言葉も忘れて、あの最期の瞬間に懐いた感情、「ありがとう」という感謝が胸に満ちて思わず笑ってしまう。

謝罪するために来たのに笑うなんて、事情を知らなければそれこそ人の神経を逆なでする非礼なのだが、……本当に幸か不幸かは誰にもわからないが、狛治が笑ったことは誰にも咎められることはなかった。っていうか、そもそも狛治が笑った事に気付いたのはたぶん、鬼灯と煉獄くらいだ。

「!? 狛治さあああんっっ!! 酷いこと言ってますみませんでしたーっっ!!」

「!? は? ちよっ!? えっ!? ぐっ!?」

狛治が笑って、「ごめんなさい」ではなく最期に言いたかったけど言えなかった「ありがとう」を炭治郎に伝えようとしたが、それよりも炭治郎が早かった。

泣きながら自分の本名を叫んでまず走って来た時点で、狛治から感謝より困惑が上回ってしまったのに、炭治郎はその走る勢いのまま土下座しだしたので、法廷内の掃除が行き届いていたのも災いして土下座の体勢のまま床を滑って、狛治に激突。

不意打ちが出来ない少年から、悪気も他意も本人のする気も一切ない変則的な膝カックン頭突きを喰らって、狛治はそのままこける。

それをまた炭治郎は申し訳なく思い、パニックって泣きながら米つきバツタのように謝り続ける。

「何してんだ、お前はーっ!!」

「謝罪で攻撃してどうすんの!!」

「狛治さん、大丈夫!? お兄ちゃんの頭の所為で足の骨とか折れてない!?」

「っていうか、嫁はどうした嫁は!」

「再会しましたよね!? 申し訳なくて身を引いたなんてしてませんよね!」

「今度こそちゃんと祝言はあげたんだろうな!」

しかもそのまま他の連中も、炭治郎の攻撃になっちゃったスライディング土下座を怒り、狛治を心配する声やら、ちゃんと恋雪と再会

して幸せになったかを尋ねる声が次々投げかけられる。

狛治は自分の過去を彼らに見られることは事前に鬼灯から聞かされていたので知っていたが、自分の過去は周りの人を自分の弱さと愚かさで不幸にした加害者としての人生という認識の為、ここまで号泣されて同情されて、本心から「幸せになつて欲しい」と望まれているなんてまったく想像出来てなかった。

その為、狛治は状況が全くわからないまま何も答えられず狼狽える。

このカオスすぎる現状を何とかしたかった……訳ではないだろう。ただ単に訊かれたからか、それとも言った方が面白そうだななどでも思ったからか、鬼殺隊たちが一番気になっている情報をひとまず鬼灯が代わりに勝手に答えておいた。

「つい先日、あげてましたよ。ご家族だけでひっそりと」

『呼べよ、バカヤロー!! 未永くお幸せに!!』

「えっ!? す、すみません? いや、ありがとう?」

鬼灯の答えに、鬼殺隊たちは無茶ぶりを要求しつつキレ、そして祝福して安堵するという器用なことをやらかし、また更に狛治を困惑させて彼は訳が分からないまま、ひとまず素直に謝罪と感謝を告げる。

結果としてはようやく狛治は当初の目的であった謝罪と感謝を口にすることができたが、当初の目的とは全然違う方向での謝罪と感謝なので意味はない。

だが自分の一番近くの炭治郎がまだ泣き止んでないので、狛治はとりあえずあえず訳のわからない現状を理解するのは諦めて、炭治郎を泣き止ませることに専念しようと決める。

「炭治郎、大丈夫だ。気にしなくていい。というか、何で出会い頭にいきなりお前が謝るんだ!?!」

「だって……俺……、し、知らなかったとはいえ……狛治さんに……ひ、酷いことを……」

あまりに炭治郎が謝りまくるので、狛治は本来の面倒見の良さを発揮して手ぬぐいで炭治郎の顔を拭いてやりながら、予想外すぎる現状の理由を訊けば、炭治郎は幼い子供のようにはやくりあげながら答え

た。

狛治は一瞬、言われている意味が全くわからなかったが、鬼灯から「煉獄さんを殺害して逃げた時の事ですよ」と言われて思い出す。

逃げ出した自分を卑怯者と罵り、列車の乗客を誰も死なせずに守り切った煉獄は負けていないと叫んだことを謝っている事に気付くと、それはそれで何と言えればいいのかわからなくなって狛治はまた更に困り果てる。

狛治としては確かにあの発言は傷ついたが、言われて仕方がないことしかしていないと思っているので、炭治郎を責める気も恨む気も一切ないのが正直な感想。

しかし更に正直に言えば、怒ってなどないが純粋な感想と疑問として、「よく何も知らずにあれ言えたな！」が狛治の心境な為、結果として狛治は「いいから。気にしてないから、泣くな」と言って宥めることしか出来なかった。

その反応がまた更に炭治郎の良心にぶっ刺さり、罪悪感を煽って涙が止まらない原因になるのだが、これもまた幸か不幸かわからないが炭治郎の涙はその数秒後、止まる。

「竈門少年！ すまないがそろそろそこをどいてくれ！ 皆も悪いが、少し道を開けてくれ！」

狛治！ 勢い余って俺も攻撃になってしまったら容赦なく迎撃してくれて構わんからな！ よし！ 行くぞ!!」

「行くって何、煉獄さん!?!」

「土下座か!?! お前もまたあの勢いが凄すぎる土下座をする気か!?!」

やめろ！ 俺のことを思ってくれているのなら本気でむしろやめてくれ!! 頼むから!!」

煉獄の意味不明な宣言に炭治郎の涙が引っ込んで代わりに突っ込みが飛び出し、何をやらかす気なのか正確に察した狛治が慌てて止める。

もちろん煉獄は、泣き止まない炭治郎とそれを気にして狼狽える狛治に気を遣って、あえてボケた訳じゃない。気を遣ったのは事実だが、それは「俺も悪いのだから竈門少年もあまり気にしすぎるな！」と

いう遣い方で、スライディング土下座をしでかそうとしているのは、攻撃になってしまったがああ勢いは謝意を良く表していると思つて気に入つたのだろう。気に入るな。

幸いながら伊黒と蜜璃にしがみつかれて止められたことと、謝罪相手から「頼むからやめてくれ」と言われた事で煉獄はスライディング土下座第2弾を断念。面白がっていた鬼灯は若干、不服そうな顔をしていた。

「む、そうか。なら仕方がない。普通に謝ろう」

「は？ いや、何でよりもよつて杏寿郎が俺に謝るんだ？」

スライディング土下座は諦めたが、何故か殺された側の被害者代表が謝る気しかないことに、狛治だけではなく周りの連中全員が困惑して首を傾げるが、煉獄は真つすぐに狛治を見据えて言った。

「俺はお前に、『人は死ぬからこそ尊く、愛しい』と言つた。

その考えを撤回する気はない。だが、俺の言葉は狛治の過去や事情を知らなかつたからとて言つていい言葉ではなかつた。

「だから、その事を謝らなくてはならない」

煉獄の言葉、謝罪の意図を聞き狛治は目を見開き、言葉を失う。

「撤回する気はない。だが……突発的に、悪意によつて家族を喪つた者に対してこの考えは綺麗事であるのはわかつている。その人を尊く、愛しいと思つていればいる程、死んで欲しくないと望むのは当たり前だ。」

「だから、お前の過去を知っているかどうかなど関係なく、俺は謝らなくてはならない。あの場には、竈門少年もいた。竈門少年にとつても、俺の言葉はきつと無神経なものだつたらうからな」

「馬鹿なことと言うな!!」

煉獄のさらに続く謝罪、その謝罪の対象に自分も入つている事に気付いて炭治郎は、「そんなことない!」と否定しようとしたが、そのより先に狛治が叫ぶ。

「何でお前が……お前達が謝るんだ? 杏寿郎も炭治郎も悪くない!

鬼殺隊は何も悪くない!! 悪いのは俺達、鬼の方だ!!

どんな事情があろうとも、俺は人を殺した! 人を食つた!! 炭治

郎の妹のように耐えなかった!! 珠世さんのように、無惨様の呪いを外そう、逃れようという努力だってしなかった!!

俺は『どうでもいい』と言って、自分が犯した罪から逃げ続けたんだ!!

……だから、謝るな。少しでも、自分の考えが間違いだったかもしれないなんて迷いを抱くな。

杏寿郎、お前の考えは間違ってるんかいな。

親父は自分が死ぬことで、俺が真つ当に生きる未来をくれた。師範は、自分の内臓が焼かれるような苦しみに耐え、恋雪さんを助けようとした。……恋雪さんは死してなお、俺を待っていてくれた。救ってくれた。

皆……俺のように無意味に生き続けたからではなく、死ぬからこそ、死んでも尊く、輝き続けたんだ。だから……だから、杏寿郎。悪いのは俺だ。謝るべきなのは俺の方なんだ。

お前は……お前達は何も悪くないんだ……」

狛治の否定の怒声にしばし呆気を取られていた煉獄だが、狛治の今にも泣き出しそうな懇願のような「謝るな」という言葉に、あれほど悲惨な生涯を送っても自分と同じものを尊いと思える心に、煉獄は子供のように嬉しげな笑みを浮かべる。

「そうか……」

わかった。なら、もう俺は謝らないし、迷わない。

だが、狛治。お前も謝る必要なんかない。お前は既に禊を終えたからこそここにいるのだから、謝って償うべき罪などもうないのだから、そう卑屈になるな」

煉獄が納得してくれたことには狛治は安堵の表情を浮かべるが、自分も謝る必要はないという言い分は受け入れられないのか、曖昧な苦笑を浮かべて俯く。

だがその俯いた顔を煉獄は両手でつかんで上げ、狛治が目を逸らさないように、逸らせないようにして言葉を続ける。

「顔を上げろ! そして、周りを見る狛治!!」

……どうだ? どこに、お前を憎んで恨む者がいるんだ? お前の

罪はどこにあるんだ？」

顔を上げさせられてまず見えたのは、幼い子供のように無邪気に笑う煉獄。

顔から手を離し、両手を広げて周りを煉獄は見せつける。

「鬼殺隊だった者達が今、どんな目で狛治を見ているのかを。」

全員の目は赤く充血して瞼は腫れぼったくなっているが、女性勢は全員、ちよつと困ったようにだが穏やかに笑ってる。

年若い者はまだ鼻をぐずぐず鳴らしながら野次を入れるが、その野次は恋雪と狛治の幸せを願うものだ。

義勇と目が合えば、戸惑った顔をしてからぎこちなく笑った。大柄な僧侶らしき男は、大泣きしながらも自分に笑いかける。

傷だらけの青年と首に白蛇が巻き付いた青年は、目を合わせてはくれなかった。

だがそれぞれ、「……気にしすぎだ、根暗」「……卑屈すぎる方が、見ている不快だ」と素直ではないが狛治に謝る必要はないという煉獄の言葉を肯定していた。

「狛治さん」

そして自分の傍らで座り込んでいた少年は……、炭治郎は――

「これから、よろしくお願ひします」

立ち上がり、笑って右手を差し出した。

誰かを守り続けた手で、あまりに多くの血に汚れ、大切なものを取りこぼし続けた狛治の手を望んでくれた。

ためらいがなかったと言え、嘘になる。

けれど、それでも……

「……ああ。よろしく。そして……ありがとう」

狛治はその手を重ねた。

言いたくて言いたくてたまらなかった感謝をようやく伝えることができた。

* * *

「ありがとう、炭治郎。そして、杏寿郎。他の皆も……」

改めて炭治郎たちに礼を伝えると、煉獄は笑って胸を張って答え

る。

「感謝は嬉しいが、あまり何度も言うのとそれはそれで卑屈に見えるぞ！俺達は親友だろう！水臭いことを言うな！」

「親友!? 誰が!? 俺が!？」

しかし、勢いよく煉獄は何か色んなものをすつ飛ばしたことを言い出し、狛治をまたしても困惑の極みに叩き落とす。

狛治だけではなく、鬼殺隊のほぼ全員も煉獄の光栄なんだか一方通行過ぎて迷惑なんだかな親友認定に戸惑い、鬼灯でさえ「こいつは何を言ってるんだ?」という顔で眺めている。

唯一、伊黒が頭痛に堪えるように頭を抱えながら、突っ込みどころが満載過ぎて突っ込みづらいボケの処理を試みてくれた。

「……煉獄。気に入ったのはわかるが、行き成り親友はどうかと思う」「何故だ? 友情に年月など関係ない。自分で言うのもなんだが、先ほどのやり取りで俺達は相思相愛と言っている程、互いを思いやっているのだから、俺と狛治は親友だ！」

もちろん、伊黒! お前も親友だ!!」

しかしボケの処理は、真っ直ぐすぎて直視しきれない善意と好意に跳ね返されて失敗。

むしろ伊黒が真っ赤になって、「馬鹿じゃないのか、お前!!」とツンデレ乙女のような反応を取って余計にカオスは続く。どうやって終わらせたんだ、これ?

……狛治の幸福だが苦労性に磨きがかかる獄卒としての生活は、こうして始まった。

無惨様の楽しい十六小地獄めぐり（叫喚地獄編）

「視聴者の皆様、お待たせしました。

前回はさすがにコンプラに勝てず暗転した場面があつたにもかかわらず好評を得た、『名前を言つてはいけないあの人』『命の怨人』『自滅の刃』などと、もはや汚名が大喜利と化しているバブ辻 オギヤンの十六小地獄めぐり第3弾、叫喚地獄編を開始したいと思ひます」
「おい、名前!! お前も汚名大喜利に参加するな!! そもそも意味不明にもほどがあつて大喜利になつてないわ!!」

鬼灯がいつものように口調は明るく、顔は真顔で罵つてるのか他意なくただ事実を語っているだけなのか判別つかないことを言い出し、無惨がキレル。

が、今回は前回までとは違う所がある。

「いえ、最後の悪あがきのあの形態を表しているので、語感も相まってむしろうまい部類ですよ無惨様」

「大真面目に解説するな、猗窩座あつっ!!」

「俺は狛治です、無惨様」

前回と前々回は欠席していた狛治は今回は参加しており、狛治は無惨をしつかり拘束しながら大真面目に鬼灯がサラツと言つた酷い改名に解説を入れ、無惨をむしろ更にブチ切れさせた。

なお、狛治の解説に嫌がらせなどといった悪意の類は一切ない。素の感想だ。

そもそも今回は欠席せずにここに居るのも、無惨を痛めつけて鬼だった頃の恨みを晴らしたい訳ではない。というか、狛治は最初から無惨に恨みを懐いていない。

彼に起こつた悲劇自体に無惨や無惨の鬼は無関係であり、無惨が自分の元にやつてきてしまったのも、自分が師の教えを守れず憎悪のままに虐殺を行った自業自得と考えている為、自分の意思ではなく通り魔的な犯行で鬼にされた純粋な被害者でありながら無惨を恨んでいない、珍しい亡者なのだ。

そんな彼が何故ここに居るかというと、ただ単に鬼灯の側近のよう

な立場でありながら、「元上司の情けない所を見るのはさすがにいたたまれない」という自分のワガママで他の仕事はしているとはいえ、この仕事を拒否して欠席し続けるのはどうかと思うという、実に真面目だがこちらも無惨自体は無関係な理由だった。

恨んでいないが感謝や恩義を抱くような要素も当然ない為、狛治は無惨に対して「元上司」「面倒くさいからなるべく関わりたいくない」「珍獣」としか思っていない。好きの反対は無関心の典型である。

そんなある意味人間ができすぎているからこそ、とてつもなく酷い評価と扱いを元部下から受けて当然無惨はキレるのだが、部下だった当時はお気に入り要素であった忠実でくそ真面目な所が自分ではなく鬼灯に向かっている為か、狛治は無惨のパワハラを結構余裕で無視して鬼灯に尋ねる。

「ところで、鬼灯様。この地獄も無惨様はあまり関係ない罪が多いのでは？」

これも別に、無惨を思いやったわけではない。狛治が思いやったのは現在直属の上司である、鬼灯だ。

無惨があまりにも頭無惨すぎるので、無惨が無関係な罪で落ちる地獄でもクレームは一切来ないが、それでも鬼灯の理不尽すぎる落とし方に「あれはさすがにどうよ」的な感想は見かける為、人の好い狛治は心配になったのだろう。

だが、もちろんそんな他人の感想や狛治の心配で鬼灯を止めるところか揺るがすことすら出来る訳がない。

「まあ確かに、叫喚地獄は酒関係の地獄なので無惨はほとんど関係ないですね。毒耐性があるので酔いませんし、自分本位なクズすぎて一方通行でも人に酒を飲ませて楽しませてやろうなんて感性もありませんし。」

けどこいつは常に自分に酔ってますし、その所為で人に迷惑をかけるまくってますし、あとこいつの血を酒に置き換えたらいはいケますー！」

「いくな！ お前本当に少しは立ち止まれ！！ なんでもかんでもゴリ押すな！！」

一旦は狛治の発言を認めておきながら、無惨の血と「こいつ常に泥酔してるようなもんだよ」という屁理屈で今回の叫喚地獄めぐりをゴリ押し鬼灯に、これまたお前が言うのだがまさしく正論で無惨は突っ込む。

だが、無惨よ。お前は部下である十二鬼月、それも上弦であっても使い捨ての道具としか見てなかったから知らなかっただろう。

本日は、お前が突っ込まなければならぬ相手が、それも鬼灯とは違ってわかった上でボケるのではなくスペシャルど天然でやらかす奴がいることに。

「なるほど！ それなら問題ありませんね！」

「お前も納得するな、猗窩座ああっ！ 少しは自分の考えを持って動け!!」

「空っぽの狛治さんを鬼にして、洗脳とパワハラでこき使い続けたお前が言うか？」

大真面目な忠臣だからこそ、狛治は信頼した相手にはちよつと盲目的なところがある。そして何より、無惨のことを何とも思っていないのだから、狛治からしたら鬼灯が非難されずに済むのならあとは無惨がどのような地獄に落とされようが心底どうでもいい。

なのでいい笑顔で納得したト天然な狛治に、これまた割と正論で突っ込むのだが、もちろんそれは即行ブーマランで帰ってきて鬼灯が呆れたように突っ込む。

本日の無惨は前回から2倍は突っ込まなければならぬことに他の獄卒たちは気付き、無惨の喉の心配だけはした。

* * *

・叫喚地獄の十六小地獄

「はい、まず本日最初の小地獄はこちら。『大吼処』だいくしよ」。

心身を清める齋戒を行っている人に酒を与えた者が落ちます。刑罰は、単純に溶けた白蠟を無理矢理飲ませることです。後は、まあ普通に獄卒によるフルボッコですね」

「これは、酒を無惨様の血に置き換えたら普通に当てはまりますね」「私を無理やり落としたいがために罪状を捻じ曲げるな!!」

最初の地獄の堕ちる罪状と刑罰の説明を鬼灯がすると、狛治は白蠟を用意しながらこれは無惨以外文句はどこからも出ない地獄であることに安堵し、そして狛治の予想通り無惨だけが不満を喚き散らす。

そんな無惨を見下ろしながら、鬼灯は狛治が用意していた白蠟を勝手に奪って少しだけ楽し気に補足した。

「……これはあくまで、『元の』罪状です。時代の変化に合わせて、この地獄に堕ちる罪状の定義は少し広げられているんですよ。」

そもそも叫喚地獄が酒関係の地獄なのは、酒そのものを『悪』としているのではなく、ただ単に人が墮落する原因になる娯楽で太古から存在するのが『酒』だからです。だからこの罪状は元から正確に言えば、『真面目に何かやつてる人に娯楽を見せつけて誘惑して墮落させた者』が落ちる地獄。

……つまりは、最初から屁理屈抜きでお前が墮ちる地獄だーっ!!」
そう叫んで拘束されて地面をビチビチ跳ねていた無惨に溶けた白蠟を飲ませる鬼灯。

それを遠い目で眺め、わんこ白蠟状態になっているので次々と白蠟を溶かして用意しながら、狛治は地味に思う。

(……娯楽を見せつけて誘惑なら、むしろ無惨様当てはまらないのでは?)

* * *

「こちらは、『普声処』ふしやうじょ。」

修行中に気が緩んで酒を飲んだ者、自ら飲酒を楽しむばかりか、受戒したばかりの人に酒を飲ませた者が落ちます。アル中患者だけではなく、未成年などに酒を飲ませた者も落としますので、ここも無惨は真つ逆さまストレート落とせます」

「だから！ 私は酒など他人に勧めて飲ませたことないわ!!」

「酒を血に置き換えるって最初から言ってるでしょうが」

しつこく自分は当てはまらないと主張する無惨に、鬼灯はこの刑罰である鉄の杵を素振りして答える。

だが、狛治が控えめに手を上げて自分の発言許可を求めたので、鬼灯は常人では見えない速度の素振りをいったんやめて小首を傾げながら許可を出す。

「あの、鬼灯様。確かにここは無惨様を落としても文句など出ないと思いますけど……この刑罰はやめておいた方が……」

「おい！ 文句が出ない訳ないだろ！ 現にここに今、文句しかない私がいる!!」

何故か狛治はまったく無惨を擁護していないのに、この刑罰実行は控えめだが止めるといふ矛盾したことを言い出す。

結果的に自分の得になることを言っているのに、その事に感謝はもちろん助かったとすら思わず、不満だけを口にする無惨のブレなさに一種の関心をしつつ頭を杵で潰してから、鬼灯は「何故ですか？」と問う。

問われて狛治は即答。

「この刑罰は『鉄の杵で殴打』とシンプルな分、呵責される亡者が苦しみで叫ぶ悲鳴が『地獄を通り越す』ぐらいを基準にしているからです。」

他の亡者の悲鳴なら、獄卒も地獄の住人達も慣れ切ってますから気にしないでしょうが、無惨様の声なら不快感を覚える人が続出しません」

「なるほど。確かに不意打ちでこいつの声を聞くのは不快ですね。しかも苦痛の悲鳴だけならまだしも、こいつ絶対に自分棚上げの暴言も吐きますし。」

良い判断です、狛治さん。見落としてました、ありがとうございます」

別に何も矛盾してなかった。どこまで無惨ではなく別の誰かを思って、案じての発言だったこととその内容に鬼灯は納得して、狛治に礼を告げる。

しかし、狛治が止めた理由とこのまま通常通りの呵責を無惨にするデメリットに納得はしても、やめてやる気は当然鬼灯にはない。

なので鬼灯も、即座に刑罰の内容を若干修正して狛治に指示を出す。

「なら、悲鳴を上げられないように瞬間接着剤でも飲ませて喉を塞ぎましょう。狛治さん、すみませんが至急用意をお願いします」

「はい！ わかりましたー！」

「何もわかってないだろ、猗窩座あつっ!!」

獄卒たちの無惨に対する喉の心配、斜め上の方向に的中である。

* * *

『はっかるしよ髪火流処』。

五戒を守っている人に酒を与えて戒を破らせた者が落ちますので、巖勝さんや累さん、珠世さんのように真面目に普通に生きていた人たちの弱みに付け込んで騙して鬼にした罪は、ここが妥当でしょう。

刑罰は熱鉄の犬が罪人の足に噛み付き、鉄のくちばしを持った鷲が頭蓋骨に穴を開けて脳髓を飲み、狐たちが内臓を食い尽くします。……？ どうしたんですか、狛治さん？」

落ちる罪状と刑罰の内容を鬼灯が説明していたが、無惨が「騙してなどいない！ あいつらが勝手に勘違いした拳句に逆恨みしただけだ!!」と聞く価値などない雑音を喚いているのはいつもの事だが、狛治が一瞬だが笑ったことに気付いて鬼灯が尋ねる。

「！ す、すみません！ ちよつと思ひ出し笑いを……不謹慎ですみません!!」

「いえ、それくらいは別に良いのですが、何を思い出したんですか？」
狛治の性格からして、こういう状況で笑うような人柄ではないからつい気になっただけで、思った通り狛治は顔を真っ赤にして謝るが、その笑った理由がまた更に鬼灯にとっては謎だった。

なので更に質問を重ねてみたら、狛治は顔を赤くさせたままボソボソと答える。

「いえ、本当に大したことでは……。」

ただ単に、獄卒になつてすぐに地獄の刑場について家族に少し説明

した時、師範がここの名前というか漢字で刑罰の内容を勘違いしていたのを思い出して……つい。

……師範、『髪火』という漢字で『髪を燃やされてハゲにする地獄』だと真剣に思い込んでいたので……」

「!! 素晴らしい! 良く思い出してくれました狛治さん!」

「……え?」

狛治の説明にいきなりテンションが上がった鬼灯に、狛治だけではなく無惨も嫌な予感を全力で感じながら困惑の声を上げる。

そんな二人の困惑などもちろん気にせず、鬼灯はハイテンションのまま言った。

「慶蔵さんにもお礼を言っておいてください! 肉体的にも精神的にも効果的な良い拷問のアイデアをありがとうございますと!!」

「猗窩座あああつつつつ!!」

「すみません、無惨様! これは本当に俺が余計なこと言いました!!」

まさかの家族のほのぼのエピソードによる思い出し笑いから、新たな屈辱的拷問が採用の流れに無惨が元部下にブチキレ、これには狛治も真剣に無惨に謝った。

しかし無惨の髪を燃やすのに躊躇はなかった。

* * *

「お次は、『火末虫処』かまつちゆうしよ」。

水で薄めた酒を売って大儲けした者、現在では食品偽造などの詐欺行為で落ちる地獄です。

ここは地・水・火・風の四大元素から来る四百四病の全てが存在し、しかもそれぞれが、地上の人間を死滅させる威力を持っています。その死病と、罪人の身体から無数の虫が湧き出し肉や骨を食い破るのがこの刑罰です」

「詐欺行為など行ってない! 私の血に耐えられなかった脆弱な者が悪いだけだろうが!!」

基本的に無惨に対して「好きの反対は無関心」で何とも思っていない狛治だが、無惨のこの発言は間違いなく無惨の血に耐えられない、好きで病弱に生まれた訳ではない自分の実父や恋雪を侮辱する言葉

だった為、まとう空気が重く、怖くなって周囲の獄卒をちよつとビビらせる。

だがすぐにいつもの苦勞人狛治に戻る。

「お前の血の事を抜いても、玉壺の作った壺を高値で売ったのは詐欺行為扱いでいいでしょ」

「鬼灯様!? その流れ弾はさすがに玉壺が可哀相では!?」

「では狛治さん、あなたはあの壺に高値を付けれますか?」

「……………」

「黙るな! 庇うなら最後まで庇ってやれ!!」

撮影獄卒スタッフは狛治の怖い空気がなくなったことにホツとしたが、このメンバーだと実は無慘が一番まともなんじゃないかと錯覚してしまうのがヤダなど遠い目で思った。

* * *

「ここは、『熱鉄火杵処』ねってつかしよよ。

鳥や獣に酒を与えて、酔わせた後に捕らえて殺した者が落ちます」「したことないわ! 何でケダモノにわざわざ酒を飲まさなくてはならん!」

「動物虐待よりそっちの否定が真っ先に出る時点で、自分がクズだと自己紹介しているようなもんですよ」

無慘が頭無慘であることを証明する自己弁護に、もう聞き飽きたと言わんばかりの返答を返す鬼灯。

そんな鬼灯に苦笑しながら狛治は、無慘を落とす屁理屈までとは言わない、ちよつと応用して広げた定義と熱鉄火杵処で行われる刑罰の内容を語る。

「ここで罰しているのは『抵抗できぬように毒を与えてから甚振った』ことなのと、自分より弱いものを甚振ったことも合わさって、最後の戦いで鬼殺隊にしたことが当てはまりそうですね。

そして刑罰は、獄卒が振り下ろす鉄の杵で追い回され、捕まると砂のごとく細かく砕かれること。そして肉体が再生すると今度は刀で少しずつ削られ、細かい肉片にされる……これ、全部鬼殺隊に無慘様されてませんか?」

ここに落とす為に上げた無惨の悪行は、既に生前それをされた鬼殺隊の手で似たようなことをされていたと気付いて突っ込む。

鬼灯も言われて、神仏の手を借りず人間が自力で引き寄せたまさしく因果応報にやや引きつつも、「ここまで殺意が高いとは……」と納得していた。

「弱いものを甚振ったの罪で落ちるなら、あいつらが即行でやり返せる時点で私がここに堕ちる筋合いないだろーっ!!」

これまた結構正論で、そして確かにむしろこの理屈で落とすなら鬼殺隊に失礼かもしれないが、落とさないという選択肢は鬼灯はもちろん、狛治にもない。

なので、「まあ、昔を懐かしむのにいいでしょう」という雑過ぎる理由で無惨は落とされた。狛治の最初の気遣い台無し！

『雨うえんかせきしよ炎火石処』です。

こちらは旅人に酒を飲ませ酔わせて財産を奪った者、もしくは象に酒を飲ませて暴れさせ、多くの人々を殺した者などが落ちる地獄です」

「前半はともかく、後半はあると思ってるのか!? というか、後半いるか!?! いるのか、その罪でここに落ちた奴!!」

「……一人、いるんですよ」

「そいつの人生に何があったんだ!?!」

鬼灯自身も地獄の定例会議で突っ込んだことを、無惨も突っ込む。

無惨のして当然の突っ込みに、狛治は目をそつと逸らしながら答えたら、狛治も思ったし十王も思った、きつと誰もが思う疑問を素で叫ぶ。

「気になるなら直接訊いたらいいじゃないですか。どうぞ」

そして鬼灯が炎を発する石の雨が降りそそぎ、溶けた銅や血が混ざった河が流れる地獄に、無惨を突き落す。

無惨が落ちるいわれを屁理屈でもこじつけていないが、まあこれは前半の罪はストレートに犯してそうだからいいだろう。

『殺殺処』。

貞淑な婦人に酒を飲ませて酔わせて関係した者が落ちますので、これもこじつける必要なくやらかしてらるでしょう。

刑罰は獄卒たちが熱鉄の鉤でえーと……罪人の息子を引き抜きます」

「鬼灯様！　この刑罰、モザイクなしで本当に良いんですか!？」

「大丈夫です。衆合地獄でも似たような刑罰をそのままいきました」「いかないでください!!」

「モザイクがあるかないか自体はどうでもいいわ！　そもそもするな！　されるいわれはない!!」

今更にすぎる突っ込みを入れる狛治、いわれしかないのにないと言いつ切る無惨だが、どちらも内股なのが何とも締まらない。

が、この拷問に慣れ切ってしまったている獄卒以外の男獄卒も皆、ついつい内股になってるのでそれを締まらないと思う資格があるのは鬼灯しかない。……何で鬼灯は平気かつ、いきいきと何本でも引っこ抜けるの？

* * *

『鉄林曠野処』。

酒に毒薬を混ぜて人に与えた者が落ちる地獄ですが、これも酒を血に置き換えたらそのままです」

「私の血が結果的に毒になるのは私の所為じゃないだろうが!!」
「毒だとわかって与えるのが罪だって話だ」

これまた無惨自身の非とはいえない部分で抗議したが、「毒」が大型地雷の狛治が一応、敬意は全くないただの癖でしかなかったとはいえ使っていた敬語を投げ捨て、無惨を鉄輪に括り付けて火を放つ。

「狛治さんの言う通り。そしてこの刑罰は、ここから更に回転させて的当てのごとく弓でいられることです。

さて、久々に私もやりますか。お見せしてあげますよ。炭治郎さんから学んだ武器投擲の腕を!!」

「弓じゃなくてそっち!?　しかも教えたの炭治郎!?　確かにあいつの投擲技術は異様ですけど!!」

そして鬼灯は自分で弓と言ってるのに無視して、そこらにある刃物を思いっきり無惨にブン投げまくる。

確かに、炭治郎の投擲並みにいいフォームと的中率だった。さすがの狛治も、頭が剣山状態になった無惨を見たら地雷を踏まれた怒りは納まった。

* * *

「お次は、『普閻処』ふあんしよ」。

酒を売る仕事をしながら人の無知に付け込み、少しの酒を高価な値段で売った者が落ちます。

刑罰は暗闇の中で獄卒に散々に打たれ、その後炎の中で頭から二つに引き裂かれることです」

「いい加減、纏める!!」

またしても無惨を落とす地獄を一つでも減らしたくないがために、他にも似たような罪状で落ちる地獄があるのに纏めなかった地獄の登場である。

しかし、鬼灯は真顔で「この地獄は違いますよ!」と一部は肯定しつつ否定。

「火末虫処とここでは、詐欺の方法が違います」。

火末虫処は別物を価値あるものと言って売りつける行為。つまりは無名の画家の作品を有名な画家の作品だと偽るような行為に対し、こちらは物自体は本物ですがその価値を偽っている行為。

ただ、これらの方法をわざわざ分けていること自体に意味はありません。単に詐欺行為自体は昔からある為、『詐欺行為全般の地獄』が一つだけだとそこがすぐに定員オーバーの過密状態になる為、詐欺の方法で刑場を分けて分散させています。

なので、やっぱり玉壺の壺を売った罪で落ちろ」

一応は地獄の刑場紹介という体裁の動画の為、鬼灯は今回本当に無惨無関係で分けていなかった理由を丁寧に説明し、無惨本人は雑に落とす。

狛治は次の地獄の用意をしながら、ここでも「お前の壺に高値を付ける価値はない」と流れ弾をくろう玉壺に少しだけ同情した。

『閻魔羅遮曠野処』です。

病人や妊婦に酒を与えて、彼らの財産や飲食物を奪った者が落ちます。

罪人は足から順に頭まで燃えていき、その上で獄卒に鉄刀で足から順に頭まで切り刺されるのですが……狛治さん。あなたの地雷を盛大に踏み抜く罪人揃いの地獄なので、キレるのはわかりますし好きにしているとは言いましたが、無言で黙々と、しかも素手で自分の腕を燃やしながらいり潰すのはやめてください。他の獄卒達がドン引きどころか怯えています」

「こちらは、『剣林処』。現世では『剣樹地獄』とも呼ばれています。

荒野を旅する人をだまして泥酔させ、持ち物や命を奪った者が落ちる地獄で、刑罰は燃え盛る石の雨、沸騰した血と銅汁と白蟻の河がある中で、獄卒に刀や殻竿で打たれます」

「そんなかえって面倒なことしたことないわ!!」

先程、元部下にマジギレで殴殺されまくっていたのに復活すればブレない変わらない頭無惨加減に狛治は改めてドン引きつつ、鬼灯に訊く。

「鬼灯様。実際、ここの地獄はどうする気ですか？ 無惨様、最低すぎて本人の言う通り『泥酔させてから強盗』なんてことしてませんよ」「いえ、大丈夫です。巖勝さんを鬼にした経緯をここにこじつけられます」

「……は？」

「やってることがこれ以上に最低なら別にいいでしょう」くらいの暴論だが正論を返されるかと思ったら、予想外な人物名が上げられ、狛治は困惑。

その困惑に説明してやるつもりで、鬼灯はそのこじつけた理屈を語る。

「無惨の血を酒に置き換え、巖勝さんを泥酔（鬼化）させて縁壺さんから最愛かつ敬愛する兄を奪ったと考えたら、ここに墮獄は妥当です」

「巖勝・黒死牟本人が全力で嫌がって否定しますよ・するぞ、その理屈!!」

筋が通っているようでだいぶねじ曲がっているこじつけに、狛治と無惨が同時に突っ込んだ。

だが、その突っ込み兼抗議は、「割と自業自得でしょう」と容赦ない一言で無視されて、無惨よりも巖勝が一番屈辱的な理由で無惨は落とされた。これ、流れ弾の被害者は無惨なのか巖勝なのか……。

* * *

『大剣林処』です。

落ちる罪状は、人里離れた荒野の街道で酒を売った者。刑罰は獄卒たちに幹は炎に包まれ、葉は鋭い刃の剣樹の林に追い立てられます。剣樹は揺れるたびに無数に落下して下のものを切り裂かれるというものです」

「したことない以前に、それは一体どのあたりが罪なんだ!」

正論すぎる突っ込みに、またしても鬼灯は「イザナミ様、寝ぼけ過ぎでは……?」とこちらも突っ込む。変な罪状による地獄は、全部イザナミが眠かったからと決めつけているのもどうかと思うが、確かに寝ぼけているとしか思えないな、これ。

「まあ、これは多分『希少品を買い占めて、不当に高価に転売』等に対する地獄なんでしょう。実際、現在はそのような解釈で罪人を落としてますし」

狛治も「イザナミ様、何考えてたんだ……?」と思う地獄だが、一応フォローして現在はそのような罪人が落ちるのかの説明を加える。「なににせよ、私はやはり関係ないわその罪状!!」

「もうこれも壺売りの件でいいんですよ」

狛治のフォローにこれまた実は言い返せない正論で返されたが、鬼灯は容赦なく雑にさらに返して剣樹の元に無惨を蹴りだした。

最早ここまで来たら「玉壺、便利だな」と狛治は思うことにする。遠い目で。

* * *

『芭蕉烟林処』です。

ここは貞淑な婦人に密かに酒を飲ませていたはずらしようとした者が落ちる地獄。先ほどの普閻処と違って、こちらこそ殺殺処と一緒にしてしまつて良かったのに、こいつを落としたくて纏めなかつた地獄ですよ！

という訳で、行つてこい！ オム辻 無惨!!」

「こんなところで無礼すぎる汚名大喜利を唐突に始めるな!!」

突つ込まれる前に身も蓋もない説明を入れて、文字通り蹴りだして地獄に墮とす鬼灯を眺めて、無惨に少しは同情しそうになつたが、とつさの突つ込みが確かに屈辱的すぎる改名とはいえ、罪状に否定がなかつたことからたぶん心当たりがあるか、罪状自体の何が悪いのかを理解していないことを察し、狛治は無惨を無視して刑罰の説明をカメラに向かつてする。

「ここでの刑罰は、煙が充満していて前が見えない、床は熱した鉄板になつている空間で永遠と焼かれながら歩きまわされることだ。

殺殺処より甘く見えるかもしれないが近々統合予定だから、心当たりがある者は引っこ抜かれる覚悟をしておけ」

* * *

「こちらには、『煙火林処』。

悪人に酒を与えて、憎む相手に復讐させた者が落ちます。刑罰は熱風に吹き上げられ、他の罪人と空中でぶつかり合いながら砂のように碎けること」

「だから！ そのような面倒くさいことは………しまった！ 半天狗!!」

「心当たり認めた!?!」

いつも通り、今度は正論ではなく全力棚上げパターンで否定かと思つたら、言っている最中にストレートで当てはまる心当たりを思い出し、無惨が悔しげに項垂れて叫び、狛治は意外過ぎたからかこちらにも叫んで驚愕。

鬼灯の方もここで認めるのは予想外なのか目を丸くしているが、無惨は鬼灯も意外な反応をしている事に気付かぬまま悔しさをそのまま言葉にする。

「くそっ！ あの虚言癖の恩知らずが！！ 何であいつの所為で私がこのような目に遭わねばならん!!」

「本当に、どこまで行ってもブレない頭無惨ですね。なんで心当たりが気付いても、相手の所為にしてるんですか」

半天狗にしたことがそのままこの地獄に堕ちる罪状に当てはまる事には気付いても、やはり自分が悪いとは一切思わずナチュラルに責任転嫁する無惨に、「良かった。私の知ってる頭無惨だ」とちよつと思つてそんな顔をしつつ、鬼灯は熱風の中に無惨を投げ入れた。

* * *
『火雲霧処』。

刑罰は先ほどの煙火林処の上位互換と言った所ですね。地面から100mの高さまで吹き上がる炎の熱風で舞い上げられ、空中で回転し、縄のようにねじれ、ついには消滅してしまいます。

他人に酒を飲ませて酔わせ、物笑いにした者たちが落ちます。まあ、つまりはアルハラが落ちる典型的な地獄です」

「現代では定義を広げ、『酒を飲ませた』『酔った状態を笑いものにした』だけではなく、『他者を笑いものにした』こと自体、つまりはパワハラやモラハラ、マタハラやアカハラなど、ハラスメント系全般で落ちる地獄となっています」

鬼灯の罪状の説明に引き続き、現在の定義も狛治が説明してちらりと無惨に視線をやる。

無惨はその視線をうつつうしそうに睨み返し、「それがなんだ？」と訊き返す。

完全に、「自分には無関係なのに、また理不尽な因縁をつけられる」と思っている顔だ。

「何でさっきは自覚できたのに、こっちは自覚できないんですか？」
先ほど以上に見事に全部自分に当てはまる地獄だというのに、こちららは心当たりには自覚がないことを真剣に理解できないがいつぞ尊敬すると言わんばかりの声音と顔で、鬼灯はやっぱり炎の熱風の中に無惨を投げ入れた。

* * *

「叫喚地獄、最後の地獄は『分別苦処』」。

使用人に酒を与えて勇気付け、動物を殺生させた者が落ちる地獄ですが……、このこの刑罰は獄卒が様々な苦しみを与えた上で、説教して反省させる。その上でまたさらに様々な苦悩を与えるという、何故か地獄の中で一番手ぬるい地獄です！

なので、どれほど痛めつけてもクレームがつかないこいつ相手に、ここでの新しい拷問を実験的に試して決定します!!」

「ちよつと待て、こちらーっ!! 貴様は私を何だと思っている!?!」

「……そちらこそちよつと待ってください。私の持ちネタは最初の『バブ辻』と先ほどの『オム辻』で使ってしまったので」

「汚名大喜利をしろとは誰も言っていない!!」

トリでありオチである最後の小地獄が、以前の定例会議で「生ぬるい」と鬼灯が指摘していた刑罰の地獄であった為、狛治は「どうする気だろう?」と思っていたのだが、まさかの無惨を使ってその生ぬるさを解消する方法に出た。

もはや鬼灯は無惨のことを、1000年も面倒をかけられ続けたムカつく罪人ですらなく、先ほどの言葉通り「クレームが来なくて便利な拷問実験用の亡者」としか思っていないのでは? と狛治は本気で思う。

「それでは、まずは期待の新人が制作した『自動深爪機』でも使ってみますか」

「地味すぎる!。そして、地味な名前のわりに禍々しいな!! 本当にそれ、深爪で済むのか!? 指ごといくだろ、それ!?!」

「大丈夫ですよ、6回に1回くらいしかありませんよ」

「あるんじゃないか!。しかも結構割合高い!!」

そしてその考えを更に強固にさせる、実にノリノリ生き生きとした拷問実験の準備を手伝いながら、狛治は今日の仕事の事、どう恋雪に引かれない程度にぼかして話そうかを真剣に考え始める。現実逃避とも言う。

「いい加減、腹をくくらないと私が今ここで甘露寺さんに求婚する!!」

衆合地獄のとある一角。

「……せつ………責め方がヌルいです!　というか、お香姐さんにお願ひしたいです!!」

「やはりお香さんが目的でしたね。衆合地獄に就くのは勝手ですが、末路は目に見えていますよ」

試験的に作られた女性だけの拷問チームである「拷問戦隊　ど助兵衛熟女団」(とあと何でかついでに鬼灯)にお試して責められていた唐瓜が、盛大に墓穴を掘って鬼灯に忠告なんだか追撃のトドメなんだかよくわからないことを言われていると、呆れたような声音が降って湧いた。

「……一体何をしてるんだ?」

声が出た方を見上げると、囀の美女獄卒が亡者をおびき寄せて登らせる刀葉樹の上に一人の亡者が気だるげに座っている。

傷一つ負わず気だるげという時点で、美女におびき寄せられた亡者ではないの是一目でわかる。そもそも、相手は死に装束ではない。

だが、だとしたら誰だ?　何でそんな所にいる?　と唐瓜と茄子はその人物を見上げながら疑問に思う。

初めは一瞬、おびき寄せる側の獄卒かと思った。獄卒は鬼か野干あたりがほとんどだが、裁判を終えた亡者も少なくはない。

そう思えるほどに、その亡者は容姿が整っていた。

口元にサラシのようなものを巻いて顔の半分を隠しているのに、はつきりそう言い切れる顔立ちだった。

特に気が強そうに吊り上がっているが大きな目は青と金のオッドアイで、日本人にしては珍しすぎるといふのを抜いても目に引くものだ。

だが、その亡者がおびき寄せる側ではない事はすぐにわかる。というか、気付くし思い出す。

その亡者の格好は男物であり、声だつてアルトやハスキーボイスというレベルではない。

「こんにちは、伊黒さん」

「あいさつはいいから、質問に答える。そいつらは何なんだ？ まさか、今日一日ここを体験する獄卒とはそいつらの事か？ それにしては何もかも浅はかだな。冷やかしなら花街に行け」

そして聞き間違いではない証拠に、鬼灯の挨拶をにべなく返して、小鬼たちの所業をいつから見ていたのかネチネチと責めたてる声はやはり男のものだ。

その発言に腹が立つやら、言われてもしようがないと反省するやら、反省してるからこれ以上掘り下げないと悶絶するやら、つていうか鬼灯様にそんな態度つてこいつ何者!?! という疑問やらが新卒たちの頭の中をぐるぐる駆け巡る。

しかし一番疑問かつ心配を抱いた「鬼灯に無礼な態度」は、まったく咎められない。

鬼灯は基本的に誰に対しても敬語を崩さないので誤解されがちだが、彼自身の敬語はただの癖でしかない。むしろ敬意で敬語を使っている相手なんて、おそらく数人もいない。

その為、彼は言葉使いや目上に対する態度などには実はあんまり厳しくない。調子に乗っていると感じたらその場で即行、実力行使でわからせる野生動物の弱肉強食スタイルを取っているからというのもあるが。

そんな訳で鬼灯は相手の無礼さを気にせず無視して、「今年に入つた新卒です。こちらの唐瓜さんが将来的に衆合へ就きたいそうなので、視察ついでに一日体験に連れてきました」と説明してから、小鬼たちに向き直つてようやく相手を紹介する。

「お二人とも、紹介します。」

この人は伊黒 小芭内おばないさん。先日、お会いした煉獄さん達と同じ世代、つまりは無惨を討伐した最後の世代の鬼殺隊、蛇柱だった方です」

最近興味を持ち始めた「鬼殺隊」の関係者、それも最後の世代かつ最後の戦いで活躍したのが確実な「柱」だと紹介されて、唐瓜と茄子

の目や表情があからさまに変わる。なんだ、この人？ という疑念や、ネチネチとした嫌味によるちよつとしたムカつきがなくなり、見た目相応な憧憬による輝きに満ちた目で小鬼たちは伊黒を見上げる。だがそんな憧憬の目で見られても、伊黒は不愉快そうに鼻を鳴らして木の上という立ち位置関係なく、全力で二人を見下して言った。「ふん。先ほどの言動からして、本音はただの浮ついた下心だろう。時間の無駄だ。とつとと帰って、まずは拷問でも事務作業でも何でも、基本を納めろ。新卒の分際で希望が叶うと思うな。」

そもそも、異性を目的にこの地獄に就くこと自体が愚かだ。お前は、この地獄の意図を本気で理解しているのか？ その目的自体が人間ならここに墮獄する理由になるんだ。自分が鬼だからと言って、その劣情が例外になると思うな」

さきほど以上にネチネチとしつこくだが、嫌味と言えるほど遠回りさはなくストレートに二人の志望動機、特に唐瓜を責めたてて来たので、二人の目から憧憬が消え去る。それどころか相手の言い分が正しい、これは逆恨みだとはわかっていても胸の内にムカムカとした怒りが沸き上がる。

今まで会ったことがある鬼殺隊関係者は、全員がそれぞれインパクト抜群の個性的な人柄揃いだったが、それでもすぐに「良い人だな」と感じさせる者たちばかりだったので、なおさらに伊黒の印象が悪くなった。

「伊黒さん、新入りちゃんをいじめちゃだめよお」

「そうやって甘やかすから、下劣な志望動機で阿呆なことを言い出すんだ。お香も、ここの責任者という自覚が足りないんじゃないのか？」

しかもお香が見かねてやんわり注意しても、伊黒はお香に対しても辛辣な言葉を返す。

その対応に、さすがの我慢強さでMに目覚めた唐瓜がキレた。

「はあ!? お香姐さんにまで何言ってるんだ、お前!? 最後の鬼殺隊ってことは、まだ死んで100年ほどで、どんなに有能でもそのままで上の立場じゃないだろ！ 俺達ならともかく、お香姐さんには言葉

使い気を付けろよ!!」

「私はいいんですか?」

「え? あっ?! いえ、鬼灯様、今のは言葉の綾で……」

「小芭内を悪く言うな!!」

「!?!」

キレた唐瓜の発言に、別に気にしていないがただ単に突っ込んだら面白そうだなという気持ちで揚げ足取りしだした鬼灯。

その思惑通り、見事に唐瓜が狼狽えて伊黒にキレた勢いは消失して狼狽えるが、言い訳を言いきる前にいきなり知らない声で咎められて、唐瓜だけではなく茄子も驚いてから辺りを窺い、声の主を捜す。

しかしそれらしき人物は見当たらない。それどころか鬼灯やお香、ど助兵衛熟女団マダムスの鬼女たちもいきなり増えた声に驚いた様子はなく、むしろ鬼灯以外は皆苦笑していた。

「どこを見てる!? こっちだ!!」

「……錆丸。いい。黙っていてくれ」

その反応にまた困惑していると、無視されたとても思ったのか更に怒ったような声がある。伊黒の方から。

なので視線を伊黒に戻して、ようやく二人は声の主を見つける。

木の上という距離があつてこちらが見上げる位置だったのと、口に巻いたサラシに紛れてわかりにくかったが、伊黒の首には白蛇が巻き付いていたのだ。

その白蛇が威嚇するようにシャーシャー音をたて、牙を剥きだしに口を開けながら言う。

「小芭内を悪く言う奴は許さないぞ! 小芭内はな、誰よりも優しいんだ!!」

「錆丸、いい。お前の気持ちは嬉しいしわかったが、本当にいいから」

「よくない!!」

初めはお香の帯蛇のように伊黒のファクション兼ペットだと思っただが、その蛇が必至で伊黒をフォローするいらしさに反して、伊黒が本気で嫌がつて黙らせようとしているので、蛇のフォローは逆効果で小鬼たちの伊黒の印象が更に悪くなる。

彼らは気付かない。自分たちの背後で鬼女たちの苦笑がさらに深まったことも、鬼灯さえも同情するように目を細めて伊黒と鑄丸という蛇を眺めていたことに。

後ろの生ぬるい様子に気付かなかったが、彼らの心情はこの後すぐ、涙目で伊黒をフォローしようとする鑄丸の健気すぎる発言で理解する。

「よくない！ 小芭内が悪く思われるのはいやだ!!」

だって小芭内は、本当はこいつらを心配してるもん!! 新入りが百戦錬磨の鬼女に弄ばれて、女嫌いになっちゃうのを心配してるから、経験を積んでから来いって意味で言ったの、鑄丸しってる!!

それを誤解されちゃうのはやだ!! 誤解で小芭内が嫌われちゃうなんて嫌だ! 小芭内は、素直じゃないだけで世界で一番優しいんだーっつ!!」

「鑄丸!! 本当がいいから!! 頼むからもう黙ってくれ!!」

鑄丸の可愛らしい健気なフォローで本音を暴露された伊黒が、顔の大部分が隠されている状態でも茹蛸状態だとわかるほど赤くなつて、鑄丸にもはや頼み込む。

ここまで言われて照れているのに、鑄丸を自分から引き離すことも、口を手でふさぐなどといった実力行使に出ないあたり、鑄丸の飼主好きっぷりに説得力を持ち、同時に彼の発言に信憑性が生まれて小鬼二人が懐く印象がまた反転する。

現に、困惑しながら助けを求めるように後ろを振り返ると、鬼灯は呆れたような声音で言った。

「いつも鑄丸さんにこうやって暴露されるんですから、いい加減素直になればいいものを」

どうやら本当に彼はただ単にツンデレ気質な、初対面の新入りにも思慮深く心配して自分が悪役になることも厭わず忠告してくれる、ぐう聖レベルの善人らしいことを唐瓜たちは確信した。

* * *

「あの……なんていうか、生意気言っすみませんでした」「ごめんなさーい」

「いいから今すぐに忘れる！ こっち見るな！ 帰れ!!」

今までの鬼殺隊関係者の例に外れず、やはり良い人だったことを確信したので唐瓜と茄子は素直に自分たちの非を詫びるが、伊黒は顔を真っ赤にしたまま、木の上で腕をぶんぶん振って追い払うようなきさで怒鳴る。

葉が刃の刀葉樹の上でそんなことをしてもやはり傷一つ負わないあたり、「柱」としての実力の高さがよくわかるのだが、もちろん今の伊黒を見てそんな凄さは気付けないうし、気付かれました伊黒も喜ばない。

何だか一気に親しみを感じられるようになった伊黒を、茄子は本人の希望を無視して眺めながら鬼灯に、「ところで伊黒さんってこの獄卒でいいんですね？」と今更なことを尋ねる。

今更だが鬼灯も生前の職歴は語ったが、現在の立場は何も教えてなかったことに気付いて「そうですよ」と肯定。

同時に、伊黒が言った時から思っていたこともついでに口に出す。

「というか、『異性を目的にこの地獄に就くこと自体が愚かだ』なんて、あなたが言いますか？」

「うっ……………」

「え？」

鬼灯の指摘に伊黒本人と伊黒をフォローしまくっていた鐮丸が同時に、痛い所を突かれたようなうめき声を上げて、鬼灯から目を逸らす。

その反応に、唐瓜たちも反応して意外そうな声を上げる。この地獄に就ける男獄卒は、筋金入りの硬派か逆に軟派すぎる者と鬼灯が言っており、伊黒はまさしく「筋金入りの硬派」だと思っていたので、また懐いていた印象が悪い方に転がりかける。

彼らの誤解に気付き、お香が苦笑したままフォローする。

「唐瓜ちゃん、茄子ちゃん、違うわよ。伊黒さんは自分を柵に上げた訳じゃなくて、そもそも彼はね……………」

「お香!!」

しかし鐺丸の時以上に大声を上げて、伊黒はお香のフオローを拒絶する。

鐺丸と違って空気が読めるお香は、そのまま話してやるか黙っておくべきか、どっちが本当に伊黒の為になるかで悩むのだが、その悩みはすぐに解決。諦めるしかないという意味で。

「あー！ 鬼灯様だー！ どうしたのー？ 視察ですかー？」

唐突に、地獄の刑場で聞けるとは思えないほど明るく澆漑、無邪気で可愛らしい声が響く。

呼ばれた鬼灯だけではなく、全員がその声の主の方に顔を向け、彼女と面識のない新入り二人の頬がやや赤らんだ。

桜色の髪と若葉色の目をした、実に可憐な亡者の女性が声音と全く同じ印象、天真爛漫という言葉を形にしたような笑顔で、こちらに向かって駆け寄りながら手をぶんぶん元気に振っていた。

お香に懸想していて、ど助兵衛熟女団^{マダムス}に反応していたことからして、唐瓜の好みからは外れる女性なのだが、それでも魅力的に思えるような人だった。

それは単純に可愛らしい容姿や、地獄のそれも刑場にはそぐわない明るさも確かに魅力の一つだが、唐瓜が「……いい」と力強く思ったのはもつともつと単純で即物的な所。

そんなまろび出そうなくらい即物的な所を、茄子はガン見しながら結構でかい独り言で零す。

「すげえ。おっぱいでけえ……」

女性というより少女と形容した方が自然なくらい幼く可愛らしい顔立ちに反して、その女性は現代日本の女性と比べても背が高い方で、スタイルはまさしくボン・キュツ・ボン！ の典型。

そのスタイルを惜しみなく披露する服装だが、衆合^{こご}の鬼女たちと違って淫靡さはない。本人の資質からか健康的で澆漑とした印象を与えているのだが、しかし走る勢いを良く表す胸部の躍動感に下心を懐かない男はそういない。

なので、茄子がガン見していたのは悪くない。きっとそれだけなら、本日の「一日体験」としての訓練が予定の3倍ほどきつくなる程

度で済んだ。

悪かったのは、口に出した点だ。そしてその因果の応報は即行だった。

まず最初に背中に衝撃を受け、そのまま倒れ込んだ茄子の目の前にザンツ!! と波打つ赫い刃が地面に刺さる。

伊黒が茄子の背中に飛び降り、フランベルジュのような赫い日本刀を茄子の目の前……あと数ミリで茄子の鼻が削ぎ落とされているような位置に思いつき振り下ろして突き刺した。

ちなみに、伊黒がいた刀葉樹は別に茄子の真上だったわけじゃない。むしろ、2, 3mほど距離があった。

「……足が滑って落ちた」

明らか狙って跳んで着地して来たのに、そんな言い訳を口にする伊黒。

その声を聞いたら、最初の嫌味は確かに優しさの裏返しというかただの意地のオブラードであったことはすぐにわかるほど、底冷えしていながら灼熱の憤怒を感じ取れるものだった。現に鎬丸もフォローしようとはせず、むしろ若干怯えているように見えた。

「!? 伊黒さん!? どうしたの!? 何事!? 大丈夫!?!」

セクハラの重すぎる制裁を喰らった茄子はもちろん、口に出してなかっただけで茄子と同じことを思っていたし、同じ部分をガン見していた唐瓜は顔面蒼白で硬直し、鬼灯たちベテラン勢は予測していたことなのでほぼ無反応な為、伊黒のやらかしに反応したのは駆け寄ってきている女性だけだった。

彼女は伊黒の殺気に気付いていないのか、茄子はもちろん伊黒も心配して「大丈夫?」と泣き出しそうな顔で何度も確認する。

彼女の問いに伊黒はやや気まずそうに目を逸らして「問題ない」と答える。そして茄子を心配する女性を制して、彼女の代わりに手を差し出して「大丈夫か?」と尋ねるので、マイペースすぎて周りを振り回す茄子だが人の機微には鈍くないので、もうこの時点で鬼灯の指摘とお香のフォローが何だったのかを大体察していた。

なので、「あー、大丈夫です。っていうか、ごめんなさい」と言いな

がらその手を取ろうとしたが、その直前に鬼灯が覇気なく忠告。

「茄子さん、今その手を取ったらたぶん握り潰されますよ」

「どういうこと!？」

弾けるような勢いで茄子が手を引き、伊黒は小さくだが確かに舌を打ったことで鬼灯の忠告は正しかったと知る。

「伊黒さん、本当にどうしたの？ 何があつたの？」

「……別に何でもない」

「あの小鬼が蜜璃をいやらしい目で見てたから、小芭内怒ってるの」

「鎚丸ーっ!!」

流石に鬼灯の忠告と伊黒の舌打ちは聞こえたから、女性は戸惑いながら伊黒に尋ねるが、もちろん伊黒は答えない。

だが鎚丸があっけらかんと答えて、伊黒と女性……蜜璃を同時に真っ赤にさせた。

そんな二人と一匹のやり取りに、顔色を回復させた唐瓜が砂糖を吐き出しそうな表情で鬼灯に尋ねる。

「……鬼灯様、あの女性って……」

「甘露寺 蜜璃さん。伊黒さんと同じく鬼殺隊の柱だった人です。ちなみに柱名は、恋柱。」

最終決戦時に伊黒さんと同タイミングで殉死し、その直前に『生まれ変わったら結婚しよう』と約束しましたが、お互いに善人すぎて転生ではなく天国永住が決まってしまって逆に気まずい思いをしたバカツプルです」

「鬼灯ーっ!! 甘露寺の紹介に余計な情報に乗せすぎるなーっ!!」

鬼灯の紹介に、紹介されている本人は真っ赤になって蹲ってしまったので、伊黒が代理でもっともすぎる突っ込みを決める。

もちろんそんな突っ込みで素直に謝る鬼灯ではない。むしろ自分が被害者だと言わんばかりのうんざり顔で、伊黒に言い返す。

「言われたくなければ、さっさと祝言あげたらいいでしょう。せめて、付き合え。」

何でプロポーズされて、それに応えているのに100年たってもあ

「なた達は未だに交際すらしてないんですか？」

「え？」

鬼灯の「お前が言うか？」という指摘は、蜜璃がおそらくその容姿と鬼殺隊の最高戦力である柱に上り詰めた実力からして衆合の獄卒に適任とスカウトされ、彼女を想う伊黒が衆合地獄の亡者や刑罰の内容からして彼女を心配して、蜜璃の護衛のような形で同じ地獄に就職したことを指していたことは、もう説明されるでもなく唐瓜も茄子も察している。そして実際、その通りである。

しかし、苗字が違うので結婚はしていないのはわかっていたが、まさかまだ付き合ってもいない段階だということをお鬼たちは信じられなかったので思わず伊黒を凝視すると、伊黒は顔を真っ赤にさせたままオロオロと狼狽え始めた。

「なっ！ あ……いや……だって……確かに……甘露寺は言ってくれたけど……俺も死ぬ程というか生き返りそうな程に嬉しかったけど……けど、あれは……生まれ変わったらの約束で……だって……俺はまだこんな……汚らわしい……」

「伊黒さんは汚らわしくなんかない!!」

「小芭内は汚くなんかない!!」

最初こそは赤い顔でパニくりながらの言い訳だったが、段々とパニックではなく泣きそうなのを堪えるようなたどたどしきで何故か自分を卑下し始める伊黒に、蜜璃と鎧丸が同時に否定してフオローする。

伊黒の自嘲に鬼灯は心底不愉快そうに舌を打ち、小鬼たちは伊黒の様子に戸惑うやら鬼灯の不機嫌さに怯えるやらしながら、お香にこっそり「どういうことですか？」と尋ねた。

そしてお香も、淡い苦笑を浮かべながら声を潜めて教えてくれた。

伊黒は、鬼に媚びを売ってそのおこぼれで甘い蜜を吸い続けて栄えた、罪人の一族であること。

しかし伊黒自身は、その一族が鬼に差し出す生贄としての子供だった為、犯罪に加担してないどころか被害者の立場であること。

だけど、自分は鬼に媚びて他者の命を売り続けた罪人の血筋である

ことは否定できないことを気にして、自分が逃げ出したことで歳の近い従姉妹一人を残して一族が鬼に皆殺されたことを「自分の所為だ」と責め続けていると教えられた。

その説明で、何で両思いなのに「生まれ変わったら」という条件に固執して、100年たっても交際にすら至っていない理由は理解でき、「ツンデレじゃなくてヘタレだな、この人」という印象もまた反転する。

満丸が最初に言った通り、彼は優しいからこそ幸福になれない、なることに罪悪感を抱く、狛治によく似た人間性なのだろう。

その事に気付くと、伊黒の何もかもが痛々しくて見ていられなくなるのが普通の感性だ。

……しかし普通じゃない感性代表が、想い人と親友のフォローもウジウジと否定して拒絶する伊黒を一喝する。

「本当、見ているイライラする人ですね。いい加減、腹をくくらないと私が今ここで甘露寺さんに求婚する!!」

『!?!?』

伊黒に腹をくくらせる脅し文句としては最適だろうが、鬼灯は脅す段階を超えてただの予告になっている事を言い出し、伊黒だけではなくその場の全員を盛大に困惑させた。

「ほ、鬼灯様！ 冗談でもそれはちよつと恥ずかしいわ！」

言われた本人の伊黒は、蜜璃を誰にも渡したくないという思いと、自分が彼女を縛っている罪悪感に揺れて、青い顔色のまま何も言えなくなっているが、そんな彼を庇うように蜜璃は鬼灯の発言を冗談ということで流そうとする。というか、彼女からしたら本気でそう思っているのだろうか。

しかし鬼灯は真顔で否定。

「冗談じゃありませんよ。実際に、初めて出会ってすぐに口説いたじゃないですか」

『!?!?』

「ふえっ!? そ、そうでしたっけ?」

「……蜜璃ちゃん、落ち着いて。伊黒さんも戻ってきて。それ、衆合こごの

獄卒への勧誘の話だから」

否定して爆弾発言を投下し、更に唐瓜たちや衆合地獄の獄卒たちの困惑と好奇心を加熱させ、そして口説かれたらしい本人が真っ赤になってパニくる。

伊黒の方はというと、真っ青を通り越して真っ白に風化しそうになっていたので、お香が二人に鬼灯の誤解を全力で招いている発言を修正した。

だが、鬼灯は伊黒を攻撃する手を緩めない。

「いえ、実際に甘露寺さんはかなり私の好みの範疇です。鬼殺隊に婚活で入隊する発想力と行動力とか、動物好きなどところとか。普通に付き合えるのなら付き合いたいし、結婚もしたい。

というか、鬼でもいいのなら甘露寺さんと結婚したい輩は数えきれなくらいいますよ。皆が元鬼殺隊だから、無惨無関係とはいえ鬼は範疇外かと思っているのと、伊黒さんのことで気遣っているから、どこぞのダメ神獣並みに軟派な奴しか口説かないだけで」

「なっ!?」

「はへっ!?」

真顔のまま、別に恋愛感情はないだろうが蜜璃が「はい」と求婚を受け入れても自分は一切困らないと断言し、更に伊黒のライバルは山ほどいることまで暴露してお香のフォローで若干回復していたはずの伊黒が再び白くなりかけ、蜜璃は間抜けな声を上げながらさらに赤くなる。

「はい！俺もその一人です!!」

甘露寺さん！めっちゃ好きです!! 一生、お腹いっぱい桜餅を食べさせてあげるので、鬼でも良かったらぜひ!!」

「料理が趣味だし、猫好きです!! ぜひとも俺の嫁にどうか!!」

「甘露寺さーん！俺だーっ!! 結婚してくれーっ!!」

しかもそのまま衆合の男獄卒共が便乗して、鬼灯よりも本気で蜜璃に求婚し始めた。

生前はその特異すぎる髪や体質をボロクソにけなされて見合いは破談になった為、蜜璃は結構自己評価が低い。

家族に愛されて育つたのとお館様や仲間達のおかげ、そして本人が根っから明るい性格なので卑屈にこそなっていないが、少なくとも自分は男性に好かれやすいタイプではないと思っている。しかし、その認識はこの地獄では間違いだ。

確かに人間相手では、大正時代はもちろん現代であつても蜜璃の桜餅の食べ過ぎて変化した髪や目の色、そして筋肉が常人の8倍の密度を持つ体は、どう言い繕つても普通とは言えないし、本人や伴侶が気にしなくても遺伝した子供が気にするかもしれないと考えたら、家庭を築くには二の足を踏むのは責められない。

だが、鬼からしたら蜜璃の髪や目は派手な部類だが二度見するほど珍しいものではない（桜餅が原因で変色したという事実は、鬼でもあり得ないのだが……）し、腕力だつて鬼女の中では強い方レベルであつて、やはりそこまで規格外ではない。

しかも裁判で天国永住決定済みなので、転生でいつか別れなければならぬという不安もないので、地獄の住人である鬼にとって蜜璃は普通に可愛くてスタイル抜群で性格もいい、まさしく理想の女性そのものなのだ。

そんな自分の評価を100年たつても気づいてなかった蜜璃は、同時多発求婚に狼狽えまくるが、それ以上に狼狽えているのは伊黒だ。

彼は自己評価が低いどころかマイナスなのと、この100年で地獄の鬼は自分が憎んだ無惨の鬼たちとは全く違う、特に自分の同僚たちは生前の同僚達と同じくらい気のいい奴ら揃いであることを表には出さないが認めているからこそ、自分が身を引いた方が蜜璃は幸せになれるのではないかという思いを抱いてしまう。

けれど、それでも諦めきれない。

それぐらい、彼女が救いだつた。自分の全てだつた。

鬼を倒してくれた当時の炎柱や、自分の一族も生い立ちも何もかもを受け入れて、我が子と言つてくれたお館様以上に、彼女の明るさが、優しさが伊黒の心を占めて救い続けてくれた。

「だめーっ！ 蜜璃をとっちゃだめー！！ 小芭内は蜜璃がいないと生きていけないの！！」

鏝丸の叫びも、「やめろ」とは言えない。そんな余裕もない。

それぐらい、伊黒は蜜璃を失いたくない、他の誰かのものになんか
なって欲しくないのに、けれど蜜璃の幸せを誰よりも何よりも願って
いるからこそ、彼はひたすら泣きそうな顔で周囲を見渡し、両手を空
に彷徨わせることしか出来ない。

「あ、あの！ み、みんなのお気持ちは凄く嬉しいけど！ ごめんなさ
い!!」

伊黒は何も言えなかった。

けれど蜜璃は、顔を真っ赤にさせたまま、混乱のあまりに目が回っ
てるような状態で、それでも頭を深々と下げて謝り、宣言した。

「私！ 伊黒さんが好きなんです!! 生まれ変わったらって言ったけ
ど、本当は私のまま、伊黒さんのお嫁さんになりたかったくらいに好
きなのだ!! 伊黒さんじゃないとダメなのだ!!」

だから！ ごめんなさい!!」

100年たっても腹をくくれない、煮え切らない、そのくせ独占欲
と嫉妬心だけは強い自分のことを、自分のまま好きだと、結婚したい
と言ってくれた。

その言葉をしばし伊黒は理解しきれず、ポカンとした顔のまま固
まってしまいが、鬼灯の「知ってます」という発言でようやく脳が理
解してそのまま今日一番真っ赤になった顔を隠すように、その場に座
りこんで蹲ってしまう。

「まったく。ここまで想ってもらえているのに、一体何で腹がくくれ
ないんだか?」

鬼灯からしたら脅しても無駄、振られることはわかり切っていた茶
番をやらかしてもまだ腹をくくれない伊黒に心底呆れるが、鏝丸が相
変わらず伊黒を羞恥で殺したいと思えない発言で鬼灯に怒って、
伊黒にトドメでしかないフオローをする。

「小芭内を悪く言うな！ 小芭内は蜜璃が素敵すぎるから、蜜璃に相
応しくなるように努力し続けてるけど、蜜璃が世界で一番可愛くて素
敵すぎるから、いくら努力してもし続けても納得できないだけだ!!」

「……鏝丸。本当に頼む。ちよつと黙っていてくれ」

親友が的確過ぎるほど伊黒本人の心の内全てを理解しているからこそ、伊黒は羞恥で死にそうになるが、親友の健気さとその発言、特に蜜璃が素敵すぎるは事実で否定なんて絶対にしたくなかったから、小声で黙るように頼むことしか出来なかった。

「ふえっ!? え? あ、ありがとう鑛丸ちゃん……。伊黒さん……」

そして蜜璃はまた更に恥ずかしそうに顔を赤くしながら鑛丸と伊黒に礼を言い、そして蹲って顔を隠す伊黒の傍らに座り込み、告げる。今度は周囲ではなく、彼だけに。

「あ、あのね、伊黒さん。……私にとって伊黒さんは今で十分、私にはもったいないぐらい、世界で一番素敵な人だけど……私、待ってるから。」

私、伊黒さんが伊黒さん自身を好きになれるまで、いつまでも待つてる! 待つのは全然辛くないから、大好きな伊黒さんが自分のことを好きになってくれたら嬉しいし、そんな伊黒さんが私のことを好きになってくれたら、私を……お嫁さんにしてくれたら世界で一番幸せだから……だから伊黒さん。ゆっくり、自分を好きになって。」

それまで私も、伊黒さんに嫌われないように頑張り続けるから!!」生前の、最期の瞬間の逆ポーズ以上に情熱的で、そして伊黒からしたらこんな幸せが許されていいのか不安になるくらい嬉しいことを言われたが、やはり自分を罪深い、汚らわしいと思っている伊黒は蜜璃の言葉に応えられない。

「ありがとう」すら言えなかった。

……だけど、自分の肩に触れる蜜璃の手に自分の手を重ねた。

自分の手を重ねた時の蜜璃の笑顔は、視力がほとんどない金の目でもはつきりと確かに見えたから、だからこそいつか必ずと心に決めることだけはようやく腹をくくれた。

いつか必ず、「生まれ変わったら」ではなく伊黒 小芭内のまま、「結婚してください」と今度は自分から希うことだけはもう諦めない。

* * *

「じゃ、後のことは伊黒さんにお任せしますから、唐瓜さんと茄子さんは一日衆合地獄の獄卒体験を頑張ってください」

「この流れで、伊黒さんに任されるの俺達!？」

「つて言うか伊黒さん、この後仕事できる!？」

まさかのこのタイミングで鬼灯は小鬼たちをよりにもよつて伊黒に丸投げして、閻魔殿に帰ろうとする。

当然小鬼たちは突っ込みで抗議するが、鬼灯は無視して来た道に戻り出すので、二人は付き合つてないのに誰にも付け入る隙などないバカプルの傍らに残されて途方に暮れる。

お香に助けを求めようにも、お香も苦笑しつつ「ごめんなさいねえ」と言つて鬼灯の後をついて行つてしまった。

そして鬼灯の隣に並んだお香は、少しだけ上司と部下ではなく幼馴染の顔をして言う。

「鬼灯様。伊黒さんをいじめちゃダメよお。そんなに、伊黒さんが嫌い?？」

「先ほど言った通り、見ていてイライラするんですよ。甘露寺さんの事に関してヘタレなのは、面白いからあのままでもいいくらいですけど、天国永住だと言われても自分を罪深いだの、汚らわしいだのと卑屈にウジウジウジウジしているのは我慢なりませんね」

お香の問いに、彼女の方を見もせず鬼灯は即答した。

その答えを予測していたからこそ、お香は何も言えずに溜息をつく。

鬼灯の答え自体に、返す言葉はない。だが、疑問はあつた。

鬼灯の苛立ちには、同族嫌悪ではないか? という疑問だ。

しかしお香自身はその仮説を否定している。

鬼灯の過去、人間だった頃の事情、伊黒と鬼灯の生い立ちがよく似ている事を知っていれば「同族嫌悪」が一番自然に思えるが、お香の知る鬼灯という人物像がそれを否定する。

鬼灯は伊黒と違って、むしろ何でこうなつたかが謎過ぎるくらいに自己肯定力があるからだ。

驕つたナルシストな所はないが自分を正確に評価しており、卑屈な

所は補佐官になる前どころか子供のころから一切ない。

だから彼は自分と似た環境や事情で、不当な扱いを受ける者に対して多少の手助けすることはあっても、必要以上に肩入れはしない。そもそもそういう理由でそういう相手に近づきはしないし、同情するかどうかとも怪しいくらいだ。

彼は「他人ひとは他人ひと。自分は自分」を常に自然体で実行し続けているから、肩入れはもちろん昔の嫌いな自分を否定したいが故の八つ当たりじみたことだっしてしない。同族嫌悪するほど、同一視など元からしないのだ。

だけど、お香の印象では鬼灯は最初から伊黒に関してでは厳しいというか当たりが強く、そのくせ何故か積極的に関わろうとすることが多く感じていた。

現に今日も、唐瓜たちの一日体験の教育係に伊黒を指名しているのは、なんだかんだで彼は面倒見がいいからなだけではないだろう。

その事を疑問に抱きつつも、同族嫌悪かどうかは横に置いても鬼灯が不機嫌なのは事実なので、お香は無駄口を叩かないでおこうと口を噤む。

「……………ただ卑屈なだけなら、隅っこで蹲ってキノコでも生やしてろとしか思わないんですけど」

だが、何も訊かずとも鬼灯が独り言のように語る。

お香がある程度、鬼灯の内情を想像できるのなら同じく幼馴染である鬼灯だって出来る。

だから答えたのだろう。

「他者が認め、与えてくれた自分の価値を否定するのが許せないんですよ。」

自分が自分のことを嫌いなのは勝手ですけど、他者の価値を自分ごと下げるなっして話です」

その答えに、お香はしばしきよんとしてから笑った。

納得したように、実際に納得したから笑って、「そうねえ。その通りだわ」と鬼灯の答えに同意する。

お香が思った通り、鬼灯は伊黒に同族嫌悪などしていない。ただ単

に、伊黒個人に対してムカついていただけだ。

『丁って「召し使い」のことじゃないか。改名しなよ。
あ、鬼火に丁なんだから、「鬼灯」てのは?』

理不尽に奪われるだけだった、奪ってもいい存在だと証明するよう
な名を自然体で否定して、個人として認めてくれた。

そんな人が「罪はない」と断言しているのに、自分が嫌いだからと
いうだけでその人の判断が間違えているように否定するから。

だから鬼灯は伊黒に対して当たりがキツく、そして意地のように関
わって伊黒の卑屈さをスパルタで叩き直そうとしているのだろう。

そう思っただけだが、お香はその考えを決して口には出さない。
出したら、伊黒以上に意地を張って認めず面倒くさいことになるの
はわかっているから。

鬼灯のしている事は、鎚丸がしていたことと同じ。

「閻魔大王は間違えていない」と、訴え続けているだけなんて口にしな
い。

「お館様も爆笑する派だから！　むしろ筆頭だから！！」

「来月あたりに、マキさんとミキさんに一日獄卒体験をしてもらうことにしました。」

あなた方4人はこの二人に地獄の案内や拷問の手伝い、そして万が一亡者が襲い掛かってきた時、撃退する護衛役をやってもらいます」

閻魔庁の小会議室に集めた4人へ、集めた理由とその業務内容を鬼灯が説明すると、その集められたうちの一人が手を上げて、発言の許可を求めた。

「はい、どうぞ。しのぶさん」

「業務内容はわかりましたが、どうしてこのメンバーなのか、訳があるなら説明をお願いします」

許可をもらってしのぶは最初からの疑問で、業務内容を聞かされても晴れなかった為、端的に問いながら改めて集められたメンバーを見渡す。

そこにいるのは全員亡者。そして顔見知りどころか、個人的にも親しい者達ばかり。

生前から同僚である、蜜璃と伊黒。そして生前は敵だったが、今ではすっかり確執など一切ない狛治。

関連性は一応あるのだが、それは生前での話。以前行った、無惨や鬼殺隊の歴史に関しての講習という仕事ならば、このメンバーに疑問は特にない。

だが先ほどの鬼灯が説明した業務内容では、何も聞かされていなかった最初以上に疑問が沸く。

この4人は同じ業務が任せられるのは不自然なくらい、今はそれぞれ部署が違うからだ。

伊黒と蜜璃は同じ衆合地獄かつほぼペア扱いで業務を行っているから、この二人がセットなのはまだわかるが、狛治は鬼灯の補佐役なので、業務は事務から現場の拷問まで幅広過ぎるのに対し、しのぶは

逆に、元は鬼殺隊の剣士に向かなかつたくらい非力なので、現在は現場の業務はほとんど行わない薬物研究オンリーだ。

なので自分達4人をわざわざ選んだのが普通に疑問だったが、鬼灯もそう思われるのは想定内だったからか、さっさと答えてくれた。「あなた方を選出した理由は二つですね。」

一つ目は、単純に獄卒体験するのが女性アイドルなので、傍にいて世話を焼く役目は同性の方がいいと思っただけです。

ただ、女性獄卒は現場に出ないデスクワーク担当か衆合の囮役がほとんどで、『刑場の罪人に襲われる』という事態が発生した場合、とっさに迎撃できない可能性が高いので、それがまずないであろうしのぶさんと甘露寺さんを選出しました」

まずしのぶと蜜璃が選ばれた理由を説明され、それは普通に納得できた。蜜璃はもちろん、インドアの研究職となっているしのぶも、童磨が万が一脱獄しても、人間に戻っているあいつなら瞬殺できるようにと思ひ、未だに呼吸や剣術の鍛錬は続けているので、鬼灯の期待に応える自信はある。

しかしその説明では男二人の存在意義がないのだが、もちろんそれもちゃんと鬼灯は説明してくれた。

「あと、私としては獄卒じゃない奴、弱そうな奴を人質に取って脱獄を企てるど阿呆な亡者がいるのなら、いい機会なので一掃してしまいたいんですよ。」

だからあえて少数ですがいる、拷問も行う鬼女ではなく亡者のあなた方を選びましたし、そして反省ゼロのアホ亡者の数が多ければ、さすがにお二人でも厳しいでしょうが、男の鬼の獄卒が側にいたら警戒されて意味がないので、やはり亡者が舐めてかかりそうな二人を付けた結果がこのメンバーです」

「俺達はともかく、アイドルを囮に使うな!!」

二つ目の理由に伊黒が突っ込み、そのまま相手が上司だということを見無視して説教開始。

同じ突っ込みをしそうな地獄の良心は、遠い目で苦笑している。おそらく狛治だけは鬼灯の側近という立場上、事前に自分たちが選出さ

れた理由を聞いて、既に突っ込み済みなのだろう。

理由というか鬼灯の目的そのものは相変わらずのぶっ飛び具合だが、選出理由自体は納得できたので、しのぶは狛治と同じように苦笑を浮かべる。

伊黒がいるのは蜜璃とセット扱いかと思っただが、女性的なその容姿と体躯が亡者を警戒させない、むしろ甘く見られるのを利用するつもりなのだろう。

狛治の方は明らかによく鍛えられた体格をしているが、それでも顔立ちは優男だし、鬼と並べば細身だと錯覚してしまいそうなので、少なくとも鬼灯以上に大柄な悲鳴嶼や、鬼より鬼らしい強面と地獄でも評判の不死川、そして大半の獄卒に牛頭馬頭と同種の妖怪だと思われる伊之助などと比べたら、まあ直接呵責されたことがない亡者なら警戒心は薄いはず。

「皆さんならマキさん達を守り切って、危険因子も殲滅してくれると信頼しているんですよ。」

あとついでに、マキさんたちが巡って体験する地獄と獄卒の仕事を、適当にピックアップしておいてください。しのぶさんと伊黒さん基準であまり力がいらす楽と思える拷問なら、マキさんたちにも負担なくできるでしょうし」

「悪かったな、非力で!!」

伊黒の説教は正論なので暴力で黙らせることはしないが、丸投げの信頼で「別に良いだろ」と鬼灯は受け流し、そのままさらに仕事を命じて、狛治達が伊黒を宥めている隙に会議室から出て行ってしまった。

「まったく……あの鬼は無惨の鬼とはまた別の方向で最悪の鬼だな」
「まあまあ、伊黒さん。確かに鬼灯様の目的はだいぶどうかと思うけど、あの人は自分の利の為に他人を犠牲にする人じゃない事は知っているでしょう？」

言葉通り、私たちが信頼しているんですよ」

伊黒が鬼灯の愚痴を吐きながら椅子に座り直すと、しのぶが苦笑したまま一応鬼灯をフォロー。しかし「最悪の鬼」という部分是否定し

なかった。

「ただ伊黒だって、鬼灯とはすでに100年の付き合いだ。しのぶの言う通り、あれは理不尽な言動は多いが、傲慢ゆえの理不尽ではなく、ただ単に自分が出るのだから他人も出来るだろうという考えの元でやらかしているだけであることを知っている。」

つまり、獄卒である自分たちどころかマキミキも無駄に危険に晒しているというより、たぶん鬼灯はいざとなればマキミキも自力で亡者を撃退できると、これはこれで大問題な思い込みをしている。

その事を理解するとむしろ頭の痛みは増すのだが、鬼灯に悪意は一切ないことに加え、蜜璃も鎬丸も「マキちゃん」とミキちゃんに会えるんだー」「楽しみだねー」などと嬉しそうに話しているので、結局伊黒はそれ以上文句も愚痴も言わずに黙り込む。

そんな彼らのやり取りに、狛治は苦笑だが微笑ましさを如実に表しながら、八大地獄とそれぞれの十六小地獄の名前、そして落ちる罪状や刑罰の内容が書かれた紙を配って、話を進めた。

* * *

「まだ日にちもはつきりと決まっていなから、地理とか拷問内容を考慮してスケジュール計算とかはしなくていい。とりあえず候補だけを上げて欲しいらしい。」

ただ、衆合地獄は全面的になしだ。女性アイドルだからあそこの地獄はさすがに危険すぎるし、……刑罰も女性にさせるものでも、見せるものでないが多すぎる」

「あの鬼、そういう配慮は出来たのか」

「……俺が指摘して止めた」

「よくやった、狛治」

鬼灯から進行の指示でも受けていたのか、最低限の情報を説明する狛治に、テーブルの上にくてくされたように頬杖について伊黒が突っ込む。

突っ込みというより皮肉だったのかもしれないが、その皮肉はここにはいない鬼灯にはもちろん刺さらず、むしろ狛治が事前の苦労を思い出して遠い目をし出したので、伊黒は頬杖を止めて姿勢を正し、心

から狛治のフラインプレーを労った。

女二人もそのやり取りを苦笑して眺めてから、渡された資料をまず一通り目を通す。

そして目を通し終えたのか、しのぶがボソリと呟いた。

「……こうしてみると、本当に意外と鬼舞辻 無惨がストレートに落ちる地獄って、案外少ないんですね」

しのぶの発言に、狛治と蜜璃は何も言えず黙り込む。

二人の頭の中には、鬼灯が実に生き生きと雑なこじつけで無惨を小地獄に落とす動画の光景がいくつも再生されて、流石に無惨に同情するやら、しかしその罪状はなくても落とされても仕方がない屑っぷりをブレずに披露するからどうでもいいかと思うやらで、何とも複雑な心境だったから何も言えなかった。

「そうなのか？」

何も言えずにいる二人とは対称に、伊黒がきよんとした顔でしのぶに訊き返し、訊かれたしのぶも思わずきよんとした顔になってしまふ。

互いにきよんとし合う中、その事に気付いた蜜璃がちよつとおかしげに笑って、しのぶの疑問に答えた。

「ああ、そういえば伊黒さんはあの動画、全然見てないもんね。未だに名前を聞くのも不愉快極まりないって言って、一つも見てないの」

しのぶのきよとん顔の理由は、「無惨がストレートに落ちる地獄が少ない」ことを疑問に思うということは、鬼灯が主催で撮っている表向きは八大地獄の十六小地獄の紹介、本音はただひたすらに昔の鬱憤を無惨に億倍返しにしている動画の内容を知らないということになるので、その事を不思議に思ったからだ。

しのぶと同じく、伊黒の問いを不思議に思っていた狛治もその答えを聞いて納得し、そのまま苦笑して思い出した雑学と言っているのかどうかもわからない雑談を口にする。

「なるほどな。そういえば、元鬼殺隊はあの動画を見る派か見ない派かできっぱり二つに分かれるらしいな。」

見ない派は主に小芭内と同じ理由で、そして見る派も見た時の感想

「というか反応がきつぱり二つに分かれるらしい」

「へえ、どう二つに分かれるんですか？」

以前、無惨の地獄めぐり第1弾を一般公開する前、元鬼殺隊の隊士たちに視聴してもらって気付いたと鬼灯が言っていた話をそのまま語ると、しのぶが興味を持って話を先に促す。

だが、何故か笑って語っていた狛治の笑みはその瞬間、若干強張ってからしばし固まった。

「……？ 狛治さん？」

困惑しながらしのぶが呼びかけると、狛治は気まずそうな顔で目のぶから逸らしてから、それでも自分が言い出した話なので、責任を持ってちゃんと答えた。

「………無惨様が無関係の地獄に落とされた時、流石にわずかばかりでも同情してしまう派と……爆笑する派で別れるらしい」

狛治の答えで、彼は何に気まずく思っていたかをしのぶだけではなく、同じく狛治の反応に困惑していた伊黒と蜜璃、そして鎬丸も理解して同じく気まずくなる。

そして気まずくなった元凶が、思わず謝る。

「………なんか、すみません。爆笑する派で」

「いや、胡蝶は何も悪くない！」

「気にするな、胡蝶！ 悪いのは全部鬼舞辻だ！」

「そうだよ！ そ、それにしのぶちゃん、大丈夫よ!! お館様も爆笑する派だから！ むしろ筆頭だから!!」

いくら無惨を未だに何度殺しても飽き足りない程憎んでいる鬼殺隊でも、無惨が無関係なのに落とされる地獄は、本当に本当に無関係過ぎるものが多く、そして鬼灯のやらかしも自分たちに囚役を命じた時とは比べ物にならない本物の、悪意たっぷりな理不尽によるものなので、流石に「鬼灯様、それはちよつと……」と引いて、無惨に同情してしまう者の方が割合としては多い。

初見では爆笑したが、何度か見返すと冷静になって来て鬼灯の理不尽っぷりに引いて無惨に同情する者もいるので、何度見ても爆笑しっぱなしはおそらく1割程度だろう。

その数少ない1割であることをしのぶは理解して、自分の恨みと闇の深さにドン引きながら謝ったら、全員がいい人過ぎて即行でフォローを入れてくれた。

だが、蜜璃のフォローで入れた蜜璃自身も含めて全員がゲンドウのポーズになる。

言つてから気付いたらしい。自分たちが敬愛するお館様、産屋敷耀哉は無惨が理不尽な目に遭えば遭うほど腹を抱えて爆笑し、ガチで笑い死にしたくらいに笑った爆笑する派筆頭どころか、過激派と言つていいレベルであることを。

ちなみに、爆笑しすぎて死んだ人はお館様以外にもいる。珠世である。死んでも生き返るあの世で良かった。

* * *

「あの……そういえばあの動画を見てて気になった所があったので、訊いていいですか？」

敬愛しているお館様が楽しそうで何よりだと言い聞かせつつも、知れば知るほど笑えない闇の深さから目を逸らしたくて、しのぶは話を変える。

他の者もこの話題は一刻も早く忘れたいのだろう。狛治は「どうぞ」と先に促し、蜜璃も伊黒も顔を上げて話を聞く体勢に入る。

「あの動画、小地獄から他の小地獄への移動はカットしてるけど、それ以外はほぼ編集なしでぶっ続けに撮ってる感じですよ？」

ということは、無惨の元鬼である他の亡者と地獄で再会とかはしてないんですか？」

しのぶの疑問に蜜璃は「あ、そうだね。確かに」と納得し、同じ疑問を懐いて狛治を見る。

「ああ。そうだな。再会してないというか、意図的に再会しないようにしている」

「なんでわざわざ……」

そして狛治は「なんだ、その事か」と言わんばかりの顔で即答し、伊黒はさらにその理由を問うとこれまた困ったような、気まずそうな顔をして答える。

「周りが不快になるだけだって、わかりきっているからだ。

反省してたり気の弱い亡者なら、無惨様が一方的に罵倒するだけだし、逆ならどっちもどっちな責任転嫁の罵り合いが始まるだけ。そのシーンは編集でカットするにしても、時間を無駄にして撮影する者がただただ不快になるのは最悪だろう？ だから再会してしまわないように、なるべく刑場内の離れた所で呵責を行うか、複数の罪で他の小地獄にも墮獄している奴は、無惨様がそこで呵責されている間は、他の小地獄に落としてるんだよ」

今度こそ全員が心から納得し、ついでに無惨の歪みない屑つぶりに心の底から呆れる。

そして狛治の方も、この話題で思い出したのでついでに話題に上げた。

「俺の方もついでに訊きたいことがあるんだが、ちよつといいか？」
「？ どうぞ」

しのぶと同じく許可をもらってから、先ほどの話題で思い出し、意見を聞きたい話の前提の説明をまず始める。

「次、無惨様が巡る地獄は大叫喚地獄なんだ」

「ああ、芥子ちゃんがいる所だよね」

「最近、芥子さんがトレーニングと芥子味噌の研究に気合いが入っているのは、その所為ですか……」

「……その動画、今までとは別の意味で見たくないな。もはや見る前から、したくもない同情をしそうになる」

狛治の言葉に、蜜璃は生前ウサギを飼っていたこともあって親しくさせてもらっている、獄卒としての先輩の名を上げると、毛の生えた動物は苦手だが、彼女は瓜子姫の時と同じく会った瞬間にシンパシーを感じ、同じように親しく付き合っているしのぶが、遠い目でここ最近の芥子の様子を思い出す。

そして伊黒も蜜璃経由で芥子とはそこそこ付き合いがある為、彼女と鬼灯の容赦なさはありありと想像がついてしまったので、正直な感想を零す。

「小芭内の感想には激しく同意するが、そこはひとまず横に置いと

てくれ。

で、大叫喚地獄は端的に言えば嘘つきが落ちる地獄で……、だから……そこにいるんだよ」

「誰が？」

伊黒の感想に心の底から共感しているのがよくわかる顔で、狛治はその話題は関係ないと横に置いて、本題への前置きに入る。

だが、それだけでは何のことだかわからないので、伊黒は即答で尋ね返す。

狛治は、ゲンドウのポーズでその問いに答えた。

「……………半天狗」

狛治は相手の本名を知っているが、他の者はまずわからないので鬼の頃の名前で伝えると、奴と直接戦った蜜璃はもちろん、他の者達も小声で「あいつか……」と呟きながら、またしてもゲンドウのポーズ。

無惨の鬼と純粋な鬼との一番の違いと言える、血鬼術という異能はその鬼固有の能力なので、同じ能力はまずないと言えるが、それでも強敵であればあるほど、今後の参考になればという意図で柱は柱合会議などで報告し、情報を共有する。

もちろん上弦の肆であった半天狗は、ある意味では無限城での上弦たちより厄介、運がいくつも味方したからこそ撃破出来た相手なので、蜜璃はちゃんと報告した。

なので伊黒もしのぶも、半天狗の「複数の分身を生み出して子鼠並みに小さい本体を守らせる」という血鬼術を把握している。

そしてあの世に来て狛治と会い、血鬼術はその鬼が自覚も出来ず忘れ切っているのに手離せない、失えない人間として執着していたもの、その鬼の本質に近いものであることを知らされた事で、彼らは半天狗がどのような人物だったかを理解している。

無惨並にひたすら自分は悪くない、周りが悪いと責任転嫁し続ける、卑屈で卑怯な大ウソつきであることを、面識がない伊黒としのぶでもはつきり確信している。

「……………皆が想像している通りの人格で、あいつも未だに反省ゼロなん

だよ。だから、無惨様とニアミスしたらもう、不愉快極まりないことしか起こらないのはわかり切ってるから、絶対に再会させたくないんだが……、あの動画って想像をいつも下回る無惨様の言動を売りにしてるから、どれくらいで終わるかとか予定立てて撮影してないし、しても絶対に無駄になる。

で、半天狗の方も反省を全くしてない、隙あらば逃げ出そうとし続けてるから、こいつもこいつで予定通りに行動させるってことがし辛くて、よっぽど緻密な連携が取れてない限り、呵責する刑場の場所を離そうが、他の小地獄に行かせてようが、どつかでニアミスしかねないのをどうにか出来ないかって話を鬼灯様としてたんだが……、ああ、うん。わかってた。一応、訊いてみただけだから気にしないでくれ」

そこまで言われたら、狛治が何を訊きたかったかもわかり切ってるのだが、顔を上げた全員表情で狛治の方も察して、話をさっさと切り上げる。

人に不快感しか与えないであろう元上司と部下の誰も望んでいない再会を阻止するのは、それくらいに難問だった。

なので、狛治は苦笑しながら皆に気にするなと言ってから、それでもやはりいいアイデアが出なかったことを残念がって、溜息をついて呟く。

「……やっぱり、鬼灯様発案の童磨の孤地獄に一日放り込んでおくしかないのか」

「最適解、既に出てるだろうが」

狛治の呟きに伊黒が鋭く突っ込み、しのぶが気まずげに「……お役に立てるようで何よりです」と微妙に頓珍漢なことを言うので、蜜璃と鎬丸が思わず吹き出す。

今日はそんな平和な、地獄の午後。

生前では考えられなかった、他愛ない日常の雑談会。

『なおさら気色悪いわ死ね!!』

ある日の午前、いつも通り下っ端の雑用をこなしていた唐瓜と茄子が閻魔庁の廊下で少しだけ珍しい顔見知りを見つける。

「あ、恋雪さんだ」

「ん？ あ、本当だ」

狛治の愛妻である恋雪は、何度か会ったことがあって二人は既に顔見知りであり、彼女が閻魔庁に訪れること自体は珍しくないのだが、その理由は狛治と昼食を一緒に取る約束をしていたり、帰りにどこか一緒に出掛ける為なので、見かけるとしたら昼時か夕刻あたりがほとんどだった。

「おーい、恋雪さん、どうしたのー？ 狛治さんに忘れものでも届けに来たの？」

なので、まだ10時にもなっていない現在ここにいる理由はそのあたりしか思い浮かばず、茄子は持ち前の躊躇の無さを發揮して、親切心で声を掛ける。

小鬼の存在に気付いてなかった恋雪はいきなりの声かけにビックリはしたが、すぐに顔見知りで夫が可愛がっている後輩であることに気付き、彼女はいつもの愛らしい笑顔を二人に向けて、まずは挨拶。

「あ、茄子くん。それに唐瓜くん。おはようございます」

「おはようございます。ところで、今日はどうしたんですか？ 何か狛治さんに届けに来たのなら、案内しましょうか？」

唐瓜も恋雪に挨拶を返してから、茄子の発言を少し丁寧に言い直して提案すると、恋雪は少し申し訳なさそうに話し始める。

「えっと、ごめんなさい。お気遣いは嬉しいのだけど、狛治さんは関係ないの。今日は櫛さんにお料理を教えにもらいに来たから……」

「櫛さんに料理？」

新人とはいえ、五官王の補佐官である櫛の名や顔は知っている。唐瓜だけではなく茄子も。

それだけインパクトのある人かと言われたら、ちよつと迷う。唯一の若い女性裁判官に補佐官も女性だというのは覚えやすい要因だが、

柊自身の容姿は「優しくて親しみやすいおばちゃん」としか言いようがない。

そんな柊を優等生の唐瓜だけではなく茄子も覚えている理由は、彼女が見た目通りの性格で、何かと世話を焼いてくれたからだ。

「ええ。柊さんは昔から私や狛治さんに気をかけてくれて、優しくしてくれているんです。」

今日みたいにお休みの日には、現世の視察で見つけた料理本を譲ってくれたり、お肉抜きでも美味しく栄養満点な料理を教えてくれたりするんです。それも、天国からなら柊さんがいらつしやる五官丁より閻魔庁の方が近いという理由で、わざわざ閻魔庁の台所をお借りしてくれるので、私は頭が上がりません」

恋雪は嬉しげに、狛治のことを人に話す時と同じように柊がいかに優しいかを語るのので、唐瓜も茄子も微笑ましい気持ちになって納得する。

柊の性格からして狛治も恋雪も放っておける訳がないのは想像がついたし、恋雪は母親を自身の看病疲れで自殺されてしまったという過去も二人は知っている。だからこそ柊はなおさらに恋雪を気に掛けるし、そして恋雪はきつと柊に母親の面影を見て慕っているのだろう。

「そうですか。なら、呼び止めてすみません」

「ごめんね、邪魔して」

「いいえ。気遣ってくれてむしろすごく嬉しかったから、気にしないでください」

恋雪がここにいる理由はわかったし、柊によるお料理教室が前々から何度かあったのなら、食堂ではなく来賓が来たときなどに使用される閻魔庁の台所がどこにあるかも知っているだろうから、案内も不要と考えて唐瓜と茄子は話を切り上げ、恋雪も笑顔で二人をフォロースる。

そして、少しもじもじしながら彼女は控えめに小鬼たちに頼みごとをする。

「……あの、たぶん柊さんとたくさん練習するのでいっぱいお料理を

作ってしまうと思うんです。櫛さんも、お昼になったら狛治さんも食べてくれると言ってくれてますし、余ったら持って帰って夕飯にするつもりですけど……もしよかったら、お二人も食べてくれませんか？ お肉はありませんから、物足りないかと思えますけど……」

「え？ いいんですか!! 食べたい食べたい!」

「ちよつ、コラ茄子! 遠慮がなさすぎだろ!!」

恋雪の頼みを茄子が即答で了承し、唐瓜が軽く叱りつける。

だが茄子は、「だって狛治さんの弁当、いつもめっちゃ旨そうだけど、一口下さいとは言いやかったからさー」とやけに恋雪の提案に食いついた理由を語り、恋雪は嬉しさと微笑ましきでクスクス笑う。「ありがとうございます。ご期待に沿えるように、頑張りますね!」

そう言つて両手で握りこぶしを作つてやる気を表す恋雪に、思わず二人は狛治を羨ましく思うよりもこの夫妻を尊く思つて拝み、恋雪を困らせたのは余談。

そんなやり取りを経て別れ、唐瓜と茄子は微笑ましい気持ちで法廷に向かう。

朝から心洗われる会話を交わし、昼も美味しいものを食べて微笑ましいものが見れるのが確定しているから、今日は実にいい日だと二人は思つていた。

……法廷に入るまでは。

* * *

「!? 唐瓜さん! 茄子さん! 狛治さんを見かけませんでした!」

刑場の掃除や拷問器具の手入れが終わった報告をしに来た法廷で、唐瓜たちが何かを言う前どころか法廷に入った瞬間、鬼灯が勢いよく振り返つて尋ねてきて二人をビビらせる。

「!? へっ? きよ、今日はまだ見てません!」

「ど、どうしたんですか? 鬼灯様?」

ビビりつつ唐瓜が返答をし、茄子が鬼灯の剣幕に理由を問うと、鬼灯は眉間に皺を盛大に寄せて舌も打ってから答える。

「……サタンのアホが来るんですよ」

しかしその返答では、謎が増すだけだった。

E U地獄のトップであるサタン王が本日来日してくる予定がなかったのは下っ端の唐瓜たちでも知っているが、サタンはアポなしで勝手に来ては接待を求める身勝手ぶりも知っているので、それだけ言われても「いつもの事では？」としか思えない。

鬼灯がイラつく訳はよくわかるが、まさか本人がいないとはいえずホ呼びわりするほど怒るようなことなら、とつくの昔にサタンは日本に重すぎるトラウマを刻まれて、来るどころか名前を聞いただけでも泡吹いて気絶するようになっていただろう。

「うん、唐瓜くんたちが困るのはわかるよ。いつもの事だもんね。

けど、今回はいつもと違って、ええつと……蓬君、何だっけ？」

「これです。閻魔大王」

閻魔大王が鬼灯の言葉足らずをフォローしようとするが、大王も混乱しているのか言葉が出ず、鬼灯の傍らにいた他の獄卒に尋ね、蓬と呼ばれた獄卒が何やら雑誌を取り出して中を開き、二人にある漫画の1ページを見せた。

そこに描かれているのは、夢げで可憐な美少女が泣きながら笑って、同じく泣いて自分に縋りついている美青年を抱きしめ返しているシーン。

見るからに感動シーンであることはわかるのだが、何の漫画かすら二人はわかってないので、感想も何も言いようがなく、小鬼たちはさらに困惑する。

ただ、なんとなく二人ともこのシーンを見て心のどこかに引っかかるものを感じた。

それが何なのかを理解できないまま、蓬は二人に説明する。

「これ、『鬼卒道士 チャイニーズエンジェル』って漫画のワンシーンなんだ。で、サタン王はこの漫画の主人公的、エンジェル朱色のファンなんだよ」

そう言って、ページをいくつかめくってそのエンジェル朱色というキャラを見せるが、それも唐瓜たちからしたら「それがどうした？」という話だ。

「で、この女の子は最近終わった長編シリーズのゲストかつキーキャ

ラ。名前は珂雪^{かせつ}」

「……今朝、というかついさつき、リリースさんからメールが届いたんですよ。」

『サタン様が、「リアル珂雪ちゃんをサタン城のメイドにスカウトしてくる!!」と言って出て行ったから、注意して。っていうか、絶対に守ってあげて!』という内容のメールがね……」

なんとなく名前の時点で最初に見た時に感じた引っ掛かりが強くなり、不愉快そうに鬼灯が加えた説明でその引っ掛かりが段々と何なのかわかってきた。

そしてトドメに、蓬がようやくこのワンシーンに至る漫画の経緯を簡略化して説明する。

「鬼卒つてのが簡単言えば、死体に魂を呼び戻してその死体を操る術と、操られてる死体のこと。」

で、エンジェル朱色とかは善側で、悪側の鬼卒もいる。こっちの男キャラはその悪側の鬼卒だけど、元は善人なのに恋人を殺された絶望で自殺して、その時の絶望と怒りと自分の死体を利用して悪堕ちしてたって設定。

最終的に主人公たちに倒された事で恋人のことを思い出し、魂は恋人と再会したっていうシーンがこれで……」

「どう考えても、モデルが狛治さんと恋雪さん!!」

最後まで蓬が説明する前に、小鬼たちは力いっぱい突っ込んだ。

理解すれば、そのキャラが二人とも容姿はそっくりではないが、雰囲気は狛治と恋雪によく似ている事に気付ける。デジャブとまではいかないが、何か引つかかる訳である。

「何なんですか、これ!?! この作者、実は獄卒なんじゃね?!」

「獄卒は公務員なので、副業は禁止です。というか、副業で漫画家やれる時間はまずない。ですが近い身内や友人が獄卒なのは確かですね」

あまりの一致っぷりに唐瓜は激しく突っ込み、鬼灯が冷静に現役獄卒が作者はさすがにないと否定するが、鬼灯自身もこのエピソードは間違いなく狛治の過去を無許可でモデルにしていると確信している

ので、その内情報を流した犯人を洗うと宣言。

ただ一応、情報を流したであろう獄卒はともかく作者の名誉の為に言おうと、狛治達の過去を個人特定が容易に出来る程そのまんま漫画化はしていない。

先ほどの蓬の説明はかなり大雑把に最低限の筋だけ教えたので狛治の過去そのものに思えるが、狛治モデルと思われる敵がメインのシリーズを通して読むと、狛治の過去を知っている人でも「あー、確かに言われてみれば似てるかも」程度にしか思わなくらいに色々変えているらしい。

狛治夫妻がモデルと確信されるのは、漫画のキャラ二人が再会したシーン、泣いて許しを求める男キャラと恋雪モデルと思われるキャラが泣き笑いながら「おかえりなさい、あなた」と抱きしめ返す、蓬が見せたシーンだ。

ここだけが狛治夫妻の過去そのまんま過ぎたので、おそらくここら辺のことを作者は獄卒から聞いて、どうしてもそこを描きたくなくて描いてしまったのだろう。

なので無許可は確かに問題だが、当事者たちと無限城の決戦を浄玻璃の鏡でリアルタイム視聴していた獄卒以外には気付かれないであろう配慮はしているので、本来なら狛治と恋雪が知ったら羞恥で悶絶する程度で済む話だったのだが……、問題は恋雪モデルであろうキャラクターの容姿だ。

狛治モデルと思われるキャラは、ぶっちゃけ全然容姿は似ていない。主役の朱色が基本は徒手空拳な為か敵キャラは剣士キャラになっっているし、容姿は鬼灯視点で見れば義勇か継国兄弟あたりの系統な顔立ちだ。

だが、珂雪というキャラクターはそっくりそのままとは言わないが、モデルであろう恋雪に似ている。

これはモデルに似せたというより、ただ単に恋雪自身が「儂げで可憐で健気な正統派美少女」な為、どうしたってそういうイメージに合うキャラクターデザインにするなら似通ってしまう所為だろう。

なので冷静に考えれば、チャイニーズエンジェルの作者はあまり悪

くない。

「夢げで可憐で健気な正統派美少女」を作中に出した時点で、恋雪がモデルであろうがなろうが同じ事態に陥っていた可能性は高いのだから。

しかし、実際に迷惑をかけられる立場からしたら、理不尽だとわかっていても文句を付けたくなるのもしょうがない。

「どうやら以前、リリスさんが来日して恋雪さんと会った時の写真を見たそうです。

見た当時は漫画にこのキャラクターは登場してなかったのと、あのおっさんは気の強いお嬢さんが好みな為、食指が動かなかったようですが……、この珂雪さんというキャラが登場して、エピソードも秀逸だったせいか今はこのキラクターに嵌り、よく似た恋雪さんの存在を昨日急に思い出して突発的に日本にやって来たという、実に迷惑かつ最低ないきさつですよ」

ようやくサタンの急な来日理由と、鬼灯が不機嫌極まりない理由が明かされた。

リリスの連絡が遅くなったのは時差とかではなく、写真を見せたのは一月ほど前だったのとリリスは「珂雪ちゃん」とやらが何のことだかさっぱりわかってなかったので、「リアル珂雪ちゃん≡恋雪」だとは全く気付けずに昨日はそのまま見送ってしまった、サタンが出て行つてから置きっぱなしだった漫画を何気なく読んでみて、察したのがつissäっきらしい。

「二応、ベルゼブブさんも一緒に来ているらしいので、いきなり連れ去るといふ最悪の事態はないでしょうが……あのイエスマンは絶対にあの変態を止めないから、一刻も早く二人を叩きのめしてEUに送り返さねばなりません！」

「鬼灯君、落ち着いて！ 何で一刻も早くすべきことが、恋雪ちゃんの保護じゃなくてそっちなの!?!」

「どうせ結果的にそうなるんですから、恋雪さんを不安がらせる前に、何も知らない内にそうするのがベストでしょうが!!」

「そうですよ、大王！ サタンの阿呆は、男キャラなんかどうでもいい

とかほぎく、フアンの風上にも置けない奴ですよ!!

いらねえキャラなんかいねえし、キャラとモデルを同一視するのはどっちに対しても失礼だっつーの! んな奴、段ボールに詰めて送り返せばいいんです! つか、メイドって何考えてるんだ!? 原作本当にちゃんと読んでるのか!? 珂雪は深窓の令嬢だっつーの!!」

「蓬君は蓬君でどこに怒ってるの!」
どうやら今日、恋雪が櫛と一緒に閻魔庁で料理をしている事も鬼灯は知っており、だからこそこの最悪のタイミングにキレまくっているのか、もはや外国の要人であることを一切考慮してない結論を出しており、流石に大王がそれを止める。

しかし鬼灯は引く気が一切なく、それどころか蓬も便乗してさらに過激なことを言い出す、大王は蓬のキレ所が気になって段ボールのくぐりは聞き流してしまった。

「……あの、一体何事ですか?」
そんなカオスに戸惑いつつ、声を掛けてきたのは記録課から本日の裁判資料をもらって来た狛治だった。

狛治の存在に気付く、全員が勢いよく振り返ったことで狛治はビツクリしつっさらに困惑するが、彼の困惑を解消させてやる余裕は誰にもない。

鬼灯は唐瓜たちが法廷に入って来た時と同じ勢いで、狛治に訊いた。

「狛治さん! 変態、じゃなかったサタンとその腰ぎんちゃくを見てませんか!」

「は? え、ええ、まあ、ついさつき廊下で……」

『会っちゃったの!』
「!」

盛大に外交問題になりそうな発言をぶちかましつつも、それ自体はいつもの事なので狛治の困惑は幸いながらさらに深まることはなく普通に答えると、鬼灯以外の全員が酷く狼狽しながら唱和したので、こちらの反応で困惑は深まった。

まったく彼は、鬼灯の質問の意図も他の者達の反応の理由も理解で

きず戸惑いながらも、それでもつい先ほどの出来事を語る。

「はい、会いましたけど……サタン王の来日予定なんてなかったですよね？」

なんかサタン王とベルゼブブ長官は、カセツって人に会いに来たとか何とかいって、俺がそんな人は知らないと言えばそのまま勝手にどっかに行きましたけど……、いませんよね？ 閻魔^ち庁にそんな名前の獄卒」

どうやら恋雪と一緒にいる所を遭遇して、恋雪を連れ去ろうとするサタンを汚い花火にするという、狛治と恋雪にとって最悪の事態にはなっていないことに全員がホツとしつつ、困惑している狛治に鬼灯は漫画雑誌を手渡す。

渡され、指示されたページを開いてみて数秒後、結構厚いその雑誌は真つ二つに引き裂かれた。

* * *

「あの………変態悪魔!! 恋雪さんを連れ去る気か!!」

あのシーンだけで、これは自分たちの過去をモデルにしたワンシーンである事、サタンたちが言っていた「珂雪」が誰を指していたかを理解して、狛治は額や腕に青筋をビキビキと浮かべ、サタンに対してかろうじて表面上はあった礼儀を投げ捨てた。

「狛治さん、変態のおっさんには滅式でも終式でもヒノカミ神楽でも好きなものを好きなだけ決めて構いませんが、恋雪さんは望まないでしょう。落ち着きなさい。」

あなたは恋雪さんを保護してください。変態共は私たちの方が探して始末します」

「!・はい!・ありがとうございます!!」

おそらくは剣術道場の連中を虐殺した時並の殺気を放ち、ガチキレていた狛治に獄卒も閻魔大王も本気で怯えるが、鬼灯の方は自分以上にキレル狛治を見て冷静になったのか、彼を宥めて指示を出す。

ただし、言っている事は全く穏便ではない。サタン王終了のお知らせを実行するのが、狛治か鬼灯かだけの違いだ。

その事に気付いてないのか、それとも気付いているからこそなの

か、狛治は鬼灯の言葉で落ち着きを少しは取り戻し、殺気を抑えてそのまま法廷から出て行った。

そんな彼に続いて唐瓜と茄子のコンビも、「俺達も一応ついて行きます！」「またサタンと鉢合わせしたら、俺達が先にぶちのめしますね！」と言つて、狛治について行った。

「ちよつと、唐瓜君!? 茄子君!」

まさかの小鬼たちも外交なんかお構いなし、狛治が汚い花火を製造する前に自分たちが呵責する気しかないと大王は慌てて、彼も重い体に鞭うつて3人を追いかける。

鬼灯は大王がいれば、狛治や小鬼たちがサタンに自業自得過ぎる何かをやらかしても、大王が責任を取ってくれる、つていうか取らせるので大丈夫だと判断し、そのまま彼は他の獄卒たちにもサタンとベルゼブブを捜して、見つけ次第遠慮なく縛り上げろと命じ、自分も捜しに行った。

狛治は獄卒運動会で鬼もぶつちぎつて見せた脚力を惜しみなく発揮して廊下を駆け抜け、来賓などが来たときに使用している台所までやってきて、扉を壊す勢いで開けて叫んだ。

「恋雪さん!!」

「!? どうしたの、狛治くん。そんなに恋雪ちゃんのご飯が待ちきれない程、お腹が空いてるの?」

まさしく鬼気迫る勢いでやって来た狛治に、中にいた櫛は当然ビツクリするが、彼女はビツクリするだけで済ませたのほほんと平和すぎる憶測をたてて訊く。

だがそんなの、狛治の耳にも頭にも入っていない。

中に、食堂と比べたらだいぶ小規模な台所には櫛しかない。恋雪がないのだ。

「し、櫛さん!?! 恋雪さんは!?! 恋雪さんはどこですか!?!」

辺りを何度も見渡して、狛治は今にも泣きそうな顔で櫛に恋雪の居場所を尋ねる。

流石に狛治の様子で櫛も困惑し始め、彼女は狛治を落ち着かせるつもりで答えた。

「どうしたの、狛治くん。落ち着いて。恋雪ちゃんなら、少し足りない調味料を食堂から分けてもらいに行ってるわ」

事情を知らない櫛は、別に閻魔庁から出ていないし法廷の方にも近づいていないので、反省してない、地獄行きがほぼ決定事項の質の悪い亡者と鉢合わせることはまずないと知らせて安心させるつもりが、それは今の狛治と状況からは悪手だった。

櫛の言葉に狛治の顔から一気に血の気が引く。

自分がサタンたちと会って、別れた時に彼らが向かって行ったのは閻魔庁の食堂だったことを、狛治は思い出してしまった。

「こ、恋雪さん!」

しかし今度こそ、自分がいなかったこそ、間に合わなかったこそその悲劇など起こさせないと誓っている狛治はすぐさま踵を返し、自分の事を気遣い、心配してくれてついてきてくれた後輩の小鬼たちや閻魔大王を無視して廊下を逆走。

「!? 狛治さん!」

「え? 何で逆走!」

「ちよつ、ちよつと待ってお願い……。死んでるけど死んじやいそう……」

「? 大王、一体何が起こってるんですか?」

狛治がまたしても廊下を爆走し、三人は息を切らしつつもまた来た道に戻って追う。櫛も訳が分からぬまま、とにかく恋雪に何か危機が迫っている事だけは察して、彼女も狛治を追いながら大王や小鬼たちに事情を聞く。

そして狛治が食堂の入り口付近にまで辿り着いた時、真向いの廊下から鬼灯も金棒を抱えて走って来ていたが、彼にはそれも見えていなかった。

「珂雪ちゃん! リアル珂雪ちゃんだ! ベルゼブブ、見ろ! 可愛い! 新作のメイド服が絶対に似合うぞ!!」

食堂の入り口で、恋雪に向かって何やら興奮して勝手に騒いでいるサタンと、思いつきりドン引いている恋雪しか狛治の目には入らなかった。

狛治に冷静さが残っていれば、恋雪は盛大にサタンにドン引きして困惑はしているが、怯えてはいないことに気付けただろう。

おそらくはベルゼブブとは面識があるのと、ニュースなどでサタンの顔は知っていたので、初対面ではあるが知らない変な生き物ではなく、外国の要人であることは理解しているからと、サタンの言っていることが恋雪にとっては意味不明すぎて、たぶん自分のことで興奮している変態だとは気付いていないからこそ、ドン引きと困惑で済んでいるのだろう。

なのでまだ、最悪の事態とは言えない、間に合ったと言える状態ではあるのだが、当然そんなことに気付けるほど狛治の後悔は浅くない、恋雪への想いだって軽くない。

狛治にとつて、サタンの視界に恋雪が入った時点で、もはや許しがたい所業だった。

愛する人が身勝手な男の欲望を押し付けられ、本人の意思を尊重どころか踏みにじられるトラウマを盛大に踏まれた狛治の頭に下がっていた血の気が一気に昇り、怒りと憎しみのあまりに今度は恋雪すらも見えなくなる。

その事に気付いているからか、鬼灯は抱えていた金棒を振り上げて、炭治郎から見て覚えた投擲技術をここで炸裂させて、先に自分がサタンをぶつ潰そうと試みた。

どちらにせよ、恋雪のトラウマ確定なことをどっちも恋雪を思いやっているからこそ実行しようとしていたが、幸いなことに恋雪にグロイトラウマは生まれず、びっくりしてさらに困惑する程度で済んだ。

「!? 恋雪ちゃんに何してんのよ!! このっ!! 変っっ!! 態いっっ!!」

『え?』

その恋雪救済MVPは、櫛である。

狛治がサタンの元まで辿りつくよりも、鬼灯が金棒をブン投げるよりも先に、彼女がブン投げたものがサタンに命中したからだ。

「サタン様ーっっ!!?」

『閻魔大王ーっつっ?!?』

……櫛が投げたのは、ひいひい言いながら必死で隣を走っていた閻魔大王だった。

五官王の裁判で使う秤に岩をブン投げて乗せるだけあって、閻魔大王を遠投するくらい余裕だったようだ。

「は？ え？ し、櫛さん？ 一体、何事？」

「き、貴様！ サタン様に何を……」

「それはごっちのセリフです!! あなた達、恋雪ちゃんに何をしようとしたの!?!」

母親のように慕っている人が、夫の上司を文字通りブン投げるという現実には恋雪は盛大に困惑して狼狽え、ベルゼブブはもちろん櫛にキレるのだが、櫛はベルゼブブに最後まで言わせず怒鳴り返す。

「あなた達、恋雪ちゃんをEUに連れていくってどういうこと!?! 狛治ちゃんと引き離す気!?!」

やっと夫婦になって一緒にいられるようになった二人を引き裂くなんて、何を考えているの!?! 人の心がないの!?! 悪魔なの!?!」

「え？ あ、そ、そうだが……」

「黙らっしやい!!」

投げつけたものの勢いとその投げたものの自体のインパクトで、思わず怒りが吹っ飛んで恋雪と同じくらい困惑して固まる狛治の横をずんずんとガチキレしながら櫛は進み、ベルゼブブと閻魔大王の下敷きになっているサタンに対してお説教。

だがキレすぎている櫛は、割と訳わからない当たり前なことを言っているだけで、ベルゼブブも困り果てながら肯定すれば、黙れと結構理不尽なことを言い出す。

そんなガチギレ櫛を眺め、投擲寸前のフォームのまま鬼灯は思わず眩く。

「流石は、狛治さんと恋雪さん夫妻を見守る会の会長……」

リリースも入会した本人たち非公式のファンクラブだが、「あの二人を尊い、守りたいと思ったのならもうあなたは会員」と謳っているので、きちんと組織らしい活動など何もしておらず、会員数だって誰も

把握などしていないが、それでも自称会員たちは「会長は誰？」と訊かれたら本人以外の皆が櫛を上げる。

それくらいに櫛は昔から、何なら狛治の死後どころか恋雪が五官丁に訪れた時からこの夫婦を見守り、慈しみ続けた最古参であり、恋雪はもちろん狛治にとってもお母さんの存在なのだ。

なので、おそらくは嫌らしい目的で、恋雪の意思関係なく狛治から引き離そうとしていたと認識している櫛にとって、サタンもベルゼブも要人であるかなど無関係、呵責すべき罪人ではない。

だからサタン王にぶつけられて目を回している閻魔大王をほいと横に置いて、櫛はそのままサタンに対して鬼灯様絶賛の五官丁名物をやらかそうとする。

「櫛さん！ ストップ！ 恋雪さんに見せられない！ あとついでにそれは外交的にだいぶヤバイ!!」

しかもただの百叩きではなく、サタンの腰ミノっぽいものも取っ払って渾身の力で引っ叩く気満々だったので、狛治が恋雪に駆け寄って抱きしめ、恋雪が余計なものを間違っても見ないようにガードしながらさすがに止めた。

言われて櫛も、外交はどうでもいいが恋雪の前で開帳していいわけがない汚物であることに気付き、素直にやめる。

「あら、その通りだわ。ごめんなさい、狛治くん。恋雪ちゃん」

「なななななっ!? 一体いきなり何をするんだ!？」

「貴様ら、何を考えてる!？」

『それはこっちのセリフだ!!』

櫛が少しは落ち着いた隙に、サタンは腰巻をガードして彼女から離れ、ベルゼブの後ろへ怯えたように隠れて抗議する。

ベルゼブも、彼らからしたら訳のわからないことの連続なので正論を叫ぶのだが、日本勢からしたらまさしくこっちのセリフである。

言われて、そして恋雪を抱きしめて殺気をこちらにぶつけまくる狛治で、ようやく彼は二人が夫婦だったことを思い出したのか、周囲のガチキレ理由を察した。

「あー……確かにいきなり過ぎて、そちらの恋雪さんを怯えさせたの

は悪かった。

だが何やら誤解しているようだが、サタン様は彼女の同意なしに連れ去る気など初めからないぞ。そしてもちろん、いかがわしいことをする気もない。

ただ、可愛い服を着せてそれを眺めながらミックスジュースを飲みたいだけだ」

『なおさら気色悪いわ死ね!!』

理由を察して、流石に自分たちの分が悪いことも理解して一応は謝ったのだが、彼らの的に心外な誤解は指摘し、否定して修正したが、しない方がマシだった。

ちなみに恋雪に気色悪い思いをさせたくないの一心で狛治は、恋雪に何も見えないよう、聞こえないように抱きしめて目と耳を塞いでいるので、恋雪は未だに事情がわかっていない。だが夫に抱きしめられて、ものすごく恥ずかしいがそれ以上に嬉しくて幸せそうなので、放っておいていいだろう。

「死ねとは何だ、死ねとは!! 無礼な奴らだな!! そもそもお前ら、サタン様にこのような真似をしてたたで済むと思っているのか!？」

「そうだそうだ! これをネタに、賠償金とか色々むしり取ってやる!!」

言われて当然な性癖を勝手に暴露してきてキレルベルゼブと、これまた勝手なことを言い出すサタンに、小鬼たちはさすがに要人であることを思い出して黙り込み、楯と狛治は権力を盾にする卑劣さに、怒りを更に加熱させた。

だが鬼灯はそろそろ面倒くさくなってきたので、ここいらで終わらせる必殺の一言を放つ。

「ベルゼブブさん。狛治さんはリリスさんに言い寄られるたびに、『旦那さんはあなたを想っているからこそ、あなたを尊重しつつ耐えているんですよ』と言って、彼女の不貞を嗜める人ですよ」

「今回は全面的にサタン様が悪いから大目に見るが、次からは気を付けろ! いくら相手が悪くても、やり方を間違えたら不利になるのはお前達の方なのだからな!!」

「ベルゼブブ!？」

国柄か種族柄か、自分に対して忠実なイエスマンだったはずの部下が、まさかの掌返しにサタンは声を上げる。

ベルゼブブにとつて最も大切なのは、自分の妻。なので妻に手を出さないどころか、自分に対して気遣って妻を嗜めてくれる貴重な相手を敵に回すことは避けて、今回の件は全面的に不問にすると宣言する。

そつちが勝手にやってきて迷惑を一方的に掛けて来たのだろうと思う気持ちはもちろんあるが、実質こつちは被害ゼロに対して（閻魔大王「ワシは？　ねえ、ワシは？」）、サタンには色々やらかしたことを槍玉に上げられると不利なのはこちらの方だ。

その程度のことば狛治も密もわかつているので渋々だが矛を収めるのだが、現状を一番わかつてないサタンは狛治に向かって横暴に喚いた。

「嫌だ！　せつかく珂雪ちゃんに会えたのに、このまま帰れるか！

おい、お前！　お前がその子の夫なら、私に『おかえりなさい、あなた』って言うように頼んで……」

「言わせるか。そのセリフは俺の特権だ」

サタンは鬼灯と違って一応は外交を気にして、気を遣って下手に出る狛治を舐めていたし、甘えていたのだろう。

もうサタンを要人ではなく、ただひたすらに気色悪い目で見える変態としか認識しなくなった狛治に、無惨が鬼灯再来かと怯えて確認の為にやって来るような惨劇の結果を生み出した時と同じ全力の殺気をぶつけられ、ようやくサタンは大人しくなってそのまま怯え切つてEUに帰国。

なお、このことがきつかけか、サタンは大人しい儂げ正統派美少女がトラウマになり、ツンデレ系美少女を更に傾倒するようになったという。

アメリカンの凶霊、スカーレット逃げて、超逃げて。

If：西洋の混沌すぎる御伽噺

「今日のお昼は何にしましょう。副菜に生姜の佃煮がある定食とかないかしら」

そんな独り言を呟きながら、しのぶは午後2時という遅い昼食をとるために食堂へと向かう。

薬物研究という仕事柄、既存の薬物や毒物の調合ならともかく、新薬の研究となるときつちり予定通りの業務など出来ないのです、しのぶの食事や休憩時間が変な時間になるのはいつもの事。

なので今日も半端な時間でガラガラの食堂にやって来て、注文をしてからどこに座ろうかとあたりを見渡して顔見知りの存在に気付く。

向こうはまだ気づいていないようだが、普通に親しくしている相手だったのと、自分は気付いたのにわざわざ離れた席に座るのもなんだしと思ひ、しのぶはそちらに足を向ける。

「こんにちは、座敷童ちゃんに茄子くん。それから、鬼灯様。

こちら、よろしいでしょうか？」

閻魔庁に住み着いた、お館様のご息女に似た雰囲気と容姿の座敷童と、無邪気な後輩の小鬼、そして上司に挨拶をしてから許可を求める。

茄子は「あ！しのぶさん！どうぞどうぞ！」と言って、広げていた画材を端にやってテーブルのスペースを開けてくれ、他3人も無表情だが普通に「どうぞ」と言ってくれたのでしのぶは席に着く。

「ありがとうございます。ところで……何を描いていたんですか？」

テーブルの上にあるのが、鬼灯と自分は食事だが茄子はスケッチブックと画材を広げていた。

どうやら彼は遅い昼食ではなく、本日は休みかシフトの都合で午後休なのか、どちらにせよ仕事はないから座敷童たちと遊んでやっていたのだろう。そうじゃなければ、鬼灯の金棒が今頃茄子の頭に刺さっている。

そこまではわかっているのだが、そこから先がわからなかったののでしのぶは訊いた。

茄子の描いた絵が見えていない訳ではない。むしろ、見えたから訊

いた。

「茄子さん、紙芝居描いてくれたの」

「すごく上手いし、描くのもはやいの」

双子は交互にそう言っつて、ペラペラとスケッチブックをめくり、茄子は褒められて照れくさそうに頭を掻く。

そしてしのぶは、「本当、モデルにそっくりですね……」と何故かちよつとひきつった笑みを浮かべて言った。

そんなしのぶに、彼女と同じく昼食の時間が遅れに遅れたであろう鬼灯がドンブリの中身を食べ終えてから、許可を出すように告げる。

「しのぶさん、気を遣わず正直に感想言ってもいいですよ。内容がカオスだと」

しのぶの正直な胸の内を見事に鬼灯が代弁した。

鬼灯の言う通り、茄子が書いたらしい紙芝居の絵はおとぎ話の登場人物に実際の人物をモデルというか当てはめて描かれたもので、絵は確かに文句なしにうまいのだが内容がカオスだった。

まず最初にしのぶが見た絵は、ピーチ・マキがモデルと思われるお姫さまが食い逃げして、お城から走り去る絵だ。もうこの時点で訳が分からない。

何枚かさかのぼつて、鬼灯モチーフの馬車や天探女モデルの女性にイジメられているシーンで、元の話が「シンデレラ」であることを察したが、それでも最後のシーンが何故食い逃げになったかが謎過ぎる。

そして他にもいろんな話を描いたらしいが、宋帝庁の獄卒猫である漢がいきなり長靴を履いて登場してるシーンやら、毒リンゴを食べないで王子様とも出会わないミキちゃん姫やら、なんとなく元ネタの童話はわかるが全部が全部「どうしてこうなった?」感が凄いものになっている。

あと何故か一枚だけあった、白澤タツチの絵は元の童話すらわからなかった。「アリババ」って書いてあったのに、絵柄のインパクトで見落とした。

「何がどうしてこうなったの?」

「いや、座敷童たちが外国のおとぎ話が見たいって言って、けど俺あんまり知らなかったから……」

「鬼灯様に教えてもらいながら描いてたの」

「でも鬼灯様、モデルに合った内容に話を換えちゃったの」

しのぶが鬼灯の言葉に苦笑しながら否定せず、むしろ肯定同然の質問をすると、茄子と座敷童たちが納得の答えを返す。

「なるほど。ダメですよ、鬼灯様。夢のあるお話をそんな風に茶化したら」

今度は微笑ましげな苦笑を零してやんわり鬼灯に注意し、しのぶは食事を始めると座敷童たちは思い付きを口にする。

「あ、そーだ。茄子さん、今度はしのぶさんモデルにお話描いて」

「うん、それ見たい。しのぶさん、綺麗だからお姫様似合いそう」

「あ、いいな。それ。俺もしのぶさん描きたい。やっぱ美人は描いて楽しいし」

さほど唐突ではないが、それでも一子の提案にしのぶが目を丸くしていたら、二子が無表情だが無邪気にしのぶモデルをリクエストした訳を語り、茄子も便乗してナチュラルに褒めるので、軽くだがしのぶを珍しく赤面させた。

自分の容姿にこだわりなどない、むしろあの軽薄すぎて空っぽな^{クシヤロウ}童磨に執着される要因だというのが正直言って嫌なくらいだが、幼い女の子が無邪気に褒めてくれたのなら純粋に嬉しく思い、照れてしまった。

「あ、ありがとうございます。けど、私の性格じゃ、お姫様は似合いませんよ」

しのぶは照れ笑いしながら、謙遜ではなく本心で語る。今でこそ本心から「姉みたいになりたい」と思って、前向きな意味で姉エミュをして穏やかだが、自分の本質は短気な激情家だと自覚しているの、別に外国に限らずおとぎ話全般に出てくる、「女性らしくて健気で献身的だからこそ、愛されて救われるお姫様」という役割に、自分は合わない過ぎると思っている。

「……お姫様ではないですけど、しのぶさんが主役にぴったりなおと

ぎ話ならありますよ」

「え？ 本当ですか？」

「何々？」

そんなしのぶの言葉を、茄子や座敷童たちが「そんなことない」と否定する前に鬼灯が口をはさんで、双子は先を促す。

しのぶも「自分が主役にぴったりなおとぎ話」は何なのか、気になった。悪い意味で。

鬼灯なら自分の本質をよく知っているので、表面上の穏やかさでぴったりな役柄は絶対選ばないと確信しているからだ。

そしてしのぶの予想は大当たりだった。

「赤ずきん」

「それ、赤ずきん^{わたくし}食べられて助かりませんよね？」

* * *

鬼灯の答えに、しのぶは即座に突っ込んだ。

確かに、しのぶが主役にぴったりすぎた。他の配役も一瞬で決まった。どう考えても、おばあさん役が姉のカナエで、狼が童磨だ。

ただしこの赤ずきん、狼に騙されてない。狼が姉の仇だと理解した上で、捨て身特攻している。

茄子も座敷童たちも、しのぶの最期の概要を知っているからか複雑そうな顔をする。

不謹慎だと怒るべきなのか、ぴったりすぎて感心すべきなのかを悩んでいるのがよくわかる顔だった。

「原作というかグリム兄弟が元にした民話がそうなんですから、別にいいじゃないですか」

「いえ、猟師役でカナヲが普通にキャストに入ってきてしまったのでやめてください。狼の腹を切っても、私復活しないでカナヲのトラウマが増えるだけだから、本当にやめて」

鬼灯が救いはないが教訓としては秀逸な元ネタを上げて「別にいいではないか」と言い出すが、グリム童話版でもちゃんとぴったりなキャストがいたからこそ、しのぶは本気で止めにかかる。

「じゃあ、猟師役をカナヲさんから伊之助さんに変えたら……」

「伊之助さんだと、獵師じゃなくて狩られる側じゃない？」

「助けに来たんじゃなくて、森の主決定戦みたいになるね」

そして童磨戦がどのようなメンバーで行われたかも知ってた茄子が、もう一人「獵師」役に当てはまる人物を上げるが、その人物の普段の格好が座敷童の言う通り過ぎた。

あと、彼は感受性が高いので下手したらカナヲ以上に「腹を切つても助からなかった、しのぶの亡骸」なんて見たら、それこそ心が崩壊しそうだからやめてあげろ。

「私主役の赤ずきんは本当にやめてください！ 私よりカナヲを主役にしましょう！ 不幸な生い立ちだけど、本人の努力で幸せになったあの子の方がおとぎ話のお姫様に相応しいですよ！」

自分が赤ずきんの場合、ぴったりすぎて洒落にならない事態すぎるから、しのぶが断固拒否してついでに主役の矛先を、自分から自分の継子にして可愛い妹に移す。

身代わりに差し出した訳ではなく、本心から「シンデレラ」あたりがカナヲはぴったりだと思っただからだ。もちろん、原典の義姉がつま先や踵を切り落したり、鳥に目をつつきだされる方じゃなくて現代のマイルド版の方でだ。

そして鬼灯も納得したような声を上げて、からカナヲにぴったりな作品を上げた。

「ああ、そうですね。人魚姫がカナヲさんには良く似合いそうです」「何であなたはそう、バッドエンドばかり勧めるんですか？」

しかし鬼灯が上げた作品は悲恋で有名すぎる作品だったので、しのぶは貼り付いた笑顔で静かにキレた。

だがこれに関しては、別に鬼灯がバッドエンド症候群を患っているからではない。その証拠に、彼はしのぶの反応に不服そうな顔をして反論する。

「人魚姫は某夢の国の映画版でなくとも、バッドエンドではないでしょう。むしろあれ、下手に簡略化した現代の絵本より、原作の方が救いのある話ですよ？」

「あ……。そうでしたね。すみません。でも悲恋なのは間違っていない

ので、カナヲに似合うと言われるのは嫌ですよ」

言われてしのぶはちゃんと原作であるアンデルセン童話を知っていたらしく、その最後を思い出して素直に謝罪しつつ、それでも譲れない自分の不満は主張しておいた。そしてその主張に関しては鬼灯も素直に、「そうですね。すみません」と謝る。

「人魚姫って、最後は泡になって消えるんじゃないんですか？」

「原作の最後はどうなるの？」

「鬼灯様、しのぶさん、教えて」

そして三人は原作の方を知らなかったので、鬼灯としのぶが簡単に教える。

原作の人魚姫はキリスト教の宗教観が強くて、「人魚は長命だが死後の魂はなく、人間は短命だが死後の魂は永遠」などといった日本人には理解できない部分が多く、ラストはその辺の宗教観が絡む。その所為で宗教観を排除して簡略化した絵本は「海の泡になって消えた」で終わらせる場合が多く、それが真エンドだと勘違いしている読者が多いのだろう。

仕事柄、鬼灯はキリスト教にもそれなりの知識はあるが、別にここでそこまで説明するのは話が長くなるだけで意味はないなと判断し、最後は人魚姫の心の清らかさが神に評価され、泡にならず空気の精という天使に近い存在に生まれ変わったという説明で、茄子や座敷童たちはなおさらに原作の人魚姫に興味を持ったようだ。

「へえ、原作はそんな終わりなんだ」

「ハッピーエンドではないけど、これはこれで味わい深いね」

「現代版じゃなくて、そっちの話で紙芝居を見てみたい」

そんな感じで3人が乗り気になってしまったので、カナヲ主演の人魚姫が作られてしまった。

鬼灯に主張した通り、悲恋には変わりないのでしのぶとしてはちよつと嫌だが、声を失った人魚姫がカナヲのイメージに合うのは同意するし、それに王子役になるであろう少年を想っていたカナヲとは別の可愛い妹分の存在を知っているので、お話の中では彼をその妹分に譲ってあげてと内心カナヲに謝りつつ、しのぶは食事を続行しながら

ら、鬼灯が語る人魚姫がまた脱線して変な方向に向かわないかを見張ることにした。

十 十 十

昔々ある所に、カナヲという可愛い人魚姫がいました。

カナヲは人魚の姉妹たちに愛されて、蝶よ花よと可愛がられて育てられていましたが、無口な割に行動力抜群なお姫さまでした。

そんな彼女はある日、海上が騒がしいことに気付いて姉妹に内緒で、外の様子を見に行つてしまいました。

外は嵐で、暴風に船が弄ばれるように激しく揺れていたところ、一人の人間が海に放り出されてしまいます。

人間は長い間水の中にはいられないことをカナヲは知っていたので、その人間を陸まで泳いで引き上げました。

その際、助けた人間である近隣の陸の王子、タンジローは意識が朦朧としながらもカナヲに「ありがとう。この恩は絶対に忘れない」と告げ、その時の笑顔にカナヲは心を奪われました。

海に帰つてもタンジロー王子の事が忘れられなかったカナヲは、やはり持ち前の行動力を発揮し、姉妹から決して近づいてはならないと言われていた深海の呪術師ドーマの元までやってきて、あろうことかよりもよつて過ぎる奴に相談してしまつたのです。

「なーんだ、そんなの簡単じゃないか。君が人間になればいいんだよ。あ、ちようどいい薬があるから、一気！ 一気!!」

ほら、これで人間の足が手に入った。代わりに声を失くしたけど、君は元から無口だから別にいいよね。あとその足で陸を歩くと、歩くとたびにナイフに挟られるような痛みを感じるし、恋が成就しなかったら君は海の泡になるけど、まあ代償としては安いもんだよね！」

カナヲはドーマをボッコボコにしてから、飲んでしまったものは仕方がないので、内心で姉妹たちに謝り、姉妹たちを悲しませない為にも恋を絶対に成就させてみせると生きこんで、陸上にやってきました。

そこで、ドーマが言った通りの足の痛みを耐えながら浜辺を歩いていたところ、難破船からの遭難者かと思われて声を掛けられました。

カナヲが振り返った先には、騙されたとはいえ失った声も足の痛みも後悔しないほど想う、タンジロー王子がいたのです。

彼女は彼に、自分があの日彼を助けた人魚であること、あなたに会いにここまで来たことを訴えようと思いました。声は出ません。

そんな彼女に、タンジロー王子は言いました。

「この匂いは……あの時俺を助けてくれた人!!」

++ ++

「だからおとぎ話を茶化すなって言ったでしょうが」

最初からちよくちよくモデルに引つ張られた内容に改変されていたが、まあ原作の大筋からは逸脱していなかった。で軽く突っ込む程度にしのぶは抑えていたが、流石に夢の国以上の改変にはストップをかけた。

「すみません。王子が炭治郎さんならもうこうなる気しかなくて」

「それはすごくわかりますけど」

しかし鬼灯の言い訳に、しのぶも同意はする。確かに炭治郎が王子なら、例え助けられた時は意識朦朧でも、自分を助けてくれた人を間違えたりはしないだろう。

「気付いた理由はともかく、即座に気付いているから原作よりも夢の国よりも王子が好印象」

「けど、恋の成就の難易度が上がってるよね」

「だろうな。この王子、絶対無自覚に他の女の子もタラシこんでるし、カナヲちゃんの足の悪さを気遣うからこそ、完全に妹扱いしそう」

双子がそれぞれカナヲ版人魚姫の感想を言い合い、茄子も炭治郎の美徳ゆえに生じる最大の欠点を指摘する。

「人魚姫もやめましよう。炭治郎くんが王子じゃないと違和感なのに、カナヲが自分を助けた恩人だと気付かないのもすごく違和感ですし」

「そうっすね」

「あ、そうだ。茶々丸ちゃん」

「茄子さん、茶々丸ちゃんで『長靴を履いた猫』をリベンジしよう」
しのぶがお似合いのキャストだからこそ違和感が生じてしまう人
魚姫は諦めるように告げると、茄子も素直に同意。

そして双子はまた別のキャストで、おとぎ話をリクエストする。
もう実際の人物をモデルにしない方が良いのでは？ としのぶは
思うのだが、たぶん双子はこの実際の人物による改変おとぎ話を楽し
んでいる。

「うーん、茶々丸だと確かに強すぎなくて可愛い感じになるけど、そう
なると飼い主誰？」

「……愈史郎さん？」

「その場合、お姫様は珠世さん？」

「猫の助け借りずに自力で爵位手に入れますね。というか、猫が協力
しない。むしろ全力で邪魔をする」

茶々丸主演で相応しいキャストを考えたら、関連性で言えばベスト
だが、お互いの性格が原作に合わな過ぎることを鬼灯が淡々と指摘。
「あーそもそも俺、『長靴を履いた猫』の話、うろ覚えどころかマジで
良く知らないわ。」

何でこの猫、長靴履いて飼い主をお姫様と結婚させようとしてんの
？」

「長靴は当時、貴族など高貴な者の証で、猫であつても高貴であると王
に思わせる為ですよ。」

飼い主は粉ひき小屋の3兄弟末っ子で、父親の遺言で猫しかももらえ
ず『猫は食べてしまえば終わりだ』とか嘆いていたので、たぶん猫の
保身じゃないでしょうか。……そういえば、炭治郎さんと善逸さんと
伊之助さんはよく、3兄弟に例えられていましたね」

茄子の疑問に鬼灯が答え、そして3兄弟というワードでふと思い出
したトリオを上げる。

別にその3人をキャストに組み込めと言いたかった訳ではないの
だろうが、しのぶは思わずその3人が「粉ひき小屋3兄弟」役で「長
靴を履いた猫」の話を想像してしまった。

十
十
十

昔々ある所に、3人の兄弟がいました。

3人の父は粉ひき職人でしたが、病に倒れて死んでしまいます。父は死ぬ前に、長男タンジローには粉ひき小屋を、次男ゼンイツには口バを、そして末っ子イノスケには猫を譲り渡して息を引き取りました。

末っ子はあまりの不平等さに怒り狂います。

そして長男次男も、「イノスケが可哀相だー」「っていうか、俺も口バだけって酷くない!？」と不満だらけだったので、3兄弟は父親の遺言を無視して、そのまま3人で粉ひき職人として一緒に暮らしましたとき。

＋ ＋ ＋

「話が秒速で終わってしまいました」

「でしょうね」

人魚姫の時と同じく、キャストが善人すぎて話が終わってしまった。

その内容を話してないのにしのぶが告げると、鬼灯も真顔で同意。どうやら自分で言って、彼も同じキャストで想像してみたのだろう。

「これ、兄弟の順番を入れ替えても結果が同じだよね」

「末っ子が善逸さんってだけなら似合ってるかも。伊之助さんはよりにもより過ぎて一番ダメ」

「そうだよな。あの人なら嘆く前に、普通に猫食うよな」

他の者達も同じ想像をしたらしく、想像内容を誰も語ってないのに会話は自然に成立して進む。

「他に誰か、おとぎ話に似合いそうな人っている?」

「おとぎ話を上げて、キャスト考えた方が良くない?」

完全におとぎ話を見たいのではなく、改変おとぎ話を面白がっている発言をする座敷童に、茄子と鬼灯も便乗してわいわい話を続ける。しのぶは呆れきった溜息をついて、食事を再開しながらしばらく放っておいた。呆れつつも、実はしのぶも面白がっている節がある。

「ラプンツェル」

「甘露寺さんは? 髪の毛長いし」

「そうなると王子様は伊黒さん？」

「ダメです。あれ、塔を追い出されたのは逢引きを重ねて妊娠したことを暗喩するシーンがあります。伊黒さんにそんな度胸はない」

「彌豆子ちゃんで人魚姫リベンジ」

「いいね、鬼だった頃はしゃべれなかったしね」

「王子様は善逸さん？」

「気持ち悪い」

「竈門兄妹でヘンゼルとグレーテルは？」

「炭治郎さんは魔法の食事を受け取らずハンストしますし、彌豆子さんは魔法を竈に突き落とさず自力でファイヤーできますよね」

「青髭」

「……童磨」

「しのぶさんの顔が怖い！ この話題はやめよう!!」

「不死川家でねずの木……」

「不死川さんの心を扶けるのはやめてあげてお願い!!」

地獄という地域柄か、鬼灯が見出した逸材だからか座敷童たちはグリム童話の中でもマイナーな部類かつ残酷な話も知っていたようで、原作は血縁がないとはいえ母親が子供を殺す話に嫌すぎるキャストを上げ始めたので、しのぶがストップをかける。

流石に今のは悪趣味が過ぎたと自覚があるらしく、双子は「ごめんなさい」と頭を下げる。

悪意はもちろん、あのキャストでそのおとぎ話が面白そうだと思っ
て言った訳ではなく、話の内容からキャストを連想して口に出してしまっただけのようで、ひとまずしのぶも茄子も安心した。

そして、頭を上げた一子がふと思いついたキャストとおとぎ話を上げる。

「あ、そうだ。恋雪さん。茄子さん、恋雪さんで白雪姫が見たい」

「え？ 何でそのキャスト？ 名前繋がり？」

「というか一子ちゃん……。それも悪趣味よ。毒殺された人に、毒リンゴ食べさせる話は……」

「だからこそ見たい。ちゃんと王子様な狛治さんに助けられてハッ

ピーエンドなのを」

一子の提案にしるぶはこれも悪気はないだろうがだいぶ不謹慎だと注意するが、二子が片割れを庇うように補足する。

その補足込みで言われたら、あの夫婦の悲劇を知っているからこそ確かに見たいと思えた。

「恋雪さんなら白雪姫のイメージに合いますし、良いんじゃないでしょうか」

「じゃあ、今度こそ鬼灯様お願いします」

ミキをモデルに描いたら、ミキの堅実さがおとぎ話の浪漫を綺麗さっぱり駆逐しつくしてしまったので、白雪姫のイメージに合う健気美少女恋雪でリベンジが行われた。

＋ ＋ ＋

昔々ある所に、雪のように白い肌、黒檀のような黒髪、血のような赤い唇の美しいお姫様はいました。……恋雪さんと白雪姫、容姿の特徴がまんま同じだな！

そんな白雪姫ならぬ恋雪姫は早くに母親を亡くし、継母である梅……は一応改心してるから墮姫王妃に虐げられていました。

ある日、墮姫王妃は嫁入り道具として持ち込んだ魔法の鏡に尋ねます。

「鏡よ鏡、この世で一番美しいのはあたしに決まってるわよね？」

「いいえ。この世で一番美しいのは恋雪姫です」

「何ですって!! 許さない! 絶対に許さない!!」

その狩人! 恋雪姫をぶつ殺してきなさい! あ、でも心臓は抉り取って持って帰ってきなさい! あたしが食べるから!!」

鏡の答えに怒り狂って墮姫王妃は側にいた狩人にかなり猟奇的(原作通り)なことを命じます。

狩人は恋雪姫を森の奥まで連れて行き、そして……

「この先に小人たちが住んでいます。あなたを匿うように話をつけていますから、そこにお逃げください。」

絶対に、あなたへの脅威を排除したら迎えに来ますからどうか待つ

ていてください!!」

＋ ＋ ＋

「狛治さん、王子じゃなかったのか」

まさかの鬼灯が勝手に変える前に茄子が勝手に内容を変更してきて、鬼灯としのぶが同時に突っ込む。

「いや、いっちゃなんだけど狛治さんは見た目も性格もイケメンすぎて、逆に王子っぽくないよなーって思ってたから。なんかこの狩人の方が、すっげー狛治さんっぽい」

「わかる」

「ポツと出で死体にキスする王子より、こっちの方が絶対にいい」

そして茄子の改変理由には納得するしかなかった。

確かに狛治は病人の看病を一切苦に思わず、むしろ「苦しいのは本人だろ。好きで病気になった訳じゃないのに、何で謝るんだ？」と自然体で思えるわ、気晴らしに一人で花火でも見に行ってくれと言ってるのに、具合が良くなったら背負って連れていくとこれまた自然に言い出す、精神イケメン具合だ。

精神が献身的なイケメンすぎて、王子というキャラがむしろ合わない。特にマイルド版でも少し年齢が上がれば、「この王子、だいぶ変態じゃない？」と思うネクロフェリア疑惑濃厚な白雪姫の王子役に狛治を当てはめるのは、狛治に対して失礼すぎる。

そんな風に鬼灯としのぶも納得してしまったので、口を挟めなかった。

「このまま続きが見たい」

「狛治さんと恋雪さんの恋路をこのまま続けよう」

「えー……。俺、恋愛ものは漫画でもあまり読まないんだよなあ……」

見た目通りの女の子らしさも子供らしさも乏しい双子が珍しく女の子らしいラブストーリーを求め、茄子は自信ないと言いつつ彼女たちの希望に沿うように、そのままヒーローが王子から狩人に変更された恋雪姫が描かれていくのを、しのぶは若干遠い目で眺める。

そしてご馳走様も兼ねて手を合わせ、内心で狛治と恋雪に謝った。

(ごめんなさい、お二人とも。正直、私も見たい)

この座敷童監修・茄子作の「恋雪姫」は男児である閻魔の孫にはあまり評価を得られなかったが、女児である苺々子や丙どころかお香や蜜璃からも大変好評すぎてコピーで量産され、だいぶ閻魔庁内で流布して広がってから狛治夫婦は紙芝居の存在に気付いて悶絶したという。

被害が流れ弾過ぎる!!

無惨様の楽しい十六小地獄めぐり（大叫喚地獄編）

「こんにちは、皆さま。本日も『パワハラの呼吸』『ブーメランの呼吸』『ペイズリーの呼吸』など、いらなすぎる全集中の呼吸を体得している鬼舞辻 無惨の楽しい十六小地獄めぐり、大叫喚地獄編を開始します」

「最後が意味不明すぎるわ！ とりあえず私の特徴に呼吸付けなければいと思ってるだろ!？」

いつも通りの真顔ローテンションのバリトンボイスで動画開始の挨拶を行い、これまたいつも通り地面にミノムシ状態で転がされている無惨が、ビチビチ跳ねながら正当性があるんだかないんだか迷う抗議を行う。

そんな無惨を眺めて、狛治が「パワハラやブーメランが自分を表している自覚があったのか」と、割と真剣に感心した様子で呟き、そして今回というかこの地獄のゲストと言える獄卒が同意を示すように鼻をピスピスならしながら頷いた。

「そうですね。……自覚があつて改善も反省もしないって、無自覚より救いがないのは心根の方でしょうか？ 頭の方でしょうか？」

「うるさいわ、そのの鬼!!」

年中発情期のまさしくケダモノに頭の心配をされるいわれなどない!!」

大叫喚地獄のエース獄卒である芥子という鬼が、狛治の発言に同意しながらこちらも率直な自分の感想と疑問を口にすれば、無惨の文句をつける予先が彼女に移る。

しかしここまで自分を棚上げする奴自体は珍しいが、地獄に落ちても元気いっぱいクレーム三昧な亡者はわりといるので、芥子は慣れ切った様子で無視する。むしろ狛治の方が、「……文句をつける部分が頭だけなのか。性格悪い自覚はあったのか」と、今度は呆れが一周回って感心に変化したのがよくわかる呟きを零した。

「野生動物、しかも攻撃性が低くて寿命も短い小動物の類が繁殖力旺盛なのは自然の理で、責める要素はありません。」

なにより芥子さんは人間並、少なくとも確実にお前より賢く理性的だ」

芥子自身はケダモノ呼ばわりを気にしていないが、動物好きの鬼灯には気に障ったらしく、無惨の頭を金棒でフルスイングし、無惨の頭は「異々いいてんしよ転処」の灼熱の河にまでホールインワンしてしまい、獄卒たちが慌てて回収に向かう。

ちなみに異々転処はこの大叫喚地獄内の地獄であるが、現在地であるここ「吼々くくしよ処」から8つ離れている……。

「さて、無惨の頭を回収するまで時間が出来てしまったので、今回の地獄めぐりのゲストである芥子さんを紹介しましょうか」

無惨を地獄じゃなかったらR18G間違いなしな物体にするのはいつもの事なので、もちろん鬼灯は気にせず話を進める。

しかし無惨が余計なことと言って、鬼灯の呵責によるダメーじから回復の間に芥子の紹介は予定通りだったが、このトンデモ飛距離は予定外で、芥子の紹介だけでは時間が余ってしまった。

「全く、頭が空っぽだから実によく飛んで迷惑ですね」

自分でライジングインパクトしでかしたくせに、鬼灯は無惨並に無惨に迷惑を責任転嫁して、獄卒たちに「理不尽……」「ひでえ……」と思われるが、無惨と違って笑い話の範疇にその感想が納まるのは、鬼灯の人徳というよりただただ無惨の自業自得である。

そして無惨の頭部回収という待ち時間が出来てしまったのはこちらの話であって、動画はこの待ち時間をカットすればいいだけの話なのだが、ワーカーホリックで時間貧乏性な所がある鬼灯は、この時間も無駄にはしなかった。

「仕方ありません。ついでですから、おそらく原作を知らないであろう若い方々への補足と、芥子さんのテンションを上げる為に、こちらもご紹介します」

「鬼灯様！ むしろそれやる為に無惨様の頭をかつ飛ばしたのでは!？」

言って鬼灯が取り出したのは、芥子の過去が元になった御伽噺。

……狸が自分を助けてくれたおばあさんを殺した拳句に、その肉を

おじいさんに騙して食わせて嘲り笑って逃げて行ったことが始まりである復讐譚、「カチカチ山」をそのバリトンボイスで朗読した。

* * *

・ 大叫喚地獄の小地獄

「本日巡る地獄は詐欺罪などで墮ちる大叫喚地獄。こちらは『十六小地獄』と謳っています。特別に二つの地獄が追加されて、合計で18の小地獄があります。

その追加された二つの地獄と追加された訳は、その地獄に着いてから説明するとして、まずは最初の小地獄、『吼々処くくしよ』から。

こちらは恩を仇で返した者、自分を信頼してくれる古くからの友人に対して嘘をついた者が墮ちる地獄で、刑罰は獄卒が罪人の顎に穴をあけて舌を引き出し、毒の泥を塗って焼け爛れたところに毒虫がたかります」

「むしろ私は恩を仇で返されつづけっ!？」

「黙れこの恩知らずワカメ狸が!!」

無惨の頭を回収してくっつけて、さっそく最初の地獄である吼々処の説明を鬼灯が行うと、相変わらず凶々しすぎる自己弁護をわめき立てるが、全部を言い切る前に過去のトラウマを朗読されてテンションが既にMAXな芥子が錐で無惨の舌を貫き、そのままグリグリと穴の大きさを広げる。

そしてとつてもどうでもいいが、無惨の髪の特徴と芥子のトラウマかつ最大の侮辱の言葉を組み合わせたら、うどんかそばの種類みたいでなんだかおいしそう。

「てめーは自分の治療をしてくれてた医者を癩癩で殺してるのが全ての始まりだろーが!!」

それのどこが、『むしろ自分の方が恩を仇で返され続けた立場』だ

!!

割と普段は丁寧で穏やかで可愛らしい口調の芥子だが、テンションMAXに加え、この地獄に落ちる罪人こそ芥子が最も憎む狸と同罪ということもあって、たかるはずの毒虫も引く勢いで、芥子が穴を開けた舌で固定した無惨を權で滅多打ちにするのを、鬼灯と狛治はただ眺める。

眺めつつ、狛治はポツリと呟いた。

「……無惨様が医者にしたことは弁護のしようがありませんけど、……自分の体が人外に変質させられていると気付いたら、発作的に殺してしまう可能性、普通にありますよね？」

「あの芸術界の縁壺さん、本当に間違いなく善良ですけど、致命的に想像力が足りなかったところも縁壺さんですね」

* * *

『受苦無有数量処』。

嘘をでっち上げて目上の人を陥れた者が堕ちる地獄です。

刑罰の内容は、獄卒に打たれて傷つくとその傷口に草を植えられ、成長し根を張ったところで引き抜かれます」

「私が一番上だったのだから、わざわざそんなことせんわ!!」

芥子に散々叩きのめされても、やはり頭が軽すぎてゴルフだと別のコースにまで飛んで行ってホールインワンすると鬼灯が語る無惨は、腹が立つことに割と正論で自分は無関係だと主張する。

「鬼の中ではそうでも、人間社会では違ったでしょう」

「自分にとって都合のいい立場確保のためにやらかしたことで、あなたはストリートにここに墮獄しますよ」

しかしそれが正論なのは狛治と鬼灯が言う通り、無惨自身が作り出した鬼の社会の中であって、人間に対しては思いつきりやらかしている。

なので鬼灯はもちろん狛治も一切同情はなく刑罰執行の準備として、ガスマスクらしきものを被り、二人とも両手に分厚い手袋も装着する。

彼らの言い分に無惨はまた反論になっていない反論をしようとす

るが、その恰好に呆気を取られて言いたかった言葉を忘れる。

そしてその恰好の意味を訪ねる前に、同じように完全防御を施した芥子参上と、彼女が手にして掲げる物の説明で理解した。

「はい、それではこちらが本日無惨に植え付ける植物、ドラゴン・ブレス・チリやキャロライナ・リーパーを超えるスコヴィル値318万を叩き出した新作激辛唐辛子！ ペツパーX!!」

「そんな防護装備が必要なものは香辛料ではなく猛毒だろうが!!」

その感想は鬼灯も心の底から認めるまごうことなき正論だったが、正論だからこそ使用された。

* * *

『じゅけんくのうふかにんたいしよ受堅苦惱不可忍耐処』です。

王や貴族の部下で保身のために嘘をついた者、またはその地位を利用して嘘をついた者が堕ち、罪人たちの体内の蛇が動き回り、肉や内臓を食い荒らします。まあ、わかりやすく言えばたいぼん薑盆ですね」

「生まれが貴族の私はこの罪状とは無関係だろう！」

「いや、生まれが貴族なら一応は『王の部下』だったでしょうが」

前の地獄と同じように、自分が人を貶めていないという方向ではなく、自分が一番上の立場だからこそあり得ないと主張する無惨に、鬼灯は呆れながら突っ込みつつ、けれど顎に手をやって考える。

「ですが、認めるのは癪ですがこの罪状は実際にあまり無惨とは関係ないですよね。」

平安貴族時代は病弱で政治とか仕事はほとんどしてなかったからこそ、下の者へのパワハラはしても上に関わること自体がなかったの
で。さて、どうこじつけて墮としますか」

「こじつけるな！ 諦めろ!!」

鬼灯が言った通り、癪だが無惨は隠れ蓑としての人間の立場でも、自分に都合がいい悪い関係なくただ自分のプライドの問題で崇められる、敬われる立場の人間を殺すなどしてなり替わって奪い取ってきたので、この地獄に落ちる条件が意外なことに揃ってなかったりする。

だが当然、鬼灯はもちろん芥子も、そして狛治も無惨の「諦めろ」と

いう要望を叶える気は皆無だ。

「受苦無有数量処の時と同じように、人間としての立場を保つために『保身の為に嘘をついた』を理由にすればいいのでは？ 無惨様が利用した人間の立場は常に無惨様がトップの集団だったという訳ではないでしようし」

「それが妥当ですが、いまいちインパクトに欠けますね」

「真顔でこじつけの屁理屈を考えるな、猗窩座あつ!!」

そしてインパクトで決めるな閻鬼神!!」

無惨を無視して割と真剣に無惨を墮獄させる屁理屈を考える二人。雑な理由で落とすのはいいが、地味な理由は鬼灯にとってダメらしい。

そんな二人に、芥子も無惨の正論なのに「お前が言うな」としか言いがたない抗議をまるツと無視して、可愛らしく挙手して彼女は自分なりの意見を述べた。

「はい、鬼灯様、狛治さん。落とす理由にインパクトがつけられないのなら、呵責内容につけたらどうでしょうか？

具体的には、体内で暴れ回って食い荒らす蛇をヤマタノオロチさんにしてもらうとか」

「物理的に不可能!!」

割といいアイディアだったのだが、具体例が無惨と狛治が素でハモる程に不可能だった。

鬼灯も一瞬目を輝かせて「それいいですね!!」と言いかけたが、二人の突っ込みで我に返って渋々諦めた。

代りに「大が物理的に不可能なら、逆に小を使いましょう」という発想が生まれ、無惨は蛇の代わりに似髻虫にけいちゅうに埋め尽くされた穴の中に落とされ、獄卒たちはちよつと同情した。内臓より尻に。

* * *

「こちらは『随意庄処』。

他人の田畑を奪い取るために嘘をついた者が墮ち、さながら鍛冶師が刀を作るときのように罪人を鉄に見立てて火で焼き、ふいごで火力を強め、鉄槌で打たれ、引き延ばされ、瓶の中の湯で固められ、また

火で焼く、ということが延々くり返されます」

「人間以外口にできなくなっていたのだから、田畑など私に何の価値もない！」

「この人、少しでも罪に逃れようと屁理屈こねてるんじゃないやなくて、ひたすらに短絡的なだけなんですわね」

相変わらず、「そうだけどそうじゃねえ。それは一例であって、お前他のことはどストリート役満でやらかしてるだろ」という言い分を一切の躊躇いも恥じらいもなく言つてのける無惨に、芥子は改めて思い知った無惨という生き物の特徴を口にする。

その感想には「うん」という肯定以外の返事のしようがなかったので、狛治は苦笑で流しつつかガラガラと下に車輪がついた猛獣でも入ってそうな檻を運んでくる。

それを見て、飽きもせずギャーギャー喚いていた無惨が一瞬絶句してから、素で尋ねる。

「……何だそれは？」

「はがねづか ほたる鋼鐵塚 蛭さんです」

「名前を聞いた訳ではない!! っていうか、可愛いな名前!!」

檻の中にいたのは、ひよつとこの面を付けた少なくとも成人はしているであろう割と体格のいい男。普通なら一番謎なのは、そんな「ひよつとこの面以外には変わったところがない男を檻の中に入れていいる」という状況の事だろうが、このシチュエーションに関しての謎は実はない。

「かかかか刀あああああゝゝつっ! 俺の打った、研いだ、刀ああああゝゝつっ!!」

そんなうわ言なんだか呪詛なんだかよくわからないことを呻きながら、今にも檻をぶち破りそうな勢いで鉄格子を掴んでガタガタ揺さぶり続けている男は、無惨以上に檻の中案件であることは間違いない。

「呵責内容が『刀鍛冶のように』という地獄なので、特別ゲストとしてお呼びしました。

この方は日輪刀を制作していた刀鍛冶の一人、炭治郎さんを担当

し、縁壺さんの刀を研ぎ直した方です。刀鍛冶としては優秀な部類で、職人気質と言えば聞こえはいいですが、こだわりが強く自己中、話を聞かずに暴走して止まらない、刀が消耗品扱いだというのに折れたらキレ、しかも自分の腕ではなく使い手を責める、実は割と墮獄しておかしくない人です。

……こんなんですけど悪意の類は一切なく、本人なりに反省して改善の努力をしてるので、これまた判決に困った人でした」

そんな無惨や無惨の鬼たちとは色んな意味で違う方向に危険人物の紹介を鬼灯は無惨と視聴者に語りながら、ガチャガチャと檻の端で何かをいじっている。

「まあ、そんな人ですからこそある意味今回は重宝してます。

という訳で、どうぞ鋼鐵塚さん。あいつこそ、あなたの刀を折りまくった元凶です」

もちろん、いじっていたのは檻を封じていた鎖と錠前。鍵を開けてジャラリと鎖を解き、檻の戸を開けると鋼鐵塚は獣のような雄たけびを上げて一直線に無惨に跳びかかった。

なお、鬼灯が戸を開けるまでの一瞬の間に、檻の中に実はあったらしいお手製のまな板も真つ二つな切れ味を誇る包丁を鉢巻に2本、両手にも1本ずつという八つ墓村スタイルに変身していた。

「……刀鍛冶、関係ない」

八つ墓村スタイルでわかり切っていたことを呟く芥子に、もはや狛治は苦笑も返せない。

鬼灯の言った「刀を折りまくった元凶」であることは間違いないのだが、鋼鐵塚がここまでバーサークしているのはこの為に鬼灯が鋼鐵塚の刀を使い潰して折りまくったから（わざと折った訳ではない。普通に仕事の拷問で使い潰した）だと知っていたらなおのこと何も言えなくなつて、狛治はただ遠い目で明後日の方向を眺め続けた。

* * *

『一切闇処』です。

衆合地獄堕ちな行いをして裁判にかけられながら、王の前で嘘をついてしらを切り通し、かえつて相手の婦女を犯罪者に仕立て上げた者

が墮ちる地獄で、刑罰は頭を裂いて舌を引き出し、それを熱鉄の刀で引き裂き、舌が生えてくるとまた同じ事を繰り返します。

……おや？　今回は静かですね」

いつも通り地獄の名前と墮ちる罪状、呵責の内容を説明していたのだが、いつもと違って無惨からの逆を楽しみになって来る棚上げ抗議が起こらないことに気付き、鬼灯が振り返ったら既に狛治が黙々と無惨の頭を叩き割って舌を抜いては、回復した頭をまた割って舌を引っこ抜くを繰り返していた。

「絶対に『生前に裁判にかけられたことがない！』という方向で喚くと思いましたが、口を塞いでおきました」

「そうですか。賢明です。そのままどうぞ続けてください」

鬼灯の視線に気づいた狛治が振り返り、真顔で鬼灯の指示を待たずに呵責を行った理由を語り、鬼灯も咎めずむしろ続行を許した。

おそらく、この地獄の罪状が生前、恋雪が剣術道場の息子にされかけた事、そしてやったことに当てはまるといふ狛治にとつての地雷なので精神的に余裕がない為、無惨の自分のしたことを全部すつとぼけてなかったことにする言い訳以上に神経逆撫でする抗弁が聞きたくなかったのだろう。

なので無惨はもう言い訳を喚く気力がなくなるまで、狛治に黙々と舌を引っこ抜かれ続けた。具体的に言うと、5時間ぐらいぶつ続けた。

* * *

「お次は、『人閻煙処』」

実際は十分に財産があるのに財産がないと嘘をつき、本当は手に入る資格がないものを皆と一緒に分け合って手に入れた者が墮ちます。刑罰は獄卒に細かく身体を裂かれ、生き返るとまだ柔らかいうちにまた裂かれること。また、骨の中に虫が生じて内側から食われま

す」

「これは……『自分の財産を他人に分けた事なんかはない』って方向で来ますよね」

「……だろうな」

鬼灯が説明している後ろでコソコソと、芥子が無惨の言い訳内容を予測し、狛治も呆れきった様子で溜息をついて同意した。

が、芥子どころか元部下である狛治も甘かった。

「むしろ私が自分の血という財産を無能な有象無象に奪われ続けたわ!!」

「そう来たか!!」

どうやら無惨にとつて、太陽を克服しない、青い彼岸花を見つけれない、鬼殺隊を壊滅させられなかった部下である鬼全てこそが「十分に財産があるのに財産がないと嘘をつき、本当は手に入れる資格がないものを皆と一緒に分け合って手に入れた者」らしい。見ようによつては確かにそうかもしれないと思わせる言い分なのが、本当に神経を逆なでさせるなこいつ。

「お前の血は財産どころか汚物の方が肥料になるだけマシな害悪ですよ。」

お前の血によつて鬼になつてしまふ事こそが、『人間性という財産の略奪』だからさつさと墮獄しなさい」

どこまでも自分の非を一切認めず正当化する無惨の歪みなさを、ついうっかり狛治と芥子は感心してしまうが、その感心は最悪の気の迷いだと鬼灯が修正するように言い返し、束で無惨の尻に向かつてもう一度似髻虫を投げつけた。

ところで鬼灯、カツコイイこと言ってるけどその罪状はこの地獄に関係ない。

* * *

「こちらは『如飛虫墮処』。私が主に業務を行っている地獄です。

墮ちる罪状は、人々から得た物品を高額で販売し、しかも儲けがなかったと嘘をついて自分だけ大儲けした者……つまりはええ、あの……あのケダモノが……狸親父共が落ちる地獄つてことですよ!!」

「芥子、落ち着け。深呼吸。はい、吸ってー、吐いてー」

芥子自身が言ったように彼女が主に業務を行っている地獄なので、今回は鬼灯ではなく芥子がまず地獄の紹介を試みたのだが、自分で自分の地雷を踏んで闇ウサギ化した芥子を狛治が慣れた様子で落ち

着かせる。

こうなることは予測済みだったので芥子のメンタルケアは狛治に任せ、地獄の説明は滑らかに鬼灯に代わって続けられた。

「刑罰の内容は獄卒が罪人を斧で切り裂き、秤で計って群がる犬達に食わせるといふ地獄の中でもシンプルなものです。では、芥子さん。落ち着いたのなら、っていうか落ち着いてないのならそれはそれでどうぞ」

『どうぞ』じゃない!! 私はこの地獄に堕ちるいわれはない!!」

「これも玉壺の壺売りの件ってことにしています」

「あいつの駄作の流れ弾をこっちに向けるな!!」

前回の地獄めぐりで大活躍した雑理由をまたしても使われて、無惨はキレて言い返す。これまた割と正論だが、今一番流れ弾をくらっているのは間違いなく無惨ではなく玉壺の方である。

もちろん無惨は当然、玉壺に対しても何のフォローもなく、全然落ち着いてないバーサーク芥子によって無惨の呵責は執行された。

* * *

『死活等処』。

出家人でもないのにその格好をし、人をだまして強盗を働いた者が堕ちます。

獄卒に苦しめられる罪人たちの前に青蓮華の林が見え、そこに救いを求めて駆け寄ると炎の中に飛び込むことになり、目や両手足を奪われて抵抗できないまま焼き殺されます」

「半天狗が落ちる地獄だろここ!! 私より何より半天狗を落とせ!!」

「言われなくとも、あれはそもそも大叫喚の小地獄をほぼコンプリートしていますよ」

この地獄に落ちる罪状の説明には、自分の棚上げよりも先に最もこの地獄に相応しい部下の名前を上げる無惨に、即座に肯定の反論を返す鬼灯。

そしてついでに、鬼灯は無惨に尋ねる。

「ところで、この地獄をコンプリートしているはずの半天狗と今現在巡っているあなたが鉢合わせしてない理由は何故だと思います?」

「知るか!!」

「半天狗に限らず、あなたの部下と会ったら面倒な罵り合いが起きそうだから鉢合わせしないように、調節してるんですよ。けれど半天狗はここをコンプリしているからこそ少しの連係ミスで鉢合わせしてしまいそうですから、別の地獄に隔離しました。」

……童磨の孤地獄に」

鬼灯の問いかけに問いかけそのものを拒絶する即答をした無惨を無視して、鬼灯は勝手に語る。その拒絶したはずの答えに、思わず無惨は言葉を失って青ざめた顔で目を逸らした。

童磨の孤地獄がどういうものかも知っていたら、呵責されている童磨自身がどんな生き物だったかを獄卒よりも知っているだけあって、そこは自分が落ちている阿鼻地獄より地獄であることが容易く想像ついたようだ。

どこまでも自分本位な無惨には半天狗に対して「可哀相」程度の同情もないが、それでも半天狗の立場を想像する程度の共感性はあったらしい。

ただその後に関する想像力と、自分の内心を顔に出さず隠すという器用さが良くも悪くもなかったのが無惨の自業自得な不幸。

ものすごく嫌そうな顔をした時点で、鬼灯は「よし、次はこいつを入れよう」と思った。そしてこの地獄めぐりが終わった後、本当に半天狗と入れ替わりで入れられた。

* * *

『『異々転廻』です。』

占いなどで嘘をつき、財産などを奪ったり人を貶める原因を作った者が堕ちます」

「もう既にお前の所為で堕ちたわ！ 頭が！」

最初に頭部がホールインワンした地獄にやっとたどり着き、無惨がその事を挙げて突っ込む。

だがもちろん、「そうですね。では、さっさと次に参りましょう」とはならない。

「そうですね。……この刑罰は目の前に父母や妻子、親友などの幻が出

現し、助けを求めて駆け寄ると灼熱の河に落ちて煮られては再生し、河から出ても同じように幻が出現して今度は地面の鉄鉤で切り裂かれなどを繰り返し、最終的には獅子に襲われながら火の輪くぐりするんですけど、こいつじや誰の幻を出しても効果ないので、最初のようにひたすらフルスイングでホールインワンし続けましょうか」

「元の刑罰の原型がほぼないだろそれ!!」

あと最後、何でいきなりサーカスになってるんだ!？」

無惨のこれは間違いなく無惨の方が正しい言い分かつ疑問に、狛治と芥子が反応に困りつつその突っ込みどころな最後の火の輪と獅子を用意する。

用意しつつ、彼らはこっさり感想を口にした。

「鬼灯様……、無惨がここに堕ちる理由こじつけてませんよね?」

「無惨様も突っ込み忘れてるな」

* * *

「こちらは『唐とうきぼうしよ望処』。

病気で苦しんだり、生活に困ったりしている人が助けを求めているのに、助けると口先ばかりで嘘をついて実際には何もしてやらなかった者が堕ちる地獄です。

ここの地獄はついた嘘に応じた罰があり、例えば飢えた人を見捨てたのなら、目の前においしそうな料理が出現するので駆け寄ると、途中に生えた鉄鉤で傷つき、しかもたどり着くと実は料理に見えたのは熱鉄や糞尿の池で、その中に落ちて苦しむ。夜露をしのぐ家を貸すといつて貸さなかった者は、高熱の鉄汁に満たされた瓶の中に逆さまに浸されるなどです」

「無惨様の場合ほどのような罰になるんですか?」

「私はその罪を犯した前提で語るな!!」

『お前が犯したことない前提で語るな!!』

孤地獄ではないのに個人によって呵責の内容が変わる少し変わった地獄であることを鬼灯が説明し、狛治が思い返したくない無惨の悪行を仕事なので思い返して考えながら、鬼灯に尋ねる。

そしていつも通り、もうこっちの頭がおかしくなりそうな程清々し

い無自覚な吐き気を催す邪悪っぷりを発揮する無惨の抗議に、鬼灯と芥子はそれぞれ自分の武器を投げつけ、狛治は無惨の顔面を蹴りつけて黙らせた。

「無惨の場合は、珠世さんや累さんにしたように病気が治ると言い切るめて血を与えた事と……、巖勝さんの勧誘も当てはまりますね」

「ということは、相手を騙した内容と無惨が欲しくてたまらないものが『健康な体』『長寿』『化け物レベルに強い』なので、それらを兼ねそろえた縁壺さんにボッコボコにしてもらうのが一番妥当ですか？」

「妥当だが、縁壺さんに呵責してもらうのは無理だ。そもそも、あの人の性格だと普通に嫌がる」

「あー……。そうでした。縁壺さんにやらせたら、無惨じゃなくてあの人に対しての嫌がらせになっちゃいますね」

鬼灯が語った、こじつける必要なく無惨が墮獄するに相応しいやりかきを語って、それに対応する罰を芥子が挙げるが、狛治がその罰の内容自体は肯定しつつも不可能だと告げる。

芥子も納得して、更に頭を悩ませるがその必要はなく鬼灯はすでに用意していた。

「ええ。なので、ご本人には劣りますがちょうどいいものを用意しました」

「はい？」

芥子どころか狛治も聞いてなかったらしく、怪訝そうな声を上げて鬼灯が手で指示した方を向く。回復した無惨も同じく。

そして絶句。

「技術課の皆さん、特に烏頭さんや平賀源内が真夜中テンションでノリにノッて作り上げた縁壺HELISH式です！ これで無惨をボコります」

『なにこの千手観音ロボ?!?!』

鬼灯が説明したのに、突っ込まれた。そして突っ込まれても当然の代物だった。

刀鍛冶の里にあった元の零式は、腕が6本ある以外は本人に良く似せたからくり人形で、この時点で現代でもオーパーツすぎる技術の集

大成だというのに、この地獄製縁壺ロボは狛治達が突っ込んだ通り腕の数が増えている。もうつけられるだけつけましたと言わんばかりの数なので、完全に千手観音状態だ。

それだけの腕を付けて動かすために必要だったのだろう。でかい。でかすぎる。閻魔大王くらいある。

そしてこれまた、顔の造形自体は縁壺に似せてあるので不気味すぎる。零式の時点でなかった似せる必要性を何故ここでも発揮したのかと思ったら、鬼灯はしれっと「無惨だけではなく巖勝さんにも使えるかと思つて」と言い出した。

「さすがにそれはやめてあげましょう!! っていうか、巖勝もこれ見たら困惑する! ただひたすらに反応に困る!!」

鬼灯の鬼すぎるアイディアが変な方向に空回っている呵責を、狛治は必死に止めている間に縁壺HELISH式は無惨を呵責する。

ただ閻魔大王サイズなので千手観音状態の腕はいくら振り回しても無惨に届かなかつたので、その巨体を生かして踏みつぶした。意味ねえな、これ!!

* * *

『双逼惱処』です。

村々の会合などで嘘をついた者、悪口を言つて集団の和を乱した者が墮ち、刑罰は炎の牙の獅子が罪人を口の中で何度も噛んで苦しめることです」

「……これまた無惨がパワハラの権化だからこそこじつけづらい罪状ですね」

鬼灯の説明に芥子が頭痛を堪えるように前足で頭を抱える。

芥子の言う通り、無惨は自分が鴉は白だと言えば鴉は自ら白くならなければ皆殺すパワハラの権化だからこそ、集団に対して嘘をつくということをしなさい。

集団の和など初めから求めていない。唯々諾々と自分の命令に従うこと以外許さない暴君そのものだからこそ、罪深いのだがここに落ちるいわれは悪い意味で皆無だったりする。

「そうですね。さてはてどうしましょうか」

「おい！ お前何も悩んでないだろ！ 台詞が棒読み過ぎる！！
っていうか、私に何をふりかけてるんだ!？」

芥子の言葉にわざとらしいレベルの棒読みで悩んでいるふりをする鬼灯だが、悩むふりをしながら彼は無惨に何かの粉を大量にぶっかけている。

それに咽ながら無惨は突っ込むが、その粉の正体はすぐに判明する。

ゴロゴロ喉を鳴らしながら、獅子は刃物のような爪をむき出しにして無惨をがしつと拘束する。

無惨を四肢で抱きかかえながら、やすりのような舌で肉を削りながらベロベロザリザリ舐められ、炎の牙で頭から獅子に丸かじりされることで無惨は理解する。あの粉はマタタビであるということに。

「おっとしまったー。うっかり手が滑ってマタタビを無惨にふりかけてしまいましたー」

「鬼灯様、過失と言い張るのならもう少し演技してください」

もはや雑こじつけも面倒になってきたことを露骨に表す鬼灯の棒読みに呆れつつも、狛治は追加のマタタビをバケツで持ってきて手渡ししてくれた。

これ、狛治も雑こじつけ面倒くさがってますね。

* * *

「このは『送相^{てつそうあつしよ}圧処』。

親兄弟親戚縁者などが争っているときに、自分の身近な者が得するように嘘をついた者が堕ちる地獄です。

罪人に騙されたものたち、本人の時もあれば野干などが化けた偽物が出現し、罪人の肉をはさみで切り取って口の中で噛んで苦しめます。ちなみに、切り取られた肉片にも感覚があります」

「この獄卒、鬼殺隊の歴代お館様じゃないですよね？」

思わず無惨の「黙れお前」な抗弁より先に、狛治が素で訊いた。落ちる罪状といい、呵責の内容といい、少なくとも今日の呵責に彼らが参戦しない理由はないと思っただのだろう。

「残念ながら、違います。ご本人たちはぜひとも行いたかったそうで

すが、奥方や隊士の方々が『おそろく永遠に切り刻み続けて終わらないからやめてくれ』と説得したもので」

幸いながら、狛治の案じた事案は狛治が心配した理由と全く同じ内容で既に説得済みだった為、杞憂で終わった。

呵責が終わらないのも問題だが、正直言つて狛治は何故この一族から無惨が生まれた？　と思うほど穏やか温厚一族な産屋敷歴代当主が、無惨との血のつながりを唯一感じさせる闇の深さが全面に出るであらう呵責の光景を本気で見たくなかったので、心底安堵する。

「けど、そうなるか誰が呵責するんですか？」

無惨の「私は親類でも他者が得するようなことを言わない！」と、堂々と言うべきではない理由で無罪を主張する口にペッパーXを放り込んで塞ぎながら芥子が尋ねる。

「罪を償ったり、元々処罰対象ではなかった無惨の鬼だった方々で希望する方にしてもらうことにしました。認めたくないでしょうが、あいつの鬼ということは一時的とはいえ文字通り血が繋がっていたという事でしようし。」

なので、狛治さんもしたいのであればぜひどうぞ」

しれつと答えて狛治にはさみを渡す鬼灯。

渡された狛治は、無惨自体に別に恨みはないのと、呵責内容が自分のトラウマなので参加せず、遠い目になって他の元鬼たちの生き生きとした笑顔を眺めつつ思った。

またしても、無惨をここに墮獄させる雑こじつけを鬼灯はしなかったなあ、と。

ここまで理不尽な墮獄にクレームがつかない無惨が凄すぎる。

『金剛嘴烏処』です。

墮ちる罪状は、病気で苦しむ人に薬を与えと言つておきながら与えなかったこと。刑罰は金剛のくちばしを持つカラスが罪人の肉を喰う。喰い尽くされると罪人は復活し、また始めから喰われます」

「この地獄にあの医者落とせ!!」

「それは正直言つて同意ですが、お前もここにストレートに落ちるわ

!!

今回は無惨の血は薬どころか最悪の毒であったことを理由に落とせる地獄だったので、無惨の突っ込みに激しく同意しながらジャイアントスイングで鬼灯は無惨を空中に投げつけ、カラスの金剛のくちばしにダイレクト投入。

カラスにとつて迷惑だからやめてあげろ。

* * *

「こちらは『火鬘かまんしよ』」。

祝い事の最中に法を犯しておきながら、しらを切った者が墮ちる地獄で、獄卒が鉄板と鉄板の間に罪人を挟み、くり返しこすって血と肉の泥にしています。

まあ、こいつの事ですから正月でも何でもどつかで法は犯していたでしょうから問答無用で落とします」

『祝い事の最中に法を犯す』ってそういう意味じゃないだろ！ こじつけが雑過ぎるわ！」

雑くてもこじつけをするだけマシなことにたぶん気付いていない無惨が、未だ元気にぎゃんぎゃん喚いて抗議して抵抗するが、元が病弱な人間なので鉄板に挟まれたらそれだけでもう動けない。

そしてトドメにその鉄板は上から踏みつぶされる。

縁壺HEL式に。

「また出た!？」

「ここでも腕の意味がまるでない!!」

「もうこの大きさを活かすことにしました」

縁壺HEL式、もう既に持て余されていた。

* * *

『受鋒じゅほうくしよ苦処』。

布施しようと言っておきながら布施をしなかった者、布施の内容にケチをつけた者が墮ちます。刑罰は嘘をつくことはおろか泣き叫ぶこともできないように、獄卒に熱鉄の串で舌と口を刺されることです。

ここの墮獄理由は……狛治さんへのパワハラってことにしましよ

うか。柱である煉獄さんを殺した報告を無碍にして責めたててしまったので」

「鬼灯様、わがままでしょうがそれを無惨様の罪にすると俺が罪悪感で死にそうなんですが……」

「それもそうですね。すみません。配慮が足りませんでした」

鬼灯の挙げた墮獄理由に、狛治はさすがにやんわりとだが「勘弁してくれ」と抗議する。

別に嫌味とかではなく煉獄本人がまったく気にしていないので、うっかり鬼灯も狛治のしたことや彼自身の自罰意識を忘れていたように、彼は素直に非を認めて謝罪。

「まあ、別に狛治さんに限らず似たようなパワハラをし続けの千年ですから、とりあえず串を刺しましょう」

「そうですね。玉壺が刀鍛冶の里を見つけたという報告をした時もまさしくパワハラでしたし」

狛治にしたことは狛治の為に無罪にしても、余罪がありすぎるので他の雑こじつけをするまでもなかった。

なお、無惨が静かなのは「狛治にパワハラ」と鬼灯が言った時点で、彼に対しても割とシンパシーを感じて結構好意を懐いている芥子がキレて、さっさと率先して無惨の舌と口に串を刺しまくっているから。

その事に鬼灯と狛治が気付いた時には、もう無惨の口と舌は剣山状態だった。

* * *

『受無辺苦処』です。

船長でありながら海賊と結託し、船に乗っている商人達の財産を奪った者が墮ちる地獄で、熱鉄の金箸で舌を引き抜かれますが、いくら抜いても舌は再生し、そのたびに抜かれます。さらに目を引き抜いたり、刀で肉を削られたりもしますね」

「船長だったことなどない!!」

「でしようね」

どこの小地獄にも一つはある、落ちる罪状がピンポイントすぎる謎

地獄の一つに無惨がいつもの突っ込みを入れて、これには素直に鬼灯も認めて同意する。

まあ、この地獄の場合はイザナミ様が眠かったからではなく、ただ単に時代の変化で今になって見ると妙にピンポイントになってしまっているだけなのだが。

「これは……貿易商の社長のフリしてたんですから、もうそれで」「お前せめて現代に合うように解釈した罪状を語れ!! あとあくびもせめて少しは隠せ!!」

なので今回、眠かったのはイザナミではなく鬼灯の方だ。大叫喚は特別地獄が二つある為、本来ならここで終わるはずなのにまだ終わらないので実は結構、鬼灯は疲れていたのかもしれない。

それでも無惨の舌をひっこ抜くのも目を抉るのも肉を削るのも、狛治や芥子、他の獄卒たちだけに任せず率先して自分も参加するのはただのワーカーホリックか、それとももつとただ単純に興味だからなのかは、知らない方がきつと幸せだろう。

* * *

「さて、ここからが最初に説明した追加の特別地獄。これら二つの地獄は言ってみれば権力者の地獄です。なんというか……そういう立場の汚職は一種の職業病なんですかね? どの時代にも一定以上は必ずいるので隔離したのがこれらの地獄です。

まず特別地獄一つ目が、『けつすいじきしよ血髓食処』。

王や領主の地位にあつて税物を取り立てておきながら、まだ足りない嘘について多くの税を取り上げた者が堕ちます。

刑罰は黒縄で縛られて木に逆さづりにされた上、金剛のくちばしのカラスに足を食われ、罪人は流れてきた自分の血を飲むことです。

あー、自分の血をむしろ部下の鬼に無駄に取り上げられたっていう面白みがない言い分は聞きませんよ」

やっぱりマジで眠いのか、それともただ単に聞き飽きた自己弁護に本気で飽きていたのか、無惨が喚く前に鬼灯は無惨を逆さづりにする。

黒縄ではなく、無惨自身の腸を使って。

「鬼灯様！ 呵責内容が違う！ クレームは来ないでしょうけど、意味もなく拷問内容をグロくしないでください!! これ地獄の住人以外も見る人がいるんですよ!!」

* * *

「そして最後かつ特別地獄二つ目、『じゅういちえんしよ十一炎処』」。

この地獄は名前の通り、まずは10方向から炎が吹き出して罪人を焼き、罪人の体内から11番目の炎が生じて口から吹き出し舌を焼くという地獄です。

墮ちる罪状は……………!!」

名前が呵責の内容をわかりやすく表している地獄なので、珍しく呵責内容の方を先に説明してから罪状を説明しようとした瞬間、何かに鬼灯は気付いて目を見開き、そしてそのままなんと崩れ落ちるように地面に膝を屈してしまう。

「!? 鬼灯様!?!」

「ど、どうしたんですか鬼灯様!?!」

鬼灯の何らかの大きなショックを受けたような反応に、狛治と芥子が困惑しながら駆け寄る。無惨も色んな意味で常に余裕、余裕がなければないで傍若無人な鬼神がこのような反応をするのは青天の霹靂過ぎて、ポカンと眺めることしか出来なかった。

そんな周囲の心配や困惑に気付く余裕もなく、鬼灯は「……………しまった。事前に確認しておくべきでした……………」と酷く何かを悔やむ独り言を呟き続ける。

「どうしたんですか、鬼灯様！ 一体何があつたんですか!?!」

他者を思いやる狛治が本気で鬼灯を案じて泣き出しそうな声音で尋ねている事によく気付いたのか、鬼灯はまだ立ち上がれないままだが、それでも一縷の希望で誰かのフォローを信じてか、彼は気付いてしまった自分の過ちを語る。

「……………狛治さん。私は大きな間違いを犯しました。これはさすがに、事前に話し合っておくべきでした」

「い、一体何のことですか？ 何があつたんですか!?!」

「……………狛治さん。この十一炎処に落ちる罪人は……………王、領主、長者

のように人から信頼される立場にありながら、情によって偏った判断を下した者なんです」

鬼灯がようやく語った「己の間違い」に、狛治のみならずその場の全員が一拍ほど間を置いた。

『……!?… しまった!!… こじつけようがない!!』

「悪かったな!!… 情がなくて!!」

一拍間を置いて、獄卒たちは皆鬼灯と同じようにその場に崩れ落ちて叫び、流石に自分が無情の人でなしなことは自覚があったらしい無惨が開き直りつつキレた。

だが無惨はやはり頭無惨でまだ甘い。獄卒たちがこじつけようがなくて嘆くほど無惨にまったくくないと思っっているのは、「情によって偏った判断を下した」という部分だけではなく「信頼される立場」という部分もだ。

「む、無惨様が偏りまくった間違った判断を下すのはいつもの事ですから、それを理由に……」

「おいコラ、猥窩座あつっ!! 百歩譲って偏りはともかく私が一体いつ間違った!?!」

「いえ、こいつは最低すぎてだからこそどのような呵責にもクレームがつかない逸材です。だからこそ、この地獄に墮とすことこそが、逆説的にこいつが『信頼される立場』であったことや『情で偏った判断を下した』と思われるかもしれないかもしれません!!」

「そういう理由で嘆いていたのか、闇鬼神!!… というか、何故『信頼される立場』も否定してるんだお前は!!」

狛治がなんとかこの地獄に落とす理由を絞り出すのが、鬼灯はそもそもここに墮獄すること自体が無惨の評価を上げてしまうと主張し、狛治は黙るしかなかった。もちろん、説得力皆無、己を全然わかっていない無惨の主張は全力で無視された。

「……仕方がありません。認めましょう。ここは、ここだけは間違いなく無惨は無関係です。奴が落ちるいわれはどこにもありません」

そしてふらつきながら鬼灯は立ち上がり、血を吐くような声で「無惨はどうせ全地獄の罪状をコンプリートしている」という当初の

主張を撤回した。

ようやく自分の「墮獄するいわれはない」という主張が通ったのだが、当たり前だがその理由は「自分がクズ過ぎてここに墮獄したら逆説で評価が上がるから」なことに無惨は不服そうだ。

しかしその不満は即座に吹っ飛ぶ。

「なので、墮ちる理由はないですけどどこいつを墮とします」

「何がどうなってそうなった!?!」

まさかの墮ちるいわれがないことを認めた上で、理不尽全開に墮とすという宣言に思わず罵倒を忘れて素で突っ込む無惨。

「いやだって、墮ちる理由はなくとも墮とさない理由はもつとないですよ。」

あなたをあの罪状で墮とすのが問題なのであって、こここの呵責を受ける理由にあの罪状は無関係だと明言すれば、ここに墮獄するのは何の問題もありません。

という訳で、逝け」

先程までのマジ嘆きはどこへやら、もういつも通りの無表情とローテンションに戻った鬼灯がしれっと無惨のパワハラ以上に理不尽だが、無惨の自業自得で筋が通りすぎて誰も文句のつけようがない理屈を作りあげ、無惨をそのまま足で蹴り落とした。

流石に鬼灯ほどさっさと切り替えが出来ない獄卒たちはポカンとそれを見送ってしまったが、比較的鬼灯に慣れている狛治と芥子はさっさと回復して、次の準備、今回の動画のオチとして最初に鬼灯が朗読した「カチカチ山」の再現のために使う芥子味噌を用意に移る。

もちろん、使われている芥子はペツパーXだ。

この為だけに墮ちるいわれがないと認められたのに墮とされた無惨に同情は、当然なかった。

「凄くにぎやか!! お疲れさまでした!!」

後悔がないと言えば嘘になる。

自分の心をもっと強ければ、カナヲを傷つけず、片目の視力も落とさずに済んだかもしれない。

もっと自分が強ければ、そもそも無惨に取り込まれることもなく、仲間や妹を傷つけずに済んだかもしれない。

もっと強ければ、もっと上手くやれていれば、行動に移すのが、判断が早ければ……一つでも多くの命を救えたかもしれない。

……家族だって、助かったかもしれない。

過去の事だけでも後悔は山のようにあるのに、未来に目を向けても見苦しいくらいに望みが沸き上がる。

家族を喪って始まった自分の旅路の先で、喪った家族と比較しようがない、どちらも唯一無二の愛しい家族を得た。

その家族と、ずっとずっと一緒にいたかった。ずっと守ってやりたかった。ずっと笑い合っていたかった。

家族だけではない。大切な、誰よりも何よりも信頼できる仲間を、友人も得た。

彼らのおかげで、生きてこれた。

彼らがいたから、この幸せはある。

だから……後悔は山のようにあるけれど、死にたくなてないけれど、まだまだ生きていたいけれど……、幸福な終わりであることに間違いはないから。

だから、竈門 炭治郎は満足そうに微笑んで永遠の眠りについた。

* * *

「……ごめん。……ありがとう」

泣き声が聞こえる我が家に、炭治郎も泣きそうになりながらも先に逝くことに対する謝罪と、そして今までの全てに対しての感謝を告げ、背を向けて歩く。

自分が死んだことはわかっているが、その後はどうしたらいいのかはわかっていない。

けれど、ここにはいられない。

幸福な終わりだと思っただけで、満足して納得して人生を終えたけれど、それでも家族が、友が自分の死を惜しんで悲しんで泣くのは耐えられなかった。

幸福なのに、満足しているのに、納得しているのに、それでも決して失えない「まだ生きたい、皆といたい」という気持ちが溢れ出してしまいそうだったから、炭治郎はトボトボと家から離れて行こうとした所……。

「竈門 炭治郎ね？」

「え？」

唐突に神々しい光が辺りに満ち、自分の名を確認される。

炭治郎が顔を上げると、系統は違うが珠世と同じくらい艶やかな美女がいた。

しかし当然、その美女がただの美女であるわけがない。

幽霊になった自分へ話しかけている時点でそれは当たり前だが、その美女は金色に輝く雲に乗っているのだから、炭治郎はしばし絶句してから呟いた。

「……神……さま？」

「うーん、まあそんなところね。特に今は。」

自分が死んだ自覚があるのならわかると思うけど、あたしはあなたを迎えに来たの。あなたは死後の裁判なしで天国行きが決まっているから、こうやって神々しく迎えに来たわ。

もつと徳のある人だったら如来とか菩薩とかが来るんだけど、あなたはさすがにそこまでではないから、神様のな存在はあたしだけなんだけど……まあ、あなたなら間違いなく菩薩や如来よりこっちがいいわよね？」

そうとしか思えない存在を口にすれば、美女は厚い唇に指先を当てて小首を傾げながら答える。

その仕草や答え方が、いっちゃ悪いが乗っている物や輝く薄物の神々しさを半減させて、炭治郎から緊張感を良くも悪くも抜いた。

だから彼はいつも通りの、ちよつと距離感が近すぎるくらいの人

懐っこさを發揮して「俺はそんな大した奴じゃないですよ。だから、菩薩や如来が来ないのは本音でホツとした」という感想を言おうとした。

言うつもりだった。

金の雲から神様以外の誰かが飛び出て自分に抱き着いた瞬間、そんな感想は彼方に吹っ飛んだ。

「兄ちゃんー！」

「お兄ちゃんー！」

「会いたかった！ 会いたかったよおっつ!!」

「うああああああんっつ!!」

雲から飛び降りて抱き着いて来たのは、4人の子供。

その子供たちは泣きながら、炭治郎にしがみついて離れない。

そして炭治郎は彼らを見下ろし、唇を戦慄かせた。

「竹雄……花子……茂……六太!!」

それはあの寒い冬の日、身勝手な戯れで奪われた幸福。

愛しい家族。

禰豆子以外の弟と妹たちが泣きじやくりながら、抱き着いて自分の再会を喜んでくれていたのを、炭治郎は目を丸くしてただ見下ろしていることしか出来なかった。

「炭治郎」

自分の弟と妹たちを見下ろしていた顔が跳ねるように上がる。

柔らかくて優しい声。

カナヲや禰豆子と同じくらい守りたいのに、二人と違って甘えたい、自分の弱音を全てさらけ出してしまいたいくらいに、心の全てを預けることが出来る声音。

「頑張ったわね。さすがはお兄ちゃん」

「……………母さん?」

儂げな笑顔で、今にも零れ落ちそうなくらいに涙を両目に溜めて、それでも息子を誇るように、褒めるように母親の葵枝さえは笑った。

「そうだな」

そして母の言葉に同意しながら、炭治郎の頭に手を乗せる。

そのまま優しく、くしやくしやと癖と赤みが強い髪をかき混ぜるよ
うに撫でて彼は言った。

「彌豆子を守って、そして約束も……受け継いだものを為すべき結果
にまで導いてくれたんだな。

ありがとう。炭治郎」

生前の、優しいがどこか寂しげだった、何かを後悔しているように、
悔しがっているようにも見えた笑みではない、嬉しくて嬉しくてたま
らないと言わんばかりの笑顔を見上げ、ついに炭治郎の涙腺が決壊す
る。

「……父さん!!」

手を伸ばす。

その手が、あの日失ったはずの、形だけは取り戻したが木乃伊のよ
うに干からびた左手が動く事も、両目が同じくらいはつきり見えてい
る事も気付かぬまま炭治郎は、兄弟ごと両親に手を伸ばして抱き着
く。

「父さん！ 母さん！ ああああああああつっ!!」

そのまま、弟や妹たちと同じように泣きじやくった。

自分がもう既婚者で子供もいる年であることも、肋骨が折れても目
がつぶれても腕を失っても耐え続けた長男であることも忘れ、そして
それを許すように姿が変わる。

まだ幼さが色濃く残る少年の姿に。

本当に幼子にまで戻ってしまわないのは、そこまで戻ってしまえ
ば、まるで自分が歩んできた道とその先で得たものを否定しているよ
うに思えたから。例え一時でも、失いたくないから。

家族を喪ったからこそ、出逢った人たちの事だつて失いたくないか
ら。

だから炭治郎は、両親に甘えることが許される、一番弱音を吐きた
かった頃の姿に、15歳の頃に戻って、ただひたすらに泣きじやくつ
た。

「うん……うん……」

「うん……炭治郎はよく頑張った。だから今はいくらでも泣いていい

し、甘えていいからな」

ただひたすら、赤子のように泣く我が子を両親は抱きしめて、背中を撫でながら慈愛そのものの微笑みを浮かべ、彼らも泣きながら告げる。

彼が歩いてきた道を、築いてきた今までを、守り抜いた全てを讃えた。

「うん。炭治郎。頑張った。偉いぞ。

そして、本当にありがとう」

両親に抱かれて、もう自分は嬉しいからなのか、それとも昔の悲しみを思い出して泣いているのかもわからなくなっている炭治郎の頭を、誰かが撫でる。

その撫でる手の優しさとふわりと香った感謝の匂いが少しだけ、家族との再会でいっぱいになっていった炭治郎に周りを見せる。

自分を撫でていたのは、自分にも父にも似ている男性。

知らない人のはずなのに、それは間違いなく知っている。その人の感謝も、恩を返したい、あの人の虚無を、悲しみを晴らしたいと願い続けた想いも、全部知っている。

「炭吉……さん？」
すみよし

自分の名を呼ばれて、炭吉はきよとんと目を丸くする。

しかし炭治郎は申し訳ないが炭吉に何故、自己紹介される前に彼の名に気付けたのかを説明をする暇などなかった。されてもたぶん、困っただろうけど。

それよりも、本当に申し訳ないが彼の肩越しに見えた人に全部持つていかれた。

「!? 縁壺さん!？」

炭吉からだいたい離れた後ろで、所在なさげに立っていた人。

あまりに多くのものを天から与えられたのに、その与えられたものは何一つとして彼を幸せにはしてくれなかった。

それでも、たくさんものをたくさんの人に与え、残し、そして生き抜いた人。

悲しい目をしていただけ、炭吉との別れの日、彼が残したもの

を受け継いで、いつか必ず成し遂げると伝えた時、幼子のように屈託なく笑った人。

炭治郎に呼ばれて、俯いていた顔が上がる。

縁壺も名乗るより先に自分の名を言い当てたことに、驚いたような顔をしていた。

きよとんとした目には、申し訳なさそうな悔恨が未だ消えずにあった。けどもう、悲しみはない。

その事に気付き、炭治郎は笑って伝えた。

「縁壺さん！ その、あの、えーと……あ、ありがとうございます！」

剣舞を見せてくれて！ 耳飾りをくれて！ あと、えーと、その……」
伝えたいことはたくさんあったはずなのに、いざ本人を前にしたらその伝えなかったことはほとんど吹き飛び、炭治郎は自分でも何を言っているのかわからなくなる。

本人がそんな状態なのだから、縁壺はなおさら訳がわからなかっただろう。

「けど……、縁壺は……」

「……礼を言うのは、私の方だ」

きよとんとしていた眼が次第に細まり、彼は歩み寄って告げる。

「ありがとう、炭治郎」

託したつもりはなかった。むしろ、この自分が欲していた形そのものである家族が、鬼に関わらないで欲しいという祈りを込めて見せたものだった。

母が自分にくれたように、彼らは健やかに、穏やかに、幸せになって欲しいという願いを込めて譲ったものだった。

だから、縁壺は言葉にする。

炭治郎の手を握り、心からの言葉を。

「幸せになってくれてありがとう」

自分が果たせなかった無惨の討伐に対する感謝はもちろんある。

けれど、それ以上に伝えたかった感謝は彼が満足して、納得して、幸

福だと言い切れる人生を歩んだこと。

自分と関わったこと、自分が無惨を倒せなかったことが彼らの悲劇の元凶であるという認識は、きつと誰に否定されても縁壺自身が否定できない。

それでも、この少年はたくさんものを喪いながらも、その喪ったものと同じだけ愛しく尊いものを得て、そして幸福になってくれた。

その事を感じしながら、縁壺は笑った。

炭吉に最後に見せた時と同じ、屈託のない笑顔だった。

縁壺の笑顔が初めは理解できず、炭治郎も少し前の縁壺と同じようにきよとんとしていたが、じわじわと彼の笑顔は、言葉は、自分の幸福がこの人の救いとなったと理解して、炭治郎の目から再び涙が零れ出る。

今度はどういった感情からの涙かは、はっきりとわかっている。

嬉し涙を流しながら、炭治郎は「縁壺さんのおかげですよ」と答えた。

彼の全てに意味はあったと、言い切った。

「その通りだぞ、縁壺殿！ あなたは高潔だからこそ謙虚が過ぎて卑屈になっている所が多々あるな！ 竈門少年が断言したのだから、いい加減自分の功績を認めるべきだ！」

「!!」

そしてまた新たな声音、喪つてもいつもいつだって挫けそうな時に心の火を灯し続けてくれた人の声が響き、炭治郎は頭をまだしがみついている弟達を申し訳ないがちよつと両親に預け、縁壺の後ろを覗き込む。

「れ……煉獄さん!!」

「久しぶりだな、竈門少年！」

まず最初に目に入ったのは、自分に鬼殺隊として、兄として、人として、ありとあらゆる指針となってくれた煉獄が、生前と同じように腕を組んで胸を張って威風堂々と立ち、そして明朗快活に笑いながら再会を喜んでくれた。

「わーい！ 炭治郎くんだー!!」

「御仏よ……。ご慈悲に感謝します……」

「な、何でもうこつちに来てやがるんだよ！ 嬉しくねーから帰れ!!」

「玄弥、有一郎兄さんみたいなこと言わないでよ」

「気持ちばかりですが、鬼灯さんに怒られますよ」

「実弥、小芭内、義勇、どうしたんだい？ 早くこちらにおいで」

「……お館様、俺はここで迎えに行けるほど竈門と親しくなければ、はつきり言っただけ嫌われるような言動しか……」

「……っていうか、俺らより何でお前がしり込みしてんだ、冨岡あああつ!!」

「げ、元気だったか？ いや、死んだからこそ今なのだからおかしいな。久しぶり……。というほど久しぶりか？ もっと遅く来い？ 出来るのだつたらそうしたかつたはずだろうが！」

「……まだ最初に何を言うべきなのかを悩んで練習中なのか、お前は」その直後、彼の背後から蜜璃がこちらも再会に感涙しながら駆け寄り、背後にいたが全く隠れきれいでいなかった悲鳴嶼も同じように涙を流して喜んでくれていた。

そんな彼らとは対照に、玄弥は涙を拳で拭いたのか真っ赤になった目で炭治郎を睨んで怒鳴りつけるが、無一郎が指摘してしのぶが同意するまでもなく、それは炭治郎が大切だからこそその強がりと願いであることは明白だ。

そして炭治郎には見覚えのない、少女と見まがわんばかりの美しい少年が実に耳障りのよい声でまだ雲の中に隠れている3人を呼ぶ。

不死川の発言でその少年がお館様だと判明した所で、隠れていても仕方がないと思ったのか、炭治郎とあまりいい関係ではないと思っっている二人が、自分の口下手を克服しようと努力していた義勇を引きずり出して雲から降り立った。

「え？ あ、えつと、あれ？ は？ へ？ ほ？」

結果、炭治郎が困った。

両親たちと同じくらい会いたかった人達が同時に勢ぞろいした為、誰からどんな反応をすればいいのかわからなくなって完全に混乱した顔で、腕や視線を周囲に彷徨わせてキョドっている。

「ああ！ 炭次郎君が凄く戸惑ってる！」

「……やっぱり一人ずつ間を置いて出て来るべきでしたね」

「うん、炭治郎ごめんね。あと、実弥たちも急かしてごめん」

そんな炭治郎の状態に蜜璃が気付いて謝り、しのぶとお館様が少し遠い目で自分たちの失敗を反省。

他の者達や竈門家、縁壺はそれぞれ微笑ましげやら申し訳なさそうやらな顔をしつつ、炭治郎を宥めて落ち着かせて混乱を鎮めようとしていたのだが、長男を弟にした鬼殺隊の長男はどこまでも善意で空気を読まなかった。

「どうした、竈門少年！ いきなり出てき過ぎてビックリしたか!?

なら、ある意味丁度いいな！ 言いたいことはゆっくり整理して、今は感謝の言葉を聴いたらいい!! 縁壺殿以外にも、君に礼を言いに来た者がいるのだ!!」

「はーっ」

「!? ちよっ！ 煉獄さん!?

「お前、まさか今ここであいつを!?

「杏寿郎、ちよつと待ちなさい。君も落ち着こう」

本心からの完全なる善意で、煉獄は訳のわからない提案をしてきて炭治郎の困惑は納まるどころか深まる。

しかし彼が何をやらかそうとしているのか察している鬼殺隊連中はもちろん止めるのだが、これと決めたら一直線な煉獄はお館様の言葉すら耳に入らず、実はまだ雲の中に残っていた者を呼び寄せる。

「狛治！ 待ってないで出てきて先に伝えたらどうだ!? 猗窩座から狛治に戻るきつかけになつてくれたことの礼を伝えるのだろう!!」

「せめて今ここで俺を猗窩座だとばらすな、杏寿郎おおっつ!! 知らない奴に礼を言われるよりも絶対に炭治郎が混乱するだろうが!!」

金の雲から飛び降り、殺した側という罪の意識をこの時ばかりは投げ捨てて狛治は割と本気で煉獄の頭をどついた。というか、本気を出さないと煉獄の頭など冗談でもどっけない。

そしてその暴挙は当然、誰も咎めない。狛治の言う通り、流れる勢いで色々暴露され過ぎて炭治郎は情報を整理しきれずに完全に硬直

してしまつたのだから、煉獄はちよつともう一回滅式をくらつた方が
良い。

「あらあら。大変ね〜」

「いや、見るだけじゃなくて止めてくれませんか茶吉尼さん」

「いやよ、面倒くさい。そんなこと言うなら、あなたが止めたら」

「そうですね。面白いのもう少し後で」

しかし文字通り雲の上で高みの見物をして面白がっているあの世
の役人は、煉獄以上に滅式どころかかキノカミ神楽でも決められるべ
きだろう。

『鬼灯・様・殿・さん!! 面白がってないで何とかしろ!!』

混乱の真つ最中、そんな風に怒られる鬼を炭治郎は見た。

それが、鬼灯との出会いだった。

* * *

炭治郎が死んだその日、閻魔庁の法廷では宴会が行われた。

何言っているかわからないと思う。炭治郎本人が一番よくわかっ
てない。

「すみませんね、炭治郎さん。あなたの生前の関係者だけではなく、獄
卒たちもぜひともあなたに会いたい、無惨との戦いに対して礼を言
いたい、語りたいという者が多すぎて」

「あ、いえ、きよ、恐縮です」

訳がわからないまま金の雲であの世まで運ばれて、そのまま法廷で
宴会に突入。雲に乗り切れなかった生前に親しかった死に別れた者
や、あの世の住人である無惨とは無関係の鬼たちからもみくちやにさ
れていたのが少し落ち着いたところで、鬼灯がやっと現状の説明をし
てくれた。

「けど、いいんですか？ 俺は凄く光栄だし、ちよつと混乱したけど会
いたかった人に纏めて会えたのも嬉しかったですけど、……法廷で宴
会なんて」

「どうせ今日は仕事になりませんよ」

「そうそう！　なんとって無惨討伐の立役者である炭治郎君が来たんだもん！」

いやー、浄玻璃の鏡であの戦いを見てる時はどうなるかハラハラしっぱなしだったけど、本当に炭治郎君はよく頑張ったよー！」

「お前も見習って死ぬ気で仕事を頑張れ」

歓迎してくれる事は本心から嬉しいが、場所が場所なのでどうしても宴会を心から楽しめず炭治郎は改めて確認すると、溜息を吐きつつ答えた言葉に被せるように、悲鳴嶼さえ小柄に思える閻魔大王が彼の頭をわしやわしや撫でながら言った。

そして鬼灯の金棒フルスイングが顔面に直撃して倒れ伏すので、炭治郎の困惑は一向に納まらない。

「心配はしなくていい。すぐに回復するし、なにより大王はまったく気にしてない。あれは信頼し合っている者同士のじゃれ合いだと思っておけ。そうしないと、困惑しか出来なくなる」

そんな炭治郎にここ数年で学んだ鬼灯と閻魔大王とのやり取りに対する対処法を伝授するのは、お迎え時に最大の混乱を与えた元凶。

本人もその自覚があるからか言ってから苦笑する。

「なんというか……歓迎しているのに困らせてばかりですまない」「あかつ、狛治さんの所為じゃないですよ！」

謝罪する狛治についてうっかり鬼の名前で呼びかけるが、炭治郎は本心からフォローする。

正直言って未だ狛治に対してはどういった対応をすればいいのか、炭治郎はわかってない。彼はもう罪を償っている事は鬼灯から教えてもらったし、最大の被害者である煉獄本人がまったく気にしていないどころか親友扱いであること、そして何より炭治郎の鼻が狛治は心から自分が犯した罪を悔やんで反省し続けている匂いを嗅ぎ取っている為、炭治郎も別に狛治に対して悪感情は懐いていない。

だが、いくら反省しているとはいえ鬼の頃の罪をもう償えている事が素で疑問だった。

そして煉獄本人が気にしていないのは、彼の性格を少しでも知っていたら納得できるのだが、他の鬼殺隊が全く狛治に対して反感を抱い

ている様子がないのも不思議だ。

鬼に対して強い憎悪を懐いていたはずの不死川やしのぶは、嫌ってはないが特に親しいわけでもない、知人くらいの距離感なのはまだわかるが、同じく過激なほど鬼を嫌っていた伊黒は煉獄の一方通行気味な友情に困惑している狛治を庇ってやるなど、割と仲が良さそうなり取りをしていたのが、また更に炭治郎の疑問を深める。

なので人を和ませて癒すのが得意だが、空気自体は一切読めない炭治郎はダイレクトに訊く。

「ところで、狛治さんと鬼殺隊って何か和解するきっかけがあったんですか？」

「ありました。見ますか？ 狛治さんの過去」

『やめろ!!』

狛治への質問をまだ閻魔大王に金棒をグリグリ押し付けてた鬼灯がサラツと答えて、法廷の端に移動させていた浄玻璃の鏡を指さした。

その鏡に対しての疑問や、狛治の過去を見るかどうかの炭治郎の答えより早く、亡者と獄卒のほぼ全員が異口同音の大合唱。

「やめろ馬鹿野郎！ 宴会の席で見せるもんじゃねえだろ!!」

「法廷が涙で沈みますから、やめてください!!」

「っていうか狛治君の過去って言われただけで、空気がお通夜状態になってる人がいる!!」

「お通夜どころか既に伊黒さんが泣いてる!」

「泣かないで、小芭内ー!」

良くも悪くも穏やかすぎる性質の閻魔やお館様にまで命令形で止められ、そして鬼殺隊や獄卒たちから非難轟々だったのでさすがに鬼灯も、「そうですね。わかりました。後日にします」と素直なんだかしつこいのか微妙な所だが、ひとまずこの場で上映はやめてくれた。

周囲の反応になおさら「狛治さんに一体何が……?」と炭治郎は困惑するのだが、それよりも狛治本人が更に申し訳なきそうになって、「なんか本当に本当にすまない……」と土下座で謝りだすので、炭治郎は慌てて話を変えることにする。

「あ、え、えーと、あ！　そ、そうだ！　あの、皆さんに俺、お礼が言いたくて！」

あの、俺が無惨に鬼にされて、薬の効果で人間に戻るか鬼になりきってしまうかって所で、皆が助けてくれましたよね！　あのお礼を……って、何で皆また土下座するんですか!?!」

話題をとにかく狛治から逸らそうと思いを走らせた結果、無惨の迷惑すぎる置き土産を破棄して人間に戻れた時の事、それは生者だけではなく殉職した彼らの手助けを思い出したから、その礼を告げようとしたら何故か土下座が増えた。

「……炭治郎。なんというか……本当に余計なことを無惨に言っただけ。お礼を言いたくない。まさかあんな土壇場で、違うそうじゃない託すな死ねとしか言いようがない改心をするとは思わなかったんだ。」

もうそれだけでも申し訳なさ過ぎてもう一回自爆したいくらいだが、その後も本当にすまない。ごめん。本当にごめん」

「お館様、本当にどうしたんですか!?!　って言うか、もう一回自爆って何!?!」

何故かお礼を言いたい対象の人物たちが土下座で謝るだけでも炭治郎からしたら訳がわからず、恐縮と困惑の極みだが、最前列かつ代表として土下座で謝罪しているのがお館様なので、もう謝られている炭治郎が泣きそうである。

「た、炭治郎！　大丈夫だ、落ち着け！」

「お館様！　誠意はわかりましたというか誠意しかわからないから頭を上げてください！　つーか、もっかい自爆って本当に何のことですか!?!」

そして訳わからず困惑しているのは炭治郎だけではなく、最終決戦で生き残った義勇と不死川も同じく何が何だかさっぱりなので、もはや泣く寸前の炭治郎を宥めつつ土下座をしている者達に説明を求めらる。

だが、不死川の要望通り頭を上げた耀哉は不思議そうに小首を傾げて訊き返す。

「？　義勇や実弥がわからないのは当然だが、炭治郎は本当にわかっ

てないのかい？ あの時は魂そのものも朦朧としていたから、よく覚えていないのかな？ あと、自爆は忘れて欲しい」

「あの産屋敷家妻子もろとも爆発四散は無惨の攻撃じゃなくて、この人の自爆ですよ。」

炭治郎さんに関しては何も覚えていないというより……もしかして見ていたものが現実とは違っていたのかもしれないね」

知らせたら無惨と同じく「妻子同意してんの!？」としか思えないので、全てが終わっても輝利哉がわざわざ隊士たちに教えなかった自爆をサラッと鬼灯がばらしつつ、どうやら彼にとっても炭治郎の反応は不可解らしく、鬼灯は再び浄玻璃の鏡を指さして炭治郎にまずは説明。

「あの鏡は現世の様子を過去を含めて見る事が出来るのですが、9枚の鏡で囲んで浄玻璃の鏡に亡者を映すと、指定した日時に考えていたことなどが文字、もしくは映像化されます。」

なので、炭治郎さんが良ければちよつとあの臨死体験というか奇跡体験といふかな当が見れますが、どうします?」

言われて炭治郎は一応胡蝶や玄弥などに「え？ 皆が俺に生きるように背を押してくれたんですよね？」と確認をとると、煉獄でさえ何とも気まずげな笑みを浮かべて肯定された。

炭治郎からしたら否定されるよりも訳がわからなくなってきたので、困惑したまま鬼灯の提案に了承。

そして9枚の鏡に囲まれた状態で、炭治郎は浄玻璃の鏡の前に立ち、まずは炭治郎視点の鬼から人へ、死の淵から生へと帰還する間際の出来事が映し出された。

* * *

『帰ってどうなる？ 家族はみんな死んだ。死骸が埋まっているだけの家に帰ってどうなる?』

『無意味なことをするのはよせ。禰豆子は死んだ。お前が殺したんだ』

『恨まれているぞ。誰もお前が戻ることを望んでいない』

『自分の事だけを考えろ。目の前にある無限の命を掴み取れ』

肉の中に埋まり、自分の体に寄生する無惨の言葉を否定し、拒絶し、炭治郎は必死で残された右腕を伸ばして生きようと、人として生きて妹の元に戻ろうと足掻き続ける。

無惨の言葉のほとんどはくだらないデタラメと、お館様の言葉を見事なまでに曲解した自分本位なもので、炭治郎にとって不快でこそはあったがそれは耳元の羽虫と同等の不快さであり、心に傷という形でも届くようなものではなかった。

ただ一つの例外を除いては。

『屑め。』

お前だけ生き残るのか？ 大勢のものが死んだというのに。お前だけが何も失わず、のうのうと生き残るのか？』

この言葉だつて的外れだ。

炭治郎はあまりに多くのものを理不尽に奪われたから、こいつが奪ったからこそその結果だというのに、それでも炭治郎はあまりに善良だからこそ、その言葉が彼の心を蝕む「もっと自分が強ければ」という後悔の棘を増幅させ、「生きたい」という思いに傷をつけて氣力を奪われる。

無惨の言葉を肯定しなくなかったが、「生きたい」とは言えなくなつてしまった。

だからこそ、その背を押した。

認識できた数は、7つ。

剣を振るい続けたとわかる手が、たくましいもの、嫺やかなもの、まだ小さい子供のもの、自分と同じくらいのもものが、炭治郎の背中を支え、押し上げる。

漆黒だったはずの空が淡い紫色に染まる。藤の花の中から、嫺やかな両手が伸ばされる。

一目でそれは、その桜色の丸い爪先は妹の……人間の妹の手であることに気付いた時、左目から溢れ出ていた涙の意味が変わる。

後悔と罪悪感、喪失感による涙ではなく、それらに酷く心が痛みながらも叫ぶ「生きたい」「帰りたい」という望みと、その望みは自分だけではない、待っていてくれる、望んでいる者がいることを知った喜

びの涙に溢れながら、炭治郎は妹の手を掴み、そして妹だけではなく自分が傷つけても、それでも妹と同じく手を伸ばして、信じて、望んでくれた仲間達の力を借りて、帰還した。

最後まで、炭治郎から完全に切り離されても無惨は見苦しく叫んで追いつがっていたのだが、とつくの昔に炭治郎は無惨の声など聞いてはいない。存在さえも、全く何の他意もなく忘れ去って彼は帰りたくてたまらなかつた幸福の元へと帰り着く……。

そんな自分の過去を鏡で改めて見返し、炭治郎はあの時の頃を鮮明に思い出して熱くなつた目頭の滴を指先で拭つた。

が、同時に鏡で自分の記憶を第三者に近い視点で見た為、今まで思つたことがなかつた感想が生まれてしまった。

(傍から見ると、結構怖い光景だ!!)

肉に埋もれて、自分の体から無惨が再生されるのは、もちろん気持ち悪くて思い返しも見返したくもない最悪の光景だが、本心から感謝している殉職した鬼殺隊の方々の助力や、禰豆子たちが藤の花の中から自分を引き上げてくれる所も、全部腕しか出てきていない所為で冷静に見ると普通に不気味な光景である。

ある意味無惨のおかげで腕は炭治郎を助けようとしているのがわかるのが、救いかもしれない。

無惨がいなければ、むしろ腕が炭治郎を地獄かどこかに引きずり込もうとしている悪霊に見える有様だ。

そんな風に当事者である炭治郎だけではなく、生き残りである義勇と不死川も思つたのだろう。

二人は炭治郎の帰還を改めて喜びつつも、ものすごく複雑そうな顔をしていた。

「へー。炭治郎にはこういうふうに見えてたんだ」

「……良くも悪くも、無惨以外の声はほとんど聞こえてなかつたようですね」

「鬼灯様、これがもう真実だということにして終わらせましょう」

しかし、あの世側の当事者であり土下座していた連中は、納得と感心と申し訳なさど気まずさが入り混じつた、炭治郎たちとはまた違つ

た複雑そうな顔で感想を言い合い、狛治はそのまま真実の方をなかつたことにしようとする。

「そんな訳にはいかないでしょう。炭治郎さんたちの謎を深めつぱなしじゃないですか。」

という訳で、炭治郎さん。こちらが実際に起こっていたあなたの復活劇です」

だが鬼灯は無慈悲なんだかある意味では慈悲だったのか、狛治の提案を却下しつつ浄玻璃の設定をいじって時を少し巻き戻し、囲っていた鏡を仕舞って完全なる第三者としての視点による映像を映し出した。

禰豆子や善逸、伊之助や隠達に囲まれて名前を呼ばれ、傷を負ったカナヲや義勇が祈るような顔で倒れた炭治郎を見つめている。

その横で行われていたのは……

『頑張れ竈門少年頑張れ頑張れ!! 泣くんじやないや泣いていい泣いてもいいからとにかく頑張れ生きろ無惨の声は無視しろ頑張れ!!』
『悲鳴嶼さん、来てもらってばかりで本当に申し訳ないですけど頑張ってお願ひします非力でごめんなさい!!』

『大丈夫だ任せろ足も復活しているから大丈夫大丈夫だきつとそうだ信じていますよ御仏えええっ!!』

『こっち来んな! 帰れ! さっさと帰れまだ来んな!! 今僕ものすごく兄さんの気持ちわかる!!』

『わかるわかる時透さん、スッゲー俺もわかる!! だから炭治郎さっさと帰れ頼むから!! 俺、お前も助けたいけど兄ちゃんの所にも行きたくないだよ!!』

『うわあああんっ!! 炭治郎君、死なないでーっ!! もっかい私の腕がちぎれてもいいから死なないでー!!』

『良いわけあるか落ち着け甘露寺! お前も甘露寺を泣かすな炭治郎! さっさと戻れ! 俺も泣きそうだから本当にもう帰れお前!!』

「凄くにぎやか!! お疲れさまでした!!」

とりあえず、炭治郎は皆が土下座で謝っていた訳を、この騒がしすぎるセリフの応酬だけで察して、彼らを労った。

どうやら炭治郎は本当に朦朧とした意識だった為、自分の復活劇は「皆が生きて帰ることを望んでいて手助けしてくれた」という部分しか認識できていなかったらしく、実際の光景はだいぶ違っていた。

まず、そもそも自分の背を押してくれていたと認識していた数と人物は当たっていたが、実は全員背を押していない。むしろ禰豆子達だと認識していた、自分の右手を引っ張る側が彼らだった。

背中を押されていたはずなのに人数と人物をはっきり認識していたのは、おそらくは無意識にこのあたりのことを覚えていたからかもしれない。

そして炭治郎は、端的に言うとう綱引きの綱状態だった。

しのぶの薬のおかげで分離しかかっていたが、無惨と炭治郎はまだ半ば同化したままだった為、無惨が死ぬと炭治郎もあの世側に引っ張られてしまうので、獄卒たちが無惨を、鬼殺隊側が炭治郎を引っ張って力づくで分離させようとしていたようだ。

手助けしてくれたのに何故かみんなが土下座で謝ったのは、無惨の曲解の巻き添えでしたくもないことをさせられた挙句に、一理もない発言に善良だからこそ傷ついて泣いていた炭治郎に対し、無惨の言葉を否定してフォロワーしてやるのではなく、皆が皆、最後の最後ということで変なテンションになって、ある意味では炭治郎本人の意思とか心境を丸無視して勝手にバカ騒ぎしていたことを、彼らも善良だからこそ申し訳なく思っていたからなのは多大にある。

……多大にあるのは確かだが、彼らが土下座した一番の理由は端的に言えば連帯責任。

『頑張れ竈門少年頑張れ俺も頑張るしお館様も頑張るから頑張れ!!』

『いや、むしろお館様はもう頑張らなくていいから! 誰か止めて!』

『産屋敷さん! 申し訳ないけど正直邪魔!! どいて! 無惨ボコるのは縁壺さんに任せてお願い!!』

『縁壺さん! お願い引く気持ちはわかるけど引いてないで、ちよつと産屋敷さんよけてこいつ切り離して!!』

『引いてるといっつか怯えてますね』

『その怯える一因はあんたでもありますよ、鬼灯様!! あんたも殴つてないで、産屋敷さんを引き離して!!』

「……………」

「ただでさえ長年の恨みが積もり積もっていたところに、私の発言が原因ということもあって頭に血が上ってしまった。大変申し訳ない」
殉職した鬼殺隊による炭治郎生還綱引きに関しては、シリアス返せとは思うがまだ微笑ましいものだ。

しかしその背後で行われていたお館様による無言でひたすら炭治郎の腰辺りから生えている上半身無惨を殴り続ける光景に、思わず生き残り3人はドン引き顔のまま確認のように耀哉に振り返ると、本人は再び綺麗な土下座の体勢になっていた。

やけに無惨が実際の光景では静かだと思っていたが、どうやら耀哉が自分の拳が怪我しようが全く気にせず顔面を殴り続けていたから、炭治郎の精神に直接語り掛けるしか出来なかったようだ。そしてこの光景を見ると、最後の縋りつきっぷりにはしたくもないが炭治郎も納得する。

無限城での戦い時点でそうだが、靈感が強い隊士がいたらカオスすぎる光景だっただろう。

浄玻璃の鏡で見た限り、炭治郎たちの傍らで行われるこの綱引きにも、お館様の闇の深さフルオープンにも気付いている様子の隊士はいないのが唯一の救いだと思ってしまう。

* * *

それから浄玻璃の鏡で無限城の戦いダイジェスト鑑賞会が行われたり、ヒノカミ神楽が獄卒から悪ノリでリクエストされ、縁壺と竈門一族が大真面目に行ったりするなど、カオスな宴会が続きに続いて時刻は夜の10時を回る頃。

「あゝ、飲み明かすのって『日本の伝統』って感じがするなゝゝ」
「因習ですよ。ほらほら、空気なんて読まなくていいですから、帰りました

「い人は帰りなさい」

もうだいたい前から出来上がっている大王のセリフをバツサリ切り捨て、鬼灯は手を叩いて解散のきっかけを作る。

忘年会などの飲み会ならもちろんもう少し早い時間にこのやり取りが行われるのだが、本日に限っては純粹に楽しんで帰りたいものがないなかった。

だが本日は仕事納めによる宴会でもない為、宴会参加者の大半は明日からも普通に仕事だ。なので名残惜しいが日付が変わる前に解散は賢明なので、鬼灯の言葉に甘えて従い、皆がそれぞれ食器などの最低限の片づけを行い、別れの挨拶を交わす。

「あの、鬼灯様！ 閻魔大王様！ 今日には本当にありがとうございます！！」

炭治郎もとつくの昔に弟や妹たちが睡魔に負けているので、家族と天国にあるらしい新しい我が家に帰るのは決定事項。

その前に、弟達は父母に任せてもう何度目かわからない祝宴を開いてくれた感謝を告げた。

大王は炭治郎の健気で礼儀正しい言動に、孫を見るような目で微笑み、「いいよいいよ！ わしたちがやりたかったからやっただけだよ！」と炭治郎の背をバンバン叩く。

「自分の体格を自覚しろジジイ。」

炭治郎さんも、文句は遠慮せずに言ってください。言っても無惨よりはマシン程度の学習力ですが、言わないと何も学びません」

その行動を鬼灯が金棒で殴って止め、相変わらず慇懃無礼全開に鬼灯は炭治郎にも諭すように言い、炭治郎は曖昧に笑って返答は誤魔化した。もう既に、狛治に教わった鬼灯と大王のやり取りへの対応を身に着けているようだ。

曖昧な苦笑をして、鬼灯の言葉に対する返答ではない話を始めた。応えにくい話を誤魔化す為ではなく、彼にずっと言いたかったことを彼は語る。

「それと……鬼灯様、ありがとうございます」

「？ もう何度も聞きましたし、宴会の発案は私ではなく大王なので

礼は不要ですよ」

「あ、すみません。そつちじゃなくて……」

炭治郎の再度告げられた礼に鬼灯は小首を傾げて返答するが、「そつちではない」と否定されて鬼灯の傾げる首の角度がさらに深くなる。

「あの、鬼殺隊の皆や獄卒の皆さんから話を聞きました。

無惨は現世の人間に任せてあの世は関与すべきではないって方針だったのに、鬼灯様は自分の立場が危うくなるのも覚悟の上で、無名城での戦いに支援してくれたって」

更に疑問を深める鬼灯に炭治郎も苦笑を先ほどまでとは別の意味で深め、答えた。

自分の礼の意味を。

言われたら鬼灯も理解できたが、それでも彼は素直に受け取りはしなかった。

「……ああ。それこそ気にしなくていいですよ。正直言って私達のこととは、自分たちの仕事を増やしたくないのと、今まで面倒事を受け続けた無惨に対する鬱憤晴らしが全容ですから」

謙遜でもツンデレでもなく、本音で語る。

鬼殺隊の為にしたことでも、現世を思ってしまったことでもなく、ほぼほぼ私情だったことを堂々と言いきるが、それでも炭治郎から笑みは消えなかった。

失望などせず、苦いものさえも消えて彼は自身の信の心の奥底と同じ、澄み切った空と水面のような笑みを浮かべて言う。

「はい。それも聞きました。けれど、それでもありがとうございます。……私情でもいいんです。だって、そもそも俺も、鬼殺隊も同じようにほぼ私情ですから。

むしろ……、仕事だからとかじゃなくて、俺達と同じように無惨に對して『許せない』と思ってくれたからの行動が嬉しいです。

鬼灯様。本当にありがとうございます。あなたのおかげで俺は、俺達は最期まで折れずに貫けました」

亀や蛇を連想させる細い目が見開く。

いつでも怒っているように見える表情から陰が取れる。
きよとんとしか言いようがない顔で、鬼灯はしばし固まった。

「……？」

その時、死んでも現役な炭治郎の鼻が捉えた匂い。

「感情」の匂いであることはわかったが、それはどういった言葉が適切な感情による匂いなのかはわからなかった。

炭治郎は知らない。

鬼灯が「召し使い」という名の人間だったことも。

私情による行動どころか発言すらも許されない過去があつたことも。

仕事ではなく、誰かの意図など関係ない、鬼灯自身の意思による言動が結果的に評価されることはあつても、それが「私情だからこそ」評価されることなど、求めていなかつたし想像さえも出来なかつたことも。

けれど、なんとなく炭治郎は思う。

「……そう、ですか」

自分の頭に手を置いてぐしゃぐしゃと掻きまわすように撫でて言つた鬼灯の顔は既に、最初に会つた時から変わらない仏頂面だった。

けれど、きつとこの匂いはあの時、感じ取ることが出来なかつた匂いと一緒だと思えた。

「……こちらこそ、ありがとうございます」

今にも泣き出しそうな、泣きたくなるほど優しくあたたかくて無垢な感情による匂いはきつと……炭吉と別れる時の、最後の笑顔の縁壺と同じ匂いだったのでないかと思えた。

「何あれ知らない、怖い」

鬼灯が立案した、無惨や鬼殺隊のことを若い世代にも知ってもらう為の講習は、少し間が置かれてお盆前に行われた。

一応は業務の一環だが、優先度は最低レベルなものと聴講生は自由参加なので、仕事の追い込みで修羅場なお盆前よりその後の休みであるお盆の最中の方が都合が良かったはずだが、アイドルであるマキミキ達は違う。

お盆は特番などの生放送等で時間が取れない彼女達だが、その直前なら少し余裕があり、「講習予定ありますか？」と参加希望の問い合わせが来たので、結構無理して時間を作ったらしい。

もちろん、鬼灯に「アイドルに会いたい」という下心はない。彼にあるのは、彼女たちが講習の知識をバラエティやトークショーなどで話題に上げてくれたら講習などしなくても世間一般に認知されるのではないかという方向での下心だ。

その結果、前回と同じメンバーの聴講生が揃い、前回とは少し違ったゲストの前で鬼灯はまず今回の講習内容を告げる。

「本日は2度目となる講習ですが、今回は鬼殺隊の歴史について語ってゆきたいと思います」

前回の講習終了時に予告していた通り、無惨の地獄めぐり動画をBGM代わりに流されているカオスな部屋の中で、そのBGMを一瞬忘れる程の突っ込みどころをサラッと宣言された為、唐瓜はつい反射で突っ込んでしまった。

「え？ 無惨についての話は前回で終わり？」

「終わってませんが、語るほどの面白いことは戦国時代に入るまでないので、ひとまず横に置いてください。あいつが調子に乗っていた時代の話なんて、誰も得しませんし」

前回の講習が無惨という自分たちと同じ純粋な鬼とも、鬼灯のような人から鬼に変じた者とも違う、あまりに特異な存在になった経緯の話だったはずが、まだ大して強くなかった無惨を頼光四天王が倒してくれなかったことや、善意の医者あまりに頭縁壺過ぎたことに対す

る愚痴ばかりになっていたので、今回はその続きだと思っていたらまさかの「面白くないから」との理由でカットされた。

かなり理不尽な理由だが「無惨が調子に乗っている時代の話は誰も得しない」が正論すぎたので、全員は真顔で納得して反論はなかった。「それでは、話の前にまずはご紹介を。」

本日は夏休みなのでいつもより時間に融通が利いたので、元は鬼殺隊の炎柱、現在は小学校教諭の煉獄 杏寿郎さんに来てもらえました。

あと、獄卒は面識があるでしょうが詳しい経歴は知らないでしょうから改めて紹介します。こちらは閻魔庁医務室の担当医である珠世さん。この方は十二鬼月が作られる前の無惨の側近と言える立場だった方ですが、無惨の支配から外れた後は鬼殺隊と協力して最終的には無惨討伐最大のMVPとなった方です。

あとは前回にもいらした狛治さんと無一郎さんですので紹介は不要ですね」

聴講生に納得してもらったところで、鬼灯は講習の助手的立場であるゲストを紹介する。

煉獄はいつものように明朗快活騒がしく、「歴史の説明は本職だから任せろ！」と胸を張り、珠世は煉獄とは真逆に控えめで儂げな笑みを浮かべて、「よろしくお願いします」と頭を下げた。

煉獄と初対面のマキミキと桃太郎たちは彼の勢いに圧倒され、そして珠世の妖艶と貞淑が違和感なく同居した美しさに思わず嘆息する。異性同性はもちろん、動物すらも魅力する珠世の美しさ。きつと明日も美しいぞ。

もちろん、珠世がいることに一番大喜びしているのは白澤。人妻なので手出しはしないが、同じ医療、特に薬学関係職なのを建前にお茶や食事に誘うのだが、言い切る前に鬼灯が投げたホワイトボード用のペンが白澤の両目とついでに鼻の穴にも刺さる。

そしてムスカになる白澤を無視して、講習は始められた。白澤の心配をする者は誰もおらず、いつもの事として完全に流された。

* * *

「前回の鬼殺隊などの関係者はただ単にシフトなどの都合上で来れる方々でしたが、今回は鬼殺隊の歴史に関わる方々を集めました。言っちゃなんですが、狛治さんが浮いてますね。」

本当は鬼殺隊の創立者であり責任者である産屋敷の方も呼びたかったのですが、流石に盆前は時間が取れずに無理でした」

「すみません、私たちが無理言って……」

ミキがアイドルとしてのキャラのままだと失礼だからか、それとも申し訳なさのあまりに素なのか語尾なしで謝罪を口にして、マキもその横で頭を下げる。

もちろん鬼灯は別に二人を責めたかった訳ではないので、自分が無理してでも彼女たちのスケジュールに合わせた目論みを語ってフォローしてから、さっそく鬼殺隊の成り立ちを語り始める。

「まず最初に、鬼舞辻 無惨は鬼殺隊の創立者の一族である産屋敷一族の者です。産屋敷一族の無惨という鬼を生み出してしまった責任感と、奴が生まれたことによる短命の呪いによる怨恨で生まれた、無惨を討伐する為、そして無惨の被害者の為の互助組織こそが鬼殺隊です。」

ちなみに短命の呪いを産屋敷家は神罰の類だと解釈していました。これは無惨の鬼としての能力の一部です。奴自身は全く自覚してなかった体質に近いものですが、奴はどんなに遠く離れていても自分の血縁者からの魄^{はく}を吸収することができた。最近の方にはエナジードレインと言った方がわかりやすいですかね？

まあ、ようは産屋敷家はあの臆病者の所為で生命力を奪われ続けて短命な家系でした。神職の娘を嫁にもらって寿命が延びたのはただ単に無惨との血縁が薄れていった結果です。

貴族という身分柄、結婚相手は限られているので普通なら血が濃くなってゆきがちだったから、偶然とはいえファインプレーと言えますね」

まずは何故、産屋敷という一族が千年にも渡って私財を投じて無惨討伐を悲願とした組織を作りあげた理由を語る。

そこからはらくはごく普通の、歴史の授業のような真面目な講習

だった。

本職の煉獄も交えて、平安時代にはどのくらいの規模だったのか、日輪刀が作られたしたのは何時代かなどを説明していたが、当然そんな普通の歴史授業についてゆけるのは優等生な唐瓜とミキ、あとは桃太郎とルリオくらいだ。

それ以外の残念組、ぼかんと口を開けて虚無を眺めているマキは一番いい方で、茄子は机に落書きをいそしんでおり、白澤はマキミキや珠世を「可愛いなあ」と言いながら眺めて、再び鬼灯からバルス（キヤップ外した万年筆のペン先）をくらっている。

シロと柿助、そして講習の講師側であるはずの無一郎にいたっては完全にお休みタイムである。

そうなることはわかりきっていたので、鬼灯は話をさっさと戦国時代後期まで進める。

「はい、無一郎さん。起きてください。あなたのご先祖様が登場しますから」

「……ついに出るのか。出ちゃうのか。鬼殺隊史上最大の功労者にしてある意味問題児が」

熟睡していた無一郎と、動物たちに鬼灯はペンを投げつけて起こす。シロと柿助の眉間にはスコーンと実にいい音を立ててペんが命中したが、熟睡していたはずの無一郎はぼんやりとした寝ぼけ眼まなこのまま、右手にはしっかりと鬼灯の投げたペンをキヤッチ。

最年少の天才柱という肩書が伊達ではないことを聴講生が感心している中、白澤だけが血涙流してる目で遠くを眺めて、ひきつった笑みで呟いた。

聴講生はその呟きにも、無一郎以外の講師枠たちも同じような表情をしていたことにも気づいてなかった。

「ん〜。ご先祖さまって言っても、僕は直系じゃないんだけど」

「それでも死後は交流があったのですから、少しは興味を持ちなさい」

「無一郎さんのご先祖様ってことは、その人も天才だったの?」

『天才というか天災』

「え?」

まだ眠そうに目をこすってあくびしながら答える無一郎と、軽く叱る鬼灯のやり取りにシロは口を挟んで尋ねると、無一郎は寝ぼけ顔から一瞬で真顔になり答えた。彼だけではなく、鬼灯や講師側であるゲストたちと白澤も真顔で言い切る。

だが音が同じなので、シロは当然意味がわからず困惑する。そしてそれは他の聴講生たちも一緒。

なので鬼灯が、「天災」とホワイトボードに書いてから、そう称される無一郎の直系ではないが先祖に当たる人物の名前も書いて話を続ける。

「……戦国時代の後期、鬼殺隊は良い意味でも悪い意味でも転機を迎えます。

それは一人の剣士が入隊したことが全ての始まりでした。

その剣士の名は、継国 縁壺」

鬼灯の書いた名前の横に、狛治は見やすいようにA3サイズに引き伸ばした縁壺の写真を張る。

戦国時代の人なのに写真？　と思うかもしれないが、鬼殺隊の重要関係者は写真が普及した頃にまだ転生せずあの世にいるのなら、写真を撮って資料として保存されているのだ。

名前とその顔を見て、聴講生は何か気付いたように目を見開き、そして二人と一匹が思わず叫んだ。

「「あの千手ガンダムの人!!」」

「よりにもよって一番最初に連想するのが何でそれなんだ？　と言いたいところだが、どう考えてもBGMの所為だな！　鬼灯様！　動画消しましょう！　集中できない!!」

叫んだのは当然、残念代表選手の茄子、マキ、シロである。だが狛治が突っ込んだ通り、BGMの地獄巡り動画最新作で持て余してんだか活躍してんだかな登場を果たした縁壺HELLL式が真っ先に連想されるのは仕方ない。

他の連中も間違いなく、まず最初に浮かんだのHELLL式だろう。叫ばなかったのはただ単に、残念組ほど口と脳が直結してないだけだ。

あとついでに、縁壺HEL式はガンダムほど大きくない。閻魔大王サイズだ。

縁壺が登場したのなら、鬼灯も無惨の話題が出てきてもストレスが溜まらないから狛治の要望通り、BGMを消して説明は続行される。それを残念がつてちよつと拗ねる珠世が、超絶可愛かったのは余談。

「はい、皆さんもご存知の通り技術課の真夜中テンションの産物、縁壺HEL式のモデルである縁壺さん。

この人こそが『始まりの呼吸の剣士』と呼ばれる方で、鬼殺隊の剣士必須の技術である『呼吸』の開祖。そして無惨を唯一、しかも無傷で追い詰めた最強の剣士です」

HEL式のインパクトが強すぎたが、少年漫画に憧れる少年心を全力で刺激してくる情報に聴講生たちは目をキラキラさせる。マキまでしてる。

ミキだけが「凄い、かつこいい」とは思いつつも、前回の講習で得ていた情報を思い出し、手を挙げて確認する。

「……あの、鬼灯様すみませんニャー。前回の講習で無惨を鬼にした医者のことを『医術界の縁壺さんだと思え』って言っていましたよね?」
「はい。言いました」

ミキの指摘と鬼灯の肯定で、男の憧れそのものな情報に唐瓜までも気を取られていたが、全員が冷や水をかけられたようにテンションが下がり、沈黙する。

別に悪い情報ではない。……ないのだが、医者の特デモぶりを思い出せば出すほどに引き合いに出された縁壺がもう、ただの「最強の剣士」でないことを理解させる。

そもそも彼らは忘れていた。縁壺の横に書かれた単語を。

彼は、縁壺という生き物は「天才」ではなく「天災」であることを、この後彼らは思い知る。

* * *

「まずは縁壺さんが鬼殺隊に入るまでの経緯を語りますか。

この人は戦国時代の武家である継国家の次男として生を受けます。

しかし彼は双子。時代柄、双子は地方によりますが縁起が悪い存在と思われがちで、しかも額の痣も炎のような形だった為、不気味に思われ父親に忌子扱いで殺されかけましたが、母親が狂乱しながら反対したため十歳で出家するという条件で養育が許されました。

双子の兄である厳勝さんと待遇に酷く差を付けられますが、母親と兄に慈しまれて育ったことと本人の資質からか、自分の境遇に不満を懐くことなく、むしろ母親が病没された後は家の迷惑にならぬよう十歳になる前に自ら出奔するような、清廉潔白な人物でした。

ですが、まだ幼子だったのもあつて初めて出る外の世界にテンション上がって寺には行かずそのまま走り続けて、気がつけば知らない村。

そこで家族を喪った少女、うたさんと出会い、二人は意気投合して同居。その後はひねくれた意外性などなくお互いに惹かれあい、やがて夫婦となつて子を授かる。ささやかながら幸福でした。

しかし、その幸福は無惨の鬼によって最悪な形で踏みにじられます。

うたさんが出産間近だったので縁壺さんが産婆に相談しよう和家人を離れ……、人助けをしていたので帰るのが遅くなってしまったその日、うたさんとお腹の子供は鬼に惨殺されました。

心からうたさんを愛し、我が子の誕生を待ち望んでいた縁壺さんはショックのあまりお二人を弔うことも忘れ、うたさんの亡骸を十日ほど茫然と抱きかかえ続けていたそうです」

「……………ちよつと待った」

生まれた時からハードモードと言つていい境遇から、想像できていたがあまりに惨い悲劇を聞かされてしんみりしている中、桃太郎もしんみりして流しかけた情報に気付き、突っ込む。

「……………あの、十日ほどつて……………その間食事や睡眠は……………」

『……………あ』

桃太郎の空気を読まないがスルーすべきではない情報の一部を指摘すると、気付かずに流していた聴講生たちも気づいて声を上げる。

そして鬼灯は、フオローではなくトドメを返答する。

「もちろん寝てませんし食べてませんし、なんなら水も飲んでませんよ。縁壺さんは妻子の死体を前にそんなことができるような狂人ではありませんし」

『身体は狂ってるどころじゃねーぞ!!』

鬼灯の言う通り、妻子の死がショックすぎて何も出来ずに死体を抱きかかえ続けることは狂っているとは言えない。普通と言うには変だが、いつの時代の誰がしてもおかしくない行動だろう。

だが、鬼灯の発言以上に聴講生の総突っ込みが正論だ。

普通なら精神はともかく体の方は食事や水、睡眠を求めて悲鳴を上げる。その悲鳴に精神が応えてやらないのなら、他者の助けがない限り十日どころか水すら飲んでないなら二日で死ぬ。

そんなごく真つ当な精神と同時に知らされた化け物つぷりに聴講生たちは戦慄するが、ゲストたちはそのまま追い打ちをかける。

「というか、鬼灯様はだいぶ端折ったからそこ以外普通に思えるかもしれないが、縁壺は子供の頃から天災ぶりを発揮してたからな」

「そうだな！ 七つで兄上の剣術指南役に打ち勝ったという逸話があるぞ！ しかも、竹刀の持ち方を教わっただけで素振りすらしたことがなく、一瞬で四連撃入れたそうだな！」

「出奔してからうたさんに出会うまでも、一晩中走り続けても全然疲れなかった結果だしね」

「確実に、山を3つか4つくらいは超えていますよね……」

ゲストたちはそれぞれ、鬼灯が端折った縁壺のトンデモ情報を口にして聴講生たちは絶句。

縁壺の身体能力に関して突っ込みを入れていたら終わらないので、鬼灯はその隙に話を進める準備をする。

「そうやって茫然自失していた所、鬼を追っていた鬼殺隊の剣士がやってきて、彼に吊つてやらなければ可哀相だと言われた事でようやく何もできないショック状態から抜け出しました」

この声を掛け、そして縁壺さんを鬼殺隊にスカウトした剣士こそが煉獄さんのご先祖様。当時の炎柱です」

説明しながら縁壺の隣に炎柱の写真を張る。

『……当時の?』

「はい。当時の炎柱。煉獄 杏寿郎さんのご先祖さまです。えーと、名前は何でしたっけ?」

聴講生たちはその写真と席に座っている煉獄を見比べて、尋ねる。確認したくなる気持ちはよくわかる。それぐらい、500年以上前の先祖でも遺伝子が濃縮ストレートすぎるくらいにそっくりなのだ。今ここにいる煉獄の写真ではないと鬼灯ははつきり言いきつてから、名前の系統も先祖代々似ているからか珍しくど忘れしたらしく煉獄に尋ねる。

そして煉獄が答える前に、写真を鬼灯が取り出した時から何やらいぶかし気な顔をして何か確認していた狛治が言った。

「……鬼灯様。これ、杏寿郎です」

言つて、狛治は引き伸ばした元である写真とその裏を見せる。そこには、「煉獄 杏寿郎」と書かれていた。どうやら、間違えて持ってきてしまったようだ。

しばし鬼灯は狛治の持っている写真と自分が張った写真を見比べて沈黙していたが、数秒後に聴講生と向き合った時には開き直っていた。

「同じ顔なので、気にせずにこの写真の人が当時の炎柱だと思つてください」

「開き直んな馬鹿野郎! っていうか、気付こうよ杏寿郎くん! 他の先祖の写真ならともかく、自分の写真なんだから!!」

「さっぱりわからなかった!! すごいな、俺の一族!」

鬼灯の開き直りに白澤が突っ込みを入れるが、天敵のあからさまなミスをしつこくバカにするよりも先に一番早く気付くべき人物にも突っ込みを入れてしまう。

そして本人は朗らか堂々と言い切つたので、もう白澤は文句を言えない。本人ですら見分けるのが困難な写真を間違えたのはもはやミスとは言えないことを、きつと彼は初めから本音では認めていたのだろう。

間違つたのは自分の方なのに何故か白澤が悔しがる様を「ざまあ」

と思いつながら、鬼灯は縁壺に関しての説明を煉獄にパスする。

「鬼殺隊に入つてからの彼の活躍や功績などは、煉獄さんが的確でしょう。お願いします」

「うむー。任せられた！」

鬼灯殿が語つた通り、縁壺殿は我々鬼殺隊の剣士が鬼と戦う為に会得する剣術の型と同じく必須の技能と言える『全集中の呼吸』を編み出した方だ！

本人が使っていた原初と言える呼吸は『日の呼吸』！『炎の呼吸』を『火の呼吸』と呼んではならない理由は、この呼吸と混同を避ける為だろうな！

そしてこの呼吸という技術を惜しみなく仲間の剣士にも教え、日の呼吸を会得出来なかつた者にはそれぞれに合った呼吸法を指南したことで基本の、炎・水・風・岩・雷の呼吸が生まれた！

その他にも痣や赫刀、透き通る世界など語ることは尽きないが、何より縁壺殿について語らねばならぬのは、この方が無惨を追い詰め、それが我々の世代にも引き継がれて奴を倒す大きな手助けとなつたことだろうな！」

煉獄の説明にシロが「手助け？ 戦国時代の人なのにな？」と野暮な疑問を口にする。

煉獄の発言は「縁壺が鬼殺隊に教えた技術などが最終戦で活躍した」「縁壺という存在が鬼殺隊全体の憧れであり、士気を上げた」等の意味合いで解釈していた他の連中は、そのようなことを口にしてシロを嗜めるが、肝心な講師陣（と白澤）は「ああ、平和な解釈だな」と言いたげな遠い目をしている事に気付く。

「……無惨と相対した時の事は、当事者である私が語りましょう」

彼らの解釈も間違いではないのでそのままにしておきたいが、そうはいかないから珠世が控えめに手を挙げて説明係がバトンタッチ。

「……あの方は、あの自分以外の全ての存在を見下している傲岸不遜な恥知らずですら、『本物の化け物は自分ではない。あの男だ』と思うほど、言葉通り手も足も出せずに首を切り落とされ、手を失くして再生できぬ見苦しい姿で切られた首が転がり落ちぬように押さえてお

くのが精一杯な情けない、実に自業自得な姿にまで追い詰めた唯一の方。

しかしあの方は優しすぎました。清廉潔白で悪というものが心から理解できない方でした。だから、情けをかけたとか怒り故にというより、本心からあの恥知らずの生き様が理解できなかったのでしょう。

縁壺さんはあのだひたすら死にたくない臆病者に、意識すれば何故そんな恥知らずな生き方が出来る？ と尋ねたのですが、もちろんあの恥知らずはそんな疑問を聞いてすらおらず、結果としてその問いかけは奴が逃げる決定的な隙となりました。

無惨は自爆、通称生き恥ポップコーンで1800ほどの肉片になって逃げ出したのです」

『生き恥ポップコーン!!?!』

珠世の未だに無惨に対しての恨みが一切薄れていないことがよくわかる、闇の深さが見え隠れどころかモグラ叩きのように出てくる語りに聴講生はわりと引きつつ聞いていたが、サラツと馬鹿にしてんのかすら意味不明な通称が出てきて、思わず反射でオウム返し。

なんとなく、どのような状態だったのかよくわかるネーミングなのは優秀だと思うが、誰だ初めにそれを言った奴。

しかし聴講生たちの突っ込みは終わらない。

「流石の縁壺さんも、不意打ちで肉片ポップコーンは予想外過ぎてあの方でも奴の肉片は1500ちよつとを切り捨てるのが精一杯で、300ほどの肉片を取り逃がしてしまいました」

「十分すぎるよ!」

「不意打ちで3/4以上は切れたの!」

「つていうか、爆散した肉片の数を把握できたのその人!」

「不意打ちじゃなければ全部切れたんじゃね!」

散々、天災だの人外レベルのめちゃくちゃ性能だと言われているも、無惨を取り逃がしてしまったという情報から漠然と聴講生は、縁壺≒無惨くらの戦力差だと思っていたのだろうが、ぶつちぎりで縁壺最強だと知らされた時点で凄いという感想を超えてドン引きだっ

だが、生き恥ポップコーンも不意打ちだから成立した逃亡だと知って、全員がそれぞれ全力で突っ込む。

しかしこれでもまだ、縁壺のトンデモ人外エピソードでは序盤レベルだ。

「はい。きっと本人もそれをわかっていたからこそ、悔やんでいたのでしょうか。」

彼はその後、この時に取り逃がしたことを後悔し続けて生涯を終えました。

……しかし！ あの方が行ったことは何一つとして無駄ではなかったのです！！

あの方が無惨の脳や心臓につけた傷はその後、大正になっても、そして私の薬の効果で九千年老いても奴の体に残り続け、奴を弱体化させ続けていたのです！！」

『何して…』

聴講生からの突っ込みに珠世は痛ましげな顔で縁壺の後悔を自分の事のように語るが、俯いていた顔が上がった時には童女のようにあどけなく、目をキラキラさせて縁壺が施した呪いじみたスリッパダメージ付き永続デバフを語り、聴講生はもはや言っている意味が理解できない。

とうか、1500の肉片を切ったはずなのに、残った300から再生させたのなら何故弱点にスリッパダメージを入れる傷が残っているのだろうか？

無傷の元気な肉片を優先して1500切ったから？ だとしてもやはり九千年経つても残り続けたのは異様というか意味不明だ。

DNAレベルで損傷して完全な修復は不可能だったのだろうか？

放射能か、縁壺の斬撃は。

助けを求めるように鬼灯の方に顔を向ければ、彼は真顔で「そのまんまですよ」と答える。

「ちなみにその永続デバフ、技とかじゃないそうです。」

本人も当時、浄玻璃の鏡で最終戦を見ていて傷が現れた時、戦っている炭治郎さんは何故か納得してましたが張本人は『何あれ知らな

い、怖い』って顔してました。

しかし、ここまでの功績がありました。が縁壺さんはこの直後、鬼殺隊を辞めます。正確には追放されました」

「え!? 何で!？」

「無惨を逃がしたから?。」

「理不尽すぎない?。」

縁壺の反応はなんか可愛い。が、効果がなおさらホラーじみて思えてくる彼のエピソードは横に置き、説明は再び鬼灯に戻ってきた。

聴講生からしたら、逃げられたとはいえ称賛こそされど追放される理由が全くわからないのは当然だったので、鬼灯は一つずつ説明する。

「無惨を逃がしたことは結果的には理由の一つになりましたが、ついでに付属されたようなものです。逃がしただけなら、『お前が勝てなければ誰も勝てねーだろ!!』という方面で責められたかもしれませんが、責任取るために除隊は無意味すぎるのでしませんよ。」

追放理由の一つは、珠世さんを口約束で逃がしたこと。

当時の彼女は無惨が縁壺さんにやられて弱体化していた為、奴の支配から外れこそしましたが食人衝動は持ったままでしたので、反省や人を殺めたくないという思いが本心だったとしても気軽に見逃していい存在ではなかったのですよ。

そしてもう一つ、最大の理由は縁壺さんの双子の兄である巖勝さんが、鬼殺隊を裏切って無惨の鬼となり、当時のお館様を殺したことです」

『……………え?。』

珠世の無惨への恨み節で忘れていたが、最初の紹介での「無惨の側近的立場だった」という情報を思い出して納得したが、その後の最大の理由に関しては全員がしばし間を置いて、戸惑いの声を上げる。

追放される理由自体は、珠世のこと以上に理解できた。むしろ追放で済んだのは縁壺の今までの功績のおかげで、かなり恩情をもらっていたのも理解できた。

理解できなかったのは、唐突と思えるタイミングで現れた「縁壺の

双子の兄」という存在。

しかし、優等生組はもちろん残念組もまだちゃんと覚えている。彼も鬼殺隊の一員であったという情報は唐突だが、兄の存在自体は唐突ではない。ちゃんと事前に出ていた。

……忌み子として扱われていた弟を、慈しんでいた優しい兄として。

「……え？ 何で……そんなことに？」

全員が覚えているからこそ、そこに至るまでの経緯が全く想像つかずに言葉を失い、桃太郎だけが何とか声を絞り出して尋ねると、退屈そうに机に突っ伏している無一郎がその体勢のまま答えた。

「ただの嫉妬。」

縁壺の兄の巖勝……僕の直系の先祖に当たるあいつは、弟の才能に嫉妬したんだ。

嫉妬する気持ち自体はわかるし、同情できる理由もあるよ。

跡取りとしての長男、兄としての責任感、双子なんだから自分と弟は同じ条件のはずつていう自分や周囲の思い込みによる重圧、身体能力が上がる代わりに寿命が削られて早死にが確定する痣が出てたせいで、もうどんなに努力しても時間が足りない事を思い知って追い詰められた時に無惨の奴に遭っちゃったんだ。

巖勝自身、千人に一人、百年に一人とかいうレベルの天才だったつてもその皮肉で悲劇だね。凡才じゃなかったから、追いつけるんじゃないかなってという期待が捨てられなかったんだと思う。

だから、可哀相な奴だよ。憐れだと思うよ。

……けど、絶対に『仕方がなかった』とかは思わない。

可哀相な奴でも、あいつは地獄に堕ちるのがふさわしいクズで、あいつがしたことは全部許されない最低なことだ」

おそらくは彼がここに呼ばれた理由である「巖勝」についての説明は、あまりに主観的で最低限なものだった。

しかし鬼灯も狛治も、その事に対しては何も言わない。

無一郎の発言はフォロワーのしようがないので何も言わない、というふうには思えなかった。

巖勝に対して突き放したものには思えない。

それは鬼灯たちの反応だけではなく、他のゲストたちも、白澤も、そして無一郎自身にも言えること。

彼らは皆、それ以上は何も言わなかった。

感情を匂いや音で読み取る者はここにはいなかった。彼らが何を思っていたのかなど聴講生にはわからない。

ただ、彼らの眼は何かを惜しんでいるように見えた。

悲しむには憤りが邪魔をして、憐れむには敬意が捨てられない。

弟を慈しんでいたことは嘘だとは思えない。忘れられない。

そんな眼に見えた。

* * *

その後は鬼灯が、竈門家にヒノカミ神楽と耳飾りを託したことと、80歳で兄を追いつめたがあと一步、あと一瞬が間に合わずに寿命が尽きて亡くなった話をして縁壺の話はひとまず終了。

痣の説明もついでにしたので、聴講生たちは再び「例外が例外すぎる!!」という総突っ込みを入れたが、最初の頃よりテンション低いのは巖勝とのエピソードが尾を引いているからだろう。

「では、本日の講習はここで終わります。」

次回から大正、無惨がようやく自業自得で追い詰められて自滅していく様を語ってゆきたいと思います」

「あの、鬼灯様！」

鬼灯がそう言って締めくくることが、桃太郎が立ち上がって呼び止める。

「あの、巖勝って人は結局、どうなったんですか？」

あと、縁壺さんには会えますか？」

神に祝福された特異な肉体と、鬼退治をした者。

それだけを見れば桃太郎と縁壺はよく似た者に思えるが、ほとんどビギナーズラックと若さゆえの勢いで勝てただけの自分が英雄で、努力も惜しまなかった本物の才能の持ち主だったのに、生きている頃は何も得ることが出来ず、報われずに失い続けた縁壺に、桃太郎は罪悪感に近い感情を懐いた。

きっと自分は巖勝の足元にも及ばないことをわかつていたからこそ、嫉妬に狂って鬼になるという本末転倒を起こしても、それでも縁壺という太陽を諦めなかった巖勝に敬意じみたものも懐いた。

だから、英雄になってもおかしくなかった、英雄になれるはずだった二人の結末が気になった。

そんな桃太郎の焦燥感のような思いをどう捉えたのか、鬼灯はいつもの無表情でいつものように淡々と答えた。

「巖勝さんは、刀輪刃とうりんしよにいますよ。あの人、あそこ以外に墮とす罪状がないんですね。

縁壺さんに会うのは、残念ながら無理です。

彼は、今年の正月が過ぎてから妻子と一緒に転生したので」

地獄の釜が開く時

【童磨の場合】

獄卒たちの盆休みが始まった。

同時に、地獄の釜が開く。つまりは罪人たちもこの時ばかりは呵責から逃れ、現世の家族や子孫に会いに行ったりすることが許されるという事。

どの亡者も呵責されずに済むというだけでもこの時期が待ち遠しくて仕方がないのは同じだが、その中でもひととき待ちわびて、盆休みが始まった瞬間に4畳半という自分専用の孤地獄から飛び出したのは元上弦の式というポジションに付き、無惨どころか鬼灯もドン引かせた最強サイコパスの童磨である。

ちなみにももちろん彼にも人間としての本名はあるのだが、人間時代のことを本人が全く固執していないのと、童磨と呼ばれていた時期の方が当然長くなっている為、正式な場や書類以外では今でも周囲は童磨呼ばわりである。

「あああ！ やつと！ やつとこの時が来た!!」

全く同じ内容の刑罰であり、肉体的な呵責はされていないにもかかわらず百年たっても全く慣れることなどない、同族嫌悪による罵詈雑言の罵り合いから解放されただけでも、童磨にとっては空にも飛べそうなほどの幸福による解放感だが、彼がこの日を待ちわびていた理由はもう一つ。

「あとちよつと、あと数秒だけ待っててねしのぶちゃん!! 今すぐに会いに行くよー!」

孤地獄から飛び出し、爆走して向かうのは他の亡者たちと同じくあの世とこの世の境なのだが、童磨の最終目的地は現世ではなく天国。未だにしのぶが地獄に就職している事を知らない童磨には、彼女がいる心当たりは天国しかないのだ。

そして、地獄とは真正面の門の前にまるで自分を出迎えるように立つ、小柄で華奢な実に美しい少女を、童磨が最期に見つけて未だに冷めず煮えたぎっているある意味では純愛？ の対象である胡蝶 し

のぶを見つける。

出迎える為に立っていたのは、童磨の気色悪い妄想ではなく実は事実である。そして、しのぶが藤の花のように可憐に美しく微笑んでいるのも。

「!! しのぶちゃんしのぶちゃんしのぶちゃん!! 待っていてくれたんだね、マイスイートえんじえる!!」

「1年ぶりですね、糞野郎」

テンションが上がりすぎてなんか生前とは違う方向性で気色悪いことを言い出しながら自分に向かってルパンダイブでもしそうな勢いで爆走してくる童磨に、天使のような微笑みと聖母のような柔らかい声から、どキツイ素をサラツと出してしのぶは言った。

「今年も学習してないようでは何よりです」

「はい。罪人である亡者がお盆で向かっていいのは現世だけで、天国はダメよー」

「天国侵入を試みた亡者は、現世行きを取り消して地獄の刑場に戻ってもらうわよー」

リミッターが振り切れているのかと思えるような脚力だったが、それでも鬼から人間に戻っているわ、狛治や巖勝のように生前から体を鍛えていた訳でもないの、サラブレッドより速い馬頭に童磨はあっさり追いつかれて首根っこを掴まれた挙句、少し遅れてやってきた牛頭にペナルティを告げられる。

「え？ あー！ しまったまたやった!!」

しのぶの発言や童磨の嘆きの通り、このやり取りは毎年恒例である。

童磨に学習能力がない訳ではない。むしろこいつは慎重かつ狡猾だからこそ、しのぶが最初から犠牲になることを前提とした作戦でなければ、下手したら上弦の壱以上の難敵だったくらいだ。

なのに、毎年天国には行けないのに天国まで堂々とした侵入を爆走で試みるのは、試みているというより孤地獄内での天探女にひたすら自分の言われたくないことをダイレクトに、時には遠回しに煽られるのがストレスすぎて、そのストレスから解放されたこの時はあまりの

解放感と幸福感で、「今なら何でもできる」という全能感まで生まれてしまい、そんな思考力低下した状態で自分の欲求のまま動いてしまうからだろう。

もしくは自覚あるのかなのかは今のところ不明だが、下手に策を弄すよりこんなバカなことをしていた方が、年に1回の長くても数分間だけでもしのぶに、それも笑顔のしのぶに会える方が得だと思っっているのかもしれない。

「しのぶちゃん！ 来年こそは一緒に現世デートしようね」

現に童磨はもう嘆くのをやめて、馬頭に首根っこを掴まれて猫の子のようにブランブランと揺れながら、ヘラツと笑ってしのぶの神経を逆なでする。

やっぱりこいつ、自分と会う為にわざとやってるなど確信しつつも、それでもしのぶはやはり毎年恒例になっている嫌味を吐き捨てる。

「私はおかげさまで、現世に遺された家族も子孫もいないので現世に何の魅力も感じません。だから、盆休みはいつも通り天国で家族水入らずに過ごさせてもらいます。

……あなたも実家に等しいあの孤地獄で大人しく、手足を伸ばして過ごしたら如何？」

牛頭馬頭に連行されながら、童磨は首を傾げた。

前半の「お前ら鬼が私も私の家族も全部殺しただろうが！」という童磨には全く響かない、むしろ灼熱の憎悪を笑顔で隠そうとするしのぶの顔が美味しいです！ 嫌味は毎年の事だが、最後の発言は今年初めてで意味がわからなかった。

しのぶの顔も、最初こそはイラツとしていたが去年までとは違って余裕があつて、最後に至っては実に楽しんで仕方がないと言わんばかりの輝く笑顔だったことも、童磨にとっては謎過ぎた。

しのぶの憎悪を隠しきれない笑顔もお気に入りだが、あの輝く笑顔もまた素晴らしいと脳裏に焼き付けつつも、童磨は「まさか……」という予想がよぎる。

いつもなら孤地獄に戻っても自分専任である天探女は盆休みでお

らず、童磨はあの4畳半で休みが終わるまで一人過ごす。

彼自身も現世に興味や未練はないので、最初にしのぶに会って、そこからストレスフリーでのんびりゴロゴロしていられるのが盆という時期なのだが、しのぶのあの反応からして今年はまさか天探女は休み返上されているのではないかと不安になった。

彼女の性格からして、自分の意思で休みを返上して仕事するのは有り得ないと、この上なく不本意だが百年の付き合いで確信している。

だが彼女の性格が難しきからこそ自分の専任になっているだけあって、何かしらの問題を起こしてそのペナルティで休み返上の可能性は十分すぎるほど有り得た。

なので童磨は戦々恐々、逃げ出す隙を伺い続けたが結局逃げ出せず孤地獄に戻された。

幸いながら、童磨が予測した「休み返上された天探女による、八つ当たりも兼ねた呵責」はなかった。彼の孤地獄には自分以外誰もいない。

代りに、上下左右全面の壁に自費出版した奪衣婆のヌード写真のページが隙間なくびっちり貼られていた。

「ぎゃああああああっつっつ!!!」

天国まで響いたその悲鳴に、しのぶは盛大にガッツポーズを取ったという。

【無惨の場合】

最も過酷な地獄と言われる阿鼻地獄は、まずその地獄に堕ちるまで二千年かかるという。

つまりは未だに弥生時代の人間も堕ち続けているという地獄なのだが、そこに鬼灯が現れ、というか直立不動のまま亡者と一緒に落下しつつ、拡声器を使って亡者たちにお盆恒例の説明を開始。

《阿鼻地獄に落下中の方々、あなた達は八大地獄の罪状を網羅している極悪人な為、盆の時期でも釈放すべきではないという意見は毎年現れます。

そして実際、阿鼻の底にたどり着いている方はまだしも、落下中のあなたは罰である呵責を受けていないのだから反省している可能性が低く、お盆だから無条件で釈放は危険だと判断されています》

鬼灯の発言は正論なのだが、こんな地獄に堕ちる亡者はもちろんそれを認める訳がなく、ブーイングが巻き起こる。

「ふざけんなー!」

「呵責されてないって、この目の前で見せつけられてる自分の生前の映像は何なんだ!?!」

「普通に殴る蹴るの拷問よりきついで、これ!!」

ごめん。ちよつと正論じゃなかった。このワーカーホリックが、ただ墮とすだけな訳ないわな。

そんな亡者たちのブーイングも毎年恒例なので無視して、鬼灯はそのまま説明を続ける。

《ですが、阿鼻の罪人は無条件で釈放なしというのもまた非人道的です。他者にはともかく、身内に対しては普通に慈しめる性格だったから、帰って来ることを望んでもらっている方もいらつしやるでしょうしね。

なのであなた方落下中の亡者は、現世であなた方を供養する家族や子孫、関係者の数やその供養に対する熱意に比例しただけの強度を持った蜘蛛の糸が目の前に現れます。

それを使って現世に向かってください。糸が現れない方は、現世では誰もあなたを望んでいないと自覚して、諦めてください。

なお、他者の糸を掴んでも本人以外なら無条件で切れ、他者に切られたのならその分強度の上だった糸が再び降りて来るので、嫌がらせは無意味ですよ》

チャンスは与えるが、そのチャンスはまさしく生前の人望が反映されることを告げると、今度こそ亡者たちは自分を棚上げして先ほど以上のブーイング。

ちなみに他者の糸を掴んでもというくだりは、「本人以外ならすぐに切れる」と「代わりの糸がすぐに降りて来る」は本当だが、強度が上がるは嘘も方便。

地獄に堕ちる奴らなので、切れるとわかっていても嫌がらせて他者の糸に掴もうとする輩は必ず現れるが、相手の得になるとわかっていのならやらないというわかりやすいクズ具合である。

そんなクズ代表に、鬼灯は話しかける。

「さて、死後百年は直系の家族が亡くなって、直接面識がない子孫にもしっかりと供養するように伝えてもらっているかどうか、完全に本人の人望の見せ所となって来る時期なのですが、死んだ年から糸が降りて来ることなどなかったあなたには無関係ですね、無惨」

「私は産屋敷の者なのだから、産屋敷家の供養は私の供養に数えるべきだろうが！ あの妻子を巻き添えに自爆する異常者の所為で何故、私がこのような目に遭わねばならない!？」

「生き恥ポップコーンが奥の手だったお前が、産屋敷ボンバーを非難するか？」

相変わらず凶々しいにも程がある言い分だけではなく、自分を棚上げして他者を非難して自分を正当化する頭無惨に呆れつつも、せめて鬼灯を道連れにしたいのか腕をもがいて伸ばす無惨の顔面を蹴っ飛ばし、これまた毎年恒例の「供物」紹介をする。

『鬼舞辻』なんて名乗っている時点で、あなたはもう産屋敷の人間だとは彼らもあの世もカウントしませんよ。せいぜい、元産屋敷扱いです。

ですが、良かったです無惨。今年もたった一人だけ、あなたに供物をささげる方がいました。その供物は、『これを使って地獄から這い上がって欲しい』という思いが込められているので、特別にあなたは蜘蛛の糸ではなく、その供物を使っただきます。

どうぞ。珠世さんリクエストによる愈史郎さんが用意した供物。トイレットペーパーです」

「ミシン目ええええー!! 這い上がらせる気ないだろ!!」
毎年恒例なので無惨も当然期待していなかったが、それでも無視できずに突っ込みを入れてしまうのは煽り耐性の無さゆえか、それともただの反射か。

当然、鬼灯は無惨の突っ込みは無視して実演販売のように便所紙を

掲げて、話を続ける。

「前回の納豆の糸はあなたには大変不評、珠世さんは大絶賛だったよ
うなので、愈史郎さんは珠世さんを更に喜ばせる為にこちらのトイ
レットペーパー、去年珠世さんが何気なく来年はこれが良いかもと
言った時から、実にカビが生えやすく湿気が紙全体に染み込むであろ
う場所に置かれた、一年熟成物です」

「その青やら黒やらの変な柄かと思ってたの、カビか!! ミシン目な
くても摘まむだけで引きちぎれるわ!」

「でしようね。頑張ってください。一応、12ロールはあるそうです。

あと、来年はそうめん（乾麺）予定らしいのでお楽しみに」

「これも納豆もたいがいだが、それは本気でどうしろというんだ!」

無茶ぶりと来年の供物予告をして鬼灯は湿気で紙が歪んでしつと
りしているトイレットペーパーだけを残して姿を消す。

絶対にそれを切らずに這い上がれる訳ないことを理解しつつも、1
2ロール全部が千切れまくってなくなるまでついつい掴んでしま
うブレなさはさすがだと評価された。

誰に? 同じ阿鼻地獄に落下中の方々以外いるか。

【巖勝の場合】

とうりんしよ
刀輪処。

刃物を使って殺生を行った者が堕ちる地獄で、刑罰は地上からは猛
火、天からは熱鉄の雨が、そして樹木から生えた両刃の剣が雨のよう
に降り注ぎ亡者を襲う。

だが現在は盆の最中の為、刑場はただの荒野に見える。

地獄特有の自然物を利用していても多いが、刑罰なので亡者の
罪状や反省の度合いによっては調整も必要な為、獄卒が一斉休みな
ると静かで平和なものだ。

そんな荒野の中で一人の男が正座をしている。

やせ細った、骨に直接皮が張り付いたような男だ。男が生まれた時
代を考えるとかなり大柄な身長なのも相まって、今にも折れそうな枯

れ木じみている。

亡者でありながら死体じみているのは、餓鬼同然の瘦身だけが原因ではない。

最大の原因は、何もない地面を見つめているあまりに虚ろな男の目。

男は、そうやって座り続ける。

猛火に身を焼かれても、熱鉄の雨に打たれても、両刃の剣に全身がなます切りにされても、微動だにせず、微動だにせず、にされるがままで呵責を受け続ける。

それは自身の罪を悔いて肅々と刑罰に甘んじているのではない。ただ痛みすら感じられないほどに、無意味な後悔を、問いかけを続けているだけ。

どうして、自分はこうなった。

どうして、自分はあるような結末に至った？

何が悪かった？ 何をすれば良かった？

どうしたら、自分は諦めることができた？

自分の生前の全てを「生き恥」と認識して悔いているのに、未だに諦めることができないものを、手を伸ばし続けるものを、焦がれているものに問いかける。

(どうすれば良かったんだ……縁壺)

頼むから死んで欲しかった、生まれてこないでくれと願った双子の弟に、継国 巖勝は問いかけ続ける。

* * *

「お久しぶりです。巖勝さん」

刑場で一人、現世に向かわずに残っていた巖勝に鬼灯が背後から話しかける。

微動だにせずに座ったままだった巖勝の肩がわずかに動いたが、これは鬼灯の声に反応した訳ではない。

彼は拷問にすら何の反応も見せないが、流石に獄卒も自分以外の亡者もいなくなったことで、今が盆だと気付いているのだろう。

そして盆は彼にとって拷問から逃れられる唯一の時期ではなく、む

しろ最大の拷問が行われる時期であるから、その知らせである鬼灯に反応しているのだ。

だが、鬼灯から告げられた言葉は百年たっても慣れることも覚悟も決めることも出来ない拷問の知らせではなかった。

「縁吉さんなら来ませんよ。今日はもちろん、これからずっとです」

その言葉に、今度はあからさまに反応した。

体がバラバラに切り刻まれてもしない限り体勢を正座から崩さなかつた巖勝が、よろけるように前のめりになってから振り返り、虚ろにここではないどこかばかり見ていたはずの眼が、確かに現実を見る。

「……どういふ……ことだ？ ……あいつは……ようやく私を、見限ったのか？」

声を出すのは何十年ぶりか。朽ちかけていた声帯を震わせ、かすれた声を途切れ途切れに紡ぎ、尋ねる。

来ないという情報に対する喜びはない。あるのはただひたすらな困惑。

百年間、振り返りもせずに無視し続けても、そもそも向こうだつて自分から会いに来たくせにろくに話せない、けれど盆と正月には必ず面会に来ていた弟が唐突に今年は、そしてこれからも来ないという情報信じられなかった。

振り返った先には、鬼灯と元は自分の同僚であり、弟子に対するものに近い期待を懐いていた猗窩座……だつた粕治しかいない。

性質の悪い騙し討ちで振り返らせたのではなく、少なくともこの場に弟がいないのは事実だと知っても、やはり巖勝に安堵は生まれなない。戸惑いが、困惑がさらに膨れ上がるだけだ。

そんな彼に、鬼灯は淡々と語る。

「正確には、『来ない』のではなく『来れない』んですよ。

縁吉さんは今年の正月、あなたとの面会の数日後に妻子と共に現世に転生しました」

鬼灯から告げられた、弟がもう来ない理由。自分にとって地獄の刑罰よりも苦痛だつた拷問が終わつた理由を知り、落ち窪んだ目が眼球

を零れ落としそうな程に見開く。

脳裏に、記憶などしたくないのに忘れられない今年の正月でのやり取りを、……最後の弟とのやり取りが蘇る。

縁壺は最初に挨拶をしてから、いつもと同じように何も言わなかった。背後で何か言いたげだった気配は感じていたが、巖勝はもちろん助け船など出す訳もなく岩のように身じろぎもせず、呼吸すらしているのか怪しい程に黙り込んで無視を続けていた。

巖勝の死後から百年間、ずっと続いた変わらないやり取りだ。

ただ、思い返せばこれだけは違った。

面会時間の終わりを獄卒に告げられ、去る間に縁壺は言った。

『……兄上。——さようなら』

いつもは、蚊の鳴くような声音で「また、来ます」だった。

けれどその日は、その日だけははっきりと聞こえる声でそう言った。

別れの言葉を告げていたことを、思い出す。

あれは、死んでも口下手が治らなかつた弟が精一杯に表した永別の言葉だったことをようやく理解して、巖勝はかすれた声で叫んだ。

「あれを転生させるなど正気か!?! あいつ以外に勝ち目がない怪物が現世にいるのか!?!」

「お前が一番そう言いたくなる気持ちはわかるが、ここで空気をぶっ壊すか!?!」

まさかの巖勝がシリアスをぶっ壊し、狛治が突っ込む。

しかし狛治が自分でも言っている通り、縁壺の規格外ぶりを知る誰もが「縁壺が転生」と聞いて思うことなのだから、誰よりも何よりも彼の規格外ぶりを知る、だからこそ最悪の結末に至った巖勝が、空気など知ったことかで突っ込んで責められない。

なので、狛治の突っ込みに巖勝は素でキレて結構元気に言い返す。「言わずにおられるか! あれがあのまま転生したら、私ほどこじらせる者はいなくとも周囲の人間の心を折り続けるのは確定だろうか!!」

一億歩譲ってあの規格外な身体能力そのまままで転生はまだしも、あ

の自分のことを何も語らないわ、自分は特に優れていない普通だと思
い込んでいる所はどうなんだ!? 後者はともかく前者は死んでも
治ってなかったぞ!」

巖勝の心配は正論すぎたので、狛治はもう言い返せずに目を逸らす
しか出来なかったが、鬼灯の方は最初と変わらず淡々と答える。

「あの人の転生は、ぶつちやけると実験的なものなんですよね。縁壺
さんは神仏の恩寵による特異体質ではなく、真正正銘の世界のバグ、
突然変異なので転生させたらどうなるかはわからないからこそ、転生
させてどうなるかを観察しています。」

そういう私達あの世側の都合だからこそ、縁壺さんの来世とその周
囲には私たち獄卒はもちろん、八百万の神々も協力してフオロー態勢
を整えており、少なくとも今のところは痣もなく生まれ、赤子離れし
た身体能力も見せずに普通の子供らしいという報告を受けています」

鬼灯からの「少なくとも今のところは無問題」という返答に、巖勝
は氣勢がそがれたのか急に静かになって、「……そうか」と再び体勢を
正座に戻してから言う。

「……話は、終わりか?」

尋ねているようで、それは拒絶だとはっきりわかった。

とことん縁壺以外には何の反応もしない巖勝に狛治は苛立ちが沸
き上がり、彼は鬼灯が告げなかったことまでもつい口にしてしまう。

「……縁壺は生前の鬼狩りの功績と、死後も無惨様を討伐する最大の
助力となったこと、何よりもあの清廉潔白な精神性が評価されて、本
来なら天国に永住のはずだった。」

あの人の転生は、あの世側の都合じゃない! 縁壺自身が転生を望
み、あの世側も例外は転生しても例外なのかを知りたかったから許可
が出たんだ!!

……巖勝。お前は、縁壺が転生を自ら望んだ理由がわかるか?」

巖勝は答えない。向きこそは狛治の方を向いているが、最初と同じ
く俯いて虚ろな目で地面だけを見ている。

だから、鬼灯から咎められないのも合わさって更に狛治の怒りが過
熱してゆく。

「……うたさんたちの、妻子の転生の順番が来たことはもちろん理由の一つだろう。

けれど、縁壺の功績とその報われなかった生前を考慮したら、妻子の天国永住権を要求しても許された。

その事を教えても、縁壺は望まなかった。家族と共に天国で過ごすことよりも、家族と同時期に転生することを選んだ理由が、本当にわからないのか!？」

縁壺の妻であるうたは、善良な人間だったが天国への永住権をもらえるほどでは流石になかった。子供に至っては生まれることすらできなかつたのだから、罪も徳もないのは当然。

彼女たちがすぐに転生させられるのではなく、天国でかなり長い間転生待ちの判決に至ったのは、縁壺のあまりに悲しい生涯をせめて死後は報われるようにという十王の慈悲だった。

無欲な縁壺がその慈悲だけで十分だと言って、妻子の永住権を求めないのは彼らしい判断だ。

けれど、彼はさすがに無惨と相対した頃辺りから自分の特異性をだいぶ足りないが自覚していたので、無欲だからこそ「転生したい」とは言わない。

妻子を再び失う悲しみを口にせず、ただ耐えるような人であることを狛治は知っている。

それを知らない、わからない、わかっていない巖勝が許せなかった。だから狛治は巖勝の死に装束の胸元を掴み上げて無理やり立たせ、縁壺が転生を望んだ理由を突き付けた。

「縁壺はお前の為に転生を望んだんだ!!」

自分がいる限りお前は自分に囚われ、罪を償うことが出来ないのに地獄の呵責より苦しみ続けるから、『縁壺』という存在を完全になくすことでお前の妄執も消そうとしたんだ!!

それさえなくなればお前は自分の罪と向き合って、贖罪することができる! 罪を償って幸せになれると信じて、縁壺は妻子と共に幸福な生活を続けることも、自分と同じようにずっと天国にいることができる炭治郎という理解者も捨てて、……『縁壺』の全てを捨ててお前

が幸せになることを望んだんだ!!

それでもまだ、お前は縁壺に執着して何もしままなのか！ 巖勝!!」

胸ぐらを掴んでいるが、まるで縋りつくように狛治は叫んで問いかける。

巖勝を許せないのは、縁壺の全てを無駄にしているからだけじゃない。

鬼であった頃、猗窩座だった頃の自分は狛治の抜け殻で搾りかすだった。そんな搾りかす程度でも残っていた人間性、強者に、それも元来のスペック頼りな無惨や童磨と違い、研鑽を怠らない黒死牟に歪んだ形であったが憧れていたのは本当。

死後、獄卒となつて彼の罪状を知つても、彼が鬼になつた経緯は嫉妬であることを知つても、痣の副作用で自分に時間がもうないと追い詰められるまで、努力という正しい手段でそこに至つたのだから、敬意は失われなかった。

だからこそ、狛治も縁壺と同じ願いを懐いていた。罪を償つて、幸せになつて欲しかった。

無惨や童磨と違って、巖勝は自分のしたことを悪だと認識していることだつて明白だから、なおさらに。

この骨と皮だけの体は、自分と同じ傷の証。

本来なら巖勝は、罪の原因が嫉妬なので地獄より餓鬼道に堕ちるべきだった。

けれど彼は餓鬼道には堕ちなかった。落ちる意味を失くした。

餓鬼道に落ちていないのに、餓鬼そのものの姿をしている理由。

その姿は、人を食つたという人としての最大の禁忌を犯した自分を許せない証なのだから。

だから、狛治は懇願するように叫び、待った。

巖勝の答えを待った。

そして巖勝は答える。

「……………嘘だ」

狛治を見ないまま、俯いて地面を眺めたままポツリと呟いた。

「……それは、嘘だ。……縁壺が、私の幸福を望む訳などない。

あいつは、愚かな私をようやく見限っただけだ。……だから、お前の話は全部……嘘だ」

その答えに、狛治の敬意による願いゆえの怒りが純粹な怒りに変化する。

「……お前、……お前！ 本気で言っているのか!？」

本気で、俺の話が！ 縁壺の願いが嘘だというのか!？」

縋るようだったのが本格的に締め上げるように胸ぐらを掴み上げ、ガクガク前後に揺さぶりながら狛治はもう一度、最後のチャンスとして訊く。

だが、巖勝はもう何も答ええない。

その沈黙はあまりに雄弁な肯定だった。

「つつつつふざけるな!!」

だから、狛治は怒りを込めて叫んだ。

懐いていた敬意は、憧れは碎け散った。……そのはずだった。

「……つつそれはこちらのセリフだ!!」

枯れ木のような手が胸ぐらを掴んでいた自分の手を引き離し、そう言い返された時、狛治は誰に言われたのかをしばし理解できなかった。

「……何が、私の為だ。……何が、私の幸福を願っているだ。

ふざけるのも、大概にしろ!!」

俯いていた顔が上がる。

その眼は、目の前の狛治など見ていない。けれど、ここではないどこかだけを見ている虚ろではなかった。

涙を溢れさせたその眼は、確かに「前」を向いていた。

「前」を向き、見据え、巖勝は叫ぶ。

「私は知らなかった！ 知ろうとしなかった!!」

私はあいつが妻子を亡くして……それも、人助けをしていたからこ

そ間に合わなかったことなど知らなかった！

そんな事を知らず、知ろうともせずに私はあいつのことを『神の寵愛を一身に受けた』と思っていた!!

そんな愚か者の幸福など、望む者がどこにいる!？」

粕治の言葉を、縁壺の望みを「嘘」だと断じた理由、信じない理由を叫ぶ。

生前、自分が知ることはなかった弟の人生の断片。

鬼狩りになった動機を知らなかったことが、どれほど罪深かったかを慟哭で訴えた。

「周囲やあいつ自身が語らなかつたなど、言い訳にならない！ あいつは、父上が忌まわしいからしやべるなという言葉を7年間鵜呑みに続けた、融通の利かない不器用者だと私が一番知っていたのだから！ 私はあいつの兄なのだから、再会した時にまず最初に私が聞くべきだったんだ！ 知ろうとするべきだったんだ!!

出奔してからの縁壺の人生を！ 鬼狩りになった理由を!!

なのに、私はあいつを妬むだけで何も知ろうとはしなかつた!!」

縁壺に追いつきたくて、勝ちたくて妻子を捨てた。

縁壺と自分とは、欲しいものが違っていた。

けれど巖勝にとつて妻子が、家族が無価値だったわけではない。大切に思えない、守りたいと思えないものでは決してなかつた。

妻子を、家族を最優先には、最も大切には出来なかつた。

自分は母親の病気を知らなかつた。母の苦痛に気付かず、弟は甘えているだけだと思っていた。

自分は兄として、長男として恥ずかしくない者になろうとしていた。

母に甘えない事こそが母に出来る最大の親孝行だと思っていた。

だから、縁壺が父の門下生を倒した時よりも、剣術の秘訣を尋ねて訳のわからぬ返答をされた時よりも、母の日記を読んで真実を知った時に、臓腑が灼ける程の嫉妬に襲われた。

……母が大切に大好きで、子供らしく縁壺のように甘えたかったという本音を押し殺して親孝行をしていたつもりが、縁壺こそ最大の親

孝行をし続けていたことを知ったからこそ、巖勝は剣の道を極めると
いう妄執に取り憑かれた。

そうしないと、そうでないと無意味になる。

自分の我慢も努力も、母に何もしてやれなかったくせに母を犠牲に
してまで学んでいたものを無駄には、無意味にはしたくなかった。

だから、大切には出来なかった。

だから、理解できない訳はなかった。

「兄だから、あいつより強くなければならない！ 双子なのだから、私
も同じ域に至れる！ そう思っていたくせに、家族として兄として一
番にしなくてはならないことをしなかった!!」

縁壺を信じていたから案じていなかったのではなく、私はただ自分
の事しか考えなかった!!」

大切には出来なかったが、大切に思うことは理解できた。

だから、知っていたらきつと自分はあるまで生き恥を晒すことに
はならなかった。

縁壺は自分が欲しいものを全て、何の苦勞もせずに生まれ持ってい
ると思ひ込んでいた。

最も大切なものを、欲しくて欲しくてたまらなかったものを、最も
残酷な形で失っていたことなど知らなかった。

知っていても、自分は間違いなく縁壺を追い続けていただろう。

だけどきつと……自分にもう時間がないことを知っても、無惨の手
を取りはしなかった。

弟にも手に入らぬものがある。弟は神に愛されているのではなく、
むしろ呪われている。

人助けをしたからこそ最愛を失う人生を知れば、どんなに努力を重
ねても縁壺に追いつけなかった自分の人生も平等だと納得できた。

未だに諦めることができないものを、諦められただろう。

けれど、それは出来なかった。

兄弟という切れぬ縁ゆえに固執したくせに、兄弟としてすべきこと
をしなかった。

だからこそ、自分の生涯は生き恥に塗れた虚無そのものなのは自業

自得。

「そんな愚か者の為に、最も欲した妻子との日々を、幸福を捨てるあいつは何なんだ？」

それでは私以上の愚か者ではないか!!」

自分が愚かなのは事実だ。

だけど、人を救い続けた者が、他者を思いやり続けた者が、自分の愚かさの巻き添えで自分以上に愚かに思われるのはだけは嫌だった。「私は母を思いやれず、父の期待に応えられず、妻子を捨てた挙句に自分の子孫をこの手で切り刻んだ愚かを超えた鬼畜だ！」

そんな鬼畜に情けをかけるのは愚か者のすることだ！ 幸福など、望まれていい訳がない！」

自分が犯した罪を知っている。許される訳がない、許されていい訳がないことを知っているからこそ、「知っていればこんなことにはならなかった」という言い訳はしない。言い訳になるとは思っていない。

知らなかったこと、知ろうとしなかったこと自体が罪なのだから。だからこそ、認める訳にはいかない。

嘘であるべきなのだ。

「だから……だから……嘘だ。嘘であるべきなのだ……」。

あいつが私の幸福を望んだことなど……嘘だ。縁壺は……愚かな私を見限っただけだ……。

そうでない……あいつは私以上の愚か者になる……。愚かな私の為に……幸福を捨てる愚行を犯したということになる……。

だから……全部、嘘だ」

巖勝は泣きながら否定し続けた。

弟を愚者にしない為に、ただそれだけの為に自分に与えられ、許されたものを拒絶して手離して、ただそれだけを守り続けた。

* * *

「……見当違いなことを言っすまない」

巖勝の慟哭に、否定に、裁判でも明かされなかった本音に狛治が返せたのはただそれだけ。

自分は何もわかってなかったことを思い知った。

巖勝は死後、地獄に堕ちても百年間、自分が犯した罪に見向きもせず縁壺に執着しているくせに、その本人が現れたら存在を無視して拒絶という無意味なことをしていると思っていた。

本当はもう、縁壺に追いつくことは諦めている。彼のようにはなれないことに納得している事に気付けなかった。

それは縁壺への償いと幸福を願ったもの。

無視も拒絶も無様な執着さえも、縁壺に失望されて見限られることで自分に対する罪悪感を捨てさせる為だったと、今の叫びで理解できた。

最低を貫くことで縁壺から見限られようとしていたくせに、無惨や童磨のような傲岸不遜でクズの言動を上辺だけでも出来ず、無視という形でしか表せなかったのは、巖勝の本質は決して奴らと同じ悪ではない証。

巖勝は十王の裁判で下された罰よりも重い罰を自ら定め、行っていたことを知った。

……それでも、狛治は言えない。

縁壺の望みが、転生した理由が巖勝の望み通り嘘だとは言えない。

知ったからこそ、言う訳にはいかない。

「……巖勝さん。」

あなたはあまりに多くの人を殺した。その理由は縁壺さんへの身勝手な嫉妬によるもの。だから今、ここにいます。

けれど、縁壺さんに非はなくとも、無惨の鬼になると決めたのはあなた自身の意思でも、あなたがそこまで追い詰められ、絶望に付け込まれたことは『罪』ではない。

動機の源流が嫉妬でも、それを縁壺さんにぶつけることなく、惜しまぬ努力で自分に出来ること全てやりつくした末ならば、甘言に乗ってしまったことは罪でも、そこに至るまでの過程は罪ではない。讃えられるべき事だったのです。

だからあなたは鬼殺隊を裏切った罪で、吼々くくしよ処よに墮獄しなかった。あなたは鬼殺隊に恩を懐いていなかった。それでも、自分本位な目的でもあなたは人を救い、鬼殺隊に貢献し続けたのだから。

それは、あなたの犯した罪でなかったことにはならない」

狛治が言いたかったこと、けれど巖勝の本音を知ったからこそ言えなかったことを、今まで黙っていた鬼灯が再び、淡々と告げる。

最低でいたい巖勝が、決してそうではない事。彼自らが背負い続ける罰は、過剰である事。

縁壺によく似た清廉さがあるからこそ、誰も救われぬ、救えない自己満足に成り下がっていると、どこまでも冷徹に断言する。

縁壺が兄を慕っていたこと、巖勝は慕うに値したことは否定も拒絶も出来ないことを告げる。

「だからあなたは、償わなくていい。縁壺さんが勝手に抱き続けた罪悪感に対する償いなんてしなくていい。あなたが償うべきなのは鬼になってからの罪であり、巖勝としての罪はないに等しいのだから。

もう縁壺さんはいない。あなたが幸せになろうがなれなくとも、それは変わらない。ならばあなたは十王の判じた罰を受け、罪を償ってさっさと転生してしまいなさい。

今から罪と向き合って呵責を受ければ、百年もすれば釈放されるでしょうから」

あまりに巖勝にとって残酷な事実だけを告げて、鬼灯は背を向ける。

鬼灯の言葉に何の反論もせず、立ったまま俯き続ける巖勝とそのまま立ち去ろうとする鬼灯を交互に見て、狛治はただ戸惑い続ける。自分が何をすればいいのかわからなかった。

「巖勝さん。あなたは生前、縁壺さんに対し『頼むから死んでくれ』生まれでこないでくれ』と願ひ続けていましたね」

だから、鬼灯が立ち止まって最後に告げた言葉は巖勝ではなく狛治に向けたものだろう。

「死を願ひ、最初から存在しないで欲しかったと望んでいながら、これだけは一度も望みませんでしたね」

気付いていない狛治に、教えた。

『自分が弟だったら』や『他人だったら良かったのに』とは、思ったことはなかったのですね」

狛治はその言葉に目を見開き、振り返って巖勝を見た。

巖勝は何も言わなかった。

俯いて顔を隠しているが、震える体が泣いている事を隠しきれていない。

沈黙はもはや、幼子同然の意地。

否定してもそれは自分自身すら騙せないことを知っているから、沈黙し続けているだけ。

だから狛治も、もう何も言わない。

何も言わないまま、鬼灯の後をついて刑場から出て行った。

何も気づけていなかった自分の未熟さを恥じ入りながら、狛治は願う。

時代柄、兄が弟より優れていて当然の価値観だったのだから、巖勝が弟であったのならただ兄を慕って憧れる素直な弟になっただろう。

追いつけないことを悔しく思い続けても、ここまでこじればしなはず。

他人ならばたとえ年下でも、自分の部下だったとしても、やはりどこかで諦めがついただろう。

よりにもよって痣以外は全く同じ容姿の双子だったからこそ、巖勝自身も周囲も巖勝だけが縁壺と同条件であり、追いつける存在だと期待してしまっただから。

きっと兄でさえなければ、他人だったのなら、一番平和だった。

弟の死や存在の否定を願わなくても済んだのに、……巖勝は望まなかった。

死んで欲しいくらい、存在を否定したいくらいに嫉妬に身を焦がし

ていながら、生きているのなら、存在しているのなら家族がいい。

自分が、兄でありたかった。

だからこそ、縁壺に追いつきたかった。超えたかった。強くなりたかった。その願い全てが叶わなかったからこそ、死を望んで存在を否定した。

狛治は気付けなかった。

鬼灯が最後に巖勝に向けた言葉は、巖勝の今までが無意味だということだ。

今から罪を償えば百年後には……、転生した縁壺の来世の寿命が尽きた頃には巖勝も転生できるかもしれないということを見せていたことによく気付く。

だから狛治は願う。

もう一度、巖勝と縁壺だった魂が兄弟になれることをただ、願った。

* * *

「……私は、お前が嫌いだ」

独り残された刑場で、巖勝は呟く。

嫌いだ。大嫌いだ。

自分を置いて行った弟なんて、大嫌いだ。

「何なら今すぐにでも休みを申請するよ」

「鬼灯様、暇!? 遊ぼう!!」

「せめて書類書いてるの中断してる時に言えよ!」

「どっからどう見ても仕事中心!!」

シフトで本日は午後から休みのシロが、自分の仕事を終えてすぐに事務仕事真つ最中の鬼灯に勢いよく尋ねて、ルリオと柿助が盛大に突っ込む。

二匹が先に突っ込んで叱責してくれたからか、鬼灯自身は特にシロを咎めず普通に断わると、シロはいきなりの凶々しい発言は反省して謝るが、本気でしょんぼりと落ち込んでしまう。

盆休みは久々に桃太郎と獄卒就職前のように過ごしていたので、シロはホームシックに近い状態らしく、同僚の動物獄卒とはなく人に近い存在と一緒に過ごしたい気分なのだろう。

その事をルリオたちがフォローのつもりで鬼灯に話せば、鬼灯は何かを考えるように視線を宙にやる。

その仕草に三匹は小首を傾げるが、鬼灯と同じように事務仕事をしてきた粕治は微笑まじげに笑って提案した。

「鬼灯様、確かここ最近はずっと閻魔庁でデスクワークでしたね。俺に任せられるものでしたら俺に任せて、少し気分転換に秦広庁にでも散歩に出たらどうでしょうか? あそこに提出する予定の書類がありましたし」

何だかんだで動物好きである鬼灯は、自分によく懐いているシロを可愛がっていることを粕治は知っている。

だからこそ、ホームシックになっているシロが「一緒にいたい」と思って選んだ相手が自分であることを結構嬉しく思い、希望をかなえてやれたがっていることも察したのだろう。

鬼灯が思いついたが公私混同だと自分で却下した案を代わりに提案され、察しと気配りが良く利く部下に鬼灯は少しだけ満足そうに目を細め、「そうですね」と素直に彼の気遣いを受け入れた。

* * *

「他の庁の補佐官は、狛治さんがいる鬼灯様が羨ましいだろうね！」

尻尾を千切れんばかりに振りながら、シロは秦広庁への道すがら鬼灯に言い、続いてルリオや柿助も「優秀なだけじゃなくて気配り上手だしな」などと狛治を褒め称える。

「そうですね。最初からあの人は優秀な獄卒になると確信してましたが、人間性が素晴らしいので想定外の方向でも私はよく助けられています」

そして鬼灯も素直かつ全面的に同意するが、一か所だけ訂正を入れた。

「けれど、確かに私はよく狛治さんを引き合いに出されてうらやましがれますが、他の庁の補佐官の部下も負けず劣らず優秀ですよ。」

今から向かう秦広庁の篁さんの部下なんて、あの人でないと務まらないとまで言われています」

自分だけが恵まれている訳ではない事を告げると、三匹は引き合いに出された「篁の部下」に興味を懐く。

彼らは篁とはすでに面識があるからこそ、なおさらに「あの人でなければ務まらない」と言われるほどの存在が気になったようだ。

「篁さんの部下!? 狛治さんと似てるけど違う方向性で苦労しそう!!」

「違います。あの篁さんへんじんの部下として『あの人じゃない』ではありません。秦広庁の役人としてです」

その気になった理由をシロはストレートに口に出して驚愕し、ついでに鬼灯に対して失礼な感想をぶつ放したが、鬼灯は自分の説明が悪くて起こった勘違いだけを正す。

自分が狛治を振り回して苦労をかけている自覚があるのは、良いことなのか余計に性質が悪いのか……。

そんな狛治に対しての同情が深まる感想を三匹は懐くが、そこを深く考えると狛治が何か余計に可哀相になって来るので、ルリオが代表として「秦広庁の役人としてってどういうことですか？」と他に気になった部分を訪ねようとしたが、その前に半ば独り言で鬼灯は更に爆弾を投下。

「というか、私とも篁さんとも方向性は違いますが、あの人も同じくらい相当な変人ですよ。篁さんの手綱を握ろうとして苦勞するどころか、割と積極的に暴走させている節がありますし」

「「えっ。」」

とんでもない情報をしれつと落とされ、三匹は思わず固まる。

しかし既に鬼灯と彼らは秦広庁の中に入っている。今更、引き返すことは鬼灯に失礼だということも抜いても遅すぎる。

だって、彼がこの愉快な一人と3匹に気付いたのはこの直後なのだから。

「おや？・とても珍しい組み合わせだね」

優しげで柔らかい声音が、「鬼灯・篁レベルの変人」という情報でフリーズしていた3匹を解凍させ、振り向かせる。

そして、困惑する。

彼らの背後に立っていたのは、巻物を数本抱えている男性。

声音の印象通り、穏やかで柔らかくて優しい微笑みを浮かべた眉目秀麗な人物なのだが、彼はあまりに若かった。

あの世の住人なのだから、享年が若いだけであの世在住歴は四桁だったり、桃太郎のように老衰で死んでも魂は最盛期まで若返っているだけで驚くようなことではないのはわかっているが、それでも下手したら牛若丸時代の姿をしている義経より幼く見える相手は、放つ癒し系オーラも合わさって閻魔庁よりはマシだが何かと殺伐しているあの世の裁判所には不自然な人だった為、シロたちは大いに戸惑った。

そんな彼らの戸惑いに微笑みを深めながら、相手は鬼灯に挨拶を交わして尋ねる。

「こんにちは、鬼灯殿。久しぶりだね。そちらの三匹は実弥の所の獄卒かな？」

「実弥？・なんかどつかで聞いたことがあるような……」

「確か……不死川さんの名前がそうじゃなかったっけ？」

「え？・おにーさん、不死川さんの知り合い？・もしかして鬼殺隊の人？」

その質問に柿助がまず「実弥」という名前に反応し、ルリオがそれは不喜処の主任の一人、つまりは自分たちの上司である不死川の下の名前である気付き、そしてシロが遠慮なく尋ね、トドメに鬼灯が両者の質問を同時に答える。

「ええ、こちらは右から順にシロさん、ルリオさん、柿助さん。お察しの通り、不喜処の従業員で不死川さんの部下に当たる、元は桃太郎のお付きの動物だった方々です。

そして遅れましたがご挨拶を。お久しぶりです、産屋敷さん」

「「え？」」

鬼灯はシロの相手が鬼殺隊関係者なのかという質問自体には答えしていないが、普段は名前で呼ぶのに苗字で呼ぶことで答えを教える。そして確かに、その珍しい苗字に聞き覚えはシロにさえあったので気付けた。

それは覚えやすい苗字だからではなく、あまりにインパクトの強い出来事をやらかした挙句、そのインパクトをさらに深める名称を鬼灯がちよくちよく口に出していたからも大いにある。

だから三匹とも、その名前を聞いた瞬間にあの「インパクトがありすぎるやらかしとその名称」を連想したのだが、幸いと言えるのかどうかは本当に不明だが、ルリオや柿助はともかくシロですら失礼どころではないその「インパクトしかない名称」を口走りはしなかった。「やっぱりそうか。初めまして、鬼退治の神獣たち。

私は産屋敷うぶやしき 耀哉かがや。産屋敷ボンバーをやらかした、鬼殺隊を作り指揮していた一族の当主だった者だよ」

「「自分で言った!!」」

シロ達の突っ込み通り、耀哉は三匹と視線を合わせるようにその場に膝をつき、実に柔らかく美しく微笑みながら、口と思考が直列していて反射で物事を口走るシロより先にあのインパクトしかないやらかしとその名称を自分で言った。

そして耀哉はその突っ込みに対しても、淡い微笑みを浮かべたまま「うん。産屋敷と言えどもうそれしか浮かばないって人が多くて、初対面の方は気まずい思いをするそうだから、自分で言うことにしてい

る」と言い出す。

その言葉と微笑みには、ヤケクソとか諦めといった常識人だからこそ常識を放り投げる原因にして残ったものが見当たらない。本気で言葉通り自分なりの気遣いのつもりらしいが、天然らしい「何がそんなにおかしいの？」と言わんばかりの困惑や疑問もそこにはなかった。

おそらく彼は自分の言動をおかしいことは自覚した上で、それでもこれが手っ取り早いという思考の下で動いていることがなんとなく察せられたことで、桃太郎ブラザーズは確信する。

この天国の住人以上に穏やかで、神仏並みに癒し系オーラがすさまじい人物こそが、先ほど鬼灯が話題に上げていた篁の部下であり、秦広庁にはなくてはならない人材であることを。

一瞬で理解できるくらいに、確かに篁とも鬼灯とも方向性は違いうが同じくらいに変人だった。

* * *

「実弥から話を聞いて、会いたいと思っていたんだ。嬉しいよ。『桃太郎』の物語は私達、鬼殺隊にとって『鬼は必ず倒せる』という希望を抱かせる英雄譚だからね」

三匹の困惑とドン引きに気付いた上で、それでもマイペースにニコニコ笑って耀哉は彼らに会いたがっていた理由を語りつつ、それぞれを一匹ずつ優しく撫でる。

その優しい手つきと自分たちの自尊心を大いに満足させる言葉に、シロはもちろん柿助も照れながらもまんざらでもなさそうな顔をして、困惑とドン引きをすっかり忘れさる。

ルリオも彼らほどではないが、耀哉への「変人」という印象をだいぶ好感で薄れさせつつも、初めに見た時から感じていた引っかかりを口にした。

「ありがとうございます。……ところで産屋敷さん、不喜処に来たことありますか？ 不死川さんに会いに来たとかで」

「？ いや、実弥に限らず私の隊士達とは何かと機会を見つけて交流を続けているからこそ、仕事中に私事で会いに行くことはないよ。」

仕事関係でも私は刑場に出向くことはない業務だから、閻魔庁内ならともかく刑場で会うことはまずないね」

ルリオの問いに小首を傾げて耀哉が答えると、ルリオの方も不思議そうにクリつと首を傾げた。

「あれ？ そうなんですか？ じゃあ、閻魔庁で俺も見かけたただけなのか？」

すみません。なんか産屋敷さんの顔をどつかで見たような気がして仕方がないんですよ」

「え？ ……あー確かに。俺も見覚えがあるような気が？」

「そう？ 俺はわかんない！」

「それ、たぶん動画ですよ」

ルリオが引つかかっているデジヤビュじみた見覚えを語ると、柿助も輝哉の顔を良く見直して同じ意見を口にする。シロの意見は全く参考にならないので、二匹はナチュラルスルー。

そしてルリオが気付けなかった見覚えの原因をサラツと鬼灯が答えた瞬間、耀哉がまとう空気が一瞬だけだが変化した。

まさしく刹那としか言いようがない一瞬だったので、三匹はその変化した空気が耀哉のものだということにすら気付けなかった。

だから戸惑いつつも、「動画？」と鬼灯が出した答えをオウム返しすれば、鬼灯は補足を加えた答えをもう一度告げる。

「はい。無惨の地獄めぐりの動画です。というか、見覚えの原因は無惨ですよ。」

あいつとこの人、1000年の開きがあるとは思えないくらい血縁を感じさせるそっくり具合ですから」

「……………あ」

三匹が思わず納得を口にして耀哉を見た時には、耀哉の変化した空気にも気づけた。

いつもブチキレている無惨と穏やかな耀哉なので、まず表情が違い過ぎるのと髪質も両者は大きく違い、トドメに耀哉がだいぶ若いので初見では気付けなかったが、言われたら確かにこの二人は1000年の開きがある血縁者どころか、親兄弟並みにそっくりだ。

そんな無惨そっくりさんな耀哉は、穏やかな微笑のまま何かやたらと怖い空気を纏っていた。

「……うん。かなり、とても、ものすごく不本意なことだけど、私はあいつに似ているらしいね。自分のことだからか私自身はよくわからないけど、あの動画が発表されてからたまに他の庁の獄卒とか、裁判関係者じゃない出入り業者とかに二度見されるよ」

笑顔のまま耀哉は相変わらず穏やかな声音で、鬼灯の言葉を肯定する。

声音こそは天国の空気そのものの穏やかさだが、1000年間私財を投じて鬼を、無惨を殺す方法を探し、学び、鍛え上げる組織を作りあげ、数分も稼げたら大金星とわかつていながら妻子もろとも自爆した闇の深さが全く隠しきれていない。ものすごくイケメンなのに、無惨に似ているのが相当嫌らしい。

「すみません、私の方もあいつをよく知るからこそあなたと顔の造形が似ている事を完全に忘れてました。配慮が足りてなかったことを謝罪します」

今更だが鬼灯は無惨に似ていると不特定多数に認識されるデメリットについて謝罪した。もちろん別に鬼灯は耀哉の不穏な雰囲気にはビビった訳ではなく、ただ言われて今、配慮不足に気付いただけだ。誠意はあるのだろうが根本が問題だらけの鬼灯だが、幸いながら耀哉は纏っていた闇を霧散させて最初のように穏やかに返答する。

「ああ、構わないよ鬼灯殿。気にしないで欲しい。」

私とあいつの関係は調べたらすぐにわかるし、それにあいつ本人と間違えられることはまずないから、迷惑ではないよ。驚かれたら先回り、『よく言われますが赤の他人です』と答えたらそれで終わるだけの話だ。

だから、あの動画を制作中止にするなんて言わないで欲しい！ 私には本当にまったく、何も気にしてないから！」

「そうですねありがとうございます。言われなくとも制作も発表も地球が爆発しても中止にはしません」

ナチュラルに一応先祖に当たる無惨を「赤の他人」呼ばわりしながら

ら耀哉は、本心から鬼灯がやらかしてしまったこと自体は気にしていない、むしろそのデメリットよりも無惨の無様を見たいし、より多くに見せたい欲求の方が勝るらしく、最後の方は若干興奮しながら今後の動画作成を後押しした。

そしてその後押しに全力真顔即答で応える鬼灯。実はこの二人、表面上の雰囲気などは対極もいい所だが、内面はよく似ているのかもしれない。

「耀哉さん、何で地獄に就職しなかったの？」

そんな事を二人のやり取りを見てて思ったからか、シロは若干呆れつつ尋ねた。

ここまで未だに無惨への恨みが全く晴れていないのなら、同じ獄卒でも地獄の拷問担当に就職すれば良かったのにと思われたことに、当然耀哉は気付いて苦笑した。

「私は無惨に生命力を奪われていたのを抜いても、素で虚弱な方だったようですね。拷問が出来るような体ではないんだよ。巻物だってこの数が精一杯だ。」

そしてこの通り、実弥や小芭内とは違って私怨を未だに薄めるどころか煮詰めるような者だからね。呵責する相手は無惨だけではない。それなのにこんな私が呵責しても、相手は贖罪などする気になれないだろう」

耀哉の言葉をどこまで理解できているのか怪しい顔だが、とても立派なことを言っている事くらいはわかったシロは尻尾を振りながら「耀哉さん、真面目でカッコイイね！」と感想をまとめた。

シロよりもちゃんと理解している柿助とルリオもそう思ったので領いておいたが、二匹は内心で「優しいのかそうでもないのかよくわからん人だ」とも思う。

正解は「優しいが冷徹」だ。鬼殺隊の給与や柱の待遇の良さと、入隊テストの段階で死亡率半端ないことでそれは証明されている。

「正直、虚弱体質を抜いても耀哉さんには拷問担当の獄卒ではなく、この秦広庁に就いてもらうように説得しましたね」

「そうだろうね。私も拷問よりこちらの方が向いていると思っている

よ。成果を出せた時の充実感もあるしね」

鬼灯の補足と耀哉の同意に、三匹は耀哉は秦広庁になくてはならない人材であるという話をしていたことを思い出す。

鬼殺隊をまとめ上げただけあって、事務能力や人を使うことに関しては有能なのだろうと柿助は思うが、ルリオはそこまでは同じだが、それだけなら鬼灯はわざわざ「秦広庁」と限定しないだろうという所にまで気付き、その事を尋ねた。

だが鬼灯か本人が説明する前に、法廷に続く廊下から鬼にしても目立つもしやもしやした頭の男が走って来た。

「あー、いたいた！」

産屋敷さーん！ ごめんちよつと予定より早くなった！ 今すぐに法廷に来て！」

秦広庁の補佐官である小野 篁が鬼灯やシロ達に気付いた様子もなく耀哉の腕を掴んでそのまま法廷に連行。

それに自然体で鬼灯たちはついてゆく。

「おや、ちょうど良かった。実演で見せてもらえそうですよ。耀哉さんがこの庁になくてはならない理由である職務を」

* * *

「お願いします!! お願いです!! どうか! どうかお慈悲をおおおおつつ!!」

秦広庁の法廷は、端的に言って修羅場の真つ最中だった。

一人の女性亡者が号泣しながら土下座して、秦広王に懇願している。シロたちは来たばかりというのと、女性の叫びは嘆願というよりもはや雄たけびのようでほとんど言葉になっていないので、法廷に入る前から声は聞こえていたが具体的な内容はほとんどまだ聞き取れず、把握してない。

だが、何を望んでいるのかはわかっている。

自分が死んだことを納得できず、生き返らせてくれと頼み込んで継り付いているのだろうかと思っていた。

そんな亡者はどこの庁にもいる。

そう、思っていた。

彼らが自分たちの間違い、一か所だがあまりに大きな間違いに気づいたのはようやく聞き取れた女性の悲痛な哀願。

「私は地獄に堕ちてもいいから、この子だけはあああつっ!!」

その発言を聞き取って気付く。泣き声は一人だけではないことに。女性の絶叫でかき消されているが、弱々しい泣き声が女性の覆いかぶさる体の下からも聞こえている事に三匹は気付く。

気付いた瞬間、女性の正確な状況が理解できたからか、聞き取れていなかった言葉の大部分がわかるようになった。

「まだ三歳なんです！ 一か月前に誕生日を迎えたばかりなんです!! 向こうが信号無視してきたんだから！ この子は何も悪くないんだから、お願いだからこの子だけは生き返らせてよおおおっ!!」
女性は何の非もないのに事故死した母親だった。そしてその事故は子供も巻き込んだ。

「裁判で『生き返らせて欲しい』と言う者は、望む資格のない者ほど裁判が進むにつれて後がないことを実感してゆき、見苦しく主張しませぬ。

逆に同情の余地が大きい者はこうやって、最初の裁判で半狂乱になつて懇願するんですよ。

ただでさえ裁判段階の亡者は獄卒や他の亡者に危害を加えにかかったり、よほど悪質な逃走などしない限り獄卒は実力行使をいきません。懇願がこのように切実なものならなおさら、心情的に手出しできないんですよ」

鬼灯からしたら見慣れているからか、いつも通り淡々とした声音でシロ達に説明する。

最初の説明はただ現状に関する補足だが、その次に口にしたのは耀哉の役目。

「我が子を心から愛しているんだね」

耀哉は子を自分の体で庇うように土下座しながら懇願し続ける母親の傍らに膝をつき、静かに語り掛ける。

その発言の邪魔にならないよう、いつもは良く通るバリトンボイスを鬼灯はひそめて説明する。

「耀哉さんの声は『l／fのゆらぎ』という、簡単に言えば人間が心地よいと感じる声音を持っています。」

それに加えて物腰の柔らかさと穏やかな口調、初対面でも相手の言動をよく見て事情を察して思いやる性格が、あの復讐心の塊である鬼殺隊をまとめ上げたカリスマ性であり、それを生かしてあの人にはここでこの亡者の説得役を担ってもらっています」

「l／fのゆらぎ」は、シロはもちろん柿助や優等生のルリオもよくわからない用語だが、その「声による安らぎ」は初めに声を掛けられた時から感じていたものだったので、三匹は大いに納得する。

そしてその効果の絶大さも、実際に見せつけられた。

「けれど、一度深呼吸をして落ち着きなさい。君が嘆き、悲しむからこそ君と同じくらい母を愛している子が君と同じ悲しみを懐いている。

子の悲しみが親の悲しみであるように、子も親の悲しみを自分のものにしてしまう。そして幼いからこそ、その悲しみを持て余して親以上に傷ついてしまう。」

だから、愛しているのならどんなに辛くても苦しくても、耐えねばならないのだよ」

母親の絶叫じみた声に掻き消されそうな音量だったのに、その発言はちゃんと耳に届いていたらしく母親は嗚咽こそは続けているが、それでも哀願を一旦やめて耀哉に目を向ける。

「ただ耀哉の説得に納得した訳ではない。その向けられた眼にはむしろ敵意に近い、「お前に何がわかる!？」という怒りが宿っていた。

しかしそんな敵意を向けられても、耀哉の微笑みの穏やかさは変わらない。」

「私の言葉に納得できないのもわかるよ。」

それでも私には子供がいるから。例えば我が子が親の死を嘆き悲しんでも、それはいつか必ず訪れることなのだから、その悲しみは一時のもの、必ず乗り越えられると考えて生き延びて欲しいという気持ちは痛いほどわかる。自分が犠牲になることで我が子が助かるのなら、地獄のどのような呵責にだって耐えられる。

……そう思っていた。けれど、私は大きく間違えた。

『親が死ぬこと』と『親が自ら死を選ぶこと』は、全く違う。特に子を
生かすために親が死を選べば、子は自分が親を殺したのではないかと
いう罪悪感をその生涯で背負い続けることを、私は想像できなかった」

女性亡者は耀哉の子持ち発言に虚を突かれて目を丸くするが、お構
いなしに耀哉は話を続ける。

どこまでも優しく穏やかに話しながら、けれど自分の気付いた「間
違い」に関して悲しげに悔やみながら語った。

「君の気持ちには、願いは痛い程にわかる。君は私なんかよりも……子
供を全員生かすことは出来なかった私よりもずっとずっと素晴らし
い人なのは間違いない。

けれど、その愛が我が子の重荷になってしまふことを知って欲し
い。臨死体験の記憶は大概忘れるもの、その子の幼さを考えれば覚え
ていない可能性が高いけれど、断言はできない。確実にその子の記憶
を消したり封じたりする術は、私達にもない。

具体的に覚えていたのならまだマシだ。けれど断片的な記憶なら、
泣き叫ぶ母親だけを覚えていたのなら、その子は母親に愛されて守ら
れて生き延びたのではなく、母親を見捨てて犠牲にして生き延びたと
誤解してしまうかもしれない。そしてその誤解は、この子がもう一度
死ぬまで解くことは出来ない。

……それでも、君は自分の選択を、この子を無理やりにも蘇らせ
た選択を後悔しないと言い切れるのかい？

元々生き延びる運命だったのなら、君は裁判を終えた後に正規の手
順で資格を得たらこの子の守護霊になれる。守護霊として傍らに寄
り添って、その心の傷を癒すことは出来るかもしれないが、横紙破り
で蘇生させたのならもう恩赦を与えられない。

……正真正銘、もう何もしてやれることがなくなってしまふんだ」
耀哉に反感を懐いていたはずだが、彼はどこまでも自分が子供に懐
く愛情に理解と共感を示すので八つ当たりの言葉さえ出てこない。

それどころか、その愛ゆえに起こりうる悲劇に気付かされ、彼女は
自分が抱きしめていた我が子に視線を移す。

子供は母親にしがみつき、泣きじやくつている。震えながら拳が白くなるほど自分の死に装束を握りしめ、子供は泣きながらたどたどしい言葉を繰り返していた。

「ごめんなさい」と、嗚咽混じりに繰り返す言葉。

3歳ほどの幼児なので、状況を全く理解していない。母親の言葉がどのような意味を持っているのかわかっていない。庇うように抱きしめられている事すら、それはどちらかと言えば苦痛なのかもしれない。

子供にとって今の現状は、自分の為に母親が助けを求めているのではなく、母親がただ喚き怒っているだけという認識かもしれない事に、きつと彼女は気付いたのだろう。

「……………ごめん……………ね……………」

彼女もまた嗚咽混じりに、我が子に謝った。

抱き潰しそうなほどに入れていた腕の力を抜いて、優しく壊れ物を扱うように我が子を抱きしめ、頭を撫でて、背を軽く叩いてあやす。

「……………守れなくって……………ごめんね……………。死んじゃって……………ごめん……………。ごめん……………ごめん……………ごめんなさい……………」

謝り続ける。

彼女だって何も悪くないのに、我が子を暴走車から守れなかったこと、一緒に生きることが出来ないことを……………、たとえ自分のしている事を「怒っている」と誤解して怯えているとしても、それでも自分を拒絶するのではなく、しがみついて離れないでいてくれる我が子に謝り続けた。

そんな彼女に、耀哉は再び優しい穏やかな笑みを浮かべて告げる。

「あの世は、終わりではないよ。あの世にはあの世の生活が、日常が、幸福が、……………続きがある。」

だから……………君とその子が別れることはまずない」

その断言が、母親の断ちがたい未練をようやく断ち切った。

「……………ごめんなさい。……………生き返らせてと、わがママを言つて」

子供を抱きしめながら、泣きながら最後に告げた謝罪は、子供にではなく耀哉や秦広王に向けられたものだった。

「鬼灯殿、待たせて申し訳ない」

母親が落ち着いたことで裁判が再開されたので、ひとまず耀哉は放置してしまっていた鬼灯の元に戻って謝罪する。

「いえ、お気になさらず。むしろ、シロさん達に耀哉さんの役目を知ってもらういい実例でした」

鬼灯は本心通りに返答し、そして三匹は敬意がこもった目で耀哉を見つめている。

その視線が眩しすぎるのか、耀哉は困ったような苦笑を浮かべた。

「耀哉さん、流石は鬼殺隊のトップだね！ あの『鬼殺しの狂犬』って呼ばれてる不死川さんが鬼灯様より尊敬している人って言うのも納得の力リスマ!!」

「……それ、実弥の二つ名かい？ あの子、そんな風に言われてるのか……」

シロが尻尾を振りながら無邪気に、不死川の知られたいくない職場の二つ名を暴露しつつ率直な感想を口にして、耀哉も隊士我が子の二つ名に困惑する。ちなみに「鬼殺し」の由来はもちろん地獄の同僚である鬼を殺したからではなく、生前もほぼ無関係。ただ単に、「鬼も役目を失う程の強面」という意味らしい。

そんな由来を知る由もなく、耀哉は困惑しつつも控えめだがはつきりとシロの発言を否定した。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、私は口先が上手いだけの人間で尊敬なんてされるべき者ではないよ。さっきの彼女に言ったように、私は下の子だけでも生かすために妻と上の子二人を犠牲にしておきながら、遺したあの子達に重荷を負わせた酷い親だ」

自分はシロが思うほどの人間ではないと言い切る。

言われてシロ達も、なんか笑ってしまいそうなのネーミングだが実は全然笑えないやらかしである「産屋敷ボンバー」の詳細……妻子を巻き込んだ盛大な自爆とその理由を思い出し、沈黙する。

「あまねや子供たちは皆、私を許してくれているが、私は地獄に堕ちるべきだと思っている。」

もしも私が逆の立場だったら、私は『お館様』を庇っていただろうから、皆の気持ちも十王の審判も否定しないけれど、それでも……私
のしたことは正義ではないよ。

……こういう手段を取った私は、どんなに憎んで恨んで否定して拒
絶しても、やはりあの……無惨の血族で、この顔の通り特に奴と似て
いるんだらうね」

自嘲の言葉だが、狛治が自分の過去を語る時の痛みに耐えるもので
はなく、まるで今日の天気のように、当たり前前の自然体で語るので、
三匹にはフォローの言葉さえ出てこない。

だが鬼灯にとっても耀哉の自嘲は割と良く聞かされているいつも
の話なので、こちらもちちらでサラツと返す。

「確かにあなたと無惨は変な所そつくりですけど、地獄行きを許容で
きる時点であれば月とミシシツピアアカミミガメくらい違いますよ」
「まあ、それもそうだね。ありがとう、鬼灯殿。少しほっとしたし、奴
をわざわざすっぽんではなく要注意外来生物に例えてくれたのも素
晴らしい」

重い話かと思っただら世間話としての軽い愚痴レベルだったらしく、
しみりしてた桃太郎ブラザーズは一気に脱力。

そして無惨をとことん貶める発言には抜かりない鬼灯と、そんな細
かい所まで気付いて喜ぶ耀哉はやはり似た者同士だと確信する。

「けれど正直、顔が似ているのはどうにか出来ないかとは少し思っ
てしまうな。」

普段は本当に、二度見されるくらいだからいいのだけど……この
間、小学生が社会見学で来た時はさすがに有休を取った」

「賢明です」

本当に世間話でしかないのか、互いにテンションは上がりも下がり
もしないまま会話が続行。

少し前に話していた「無惨と顔がそっくりである」事の弊害を耀哉
は語り、その判断を鬼灯は端的に讃える。

鬼灯の言う通り、大人ならどんなにそっくりでも無惨の立場を知っ
ていたら、刑場の外、それも現世や天国に近い秦広庁で働いている訳

ないと判断するので、耀哉からの「似てるとよく言われるが、赤の他人です」という説明がなくても困惑程度ですむのだが、子供なら話は別だ。

分別がまだついていない子供なら、無惨は罪人という認識ではなく「何やつてもいい奴」くらいに思っている奴は少なくない。そしてそんな風に思っているクソガキが、場所や状況を考えて「無惨がこの場にいる訳がない。だからこの人は他人のそら似」だとは判断せず、短絡的に攻撃をしかねないので、子供が集まりそうな日は休むという判断は、賢明に間違いない。

「本当にすみません。こちらからもテロップを流すなりして、誤解を解くように対策します」

「うん。手間をかけさせて悪いけど、お願いするよ。秦広庁は最初の裁判所だから、閻魔庁の次くらいに社会見学とかで子供が来る機会が多いからね」

「そうですね。ですが……テロップだと一番警戒すべきアホな子供はそういうのを絶対に読まず、下手したら読んだうえで禁止されたからこそやらかしたりもしますからね……」

「ああ……、それもあるのか。確かに、義勇がたまにその事で悩んでたよ……」

耀哉の死んだ経緯とその罪の話よりも何故か重い方向に向かっていく話に、シロは呆れたような口調で投げやりに提案を口にする。

「いつそ耀哉さんも動画に出ちゃったら？」

似てない所もいっぱいあるんだから、二人一緒に動画に出たら違いがはっきりわかって間違える人はいなくなるんじゃない？」

「……………それだ!!!」

「!?」

シロからしたらほぼ考えなしの脊髓反射に等しい発言だったのだが、それは二人にとっては天啓に等しい答えだった。

鬼灯と耀哉が全く同じだけの時間沈黙してから、同じタイミングで声を上げてシロたちどころか背後の裁判をしている秦広王たちまでも盛大にビビらせる。

そんな彼らの反応も目に入らぬほど二人は明らかに興奮して、耀哉どころか鬼灯もテンションを上げて話を進める。

「耀哉さん！ 次の休みはいつですか!？」

「なんなら今すぐにも休みを申請するよ」

「それはさすがに機材や人材が揃わないので、せめて明日にしましよ
う！」

鬼灯の問いに耀哉は、天使のように素晴らしく美しい煌めく笑顔で答え、鬼灯はさすがにそこまで即行は無理だと言いつつも十分無理すぎるスケジュールを早速組み始める。

二人とも何の予定を立てているのか、主語を口にしていないので秦広王や篁にはさっぱりだが、当然三匹は理解しているので、彼らは内心でとりあえず狛治に謝る。

明日、本当に急すぎる無惨の動画撮影が行われて、無惨とこの二人に振り回されるであろう狛治にはシロでさえもなんか本当に余計なこと言っでごめんなさいと心底思った。

無惨様の楽しい十六小地獄めぐり（焦熱地獄編）

「皆さま、こんにちは。本日も当初は『残忍なイケメン』と認識されていましたが、徐々に『長所が顔しかない』と言われ、最終戦ではついに『イケメンが唯一のとりえだったのに』と言わしめた鬼舞辻 無惨の十六小地獄めぐり、焦熱地獄編を始めてゆきたいと思います」

「おや、今回の汚名大喜利は顔縛りなんだね。私としては逃亡シリーズが好きだよ。」

散々、臆病者だからこそその逃げ足の速さに煮え湯を飲まされ続けたからこそ、あれは趣深く思えるね」

「どんな趣だ!? 貴様は趣の意味を分かって使っているのか!?

というか、何故お前がここにいる産屋敷!」

いつも通り、視聴者に挨拶と同時に無惨の汚名大喜利してから本日巡る地獄を語った鬼灯に、ゲストである産屋敷 耀哉は少女のようにあどけなく稚く笑って自分の感想を口にする。

そして無惨はいつも通り地面に簀巻きでビチビチと魚のように撥ねながら、周囲の獄卒たちの総意と言えるツツコミを入れた。

存在自体が間違いそのものなのに、どうしてツツコミは割と正論なんだろう? と粕治は昨日、秦広庁から帰ってきた鬼灯が急遽決めた地獄めぐりの準備と、その影響で色々狂った仕事のスケジュールの疲労による現実逃避気味に考える。

もちろんその疑問が晴れることはない。

虚しい疑問を抱えた粕治は遠い目をしつつ、無惨の疑問である耀哉が今回の地獄めぐりにゲスト参加する理由は答えておいた。

「……耀哉さんが今回急遽ゲスト参加するのは、あなた唯一の長所であるその顔の所為ですよ」

「何でお前も『唯一の長所』を強調する!? というか、本気で意味がわからんわ! 私の容姿に嫉妬でもしてるのか!?

「顔よりも未だ自分に絶対の自信を持つ君の精神性は、ある意味ではすごく羨ましくて嫉妬するかもね」

粕治としてはこの上なく直球でわかりやすく伝えたつもりだが、他

者に迷惑しかかけてないのに自分こそが他者から理不尽な迷惑をかけられ続けていると信じて疑わない無惨が、相変わらず最悪のハイパーポジティブを発揮して、耀哉はわりと皮肉なしに言い返す。

そんな二人のやり取りを横目でチラ見してから、鬼灯は視線をカメラに戻して今更だがゲスト紹介を始めた。

「早速舌戦を繰り広げている本日のゲストですが、本動画をエンドレスリピートされている方々、つまりは元鬼殺隊の方は知っているでしょうが、改めて紹介します。

こちらは秦広庁の獄卒。秦広王の補佐官である小野 篁さんの部下、産屋敷 耀哉さん。

生前は鬼殺隊の最高責任者、通称『お館様』。無惨が討伐された無限城の戦いの直前、太陽を克服した鬼である禰豆子さんの存在を知って、まだ彼女の居場所も見つけられてなかったのに、鬼殺隊の本拠地である産屋敷邸を見つけた事でテンション上がって、まっつったくする必要のなかった挑発をしに来た無惨を見事に煽り返し、この人天国行きにしていんだろうか？ と十王たちが頭を抱えた『産屋敷ボンバー』をしでかした方です。

そんなこの人が本日ゲストな理由は、狛治さんが言った通り。無惨とこの人、顔が似ているので少々生活に支障が出ているため、明確に別人だと周知させる意味合いがあります。

まあ、見ての通りただ単に参加したかったからしただけでもあるんですけどね」

耀哉の裁判の面倒くささによる私怨なのか、「産屋敷ボンバー」というパワーワードを積極的に広めてゆく鬼灯の説明に、そのパワーワードが入るとわかっていた狛治や撮影獄卒スタッフも脱力、もしくはドン引きなのだが、やらかした当の本人は相変わらず癒し系の変人だった。

「あれは本当に巻き込んだ妻子にも、前例のない裁判を煩わせた十王にも申し訳なく思っただけ反省している。もし仮に同じような機会が今後あるとしたら、今度はせめて一人で自爆しようと思った」

のほほんと反省点を耀哉は述べるが、反省は本心なのだろうか方向性がやはり闇の深さ故に覚悟が決まりすぎている。

「耀哉さん、反省してるのならそもそも自爆を選択肢から外してください。俺からしたら顔よりも奥の手が自爆という点が、無惨様とそっくりですよ」

「わかった。やめよう。金輪際、私は爆発しない」

「おい！　そこまで私と共通点があるのが嫌か!?　自爆行為そのものよりもそれが私との共通点になることが嫌なのか!?!」

そんな無惨の認めたくないが反論できない、「鬼殺隊は異常者の集団」発言の実例すぎる覚悟に狛治がドン引きながら突っ込むと、耀哉は急に真顔になって前言撤回。

あのガン決め覚悟を掌返して、これまた凄いパワーワードで自分の新たな決意を語る耀哉に、無惨はビチビチ跳ねながら文句をつける。

自分だって欲しくない共通点だが、自分ではなく相手が全面的に否定して拒絶することが大変ムカつくらしい。

「本日巡る地獄は焦熱地獄。ここは邪見を行った者が堕ちる地獄なのですが、『邪見』ではわからない方も多いでしょう。

『邪見』とは、元は仏の教えに背いた行いの事でしたが、昔から日本は仏教も神道もごちゃ混ぜちゃんぽんだだったので、宗教的な教えは横に置いて道徳や倫理に背いた行いに屁理屈を付けて正当だと言い張ることだと思ってください」

彼らのやり取りをBGMにして、鬼灯は今までの地獄と違ってどのような罪で堕ちるのかちよつとわかりにくい焦熱地獄を説明する。

説明しながらちらりと視線を動かした。

しゃがみこんで微笑みながら無惨を見下ろして煽っている耀哉を見てから、視線はまた動く。

今度動いた方向は特に何も無い、しいて言えば本日最後に無惨を落とす予定である刑場、「金剛嘴蜂虻こんごうしほしゅうしや」の方向だった。

（急に撮影を決めたので打ち合わせは何もしてませんが……、まあ耀哉さんなら言わなくても勝手にやるでしょう。）

むしろ問題は狛治さんの方ですね）

流石に急なスケジュール変更のしわ寄せに巻き込んだ部下に関してだけは、鬼灯は申し訳なく思っってその埋め合わせを考えつつも足は

さつさと初めの地獄に向かっていた。

* * *

・焦熱地獄の十六小地獄

「本日最初の地獄は、『大焼処^{だいしょうじょ}』。

ここは『殺生をすることで天に転生することができるといふ邪見を述べた者が落ちます』

「これ以上なくストレートに無惨様が堕ちる地獄ですよ、ここ」

「ふぎけるな！ 私はそのようなことを誰にも一度も言った事などない！！」

「それが事実だとしたら、それはそれで最低極まりないけどね」

この地獄に堕ちる罪状の説明を聞き、狛治が素直な感想を口にする
と無惨はいつものように自分にそのような罪はないと喚いて主張。

しかしその主張は耀哉がバツサリ切り捨てる。耀哉の言う通り、自分の下僕である鬼たちに殺生を正当化させる発言で誑かしてないのが事実だとしても、そもそもこいつは殺生どころか食人するしかない体を作り替えているのだから、むしろそう言つて罪悪感をなくしてやっただ方が優しさをなくらいである。

「耀哉さんに全面的に同意します。

そして、最初から残念なお知らせになりますが、実はこいつにとつてこの地獄は意味がないとまでは言いませんが、苦痛は最小限になつてしまう地獄です」

「？ どういうことかな？」

「……あー」

鬼灯も深々と頷いてから、うんざりした顔と声でこの地獄に無惨を落とすには問題があると告げ、耀哉がわずかに表情を険しくさせる。

殉職した平隊士の名前や経歴も覚えていた耀哉は、その記憶力と言

うより真面目さを發揮して、獄卒でも自分の持ち場以外は覚えていない地獄の名称を全て把握している。

だが、流石に第一裁判所で下される判決はざっくりと天国か六道のうちのだれかを決めるくらいがほとんどなので、地獄行きが決まっても具体的にどの地獄に落ちるかまでを決めることはめったにない。

なので名前は把握していても、そこに堕ちる罪状や行われる呵責内容はずがにすぐには出てこない。

逆に現場仕事もこなす狛治はすぐさま思い出して、声を上げてから頭を抱えて耀哉に教える。

「……耀哉さん。ここの呵責内容は……周囲の燃え盛る炎の他に、文字通り『後悔の炎』が体の内側から生じて罪人を焼き焦がすことなんです」

「よし。無惨にガソリンを飲ませよう」
「即答!?!」

狛治の答えに溜めなしで耀哉は提案し、狛治と無惨が同時に突っ込んだ……というか慄いた。

無惨に後悔の炎が生じる訳がないと嘆くかと思ったら、いつものアルカイツクスマイルで例え線香程度でも爆発炎上させる方法を提案してくる耀哉の発想など予想できる者がいる訳……

「耀哉さん、飲ます方をやりますか？ それとも漏斗を口に突っ込んで支える方ですか？」

いたよ。

すっかり事前用意していたガソリンの一斗缶と漏斗を耀哉に差し出して選ばせる鬼灯に、耀哉は非常に楽しそうに笑って、「あまり重いものは持てないから」との理由で漏斗を受け取った。

「実は私とはなくお前らこそ血縁あるだろ!!」

その漏斗を口にぶっ刺される前に無惨が叫んだ発言には、狛治も内心で大いに同意した。

なお、無惨は線香程度の炎すら生じなかった為、鬼灯と耀哉はそれぞれ火をつけたマッチを鼻の穴にぶっ刺して無惨を物理炎上させた。

『ぶんだりかしよ
分茶梨迦処』。

『飢えて死ぬことで天に昇ることができる』という邪見を説いた者が落ちます」

「だから、そのような発言はない！ むしろ私にとっては飢える奴の方が迷惑なゴミだったわ！」

「迷惑なゴミにむしろ俺はなりたかったんですけどね」

これは確かに先ほどの地獄と違って言ったことないと断言できるものだったが、食人衝動なんてものを植え付けられた側からしたら、そう言っただけで飢え死にさせてくれた方が幸福だった者は間違いない。

そのいつそ飢え死にしたかった、だからこそ今もお後遺症に苦しむ狛治が冷めた目で無惨を眺めながら、今度は彼が無惨にガソリンをふりかけた。

「ここでの呵責内容は、まずは体中から炎が吹き出すこと。そして苦しんでいる罪人の耳に、『ここには分茶梨迦の池があり、水が飲める』という声が聞こえ、その声に従って池に飛び込むとそこは水ではなく炎の中でさらに苦しむ羽目になるということなんです……」

最初の大焼処と同じく本来は身体の内側から後悔や罪悪感などと言った感情による炎が罪人を焼くのだが、そんなものがない無惨に再び火のついたマッチを投げつけて燃やしながら鬼灯は刑罰を説明する。

「……あれと血縁があるという事実が一番いやだと感じるのは、ああいう所だよ」

「でしようね。同情します」

「だ、大丈夫ですよ、耀哉さん。俺はああいう奇行を見るたびにあなたと無惨様は全然似てないなと思いますから……」

遠い目で呟いた耀哉の言葉に鬼灯は同情を示し、狛治は必至で慰めるが、二人の目も耀哉と同じくひたすら遠い。

鬼灯によって火をつけられた無惨は、熱い、早く水を持ってこいな

どと喚いてのたうち回りながら、「分荼梨迦の池」という幻覚をかけられている炎の海に飛び込んだ。

火をつけられてから飛び込むまでの時間は、2秒である。間違いない、罪人を騙す発言が聞こえる前、聞こえていたとしても最後まで言えていない。

死後から今までの1000年間で色んな地獄を体験しまくっているはずなのに、まったく学習しない無惨のアホさ加減を三人は奴が灰になるまで遠い目で眺め続けた。

* * *

「こちらは、『龍旋処』りゅうせんじょです。

ここでの邪見は『欲、怒り、愚かさを断てば涅槃に入れる、という教えは嘘だ』というもの。もしくは礼儀作法の意味を解さなかった者が落ちる地獄です」

「言った言っていないは関係なく、無惨様の存在自体がそう主張しているようなもんですよね」

無惨の突っ込みどころが満載過ぎる言い分を言われる前に狛治は否定する感想を口にしながら、呵責の為の龍を準備する。

この地獄の龍は体から毒を発し、罪人の周囲で激しく旋回することで罪人は竜の毒だけではなく回転することで鱗がやすりの役割を果たし、摩擦で全身がポロポロに削られて砕かれるという拷問内容なのだ、その呵責を実行する前に耀哉は控えめに提案してきた。

「鬼灯殿に狛治。龍の鱗ではなく龍にこれらを取り付けて無惨を削ってはダメかな？」

可憐な少女がささやかなおねだりをするような上目遣いで差し出してきたのは、使用済みと思われる便所ブラシ。

可憐なのは外見だけ、控えめなのは態度だけだった。

「良いですね、それ。ダメージそのものが軽微になる分、苦痛が長引くのもまた素晴らしい」

「お前は何を考えてるんだー!! この異常者代表格!!」

「ははは。このブラシとアイディア提供者は、私ではなく篁殿だよ無惨」

龍の毒や鱗よりも屈辱的かつ衛生的に嫌なものを持ってきたことに鬼灯は称賛し、無惨はキレて相変わらずお前が言うのだが否定できない罵倒を叫ぶ。

しかし耀哉は全くその罵倒を気にせず、とつても楽しそうに笑いながらこの屈辱的な拷問アイディアは完全な愉快犯によるものだと言露。

狛治はその愉快犯である筈にGJと思うべきか、余計なことすんなと怒るべきなのかを迷いつつ、とりあえず持ち前の優しさでこれだけは主張しておいた。

「それ、取りつけられる龍が可哀相じゃないですか？」

「何故、龍の方を庇う猗窩座あつっ!!」

当然、その優しさは無惨には向かない。

使用済みの便所ブラシをいくつも体に括り付けられる龍に心底同情しながら狛治はそう訴えたが、鬼灯の答えは「仕事です。我慢してもらいます」という無情なものだった。

便所ブラシをくりつけられた龍が涙目に見えたのは、狛治の気のせいではないだろう。

ついでに無惨の周りを旋回して回転するスピードが異常に早かったのは、間違いなく龍のヤケクソだ。

* * *

「お次は、『赤銅しゃくどう弥泥魚いぎよせんしよ旋処』。

ここは簡単に言えば、『輪廻転生などはないから、今世を好き勝手生きた方が得』といった考えを説いたり実行した者が墮獄します。

呵責内容は、ここの高熱の銅汁の海に落とすこと。この海には鉄の魚や悪虫がいて、魚は銅汁に漬かっていない罪人の上半身を噛み、下半身は銅の海で焼かれながら海中の悪虫に食いつかれます」

今回の地獄では珍しく、無惨は自分が無実だの不当だのと言った主

張をしなかった。

だがもちろん、殊勝に自分の罪を認めて呵責を受け入れた訳ではない。

ただ単に喚くのではなく、ブツブツと文句をつけているだけだ。

その文句の内容がこちら。

「ないも同然だろうが。このような目に遭うのなら、それこそ生前は何の遠慮もするべきではなかったわ」

『遠慮なんていつした？』

無惨の発言に三人は反射的かつ真顔で問うた。

こいつの身の程知らず、自分を棚に上げた発言はもういつもの事だと思っあまり腹が立たない領域にまで至っている三人だが、流石にこの「遠慮」発言は聞き逃せない。

しかしこれまたクソム力つくことに無惨にとっては説明するまでもなく、周知されていて当然の事象という認識らしく、奴は「何故、そんなこともわからないのだ？」と言いたげな憐れみと蔑みを込めた困惑の表情を浮かべて、地面に簀巻きで転がされていても上から目線で言い放った。

「はあ？ 鬼をさほど増やさなかったことを、元は私もそうだったという懐古による慈しみと遠慮と言わず何と言う気だ？」

『……………』
こいつ、ただ単に自分がオンリーワンでありたかったから増やしたくなかったことを完全になかったことにして、棚上げしている。

いや、なかったことにしているのではなく、無惨にとっては並行して存在してもおかしくない動機なのかもしれないが、何にせよこいつの慈しみはもちろん遠慮も全く遠慮になっていない。

なので、もう否定するのも無駄だし面倒なので、鬼灯は無言で無惨を銅汁の海の底に犬神家になるように頭から投げ入れた。鬼灯様、呵責内容が変わってますよ。

「……………というか、無惨様が主張する遠慮をやめて、縁壺さん対策に人類を全て鬼にしたとしたら、仮に縁壺さんを殺せても青い彼岸花が見つからないのでは？」

「それどころか、炭治郎みたいに無惨以上に鬼として才能がある者を目覚めさせて下克上も有り得たことをわかってないんだろなあ」

そして狛治と耀哉は無惨の頭無惨ぶりが酷すぎて、鬼灯のやっている事をスルーして無惨の更に頭無惨な所をそれぞれ突っ込んでいた。

* * *

「ここは以前、マキさんやミキさんが一日獄卒体験を行った時にも紹介しました、『鉄~~箱~~処^{てっかくしよ}』ですね」

まずは割と最近行ったイベントを引き合いに出してから、鬼灯はいつも通り地獄紹介。

「たとえ殺人を犯しても、もしもその殺された人が天に生まれ変われるなら殺人は悪くない」と説いた者、つまりは『被害者の為にしてやった』という屁理屈で殺人を正当化する者が落ちる地獄です。

ここではまず『平等受苦無力無救』という高温の赤銅が茹つている釜で茹でられ、『火常熱沸』というさらに高温の赤銅、『鋸葉水生』というさらに高温の赤銅、同じくさらに高温の赤銅が入った『極利刀鬘』、圧力鍋で更に高温にした……何故か急にお湯の『極熱沸水』、最後に『多饒悪蛇』という蛇入りの茹で釜という六つの巨大な釜で罪人をひたすらに煮ます」

「前半四つもいるか!？」

「その突っ込みはミキさんから既に頂いております」

久々に自分が無罪だと凶々しさが天蓋突破している発言ではなく、呵責内容自体に正論なツツコミが入ったが、鬼灯の言う通りそれはミキが既に突っ込んでいる。っていうか、獄卒たちも大体がそう思いながら亡者を煮てる。

「何でか知りませんが、イザナミさんがそう設定しちゃったんですよ。この辺は本当にイザナギへの私怨というより、ただ単に疲れたたんでしよう。」

一応、それぞれの釜で茹でながら更に拷問を行ったりするのでバリエーションはあるんですけど、やっぱり前半四つが温度上がるだけは

面白みがないですよね」

「別に面白みを求めて言った訳ではない!!」

鬼灯が説明になつていない前半四つの謎を説明しつつ、それでもミキに引き続いて無惨からも突っ込まれたワンパタをどうにかしようとして首をひねり出し、今更無惨は自分の突っ込みが藪蛇だったことに気付いたのか更に突っ込み返す。

「汚物では等活地獄の屎泥処と被るから、高濃度の塩水や酸、あとはキムチみたいな刺激物で煮るのはどうだろうか鬼灯殿」

「塩水や酸はともかく、キムチは獄卒の食欲を無駄に刺激しそうなのでやめた方が……。あと、辛い物が苦手な獄卒にとっても辛いでしょうし」

「酸も釜を酸に耐えられる素材にしないと無理なので、すぐに採用できるのは塩水ですね。……水分がすぐに蒸発しそうですから、もう塩に埋めて焼いた方が早いかな?」

「ああ。それもいいね。とりあえず、『極利刀鬘』ではカツラ（内側に刃物がついた、屈辱的なデザインなもの）を被せる前に、髪を筆り取るのはどうだろうか?」

しかし当然、突っ込みは遅いどころか何もかも無駄。鬼灯と耀哉は生き生きと新しい拷問内容を考え、狛治も内容には突っ込みを入れても止めやしない。

とりあえず、耀哉発案の「カツラを被せる前に筆る」は鬼灯が即採用して、実行された。

お館様は実にいい笑顔で、爽やかに筆ってくれました。

* * *

『血河漂処』です。

文字通り血の河に漂う地獄で、河の中に群れ成して住む丸虫が罪人に取り付いて焼き焦がされるのがここでの拷問です。

落ちる罪状は、何度となく戒に違反しながら、『苦行すれば全ての罪は許されるのだからかわまない』と考え、自らの身体を傷つけるよう

な苦行を行うこと。つまりは自分の罪はペナルティは受けたのだからで終わらせ、反省せずさらに罪を重ねるような者が墮ちる地獄です」

「鬼灯様、ここはどうこじつける気なんですか？」

「こじつけるな！ お前らこそ、先ほどのかその前の地獄に墮ちる異常者ども!!」

これまた毎回恒例、無惨がクズ過ぎてむしろ犯していない罪状の地獄だったのでいつものように狛治が尋ね、無惨が突っ込む。

「無惨が自分の血を与えることで人を鬼にしていたことではいいのでは？ 一応、血を与えることは自傷行為と言えるしね」

そして理不尽の限りを尽くした無惨が理不尽な目に遭っているのを、耀哉は「ねえねえ、今どんな気分？ どんな気分？」とでも言いたげに笑って見ながら雑なこじつけを提案。そして鬼灯はこれまた即時採用して無惨を河に蹴り落とす。

お館様のご家族と隊士の皆さま、お館様は実に幸せそうです。もうそう思っただけで放っておいてあげてください。

* * *

「こちらは、『饒骨髄虫処』」。

落ちる罪状は……、今よりも良い世界ではなく、当たり前前の人間界に転生することを望んで戒を破り、牛の糞に火をつけて自らの身を焼くこと」

「あるか!! というか、いるのか本当にその自傷行為でここに落ちた努力の方向音痴!!」

「向上心がないのは問題ですけど、そこまでやったのならむしろ人間界に転生させてやって欲しいのですが……」

「……イザナミ様、元のインド地獄の内容を直訳してろくに内容を確かめずに採用してしまったのかな？」

今までの地獄でも訳のわからない罪状で落ちる地獄はあったが、その中でもトップクラスに意味不明かつピンポイントな罪状だったの

で、無惨の突っ込みに伯治どころか耀哉でさえも素直に同意を示すように、困惑の苦笑を浮かべながら疑問を口にした。

「癪ですが、努力の方向音痴はまさしくぴったりですね。

もちろん、だいぶ前にこれは改定されていますよ。現在は周囲の同情やそれによる施し目当ての詐病や、生活保護の不正受給した者などが当てはまります。

そしてここでの刑罰は、鉄の杵で打たれて蜜蝋のように体をどろどろのミンチ状にされ、前世の罪のために虫となって地獄に落ちた者たちと混ぜ合わされて肉の山となり、火をつけて燃やされること」

もちろんこの合理主義な補佐官はとつくの昔に同じ突っ込みを入れて改定しており、その改定後の罪状と刑罰の内容を口にしたら、無惨は鼻を鳴らして這いつくばったまま胸を張って言い切る。

「ふん！ なんにせよ、私には無関係だ！ 私は常に自身の向上を目指し、努力し続けてきたのだからな！」

「その結果が、下弦解体に産屋敷邸でのレスバトル敗退からの爆散、浅草ニードルで拘束、逃亡手段に最有効な鳴女さんの殺害などですか……」

「改めて思い返すと、無惨様の討伐って無惨様本人が一番貢献してる気が……」

「悪口は自己紹介の法則をここまで地で行くのは、もはや奇跡だね」「やかましいわ!!」

しかしドヤ顔で言い放った自分の努力が見事に空回って裏目に出まくったことを、もはや感心の域に達した目と声音で指摘されて逆ギレする。

耀哉の言う通り、こいつこそ努力の方向音痴に相応しいぐらいの自滅っぷりであることを獄卒たちも思い知りながら、無惨を杵で叩き潰した。

* * *

『『一切人熟処』』。

邪教を信じ、天界に転生する為に山林や草むらなどに放火した者が落ちるとされていましたが、現在は宗教に限らず自分の価値感、いわゆる俺ルールをTPO問わずに貫き通すわ、他者に押し付けて圧制するわな者が該当します。

……で、またしても残念なお知らせですが、この刑罰は罪人の目の前で家族や友人など、かけがえのない人々が焼かれるのを見せ、精神的な責め苦を与えるものなんです」

「じゃあ、無惨を焼きながら無惨にふさわしい呵責を考えようか」

「お前はただ私を焼きたいだけだろ!!」

最初の地獄と同じどころかそれ以上に無惨には無意味、何の責め苦にならない刑罰だったが、ここでも耀哉は即答。

代替案はさすがに即座に出てこなかったが、それが浮かぶまで放置ではなく焼きながら放置を提案するので無惨が喚いて突っ込んで抗議するが、この時ばかりは声を荒げて耀哉は言い返す。

「失礼な！ その程度な訳ないだろう!!」

焼くだけですすめのはもつたないから、足先から薄切りして焼いていってその焼き肉を君自身に食べさせてやりたいぐらい思ってるよ!!」

「思ふな異常者！ 私でもそんな拷問を実施どころか考えたことないぞ!!」

「耀哉さん！ そろそろ黙ってください！ 炭治郎や胡蝶あたりがその発言知ったら泣く!!」

どのあたりが失礼なのか、本当にそこまで思っている事を想定してほしかったのかと突っ込みたい願望を叫ぶ耀哉に無惨は本気でドン引き、狛治は涙目でストップをかける。

流石に狛治に突っ込まれた事で耀哉も我に返って、深々頭を下げて言った。

「ああ……、申し訳ない狛治。 ついつい、大人げがないことを言ってしまった。

君の前で食人を望むようなことは、無神経にもほどがあつたね。誠に申し訳ない。心から謝罪するし、私の謝意と誠意が伝わらないのな

ら、君が望むことは何でもするから遠慮なく言ってくれ」

「それもありましたけど、そこじゃない。けどもうそれでいいので、とりあえずテンション落としてください」

しかし元々、隊士たちの前でも本人的に自分の闇の深さを隠していたつもりはない為、耀哉の反省点は隊士たちのお館様像が砕ける言動の数々ではなく、狛治のトラウマを抉るような願望を口にしたことらしい。

自分が涙目だった理由はそこが大きいですが、ストップをかけた理由ではない部分を真摯に謝られた狛治はもう投げやりに開き直って、耀哉の上がり続けるテンションを抑えるよう念押し。

だけど狛治の努力は、耀哉の願望を今度も採用した鬼灯によって台無し。

けれど鬼灯もさすがに大事な部下のトラウマを抉りたくなかったので、無惨焼肉本人一人食べ放題は後日狛治がない時にすることで、本日は無惨薄切り焼肉で手を打った。

* * *

「お次は、『無終没入処』むしゆうぼつにゆうしよ」。

これもまた当初は、『動物や人間を焼き殺したものは、火を喜ばせたという理由で幸福を得られる』と考え、実行した者が落ちるといふ訳のわからないピンポイント罪状だったので、現在は躰と称した虐待や体罰、自分や自分に関わる者の評価を上げる為の他者を貶める行為、つまりはヘイトスピーチなどを当てはめています。

刑罰は、燃え盛る巨大な山にまずは登らされ、手、足、頭、腰、眼、脳などに分解されてそれぞれが燃やされることです」

「鬼灯殿、鬼灯殿。西洋のおとぎ話の狼のように、無惨の腹に石を詰め込んでから登らせるのはどうだろうか？」

「お前こそこの地獄に落ちるべきだろうが、産屋敷!!」

鬼灯の説明の後、彼の袖をクイクイと引きながら耀哉は目を輝かせてまた拷問内容をグレードアップ提案し、無惨はキレル。

「心外だね。私は別に君の更生なんて期待してないから、この提案は君の為ではないし、隊士達も優しいからこんな惨いことを望まないことも知っている。」

つまりは、純度100%私の願望で提案している事だから、私はこの地獄に該当しない」

「胸張って言う事か、それは?!

間違いなく他の地獄には落ちること確定の自白したぞこの異常者!!」

だが耀哉は無惨の言い分にニッコリ笑顔で穏やかに反論。本当に反論の内容がそれでいいのか、お館様。

そう思いつつ、鬼灯は耀哉の提案を恒例採用して無惨の腹を裂く為のはさみを準備しながら、ボソリと呟いた。

「……無惨がここに落ちるのは、産屋敷や鬼殺隊を異常者扱いで、彼らの殺害や自身を正当化したことにしようと考えていましたが……、鬼殺隊はともかく耀哉さんに関しては無理ですね、これ。同意するのは業腹ですし、そもそもが自業自得ですが、耀哉さんが異常なのは隊士たちから見てもたぶん否定できない事実ですから」

「……………そうですね」

鬼灯の独り言に同意しながら、狛治はその辺の業火に石を投げ入れて焼く。

鬼灯が耀哉のアイディアを更に強化して、「焼き石を詰めるので準備をお願いします」と指示されたから、遠い目でそれを行いながら狛治は本気で鬼灯と耀哉は血縁があるのではないかと考え続けた。

* * *

『大鉢特摩処』です。

ここでの呵責内容は、花卉の中に無数の長い棘がある紅蓮華の花の中に落として、まずは全身串刺し。そしてその傷口から炎が吹き出すこと。

またこれも『僧たちに食事を供する大斎の期間中に殺人をすれば望

みが叶うと考え、実行した者』という、現代に限らず大半の方からしたら意味不明な罪状なんですよね。

ようは他人の行動、特に善行などを利用して犯罪行為を行った者が落ちると考えてください」

神道だった耀哉や、生前の環境から神仏を信仰していなかった狛治には、鬼灯が最初に言った罪状の内容がほとんど理解出来なかったが、現在の内容で大体は察してから無惨を眺める。

「まあ、これもこじつける必要はない地獄ですね」

「こじつけ以前の問題だ！ 私は善行に限らず他人を利用したことなどない！ どいつもこいつも何の役にも立たなかった!!」

「……君の発想、本当に絶対に見習いたくないけどそこまで自分が悪くないと確信できる自信だけは、羨ましくないけど凄いなと思うよ」

狛治の率直な感想に無惨は噛みついて反論するが、その内容はまず「はあ？」といたくなる主張からの、天上天下唯我独尊を最悪の意味で体现する言い分だった。

こいつの「利用してない」は、「使っても役に立たなかった」も入るらしい。

その主張に狛治は言葉を失ってドン引きし、耀哉も怒りや嫌悪を飛び越えて、けれど感心もしたくないという非常に複雑な感情を持って余しながら、感想を呟いた。

「本当にあなたは、変わってゆけるのは自分自身だけだというのに、まったく進歩がないですね。」

そろそろ世界に打ちのめされて、負ける意味を知って紅蓮の花に内臓をぶちまけて咲き誇ってくださいよ」

鬼灯はというと、何故か妙に詩的なのかどうかも微妙な言い回しで無惨を罵ってから、紅蓮華の中にダンクシュート。

そのシュート後、「歌っても良かったのですが、伏字だらけのなるのもあれでしたので」と謎の呟きを漏らし、狛治と耀哉は首を傾げた。

鬼灯様、第四の壁を壊しにかからないうでください。

* * *

「こちらは、『悪陰岸処』あくけんがんしよといっています。

『水死したものは那羅延天に転生し、永遠にその世界に住み続ける』という、どこだ？ と突っ込みたくなる罪状でしたが、現在はシンプルに他者が自殺するように唆したり、墮落するように誑かしたりした者が落ちる地獄です。犯罪行為への誑かしや唆しはまた別の地獄の管轄なので、そこを間違えないようにしてください」

「私は役に立たない者を更に墮落することを許すほど愚かではないわ!!」

「パワハラをここまで堂々と正当化するのか」

耀哉がしたくないけど感心してしまうほど堂々と無惨はパワハラを正当化して、自分の無罪を主張する。

そしてこれも毎度恒例、無惨がクス過ぎるからこそ当てはまらない地獄なのでさて鬼灯はどんな雑こじつけをするかと思っただけで見ていたら、鬼灯は「そうですね」と無惨の言い分を肯定した。

「確かにこの地獄は、あなたが傲慢短気どクスなパワハラの権化だからこそ当てはまりません。」

なので、あそこの山の向こうなら安全なので、そこで少し待っていてくれませんか？ 次の地獄の準備をしますので」

「するな！」

鬼灯が無惨の主張を肯定しつつ、無惨の足の縄だけを解いて近くの山を指さして指示を出す。

無惨は言う資格はないが言いたくなる気持ちはわかる突っ込みを捨て台詞に、上半身は縛られたままだが最終戦で炭治郎が一瞬呆気を取られる程、躊躇のない綺麗な逃亡フォームで駆け出した。

何故か妙に素直に、鬼灯が指示した山の方向へ。

鬼灯の指示で全てを察した耀哉が、心の底から「マジでか？」と言いたげな呆れと憐れみとあれの子孫が自分であるという悲しみが入り混じった顔で無惨を見送ってから、せめて自分が思ったよりアホではないことを期待して縋るように、隣の狛治に視線を移す。

だが、狛治もあれが元上司だという羞恥に襲われているのか、両手

で顔を覆ったままこの地獄の刑罰内容を語った。

「……この刑罰は、獄卒たちが罪人に『あの大きな山を越えれば苦を受けるとはなくなる』と言ってそこに向かわせ、山の向こうの切り立った崖に落として、崖下の石の刀に刺さって燃やされるといふものなんです」

「……何故、学習しない？」

「あいつ、誰も信じてないくせに妙に素直なのはなんでしよう？

自己中とナルシストを極めているからこそ、誰も信じてないけれど自分を騙す不屈き者は存在しないという矛盾を本気で信じてるんでしょうか？」

鬼灯もまさかここまで素直に信じるとは思ってたのか、ややポカンとした顔で疑問と憶測を口にする。たぶん、その憶測が正解である。

* * *

「……えーと、『金剛骨処』こんごうこつじょです。

『この世にある一切のものは因縁などとは関係なく生じたり滅したりするので、仏法を信じるなどばからしい』と説いた者が落ちます。これも現代に直して言うとう、他者の道徳や良心による善行を嘲って否定や邪魔をすること、または自分が原因で他者を害しておきながら自分は無関係だと嘯くことが該当します」

騙されたというかほぼ自爆しておきながら、先ほどの地獄に関して「よくも騙したな!!」と元気に叫ぶ無惨に、流石の鬼灯もちよつと引いて困惑しつつ現在地の地獄を説明する。

「これは私の所に来た時の無惨の主張そのままだね」

耀哉の方は先ほどの無惨のアホっぷりに、一応は血縁者な所為で感じなくていい自己嫌悪に近いものを懐いていたが、今はテンションを復活させてウキウキである。

ここでの呵責は「獄卒に刀で肉を削られ、金剛のように固くなった骨だけにされる。骨だけになっても罪人の痛覚はあるので、罪人に騙

された者たちがその骨を使ってチャンバラする事」なので、無惨に騙された訳ではないが、「自分が原因で他者を害しておきながら自分は無関係だと嘯いた」という罪の被害者に耀哉は当てはまる為、チャンバラ出来るのが楽しみなのだろう。

しかし無惨はここでも自爆。

「あの主張は最終的には撤回しただろう！」

その発言に、耀哉は笑顔のまま肉を削ぎ落す為の刃物で火事場の馬鹿力を発揮し、無惨の頭を縦に両断。

全ての元凶である善意の医者にやらかしたことを再現された理由を、無惨は頭無惨だからこそこれから永遠に理解できないだろう。

「違うそうじゃない託すな死ね違うそうじゃない託すな死ね違うそうじゃない託すな死ね違うそうじゃない……」

張り付いた笑顔のまま、耀哉はブツブツ呟いてそのまま無惨の肉を削ぎ落とし続ける。

彼にとって、最後の最後で最も頑張ってくれた炭治郎が最悪の結果を引き起こしかねなかった置き土産、その原因の一端が自分の発言であることが何より大きな後悔と罪の意識らしく、それを凶々しい無罪の主張に使われたのは最大の地雷だったようだ。

隠し切れていなかったが一応は抑えていた闇が、無惨お迎え時と同じくらいフルオープンになったことで狛治は引くどころか本気で怯える。

「耀哉さん、こちらもどうぞ」

そして同じくらい闇深鬼神というと、耀哉の隣で肉を削ぎ落す道具として亀の子タワシを渡していた。

狛治はこの瞬間、鬼灯と耀哉がソウルメイトだと確信した。

* * *

『黒鉄縄刀解受苦処』

ここは『人間の行いの善や悪などはすべて因縁によって決まっており、変えられないのだから、あれこれ頑張ってみても無意味だ』と説

いた者が落ちます。

ここは先ほどの『金剛骨処』とその前の『悪険岸処』の罪状をコンボで決めた者が該当すると解釈していただけたら結構です」

「だとしたら、狛治が被害者に当てはまるな。特に最後の寿退社の時が。じゃあ、どうぞ」

「寿退社って何のことですか？ あと、結構です」

狛治が無惨の洗脳を解いて、猗窩座から狛治に戻る直前のパワハラを持ち出す耀哉に、狛治はまさか自分の脱洗脳が「嫁による退職届投げつけの寿退社」と呼ばれている事を知らずに困惑し、そして笑顔で差し出された呵責用の鉄の縄を受け取り拒否した。

「遠慮しないでいいのに」

「遠慮じゃないです。先ほどの拷問というか闇の深さによる精神的な疲労が後引いているんです」

背後で無惨が「墮落するようには言っていない！むしろ働けと言っていた！」と、事実ではあるが別にそれで罪は軽くならねーぞな主張をし、鬼灯が金棒で黙らせるという光景が繰り広げられているが、いつもの事なので二人は軽やかに無視して会話を続行。

拗ねた少女のようにちよつと唇を尖らせて耀哉は言うが、狛治は多少はやりわりだが正直に「お前の所為です」と主張して、無惨の呵責を拒否した。

「そうか。ごめんね。」

なら責任を取って、私が呵責するよ！」

しかし狛治が拒否した意味、ほとんどなし。お館様を更に楽しませて、彼の家族や隊士たちに「どうしよう、この生き生きしたお館様……」と何とも複雑な感情を与えただけだった。

呵責内容？ 鉄の綱で縛られて、足から頭にかけて刀で細かく裂かれるってシンプルなものだから、すごく短く終わったよ。

* * *

「はい、『那迦虫柱悪火受苦処』です。

無惨が落ちる地獄です。以上」

「終わらせないでください！」

過去最短の説明で鬼灯は終わらせ、無惨が説得力皆無の抗議や割と正論な突っ込みを入れる間もなく、奴の頭に大きな釘で刺して、地面に昆虫の標本のように縫い留めた。

正直、他の地獄と違って元の罪状では意味不明、理不尽、ピンポイントすぎるものが多すぎるのがこの焦熱地獄で、説明が他の地獄より長くなってしまふことに面倒くさいと思っているのは確かにあるが、この投げた説明になった理由はそれだけではない。

「失礼しました。」

ここに落ちる罪状は、『宇宙にはこの世もあの世も存在しない』と説いた者というのが元なんです。現在は宗教の自由という点から、犯罪行為に屁理屈をつけて正当化して反省しない者を対象としています。

つまりは完全に無惨が落ちることが決定事項な地獄なので、要約しすぎました」

「それは納得ですけど、説明前にいきなり呵責を始めないでください。たぶん視聴者は困惑してますよ」

「そうだね。さすがに今のは性急すぎだと思うよ」

狛治の方もこの地獄に落ちる罪は知っており、「この罪状で設定した際は、ここまで典型例にしてオンリーワン過ぎる極端な罪人がいるとは予想できなかっただろうな」と思っていたので、鬼灯の「説明これでいいや」という気持ちはわかる。

だが、もちろん就職した獄卒相手ならこれくらいの雑な説明でいいかもしれないが、不特定多数の相手に見てもらおう動画でこれはちよつと……と二人はやんわりと鬼灯を咎める。

「あれでは無惨も何が何だかわからないままだろうから、屈辱や不満も感じないと思うよ。あと、脳に釘を突き刺したら、自分の現状を感じているかも怪しいから、不快な言葉を喚かないように口か喉辺りを貫通するように刺した方がいいと私は思うな」

ごめん。咎めているの狛治だけだった。耀哉は無惨への呵責が甘いという指摘だった。

当初と違って無惨の拷問に対する耀哉の視線にはもう娯楽に対する楽しげなものはなく、職人のように真摯なものに見えたのは、狛治の気のせいではないだろう。気のせいであって欲しかった。

「なるほど。ついつい他の亡者たちと同じ扱いで拷問を行っていました。が、やはり慣れで単純作業化してしまうのは問題ですね。」

「ご指摘ありがとうございます、耀哉さん。もう既に虫が湧いていますので、虫たちが血を吸い尽くして肉を食い尽くして復活したら、それを実行させてもらいます」

「力になれたようでは何よりだよ」

鬼灯は鬼灯で、耀哉の指摘を真摯に受け止めて真面目に返答。こいつら、マジで魂の双子かもしれない。

* * *

『闇火風処』です。

『この世の法則には無常ばかりではなく一定不変なものもある』と説いた者が落ちる地獄なので、これもまた『嫌いなものは変化。好きなものは不変』とほざいていた、永久頭無惨なこいつが一直線に落ちる地獄です。

刑罰はまず亡者は悪風に吹き飛ばされ、体が風の渦の中で回転し続けます。そして時折別の強風が吹くと体が砕かれて砂のようになります。すぐ再生して同じことのくり返しというもの。

では、さっそく打ちますので狛治さん。無惨を私に向かって投げてください」

「私を野球の球扱いするな!! 第一、私は最後に変化を受け入れただろうが!!」

「……鬼灯殿。刀はないかい？ 今なら私はヒノカミ神楽を舞えそうな気がするんだ」

ある意味では本人が望んだ通り、学習能力皆無という不変さを見せつける無惨に呆れながら、またしても闇が出てきた耀哉が暴走する前に狛治は抱えた無惨を、金棒構えた鬼灯に遠慮なく投げつけた。

無惨の突っ込み通り、見事に鬼灯は無惨をホームラン。風によって砕かれたというより、鬼灯にかつ飛ばされた空気の摩擦によって燃えて飛んで行った。

* * *

「はい、ついに焦熱地獄最後の小地獄、『金剛嘴蜂処』こんごうしほうしよです。

ここに落ちる罪状は、『人間の世界は因縁によって生じたので、全ては因縁によつて決定されている』という主張をした者」

「ん？ それ、私が無惨に言ったことになるね」

正確に言えば、本人に非がない被害も「前世の行いが悪いから」と難癖付けたり、生まれなどといった努力ではどうしようもないことで起こった不幸に対して、「お前に原因があるんだろう」と筋が全く通っていない自業自得を言い張って責めたてる者が該当するのだが、確かに耀哉が無惨に語った「人の想いと繋がりによる永遠」、それによる「因果応報」に関しての話は大ざっぱにくくれば、こここの罪状に当てはまるかもしれない。

その事に言つた本人が真つ先に気付いて自分で指摘し、無惨はまさしく鬼の首を取つたかのような哄笑を上げる。

「はははははっ!! やつと貴様の異常者ぶりが裁かれる時が来たか産屋敷!

そうだな! 貴様の言う通り因縁によつて結果が決まるのならば、貴様の妻子も巻き込んで自爆という鬼にも劣るまさしく鬼畜の所業はどのような結果を招くのだろうな!

そして夫や父に殺された妻子は、どのような罪を犯した結果だったのだろうなあ!!」

自分自身のみならともかく、妻子を巻き込みたくなど本心からしなくなつたであろう耀哉に、そこまでさせる程の憎悪の根源である無惨は、その自覚が本気でないからか、この時ばかりはその自覚があるからこそその嘲弄なのか、ひたすらに耀哉の最期を嘲笑い、蔑む。

ある意味では確かに覚悟を持って戦い抜いた耀哉の最期を、狎治は

許容は出来ないが尊敬している。少なくとも、戦うことさえできなかった自分の人生と比べたら、羨ましいと思える潔く意義のある最期だった。

その覚悟も意味も、出した犠牲に対する罪の意識も侮辱する無惨が、狛治の頭の中にある袋の緒を引き千切り、虎の尾は踏み潰されて、逆鱗は筆り取られた。

しかしその怒りは、あの日のように爆発してぶつけられることはなかった。

自分と同じくらいたくましい腕が、狛治の振り上げた拳を掴んで止めて淡々と告げる。

「狛治さん。今日はもう帰りなさい」

「!? 鬼灯様、何を……」

「あ、このはさみが呵責用だね。借りるよ」

鬼灯が狛治を止めて、もう今日はこのまま直帰でいいといきなり言い出すので、完全にはないが無惨に対する怒りは鬼灯への困惑へと大部分が変換して、少し落ち着く。

そんな少し落ち着いた狛治の耳に届いたのは、無惨の発言に全く動じずマイペースに拷問道具のはさみを借りる耀哉の声と……

バチン!!

『……は?』

勢いの良いはさみで何か硬いものを断ち切る音と、無惨と獄卒たちの何が起こったか理解できない困惑を極めた呆けた声が聞こえた。

それらで狛治は、思い出す。

この「金剛嘴蜂処」という地獄で行われる呵責の内容を。

「……あー、流石にこれは全部自力では無理だ。脳天から突き抜けるくらいに痛いね。」

で? これは食べればいいのかな?」

……獄卒がはさみで罪人の肉を少しずつぎり取り、さらにそれを罪人自身に喰わせるという呵責内容をセルフでやろうとする耀哉がそこにいた。

彼は自分で切り落とした左手首から先を拾い上げ、痛みで流石に

びっしりと浮いた汗を残った右手で拭いながら、それでもやっぱりのほほんと微笑んで拾った手首を自分の口に持って行く。

「!? やめてくださいやめてくださいやめてください!! お願いですからやめてください!!」

「……耀哉さん。粕治さんのトラウマを全力で踏み抜かないで欲しいのですが」

「あ……ごめん。無惨の事になるとつい、視野が狭くなるな。」

粕治。大丈夫だから。私は自分でやったことだし、他者ではなく自分自身を食べようとしているし、何よりもこれは罰として行われている事なのだから、君は何も悪くない、気にしなくていいことだよ」

「お願いですからむしろあなた自身が気にしてください! 自分で躊躇なくしないでください!!」

耀哉のセルフ呵責を粕治がマジ泣きで止め、こうなるとわかっていたから粕治を帰そうとしていたのに、思い切りが良すぎて行動が早すぎた耀哉を鬼灯はジト目で咎める。

耀哉も先ほど以上に粕治の地雷踏みは申し訳なく思っ、1/fの揺らぎを全力駆使して粕治を落ち着かせようとするが、未だに滝のよう流れる左手首の血と右手に持つ手首から先が、説得力を壊滅させにかかって更に粕治を泣かせるわ、パニックにさせるわという大惨事。

「……最初からと言えばそうですが、これはもう完全に粕治さんのメンタルがヤバいのでここでの呵責、セルフカニバリズムは後日にしますか。」

とりあえず、私の短慮さが原因で起こった耀哉さんの風評被害は解決するでしょうし」

「私に似ている風評被害の方がマシなくらい、あいつは異常者ぶりしか発揮しなかったぞ!」

粕治に泣きつかれて治療を受ける耀哉を眺めて鬼灯が無惨に言う、耀哉の否定できない異常者ぶりに怯えて硬直していた無惨が、周囲の獄卒たちも「……それな」と素直に同意する突っ込みを入れる。

「自分から脈絡もなく全力で曝け出すのは迷惑でしかないとわかって
いるから、普段は癒し系の聖人なだけで、別にああいう闇の深さや報
復に手段も選ばなければ神風特攻も躊躇しない思い切りの良さとか、
耀哉さん自身はまったく隠していないのでいいんですよ。」

むしろ下手に優しくして穏やか、悪く言えば人を怒ることが出来なさ
そうな舐められやすい人だと思われるより、この素を周知させておい
た方が本人や周りもお互いに幸福です」

無惨の突っ込みを鬼灯はしれつと言り返す。フオローは一切して
いない。

むしろあの1/fの揺らぎや洞察力による癒し系説得力のカリスマ
がなくとも、虚弱体質で力が弱くとも、間違いなく地獄にスカウト
したのであろう素質を強調するのは、割と言葉通り耀哉と彼を甘く見る
バカの為でもある。

耀哉を見た目通りのか弱い子鼠だと思わない方がいい。彼は鼠は
鼠でも、ペスト菌を保有している鼠だ。

窮鼠猫を噛みを実行されたら、その毒が全身を廻って必ず息の根を
止める。産屋敷 耀哉という男の本質はそういうものだと言語りなが
ら、鬼灯はシザーハンスのようなはさみを両手に準備。

「……待て。何する気だ？」

「あなた自身に食べさせるのは後日にするだけで、呵責を後日に回す
訳ないでしょう。」

バラバラにしたこいつ自身は……せつかくですから不喜処にでも
寄って不死川さんに動物たちのおやつとして渡します。今回の動画
で胃を痛めそうな人筆頭ですから、そのお詫びということだ」

歪みないのが無惨で、躊躇がないのが耀哉なら、鬼灯は両方ない。

無惨の「ふざけんなーっ!!」という叫びは、鬼灯のシザーハンス
が言い切る前に首を断ち切ったことで響くことなく消えていった。

* * *

帰り道、「闇火風処」でふと耀哉は言った。

「そういえばこの罪状も私の主張では当てはまると思うのだけど、私も跳ばされて砕かれた方がいいかな？」

「あなたは地獄に落ちてもいいくらいの罪はあるかもしれませんが、あなたが呵責を受けると罪のない人たちの方がなんか精神的にダメージ入るので、悪いと思ってるのならむしろやめろ。大人しくしてろ。どMか、実は」

「あなたが第三補佐官ですよ。私も忘れてましたけど」

地獄に落ちる覚悟はしていた。

それ以外の選択肢がある訳ないことくらい、わかっていた。

家族が……父が、師範が、そして何よりも大切だった愛しい人が自分を待っていてくれただけで、許してくれただけで、お帰りと言ってくれただけで良かった。

その言葉さえあれば、あとは誰に許されなくても、どれほどの責め苦があっても、それが万年億年続いたとしても耐えられた。

そう、狛治は覚悟しながら死後の裁判と死出の旅を始めた。

まさかその覚悟がほぼほ無駄になるとは、当然予想していなかった。

* * *

「この度は大変申し訳ありませんでした!!」

「何事?!」

第五裁判所であり、教養をほとんど得られなかった狛治でも知っている仏教における死後の世界の代表格、閻魔庁で行われた開幕土下座謝罪に狛治は大いに混乱する。

裁判が始まってから狛治は困惑しなかったことがないと言っているが、閻魔庁での裁判が一番終始困惑するだろう。当たり前だ。

「は？ え？ な、何でいきなり俺に土下座？」

扉を開けた時には既に土下座をしていたのなら、それもそれで意味不明で不気味だっただろうが、まだすぐに扉を閉め直して精神を落ち着かせるという手が取れたが、相手は狛治が入って来た時は閻魔と思われる巨人の傍らに巻物と金棒を持って立っていたのだが、狛治が被告として立つ位置までやって来てから持っていた物を放り投げて、狛治の目の前で土下座したのだから落ち着く暇など一切ない。

っていうか、放り投げた巻物はもちろん金棒も閻魔大王に命中して呻いているので、病人や怪我人を放っておけない狛治は目の前の土下

座にも集中できない。

そんな狛治の混乱を全く気に掛けないのは、その土下座してる当の本人。閻魔大王の第一補佐官である鬼神、鬼灯は額の角を床にめり込ませたまま話を続けた。

「……まず、最初にご説明します。

私は室町時代の頃に現世で鬼舞辻 無惨と出会い、交戦しましたが奴を仕留めることが出来ずに逃がしました。その時は、逃がしてしまつたが本物の鬼の怖さを思い知らせたので少しはマシになると愚かな期待をしていました。

……ですが、私のしたことは奴に無駄な臆病風を吹かせただけでした」

「何で？」か「頭を上げてください！」、もしくは「閻魔様は大丈夫なんでしょうか!?!」しか言えないくらい混乱していた狛治だが、そこまで言われて何かに気付いたように一瞬目を見開いた。

彼の言葉が止んだことで鬼灯も彼が察したことを理解して、やはり頭を深々と下げたまま、どこまでも無防備な体勢のまま、潔く言葉を続ける。

「あなたが剣術道場の連中を皆殺しにした後、無惨があなたの元に来たのは私の所為です。

あいつは私という、自分が生み出した訳でもなければ自分を倒しかねない鬼の存在を知っていたからこそ、自分が配置した覚えのない地区に鬼が出たという話を聞いて、不安になって行動してしまつた。

その結果、あなたは何もかも終わっていたはずなのに、最も望んでいない空虚な続きが続いてしまつた。

あなたが『猗窩座』になつた原因の一つは、私です。

許されるとは思っていません。どれほど憎んでも恨んでも飽き足らないでしょう。

だから、せめて今ここで謝罪をさせてください。

真に……真に申し訳ありません」

もう裁判は五つ目なので、目の前の黒い着物を着た鬼は裁判官の補佐というかなり偉い立場であることを狛治は理解していた。

そんな相手が、醜態と言われかねない体勢で自分に謝罪するとは思ってなかった。

こんなにも真摯で潔い謝罪なんて、「して欲しい」とすら考えたこともない。

自分が少し前まで洗脳と言える状態だったとはいえ、仕えていた主人たる無惨とは対極。

奴ならこの行いを無様、誠意を愚かと言って嗤うだろうが、狛治にはこの謝罪はあまりに凜とした、尊いものに思えた。

「……頭を上げてください。あなたは何も悪くない」

しばしの間を置いて、狛治も床に膝をついて言う。言っている事は先ほどまでと同じことだが、もう彼の言葉に困惑はなかった。

「悪いのは、耐えることが出来ずに師範の教えを血で汚した俺です。

鬼になった後だって、炭治郎の妹や珠世という鬼は無惨様の支配から逃れて、人を食わずに済む術を得ていた。俺が『どうでもいい』と自棄になっていなければ、負わずに済んだ罪なのであって、あなたの所為な訳がない。

だからどうか……頭を上げてください」

彼の誠意が痛いくらいに、むしろ自分の罪悪感が肥大するくらいに伝わったからこそ、狛治は鬼灯に頭を上げるように頼むと、鬼灯は数瞬の間を置いてから床にめり込んでいた角を引き抜き、頭を上げた。

土下座の体勢からやっとただ単に床に座っている体勢になったことで狛治はホッと安堵したが、その安堵は数秒も持たなかった。

顔を上げた鬼灯は、隈の濃い三白眼をこちらに真っ直ぐ向けている。まだやや前のめりな体勢なのもあって上目遣いと言える目線なのだが、そんな可愛らしいものではない。

どう見ても、メンチ切ってるようにしか見えない視線だった。

その視線に狛治は怯えるが、事故かわざとか不明だが命中した金棒からいつの間にか回復した閻魔やその他の獄卒たちは、「あー大丈夫大丈夫。鬼灯君の顔が怖いのはいつものことだから」「今は仕事が忙しすぎてちよつと余裕がないだけだから」と、さほど鬼灯の様子を気にせず狛治をフォロー。

「……わかりました。それでは、出端をくじいた私が言うのもなんですが、さっそく裁判を始めましょう。」

それと大王、あとで覚えてろ」

獄卒のフォローは許したが大王の発言は気に障ったのか、小声でボソリと付け足して場を仕切り直した。

その様子から、狛治はなんとなくこの人はいつもこんな感じなのと、自分や無惨の所為で本当に忙しいのだろうなと察して、何か余計に申し訳なく思った。

その察したものは全て的中していたが、けれど後になって思い返したら自分が一番最初に懐いた印象だって間違えていない。正解だったと狛治は確信している。

大王や獄卒たちは「怒ってない」とフォローしていたが、きつと鬼灯は怒っていた。

自分に怒っていたと、狛治は確信している。

確信させられた。

裁判が終わった後、自分への罰が終わった「その未来のこと」を話していた時に、確信した。

* * *

出だしが出だしだったので、色んな意味で狛治は不安を抱えていたが、裁判自体はぶつちやけた話、今までの裁判で一番まともに進んだ。今までの裁判は狛治の予想と覚悟を、あらゆる意味で裏切るものだった。

悪い意味ではない。むしろ良い意味過ぎて、生前の父の薬代の為の盗みを裁かれた時と似たような状況を、言い分を想像していた、そして生前と違ってそれは当然の対応だと受け入れて覚悟していた狛治には、逆に居心地が悪いくらいだった。

第一裁判所の補佐官はやたらとフレンドリーに話しかけ、無惨を人間の頃から知っていたらしく、「あいつ凄いや。1000年間、まったくおつむが成長しなかった!」と返答に困る話をしてきて、裁判官である秦広王に叱責されていた。

裁判中は終始そんな感じで話しかけられ、叱責が飛んでいて狛治は

戸惑いっぱなしだったが、判決が下された後に秦広王は微笑んで、「まあ、悪かったのは己ではなく、人間の頃から知っているこいつが断言するクズに出会ってしまった運だ。だから、自分をあまり責めるな」という言葉で、あれは全て自分への思いやりだと知った。

……が、だいぶ後になって篋にはそんなつもりは欠片もなかったことが判明。ただ単に、無惨の残念っぷりを語りたかっただけらしい。

第二裁判所の初江庁では、裁判自体は普通だったがその裁判中、狛治は動物に囲まれていた。

始めはこの動物に襲われ、貪り喰われることが自分への罰かと思つて、身構えずに受け入れる態勢を取っていたが、途中で初江王に「あれ？　もしかして動物嫌いだった!？」と焦られて真意が発覚。

初江王、可愛い動物をモフモフして緊張を解き、ついでにこれから先の死出の旅の気力になるようにという厚意だったらしい。

困惑しながらその厚意を受け取って、ついポツリと「……恋雪さんが見たら喜ぶだろうな」と零したら、初江王は満面の笑みで「罪を償つたら、いつでも遊びに来たらいいよ!」と言つてくれたのは、狛治をさらに困惑させたが、その言葉は本心から嬉しかった。

ちなみにこの当時の狛治は、初江王の補佐官がパンダだと認識していなかった。

第三裁判所である宋帝庁では、着いてすぐに休憩したら次の庁に向かつていいと雑な指示を出されて、ここでも困惑。

言つちやなんだか特徴が特にならない王と補佐官に、「君、ここは無関係だから！　裁判の必要全くなしだから飛ばしていいよ!」と言われて、「そんな訳ないでしょ!!」と突っ込んだ狛治は悪くない。最初に言つてやれよ、邪淫罪のあるなしを見てる庁だと。

結果、その事を知らされた狛治は、しばらく顔を隠してその場に蹲つた。それは鬼になってからも自信を持つて無罪だと主張できた罪なので、むしろ狛治はちゃんと裁判受けさせると主張したのが恥ずかしくなつたらしく、しばらく宋帝王と名前を覚えてくれたがちよつと覚えていない補佐官にすぐ謝られ、そして蛇と猫に励まされた。

励ましてくれる善意は嬉しいが、蛇はともかく猫の「うむ。お

前は間違いなく無実だ。こんなオボコのような初々しい目が邪淫を貪る訳などないからな！」という断言は、余計に狛治の羞恥を煽っていたので、補佐官に猫は殴られていた。

第四裁判所の五官庁では、法廷に入った瞬間から補佐官が遊びに来た甥っ子でも歓迎するような言動で、流石に五官王に叱られていた。

叱っていたが、それは裁判が終わってからにしろという内容で、罪人に情をかけるなどは決して言わなかった。

そして補佐官の楯は狛治の判決が下された後、彼を抱きしめて泣きながら何度も何度も告げた。

「あなたに罪があるのは確か。けれど、あなたは悪なんかじゃない。

罪は償わなくちゃいけないけど、必要以上に自分を責めちゃダメ。あなた自身を卑下するということは、あなたを愛する人を軽んじるということなのだから」

罪悪感でただでさえ低かった自己評価が最低値どころかマイナスの狛治でも、ほんの少しだがそれでも確かに、自分を許そうと、好きになろうと思える言葉をくれた。

狛治が今度こそ恋雪と一緒にになれる時まで、恋雪を支えると笑って約束してくれた。

全ての庁が、あまりに優しかった。

今現在の閻魔庁も、補佐官である鬼灯は淡々と巻物に書かれた狛治の罪状を読み上げているが、閻魔大王の方は狛治の罪には傷ついたように眉を下げ、時々狛治自身は当たり前前の事としか認識していないことを善行だと言って、孫を見るような優しい目で見してくれた。

腕に入った刺青。罪人の、盗人の証。自分を鬼子と呼んで、蔑んだ奉行や侍たちの目。

それらの過去が、狛治の「地獄に落ちる覚悟」をわずかばかり鈍らせるもの。

裁判官という存在に対して、狛治は不信感を懐いていた。

それ以外の術がなかったのに、生きて欲しかった、守りたかった、ただそれだけだったのに、「貧乏人は生きることすら許されない」と言わんばかりに、彼らは何も聞いてくれなかった。知ろうとはしなかった

し、狛治にも教えてくれなかった。

どうして盗みが悪いのかも、それが許されない事ならどうやって自分と父は生きてゆけばいいのかも教えてくれないまま、ただ自分を痛めつけて蔑んだ彼らが決めた罰は、狛治に不信感を植え付けた。

自分の話を何も聞かず、自分の事情を知ろうともせず、自分だけが裁かれるのならまだしも、自分の罪の責任が父や師範や恋雪にも被せられるのではないかが不安だった。

けれど、死後の裁判である十王たちは今でようやく半分だが、狛治が奉行たちによって懐いてしまった偏見を塗り替える。

誰もが、狛治の話聞いてくれた。

どうしたら良かったのかは答えてくれなかった。けれど一緒に考えてくれた。

何が悪かったのかを、教えてくれた。どんな事情があろうとも、犯罪で利益を得たのにそれを許してしまったら、犯罪を犯さずに頑張り続けた人が損をして愚かということになるから、だから罪を犯してはならないし、許してはならないという言葉には、心から納得できた。全てが正しいと思った。

だから狛治は十王を、補佐官を、獄卒を信じた。

……優しくされたのは嬉しかった。自分の悪い所だけではなく、努力して得たものや、取りこぼす結果になっても守っていたものを評価されて報われた気がした。

裁判が始まる前よりも真摯に、罪を償おうと思えた。

……だからこそ、言えなかった。

心の奥底に閉じ込めて、そんなものはないと自分に言い聞かせ、一生封じ込めるつもりだった。

「……わたし達としては、狛治君は地獄に落ちる必要はないと思っていますよ。罪はある。けれど君はその全ての何が悪かったのかを理解して、後悔して、反省しているし、何よりも罪を全て帳消ししてもおつりがくるほど、君は何も悪くなかったのに虐げられ、傷つき続けた。

……でも、君は反省しているからこそ無罪になったら余計に苦しむんだよね。

だから……判決は等活地獄。

そこで君は、君が殺した人の数だけ同じ死を与えられる。それこそが、君の罰だ」

悲しげな眼に大王は少し涙を浮かばせて静かに、それでも優しげに、柔らかく笑って告げる。

狛治にとつてそれは、あまりに軽すぎる罰だった。もつと重い罰を覚悟していたし、大王の言う通り罰を与えられない方が狛治には辛すぎるからこそ、もつと苛烈な罰を望んでいた。

「……閻魔大王様の多大なるご慈悲に感謝します」

しかしその考えこそが、自分の善なる部分を評価してくれた優しい人たちを貶めるものだと思われ教えられていたから、今度は自分がその場に座り込んで頭を垂れて、感謝の言葉を口にする。

「頑張ってください。あなたなら人数的に一年ほど、……一日当たりで殺される数を増やせば半年ほどで終わるでしょう。さつさと終わらせて、恋雪さんと祝言を上げたらいいですよ。」

……で、ここからその後の話なのですが、よろしいでしょうか？」「!? ふあつ!? な、何でしょうか!？」

大王の判決に引き続き、鬼灯は励ましにしても冷やかしにしても淡白すぎる口調で狛治を赤面させてから、彼の反応を気にした様子もなくやっぱり淡々と確認を取る。

まともに進んだ裁判が終わった途端にまた狛治は困惑しつつも尋ね返すと、鬼灯は感情が読み取れない仏頂面で尋ねる。

「狛治さん。あなた、罪を償ったら獄卒に就職しませんか？」

唐突なスカウトを狛治は理解できず、床に座り込んだまま鬼灯をポカンと見上げる。

そして鬼灯は相手が呆けているのも気にせず、勝手に話を続けた。「食人に關しては、そうしなければならぬ体には作り替えられている為、わざわざ甚振って殺したり、食人衝動を知った上で鬼になることを望んだ場合などを除いて、食人行為自体を裁きはしないことも最初の序で知らされているでしょう？」

また、無惨によつて鬼にされた者は、奴の洗脳や記憶の忘却、願望

や執着の肥大化などの影響で、人格が変貌してしまうことは身をもつて知ってますよね。

だから鬼の頃は残虐非道でも人間に戻れば普通に善良という、あなたに限らず罪が軽い、無罪同然の方が結構いるんです。

その所為で、鬼殺隊の方々は事情を知っているけども、鬼の頃の人格こそが彼らの知るその人なんですから、本人が反省していても信じ切れずに悪感情を懐き、また鬼側も鬼になった経緯に自らの非がなければない程、鬼になった後の罪を責められても納得できません。

その頃に犯した罪は無惨による強要か過失みたいなものですから、普通に善良な人間でも責められたら不服ですし、怒りを懐くのは無理もない。

その為、これからあの世では無惨の元鬼と元鬼殺隊との軋轢が懸念されており、その軋轢を解消するためにぜひとも狛治さんは刑期が終わり次第、獄卒への就職をこちらは希望します」

鬼灯が再び狛治への勧誘で話を締めくくるが、説明されても狛治はなぜそのような結論に達するのかが理解できず、当惑しながら恐縮そうに訊き返す。

「……あの、無惨様の鬼と鬼殺隊に軋轢が生まれる理由はよくわかりましたが、そこに俺が獄卒になる事は何か関係があるんですか？」

「あるよ！　だって狛治君が獄卒になってくれたら、絶対に鬼殺隊の子達と仲良くなれるからね!!」

狛治の問いに答えたのは、鬼灯ではなく閻魔。

大王はやけにウキウキとした声音で自信満々に言い切るが、残念ながらそれも狛治にとっては説明になっていない。むしろ疑問と混乱をさらに深めた。

狛治が更に訊わからんと思っている事を理解し、鬼灯は盛大に舌打ちしてから大王の足りない説明を補足する。

「……まず前提として、元鬼殺隊の方々は裁判を終えてあの世で生活することになると、多くはその戦闘力などを活かして獄卒になることを希望します。つまりは、狛治さんが獄卒になれば自然に鬼殺隊と関わるが多くなる。

そして、あなたの過去は言っちゃなんですがわかりやすく悲劇的で、同情を大いに集めます。鬼殺隊は基本的に復讐者の集まりなので、あなたが犯した罪である剣術道場の連中虐殺に関しても、憎悪を懐き、義憤を向けられるのはあなたではなく、剣術道場の連中でしょう。

なので、あなたの過去をその浄玻璃の鏡で見せてしまえば、『猗窩座』と『狛治』がどれほど別人だったか、狛治さん自身が無惨の鬼に限らず人として最上位に善良なのがすぐにわかるので、償いが済んでいるのなら許す気になりやすいと思われ、無惨の元鬼に対する不信感の解消に最も効果的だと期待しているんですよ。

まあ、単純にあなたは人間でも非常に戦闘力が高くて、現場担当の獄卒として優秀だろうから普通に欲しい人材なんですけどね」

自分への評価について自虐的な否定が浮かび上がるが、それ以外に関しては納得できた。

病が治るなどという無惨の甘言に騙された者、通りすがりの気まぐれで血を注入された者など、被害者と言える者が虐げられるのは嫌だった。

優しいからこそ心が憎悪に灼かれ、鬼殺隊という苛烈な道を歩んだ人たちが、誤解や疑心で彼らと同じ被害者と言える者を憎んで欲しくなかった。彼らは間違いなく、相手が被害者だと確信した時、自分の憎悪を誰よりも何よりも後悔することはわかっていたから。

だから、憎むことなく分かり合えるきっかけになれるのなら、狛治にとってもそれ以上に嬉しいことはない。

自分を「猗窩座」から「狛治」に戻してくれたあの少年に、感謝の言葉を疑われることなく届けることが出来たら本望だ。

「……とても、光栄です。ありがたい……ありがたすぎるお話です……」

鬼灯の提案は、獄卒への誘いはあまりに魅力的だった。

狛治が諦めていた、望んではいけないと思っていたものが全て手に入る未来に思えた。

「……ですが、俺はその話をお受けすることは出来ません。」

真に……申し訳ありません」

狛治は、最初の鬼灯と同じようにその場に土下座して謝罪する。

何もかも魅力的な提案を、未来を拒絶した。

望んだものだったからこそ、狛治は受け取る訳にはいかなかった。

* * *

狛治の返答に、閻魔や司命といった獄卒たちは「え!? 何で!?!」と驚愕する。

それらの反応、彼らが本当に自分を望んでいてくれたことが嬉しいからこそその罪悪感を抱えつつ、狛治は床に額を押し付けたまま答える。

「……獄卒の仕事を、拷問を否定する訳ではありません。現に俺は、拷問されることで罪の意識が軽くなることを期待しています。」

ですが……俺はもう、自分の手で誰かを傷つけることは出来ない。師範の教えを血で汚すわけにはいかない。

悪人や罪人は傷つけていいとは言えない。その言い分はあの時の……剣術道場の奴らにしたことと変わらないから。

そして俺は学など全くないから、拷問以外の仕事で獄卒として役立つ自信がありません。

あなた方のご慈悲に感謝し、期待を嬉しく思うからこそ……俺はその提案を受けることができません」

狛治の返答に、獄卒たちは悔やむような顔をしてそれぞれ「ああ……」という声を漏らす。

真面目で本質的に暴力なんて最も嫌っているであろう性格だからこそ、そして更生のきっかけである恩人が教えてくれたものだからこそ、獄卒になれないという理由には納得しかなかった。

だが、大王は少しだけ不思議がるように目を丸くして、首をかしげている。

そして鬼灯はというと……

「あなたにとって素流の間違ってない、正しい使い道って何なんですか?」

尋ねる。

土下座している狛治を見下ろし、淡々と鬼灯は訊き返した。

「大切な人や弱い人、理不尽に虐げられている人を守る為ですか？

ですが、それだつてやっている事は悪人を叩きのめすことですよ？ それ、獄卒の拷問と何が変わるんですか？

殺さなければいいって話ですか？ 締めるのが半端だったからこそ、あのバカ息子は陰険で最悪の暴挙に出たんでしようが。それによつてあなたは、死んだ方がマシな目に遭つたというのに、それでも殺さなきゃ、死んでなかつたらいいと思えますか？」

鬼灯の問いに、何故そんなことを訊くのか戸惑いつつも狛治は答えようとしたが、答えるつもりだった内容は全て鬼灯が先回りで答え、そしてそれがあまりに浅くて薄っぺらいものだったかを突き付けられる。

狛治の過去を、鬼にされたこと以上に思い出したくない、なかつたことにしたかった悲劇を引き合いに出す鬼灯を、獄卒たちは咎めるような声で制止の言葉を叫ぶ。

しかし、閻魔大王は何も言わなかつた。

沈黙を保つたまま、彼は自分の補佐官と罪人を真っ直ぐに見つめ続ける。

「……お、思いません。……で、ですが……ですが……俺は……俺はもう……誰も傷つけたくないんです！」

カタカタと手を、全身を震わせ、歯の根を鳴らしつつも狛治は答える。

薄っぺらい建前すらなくした本音。ただの自分のワガママで拒絶していることを暴露しながら頭を上げた。

上げて、見た。

自分を見下ろす鬼の顔を。

自分に対して真摯に謝つた相手は、同じ顔をしていた。

「あなたは何も悪くない」と狛治に言われて顔を上げた時と同じ、何かにイラついているような目で自分を見ていた。

見て、怒つて、そして言った。

「……輪廻転生とは六道を廻つて徳を積むということ。その中でよく

天国と混同される天人道という世界がありますが、ここ行きになる亡者ってどんな人だと思います？

………我欲を捨てきれていなくせに、性善説を盲信している脳みそお花畑ですよ」

「いや、鬼灯君。全力で天人道とその住人に誤解を招く発言はさすがにやめてくれない!？」

いきなり話が変わったことよりも、「天人道」についての内容に大王は突っ込んだ。

しかし鬼灯はまったく悪びれず、鼻を鳴らして言い切る。

「誤解じゃなくて事実でしょう。少なくとも私にはそう見える。

で、何でそんな連中は天人道に隔離されてると思います?」

再び、困惑して呆けている狛治に問いかける。今度は少しだけ、答えを待ってくれた。

だけど狛治は、呆けている事関係なしに答えられない。

天国に行けないのは、我欲を捨てきれないからで納得できるが、言われてみれば確かにそれならまだ人間道でいいだろうと思えた。た。

天人道にその手のタイプばかり集めたのなら、その世界は平和だろうが逆に成長できなくなるのでは? と思えたから、答えがわからない。

狛治には出せなかった答えを、鬼灯はきっぱりと言い切る。

「鬱陶しくて迷惑でしょう。憎むことを許さなくせに、許すことを強要する奴なんて」

それが本当に天人道の存在理由なのかはわからない。おそらく、きつとたぶん違うはず。

これは、鬼灯個人の解釈なはず。

だけど、その答えは……

「善意を信じるのも、自分にされたことを許すのもいい。個人の自由ですから、そこは口を挟みはしません。

そういった考えは、立派ですよ。尊敬しますよ。ですが、それを強要されるのは不愉快極まりない。悪意によって騙す目的の強要より

も、善意の方が気持ち悪いとすら思いますね。

そもそも、そういう連中は何もわかってない。許すことで加害者が反省し、悔い改めるのならまだ許す甲斐も意味もありますが、見逃されたと思つて何の反省もしないのなら被害者は増え続け、一方的に搾取され続けるということ。

……感情までも強要されて、搾取されるなんて御免ですよ」

吐き捨てるように、善意の押し付け、許しの強要による不快感を語った。

その発言には……、鬼灯の感想には何も言わなかった。

閻魔大王は困つたような苦笑を浮かべるだけで、咎めなかった。

強要せず、彼が自由に思うがままにさせて、そしてその優しい目は狛治に向かう。

「狛治くん」

先程までとは全く別の意味で、理由で茫然としている狛治に閻魔大王は、地獄の王は、地藏菩薩の片割れは、最初の人類にして父親は言った。

「嘘つきは地獄に落ちちやうよ。だからもう……隠さなくていいんだよ」

全てはこの裁判官にも、その補佐官にもお見通しだったことを思い知った。

涙腺が決壊し、狛治が心の奥底に沈めて隠してこれから絶対に開かず隠し抜こうとしていたものが……、嘘が剥がれて溢れ出す。

「——っっ!! ……憎……いんです……許せ……ないんです!」

今も! あいつらを!! 師範と恋雪さんに毒を盛ったあいつらが!!

十王は優しかった。補佐官たちも、獄卒も皆、狛治を許してくれていた。

狛治を善良だと信じてくれていた。狛治の悲しみに同調して、憤つてくれた。幸福を願い、望んでくれた。

だから狛治は封じ込めようとした。

未だに消えない、全てを思い出したからこそ燻り続ける憎悪を。

自分から全てを奪った卑怯者どもを許せないという意味を。

「俺が絶対にしてはいけない事をしたのはわかってる！ その償いをすべきなのは納得してる!!」

けれど！ それは師範の素流をあいつらの血で穢したことだ!!

恋雪さんを守れなかった挙句に、死してなお悲しませたことへの償いだ!! あいつらを殺したこと！ あいつらが死んだことに対して、悪いことをしたとは思えない!! 今だってまだ殺してやりたい！ 何度でも殺したって飽き足らない!!

あいつが……恋雪さんを連れ出しておきながら危うく殺しかけておいて、何の反省もしていなかったことが！ 恋雪さんに好意を持っていたくせに、彼女を殺したことを許せるわけがないだろう!!」

強要された訳ではない。

だけど、自分の憎悪を抑えることが出来なかった故の末路だからこそ、同じ過ちを繰り返さない為にも、捨てるべきだと思っただ。

けれど捨てることは出来なかったから、隠した。

十王たちに、獄卒に、家族に嘘をついて騙して、自分自身が一番その嘘を信じていたくて、嘘をつき続けた。

「耐えるべきだったのはわかってる!! あの世がこんなにも真摯に罪と向き合って、罪人を裁いてくれるのなら、俺は復讐なんかしないで、恋雪さんたちと同じ所に逝けるように、誠実に生きてゆくべきだったのはわかってる!!」

それでも……それでも！ 絶対に許せない!!」

その嘘は許されず、だからこそ許された。

許されたむき出しの感情を、狛治は滂沱の涙を流しながら慟哭した。

「何で俺の家族は殺されなくちゃならなかったんだ!!」

納得など出来ない理不尽、今もなお受け入れられない悲劇を許せないと叫んだ。

そのあまりに痛々しい慟哭に、狛治の「嘘」に騙され切っていた獄卒たちは何も言えず、出来ずに硬直し続ける中で、鬼灯は最初から変わらぬ淡白さで語る。

「あなたが獄卒になることを断るのは、元凶の剣術道場連中はもちろん、他の罪人たちにも『更生の為の呵責』は出来ず、『私怨による拷問』になるからですね。

で？ それの何が悪いんですか？」

「……は？」

押し殺していたものを吐き出して、引き攣ったような呼吸で泣いていた狛治が、まさかのまだここでも反応に困って涙が吹き飛ぶことを鬼灯は言い出す。

そして当然、相手が困惑しようがドン引こうが鬼灯はまったく気にせず、胸を張って言い放つ。

「私怨まみれの獄卒なんて、大歓迎ですよ。地獄には『カチカチ山』の兎どんや、瓜子姫もいるんですよ。というか、私もそうです。

私なんて私を生贄として殺した者を見つけ出し、イザナミ様の御殿の照明かつ装飾品にしますけど、因果応報としか思ってませんが？」

「いやもう何が何だか訳わからないんですが。とりあえず、私怨で他人の家の装飾ってイザナミ様が一番被害者になっっている気が……」

自分の苦悩はあっさり「前例はここにもどこにも大量にいる」と告げられることで無意味になり、狛治は脱力したからか割とどうでもいい所を突っ込む。

その突っ込みに、「うん、わしもそう思うけどひとまず鬼灯君の話は横に置いて」と大王が同意しつつ更に突っ込み、話は一応軌道修正された。

「……えーと、まあ、鬼灯君の言う事は極論もいいところだけど、事実なのは間違いないよ。

そりゃ、罪人の更生を信じてその為の呵責を行うのが一番だけとさ、私怨による拷問だって復讐されるからこそ自分の行いがどれほど酷いものだったのかを思い知れるかもしれないし、罪人の反省や更生

に期待できなくても、転生する人が悪人の末路を知ることと魂は無意識にそのことを覚えて、来世では決して他人の恨みを買うようなことはしない人になるかもしれないって期待なら出来るでしょ。

……悪いことだけじゃないだよ。

それに何より、自分に嘘ついて納得しきれず抱え込んだままじゃ、それこそいつまでたっても許せないし、いつかきつと爆発しちゃうよ。

だから……、溜め込んだものは正直に吐き出しちゃおう？ そうやって全部吐き出したら、今度こそ本当にきつと許せるようになるからさ」

吹き飛んだはずの涙は大王の威厳などない、困ったような顔でしどろもどろに言われた言葉で戻ってきた。

威厳などない。だからこそそれは大王なりに必死に考え、紡ぎ出し、与えてくれたあまりに優しい言葉だった。

憎悪を懐くことを許し、それでも狛治の善良さを、その憎悪が理不尽な方向に向かないことを信じた言葉が先ほどまでとは違う涙を、歓喜と安堵の涙を零させた。

鬼灯はというと、閻魔大王の言葉にまたしても鼻をかすかに鳴らす。

天人道に関して咎められた時とは違って、それはどこか誇らしげに聞こえた。

「気を悪くされたら申し訳ありませんが、私にとって武道全般は結局のところ、他者を効率よく傷つけることが本質だと思ってるんですよ」

自分の父親を自慢する子供に見えたのは、刹那にも満たない瞬間だけ。

狛治がそんな印象を懐いた頃には、最初と変わらぬ仏頂面で腕を組んでまた持論を語っていた。

「だから、あなた自身も『正しい使い道』がわかってないのなら、ひとまず地獄で活用してみませんか？

あなたが『正しい使い道』を見つけ、罪人の拷問に使うのは間違

だと思えたのなら、私は謝り、償いましょう。狛治さん自身が自分を許せないのなら、責任を持って私が償いの為の呵責を行いますし」そして前半はまだしも、最後は斜め上の条件でスカウトの追い打ち。

普通なら「お前が呵責するのかよー」とキレられる、全然償いになっていない提案だ。現に獄卒と大王から鬼灯はそう突っ込みをもらっている。

だけど、肝心の狛治はというと……

「……………ははっ！ 確かにあなたなら、遠慮も手加減もなく俺が納得するまで呵責してくれそうですね」

笑って納得した。

変な性癖を疑われそうな納得具合だが、狛治からしたら納得するしかない答えだった。

それは、自分の間違いを狛治に押し付けている発言なんかじゃない。

あの最初の土下座をした人が、黙っていればきつとばれなかったのに自ら全てを語って、自分の罪だと認めて、許されないことを理解していた人が、「許す」狛治に怒っていた人が、償いと称した責任転嫁などする訳がないことくらい確信している。

狛治にすると言った呵責を自分も受ける覚悟を完全に前提として、狛治の性格上、望みそうだから言っただけなことを理解していた。それを理解できていたのなら、次に言うべき事なんてもう決まり切っている。

「——閻魔大王様、そして鬼灯様」

姿勢を直し、三つ指をつく。

頭を深く下げるが、今度は土下座ではない。示すのは謝罪でも反省でもない。感謝だ。

「俺への刑罰、そしてそれが終わったのちに就く獄卒という任。

——謹んで、お受けいたします」

こうして、狛治の獄卒としての内定は決まった。

* * *

事務仕事中、ふと自分の閻魔庁での裁判を思い出した。

あの時は学のない自分には現場仕事くらいしか出来ることがないと思っていたのに、慣れれば出来るものなのだと思えば、書類仕事も少しは楽しめた。

しかしそんな自身の成長に対する喜びや充実感は、自分の膝の高さくらいまで積み上がっている書類という現実によってすぐさま「そんなの良から俺の身体を増やしてくれ」という、切実な願望に早変わり。

この時ばかりは心の底から、半天狗や炭治郎が初任務でブチ切れた通称沼鬼などが持つ、分裂系血鬼術が羨ましくなる。

白澤やチュンが使う二次元実体化も似たようなものだが、あれを羨ましく思わないのはたぶん彼らの画力と画風の所為。

「どうしました、狛治さん。疲れたのなら、今日はもう上がっても構いませんよ」

狛治が手を止めて、書類の山を死んだ目で眺めていたのに気づいた鬼灯が、狛治と違って手は一切止めず、顔も上げずに量が狛治の3倍くらいある書類の山を処理してゆきながら、魅力的すぎる提案をくれた。

「大丈夫ですよ。それにまだ定時にすらなってますし」

「あなたは本日、急遽始めた地獄めぐり動画の撮影で疲れているでしょう。肉体面はともかく、精神面が。」

予定を無視してねじ込んだのは私と耀哉さんで、あなたは巻き添えなんですから、その尻ぬぐいに付き合う必要はありませんよ」

魅力的だが真面目に狛治はその提案を遠慮して、書類のチェック作業に戻る。

しかし、本人はワーカーホリックで超絶ブラックだが、部下に対して仕事内容はともかく業務時間や休暇にはかなりホワイトな鬼灯は、

相変わらず自分の非は潔く認めて、狛治に遠慮しなくていいと告げる。

だが、その上司としての美德を狛治は受け取る気がない。

「そんな気遣いしてくれるのなら、そもそも無理やりイベントをねじ込むなんてしないでください。というか、ねじ込むのはいつそまだ許します。」

鬼灯様、スケジュールが狂って停滞した仕事や余計に出来た仕事は、自分が徹夜して処理してつじつま合わせしたらいいと思ってるでしょう？ 俺としてはそうやって鬼灯様一人で何でも済ましてしまうのをやめて欲しいのですが」

狛治の反撃に、珍しく鬼灯が意外と小さな口をとがらせて黙り込む。

子供のような反応だが、狛治はそれを意外に思うことはなく、ついでに日々思っていた不満を口にするのもやめない。

そんな事を意外に思う時期も、鬼灯に委縮して遠慮して言えなくなるような時期も、90年程前に過ぎている。

「下手に人に任せるより、鬼灯様が一人で全部処理する方が早くて正確なのはわかっています。」

ですが俺が言わなくても、そのやり方は短期的には良くても長期的に見れば、後輩は育たないわ、あなたしか出来ないことが増えて効率が悪くなるわ、あなたが倒れた時点で全ての業務が滞るというデメリットくらいわかっているでしょう。

俺を気遣うよりも先に、あなたはご自分を気遣ってください」

怒涛の勢いで不満を吐き出されたが、その不満の何もかもが鬼灯を心配しているからこそその不満なのが安定の狛治である。

相変わらず、何でこいつは地獄に落ちたんだろう？ な聖人ぶりだからこそ、職業柄詭弁も得意なはずの鬼灯でもろくな反論が出来ず、やはり口を尖らせて「健康管理くらいしてますよ」と子供のような意地張りしか返さなかった。

「今年の鬼インフルエンザの予防接種をさぼろうとした人、誰でしたっけ？」

しかしその意地も、呆れたジト目で叩き落される。「そんなことまで把握してるから、あなたは私の嫁とか言われるんですよ」という軽口が浮かんだが、こういう時に自分の都合の悪さを誤魔化すためのまぜっかえしをしたら狛治が本気でキレることは、鬼灯も約40年ほど前に思い知らされたからそのまま無言を貫く。

そんな鬼灯の反応に、狛治は溜息を一度吐いてからペンを置き、鬼灯の執務机の前に立って彼は言った。

「鬼灯様。閻魔大王の第一補佐官は、あなたでなくてもいいですよ」
きっぱりと、鬼灯の立場を否定する。

「もし、あなたが今ここで倒れても、最悪死に至って消滅しても、地獄や閻魔庁が機能しなくなることは有り得ない。一時的に大きなパニックを起こしてしまうことは間違いないですが、あなたがいなくてもこの組織は機能し、回ってゆきます。

あなたほど有能な補佐官はこれから先もずっといないかもしれませんが、あなたしか出来ない事なんてありません。

閻魔大王の第一補佐官は、重要であり非常に大きな立場であり存在ではありませんが、唯一無二なんかではない」

鬼灯が身を粉にしてこなしてきた仕事を、何千年も守ってきたものを、狛治は淡々と否定する。

鬼灯の有能さを讃え、認めても、補佐官には代わりがあると告げる。それを、鬼灯は何の反論もせず、書類を処理する手を止めずただ聞いていた。

反論する事ではない。そんなの、言われるまでもなく鬼灯は知っている。
知っているのに、狛治は告げる。

「けれど、あなたは唯一だ」

昔から、何度でも、何度だって告げる。

「鬼灯様。俺があなたに無理をして欲しくないのは、あなたが優秀な補佐官だから、上司だからじゃない。」

鬼灯という鬼を、個人を純粹に好ましく思い、尊敬し、慕っているからこそ、倒れかねないことをして欲しくないんです。

俺だけじゃない。大王も、お香さんや烏頭さんや蓬さん。それにシロたちや唐瓜に茄子もそうですし、それこそ獄卒じゃない杏寿郎や炭治郎だってあなたが倒れたら心配して駆けつけてきます。

……だから、お願いですから本当に、もう少しでいいからご自愛してください。……これ以上、あなた自身を痛めつけるようなマネは、許しませんよ」

「許す」ことを怒った人に、「許さない」と告げる。

嘘つきは地獄に落ちるから、ここは地獄だけど狛治はもう嘘などつかない。

自分の「許さない」という思いに嘘などつかない。

「……許さなかったらどうする気ですか？」

「許す」ことを怒った張本人だから、あの裁判での出来事を覚えていなくても、自分にとって「許さない」という思いは持っていて当たり前、己の命を燃やす原動力そのものだからこそ鬼灯は否定できず、ようやく視線だけは上げて狛治を睨み付け、尋ねる。

既に本日2徹目なので、ただでさえよくない目つきが更に据わり、限がその迫力に拍車をかけていた。

だがもちろん、その程度の迫力などつづくの昔に狛治は克服している。

なので余裕を携えた笑顔で彼は即答。

「今度こそジャーマンで鬼灯様を沈めて、入院という名の強制休暇を取らせませす」

40年ほど前、孟蘭盆前という修羅場で起こり、閻魔庁で伝説として語り継がれている「七徹目のマジギレ投げっぱなしジャーマン事件」を引き合いに出して言い放った狛治に、ようやく鬼灯は手を止め、頬杖をついて溜息。

それは、降参の意思表示。

「自愛しろと言っておいて、手段が強制入院ですか。狛治さんもすっかり地獄に染まりましたね」

「染まらなければあなたの部下なんて務まりませんよ」

負け惜しみでしかない反論をして、それもやはり軽く流された。

最初から優秀な獄卒になると確信していたから、望んでいないことをわかつていながらも強引にスカウトしたのは鬼灯本人だが、思った以上の優秀さと凶太さを獲得した狛治に対し、複雑な感情を懐く。

しかし、悪い気はしない。

ただ、心のどこかにむずかゆい感覚を覚えるのだけは何とかならぬいかと思う。

炭治郎があの世界に来た時、歓迎の宴会が終わった後に礼を言われた時と同じ感覚。

未だ名付けられない感情。

鬼灯はそのむず痒さを相変わらず顔に出さなのまま、けれど観念して携帯電話を取り出した。

「……応援を呼びますか」

あの世界には、天国と地獄がある。

「……はい。誰に頼みますか？」

胡蝶なら新薬開発のめどが立ったので、余裕があると言っていました
が」

地獄には八大地獄と八寒地獄の二つに分かれ
更に二百七十二の細かい部署に分かれている。

「五官の皆さんでいいでしょう。元々その為の方々です」

戦後の人口爆発や、悪霊や宇宙的化け物（クトゥ○フとか）の狂暴化
あの世は、そして現世も、前代未聞の混乱を極めていた。

「それもそうですね」

「私は麻殻先生を呼び出しますから、狛治さんは他の方を呼んでもらえますか?」

「はい、わかりました。……あれ?」

「どうしました?」

この世でも、あの世でも

統治に欲しいのは冷静な後始末係である。

「……すみません。今の第三補佐官って誰でしたっけ?」

「……………狛治さん」

が、そういう陰の傑物は

ただのカリスマなんかよりずっと少ないのだ。

そして

「あなたですよ」

「え?」

「あなたが第三補佐官ですよ。私も忘れてましたけど」

「……ああ、そうでしたね。」

あなたの補佐はいつもの事なので、忘れてました」

陰の傑物を支えられる者は、更にもっと少ないのだ。

「お前だけすすきりしてんじやねー!!」

「本日は先日から通達していた通り、焦熱小学校の生徒による獄卒体験学習の日です。」

皆さんは獄卒体験するお子さんたちに刑場の説明や簡単な拷問の仕方を教え、そして何やらかすかわからないアホが業火にあぶられないように監督してもらいます」

「鬼灯様、少しはオブラートにくるみましよう」

大叫喚地獄の唐×望処で数人の獄卒を集め、鬼灯が本日の業務内容をまずは簡潔に説明し、狛治は本音しかない発言については一応咎めておいた。

いつも通りのコンビに苦笑しつつ、本日の体験学習の監督役である唐瓜は挙手して尋ねた。

「すみません、鬼灯様、狛治さん。ちよつといいですか？」

今更ですけど、体験学習する刑場がここでいいんですか？ 等活地獄の小地獄とかの方が、わかりやすく危険も少ないのでは？」

横でポケットとしていた幼馴染とは違って、ここがどのような地獄かを把握しているからこそ、自分たちがいるとはいえ子供を入れるべきとはあまり思えない唐瓜が訊くと、そういう質問をしてくれる優等生の存在に満足するように鬼灯は頷いてから答える。

「良い質問です。」

確かに等活地獄が一番亡者の罪も軽く、拷問の内容もぬるい部類ですが、そもそも等活地獄は殺人罪の地獄。殺人は犯していなくとも、小地獄は動物虐待など弱い者いじめを行った者が墮獄する為、子供が亡者に狙われる可能性が高まります」

「鬼や野干とか妖怪の子供なら、亡者に襲われても反撃できる可能性が高いが、それも確実ではないから楽観視するべきじゃない。それに子供の亡者も普通に生徒としているからな。」

子供の安全を考慮したら、暴力行為で墮獄した罪人よりも、詐欺罪とかで墮獄した罪人の方が安全なんだ。そういう罪人は子供相手でも自分の手で直接何かするって発想がほとんどないし、肉体的にも非

力な奴が多い」

鬼灯の説明に狛治が続けて解説し、唐瓜だけではなく他の獄卒たちも納得の声を上げて頷いた。

彼らの反応を確かめてから、次に鬼灯は何故大叫喚地獄の中でこの小地獄を体験学習の場を選んだのかを口にする。

「この『唐×望処』は、行われる呵責が孤地獄のように罪人の罪に応じたものになります。まあ、孤地獄よりは大きっぱで、似たような罪なら一緒くたに呵責してますけど。

その為、ここ一か所で様々な拷問体験ができるというのが、まず一つ。そしてもう一つが、ここは他の地獄より『何故、この亡者たちはこのような呵責をされているのか』という因果応報が非常にわかりやすいので、子供に『何でこの罪でこんな罰?』と突っ込まれないようにです」

もう一度獄卒たちは納得の声を上げるが、今度は先ほどよりも切実な安堵が込められていた。

地獄に落ちる罪状と刑罰の内容を決めて作ったのが、初代補佐官のイザナミであることを知っている優等生たちは遠い目で、「イザナミ様、私怨抑えて」と突っ込んだのは言うまでもない。

「それから、本日の体験学習に人手が割かれすぎて本来の業務が滞ることがないように、外部からのアルバイトを雇っている事は事前に話してましたよね。」

基本的にそのバイトの方々も業務内容は同じですが、子供が亡者を必要以上に痛めつけようとした場合や性質の悪い悪戯を行った場合、注意や叱責はなるべくバイトの方に任せるようにしてください。もちろん、特に危ないことをしている場合や、他に手が開いている者がいない場合は気付いた方が自分で対処すべきですが」

「? 何で?」

今度は明らかに変な指示だったので茄子が率直に尋ねると、狛治が少し困ったように眉根を下げて教えてくれた。

「あー……、高学年ならまだしも低学年で獄卒の……拷問を体験してみたいって奴は、『亡者をボコボコにしたい』ってだけの、良く言えば

元気のいいやんちゃ、悪く言えば乱暴者が多い。

で、そういう子供は言っちゃ悪いが、話をちゃんと聞かない、聞いても2秒で忘れる奴がほとんどだ。その結果、知識の無さや子供の短絡さも合わさって、『あの世にいる亡者は全部悪い奴だから、ボコボコにして良い』みたいな、トンデモ結論を出して刑場外でも実行する奴がいる」

「そういう勘違いを防ぐため、呵責する側にも亡者がいることを知らしめるために、バイトは鬼などの妖怪ではなく全員亡者です。

そして、万が一にも子供が『自分の方が強い』と調子づかない為に、バイトの亡者は全員、元鬼殺隊の方々です」

「三度目の納得に込められていたのは、「クソガキ終了のお知らせ」という同情だった。

その同情は、鬼灯がついでに語った去年の体験学習、弱い者いじめが大好きで体も年のわりに大きく力自慢だった真正のクソガキどもを一つに纏めた特別班を担当したメンバーが、不死川兄弟・悲鳴嶼・縁壺であったこと。クソガキ共はひきつけを起こしても恐怖のあまりに無理やりひきつけを止めるぐらいに、不死川兄弟と悲鳴嶼に絞られ、そして優男な縁壺の人外ぶりに鬼としての自信を根こそぎ消失させて矯正したという話で、同情はさらに深まった。

体験学習は生徒が5人以上10人以下の人数で班行動な為、獄卒も子供を監督するために基本三人一組に分けられる。

子供という何をやらかすかわからない相手をただ案内するだけではなく、簡単なものとはいえ拷問の指導も行わなければならない為、外部からのバイトを入れてもこの人数だ。

「茄子さんは、狛治さん・善逸さんと組んでください。

唐瓜さんは、伊之助さんと炭治郎さんですね」

その為、いつもなら少しは雑談くらいは交わす相手でも鬼灯はそれだけを言っ、他の班の所に行ってしまう。どうやら本日の鬼灯はい

つも以上に多忙そうだ。

その事をちよつと心配しつつ、珍しく自分たちが分けられたことに茄子は素直に残念がったが、唐瓜は同じく寂しいような、肩の荷が下りたような複雑そうな顔をしてる

「別行動は久しぶりだなー。でも、狛治さんがいてくれて良かったー」

「お前……、狛治さんに甘えて迷惑かけんなよ」

「唐瓜」

唐瓜がそう注意していた所で、狛治が何故か自分と同班である茄子ではなく唐瓜の方を呼ぶ。

そして振り返った唐瓜の肩を掴んで、真顔で言った。

「頼む、唐瓜。子供はいい。子供はいいから、お前は伊之助と炭治郎からとにかく目を離すな。お前だけが頼りだ」

「俺は一体どんな奴と組まされるの!？」

まさかの新卒である唐瓜にお目付け役を頼むような相手が、今回のメンバーであることを明かされた挙句に託され、唐瓜は突っ込みを絶叫。

「いや、大げさに言ったがそこまで心配しなくていい。大丈夫、どちらも人としては最上に善良だ。特に炭治郎は子供の扱いに長けてるし、伊之助も……まあある意味子供とすぐに打ち解ける。」

だから、子供はいい。子供に関しては二人に任せろ。お前はとにかくあの二人が、訳のわからない天然を發揮して暴走しないかを見張っててくれ。頼む。俺は茄子と善逸と鬼灯様と杏寿郎で手いっぱいだ」

「上司と教師の面倒まで見なくていいんですよ、狛治さん!!」

唐瓜の突っ込みに慌てて狛治はフォローを入れたが、すぐさまそのフォローは剥がれ落ちた。マジで本日の狛治に余裕はないらしい。

そんな狛治を何故か唐瓜の方がフォローし返しつつ、自分が組む相手はどんな人なのかを戦々恐々してた時……

「おおおい!! キュウリって奴はどこだよ! 旨そうな名前だな!」

「伊之助。キュウリ君じゃなくて、唐瓜君だよ」

「何言ってるんだ、炭治郎。唐瓜ってキュウリの事だろ。アオイが言っ

てたぞ。そんなことも知らねーのか！　しよーがねえな！　俺が親分だから教えてやる！　ちゃんと覚えてろよ！」

「ちげーよ、馬鹿！　確かにキュウリの別名が唐瓜だけど、これ人の名前だから!!」

「……はあ。紋逸はいつまでたつても馬鹿だな。人じゃなくて鬼の名前だろうが」

「あ、あ、あ、あああつっ!!　こいつ、本つつ当ム力つく!!」
「まあまあ、善逸、落ち着いて」

まずは騒がしく、盛大に唐瓜の名前を間違いながら登場したのは、ムキムキ半裸の頭イノシシ。頭が猪突猛進思考、イノシシ並という意味ではない。いや、そうだけど言葉通り頭部がイノシシの声音からして少年らしき人物が辺りをキョロキョロ見渡している。

そんなイノシシ頭に、赤みが強い髪の少年はやんわりと、金髪の少年はうんざりとした口調で間違いを正そうとするのだが、頑なに自分の間違いは認めず他の方向で正論を吐き、金髪は汚い高音を上げてキレ、赤髪がそちらを宥める。

そうこうしている内に、イノシシ頭はなんかやたらと遠い目をして自分たちを見ている狛治に気付いた。

「おー！　狛治ー！」

「あ！　狛治さん!!　お久しぶりです！」

イノシシが狛治の名を呼ぶと、本人が反応を返す前に金髪を宥めていた赤髪が嬉しそうに顔を上げ、無邪気に駆け寄る。

金髪は、「え!?　俺放置して行っちゃう!?!」とショックを受けていた。

そんな3人の相変わらず過ぎる様には苦笑しか浮かばない。

だから狛治は苦く、少し困ったように、……けれど確かに笑って言った。

「……ああ。久しぶりだな、炭治郎。それから善逸。伊之助は……割と会うな。不喜処で」

留守番していた犬のように寄ってきた炭治郎の頭をまず撫でてやり、善逸と伊之助にもそれぞれ挨拶をしてから、向き直って狛治は後

輩の小鬼に紹介する。

「唐瓜、この赤毛とイノシシが竈門 炭治郎と嘴平 伊之助。お前が今日組むメンバーだ。」

そして茄子、あつちの金髪が我妻 善逸。俺とお前が組む残りのメンバーだ。

あと一応言つとくが、伊之助は人間だからな。妖怪じゃない。これは被り物だ」

それぞれの名前を改めて教え、ついでに炭治郎を取られたからか、それとも炭治郎に取られたとでも思っているのか、自分の背中に頭突きを繰り返してた伊之助を唐突にするりと避け、勢いで前に飛び出した彼の腰を片腕で抱えて捕まえ、被り物を取って素顔を二人に開帳。

正直、現れた時は牛頭馬頭と同種の妖怪だと確信した相手の素顔は少女のような、それも頭に美の一つ二つをつけるべき造形だった為、小鬼たちはポカンと口を開けて呆けた。

「何すんだ！ 返せ!! つーか、誰が妖怪だ!!」

「お前だよ。『音』聞いても俺はしばらく、お前を鬼だと信じて疑わなかった」

「あー……確かに俺も初めて会った時は、『匂い』がわからなかったら鬼だと思つて切つてたかもしれない」

その間に、狛治に抱えられたままの伊之助はじたばた手足を暴れさせて被り物を返せと喚き、残り二人は昔を懐かしむ……にしてはぶつちやけ良いとは言えない初対面時を思い出し、善逸は呆れきって、炭治郎は苦笑。

二人の反応と言葉に、唐瓜は伊之助の美少女顔の衝撃を薄れさせ、「もしかして生前から、あの被り物がデフォルトなのか?」と呟いた。正解。

もう伊之助だけで、狛治が唐瓜に「目を離すな」と言われた理由はわかったが、もう一人の方も「善良だが要注意人物」扱いされた理由はすぐさま察せられた。

「はじめまして! 竈門 炭治郎です。よろしくお願いします!」

このバイトは毎年恒例だから、勝手はわかってるつもりだけど、何

か変なことしたら遠慮なく注意してください！」

「えくと……我妻 善逸です。同じく毎年恒例のバイトで……ああもう！ 伊之助うるせー！ 自己紹介も出来ないじゃん!!」

言っていること自体はまともだが、狛治に抱えられたまま暴れている伊之助をスルーして笑顔で挨拶する炭治郎はなるほど、確かに善良だろうが目を離していいタイプではないと唐瓜は確信した。

「はーなーせー！ 下ろせー!!」

「はいはい。下ろすから大人しくしてろよ。」

それから、唐瓜に茄子。お前らの班で受け持つ子供は、ちよつと特殊な事情がある。特にお前らが何かすべきことはないが、その事情だけは留意しておいてくれ」

既に保父さんのような状況だった狛治が伊之助を下ろしてから後輩たちに説明を付け加えると、彼らは班決め前に鬼灯が語った去年の特別班を思い出したのか、「大丈夫か？ 子供たちと俺達」と言わんばかりの不安げな顔になった。

「あ、違う違う。去年の特別班とは全く違う事情だ。お前らの受け持つ子供たちは皆、いい子だ」

「……ありがとうございます、狛治さん」

二人の表情で誤解に気付き、狛治が慌てて彼らの受け持つ子供が悪ガキクソガキの集団ではないことを断言すると、何故か炭治郎が少しだけ悲しげな顔をして礼を言った。

あまりに脈絡のない礼だったが、狛治の方は「気にするな」と言つて、炭治郎の頭に手を慰めるように置く。

そして善逸は彼と同じような顔をして、伊之助は取り返した被り物の所為で顔はわからないが、それでも先程までの騒がしさが嘘のように黙り込む。

どちらも炭治郎の礼には疑問を懐いていないことが更に唐瓜たちの疑問を深めたが、それを口にする前に答えに等しい人物たちが現れる。

「狛治！ 4班と5班を受け持つ獄卒はお前と、そこの旨そうな名前前の小鬼君だな！」

おお！ 竈門少年に我妻少年に嘴平少年！ 君たち三人が揃うのは久しぶりだな!!」

鬼に混じっても目立つエビ天のような髪が遠くから手を上げ、呼びかける。

その声に炭治郎は見るからに、伊之助は覆面で隠れているのにわかるほど、嬉しそうに顔を上げる。善逸だけが困ったように、「うるせえな」と言いたげな顔だったが、それでも嫌っているようには見えない、穏やかな顔と声音で他二人と同じように呼ぶ。

「煉獄さん！ いつもお世話になってます！」

「煉獄！ 何でお前最近、地獄に来ねーんだよ!!」

「いや、あの人50年前に獄卒やめたから。今、教師だからな？ ども。お久しぶりっす」

相変わらずの兄気質で慕われているんだなーと思って、小鬼たちはその様子を眺めていたら、煉獄が引率していた子供の内、一人が飛び出して来て嬉しそうに駆け出しながら叫んだ。

「炭治郎！ それに狛治！ 久しぶり！」

10歳かこれらの、天然パーマとまではいかないが癖のあるクリクリした黒髪の、これまた女の子のように可愛らしい亡者の少年だった。

可愛らしく思えるのは、ただ顔の造形が整っているだけではなく、その子は心から「嬉しい」「楽しい」といった、正の感情を振りまく笑顔だったからでもあるだろう。

唐瓜も茄子も、そんな彼の笑顔を微笑ましく思っていたが、事態はすぐさま一転。

「兄ちゃんと狛兄ちゃんに近づくな!!」

「!? 痛っ！」

「竹雄!!」

二人に駆け寄った少年の後をクラスメイトであろう左目尻に泣き黒子がある、同じく亡者の少年が追いかけて、追いついた途端に髪と襟を掴んで、引き留めるどころかその場に引き倒そうとする。

それを炭治郎と煉獄が同時に叱責すると、少年は一瞬怯えたような

顔をやるが、彼は相手を離さずにすぐさま炭治郎を睨み付けて反論。

「なんで兄ちゃん、いつもこいつの味方するんだよ!!」

「そうだよ! お兄ちゃんも先生も何で……何で……」

泣き黒子の少年だけではなくおかつぱ頭の少女も出てきて、こちらは煉獄を今にも泣きそうな目で睨み付けて言う。

炭治郎の方は少しだけ迷うような躊躇いが見えたが、煉獄は少女を真っ直ぐに見据えて、いつも以上に声を張り上げて言った。

「何度言ったらわかるんだ!」

累を特別視して味方をしているのではなく、累は何も悪くない被害者で、お前達が理不尽に累に危害を加え、嫌がらせをするから叱っているんだ!!

竹雄も花子も、竈門少年や禰豆子君を慕っているからこそ、累を好きになれないのはわかる! 無理に友達になれとは言わん!!

だが! それと嫌がらせをするのは話が全く別だ!!」

竹雄と呼ばれた少年の発言と煉獄の叱責で、彼らと炭治郎の関係を小鬼たちは理解する。というか、花子はともかく竹雄は炭治郎とかなり容姿が似ているので、出て来た時点で関係は大体察しがついていた。

しかし、ここまで聞いてもわからないのが、「累」というクラスメイトである竹雄と花子には嫌われているが、炭治郎からはむしろ弟の暴拳を非常に申し訳なく思われている少年についてだ。

「せ、先生……。僕は、大丈夫だから……。炭治郎もえつと……。ごめん」

「! 累の所為じゃない! 竹雄! 累から手を離せ!!」

「……いやだ!! こいつなんか大っ嫌いだ!!」

更に謎を加速させるのが、煉獄が「理不尽」と言い切っている被害に遭つても、累自身は竹雄を庇う発言をしていること。

先程の煉獄の言葉からして、彼が過去に炭治郎ともう一人の誰かに何かしたのだろうが、この気が弱いにして優しいにして、暴力を振るわれてもその相手を庇える子供がそんなことを出来るようには思えない。

だが、それらを疑問に思うのは唐瓜たち部外者である獄卒たちであり、煉獄が連れて来た他の生徒たちは「またやってるよ」という雰囲気の中、「累君、かわいそう」と「けど竹雄と花子の気持ちもわかるよ」で意見が割れているのも、人間よりはるかに性能の良い耳に届いていた。

「竹雄も花子もいい加減にしろ！ いじめなんて最低な真似をする奴、兄ちゃんは絶対に……」

「炭治郎。それ以上は言うな」

しかし誰も部外者に事情を教えてくれないまま、兄弟げんかはエスカレートしてゆき、炭治郎が手こそは上げてないが声音がかなり荒くなってきたところで、狛治が間に入る。

まずは炭治郎と向き合い、彼が決定的に兄弟仲がこじれかねないことを言うのを止め、それから累と竹雄と花子に向き直る。

「竹雄。花子」

二人の兄妹は最初こそは狛治に対しても、敵対心を露わに睨み付けていたが、彼は炭治郎とも煉獄とも違って、その眼に怒りはなくただひたすらに悲しげだったので、二人ともいたたまれなくなったように目を逸らす。

そんな二人に狛治は悲しげに、それでも柔らかく笑って、目線を合わすようにしやがみこみ、話しかけた。

「二人は俺が嫌いか？ 炭治郎や煉獄と関わって欲しくないのか？」

「そ、そんなことない……。だって、狛兄ちゃんは優しくして……。ちゃんと……。悪いことしても地獄で……」

まずは自分を引き合いに出して尋ねると、竹雄は俯いて目を逸らし、しどろもどろだが本音で答える。

嫌っていた時期はあった。けれど、すぐにそんなことを忘れるほど、優しい人だと知ったから。

どれほど辛い罰を受けたかを、兄から教えてもらったから。

だからこそ累が気安く、自分より先に駆け寄ったのが実兄に対してと同じくらい許せなかったことまでは、幼い意地が邪魔をして言えない。

しかしそんなもの、狛治にはお見通しだ。

「そうか。ありがとう。すぐく俺は嬉しい。」

……けどな、累も俺と同じだってことは知ってるんだろう？ むしろ累は俺よりもずっとずっと長い間、その罪を賽の河原で償い続けた。

家族がすぐそばにいるのに、直接話すことも触れることも出来ないのがどれほど辛いことか、お前達なら想像がつくだろう？

……好きになれ、友達になれなんて誰も言わない。嫌いなら仕方がない。けれど、嫌いだからで暴力は絶対にダメだ。そんなことをしたら、賽の河原どころか地獄行きだからな。

……お前達がそんな所に行ったら、炭治郎も杏寿郎も、そして俺だって悲しい。自分がそこに落ちた方がマシなくらいにな」

静かに優しく、穏やかに彼は唇を噛みしめて俯く兄妹を諭す。

決して彼らの感情は否定しない。「許さない」という思いは否定しないまま、彼らの間違いだけは指摘して叱り、忠告する。

竹雄も花子も、狛治の言葉に返事はしなかった。

しかし、累の髪や襟を掴んでいた手は離す。謝りはしない。代わりに累が「ご……ごめん」と謝ると、どちらも癩癩を起したように「お前なんか大嫌いだ！」と叫んで、それぞれ別方向に走り去ろうとする。

「!? っらー！ どこ行くんだ二人とも!!」

「すまない、狛治！ ちょっと他の生徒たちを見ていてくれ!!」

いきなり問題行動を起こしまくりの二人を、実兄と責任者である煉獄が駆け出して捕獲に向かい、狛治は苦笑しながらそれを見送る。

そして、善逸に「すまん、説明を頼む」とだけ指示を出して、煉獄の代わりに自分と唐瓜が受け持つ班の人数確認と、体験学習の内容説明に入った。

「……えーと、何か初っ端から騒がしくてごめん。」

事情は何にもわかってないよな。どっから説明した方がいい？

っていうか、狛治さんが元は鬼殺隊側じゃなくて敵側だったことは知ってるよな？」

「おい、狛治！ 何で紋逸にだけ頼むんだ!! 俺は！ 俺は何したら

いい!？」

「うるせー!! そんなんだからお前には頼まねーんだよ!!」

っていうか、お前は獄卒として正社員だよな!? 本来、バイトの俺じゃなくてお前が説明役とかすべきだよな!? 何で俺の方が苦勞を背負い込む役になつてんだよ!？」

善逸が訳のわからない修羅場に巻き込んだことを謝りつつ、どこから説明しようか悩んでると、伊之助がお手伝いしたがっている子供のよう騒ぐので、善逸が「お前の方がうるさい」と言いたくなる声で突っ込む。

そんな彼らのやり取りがある意味では清涼剤となり、唐瓜と茄子はちよつと笑つてからひとまず一番気になる、あの兄妹にやけに敵視されていた「累」とはどういう子供で、何をしたのかを訊いた。

二人して先ほどの炭治郎と竹雄の兄弟げんかよりも大人げ皆無な取っ組み合いをしていたのが、その問いを聞いた瞬間にぴたりとやみ、善逸は酷く難しげな、複雑な顔をしてから教えてくれた。

「……あー……、あの累つて子、元は狛治さんと同じなんだよ。さすがに狛治さんほど、上の立場ではなかったけど。」

下弦の伍で、俺達というか炭治郎と禰豆子ちゃんというか、富岡さんと言うべきか……とにかく俺達と戦つて、そんで……」

「禰豆子が欲しくて炭治郎を殺そうとしたらしーぜ」

「言い方ああああ!! いやそれが大正解だけど最低限すぎて訳わかんねーよ!!」

善逸がどう説明すべきか迷っていた部分を、伊之助はあつけらかなとシンプルに言い放つて、善逸に突っ込まれる。

善逸の突っ込みは、唐瓜と茄子だけではなく聞き耳を立てていた他の獄卒、そして狛治と語られている累自身の内心を実に正確に代弁してくれていた。

* * *

子供たちに本日使う拷問器具を選ばせていたら、茄子は裾を後ろか

ら引かれて振り返る。

そこには、体験学習前にひと悶着を起こした元凶であり被害者である累という少年がいた。

「……あの、えつと……迷惑かけてごめんなさい」

「え？ あー、いや気にすんなよ！ あれくらいが迷惑なら、俺は地獄に落ちるくらい酷いからさ！」

「うん。茄子。フォローのつもりだとしても、少しはお前どうにかしてくれ」

モジモジとしながらあのトラブルについて謝る累に、茄子はいつもの調子でおちゃらけてフォローすると、その内容に対し狛治から大真面目かつ切実な懇願をされてしまった。

しかし、二人のやり取りが面白かったのか、累はクスリと吹き出して笑ったので、茄子と狛治の表情も緩む。

「つていうかさー、累はもうちょっと怒った方がいいと俺は思うよ。」

あの子達が累のことを好きになれない理由はわかるけど、ちゃんと罪は償ってるし、同じ立場の狛治さんは良くて累はダメなのは理不尽で、あれは普通にいじめだよ」

ナチュラルに呼び捨てにして、更に茄子は自分の感想を語る。

善逸が伊之助の要点しか言っていない所為で逆にわかりにくくなる話を何とか説明してくれて知った、累という少年の罪と罰、そして竈門家というかクラスメイトである竹雄と花子との確執に関しては、茄子は完全に累側だった。

長兄である炭治郎を庇った長姉であり、そして当時は無惨の支配から逃れた例外的な鬼だった禰豆子を見て、一方的に「本物の絆」と認識してほしがって、その為に炭治郎を殺そうとしたり、禰豆子は日光であぶって痛めつけることで、無理やり自分の「家族」にするつもりだったのは、無惨の洗脳を抜いてもちよつと擁護できない。

だから、煉獄も狛治も「好きになること」「仲良くなること」を決して強制しなかったことは納得した。

だが、そこから先は累に対して同情しか湧かない。

そもそも彼が他の鬼に力を与える代わりに、自分と似た容姿に変化

を強要したりなどの「家族ごっこ」に興じたのは、鬼になって間もない頃に両親を殺してしまった事、その事を後悔して、謝りたくて仕方なかったというのに、無惨が累を将来有望な手駒として見ていたのか、それとも奴なりの歪んで身勝手に最悪な善意からか、彼の食人や殺人という罪を一緒に背負ってくれようとした両親を否定した為、その罪悪感からの願望と寂しさがねじ曲がって肥大してしまったからだ。

つまりは、いつも通り無惨が全部悪い。

狛治と同じように、全然望んでいない願望を本心だと思い込んでいただけでも悲劇なのに、そもそも両親が息子と心中しようとした動機が、悪いのは累を鬼にした無惨だけで他は誰も悪くないのがまた更に辛い。

両親は人を食い殺しておいて、「これで健康になった！ 外で遊べる！」と無邪気に喜ぶ息子に絶望して死を選んだが、これは無惨の影響だけではないが、累が真性のサイコパスだったとかではない。

累は生まれつき病弱で、布団からほとんど出ることができないような体だった。殺人と食人という凶行に走ったのは、健康な体を渴望していたのも理由の一つだが、殺人を「悪事」とそもそも彼は認識できてなかった。教えられていなかった。

病弱で、些細な悪戯すら出来るような体じゃなかったからこそ、彼は親から叱られたことがなく、親もまた当たり前の道徳や倫理観を教える機会を失い続けていた。

端的に言えば、優しい虐待と同じようなものだが、それを行う一般的な親とは違って、累の両親は真つ当だった。

親ならして当然の躰を面倒くさがって、ペットのようにただ可愛がって甘やかしたのではなく、病人に対して当たり前の優しさで接し続けていただけだ。

また両親は、悪事など普通に生きていたらまず選択肢として選ばない以前に浮かばない人たちだからこそ、改めて道徳や倫理を教えようという発想がなかった。教えてなくても、教えたことがなくても、息子は自分達と同じ倫理観を持っていると思いついでいた。

そうではなかった事、息子は殺人も食人もそれが「悪いこと」だと知らないまま、人ではない化け物に成り果てて、けれど心は自分達の可愛い息子のままであったことに絶望したのだ。

だがその絶望は、自分たちの子育てを失敗だと思ったからでも、息子が化け物になったからでもない。

もうどう足掻いても息子は幸せになれないと理解したから絶望して、心中を選んだ。

このような、「幼さゆえの短慮さ」と「道徳や倫理を環境の所為で学べなかった」という事情に加え、彼は人間に戻って記憶を取り戻したことで、自分の犯した罪を理解し、後悔して反省しているので、大人と同じ八大地獄に落ちることはなかった。

しかし、それらを考慮しても彼はあまりに多くの人間を、そして自分と同じ無惨の鬼すらも殺してきた。

だから無罪や簡易地獄の舌抜きではなく、1000年という長期間、両親と手紙のやり取り以外を禁止した上で、賽の河原で石積みという刑が下され、最近になってようやく累はその刑を終えた。

両親に会いたくて謝りたくて仕方なかった子供に相応しく、そして惨い罰だと普段は何事も深く考えない茄子でもそう思えた。

故に、竹雄と花子の気持ちは十分に想像できたが、やはり心情としては累を味方してしまう。

「……ありがとう、茄子さん。……でも……でも……」

しかし累は、悲しげな眼をして俯き、礼こそは言うがどう見ても茄子の言葉に納得していない。

何かを言おうとしている累の前で茄子は言葉を待つのだが、累は結局何も言わずに俯いたまま黙り込む。

そんな累の頭を、狛治はくしゃくしゃとかき混ぜるように撫でて背を押した。

「お前と同じ立場でも、鬼殺隊でもない、全く無関係の第三者に聞いてもらったら、それこそ納得のいく答えが見つかるかもしれないぞ」

「ちよつとおおおおっ！ 何で俺一人に生徒の面倒、見させるのーっ！

いや、子供は好きだけど、さすがに一人でこの人数は無理！　って、まだ先にいく金棒振り回すなその子鬼ーっ!!」

「ああ、悪い善逸！　今行く！　……俺は向こうを手伝うから、ちよつと二人で話してみろ」

善逸が子供にまわりつかれるわ、登られるわ、逃げられるわ、カ
ンチョーされかかるわと大変愉快なことになっているのに気づき、狛
治がそちらに向かいながら、累のことは茄子に任せる。

累はまだ迷っていたが、茄子はへらつと笑って狛治にせつかく任ざ
れた期待に応える。

「俺さ、すぐに人の話忘れるから、まあ壁に話すよりマシだと思って
言っでごらんよ」

「……小鬼って見た目は僕とあんまり変わらないのに、やっぱり大人
なんだね」

茄子の言葉にしばしきよんとしてから、累はまたちよつとだけ笑
う。そしてポツポツと雨だれのように話してくれた。

「……茄子さんが僕の味方をしてくれるのは、嬉しい。……茄子さん
だけじゃなく、狛治も、煉獄先生も味方をしてくれるし……、炭治郎
と禰豆子なんて僕、すごく酷いことを言っただし、怪我也させたのに
……許してくれて嬉しかった……」

……でも、僕は……自分を許せない。竹雄や花子には、されて当然
のことしかされてないと思ってる。……だから、怒れない。……僕
は、……自分が痛い目に遭うよりも……二人が叱られている方が、見
たくない。……辛い。

……僕は、罪を償ってなんかいない。だから……二人が怒るのは当
然で……これは僕への罰だと思ってる」

少しくらいは竹雄たちへの愚痴が出てくるかと思ったら、累の口か
らは一切二人を責める発言は出てこない。むしろ逆に、ここでも二人
を庇って自分を貶めていた。

「何でそんなネガティブ？」

思わず茄子がそんな風に率直すぎる質問をすると、累はその気遣い
皆無さが逆に気楽だったのか、苦笑しつつも答えてくれた。

「……僕は賽の河原で、父さんと母さんに謝り続けてた。100年は長かったけど、手紙は出せたましもらえたから、辛くても耐えられた。絶対に会えるってわかってたから、何度石を崩されても……周りの子供たちが……友達になってもすぐに転生でいなくなっても……それでも耐えれた。」

「そうやって今は、父さんと母さんと一緒に暮らせてる。生前より体も丈夫になったから、普通の子供として生活できるから、学校にも通ってる。」

「……そこで、竹雄と花子が炭治郎と禰豆子の兄弟だって知って、僕は二人に『ありがとう』って伝えて欲しいって頼んで……すごく怒られた。」

「……『兄ちゃん姉ちゃんに酷いことしといて、謝らないくせに何で今、幸せなんだよ!!』って。」

「……怒られて、僕はようやく気付いたんだ。……僕は、父さんと母さんにしか謝ってない。たくさんの人に酷いことをしたってのはわかってるのに、わかってたのに、……賽の河原にいた頃は両親に謝って、両親に会いたいと思っただけでなかった。……他の誰のことも謝ろうとしなかった。」

「……だから、悪いのは僕なんだ」

「累の懺悔のような「自分が悪くて二人は悪くない」と主張する理由に、思わず茄子は納得してしまった。」

「けれど、茄子は少しだけ考えるように黙っていたが、したことは狛治と同じように累の頭をくしゃくしゃと撫でること。」

「そして……」

「うん。確かにあの二人が怒るのはわかった。でも、やっぱり俺は累が悪いとは思えないよ」

「竹雄と花子の印象こそは当初より上方修正されたが、それでも茄子の意見は最初と変わらない。」

「謝るのは忘れてたけど、礼は誰かに言われなくても自分で言ったんだろ？ 言いたいわって思ってたんだろ？ ちゃんと礼が言える奴が、悪い奴な訳ないじゃん」

それが茄子に言える本音の感想だったが、累は粕治によく似た笑顔……痛みに耐えるような寂しげな笑みを浮かべて、「……ありがとう。茄子さん」と答える。

自らの罪の鎖に捕らわれた、善人だからこそ救われない囚人の笑みだった。

* * *

「唐瓜君、ごめん。俺の家の事情に巻き込んで」

「いえ！ 気にしないでください!!」

まずは軽いジャブとして、子供が亡者の生前の日記やらポエム帳を音読しているのを監督しながら、炭治郎は謝り、唐瓜は両手を首を振って「迷惑ではない」と主張する。

正直に言えばだいぶ迷惑だったが、責める気にはなれない。炭治郎や煉獄や累はもちろん、竹雄や花子に対してもだ。

というか、唐瓜は茄子とは逆に竹雄と花子に感情移入している。

累が悪いとは思ってない、いじめるのは問答無用でアウトだとは思っているが、彼らが累を毛嫌いする理由は理解できる。

累と似た立場だが粕治を慕っているのは、粕治自身の人柄の良さに加え、おそらく彼の過去と自分達が死んだ経緯が似たような理不尽なので共感しやすかったのと、刑期は短い罰の内容が「殺した人数分、殺される」という苛烈なものだからだろう。

対して累は、人間の頃は非常に病弱ではあったが、裕福な家庭の一入っ子として大切に育てられたのに、自分で親を殺しておきながら、自分たちの兄と姉を殺しかけた挙句に、下された罰は100年間の賽の河原という、される呵責自体は過酷とは言えないもので、今は両親と再会して幸せな普通の子供扱い……。

炭治郎や唐瓜の視点で見れば、鬼の人格は無惨汁の所為で歪んでしまったものであり、その人の本質なんかではないと思っているし、両親を殺してしまったのもわがままなクソガキの癩癩ではなく、小さなすれ違いが重なり続けた所為で起こった悲劇だと認識できる。

何より行われる呵責自体は大したことなくても、謝りたくて会いたくて仕方なかった両親に、100年間会えない罰は十分すぎる程に厳しくて妥当だ。

だが、子供である彼らにそこまで察しろ、理解しろと言うのは大人の身勝手だとも思っている。

竹雄達も死後100年以上たっているが、あの世の住人は四桁五桁の年齢がゴロゴロ普通にいる為、時間感覚が非常におおらかだ。亡者でも1年が1週間ぐらいにしか思えない者だらけなので、竹雄達も見ただ目相応の精神年齢で、大人の対応など出来なくて当然だ。

「……まく、乱暴はそりやダメですけど、でもあの子を嫌う理由は全部、炭治郎さんと禰豆子さんを思ってたんでしょ？ いい弟さんと妹さんじゃないですか。

俺なんて姉貴の為に誰かを嫌うなんてない、薄情な弟ですから、そこまで慕ってもらえる弟達がいる炭治郎さんも、慕うに値する兄がいる竹雄君たちどっちも羨ましいですよ」

そして一番、竹雄と花子を責められない理由を、唐瓜はフォローではあるが混じりけのない本音で語る。

自分の兄弟を良く言われたのが嬉しかったのか、炭治郎は笑顔で顔を上げたがすぐに、だからこそ弟達は累に理不尽な暴力を振るい、そして自分たちの仲も悪くなっている事を思い出し、しょんぼりとまた俯いてしまう。

「何、ウジウジしてんだ！ キノコ生やす気か、しゃんとしろ!!」

そんな炭治郎の尻を、伊之助がすっぱん！ といい音鳴らして蹴り上げる。

「今日こそ弟達と仲直りするために、煉獄と鬼灯と狛治に頼んで弟達の班担当にしてもらったんだろが！ ウジウジしてる暇あるなら、いじめなんてくだらねえこととしてんじやねえって拳骨してこい!!」

かなりの勢いで蹴られて前のめりで倒れた炭治郎に、伊之助は胸を張って地獄に相応しいシンプル過ぎる解決策を提案する。

もちろん唐瓜は蹴られた炭治郎を心配しつつ、「いや、それたぶん余計にこじれる」と内心で突っ込みを入れるが、炭治郎からしたらさす

がにそのまま実行する気はないが、伊之助の言う通り、ウジウジするより何かしらの行動を取るべきだとは素直に思ったのか、蹴られた尻を撫でながら起き上がった時には、何かを吹っ切ったような清々しい笑顔を浮かべていた。

「いたた……。酷いよ、伊之助。……。うん、でもその通りだな。ウジウジしてたって、それこそ解決なんかする訳ないもんな。」

ありがとう、伊之助。すっきりした」

「お前だけすっきりしてんじゃねー!!」

「痛い!」

「何で逆ギレして頭突き!? 伊之助さんの方が悶絶してるし!!」

生前からの付き合いの長さからか、傍から見たら凸凹コンビなのにいい関係なんだろうなと、やり取りを見て唐瓜は思ってた和んでいたのに、何故か伊之助は礼を言われているのに勝手にキレて、炭治郎に頭突きを入れて自滅。

訳がわからなすぎるこの展開に、唐瓜だけではなく伊之助の奇行に慣れているはずの炭治郎も狼狽えた。

「伊之助! 一体、どうしたって言うんだよ!」

「いってー! なんか、この地獄嫌なんだよ!! 全身がモヤモヤネチヨネチヨして気持ち悪いんだよ!! なのに何でお前だけすっきりしてんだ!」

「はあ?」

子供達からも引かれつつ心配されて遠巻きで眺められながら、額を抑えて伊之助は自分の不満を喚く。

逆ギレの八つ当たりには間違いないが、どうやら一応程度の理由はあったらしい。だが、彼の不満は唐瓜からしたら訳が分からない。

「モヤモヤにネチヨネチヨって……。いや、そういう不快指数が凄い地獄もあるけど、ここはそんな地獄じゃないはず……」

「あれ? 伊之助も? 俺もなんかこの地獄、去年来た時よりも匂いが気になってたんだ」

「え?」

しかし炭治郎の方は伊之助の言い分に共感できるらしく、彼は鼻を

犬のようにクンクンと少しだけ動かしながら匂いを改めて嗅ぎつつ答え、唐瓜をさらに困惑させる。

「匂い？ いや確かに色んな拷問がここでは行われるし、ご馳走の幻覚で亡者を惑わしたりもするから、悪臭といい匂いが入り混じってすごい匂いかもしれないけど……」

「うーん……。そういうのじゃなくて……。というか、俺と伊之助、あと善逸も人どころか下手したら鬼よりも嗅覚とか聴覚とかが優れてるらしいんだ。」

だから俺、話せなくても動物の言いたいこととか、人が思ってる事とかは匂いである程度分かるけど……」

「いやもうそれ、鬼どころじゃないですよ。超能力の類じゃないですか」

いまいち自分たちが感じているものが唐瓜には伝わっていないことに気づき、炭治郎は自分たちの特技を伝えると、納得より先に引かれてしまった。

それに加えて、善逸の聴覚と違って伊之助の触覚はわかりにくいと判断して説明を省いたことが不満らしく、自分の背中にさつきから伊之助がどすどす頭突きをくわらし、子供達からも「ねー、拷問の仕方教えてくれないのー？」と突っ込まれた為、それ以上は何も言わず、炭治郎自身も説明を忘れて仕事に戻る。

気にはなつた。けれど、炭治郎も伊之助も「おかしい」と確信を持てる程のものではなかった。

地獄で血やら汚物やらの物理的な悪臭はもちろん、反省していない逆恨みや不満の匂いなんてあつて当たり前なものだと思ふ程度に、彼らはこのバイトにも、地獄の刑場にも慣れていたし、自分たちの鋭敏な感覚は罪人である亡者よりも、受け持っている子供達に向けられていた。

今日は特別、「逆恨み」の匂いや空気感が強いことに気付いていたけど、気付けなかった。

* * *

「……何でこれは良くて、俺と花子は怒られるんだよ」

竹雄は配られた亡者の黒歴史小説をパラパラめくって呟き、その辺の業火に投げ捨てた。

彼からしたら、これこそイジメでしかないと思うのだろう。否定できな

「竹雄兄ちゃん。捨てたら怒られるんじゃない……」

妹の花子はちよつとオロオロしながら兄の行いを諫めるが、竹雄は不満そうに鼻を鳴らして意地を張る。

「どうせ、俺が何やったって怒るんだから今更だよ」

足元の石ころを蹴り、それを追って、それだけを見て、蹴り続けながら竹雄は離れていく。他の子供ばかり見て、自分に構ってくれない兄から離れていった。

離れつつ、不平不満を呟き続ける。

「兄ちゃんのアホ。バカ。お人好し。姉ちゃんも姉ちゃんだ。何で殺されたのに、あんな甘ったれを許すんだよ。何で……」

口から出るのは、兄と姉に対する不満と累に対する嫌悪や憤り。

それらを口にして吐き出せば出すほど、心の中に溜まった澱が濾されて見たくない本当が露わになる。

本当はわかつてる。

兄も煉獄も粕治も、累を依怙鼻負しているのではなく、自分が悪いから叱っていることくらい。

炭治郎と禰豆子の弟なだけあって、竹雄は周囲が思うよりずっと累の悲劇に関しては同情的だ。累よりも彼を許せない自分の方が嫌いなくらいに。

それでも、許せない気持ちも本当。嫌いなのも、怒っているのも本当。

禰豆子を奪われそうだった兄、炭治郎が殺されそうだった姉、どちらの気持ちも、その時の恐怖も絶望も憤怒も痛い程に竹雄にはわかるからこそ、許せない。

その事を謝りもせず、幸せで仕方ないと言わんばかりの笑顔でいけ

しやあしやあと、「ありがとう」と言った累が嫌いだ。

「……………そして今、心から何度だって謝っている累を許せない自分
はもつともつと大嫌いだ。」

「……………ちゃん！　竹雄兄ちゃん!!」

後ろから裾を強く掴まれて引かれた事と、自分を呼ぶ花子の声で自
分と累への嫌悪のループから我に返り、竹雄は振り返る。

「お兄ちゃん、ダメだよ、早くみんなの所に戻ろうよ！　地獄の刑場は
危ないから、炭治郎兄ちゃんたちと離れたら絶対にダメだって、煉獄
先生言ってたでしょ!!」

花子は涙目鼻声で、自分に縋りつきながら訴える。

その訴えで竹雄は、何も見たくない、炭治郎からとにかく離れたい
一心で、ここがどこであるかも忘れて、自分達の班に割り当てられた
区域から離れ続けていたことによく気付く。

怖がりでも獄卒にも拷問にも興味なんかない、ただ炭治郎と一緒にい
られるくらいの気持ちで今回の体験学習に参加した妹にとって、頼り
になる大人からどんどん離れていくのはよほど怖かっただろう。

それでもついて来たのは、彼女も炭治郎から離れたかった訳じゃな
い。自分を心配していたから、竹雄が気付くまできつと何度もずつと
呼びかけ続けていたことくらいわかっている。

花子に謝り、抱きしめて宥めながら竹雄は辺りを見渡すと、幸いな
がら自分たちの班はだいぶ遠いが、まだ見えるくらいの距離だった。
「ごめん、ごめんな花子！　怖かったよな！　大丈夫だ、すぐに戻るか
らほら！　一緒に走ろう!!」

今戻ったら、またきつと兄に叱られるのは憂鬱だが、それよりも優
先するのは妹の無事。

長男ほどではなくても、次男でも、花子にとって自分が兄なのは確
かだから、耐えられる。竹雄は今更ここが地獄であり、犯罪者の巣窟
である刑場だと思いい出して震える足を叱咤し、駆け出す。

だが、すぐにその足は止まった。

「……………待って。……………その君……………待って」

その声に竹雄も花子も立ち止まり、振り向いた。

彼らは間違いない、そして愚かなほどに炭治郎と禰豆子の弟と妹だった。

罪人の声を聞き、信じてしまうくらいに純粹だった。

* * *

地獄は彼にとって、そんなに悪いものではなかった。

無惨の鬼は人間だった頃の人格からかけ離れた、歪んで醜悪になった者が多かったが、元々醜悪だった者は余計に酷くなるだけで、性格そのものに変化はない。

だから、他者の苦しみ、不幸を見るのが好きで好きでたまらない彼にとって、無惨への心酔は奴の血の影響による洗脳ではなく素だった彼にとって、地獄は自分の好きなものを特等席で見れる最上の娯楽場だ。

自分への呵責は、その料金と思えば安いもの。他者の苦しみに陶酔していたら、拷問の痛みなど気にならない。

そこまでハイレベルな変態だが、唯一にして最大の不満は、自分が地獄にいる原因。

自分の死の経緯と元凶。

誰も殺せなかった。

誰も喰えなかった。

誰も絶望しなかった。

全力を出す必要のない雑魚どもだった。何か一つでも偶然が重なったら、もしくは重ならなかったら、自分が一方的な絶望を叩きつけて虐殺できたはずなのに、みじめに死んでいくしかなかった最期。それだけは死してなお臓腑を灼くほど、屈辱と憎悪そのものの過去。

……だから、今年こそはその屈辱を晴らし、憎悪を愉悦に変える最大の好機。

十数年前から子供の鬼やら妖怪やら亡者が、この刑場へ「体験学習」に來ていること、そしてその体験学習の監督に元鬼殺隊……つまりは彼が最も憎む者達が、バイトとして雇われることは把握していた。

そして、計画を立ててはいたが実行しなかった最大の原因である、妖怪どころか神からも「誰が勝てるんだよ、あれに」と言われていた『本物の化け物』が、転生していなくなったという情報も掴んだ。

奴さえいなければ生前のように、計画がほとんど実行できないままみじめに終わる可能性は、格段に低くなる。

そう確信できるほどに、機会を窺い、準備をいくつもいくつも重ねてきた。

その重ねてきた準備を実行し、起こるであろう結果とそれを目の当たりにした時の奴らの顔を想像しただけで、臓腑を侵す屈辱は少し和らぐ。

自分がそれを見て嗤って、「あースッキリした」と思ってすぐに忘れても、奴らの心には天国の万能薬ですら癒せない傷を負うと考えたら、絶頂に値する快樂が駆け巡る。

だが、空想でその快樂に、愉悦に浸るのはもったいないと言いつつ、人の身に戻っても心は元から鬼だった、人間としての名を捨てた彼は、浮かび上がりそうな笑みを必死でこらえて手を伸ばし、呼びかけた。

「……待って。……その君……待って」
「え？」

最も憎い少年をさらに幼くしたような、竈門 炭治郎にそっくりな泣き黒子の少年を呼び止める。

——さあ、甘美で残酷で取り返しがつかない現実によって、死してなお悪夢に魘されるがいい。

「全ての関節に同じことをされたくなければ、さっさと吐け」

「鬼灯殿、竹雄達の事情を汲んだ監督役をつけてくれてありがとうございます。本当に助かった」

「いえ。事情を知らない獄卒や元鬼殺隊が下手に関わった方がややこしくなりそうなので、むしろ事前に相談してくれてこちらも助かりました」

刑場という現場での監督等の仕事は担当獄卒に任せ、鬼灯と煉獄は大叫喚地獄の事務所にてそれぞれの仕事を行いながら話している。

話の主題はもちろん、累と竈門兄弟（真ん中）の関係について。

「そう言ってもらえるのなら、ありがたい。……しかし、教育とは難しいな。」

これでも弟子を取って炎の呼吸を教えていた経験があるからこそ、教師という職に自信はあったつもりだ。だが、『無惨とその鬼』という明確な敵がいた生前とは違い、『道徳』そのものを教えなければならぬことの難しさとその責任の重さを、今更になって感じている。俺の自信はただの思い上がりで、まだまだ未熟だな」

いつでも明朗快活な煉獄が、本日は珍しく苦笑が多くて言葉も大人しい。

その理由は本人が語っている通り、「している事は明らかに悪いが、気持ちにはわかる竹雄と花子」と、「被害者だが加害者を庇い、またその理由も納得できる累」という、いじめと言うには躊躇する非常に珍しい子供達の関係に悩んでいるからだろう。

鬼灯としては「あんた、弟子を取っても修業が厳しすぎてすぐに逃げられてたでしょ。逃げなかった甘露寺さんは、オリジナル性が強すぎて派生の呼吸を作ったのに、どこから教育者としての自信が生まれた？」と思っていたが、そこを突っ込んだら蜜璃はもちろん逃げた弟子のことも自慢しだすのはわかっていたので、スルーした。

「確かに、誰をどう叱って何を悪いと言うべきなのか難しい問題で

しようね。

しかし、あの兄妹が累さんを毛嫌いするのは、炭治郎さん達の説得というか説明不足が最大の原因だと私は思いますけど」

「説明不足？」

鬼灯の言葉に煉獄はオウム返しをしてから、「どういうことだろうか？」と彼も詳しい説明を求めろ。

だから鬼灯は、「私見ですが……」と前置きしてから、累と竹雄達ではなく、竈門兄弟がこじれにこじれた「原因」を語る。

「炭治郎さんと禰豆子さんはおそらく、累さんを許す自分たちの理由を明確に把握していないから、他の兄弟に説明もしていない。だからこそ、竹雄さんや花子さんにとって、兄達の累さんへの対応が妙に甘く見え、彼ら全員の関係がこじれているように思えます」

「うむ。それは納得なのだが、鬼灯殿には竈門少年が自覚していない『累を許す明確な動機』に見当ついているのか？」

「これでも毎日、最低でも十数人くらいの被害者も加害者も見てますので」

「おお！ それもそうだな！ それで、凶々しい頼みなのはわかってるが、その『許す動機』を教えてはくれないだろうか？」

いつものテンションに戻ったかと思えば、真顔で静かに、真摯に煉獄は鬼灯に頼み込む。

このあたりの誠実さは確かに教師向きだと鬼灯は思いながら、「凶々しくなんかありませんよ」と答えてから、その感想通りあっさり教えてくれた。

「禰豆子さんも炭治郎さんも、鬼になった時は食人衝動に駆られて相手に襲い掛かった経験があり、その事を覚えていきます」

あの兄妹は二人とも、『自分の手で最愛の家族を殺める』という可能性があったこと、……つまりは累さんが自分たちにも『あったかもしれない末路』であるという認識を、無自覚ながらにしているのでは？と私は思っています。

それにプラスして累さんは弟達と同世代なので、彼らにとって累さんは『鬼になつて人を食ってしまった弟』のように思っているのかも

しれませんね。

だからこそ、累さんにされたことを気にせず、あつさり許しているんですよ。

彼らにとつて累さんに起こった事、累さんがした事は決して他人事ではなく、彼の事情を知ればあの『家族ごっこ』ですら身勝手に悍ましいものではなく、自分たちも行っていたかもしれない、憐れむべきことなんでしょう。

なので別に自分たちに向けての謝罪がなくても気にせず、それよりも累さん自身が今、幸福なのかどうか気になる、もう償った過去の罪を掘り返して責める相手が許せないって所ですかね。

で、そんな心境を知る由もない弟達からしたら、そりや累さんへの対応が甘く見えて不満でしょうし、累さんからしても、何であつさり自分を許しているか訳わからないはずですよ。

炭治郎さんたちから見て累さんは、一歩間違えたら起こっていた悲劇の鏡像なら、累さんにとつてはあの兄妹は遠すぎて眩しい、そうでありたかつた理想という認識でしょうから、『自分に感情移入しているから判定が甘い』なんて想像、できる訳もないって話です。

つまりは三者三様に認識がずれている事こそが、善人揃いなのに妙にギスギスした関係が続いている原因なんだと私は分析しています」
鬼灯の解釈に煉獄はしばしポカンとしてから、手をポンと打って納得した。

「なるほど！ 確かに竹雄達は累のしたことが許せないだけではなく、累に竈門少年を取られるという不安や嫉妬を懐いている節が強いな！」

「ええ。二人は何故、炭治郎さん達が累さんを許しているどころか好意的なのか、その理由がわかっていないからこそ、余計に累さんを敵視するんですよ。累さんに甘いのは、下の兄弟たちへの愛情の延長線だということに気付かないまま」

悩みの種だった、竈門兄弟がこじれた理由が鬼灯の私見とはいえ判明したことですつきりしたのか、いつもの明朗さを完全に取り戻し、「なるほどなるほど」と何度か繰り返してから彼は勢いよく尋ねる。

「鬼灯殿！ 体験学習が終わってもあの兄弟が和解していないようなら、今の話を竈門兄弟にしてもいいだろうか!？」
「どうぞ、ご勝手に。」

あくまで私の私見ですし、当たっていたとしても自力で気付くべき問題なんでしょうが……竈門一族全体に言えることですが、あの一族は他人を思いやるからこそ『許せない』理由はまだ深く考えて分析しますが、『許す』理由は完全に感覚的ですからね。

……許す許さないの裁量は被害者の権利であり勝手ですが、何の説明もなしに許されたら、加害者も反省しているからこそ罪悪感を持って余しますし、何より被害者が望んでいないから償いをしようがないのに、外野は勝手に『贖罪もしない極悪人』扱いで責めたてることもありますからね。

許すのなら許すで、その責任を取るべきです」

鬼灯の返答にもう一度煉獄は、驚いたように黙って鬼灯を眺める。その様子に鬼灯が書類から顔を上げて「何ですか？」と尋ねれば、彼は何故か淡く笑って鬼灯からしたら訳がわからなすぎる感想を口走る。

「鬼灯殿は相変わらず優しいな！」

「はあ？」

まず自分には言われないであろう評価を、しかも「相変わらず」とまでつけられて言い切られ、鬼灯は思わず声を上げる。ついでに万年筆をボキッと折ったのは、怒りではなく驚きのあまりだと信じたい。

しかし並の獄卒なら、ビビって思わず「すみません！ やっぱり優しくないです！ 鬼灯様は鬼軍曹です!!」とフォローになつてない訂正を入れてしまいそうな迫力に一切動じず、煉獄は腕を組んで胸を張って、太陽のように朗らかに笑って言い切った。

「その話は累の事だけではなく、狛治の事も含まれているのだろうか!？」
部下思いの素晴らしい上司だと俺は思う！ 俺も、『許す責任』を忘れぬようにしなくてはな!!」

煉獄の勢いに鬼灯はどうでもよくなったのか、「……そうですか」とだけ言って、折った万年筆とその所為で台無しになった書類を捨て

て、新しく書き直す。

訂正はもう面倒くさすぎるので、しなかった。

訳も分からず許されて、罪悪感を持って余す加害者の話は別に狛治を想定して言った訳じゃなかったこと。

あれは、狛治に土下座した自分の話だったことなどしない。

また勝手に許されて持て余すだけなのがわかっていたから、言わなかった。

* * *

気付けなかった。

鬼灯も煉獄も狛治も、時間感覚が緩いとはいえ十数年も毎年続けた行事は、多少のトラブルこそあれど予定調和で終わるといって、平和ボケした考えがあったことは否定できない。

子供がいるとはいえ、雇っているアルバイトが新人はもちろん下手すれば古株の獄卒よりも実戦慣れしている元鬼殺隊だというのも、油断の一因だろう。

しかし何より予想外だったのは、気付けず警戒できなかった最大の理由は「奴」の目的。

地獄に落ちた亡者の中で、素直に反省して更生の為に呵責を受けている亡者などほとんどいない事はわかっている。

亡者が謀反や脱獄を虎視眈々と狙っていることくらい、常に頭の中で警戒して想定していた。

だからこそ、子供を刑場に入れるのは短絡的な亡者ばかりな等活地獄ではなく、頭が回るからこそ迂闊なことはしないでであろう嘘つき・詐欺師が主に落ちる、大叫喚地獄を選んでいた。

この地獄の亡者なら、謀反や脱獄を企てても「最悪の事態」に陥る可能性は低いと判断していたから。

彼らは皆、善良だからこそ奴の目的がその、「最悪の事態」そのものだと気付けなかった。

「ほーれ、ほれ！ いいだろー！ やらないよーだ!!」

「えいえい！ 落ちろ！ 落ちろバーカ!!」

「……なんつーか、毎年の事だけどカオスな呵責だな。これ」

「一応言つとくが、子供がやるからつてことで、危険性がなくて簡単なものにしてるだけで、普段はここまでただの嫌がらせじみた呵責じゃないからな」

気付けないまま、子供たちの体験呵責を大人は監督する。

大きく深い穴になっている区画で、穴の上から子供が釣り竿で紙幣（偽）やらスマホやらエロ本……は子供には見せられないので代わりに「T o L ● V E r（ダークネスじゃないよ、無印の方だよ）」を吊り下げ、それを掴もうと亡者が手を伸ばした瞬間に引き上げたり、石やらカラーボール（針口虫^{しんくちゅう}）、かんしゃく玉などを投げつけたり、穴からロッククライミングの要領で這い上がりとして亡者には、小型の金棒などで殴つて落とすという呵責は、善逸の言う通りカオス極まりない。

そして、ここの区画の亡者は子供や恋人などに対して「好きなものをあげる・してやる」など言っておきながら、その約束を破つたり、あげるフリして取り上げたりなどのモラハラを行った者達なので、確かに嫌がらせでしかない呵責だが実に因果応報な内容であり、子供たちが特に感情移入して呵責が盛り上がるのも納得な現場である。

遠い目で大盛り上がりの子供たちを眺めつつ、それでも仕事はキチンとこなす。

狛治は穴から身を乗り出し過ぎている子供がいないかなどに目を光らせ、善逸も同じく見張りつつ、聴覚も駆使して子供と罪人の両者に異変や不審なところが無いかの警戒を怠らない。

茄子はというと、子供に投擲用の石などを補充して回ったり、金棒を振り回すコツなどを教えて回っている。

小鬼という種族ゆえの小柄さと、持ち前の思い切りのよいアホ小学生メンタルからか、茄子はすっかり子供たちに紛れて見分けがつかない。

それを微笑ましいと思っていた。狛治も、善逸も。

ただ狛治は、今回は妙に多くの亡者が這い上がりとしてしている事に

は気付いていた。だからこそ子供が穴に落ちないように、亡者が這い上がりが成功しないように目を光らせていた。

善逸も狛治から指示を受けて、いざという時はその俊足を生かして子供を保護しつつ、亡者を蹴り落とす準備は万端だった。

警戒していた。油断などしていなかった。

しかし彼らが守ろうとしていたのは子供達であり、「自分」は完全に含まれていなかった。

呵責の腹いせに、子供に危害を加えてやろうという悪意の音には気付いていた。自分たちを憎いと思っている音も聞こえていた。

しかしそれもいつもの事と善逸は聞き逃す。

悪意の爆発というべき、悍ましい鼓動が届くまで。

「!? 狛治さん！」

とつさに狛治に呼びかけつつ、悪意そのものの音を探すが、それはあまりに多すぎて見分けがつかない。

同時に、穴の中からいくつもの礫が善逸と狛治に向かって投げつけられた。

それはその辺の石や子供たちが投げつけて不発だったカラーボールなどがほとんどだが、中には危険なので渡していなかった刃物の切っ先や、触れただけで焼けただれる猛毒が塗られた石などという、明らかに即興では手に入らない、どこか別の地獄の呵責で使われたものをこっそり拝借して隠していたと思われるものが混じっていた。

狛治はとつさに全て拳で、善逸も「おぎやあああつ!!」と鬼灯が絶賛しそうな悲鳴を上げつつも刀で打ち落とすが、どちらも自分に集中砲火で投げつけられた礫を弾くことを反射で優先した為、対応が遅れる。

這い上がるうとして、子供たちに注意を向けさせることで監督役自身の注意をおろそかにさせていた所での集中砲火。

この刑場にはないはずの、別の地獄にも墮獄している者がこっそり持ち込んだと思われる凶器。

それは、突発的な反撃ではない。どう考えても計画的な反乱だ。

その事に気付いた時には、既に亡者は計画の第二段階に進んでい

た。

監督役の二人がいきなり亡者から攻撃されたことに、子供たちは驚き、戸惑い、唾然としてフリーズしている。

その隙を狙って亡者たちは数人がかりで、自分たちに見せつけられていた物品は無視して釣り糸を掴んで引っ張る。

「!! 釣り竿から手を離せ!!」

狛治がとつさに叫んで指示を出す。同時に彼は自分の近くにいる子供は片っ端から、転んでケガするのも厭わず穴から遠ざける為引き寄せて、後ろに投げる。

善逸も茄子も同じように、子供たちに駆け寄って穴から無理やりにも遠ざける。子供も狛治の指示に従って、すぐさま釣竿を手離す者が多かった。

だが、その指示よりも早くに釣り糸を引かれた者、パニックって何をしたらいいかわからず、釣り竿を握りしめてオロオロ辺りを見渡していた者は、亡者が数人がかりの力づくで糸を引いたことで、そのまま逆に穴の中に引きずり込まれ、落とされた。

「ははっ! やった! やったぞ!! 計画通り、人質が手に入った!!」
「おい! 化け物共!! 俺達を天国に連れていけ! さもなければ、このガキどもを殺す!!」

亡者たちは引きずり落とした子供を捕まえ、狛治達に見せつけるように隠し持っていた凶器を子供に突き付けて言った。

それを、穴の上から狛治は見下ろす。

その顔には既に、焦りはない。怒りすら見つけられない。人形じみた無表情だ。

心音等で相手の心理がわかる善逸はもちろん、茄子でもこの時の狛治の胸の内は理解できた。なので、内心でそれぞれ手を合わせて、あの世だがご冥福をお祈りする。

(亡者、終了のお知らせ!!)

* * *

ジャブとしてのメンタル攻撃は終わらせ、呵責の実践を行う為に子供達の点呼を取る。

「え……」

そこで竹雄と花子がいないうことに炭治郎は気付く、一気に血の気が引かせてそのまま地面に這いつくばった。

「炭治郎さん!? どうしたんですか!?!」

「カアアアア!!」

「伊之助さんも急に何!?!」

同じく二人がいないうことに気付いた唐瓜も顔面蒼白になるが、炭治郎の奇行に二人を探すことも炭治郎を宥めることも吹っ飛んで困惑。

更に伊之助が気合いを入れた呼吸をしながら、両腕を広げてなんかその場をくるくる回り出したので、子供と一緒にドン引き。

ドン引き困惑は当然の反応だが、もちろん炭治郎は弟達がいなくなったことに気付いて、パニックを起こしている訳でもなければ、伊之助だって急に野生に還った訳ではない。いつも野生だ。

炭治郎は自分の視力よりはるかに頼りになる鼻を使って、伊之助は己の全集中の呼吸を駆使して「漆ノ型 空間識覚」で二人を探しているだけだ。

しかし炭治郎は説明してやる余裕どころか、周りが干潮のごとく引いていることに気付かず地面に這いつくばって、弟達の匂いを探す。

「ごめん! ごめん、竹雄! 花子! 弱くて、逃げてばっかりの兄ちゃんでごめん!!」

二人がいなくなっている事に気付けなかった自分を、激しく責めたてながら。

匂いで相手の内心をある程度分かるからこそ、炭治郎は二人に対して真っ直ぐに向き合うことが出来ずにいた。

竹雄達の累に対する嫌悪も、自分や禰豆子に対する怒りも、そして何より竹雄と花子自身が「イジメたくないけど我慢できずにイジメてしまう自分」が許せなくて苦しんでいる事を知っているからこそ、炭治郎はつい二人を避けた。二人の「兄ちゃん」と今はあまり顔を合わせたくない」という願望通りになっていた。

累を責める二人自身も、罪悪感で苦しみ続けている事を知っているからこそ、二人の味方も出来なければ説得も出来ないから逃げていたことを、今更になって思い知る。

死後、家族と再会してから取り戻した幸福な日々が続きすぎて、それがもう脅かされることはないと思いついで、甘えて、逆境や苦難に立ち向かおうとしていなかった自分を思い知り、後悔しながらも、彼は手足も顔も泥だらけにし、尖った石の先で傷ついても、周囲の業火にあぶられかけても、かすかに残る二人の匂いを探る。

『兄ちゃんなんて嫌いだ』

『お兄ちゃんの馬鹿』

『何であいつばかり優しくするんだよ』

『あいつは、お姉ちゃんにも酷いことしたのに』

『……でも、あいつは俺達を責めない。何度だって俺にも、兄ちゃんたちにも謝ってる』

『……最初に謝ってくれてたら、仲良くなれたかな？』

『もう、どうしたらいいかわからない。俺が何をしたいのかもわからない』

『謝りたいけど、許せないの。累が嫌いな自分の方がもつと嫌い』

二人の生物としての匂いと一緒に、グチャグチャに入り乱れた感情もそこには残っていた。

その匂いを辿り、探す。

今度はもう目を逸らすのではなく、ただ二人の間違いを叱るのではなく、真つ直ぐに向き合つて、炭治郎自身もどうしたらいいかわからないことを、それでも考えて考えて考えて答えを見つけようと誓つて。

けれど、二人の行方も見つけるべき答えも探すのことは強制的に中断される。

「！ 伊之助！」

「！ 炭治郎！」

「は!? 今度はなにいつ!?!」

傍から見たら奇行でしかないことをしていた二人が、急に同時に互

いを呼び合い、二人に引きつつ騒ぎ始めた子供たちを必死で宥めていた唐瓜がまた困惑するが、その困惑もまたすぐに別の困惑に塗り替えられる。

「参ノ牙!! 喰い裂きつつ!!」

自分たちの方へ、伊之助が腰に差していた刀を二本とも抜きながら飛び込んで来ただけではなく、炭治郎も何かを複数投げつけてきたからだ。

子供達も炭治郎の投擲には気付かなくとも、傍から見たら自分たち以上に化け物じみた伊之助の強襲に悲鳴を上げる。

……その子供らしい甲高い悲鳴に、野太い悲鳴が混じっていた。

「ぎやああああっ!!」

「いつ?」

「ぎやあっ!」

「!?」

驚愕と恐怖による悲鳴だけではなく、明らかにダメージによる悲鳴に気付き、唐瓜がそちらに視線をやると同時に、伊之助は自分も子供達も飛び越えて、刃こぼれが酷い二刀で相手を……子供に襲い掛かる寸前と思われた亡者の首を躊躇なく切断した。

獄卒の唐瓜はもちろん、地獄在住の子鬼たちにとってグロ規制などない。なんならこの程度の惨事は体験前に見学したので、トラウマの心配はないだろう。

だが、そんな彼らでも事態が理解できず、口をあんどり開いてしばし硬直。

「唐瓜君! 子供たちを亡者から……いや、刑場から出して!!」

こいつら! 子供たちを人質にして脱走を謀ってる!!」

そんな唐瓜に炭治郎は指示と同時に、仲間の斬首に引きつつも子供が茫然としているのをチャンスと思い、捕まえようと飛び出した割と根性のある亡者にまたしても、常備していた苦無を投げつけた。

「え!? 苦無が武器!? じゃない! わかりました!!」

元鬼殺隊で最終決戦では無惨の血の毒に冒されながらも戦い抜いた、英雄的存在と狛治から聞かされていた炭治郎の武器が、まさかの

刀ではなく苦無であることに思わず唐瓜は突っ込んでしまおうが、そんなことよりも優先すべき指示を出されたと気付いて、すぐさま対応しようとする。

「宇髓さんと弟切さんから教えてもらいました！ 手裏剣もありますよ!!」

「炭治郎さんって忍者でしたっけ!？」

だが炭治郎の方が何故か馬鹿丁寧とその突っ込みを拾って、手裏剣も掲げて見せつつ解説。

解説してもらったのに唐瓜の疑問は深まっただけだった。

「くそっ！ 失敗だ！ 逃げろ!!」

「剣士じゃなかったのかよ！ 苦無とか投げるなんて聞いてねえよ!!」

いらなすぎる天然を發揮して唐瓜を当惑させつつも、炭治郎は確実に剣術よりも才能があった投擲技術を生かして、掲げた手裏剣を逃げる亡者に投げつけ、脳天などの容赦ない部分に命中させてゆく。

伊之助も逃げる亡者たちに、頭からまさしく猪突猛進に突っ込んで殲滅。

自分たちの奇行をチャンスだと思ったから、あのタイミングで子供を捕まえようと行動したのであって、元々自分から直接的な行動を取らない罪状で墮獄した亡者な為、既に戦意はほぼ喪失して、全員が逃げの一手である。

そんな亡者でも逃がさず、行動不能にしているのは他の区画まで逃げ出して、同じ事を繰り返さないように……ではない。

炭治郎も、伊之助も気づいている。気付いてしまった。

亡者たちの、「子供を人質にして地獄から脱獄」は今、この区画だけで起こってっている事ではない。自分たちの奇行が、油断が招いた突発的なものではない。

もつと前から計画されていた、この唐~~瓜~~望処という地獄全体で行われているものであるという事を、その優れ過ぎた感覚で理解してしまった。

だからこそ、ここで目につく亡者は全て行動不能にしないでいけ

ない。

見張りなどいらぬ、後始末は事態が終わってからでいい状態にする。そうしないと、出来ない。探せない。

早く、一刻でも早く探しに行かなければならないからこそ、容赦も余裕もない。

竹雄と花子を見つけなければならぬ。

その焦りが、気付いてしまった亡者たちの計画の規模の大きさが、二人から思考力を低下させて気付けない。

亡者たちからの、「裏切られた」「騙された」という怒りの匂いにも、逆恨みの嫌な空気にも気付けなかった。

「奴」の真の目的に、気付けない。

* * *

卑劣な手段で家族を奪われた粕治にとって、子供を人質に取るという手段は、彼の数多い地雷の中でも最大レベルのもの。

「……茄子、子供達は任せる。善逸、お前は下の子供たちの回収と保護を頼む」

無表情のまま亡者たちを見下ろしつつ、粕治はやけに静かに二人に指示を出す。

彼がどれほど内心でブチ切れているかには気付かなくとも、不穏な空気くらいは感じたのか、亡者は一瞬狼狽えたが、亡者の中でも一番ガタイのいい男が怯えた者に怒声を浴びせる。

「何ビビってんだ!! こいつは鬼と同じくらい馬鹿力だが、武器なんか使わねえことくらい知ってんだろ! 他の奴も剣士で飛び道具なんか使えねえって言ってただろうが!!」

おい! 化け物に尻尾振る飼犬! もしかして人質を殺すつてのはハツタリだと思ってるのか!? こんだけいるんだ! 別に一人くらい減ったって、俺達がかまわねーんだぜぶっ!!」

傍らの子供の髪を掴み、手のひら大の石を握って泣きじゃくる子供の頭に向かって振りかぶっていた男の顔面が、殴られたようにめり込

んでそのまま後ろに吹っ飛ぶ。

他の亡者は何が起こったか訳が分からずポカンとフリーズするが、同じように子供を拘束する者、危害を加えようとしている者がスパン！ という空気が弾けるような音と同時に、顔面や体の一部が陥没して、どんどんぶつとばされて行く。

亡者の内の何人が、穴の上から狛治が空手の型のような動きをしている事に、その動きと同時にパンツ！ という音がして、自分たちがぶっ飛ばされている事に気付いているだろうか？

そして鬼殺隊の方々は何人か遠い目で、もしくは戦慄しながら思うだろう。

「空式、人間でも使えるのかよ」と。

拳撃による衝撃波を亡者にぶつけるという、血鬼術じみた中距離技を生身で行って亡者を沈め、善逸は味方相手に「ひいひいひいっ!!」と恐怖による悲鳴をあげつつ、子供を瞬間移動じみた速さで回収。

こうして、亡者による子供たちを人質に取った反乱は5分も掛からず鎮圧。

だが当然、これで終わらせる気は鬼灯の薫陶を約100年間受け続けた狛治にある訳がない。

……薫陶（人徳・品位などで人を感化し、良い方へ導くこと）って何だっけ？

「茄子、悪いがまだ子供は頼む。善逸、尋問するから音を聞いてくれ」

「うええええ!! いいけど！ やるけど！ 狛治さんの音が既に怖いんですけどー!!」

無表情のまま、子供を回収して穴から上がって来た善逸の首根っこを掴み、狛治は返事も聞かずに穴の中に飛び降りる。

そして最初にぶっ飛ばした亡者の元までやってきて、その背中を踏みつけて訊いた。

「おい。お前ら、誰に何を吹き込まれた？」

「へ？」

空式のダメージでのたうち回っている亡者は、彼の問いが聞こえて

いるのかどうかも怪しい。

不思議そうな声を上げたのは、尋問されている男ではなく善逸と子供を宥めながらもこちらを窺っていた茄子だ。

「……」いつら、現場仕事もする俺はともかく、監督役が剣士で中・遠距離攻撃が出来るような奴らじゃない事を把握していた。それも、誰かからの伝聞だとか丁寧に告白してたぞ。

……それに、タイミングが気になる。去年は亡者ではなく子供相手とはいえ、よりにもよって縁壺の実力を見せつけておいたのに、今年いきなりこんな謀反を起こすか？ 隠して持ち込んでた武器の量からして、少なくともここ数年単位で準備してたんだろ。ならなおさらに、去年の事を知らない新参者が起こしたんじゃない。

……鬼殺隊の事、そしておそらくは縁壺がもういない事も把握している奴が計画を立て、唆したんじゃないのか？」

自分の問いの意味がわかっていない二人に、狛治は男の背を踏み、右腕を掴んで上半身を逆エビぞりさせながら、淡々と説明する。

これは短絡的な犯行ではなく、かなり計画性があるもので、しかも黒幕がいるということ。

その説明に茄子はポカンとしてから、「ああ！」と納得するだけだが、善逸は相変わらず狛治のキレ具合にビビりつつ、首を激しく上下に動かす。

「い、いるみたいですよ、狛治さん！ めっちゃ凶星で焦ってる音がしてる!!」

「そうか。ありがとう、善逸。」

さあ。この通り、話さなくてもお前の内心を見通せる奴がここにいる。さっさと全部吐け」

どうやら先程の話は、茄子と善逸への説明だけではなく、そもそもこの憶測が当たっているかどうかを善逸に判定させるために、亡者に聞かせていたのもあるようだ。

亡者はサトリのように自分の内心を言い当てる善逸に怯え、狛治の足の下でもがきながら鼻も口の中の歯も折れた状態で、「化け物!!」と罵った。

昔なら凹んだだろうが、自分の高性能すぎる聴覚も、ヘタレた性格も受け入れて、良い所を見つけてくれる仲間を、家族を得た今の善逸からしたら、そんな罵倒は強がり抜きで正真正銘どうでもいいこと。

だが、これは「類が友を呼ぶ」という奴なのか、善逸自身も自分の事より自分の大好きな人たちを侮辱された方がキレルように、狛治が本人以上にその発言にマジギレした。

踏みつけていた足を背中のご真ん中から、引っ張っている右腕の付け根、つまりは肩辺りに移動させ、そのまま狛治は更に亡者の右腕を引っ張る。

当然、右腕の関節は肩からゴキッ！ と鈍くて嫌な音を響かせて外れた。

その音だけで善逸だけではなく、そこらの亡者や茄子も肩が痛くなるのだが、……キレた狛治はそれだけでは終わらせなかった。

「ぎゃあああぐうっ!」

「ひっ!」

肩を外された亡者が悲鳴を上げた瞬間、狛治は引っ張っていた右腕を思いっきり押し込む。

つまりは、脱臼を即座に治してやったのだが……、脱臼経験者なら知っているだろう。脱臼は下手したら外れた時より治す時、入れる時の方がもつと痛いということ。

しかも狛治は完全に治療というより、無理やり押し込んで入れ直しただけなので、その痛みは想像を絶する。現に亡者は失禁して痙攣しており、善逸はその激痛の音を直近で聞いているので、腰を抜かしてマジ泣き寸前である。

キレると視野が狭くなる悪癖を直しきれていない狛治は、それほど侮辱を許せなかった、守りたかった対象である善逸にマジビビリさせているという本末転倒に気付かないまま、亡者に訊いた。

「全ての関節に同じことをされたくなければ、さっさと吐け」

そのやり方といい、口上といい、醸し出すオーラといい、それはまさしく鬼灯の側近に相応しい姿だったと、のちに茄子は語っていた。

……薰陶って本当に何だっけ？

亡者は既に嫌がらせでも意地でもなく、痛みのみあまりに何も言えないでいる状態だが、狛治が右腕から手を離して今度は左腕を取ったことで、先ほどの発言は脅しでも、見せしめの一撃でもないことを理解したのか、亡者は泡を吐きながらも答えた。

「ひいつ！ え、えん……む……、魔夢つて名乗つてた奴だ!!」

わかったあのやめて欲しいだのという前口上もなく、黒幕の名前を即座に吐き出す。

他の亡者も、今現在拷問を受けている亡者の二の舞になりたくないの一心で、自分たちに今回の計画を吹き込んだ黒幕の特徴、黒髪が肩に届くか届かないくらい長さの青年だとか、やけにねっとりとした声と話し方をして気色悪かったとか、呵責されてても夢心地でキモかったなど、口々にただの悪口としか思えない情報を吐き出す。

だが、狛治には最初の自白だけで十分だった。

本名ではない。自分と違って、鬼になってからよりも人間であった時代の方が長いくせに、童磨と同じく人間の頃の名を捨てたも同然に、自ら名乗っている事は知っている。

反省など何もしていないこと、むしろ何故かいつもやたらと喜んでいる事も知っていた。

鬼灯も、別の地獄に墮とした方がいいと思いつつ、喜んでいるからこそ逃げ出す可能性はないと思い、だからつい後回しにし続けていた問題児。

それが間違いだったことを、思い知る。

奴の名が出ただけで、狛治はこの「計画」の「真の目的」を察することができてしまった。

「茄子！ 子供達を刑場の外まで避難誘導を頼む！ その際、亡者には一切の容赦をするな！ なるべく他の班とも合流して、監督役の獄卒と協力して子供たちをとにかく外に出せ!!」

狛治はもう用済みとなった亡者を蹴り飛ばして、茄子の方に向き直って指示を出す。

そして腰を抜かしたままの善逸にも指示を出し、告げる。

「善逸！ お前は刑場を走り回ってとにかくこの情報を流せ!!」

この計画を唆した奴の目的は、脱獄なんかじゃない!! むしろそんなことどうでもいい! 失敗することが大前提の計画なんだ、これは!!

奴は、魘夢の目的は子供を、それも亡者のように蘇生できない子鬼たちを殺すことで、鬼殺隊の心に致命傷のトラウマを刻み付けることだ!!」

* * *

初めに話しかけられた時は、獄卒が班からはぐれた自分たちに気付いて話しかけてくれたと思って、振り返った。

だから、その話しかけた人物が死に装束の亡者、つまりはこの地獄に堕ちた罪人であることに気付いた瞬間、慌てて妹の手を引き、逃げようとした。

だが、相手は竹雄に向かって引き留める言葉を叫ぶ。

「待ってくれ! 君、額に炎みたいな形の痣があるお兄さんいない!? 花札みたいな耳飾りもつけてたんだけど、心当たりはない!?

無かったとしても、どうか俺の話を聞いてくれ! もしも君が、俺の知ってる鬼狩りの身内なら俺はこのまま放っておくことは出来ない!!」

背後の亡者が尋ねた「炎のような痣」も、「花札のような耳飾り」にも心当たりはバツチリあったことと、相手の切羽詰まったような声音、自分たちを案じるような発言が気になり、竹雄と花子は駆け出していた足を止め、もう一度振り返る。

距離は取ったままだが、ひとまず話を聞いてくれることに安堵したのか、呼び止めた亡者……花子くらいの長さがある黒髪に、どちらかと言えば可愛い系に整った顔立ちの青年は一息ついてから淡く笑った。

「ありがとう……」。

今の言葉で立ち止まってくれたってことは、鬼殺隊とか鬼舞辻 無惨って鬼の事とかは知ってるんだね。時間がないから要点だけ話す

けど、俺は生前、たぶん君達のお兄さんに退治された無惨の鬼なんだ。退治されたことを恨んでないよ。あれ以上、人を辞めて罪を犯し続けることから解放してくれたことには感謝してるし、ここに堕ちたのは当然だと思ってる。

だからこそ、俺は君達を守りたい。君のお兄さんに恩返しがない。

どうか、俺と一緒に来てくれ。この亡者たちは、体験学習に来た子供達を人質に取って、脱獄を企てている。今、下手に戻ったら君達が人質に取られてしまうから、事態が解決するまで隠れていた方がいい!!」

亡者は本当に要点だけを話したため、逆に竹雄も花子も思考が追いつかず頭の中に「？」が乱舞する。

全てが重要な情報だからこそ、「え？ 兄ちゃんが退治した鬼？

脱獄？ 人質？」と情報が頭の中で渋滞を起こして混乱している最中、刑場から響いたいくつもの悲鳴が、更に二人から正常な思考能力を奪ってゆく。

「！ もう始まった!? 急いで！ 鬼の子なら亡者に反撃できるかもしれないけど、君達じゃ無理だ!! 行くよ!!」

だから、竹雄も花子もいつの間にか近づいてきていた亡者に気付けなかつたし、彼が自分たちの手首を握って、兄たちのいる方から逆方向に走り出しても、抵抗もせず、疑問も懐かず、反射的についてゆく。竈門家らしい善良さが、亡者の言葉を信じてしまった。狛治という兄に殺されたが、そのことを恨むどころか心から感謝している人という前例を知っていたからというのもあるだろう。

だが同時に、自分たちと同じくらい善良な人たちと付き合ってきたからこそ、二人はその亡者に違和感を懐く。

同じ「無惨の鬼」「兄に退治された」という過去を持つこの亡者と狛治は、何かが違う。

いや、狛治どころか累とも何かが決定的に、致命的に違う。

けれどその違和感は正体が掴めないどころか、違和感だとすら気付いていない。

「亡者が自分たちを人質にして脱獄しようとしている」という情報が、兄や学校の友達への心配、自分たちはどうなるのかという不安を煽り立てて、その違和感による胸のモヤモヤした何かを隠してしまう。

隠されても、それでも確かに感じていた。

だから竹雄は、亡者に手を引かれながら訊く。

「……ねえ、何でにーちゃんは地獄に落ちたの？」

亡者は淡く微笑んで答えた。

「鬼だった頃に、空腹に耐えられずに人に嘘をついて騙して襲っていたからだよ。……本当、あの頃の俺は最低だ。地獄に落ちるのは当然だよ」

その言葉に、安堵する。安堵していると言い聞かせる。

自分の行いに、判断に間違いなんかない。

自分自身に、「この人は大丈夫」だと言い聞かせる。

罪人だが粕治と同じように、必要以上に自分を悪く思っているからこそ、未だにここにいるのだと信じる。

だから、心配ない。

そう言い聞かせる。

自分たちを兄から、獄卒から引き離し、亡者すらいない人気のない刑場の片隅にまで連れていく相手を信じる。

信じて大丈夫だと、言い聞かせる。

「………や、やだ！」

竹雄は自分に言い聞かせた。

だが、花子は今にも泣きそうな声で、その場に立ち止まって拒絶の言葉を上げる。

「は、花子？」

「？ どうしたんだい？ 大丈夫だよ、もうちよつとで君たち二人なら隠れられそうな岩の隙間があるから……」

亡者は急に立ち止まって駄々をこねだした花子に、決して怒ったりはせず、最初から変わらない優しい声音で説得する。

だが、花子は涙目で首を横に振り、足をカタカタと震わせつつもその場から動こうとはしない。

「お、お兄ちゃんは……竹雄兄ちゃんは……気付かないの？ ……変だと、思わないの？」

震えながら、それでもありつただけの勇気を振り絞って尋ねる。訴える。

竹雄は兄としての責任感で動いていた。自分が何も考えず、勝手に離れたことで妹を危険な目に遭わせ、怖い思いをさせているという罪悪感でいっぱいだった。

妹を、上や下など関係なく自分の兄弟を、家族を守りたいと思う気持ちの強さに、竹雄も炭治郎も差などない。

だが、長男の炭治郎と違い、次男の竹雄は常に頼りになる人がいたからこそ、妹を守りたいからこそ自分一人しか妹を守る人間がいなという状況が不安で仕方なかった。頼りに出来る誰かを欲してしまった。

「な……何……が？」

頼りたかった。誰にも頼らず、一人でこの状況を頑張るという事に耐えられなかった。

だから、言い聞かせた。言い聞かせて、懐いた違和感から目を逸らした。

だけど妹の方は、花子は「守られる立場」だからこそ、竹雄を頼りにしていたから、竹雄がいたからこそ兄より余裕があった。

兄さえいれば大丈夫という信頼が、竹雄の目を逸らしていた違和感の正体を照らす。

彼女は、気付いていた。

だから叫ぶ。

涙を瞳にいっぱい浮かべて、未だに亡者が自分の手首をつかんで離さないことに怯えながらも、それでも、兄に頼りながらも、彼女だつて家族を守りたい気持ちに差などないから。

「この人、一度も謝ってない！ 狛兄ちゃんみたいに、自分が鬼だつたつて話す時も痛そうな、苦しそうな顔しなかった!!」

恩返ししたいと言ったけど、累みたいにお礼だつて一言も言つて

ない!!」

妹の訴えに、叫びに、竹雄は目を見開いて固まる。

振り返れない。振り返るのが、今、自分の手を掴んで離さない亡者がどんな顔をしているのかを確認するのが怖い。

だけど、もう目は逸らせない。花子の指摘で、竹雄も自分を騙そうと言いついていたものが剥がれ落ち、懐いていていた違和感の正体に気付く。

亡者は自分たちを安心させるように、優しく淡く笑っていた。

あまりに綺麗に、狛治の笑顔とは違って、そこに罪悪感や自己嫌悪による苦さや痛みは、自分の罪を語っている時ですらまったく読み取れなかった。

恨んでいない、恩返しがしたいとは言っていた。けれど、炭治郎への礼は一言もなかった。

累のように、自分たちの神経を逆なでさせたが、それでも本心からの言葉だとわかるような、目を星のように煌めかせて、今が幸せだと一瞬でわかるような笑顔でもない。

亡者の笑顔は、どこまでも薄っぺらいものだったことを、今更思い知る。

「……なあんだ。もうばれちゃったか」

自分を取り返しのつかない間違いを犯していたことを、思い知る。

* * *

背後から今までとは違うねっとりとした気持ち悪い声音に、悪寒が背筋を全力疾走したが、それでも竹雄は逃げ出したいという弱音をねじ伏せつつ振り返る。

だが、亡者は竹雄から手を放す。彼をあっさり解放する。

「!? おにいちゃっ!!」

「!? 花子!!」

しかし妹は逆に、亡者が引き寄せて後ろから抱きしめるように拘束

され、妹に手を伸ばした竹雄は蹴り飛ばされた。

亡者は花子の細い首を掴み、兄に助けを求める彼女の声を奪う。

「本当、兄弟仲が良いよね、君達は。だけど、馬鹿だ。」

先生の話は良く聞いた方がいいよ、お兄ちゃん。ここは大叫喚地獄。嘘つきが堕ちる地獄で、しかもここは『相手の希望を叶えてやると嘘ついて騙した裏切り者』が堕ちる地獄だよ？

そんな地獄の亡者が、本当のこと言う訳ないだろ？」

みぞおちに思いつきり前蹴りを入れられた竹雄が、咳き込みながら蹲って悶えているのを見下ろしながら、亡者は……魔夢はニヤニヤと彼の間違いを指摘して嘲った。

その嘲りを、地面に這いつくばりながら竹雄は蹴られた痛みより悔しさと情けなさで泣きそうになりながらも、精一杯の力を両目に込めて相手を睨み付けてながら、呻くように言う。

「花子を……離せ!!」

だが、兄の精一杯の矜持も、痛みも恐れも忘れる程の怒りも、魔夢にとつてはただただ壊し甲斐があるちっぽけな強がりにも過ぎず、竹雄の言葉は奴の愉悦を深めただけ。

「ははっ！威勢がいいね。あ、もしかしてすぐに助けが来ると思ってる？ 大声を出せば、あの耳がやたらと良くて足が速い奴あたりが来てくれると思ってる？」

そうだね。お前の兄貴やイノシシ頭も厄介だけど、あれも見た目のわりに厄介だ。けど、『お前』は助かってても、流石に『こっち』は俺の方が早いだろうな」

竹雄の要求を笑って、嗤って無視して勝手に語る。語りながら、花子の首を呼吸こそは出来ているがそれでもかなり苦しそうな力加減で掴んだまま、死に装束の帯から隠し持っていた刃物を取り出し、その切っ先を花子の小さな鼻の真横に向ける。

「ひっ！」

「花子っ！ あぐっ!!」

「大きな声を出すなよ。手が滑っても知らないぞ？」

首や胸といった致命傷の部分ではなく、肉体的にも精神的にも酷い

ショックを受けるがすぐに死にはしないであろう部位を削ぎ落とす脅しつける。

花子は刃物の冷たい感触で喉の奥から短い悲鳴を泣きながら上げ、竹雄は体を起こして再び妹に手を伸ばすが、その前に魘夢は彼の手を踏みつけた。

「君は本当にバカだけど、良いお兄ちゃんだね。あいつに、君の兄貴にそっくりだよ。」

けど、救い難いぐらいにバカだよ。俺にとっては幸運この上ないけど、なんで勝手に班から、監督役の獄卒から離れたの？ そんなことしたら俺の計画なんかなくなっちゃって、絶対に今と似たような目に遭ってたぜ？」

竹雄の手をグリグリと踏みにじりながら、彼の失敗をネチネチと掘り返す。

今の状況は自業自得、妹が一番危険な目に遭っているのは竹雄の所為だと言い聞かす。

「や、やめろ……」

「やめろ？ 言葉遣いが悪いなあ」

「!? や、やめてください！ 花子だけは！ 人質なら俺がなるから、花子は！」

竹雄の兄としての責任感の強さ、妹への罪悪感を利用し、鬼になる前からここに墮獄は決定済みだった趣味で培った特技を使って、竹雄の思考を歪めて洗脳してゆく。

自分の命令に忠実な、憐れな奴隷を作りあげる。

「素直でいいねえ。けど俺、実は人質なんかどうでもいいんだ。目的は脱獄じゃないし」

「お……お願ひします……。俺が出来ることならなんでもしますから……、花子は……」

妹の安全の為に竹雄が媚びだしたことで満足げに笑いながら、魘夢はもったいぶってから要求を告げた。

その要求に、竹雄は目を見開いて金魚のように口を何度か開閉させる。

「いやだ」「出来ない」「そんなことしたくない」あたりを口にしたらかつたのだろうが、見上げて真つ先に入つたのは、魘夢のニヤニヤとした醜悪な笑みではなく、妹の怯えきつていながらも、それでも「やめて」「そんなことしないで」と訴える瞳だった。

妹は望んでいない。それでも、今一番危険な状態の自分自身よりも、こんな目に遭わせた兄を案じていたからこそ、竹雄の選択肢に余地はない。

「——わかり……ました……」

人の身に戻つても、心は無惨の血を得る前から腐り切つた邪鬼そのものだった魘夢に、竹雄が抗う術などなかった。

* * *

予定外かつ予想外に、自分に都合の良いすぎる獲物を見つけ、そして理想通りの道具に仕立て上げた事に魘夢は既に満足していたが、奴は知らない。

自分の知らない所で、さらに予想外なことが起こっている事を。

「獄卒のみなさあああんっつ!!」

亡者の集団脱走計画の黒幕は、元下弦の壺だった魘夢って奴でーす

!!

本名は忘れたごめん!! 確かトーマス呼ばわりされてた奴だから、心当たりある人は探して見つけてえええっつ!!

あと、亡者あああっつ! お前ら、騙されてるからな!! この魘夢って奴、お前から利用して鬼殺隊おれたちに嫌がらせしたいだけだから、もう大人しくしてろよ頼むから!!

炭治郎おおっつ! 伊之助ええっつ! 覚えてたら探して見つけて! 俺、その時気絶してたし、浄玻璃の鏡で寝ながら戦つてたのを知つた時はびっくりしたけど、それでもたしか先頭車両の方には行つ

てなかったから、マジでわかんないから!! 役立たずでごめん!!

あと、禰豆子ちゃんは来ないでええつつ!! お昼に弁当持ってきてくれるのは嬉しいけど、めっちゃくちや嬉しいけど、その予定だけで地獄の拷問全部耐えれそうなくらい楽しみだったけど、今は危ないから聞こえてたら入ってこないでー!! 獄卒の皆さーん! 禰豆子ちゃんが出来たら事情話して止めてあげてお願いしまーすつつ!!」

善逸が狛治の指示通り、ひたすら地獄を走り回って大声でとにかく周囲に情報を拡散し続ける。

このやたらと原始的な手段は予想していなかったが、自分が黒幕だとばれることも、情報が拡散されることも、それは魘夢の想定内かつ計画の範囲内。

魘夢は狛治が察した通り、脱獄は亡者たちを動かす為の口実ではない。失敗することが前提の計画であり、本当の目的は脱獄の手段ははずだった人質である、体験学習に来た子供。

その子供、特に蘇生が可能な亡者ではなく子鬼や野干といった妖怪の子供を殺害することで、彼らを守るはずだった鬼殺隊に、自分が悪夢のような最期を迎える羽目になった元凶である炭治郎に、致命傷のトラウマを刻み付けることこそが目的。

だから、魘夢は生前の人間の頃から得意としていた催眠術を応用して、自分が利用した亡者たちに、スイッチを植え付けた。

失敗することが前提の計画であったこと、自分たちが利用されていただけだと知れば、亡者たちは当然、怒り狂うだろう。

その怒りの矛先が、自分ではなく子供に向かうように魘夢は亡者たちを洗脳していた。

催眠術は万能ではない。自殺や殺人など、かけられた側が心から望んでいないことは、どんなに腕が良い催眠術師でもかけることは出来ないのは有名な話。

だが、本人がしたいことを後押ししつつ、その対象を本来の目的からずらすくらいなら容易い。

自分たちは騙されていたと、亡者たちが知ることこそが催眠のス

イツチ。

怒りの対象そのものは魘夢だが、目の前にいない本人よりすぐ近くにいる子供へその怒りをぶつけることを自分の意思だと信じ込んで、ヤケクソで暴れ回り、子供をつけ狙い、襲い掛かる。

ここまでは計画通りだ。

しかし奴は、過信していた。生前はまさしく運が悪かったこそその敗北だが、今回は地獄の刑場という狭くそして単調な毎日を100年間過ごし、想像力が乏しくなったことが敗因になることを、まだ奴は知らない。

縁壺があこの世にまだいた頃、子供好きなのでこの体験学習の為の監督役というバイトには、毎年律儀に参加していた。

だからこそ、彼の反則的な戦闘力を魘夢は知っていた。理解していた。

故に獄卒の雑談で、彼が転生してあこの世にいない、今年から監督役に彼はいないことを知って、計画を実行した。

魘夢は気付いていなかった。

縁壺という最高峰という言葉すら低すぎる高みばかりが目を惹いて印象に残ってしまったって、他の鬼殺隊を甘く見ていた。

「トーマスって誰だよ!? 何でトーマス!?!」

「なんか汽車と一体化してた鬼らしいから、通称がトーマスらしい!!」

「余計に誰だよ! 初めにその通称使い出した奴!!」

善逸の拡散した情報にぎやーぎやーと突っ込みを入れつつ、子供を守りながら亡者を迎撃していく元鬼殺隊。

彼らは生前、柱だった者ではない。階級はバラバラだが最下層の癸みずのとどころか、隊士として適正が低いと判断され、後始末や後方支援役に回った隠かくしだった者もいるのだが、それでも突っ込みという無駄口を叩きながら、子供たちを守るくらいの実力はある。

100年経っても、誰も理不尽によって傷つけられることを許しはしない。誰かを守りたいという思いは、薄まりなどしなかった。

「あの、変態亡者! 余計なことしかしねえな、マジで!!」

「っていうか、あの腐れトーマス絶対に鬼おれたちの獄卒たの存在、忘れてやがる

な!!」

「地獄の鬼を舐めんな、無惨産の変態鬼がーっ!! 俺達だつて村田さんや非常食先輩くらいには強いからな!!」

突っ込みではなくこちらは不満だが、鬼殺隊と同じように無駄口を叩きながら、無惨とは無関係、純粹純血地獄産の鬼である獄卒たちは、金棒やら斧やらを振り回して、こちらも亡者を遠慮なく言葉通り切り開いて道を作り、子供たちを刑場の外まで連れ出してゆく。

彼らの言う通り、魘夢は鬼殺隊への復讐心で鬼である彼らの存在をほぼ忘れていたが、完全に蚊帳の外だった訳ではない。

彼の予想では、自分の計画がばれたら鬼のヘイトも鬼殺隊に向くと思っていた。鬼殺隊がいたからこそ逆恨みを買ひ、地獄がかなり大きな責任問題を追う羽目になるからこそ、鬼も鬼殺隊を逆恨みすると信じて疑わなかった。

自分がそういう人間だからこそ、鬼だった頃は人間を見下していたからこそ、鬼と亡者にんげんの信頼関係や共存なんて、想定範囲外にも程があつた。

そして、自業自得な敗因だけではなく、今回もまた生前と同じく運が最悪だった。

「……ごめん、善逸さん。もう来ちゃってる」

善逸のかなり公私混同している絶叫による情報拡散に、どう反応したらいいか悩みながら禰豆子はポツリと呟いた。

その呟きに、フォローする声音は二つ。

「まーまー。来ちゃったからには仕方ないですよー!」

「そーね。だいじょうぶ! 私達がちゃんと禰豆子、守るよ!」

鬼だった頃ならともかく、人に戻った禰豆子は精々七つの算盤を破壊してきたくらいデコピンの威力がすさまじい程度の女の子であり、いくら大叫喚地獄の亡者はフィジカルに優れている者は少ない傾向とはいえ、成人男性が相手なら一対一でも勝ち目は薄い。

だが、今はそんな心配なくていい。むしろ、亡者に同情するくらい彼女には優秀過ぎるボディガードがいる。

「あー、うん。ありがとうね、芥子ちゃん。チュンさん」

「いいんですよー。直接の所属は違う小地獄とはいえ、大叫喚地獄は私を受け持つ地獄ですし」

「あいなー。私も、今日休みで、暇だからついて来ただけね。運動しなかったから、ちようどいいくらいよー」

善逸や兄達の分も入った重箱を抱えつつ、亡者を言葉通り吹っ飛ばしていく女傑たちに礼を言うと、一匹と一人は笑って更に禰豆子をフォロー。いや、芥子はともかく、チュンはたぶん本音しか言っていないだろう。

魘夢にとつて復讐対象の一人であり、本来ならバイトとしての参加もなかったであろう禰豆子も、刑場に来ていたことは幸運な部類だろうが、刑場に来る途中に偶然出会ってそのまま一緒に来てくれた一匹と一人の戦力は、鬼殺隊の柱レベルだった。

幸運が5くらいなら、不運が100くらいのバランスブレイク具合であることに魘夢がまだ気づいていないのは、幸運なのか不運なのか誰にもわからない。

自分の計画が生前以上に裏目に出て、あらゆる相手の怒りの火に油を注いで業火にしている自覚は未だ、魘夢にはない。

気付けない。彼の計画は、誰の怒りを買うのかも。自分は鬼殺隊以上に、警戒して敵に回してはいけないのは誰であったかを理解していなかったことに、気付けない。

「……すみません、煉獄さん。これは完全に地獄の、私の判断ミスです。」

反省していないことは知っていましたが、他者の拷問に悦びを感じるような奴なら、孤地獄に放り込んでおくべきでした」

「いや、そんな変態の思考など想像できる訳ないのだから気にするな！

むしろ一応は直接戦った俺が、警戒しておくべきだろう！ まさか、またしても同じ相手にこんな不覚を取ろうとは！ 我ながら情けなくて恥ずかしい!!」

相手にしていなかった。お互いに。

ネチネチと長時間かけて甚振ることを好む魘夢にとつて彼は、面白

みのない合理主義そのものという印象だった。機械的で、感情なんてものは何も理解できていないと思っていたので、獲物としてはもちろん、警戒すべき対象だとも思っていなかった。

まさか自分が、「甚振って喜ぶ奴を粉碎して、何が楽しいんですか？」と思われて相手にされていけないなんて、そこまでの真性DSを敵に回していたなんて、想像していない。

狛治からの連絡を受け、煉獄を伴ってそれはやって来る。

「ええ、私も同じ心境です」

「よもやよもやだ……」

そして煉獄は気合いを入れる為と景気づけに、こちらは完全に自分が招いた油断に対する怒りと、仕事がまた無駄に増えたことに対する苛立ちの八つ当たりで、二人はそれぞれ刀と金棒を構えて唐×望処の入り口である巨大な扉をぶち破る。

「穴があつたら入りたい!!」

埋めたいの間違いだらうと指摘したい発言をかましながら、現れる。

計画を実行するまでもなく、決定事項だった敗因。

地獄の黒幕、閻魔大王の第一補佐官、鬼灯が現場入りしたことで魘夢の破滅カウントダウンは始まった。

* * *

門扉を木っ端微塵に破壊したことで、刑場からここまで避難して来た子供達や獄卒達は啞然。

怒りの対象が黒幕の魘夢であることはもうわかり切っているのに、鬼灯のマジギレオーラに怯えてその場の全員が固まってしまった。

そんな彼らを一瞥し、鬼灯が指示を出す前に一人だけ前に飛び出し、鬼灯に縋りついて叫んだ。

「鬼灯様！ 煉獄先生！ 僕も連れて行って!!」

累がしがみつき、今にも泣きだしそうな、くしゃくしゃに歪んだ顔で懇願する。

「……竹雄達はまだいないな。累、不安なのか？」

彼らを心配する気持ちはわかるし、何かしたいと思うことは素晴らしいが、大人しく他の皆と避難しろ。悪いが、お前を守ってやれる余裕はない」

「違う！ 守らなくていい!!」

煉獄が珍しく困ったように、少し弱い声音で累を宥め、鬼灯から引き離そうと試みるが、累は噛みつくように煉獄の言葉を否定する。

不安なのも心配しているのも、だからこそ鬼灯たちに縋りついたのも本のだが、最後だけは違う。守りたいなんて、累は思っていない。「僕はもう十分に守ってもらえた！ 助けてもらえたから、僕の事なんか守らなくていい！」

ただついでに行きたいんだ！ 僕だって元は十二鬼月なんだから、先輩だか後輩だか知らないけどこんなことをやらかしたバカが皆を……、僕なんかと友達になってくれた子や、僕が傷つけてばかりだった竹雄や花子に何かするなんて、許せないんだ！

炭治郎や禰豆子が悲しむかもしれないのに……、何もしまままなんて嫌だ。そんなこと、出来ない！」

不安のあまり考えなしで訴えた、懇願した訳ではないことを告げる。

明確にしたいことがあるから、「連れて行って」と訴える。

もちろん彼は、別の班である竹雄達の現状など知らない。

花子が人質に取られ、竹雄は最も絶望的な選択をしてしまった事など、知る訳がない。

彼らに見て欲しいわけではない。これは自分の自己満足に等しい

ことだとは自覚している。

それでも、累は泣きそうな顔で……けれど涙をこらえて鬼灯に訴えかける。

「お願い！・ 僕、絶対に役に立つよ！・ ちゃんと僕、考えがあるよ!!」
償いたかった。

自分に幸福をくれた人たちに、その幸福を真っ直ぐに受け止める為に。

守りたかった。

幸福をくれたあの世というこの世界を、誰にも非難も否定もさせない為に。

それは、小さな少年が大きな覚悟を決める理由にしては、十分すぎた。

「——いいでしょう」

その覚悟を受け止める理由にしても、十分だった。

「俺に突っ込み以外の仕事をさせろ!!」

来る途中に他の班とも合流しながら、子供たちを引率していた唐瓜とは会っていたので、二人が子供の避難を彼一人に任せて刑場に留まった理由はわかり切っている。

だがそこには、炭治郎と伊之助しかいない。彼らが残った理由である、竹雄と花子はそのにないことを歯噛みしながら、彼は叫んだ。

「炭治郎!!」

「! 狛治さん!!」

呼びかけられた声に反応して、炭治郎は這いつくばっていた体を起こし、我慢しきれなかった涙を零す。

「は、狛治さん! どうしよう!? お、俺が、俺がちゃんと二人を……俺、兄ちゃんなのに……」

「あ、あ——っつ! 見つからねえんだよー! 亡者のぐちやぐちやした気持ち悪い殺気とか逆恨みとか、子供がビビって泣いてるしで、全然竹雄と花子が見つからねーんだよーっつ!!」

報連相のつもりではなく、後悔に塗れた炭治郎が泣きながら自分の失態をたどどしく語ると同時に、伊之助が横で大泣きしながら、二人が見つからない、炭治郎の鼻も自分の鋭敏すぎる触覚も、周囲の混乱が感情にも現れ、それに紛れて見つからないと訴える。

炭治郎の方は「落ち着け」、伊之助の方は「うるさい」と怒鳴り散らしても無理がないぐらい、二人とも支離滅裂であり、狛治の方も余裕なんかなかった。

だけど、狛治は二人の少年を同時に抱きしめる様に抱え込んで言った。

「鬼灯様にはもう連絡を入れた。すぐに杏寿郎と一緒に来るだろう。

それに、今回の黒幕もわかってる。大丈夫だ。落ち着け。冷静になれ。このままじゃ、奴の思うつぼだぞ」

この地獄でも最も恐ろしいと同時に頼りになる鬼神と、自分達に鬼殺隊としての覚悟の芯を与えてくれた人が来ると知らされ、二人の嗚咽が少しだけ治まる。

二人の探知能力を使っても竹雄達が見つからないのは、血などの物理的な匂いはもちろん、感情でも亡者の逆恨みや子供たちの恐怖に塗りつぶされているのもあるが、それ以上に二人は焦りのあまり余裕を失っていた。

その余裕の無さは二人を見失った事実だけではなく、彼らの心を消耗させたのはある意味では被害者でもある憐れな亡者だ。

「お前の……お前の所為で!!」
「!?」

二人そろって自分の享年の歳どころか、現在の姿にしても幼いくらいに泣きじゃくって狛治に縋っているのをチャンスだと思ったのか、亡者が飛び出して来て、子供用に用意されていた小ぶりな金棒を振り回す。

もちろん、そんな稚拙な攻撃を受けるどころか、亡者が飛び出そうと足を踏み出した時点で全員が気付き、迎撃態勢を取る。

が、最も先手を取れるはずの炭治郎だけ攻撃できなかつた。腰に刀を差してはいるが、唐瓜に突っ込まれても仕方がないくらいに、今の自分のメインウェポンは手裏剣や苦無といった投擲武器であり、それがこの状況では使い勝手が良すぎた為、既に用意していた分は使い果たしていた。

使い果たすほどに、炭治郎は亡者から襲撃を受けた。

おそらく魘夢は、亡者に「騙された」と気付いたら、自分の代わりに子供に当たれ」以外にも、「お前達の現状の元凶は、額に炎のような痣がある花札のような耳飾りの剣士だ」という催眠も施していたのだろう。

これもおそらく、炭治郎が亡者にやられることはほとんど期待していないし、時間稼ぎの意図すらない。奴からしたら返り討ちの方が本望だろう。

無惨の鬼は大半が人からかけ離れた姿をしていたし、姿が人に近くても異能を操っていたので、切っても「人を殺めた」というより「人を退治した」と思えるだろう。

だからこそ、善良で誰かを傷つけることを何よりも嫌う性質の炭治

郎でも、まだ鬼殺隊として戦えた節が強い。

そんな彼が、地獄に堕ちた罪人、自分に逆恨みで襲い掛かって来る奴らでも、傷つけるのはどれほど心に負担をかけたのかは想像がつかない。

現に、狛治と伊之助が襲い掛かってきた亡者を既に鎮圧しているのに、炭治郎はホツとしているような、攻撃できなかつたことを後悔しているような、もう何もかも嫌だと泣き叫びたいのを堪えているような、様々な感情が入り乱れてグチャグチャになっているのがよくわかる顔をしていた。

素直ではないが炭治郎を兄のように慕っている伊之助も、彼の様子に感化されてオロオロと狼狽える。

彼ら自身は亡者から受けた傷など一つもないが、その心はもう既に傷だらけだ。

だからこそ、狛治は告げる。

「炭治郎。この騒動の元凶で黒幕は魘夢。お前達が杏寿郎と倒した、元下弦の壺だった亡者だ。

あいつは何も反省せず、逆恨みを募らせて地道に準備を進め、そして縁壺が転生でいなくなったことを知って実行したんだろう。

……奴の目的は鬼殺隊、そしてお前達に対する復讐とも言えない嫌がらせだ。お前達が善良で、他者を害した方が心に致命傷を負うことを理解しての計画だ」

善逸が走り回って叫びまくって拡散している情報を、一から語る。余裕の無さから聞いていなかつた可能性もあると思っていたが、ちゃんと聞こえていたからこそ余計に焦っていたのか、二人に驚いたリシヨックを受けた様子はなく、ただ自分たちが奴の掌の上であることを悔しがるように、炭治郎は唇を噛み、伊之助は刀の柄を壊しそうな程に拳を握る。

「あいつの目的は、子供の殺害。いや、殺せなくともある程度の重傷を負わせるだけで、十分なんだろう。お前達が一生忘れられず、罪悪感を背負って、これから得る幸福全てに影が落ちるのなら、その後は自分がどんな地獄に堕ちて呵責を受けても苦にならない。あれはそう

思っているし、実際にそうなんだろう。

……それで？ お前は何を恐れているんだ？」

「……………え？」

魘夢の目的を、自身の保身すら考えていないからこそその質の悪さを狛治が語って、更に炭治郎は自分の失態を責め続けるが、狛治はそこまで言っておきながら聞き返す。

炭治郎がややポカンとしながら顔を上げれば、狛治は少しだけ笑っていた。

自分が鬼灯に似てきたたと自覚しながら、彼は苦笑して告げる。

「大丈夫だ。奴の目的は達成されない。子供は死なない。傷つかない。誰も殺させやしない。」

炭治郎、伊之助。戦っているのは、守っているのはお前達だけじゃない。俺も善逸も唐瓜も茄子も、鬼殺隊も獄卒も、皆が戦っている。守っている。

……だから、大丈夫なんだ。鬼殺隊も、獄卒も負けない」

真面目な話かと思ったら、それをぶち壊す。

そしてめちやくちやとも思える結論を出してくる。

上司と同じような話し運びをしながら、上司より優しい未来を炭治郎と伊之助に与えた。

お前が恐れる未来など来ない、と。

「炭治郎。伊之助。探すぞ、二人を。そして、魘夢を」

与え、言いつつ狛治はいきなり背後に振り返って、誰もいない虚空に正拳突きを打ち込む。

空気が良い音を立てて弾け、拳撃が自分たちの不意を突こうとした亡者をリーチの範囲外からぶっ飛ばして、顔だけ振り返ってまた彼は笑った。

「俺がお前達にも、誰にも、亡者を近づけはしないから、安心して探せ」

その笑顔に、重なった。

顔の造形がそもそも似ていないし、狛治はどんな時だって、恋雪といる時だって笑顔はどこか辛そうだ。

なのに、似ていると思えた。

煉獄の明朗快活な笑顔と狛治の笑顔が重なって、一瞬息を呑んだ。そして、その呑んだ息と一緒に吐き出す。

「——はい!!」

そこに痛みはあれど、もう恐れなどなかった。

* * *

「善逸さん！ 善逸さーん!!」

「!? 禰豆子ちゃん!? 禰豆子ちゃん禰豆子ちゃん大丈夫今すぐに行くから待ってて亡者その子にかすり傷一つ髪の毛一本でも切り落としたら絶対に許さないぶっ殺すから覚悟しとけごぶっ!?!」

「あ、間違えたね」

禰豆子の呼びかけに反応し、善逸はいきなり方向転換してそのまま声が出た方向へ、割と冗談抜きに音速なんじゃないかな？ という速度で駆けつけるが、禰豆子の前へ到着寸前にチュンの蹴りが顔面にめり込んだ。

自分のスピードが仇となり、見事にカウンターで善逸は吹っ飛ぶ。

「ぜ、善逸さん!?! 大丈夫!?!」

「顔はもちろん、首も大丈夫ですか!?! なんかチュンさんの足がめり込んだ顔を起点に、2回転くらいしましたよ!?!」

「あいなー。ごめんねー、善逸」

「う……あー……チュンさんか。な、何とか大丈夫ですありがとうございます
ございます」

『ありがとう?』

「何でもないです忘れて！ それより禰豆子ちゃん！ 危ないから、早く刑場から出て！ 大丈夫だから！

……炭治郎や竹雄達は絶対に俺が守るから、禰豆子ちゃんは心配しないで、安全な所でどうか待ってて」

禰豆子と芥子に心配され、チュンに本心からだか軽く謝罪されつつ善逸は、前が見えねえ状態のまま、ひとまず禰豆子が誰といたかを把

握して大丈夫だと言い張るが、しれつと本音が出て女性陣を困惑させた。

もちろん、「キョンシーとはいえ美少女の蹴りなんてご褒美です!!」という意味だと答える訳にもいかないので、勢いで誤魔化してそのまま彌豆子は刑場の外に避難するよう説得する。

だが、わかっていたがおしとやかな見た目に反して、彼女は兄と同じくらい頑固者でもあった。

「いや！　お願い、善逸さん！　私もこのまま刑場にいさせて！」

善逸の頼みを拒絶して、彌豆子は訴える。

「私が戦えないのは……芥子ちゃんとチュンさんに頼りっぱなしなのはわかってるけど……、でも私が弱くて女だからこそ、少しは役に立てると思うの！　亡者が子供以外に人質を選ぶなら、私を選ぶと思うから……、囹になれるから！　私が囹として亡者を惹きつけたら、その分だけ子供は……竹雄や花子は襲われないかもしれないのなら……私は囹になりたいの。」

……ごめん。ごめんなさい、善逸さん。芥子ちゃんにチュンさん……わがままでごめん……でも……でも……」

風呂敷に包んだ大きな重箱を抱きしめ、彌豆子は自分の有用性を懸命に訴える。

自分で言う通り彼女は戦力とは言えず、他人に頼りきりの囹作戦であり、実際はおそらくあまり効果的ではない。

彌豆子一人なら確かに、か弱い美少女なので囹にはびったりだろうが、彼女を護衛している芥子は大叫喚地獄の獄卒なので、亡者の中でも知っている者は多い。ウサギの見分けがつかなくとも、呵責を行う獄卒ウサギは芥子だけなので、彌豆子のペットと思ってもらえることもないだろう。

そしてチュンも黙っていればただのチャイナ系美少女だが、この亡者は嘘つきだからこそ裁判では見苦しく自己弁護を続け、まず再審を行わなかった者はいない。

そしてそこまで足掻いた奴らが、結審されたからとて素直に墮獄は普通しない。五道転輪王もチュンも見た目はただの美男美女という

のも、彼らが「逃げられるかも」と期待してしまう要因の一つかもしれないが、その期待をぶっ壊すのがチュンの唯一の仕事。

禰豆子の護衛は有能すぎるからこそ顔を知られ過ぎており、亡者の油断を誘えない。

それでも、禰豆子は今にも泣き出しそうな顔で善逸に訴え続ける。

……本当は、彼女だって困なんか怖いはずだ。

例え鬼殺隊の柱レベルに守られていても、たまに獄卒のバイトを行い、無惨の地獄めぐり動画も笑って視聴する善逸と違って、禰豆子は地獄の刑場に訪れることも、亡者の呵責を見たこともほとんどない。そんな彼女が、亡者に襲い掛かれるのももちろん、自業自得とはいえその亡者が返り討ちに遭い、かなり惨たらしく殲滅されるのは、どれほど恐ろしくて心に負担をかけるのかは、善逸には想像もできない。

想像できないが、その耳は確かに聞いて知る。

恐怖も、痛みも、全てわかる。それらを上回る、「お兄ちゃんと竹雄達は無事なの？」という不安も。

「家族を守りたい」という、泣きたくなるくらい強く優しい覚悟も。

その音が、とても綺麗だから。

例えば自分がその「家族」に入っていないとしても、もしも自分がその「家族」の為に裏切られ、犠牲にされたとしても、その「音」が守れるのならば、その「音」がずっと続くのならば後悔しないくらい、愛しいから。

「——わかった」

だから善逸は、彼女の兄のように、少しでも安心してもらえるように笑って答える。

「けど、俺もわがまま一つだけ言わせて。

俺にも、禰豆子ちゃんを守らせて。これだけは譲れないんだ」

善逸の答えに禰豆子はしばしポカンとしてから、顔を一気に赤らめた。

そして紅潮した顔を隠すように俯き、ボソリと呟く。

「……………善逸さんも襲われて欲しくないから言ったのに」

「!? 神はここにいた!! 今なら死んでもいい!!」

「もう死んでるね」

「今死なれたら、ひたすら迷惑なんですけど」

不意打ちでぶっ刺された嬉しすぎる眩きに、善逸はその場で跪いて天を仰いで号泣し、気持ちにはわかるが今言うべきではないことを叫んで、チュンと芥子から冷やややかに突っ込まれた。

相変わらず自分の株を直角に上げ下げする善逸だが、なんだかんだでちゃんと彼は現状を理解していた。

禰豆子からの言葉においおいと感涙していたが、その耳は確かに捕らえ、涙を拭って禰豆子を庇うように前に出る。

善逸の反応に芥子とチュンも一拍遅れたが、芥子は櫂を構え、チュンは勢いのまま飛び出そうとしたので、善逸は慌ててチュンを羽交い絞めにして止めた。

「!? チュンさん待つて! 敵じゃない敵じゃない!!」

「敵じゃない? どういうことですか、善逸さん?」

チュンを止めながら説得する善逸の発言に、芥子が不思議そうに訊き返すが、その答えは善逸が答えるよりも前に本人が登場して判明する。

刑場の岩の影から、怯えながら彼は出てきた。

「……姉ちゃん。……善逸兄ちゃん」

ふらりと、今にも倒れそうな青い顔色と危ない足取りで竹雄は現れる。

チュンも芥子も面識のある竈門家は炭治郎と禰豆子くらいなのだが、彼は長男とよく似ているのとその発言、何より子供という時点で暴動を起こしている亡者ではない事くらい明らかだ。

なのでチュンは善逸を振り解こうともがくのはやめて大人しくなったが、今度は一人きりかつ明らかにおかしい様子で現れた弟に禰豆子も動揺して、駆け出す。

「!? 竹雄!? どうしてこんなところに一人で!? お兄ちゃんや花

子、他の皆は!？」

「!! ダメだ、禰豆子ちゃん!!」

そして善逸は弟を案じる禰豆子にも、同じように腕を掴んで止める。

禰豆子はもちろん善逸の行動に困惑するが、芥子とチュンは竹雄が明らかにホツとしたことに気付き、なおさら事情が理解できず困惑。「どうして?」と泣き出しそうな目で訴える禰豆子に、善逸は絞り出すような「ごめん」だけ告げ、禰豆子越しに竹雄へ叫んだ。

「竹雄ー 大丈夫だー 禰豆子ちゃんは近づかせない!!」

大丈夫だ!! 全部わかってる! 絶対に、絶対に俺が何とかするから!!」

善逸の言葉に、姉を近づかせないという脈絡などないはずの宣言に竹雄は疑問に思った様子もなく、ただ今にも泣き出しそうに顔を歪めた。

その顔を見て、善逸も同じような苦しげな表情になりつつ、必死で考える。

竹雄が何も語らずとも、既に善逸は彼がどうしてここにいるのか、どうして自分達を見つけてあんなにも絶望した顔をしていたのか、全て把握していた。

竹雄は既に魘夢と遭遇している事。

花子を人質に取られ、竹雄は彼女を守るために動いている事。

魘夢に、「獄卒でもお前の友達でも家族でも誰でもいいから、目を抉ってこい」と命令されている事を、理解していた。

禰豆子が自分と呼んだことと、自分が叫びながら禰豆子の元に向かった所為で、魘夢も自分たちの居場所を把握して、こちらに向かわされた。

姉か自分の目を抉れと言われて、妹を守るためにそれしかなくて、けどしたくなくて、だから今にも倒れそうな顔色と足取りで現れたのだ。

それを、魘夢が近くで見ている事も、その位置も善逸は気付いている。

だが、岩の隙間にもぐりこんで隠れて見ているのと、花子の鼻をいつでもそぎ落とせるように刃物を構えていることまで把握している

からこそ、善逸は動けない。

居場所からして、善逸の俊足でも花子が傷つけられる前に魘夢から彼女の開放は絶望的だ。

だから今は、竹雄を近づかせずに魘夢との信用など出来ないがひとまずは成立している取引が破綻しないように維持しながら、必死にこの状況を打破する方法を考える。

考えるが、どんなに考えてもまずは魘夢が出てこないと手の打ちようがないという現実に歯噛みしていた時……

「竹雄!!」

別方向から、声が聞こえる。

その声に竹雄はもう一度、絶望する。

竹雄と同じように、禰豆子と善逸の声に気付いたからと、弟の匂いもしたからだろう。

炭治郎が走りながら、弟の名を呼んだ。

「に、兄ちゃん……」

「炭治郎!!」

「お兄ちゃん!!」

怯えて後ずさる竹雄。

善逸と、おそらくは彼と弟の様子からある程度察しがついた禰豆子が、炭治郎に呼びかける。

そして彼も、匂いで竹雄の事情を分かっていたのだろう。弟から3m以上の距離を取って、立ち止まり、炭治郎の後を追って来ていた伊之助と狛治も同じく止まる。

「……竹雄。……ごめん。」

班から離れていたのに、気付けなくってごめん。見てなくてごめん。向き合わなくてごめん。寂しい思いさせてごめん。……守れなくってごめん」

炭治郎も弟とそっくり同じ、今にも泣き出しそうな歪んだ顔で謝る。

現状の、竹雄の兄としての責任感と、その為に他者を傷つけるという罪悪感による苦しみは、全部自分のものだと、自分の所為だと言う。

竹雄は兄の謝罪に何かを叫びかけるが、声にならない。

兄の所為じゃないと言いたいのには、怖くて辛くて助けて欲しくて、そんな弱音が兄を庇う言葉より先に出てしまいそうで言葉にならない。

「ごめん……ごめん……。本当に……ごめん。だから……いいんだ」
「……え？」

謝って謝って謝って、そして俯いていた顔を上げる。

謝って、そして許した炭治郎の顔は、苦しそうで悲しそうだったが、それでも確かに笑っていた。自分の痛みをすべて無視して、弟に安心させるために笑って、彼は許す。

「竹雄。俺の、兄ちゃんを目を抉れ。そうすれば、あいつとの約束を守ったことになる。あいつが一番恨んでるのは、俺だ。だから俺の目を抉れば、少しは満足して花子を離すかもしれない。」

だから——」
「なんでそうなるんだこのウドの大木すつとごどつこい大馬鹿間抜けのクソ虫が!!」

炭治郎の長男でも我慢しなくていいことを我慢しようとした発言に、後ろから伊之助がマジギレして後頭部を刀(鞘付き)で殴った。体験学習前にかました頭突き自滅で、「拳で殴ったら自分の方がヤバイ」という学習をしていたようだ。案外賢い。

そんな炭治郎以外なら殺人手前な突っ込みを入れて、伊之助は炭治郎の胸ぐらを掴み上げる。

「んなことしたって、お前が許したってあいつはお前の事が大好きなんだから、一生気にし続けるんだよ!! もう死んでるんだから、死ぬまでじゃなくて一生だぞ!! ずっとだぞ!!」

そんなのもわかんねーのか、お前は!!」

「伊之助、偉い! あと3発ぐらいなら殴っていいぞ!!」

「お兄ちゃん! あとでおでこ弾くからね!!」

「兄ちゃんの大馬鹿!! 何にもわかってないじゃん!!」

炭治郎も炭治郎で、責任感と焦りで追い詰められて、「自分さえ犠牲

にならばいい」という思考で提案した発言を、伊之助がマジギレしながらどれほど間違った提案だったかを叱りつけて教え、そして善逸と彌豆子も同調して色々追いつけかけ、挙句の果てに竹雄からもキレられた。

皆に叱られて自分の間違いは自覚したが、それでもこれ以外の方法は何も浮かばず、あとさすがにこの状況で味方からボコられるのは勘弁してほしいのか、炭治郎は「ご、ごめん！ ごめんって!!」と謝りながら、助けを求めるように狛治の方へ視線を移す。

だが、狛治は他の皆とは違って怒ってこそはいなかったが、呆れたような表情をしたので、彼も味方にはなってくれないだろう。

「……炭治郎。ここは素直に叱られとけ」

案の定、狛治は溜息をついて何にもフオローしてくれず、ただ歩きながら受け入れろと言う。

「そういうのは、この場で一番年も役職も上で、何よりも慣れてる俺の役目なんだよ」

『えっ?』

炭治郎より前に出て、竹雄に……そして隠れている魘夢に良く見える位置に立つて、彼は皆が困惑している隙に行動に移す。

「俺は、耀哉さんを非難する資格がないな」

少し前の動画撮影を思い出したのか、そんな独り言をつぶやきながら苦笑して。

狛治は何の躊躇もなく、自らの手で自分の左目を抉った。

* * *

自分の左眼球をズルリと抉り出し、無造作に地面に捨てて彼は静かに言う。

「魘夢。さっさと出て来い。お前が出てくるのなら、竹雄が手を煩わせる必要なんかない。」

俺が、自分でお前が望む通りに俺自身を痛めつけてやる」

もはや炭治郎たちのような五感を持っていなくとも、多少勘が良い

一般人でもわかるほどに強い悪意の気配の方向へ、魘夢が隠れているであろう岩影を右目だけで真っ直ぐに見て、狛治は淡々と宣言する。

全員が狛治の、確かに耀哉のことを何も言えない思い切りの良さを発揮しすぎな行動に、顔面蒼白のまま絶句していたが、善逸だけがすぐに酷く不愉快そうに怒りが滾った表情になる。

そして、悔しげに吐き捨てるように彼は「伝言」を伝える。

「！……狛治さん！ あいつ……糞トーマスが『出る訳ないだろ』って言ってます!!」

岩の隙間に隠れながら、善逸の異常聴覚を理解しているからか、彼を使って魘夢は狛治の発言に対する返答を伝言する。

本当は、『何、素直に条件を信じてるんだよ。そもそも俺は、他人の自傷行為を見て興奮する変態じゃないんでね』と、全力でこちらの神経を逆なでする発言もあったが、そんな口が腐るような発言はしたくないので、善逸は最低限の事だけ伝える。

「そうか。まあ、期待は初めからしてなかったがな」

自傷が無駄になったというのに、狛治は涼しげな顔と様子であっさり納得。

その様子が魘夢をイラつかせる、生前の「上弦に這い上がってやる」という野心と、それが叶わなかった最期を思い出す。

だが、他の連中はその苛立ちを紛らわせるいい見世物だった。

「は……狛兄ちゃん……。お、俺の……俺の所為で……」

やっと現状を理解できたかのか、竹雄がボロボロ泣きながらうわ言のような言葉を放つ。

自分の手を汚さずとも、竹雄にとっては同じ。

自分の所為で、自分の大切な人が、何も悪くない人が傷ついたという事実が、竹雄の心をずたずたに引き裂く。

花子も魘夢に首を絞められながら見せつけられ、ボロボロと涙を零す。

炭治郎は狛治に縋りつき、自分が傷ついたような顔で「狛治さん……狛治さん……」と彼の名をただ繰り返し、禰豆子はその場に座り込んで泣いてしまう。

伊之助は「何でテメーもやってんだよ！ 馬鹿野郎！ 馬鹿野郎！」と叫びながら、両腕を振り回して狛治の背中を殴りつける。覆面の中で大泣きしているのがよくわかる声音で。

そんな彼らの絶望に、背筋がぞくぞくする程の満足感を得て悦んでいたが、その悦楽はすぐさまに水を差された。

「お前の所為じゃない。」

言っただろ、竹雄。こんなことをするのも、傷を負うのも、この中で一番年上で、責任者で、そして……慣れている俺がするべきなんだ」狛治がそう言うことくらいは、想定内だ。そんな慰め、余計に彼らの罪悪感になることも。

だが、さらに続いた言葉の意図は魘夢にはわからなかった。

「それにな、俺は炭治郎以上に叱られて怒られるべきだ。俺は、お前達が傷つくことを理解した上でしたからな。というか、傷つける為にした」

『……え？』

しれっと彼の性格からしてあり得ない発言が飛び出し、竹雄だけではなく炭治郎たち、そして魘夢も素で声が出た。

その声に、上手く騙せたことを喜ぶように狛治は抉れた左目から絶え間なく血を流しながらも、場違いなくらい明るく笑って続ける。

魘夢は気付いていない。

狛治の発言に困惑した者は、全員ではなかった。声を上げなかった者がいることに、彼は気付いていない。

「今、ここで酷く傷ついても、その傷は癒えると確信してたからな。俺を叱って責めて、自分は悪くないと確信して発散して、癒すことができるところそした。」

……癒えると確信してても、やっぱりお前達を傷つけるのは辛いけどな。けれど、お前達は本気で酷く傷ついたからこそ、その傷を癒せるだろう」

更に竹雄を、炭治郎を、禰豆子を、伊之助を、花子を、魘夢を困惑させる発言をする。

そしてようやく、彼は自分の発言の意図を、答えを教えてやる。

魘夢を真つ直ぐに残した右目で見て、彼にも聞こえるようにはつきりとした声で笑って言った。

「俺は、 囧だ」

狛治の発言を脳が吟味する前に、魘夢は足に違和感を覚える。

柔らかくてくすぐったい感触に気付き、反射で視線を下にやった瞬間、走ったのは肉を抉られる激痛。

「!??!
いっ つつ?!」

自分の足に、ウサギとは思えぬ形相で噛みついている芥子に気付いたことで、狛治の言葉の意味も理解できた。

(やられた!!)

狛治の自傷は、魘夢の信頼できない条件に応えたものでも、少しでも魘夢を満足させようとしたものでもない。

ある意味では、魘夢と同じく炭治郎たちを傷つけ、泣かせることが目的だった。

狛治の自傷自体は、魘夢にとっては魅力などない、むしろ白けるものだ。

けれど狛治が傷つくことで炭治郎たちが自分のこと以上に傷ついて悲しんだら、勢いよく食いつくとわかっていた。

それ以外への注目が、疎かになることくらい簡単に予想がつく程度の相手だった。

炭治郎が竹雄に謝って、自罰意識ではいけない提案をしている間に作戦は立てられ、伝わっていたのだ。

狛治と善逸の間で、指文字で。

地獄ではどんなに対策を練ろうが、年に何度かは脱獄やらクーデターやらが起こる。

その最中に亡者に知られないよう、作戦などを獄卒同士で伝え合わなければならない時だってもちろんあり、その手段の一つが指文字

だ。

そして鬼殺隊も初見殺しな血鬼術に対抗する為、自分は犠牲になろうとも必ず「次」に繋ぐ為に習得しているのだから、期間限定のバイトでも当然使える。

その指文字で善逸は状況や事情を狛治に伝え、狛治も善逸達に鬼灯へ既に連絡している事、そして魘夢を見つけたら自分が来るまで時間稼ぎをしておくようにという指示を出されている事、自分が囮になるからせめて魘夢を岩影から出すことを指示していた。

その指示に従って、彼女自身は指文字を使えないが、読むことは出来る芥子が動いていた。

武器の櫛は持たず、足音を消して小さな体軀を生かして隠れながら、犬ほどではないが十分優れた嗅覚で魘夢の隠れている岩の隙間を探り当て、そうして今に至る。

だが、いくら芥子が女子力（物理）に特化した地獄を代表する女傑とはいえ、所詮はウサギ。

通常のウサギとは比べ物にならないが、人間と純粹な力比べをしたらすすがに分が悪い。武器の櫛も、自慢の特製ブレンド芥子味噌もなく、しかも相手は未だに人質である花子の首を絞めて離さないのなら、芥子に出来ることも足に噛みついて離さないくらいだ。

「くそっ！ 離せ！ 離せ！！ この糞ウサギがつ！！」

だから、魘夢が自分の足に噛みついて離さない芥子を、岩壁にそのまま叩きつけられたらかなり危うかった。

が、その叩き付けるはずの岩壁はひよいっと、あり得ない擬音がつきそうな勢いで持ち上がる。

「はあ!？」

「お前、私を忘れてたね。怒ってないよ。むしろ、ありがとね」

いきなり開けた視界に、困惑の声を上げる魘夢。

目の前には、自分が隠れられるほどの大岩を持ち上げる美少女が微笑んでいた。

チユンは残念ながら、指文字を覚えることが出来なかったので、読み取れなかった。

なので芥子が地面に普通に文字を書いて、ちゃんと伝えていた。自分がまずは突入して、魘夢を引き付ける。その間に、隠れている岩を物理的に取っ払っちゃってという、彼女でも理解できるし実行できるシンプルな作戦を。

囧は、狛治だけではない。芥子も囧だ。

そしてチユンが本命という訳でもない。

「シイイイイイイー」

食いしばった歯の間から漏れ出る独特の呼吸音。

駆け出すために踏み込んだその足音は、落雷の轟音。

善逸は、目を見開いて駆け出した。

首をはねる為に刀を振るうのではなく、助けたい人を助ける為に。

……ここまでは狛治側の理想的なまでに計算通りなのだが、計算外が一つ。

それは、チユンがどけた大岩が「人」の字で言うと、支えている側の短い棒側だったこと。

もう一つの岩はしばし絶妙なバランスで立っていたが、善逸の雷鳴のごとき踏み込みの所為かバランスが崩れ、魘夢側に倒れてきたのだ。

『ぎゃーっつっ?!?』

この事態には、その場の全員が例外なく悲鳴を上げた。

幸いながら魘夢は横手に転がるように、チユンも抱えていた岩を捨てて逃げる事ができた。

向かっていた善逸は、倒れてきた岩よりもチユンが投げ捨てた大岩の方が危険だったが、幸いながら「霹靂一閃」ではなく、ただ呼吸で身体能力を上げて走っていただけなので、方向転換して避けることができた。

だが、この予想外の事故と魘夢の回避の勢いに負けて、噛みついていた芥子が魘夢の足から離れてしまう。

そして花子は、魘夢の意地なのかまだ拘束されたままだ。

しばし全員が心臓をバクバクさせながら茫然としていたが、芥子と善逸は動悸が治まらないままだがひとまず「ごめん……、狛治さん」

「すみません……離れちゃいました」と、作戦失敗を謝罪する。

狛治も左胸を左手で押さえたまま、「あ、ああ。大丈夫だ。岩影から出せただけで十分だ。むしろ、なんかすまん」と、別に狛治の作戦が悪かった訳でもないが、思わずこちらも謝る。

「……え？ えっと、狛治さん、どういうことですか？」

作戦を実行してた側はまだ現状を理解しているが、炭治郎たちからしたら狛治の自傷から訳のわからない展開の連続なので、まだ混乱したまま狛治に尋ねる。

そんな彼の様子を見て、むしろ狛治の方は完全に冷静になったのか、申し訳なさそうな苦笑をして答えてくれた。

「悪いな、炭治郎。お前と竹雄がやり取りしてる間に、善逸たちに作戦を指文字で伝えてたんだ。

その為に、お前達を俺はわざと傷つけた。あいつの注意を惹くためにな。だから、お前達は俺を思いつきり怒ればいい」

傷つけて悲しませたが、その傷と悲しみこそが隠れている奴をおびき寄せる、曝け出す餌になったのなら、その傷は必ず癒えると確信していたから行ったのだと告げる。

まだ混乱しっぱなしの炭治郎や伊之助、禰豆子はその言葉の意味が理解しきれずにポカンとしている。

だが、その呆気にとられた顔こそが、既に傷は痛んでいない証だった。

「狛……兄ちゃんは……大丈夫なの？」

竹雄もポカンとしたまま、それでも彼はまだ罪悪感を捨てきれず泣き出しそうな顔で訊いた。

「痛く……ないの？ 花子を……俺の代わりに花子を助ける為に……目を……目を……」

「竹雄」

だから、狛治は答える。

迷いなく、彼は穏やかに笑って言った。

「平気じゃなかったら、こんな風に笑えるわけないだろ？」

本心から、鬼だった頃以上に平気だと言わんばかりの笑顔だった。

その笑顔に更に竹雄は目を見開いて……涙を零しながら笑った。

「平気じゃない方が……おかしいよ」

泣きながら、それでも安堵して笑った。

その笑顔が何よりも気に入らないのが一人。

「おい！ 何、もう解決したみたいに緩みきってるんだ!! よっぽど、お前達にとつて妹はどうでもいいみたいだな!!」

花子も首を絞められつつ拘束されたままでも、兄が自分の所為で人を傷つけずに済んだこと、そしてもう罪悪感に苦しんでないことを喜んでいたが、魘夢に刃物を突き付けられ、引き攣った悲鳴を上げる。

人質救出は失敗したが、手出ししにくい岩の隙間から曝け出された時点でもう分はだいぶ悪いと言うのに、往生際悪く足掻く。

魘夢からしたら、人質を使って交渉する気はないのだから、炭治郎たちの目の前で花子を刺し殺しても良かった。

それをしなかったのは、どうせ亡者は自分と同じように殺しても蘇るのだから、殺すより花子自身も、見ている連中も心に傷を負う、惨たらしい傷つけ方をしたかったから。

目を真一文字に切り裂くか、鼻を削ぎ落すか、口を切り裂くか……。殺すことよりも苦しんでいる姿を見るのが好きだからこそ、悪趣味極まりない迷いを狛治は、反吐が出る思いを抱えながらも予測していたからこそ、余裕があった。その余裕は、空式という飛び道具的な技の存在も大きい。

何より、狛治は既に気付いている。狛治だけではなく、炭治郎と善逸と伊之助も気づいているからこそ、伊之助はわからないが炭治郎は花子の危機という点を抜いてもちよつと顔色が悪く、善逸はだいぶ悪い。

「……出来れば人質は救出しておきたかったが、まあいい。元から、『どこかに籠城しているようなら、開けた場所にまで出すように』という指示だったからな」

一応、間に合わないことを警戒して空式をどのようなにでも放てるように構えながら、呟いた。

幸いなながらその警戒は杞憂で済んだが、……残念ながらそれ以外が

斜め上の方向に幸いじゃなかった。

狛治が炭治郎たちと善逸達の方へ向かう途中、鬼灯から連絡があり、今刑場に到着したからそちらに向かうことと、狛治の独り言の指示を告げた。

その指示の意図は、「開けた場所なら、遠距離で攻撃できるから」と言われたので、狛治は鬼灯がライフフルでも用意して持ってきてくれたのかと思っていた。

違ったとしても、金棒を炭治郎直伝の投擲でブン投げるくらいに思っていた。

「どっせいっっ!!」

まだかなり距離がある遠い声で、けっこうジジ臭い掛け声を上げる。

その掛け声に魘夢が困惑して数秒足らずで「それ」は見事、魘夢に命中。

『は?』

飛んできた瞬間は、勢いが凄すぎて何がなんだかさっぱりわからなかった。ただ結構大きくて、けど金棒ではない事だけはわかった。

鬼灯が投げつけたものの正体が判明したのは、魘夢と激突した衝撃で「それ」も上空に上がった事で勢いがなくなって、はつきりとした形を見ることができた。

「な——何考えてんですか、鬼灯様ーっっ!!」

鬼灯の「遠距離攻撃」の手段にして砲弾は……………累だった。

* * *

「おお! さすがだな、鬼灯殿! やはり鬼の剛力はすさまじい! 俺では子供とはいえ、人をここまでの距離、あんな勢いで投げることは無理だな!!」

「褒めるな杏寿郎ーっっ!! お前、自分の生徒が武器扱いで投げ飛ばされてるんだぞ! 怒れ! 止めろ! 俺に突っ込み以外の仕事をさせろ!!」

「狛治さん、落ち着いて!! 突っ込みは仕事じゃないですよ!!」
「でも一番重要な仕事になってるよな」

鬼灯と一緒に走ってこちらに来る煉獄に、狛治は遠慮もくそもなく盛大に突っ込み、鬼灯の後に続く唐瓜と茄子が更に突っ込む。

言いたい気持ちは本当によくわかるが、唐瓜の言う通り突っ込みは仕事じゃない。

「まって……狛……治……これ、僕が……」

狛治がマジギレで突っ込み、他の連中は今までで一番訳のわからない展開についてゆけずに騒然としている中、累が起き上がって弁解を試みる。

よく見ると累は、煉獄の羽織を一番上に、その下にいくつも誰かから貸してもらったであろう羽織や上着を着ていてかなりモコモコだ。おそらく着ぶくれすること、投擲した際の累本人への衝撃を和らげる為だろう。一応は累を気遣った努力は認めるが、気遣うくらいならやるな。

そして、累への気遣いは気遣いたくない奴へのメリットにもなる。思いつきり累をぶつけられたが、その着ぶくれのおかげで大したダメージにはなっていなかった魔夢も起き上がる。

さすがに花子はその手から離れていたが、伸ばせばすぐに手が届く範囲内で花子は腰を抜かしていた。

だからすぐに、自分も訳が分からず混乱しているが、それでも連中が自分以上に混乱している隙に人質をもう一度確保するため、手を伸ばした。

「……させない!!」

だが累が狛治への弁解と、着ている上着を一気に何着か投げ捨てて身軽になった所で、魔夢に体当たりしてしがみつく。

「なっ!? この……クソガキ!!」

『累!?!』

累投擲でフリーズしていた者達は、悲鳴のような声で彼を案じて呼ぶが、その声には応えない。

累は、自分を引き離そうと髪を掴まれても、蹴りつけられても優先して叫んだ。

「花子……逃げて!! 早く!!」

花子は目を見開いて、迷う。だが、その迷いを断ち切るようにもう一度、「逃げて!!」と累は叫んだ。

その叫びに顔を歪め、それでも花子は足に力を振り絞って立ち上がって駆け出した。

「花子!!」

同じく駆け出した兄二人が、泣きじやくる妹を受け止めて、抱きしめる。

「お兄ちゃん! お兄ちゃん!!」

怖かった! 怖かったよおおおつ!!」

ようやく再会した兄妹に、禰豆子も安堵して同じく妹を抱きしめ、「よく頑張ったね、もう大丈夫だから」と慰めたいのを堪え、彼女は叫ぶ。

「累!!」

妹を救ってくれた子供を案じて叫ぶ。

花子が立ち上がった時点で、魘夢は彼女を諦め累を人質にして羽交い絞めにして、刃物をクビに突き付けた。

もう甚振るのを見せつける余裕どころか、自分の目的も頭から抜け、ただ本能的な防衛反応で「来るな!!」と叫ぶが、その声を掻き消すように累が更に大声で叫ぶ。

「僕ごと攻撃して!!」

その発言に、人質を取っている魘夢も「はあ?」と困惑の声を上げ、泣きじやくっていた花子でさえ思わず振り返った。

「全部、僕の考えなんだ! 僕が鬼灯様に言ったんだ!!」

人質を取られちゃってるんなら、僕を投げてって! 僕が人質を絶対に逃がすから! 僕が代わりの人質になったら、僕ごと攻撃してって頼んだんだ!!」

累が弁解しようとしていた、鬼灯と煉獄以外理解できなかった展開の経緯と意図を口にする。

それは、煉獄でさえ聞いた時は「は?」と声を上げてしばし固まった、子供だからこそその荒唐無稽なもの。

「僕は亡者だから、死んでも生き返るから!! 花子と違って、鬼だった

から怪我して治るのは慣れてるから！ 何とも思わないから！ 怖くないから!!

だからお願い!! 僕ごと攻撃して、もうこんなこと終わらせて!!」
「伯治が自分の目を抉ったのと、同じような発想で至った結論。

荒唐無稽でも、その覚悟は本物。

怖くないが嘘なのは、震えるその声が証明している。けれど覚悟は嘘なんかじゃない。

「ふ……ふざけるなふざけるなふざけるな!!」

自分だけが可愛い、本音で言えば無惨も見下していた魘夢からしたら、そんな覚悟は理解できない。認められない。

こんな子供の浅知恵どころか馬鹿げた妄想レベルの計画を実行されたことも、それが成功してしまったことも認められない。認めてしまえば、気が狂う。

だからもう、理解できないことを喚かないように首を絞め、刃物を振りかぶる。

その腕に、いくつもの刃が突き刺さった。

「!? あ、あぁっ!?!」

到着してすぐに鬼灯がしたことは、駆け付けながら回収していた、刑場に落ちていた刃物を炭治郎に渡すこと。

その渡された刃物、魘夢の策略で切らしていた投擲武器が補充された瞬間、腕が剣山になる勢いで全て投げつけて命中させた。

そして雷鳴が再び響き、その音を認識した時には累の首を絞めていた左腕が肩から切断されていた。

首を切り落とさなかったのは、累や竹雄達への配慮ではなく、ただ累への苦痛を一秒でも早く終わらせてやりたい、累にもはや一秒でも触れることを許したくないという思いからだ。

自分の左腕が切断されたことも、その痛みも数秒間知覚できない程に魘夢の頭は混乱を極めていた。

「うおりゃあぁー！ 爆裂猛進っっっ!!」

そして伊之助が頭の被り物に相応しく、一直線に駆け抜き頭突きで魘夢を突き飛ばして、累を抱きかかえる。

相手を切り裂くことより、彼は累を取り戻すことを選んだ。

「がはっ！ つくそ！ くそ！ くそっつ！！」

だが位置が悪く、魘夢は先ほど倒れた大岩がさほど距離なく背後にあった為、頭突きで突き飛ばしても岩に跳ね返るようにして戻ってき
てしまい、伊之助が累を抱えて逃げ出すほどの距離は稼げなかった。

そして魘夢自身、好んで傷つく気はさらさらないが、それでも元鬼
だからか片腕切断、もう片方は剣山状態でも他の亡者と比べてだいぶ
動けた。

剣山状態の腕を武器にして、振り回すくらいには動けた。

そんな魘夢の悪あがきが迫っていても、伊之助は累を守ることを優
先した。

無防備に背を向けて、両手がふさがっても累を守ろうとした。

そんな伊之助を煉獄も守るつもりだった。伊之助が頭突きで突き
飛ばした時には刀に手はかかっており、遠間から勢いよく踏み込んで
袈裟懸けに頸を斬り落とす、「壺ノ型、不知火」が決まる。

……だけど、それよりも速かった。

魘夢の刃だらけの腕が、煉獄と同じように袈裟掛けで振り落とされ
るのも。

その腕から伊之助も累も守るために、攻撃も反撃も防御も何もかも
投げ捨てて駆け出して、魘夢と伊之助の間に飛び込んで割り込んだ狛
治が、切り裂かれたのも。

狛治が切り裂かれるのに一瞬遅れて、煉獄によって斬り飛ばされた
魘夢の首はくるくる宙を舞いながら嗤っていた。

最後の最後に、生前は超えるつもりだった上弦に深手を負わせたこ
と、きつとそれが炭治郎たちの心に致命傷となることを確信して嗤っ
た。

だが、奴は催眠術なんて特技を持っていながら、人の心を何もわ
かかっていなかった。

狛治の傷が、炭治郎たちの心の致命傷になると思いながらも、彼ら
の関係を理解できてなかった。狛治はただ、炭治郎たちに同情されて
いるだけだと思っていた。

だから傷ついたら罪悪感を抱くが、同時にその罪悪感から逃れるために傷ついた本人に難癖をつけて責任転嫁して、それをまた後悔して自己嫌悪に陥ってその嫌悪から目を逸らすために……という悪循環を予想していた。

善人の存在を理解しきれてない魘夢は、それが当たり前だと信じて疑わなかった。

「――活きよ」

切断された首が地面に落下する前に、鬼灯の声によって魘夢は蘇生した。

予想外に早い蘇生に、思わず魘夢はきよとんとしてしまいが、その理由を知る前に思考はすぐさま一色に染まる。

「てめえええええ!! 狛治に何すんだくそがああああつ!!」

切細裂き!! 狂い裂き!! 穿ち抜きじゃボケっつ!!」

累を守ることを最優先にしていたはずの伊之助がキレ、累を文字通り放り投げて獣の呼吸の技の中で特に派手なものを連発して叩き込み、魘夢をミンチにして思考は激痛一色に染め上げる。

ちなみに投げられた累は、禰豆子と唐瓜・茄子の三人がかりでキャッチ。

明らかに禰豆子の方へ狙って投げたので、受け止めることを信頼しての、一応はまだちゃんと守る気があっただけ伊之助は偉い……ということにしておこう。

「活きよ、活きよ」

全身がミンチになった所で、また鬼灯は速攻で蘇生させる。

そして魘夢は、自分がいつ死んだのかもわからないまま生き返ってまた死ぬ。今度は苦痛をほぼ感じなかった。

気が付いたら、自分の体がスプリングラーのように血を吹き出している。

首のない自分の体が吹き出す血の向こうで、善逸が刀を振り抜いた体勢のまま怒りに満ちた顔で振り返ったのを見た。

地面に落ちた自分の首の目の前にあつた、岩にめり込んだ踏み込みの足跡が誰のものかなんて、気付けないままだった。

「活きよ、活きよ」

更に鬼灯は魘夢を蘇生。

3度目にして、ようやく魘夢は自分の現状を理解する。

自分に迫る、刀を抜いた憤怒の形相の炭治郎は自分が思った通り傷つき、罪悪感に苛まれている。

だがそれを責任転嫁も、自分の胸の内に抱え込むようなこともしないからこそ、怒りは真つすぐその正当な対象に向ける人間だからこそ、鬼殺隊になり無惨を討伐したということに、ようやく気付いた。

「魘夢!! お前は絶対に許さない!!」

不意打ちをできない炭治郎はいつものように宣言するが、魘夢からしたらそれは誠意ではなくただの処刑宣告。

いや、処刑の方がマシであることを思い知る。

円舞・碧羅の天・烈日紅鏡・灼骨炎陽・陽華突・日雲の龍・頭舞い・斜陽転身・飛輪陽炎・輝輝恩光・火車・幻日虹・炎舞

ヒノカミ神楽こと、縁壺が編み出し、ただ竈門家の幸いを願って舞い、それを受け継いできた日の呼吸による12の型を全て一瞬の間もなく連続で叩きこむ。

怒りのあまり呼吸が乱れ、日の呼吸の奥義と言える13の型、12の型を全て繋げて無限ループは起こらず1巡で済んだが、それでも魘夢は細切れだ。伊之助がミンチなら、炭治郎はサイコロステーキといったところか。

それだけなら良かった。それだけなら。

けれども魘夢はわかっている。理解してしまっている。

「活きよ、活きよ」

自分がされているのは呵責ではない。拷問ではない。処刑なのに、それが終わらない事。

鬼と違つて首を斬られても、死んでも終わりが無い。

日の呼吸なんて必要のない無限ループという悪夢こそが現実だと、ようやく気付いて魘夢は蘇生した瞬間、泣きながら懇願した。

「ひっ、ひいっ!! も、もうやめてくれ! 俺が悪かった!! ごめんなさい!! 許してください!!」

本心からの謝罪ならば、きつと彼らは自らの憎悪を抑えて許しただろう。

だが、ただの保身から来る中身のない薄っぺらい謝罪など、相手の神経を逆撫でするだけ。

「謝らなくていい。何を言おうが、俺は貴様を許す気はないのだから。それに、自分が出来ないことを他者に求めるのは傲慢だな。貴様は、自分を傷つけ、殺した俺達が許せなかったから、こんなことをしたんだろう?」

炭治郎に変わり、煉獄が魘夢の前に出て静かに、普段の雰囲気からかけ離れた、冷ややかな声音と突き放すような口調で告げる。

「許せないのは仕方がない。だが、覚えておけ。」

どこかで誰かがその連鎖を断ち切らねば、人は、俺達は永遠に互いを殺し合い、喰らい合うということを。特に、ここは終わりがある現世ではない。だからこそ、『諦められなかった』俺達はなおさらに、『諦める』という形で断ち切ることは出来ない」

それでも、その言葉は彼自身の善良さからくる忠告だった。

だが、煉獄の期待に魘夢は気付かぬまま裏切る。

終わりが無いのは全て自業自得だと気付かぬまま、魘夢は最も触れてはいけない龍の逆鱗を雀り取った。

「な……なんで……何で俺だけこんな目に遭わなきゃいけないんだ!」

俺とそいつらの、何が違うって言うんだ!」

そこのガキも! 猗窩座も……役立たずの駄犬だって元は俺と同じ十二鬼月だって言うのに! 何でそいつらは許されて、俺はずっと地獄でこんな目に遭うんだ!」

奴からしたら、自分と同じ下弦だった累と、自分より上の立場だった狛治が自由の身になっている事は、例え魘夢自身が地獄の刑場という居場所に満足していても、それはそれで理不尽に思い不満だった。終わりが無いのなら、許されないのなら、せめてその不満をぶちまけただけかもしれないが、それこそ彼に「終わりが無い」を決定づける。

「……貴様と、累や狛治の違い?」

魘夢の発言の一部を反復し、煉獄は居合抜きで腰を落とす。そして地面の岩を砕き、削って踏み込み、全身全霊の突進で魘夢の間合いまで飛び込み、周囲の面積を抉りながら一撃で魘夢の全身を切り刻む。

「全てに決まっているだろうが!! 俺の生徒と親友を、貴様と同列に並べるな!!」

炎の呼吸の奥義であり、自身の家名でもある「玖ノ型 煉獄」を叩きこみながら、わかり切った答えを叫んだ。

こうして、狛治を傷つけたことでキレた連中の攻撃が1巡したことで、魘夢の自業自得で因果応報な永遠は、これからも終わりなどないがひとまずは中断され……

「では、2巡目いきます」

『2巡目?!』

なかった。

鬼灯が普通にそのまま、腹から爆発したような大穴が開いた魘夢を蘇生させようとして、唐瓜と茄子と狛治に突っ込まれた。

そう、突っ込んでいるのは狛治である。

煉獄やかまぼこ隊は盛大にキレていたが、実はどこか割と初めから狛治はピンピンしてる。

考えてもみれば、狛治の細身とはいえ鍛え上げられた体を、剣山状態の腕を振り回したところで深手は負わせられない。

傷が多いのと範囲が広いので出血も多く見た目が派手になってしまっただけで、傷自体はほとんど皮を切ったくらい、縫う必要もないだろう。狛治からしたら、「治りかけのかさぶたが痒そうだな」くらいのかすり傷だ。

「もっかい狂い裂きじゃーっ! 今度は骨も刻んでやる!!」

「待て、伊之助! 今度は俺に先にやらせる!! 今なら俺、壱ノ型以外にも出来そうな気がする!!」

「ふうー……ふうー……、今度こそ呼吸を途切れさせず、せめて13の型を数字通り13回叩き込んでやる!!」

「よし! 俺も日の呼吸を見習って炎の呼吸の技を全部繋げてみよう

!!

しかしかすり傷でも許せないのか、それとも頭に血が上りすぎて気付いてないのか、4人は2巡目に戸惑うどころかノリノリである。

そんな4人に、禰豆子が叫んで呼びかける。

「待って、お兄ちゃん！」

私もやる!! あいつのおでこ、デコピンで穴開けてやる!!」

「待てー! 禰豆子、待て!! 参加するな!!」

止めるかと思っただ?

残念ながら、禰豆子もノリノリだった。

「じゃあ俺、頭突きでそいつの頭割る!!」

「え? じゃ、じゃあ僕は糸で首絞める!」

「私は、私は……えーと……えーと……」

「あ、花子ちゃんは良かったら私の芥子味噌をどうぞ。私は權でシンブルにぶん殴りますから」

「じゃ、私は手足と首が挽げるまで蹴っ飛ばすね!」

「参加するなって言ってるだろうが!!」

「では皆さんが順番を決めている間に、私が金棒でこいつを潰しておきますね」

「大人しいなと思ったら、結局あなたもするんですか!? 頼むから本当に俺に突っ込み以外の仕事させてください!!」

禰豆子も参加を表明したら、その勢いに続いて竹雄達も連鎖的に名乗り上げ、狛治は魘夢の攻撃より彼らへのツツコミによる心労でダメージを負う。

そんな狛治の奮闘を眺めながら、唐瓜と茄子が現実逃避気味に呟いた。

「……狛治さん、大人気だな」

「うん。でもそこまでキレるくらいなら、さっさと怪我治してやったらいいのに」

結局、狛治大好きな皆様方による本人の意思をナチュラルガン無視した呵責のループは、5巡目でさすがに疲れて一旦は終了となった。

* * *

「さて。亡者の制圧も完了しているようですから、刑場の方はひとまず解決です。

こいつの処分は……趣味嗜好からして、他に呵責される亡者がいたらそれを見て満足するので、刑場は孤地獄に変更は良いとして、呵責内容は……とりあえず、狛治さんとそのご家族の日常動画を見せつけますか」

「何で俺と俺の家族の日常!?!」

5 巡目終了し、鬼灯が逃げないように再生させないまま、ぼろ雑巾状態の魘夢を踏みつけつつ、今後について独り言をつぶやくが、訳のわからない流れ弾に思わず狛治は突っ込む。もう本当に、狛治に突っ込み以外の仕事をさせてやれ。

「こいつの趣味嗜好を考えたら、互いに相手を尊重して思いやる幸せな日常が一番苦痛だと思ってます。

あと、時間稼ぎと籠城しているのなら出来ればいいので、そこから外に出してほしいとしか言ってなかったのに、自分から耀哉さんみたいなことした部下へのペナルティです」

「うっ……せ、せめて恋雪さんはその動画に映さないでください。彼女が罪人の目に触れるのは、俺としては許容できないので」

「わかりました。では、恋雪さん視点というコンセプトで動画を作りますしょう」

実は鬼灯も、狛治の思い切りの良すぎる囿としての行動に怒っていたらしく、既に彼も「活きよ」で治っているが、しれっとその点を指摘して彼の抗議を封殺。

狛治もそこを突かれると文句は言えないので、せめてもの譲歩を提案すると、何かそれはそれでこっぴどくかきいコンセプトが決定された。結果としては恋雪という唯一の目の保養を失うことで、動画の登場人物が全員男となり、拷問としてはより効果的になった。

そんな生産性があるのかなのか不明な会話をしている横で、子供たちが鬼灯たちよりはるかに生産性のある会話が行っていた。

「……………お前は、治してもらわなくていいのか?」

「え? えつと……だ、大丈夫だよ! せ、先生とか他の獄卒の人が服

を貸してくれてたから、あの、投げられてぶつけられても、あんまり僕は痛くなかったし……。

ちよつと、痣が出来たくらいだから……。ぼ、僕よりも……。竹雄と花子は、大丈夫？」

竹雄が、自分から累に近づいて俯いたままだが、それでも彼を案じている言葉をかける。

その言葉に戸惑って、しどろもどろに累は答えてから躊躇いがちに、彼も二人の安否を訊く。

「……俺はほとんど何もされてねーよ。花子は……。首に痣が出来たけど、それ以外は別に平気だつてさ」

「そっか……。良かった……。あ、ご、ごめん！ も、もつとひどい怪我してるかもって思ってたから、だから、痣だけなら良かったって思っちゃっただけで……。ご、ごめん！ ごめん!!」

「謝るな!!」

竹雄の答えに累は安堵してつい零れた失言に気付き、必死で弁解して謝るが、ぎこちないが今までとは違つて普通に対応していた竹雄が爆発したように叫ぶ。

「謝るなよ！ お前は悪くないのに！ 俺がお前にいつも八つ当たりしていじめてたのに、何でお前がいつも謝るんだよ!!」

最初に謝らなかつたんなら、いつそずつと謝るなよ!!」

自分の非を認めつつも、それでもまだ消化しきれない不満をぶちまける。

最初に犯した失敗、無神経な言動を思い出したのか、累は酷く傷ついた顔をした。それでも、彼は竹雄から目をそらさずに言い返す。

「そ……それは……やだ……」。

だって、悪いのは僕だもん。謝らなくちやいけない人に、謝らなかつた僕が悪くて……。今日、竹雄や花子が班から……。炭治郎から離れちゃつたのも、僕が原因なんでしょ？

だから……。竹雄と花子に……。許してもらえるまで……。僕は謝るよ」

「何でだよ!? 何で、お前はそこまでして俺達に謝るんだよ!! お前が酷いことしたのは兄ちゃん姉ちゃん、俺達はお前に酷いことし

「ただだから謝らなくていいだろ!!」

強情に、謝ることをやめないと答える累に、竹雄は地団駄を踏んで訊き返す。

累を責めても、自分は累の被害者ではない、謝ってもらう権利も資格もなく、むしろ自分が謝る側だとわかってるからこそ、訊いた。

「……だって……僕……竹雄や花子と……友達になりたい」

その問いに、言葉の裏側にあった「何で俺達に関わる?」という疑問に累は答えた。

「竹雄も……花子も……僕の事が嫌いなのはわかってる。嫌われて……当然だって思ってる。」

でも……それでも僕は、二人と友達になりたい! 二人とも、僕に意地悪しても僕より二人の方がいつも痛そうで、辛そうな顔してた!

だから……僕は……僕のワガママだけど……意地悪なんか本当は出来ない優しい君達と友達になりたいくて……、二人に許してもらえ僕になりたくて……だから……だから……」

罪の意識に囚われて、自分自身を一番許してやれないけれど。

嫌われて虐げられるのが当然と思うほど、その傷は深いけれど。

それでも、それを当然と思わない人がいるから。

思えない人こそが、したくもないはずのことをしてしまうほど傷つけたから。

だから自分を許せないのに、許しを求めると累は答えた。

その答えに、竹雄は何も返せない。

代りにか、姉に抱き着いていた花子が声を上げて泣き出した。

「……うえっ、うわあああんっつ!!」

ごめっ、ごめんなさい……! 累は、累は悪くないの! 私が、意地張って……さ、最初に謝って、くく、くれなかったからって、る、累の『ごめんなさい』を、全部嘘だって決めつけてたの!

私だって、累と友達になりたい……!!」

累の本音で花子の意地と涙腺が決壊し、涙と一緒に本音を大声で曝け出す。

その本音で、竹雄も意地が限界を迎える。

「ああああ〜〜〜!! お前、本当に最初から謝れよ〜! 謝つたら、最初から友達になれたのに〜!!」

兄ちゃんと姉ちゃんの大馬鹿ああ〜! 二人が皆悪いんだ〜! 累ばっかり庇つて〜! どうせ俺は、累みたいに賢くも大人しくもないよ〜!!」

「え!? 竹雄! 何でそうなる!?!」

花子と違って逆ギレに近いが、自分も友達になりたかったと号泣しながら告白して、何故かその勢いのまま兄と姉に飛び火し、炭治郎が焦る。

花子の方も同じように、兄と姉を責めるので二人は累と一緒にオロシながら、「累と二人を比べた事なんかない」「年が竹雄達に近いの、もしも自分が人を食つてたら累と同じようなことをしてたかとも思つて、責められなかった」と、鬼灯が予測していた通りのことをしどろもどろと二人に説明し、説得し続ける。

そんな累と竈門兄弟たちの、どうやら和解が成立したっぽいやり取りを善逸と伊之助、唐瓜茄子芥子にチュンはもちろん、いつの間にか鬼灯と狛治も黙って見守っていた。

そして同じく、彼らの和解を本人たち以上に望んでいた煉獄が、腕を組んで胸を張るいつものポーズでいつものように明朗快活に笑つて言った。

「一件落着だな!!」

煉獄の発言に、狛治は苦笑を返す。

確かに彼らの問題は解決したが、魘夢のやらかした事の後始末には、獄卒達だけではなく煉獄もかなりの面倒を背負い込むことを、おそらくこの男は本気でわかっていない。

が、わかっているもそう言う事はわかっていたので、狛治は水を差すようなことは言わない。

ただ、竹雄達のやり取りを見て、思った素直な気持ちだけ口にした。

「杏寿郎、ありがとう」

「ん? 何の礼だ?」

シンプルな礼の言葉は何のことかが当然伝わらず、煉獄は小首を傾

げて訊き返す。

その問いに答えず、狛治は話を進める。

「俺は、自分を許せない。十王やお前や恋雪さんが許してくれても、俺は自分をこれからもずっとたぶん、許すことは出来ない。だから、お前が言う『親友』を肯定してやれない。」

……だけど、お前と友達になりたいのは俺の本音だ」

今まで、100年間語らなかつた本音を口にする。そんな資格はないと思ひ込んでいたが、子供たちのやり取りを見るとそれは、煉獄に對して不誠実だと思えたから。

だから、口にした。

煉獄は狛治の「本音」にしばしきよとんとしたが、意味を、彼の最初の礼は自分の為にキレたこと、生徒と同列にするほど大切に思ってくれていたこと、ずっとずっと「親友」として扱っていてくれたことだと理解したのか、子供のように嬉しそうな笑顔になって、狛治の肩に右腕を回して無理やり肩を組む。

「そうか！ 氣にする必要はないぞ！ お前に肯定されなくても、俺にとつては狛治は親友以外にあり得ないのだからな!!」

「……少しはお前の方が気にしろよ」

煉獄の相変わらず一方通行気味の友愛に、狛治はもはや仕事というより反射のような突っ込みを苦笑しながら返す。

苦笑だがその笑顔は今まで一番、痛みの少ない笑顔だった。

煉獄によく似た笑顔だった。

「これを機に真人間になればいいじゃないですか！」

「しのぶ。富岡さんと結婚しない？」

「あら、こんなところに頭割るのに丁度良さそうすりこ木が」

「待って、しのぶ。話し合しましょう。そんな鬼灯様みたいな手段を最初に取りたくないで」

ある日、唐突に付き合ってもいない男性と当然のように結婚の提案を持ちかけてきた姉に、しのぶは笑顔のまますりこ木を手にして素振りしなから答えた。

カナエは生前の短気さを克服してるのかしてないのか不明な妹に話し合いを申し込み、幸いながら妹は応じて自分の向かいに座してくれる。すりこ木から手は離してくれなかったが。

「で？ 何でいきなりそんな訳のわからない提案をしてきたの？」

「ごめんなさい。ただの思い付きで、こうなったらいいな〜っていう私のワガママで軽口なのよ。」

しのぶと富岡くんが結婚して、子供が生まれたら、甥っ子でも姪っ子でもすごく可愛らしいでしょうね〜っていう空想をしてて、ついつい……」

「……もう色々突っ込みたい所しかないけど、何でそんな空想してたのよ。あと、私と富岡さんはそんな関係じゃないって、何回言えばわかってくれるの？」

姉の答えに呆れてさらに困惑するしのぶ。

何度「富岡さんはただの元同僚。友人どころか知人レベル」と言っても信じてくれないのはもはや慣れたが、いくら姉はほんわかしつつも話を聞いてくれない私の強さがあるとはいえ、付き合うどころか結婚さえも飛び越えて甥っ子・姪っ子の空想なんて、正直頭の病気を心配する発想の飛躍具合だと思った。

さすがにそこまでは口にしないが、割とマジで心配しながらしのぶが問うと、カナエは妹の心配に気付かぬまま、やっぱり後半の言い分は聞いてくれず前半だけ、少し困ったように頬に手を当てて小首を傾げて答えてくれた。

「う〜ん……最近、視界の端にチラツと5、6歳くらいの女の子が見えるからかしら」

「姉さん、頭大丈夫？」

カナエの答えにしのぶは気遣いを一瞬で投げ捨てて、本音で心配を口にした。目の心配ではなく頭の心配一択なのは、こんなことをしれつと答えるという反応の時点で妥当である。

しかしカナエは妹からドン引きとガチ心配の表情に気付き、慌てて補足を入れて弁解する。

「大丈夫よ！ 家の中では見ないし、それにその子たちはチラツとしか見えないけどすつごく可愛い子なの！」

「大丈夫じゃないよね。珠世さん呼びましょう」

「確信されちゃった!？」

しかしカナエの弁解は一体何を弁解したかったのか謎過ぎる発言だった為、しのぶはスマホを取り出して本当に珠世に連絡を取ろうとする。

が、幸いながらその前に姉の発言で気になるところに気が付いた。

「ん？ 姉さん、家では見ないってどこで見てるのよ、その女の子の幻覚」

「幻覚だって決めつけないで！ お店でよ！ 極楽満月で!!」

しのぶの問いにカナエは抗議しつつも、その女の子とやらが見えているのは自分の職場であることを告げると、しのぶはしばし考え込んでから言った。

「……白澤様の店ってことは、幻覚じゃなくて本当にいるのかしら。

さすがに子供に手を出す人ではないし……隠し子？」

「しのぶもやっぱりそう思う？」

姉の上司のダメ神獣ぶりを思い出し、しのぶが一番可能性が高そうな女の子の正体を口にする、カナエも真顔で訊き返す。

「お父様である白澤様とお話したいのかしら？ それとも、お母様に何かあったのかしら？」

チラツと見えてはすぐに隠れてしまうから、人見知りなのかしら、それとも何か事情があるのかもと思つてそつとしておいたのだけど

「……やっぱり一度、ちゃんと聞いてみた方がいいわよね？」

「そうね。白澤様も、本当に女性にだらしないし、金銭感覚もちやらんぽらんで、あんな人が父親なんて不安しかないけれど、そういう責任から逃げる人ではないから、ちゃんと顔合わせはした方がいいと思うわ」

「そうね。うん！ 決心がついたわ！」

じゃあ、今日は見つけたらまずはお名前を聞いてみるわ！」

完全に白澤の隠し子だと姉妹は決めつけて話し合い、カナエは笑顔で出勤した。

同じくしのぶも出勤しながら、とりあえず姉はマジで頭のお病気ではなさそうだったことに安堵する。

可愛い女の子がいたから、自分に結婚を勧めて甥っ子姪っ子を求める思考はわからないが、そこはいつものことだと諦める。

「……っていうか、何で本当に富岡さんなの？ 嫌よ、あんな何度言っても金魚草を逃がすし、枯らしかけるし、何か『付き合ってくれ』とか言い出したかと思ったら、幼稚園のクリスマス会のプレゼント買い出しに付き合わせるような人なんて。……まあ、あれは私も結構楽しかったし、お礼に手作りの金魚の置き物くれたからいいんですけど。苗字だって、『富』じゃなくて『富』だからすつごく間違えやすそうだし……」

ブツブツと不満を口にしながら閻魔庁を歩いていたしのぶに鬼灯が素で、「しのぶさん、どうかしました？ マリツジブルーですか？」と訊いたのはたぶん無理もない。

* * *

盛大に胡蝶姉妹に謂れがありすぎて妥当な勘違いをされた白澤だが、幸いながらカナエに「白澤様！ せめてちゃんと認知はしてあげるべきです!!」と叱られることはなかった。

まず、ここ最近は何故か妙に店が繁盛して、お客がなかなか途切れなかったので、流石のカナエも客の前でこの発言は出来なかった。

別に白澤に気を遣った訳ではない。自分と白澤の関係を疑われるのが嫌だったただけだ。

そして、ようやく客が途切れた時に、白澤がタイミングよくこんなことを言いだした。

「……………このところ、急に繁盛しだしたなあ……………」

これ、おかしいよ。たぶん……………何か憑いてる。カナエちゃん、桃タオ夕セロロ君、何か知らない？」

この時、心当たりがばっちりあった桃太郎によってようやくカナエの誤解が解けると同時に、正面から座敷童たちと対面。

「あらあらあら！ 何て可愛いのか〜！ お館様のお子様によく似てらっしゃるわ〜！」

従業員のウサギを抱えて撫でくり回しながら、3人を見上げる双子の座敷童にカナエは歓喜の声を上げ、桃太郎は姉弟子の感想に心の中で「……………可愛い？」と突っ込んだ。

座敷童の名誉の為に言うが、彼女たちは普通に容姿端麗だ。そこは桃太郎も文句なしに認めているのだが、ハイライトのない黒目がちな目に、市松人形のような無表情なので、よく言っても綺麗や美人、悪く言えばこの上なく不気味なので、カナエがどうしてここまで喜べるのかが彼にはわからない。

白澤も同じ感想を懐いたのか、カナエに対して曖昧な笑みを浮かべてから視線をウサギで遊ぶ座敷童に移し「……………なるほどね」と、納得しつつも困り果てたような声を出す。

桃太郎は白澤なら気付いているだろうと思っていたからこそ、報告もしていなかったので謝罪しつつそのことを告げるが、白澤は座敷童という妖怪の特性上、家は彼女たちのナワバリであるため、姿を現してくれなければ気付けないと語る。

「妖怪つてのはさあ、ナワバリがハッキリしてるのが多いんだよ。河童は川の中でこそ強いとか……………。人魚は海の中でこそ強い……………とかね。

中国・日本の妖怪に『力が強くて魔法を使い、賢くて万能……………』なんて奴、逆にいないね」

「そうですね。無惨も反則的な性能を持つてましたが、頭が本当に無惨で無様でしたし」

「鬼殺隊が隙あらば無惨をデイスるのは、もはや本能に刻まれた反射っすか？」

ウサギと戯れる座敷童をメロメロで眺めていたと思っていたカナエが、いきなりしれっと話題に入ってきたかと思ったら、別に唐突でもない事実すぎる無惨への毒吐きだったので、思わず桃太郎は突っ込みというより素で訊いた。

ほんわかおっとり、鬼との共存を本心から目指していた鬼殺隊随一の穏健派でさえ毒を吐く、無惨への憎悪という闇は横に置き、白澤は話を続ける。

「家の中にナワバリを作る妖怪は、家の中で強い。つまりさ、この家中はもう彼女たちに支配されてる訳さ。」

……しかし、現世で住む処がなくなつたとはいえ、何でまたうちに……。悪いけど、どっか別の家に移ってもらわないと」

「えっ!? 白澤様! この子達を追い出すんですか!？」

白澤の既に決定事項とされた座敷童の処遇に、カナエはショックを受けて叫び、桃太郎も正直不気味がってはいたが、それでもやはり見た目も言動も子供だから可哀想だと抗議する。

だが白澤は、流石にカナエに対しては申し訳なさそうだが譲る気はないらしく、座敷童の怖さと厄介さを二人に説明する。

「彼女たちは時限爆弾みたいなところがある。」

出ていかれると店が潰れるし、いる間は出ていかれる恐怖を抱え続ける」

「気持ちにはわからんことないですけど、普通に真面目に働いてりゃいいだけじゃないですか」

「そうですよ! これを機に真人間になればいいじゃないですか!」

「いや僕、神獣だし、っていうかカナエちゃんにとって僕、そんなにダメ人間だった?」

「はー!!」

白澤の言い分に、天国の住人らしい勤勉さを持つ二人はシンプルか

つ根本的な解決法を口にし、白澤はカナエの言い分にちよつと傷ついて訊き返したら、力強く肯定されるという自業自得な傷口に塩の典型例を実行した。

何故、否定してもらえと思った？

「……とにかく、白澤様。出ていかれると困るのに追い出すつて矛盾してませんか？

きちんと働きさえすれば繁盛するんだから、ちゃんと働きましようよ」

とりあえず本気で落ち込む白澤に、桃太郎が話を座敷童の処遇へと戻して気を逸らせる。

「ダメー！ 絶対ダメ!! 売上金の50%が『交際費』だもの。きつと出て行かれる」

(コイツ、そんな想像以上に女に金使つてたのかっつ!!)

同情して損した。カナエは何も間違つたことを言っていないと桃太郎が思い知つた瞬間だつた。

本当に、何で否定してもらえと思ったんだこのダメ神獣。

「白澤様……」

そんな風に思つたから、白澤の自白にカナエが反応した時、姉弟子を止める気も白澤をフォローする気も桃太郎にはさらさらなかつた。

「良かった……。やつと交際費を50%にまで下げることができたんですね！」

「喜ぶことなの、これ!? カナエさんが来るまで、こいつは何%を交際費にしてたんですか!?!」

「70%です」

「これまた喜ぶべきなのかもつと下げろよと叱るべきなのか微妙なところだな!!」

しかし桃太郎の予想の斜め下に、カナエがやや涙目になつて喜ぶという反応をし出して、桃太郎は全力で突っ込みを入れる。

なお、白澤の交際費をカナエでも20%しか削れなかつたのは、「遊郭にお金を落とす」ということは、遊女の年季が少しでも短くなることだから、結果的に人助け！」という白澤の言い分を信じているから。

カナエさん、そいつの言い分は間違っていないし、そういう「望んでそこにいる訳ではない娘」を助けたいという気持ちに嘘はないが、特にお金を落とす相手は望んでそこにいる姐己です。白澤は、花の呼吸の技を全部食らった方がいい。

あとついでに、その売り上げ用途の配分からして自分の給料が月給5万円はいくら何でも安すぎると気付いてしまった桃太郎が、白澤にキレて抗議する。

「つーか、配分おかしいでしょ！ 何で俺の月給5万なんすか!? もっとくれてもいいだろ!!」

「え!? 白澤様、それは確かにおかしいわ！ 桃太郎君は住み込みで、起きている時間全部が労働時間みたいなものなんだから、私と同じくらいは出すべきよ！」

桃太郎の抗議に、カナエも弟子の月給金額を初めて知ったたく、一緒に抗議をしてくれたのだが、桃太郎はカナエの抗議に違和感を覚えた。

カナエは、あくまで「自分より労働時間が長い」事に対しての「月給5万」に怒っている。

根本的な月給の安さに関しては、何ら疑問に思っていないような気がしたので、桃太郎は恐る恐る尋ねた。

「……あの、カナエさんの月給っていくらですか？」

「え？ 7万円よ」

にっこりと女神のような笑顔で……、生前は階級が一番下でも当時ではかなりの高収入、柱になれば好きだけもらえろという立場にいた人が、週休2日の8時間労働をして7万円、時給換算で約400円ほどだということを、何の不満も疑問もなく答えてのけた。

「……」応言つとくけど、僕は何度も給料上げようとしたけどカナエちゃん自身が固辞し続けた結果だからね」

絶句している桃太郎に、白澤は言う。そこは素直に信じられた。女にだらしがないが、女性に貢いでもらうクズではなく、女性に貢ぐタイプのダメ神獣だからこそ、カナエを不当に安い給料で雇うのは有り得ないと確信できた。

おそらくカナエは、自分を極楽満月に就職した従業員という認識ではなく、薬剤師として弟子入りさせてもらっているという考えであり、桃太郎に対してもそうなのだろう。

それに加えて、天国の住人らしい物欲の無さと、実際に金なんかなくても暮らしていける天国という土地柄も合わさって、自分や弟弟子の給料の安さに疑問も不満も皆無なようだ。

「ごめんなさい、桃太郎君。気が付かなくて。」

白澤様。ちゃんと桃太郎君のお給料を上げてくださいね」

「……新しいタイプのブラック企業」

「……これもやりがい搾取って奴なのかな？」

桃太郎どころか白澤からも割とドン引かれている事に気付かぬまま、カナエは実に可憐に謝り、白澤に頼み込むのだが、後ろで無表情だった座敷童も困惑した様子でヒソヒソなんか言ってる。

彼女達にも、カナエの善意だが決定的に何かズレてる反応は「真面目に働いている」というグッド判定なのか、「劣悪な労働条件を強制している」というアウト判定なのか迷うところらしい。

* * *

「ね？酷いでしょう、実弥君。桃太郎君も結局、白澤様に賛成しちゃったし」

「とりあえず、お前は桃太郎に謝れ」

「え？」

不喜処の休憩スペースで、カナエはシロを撫でまわしながら元同僚の不死川に愚痴を吐いていたら、現同僚に謝るよう命じられ、困惑する。

その後、カナエの「天国の住人だからこそそのブラック労働思考」を桃太郎が理解した為、真面目に働いてもこれはこれで座敷童からアウト判定をもらいそうだと判断し、白澤の「一旦、店を土地ごと売って完全な空き家にする」という、豪快な裏技に賛成した。

その際、「じゃあ、次のうちに私の家はどうか？」と誘ったのだが、白

澤の家に行くようアドバイスした鬼灯が、「追い出されたら閻魔庁に住んだらどうか」と誘っていたので、彼女たちはそちらを選び、カナエは二人を閻魔庁まで送ってからこちらにやってきた。

本人は「久しぶりに実弥君の顔を見に」と言っていたが、どちらかというと本命は可愛い動物であることはわかっており、それでも不死川は大人しくカナエの愚痴に付き合っている。

なんなら実弥もシロの仰向けの腹を揉んで癒されているので、ある意味お互いにストレス発散の良い口実だったのだろう。

「まったく……結局、閻魔庁に住まわすなら初めからそうしとけよ、あの鬼神。アホ神獣と胡蝶はともかく、桃太郎に迷惑かけやがって……」

「ねえ、実弥君。何で私には迷惑かけていいことになってるの?」

「自分の胸に訊け、天国の閻」

座敷童をその特性抜きで気に入っていたので、自分の所に来てくれなかった愚痴を聞かされていた不死川だが、どう考えても一番愚痴を吐いていい被害を受けたのは桃太郎だ。

それを全くわかっていないカナエが小首を傾げて尋ねるが、指摘するのも面倒くさいので投げやりに突き放す。

「カナエさんって、子供好きなんだね!」

そんな二人のやり取りに、撫でられていたシロが口を挟み、カナエは笑顔で「ええ!」と返答。

「ええ。子供は大好きよ。特に女の子はしのぶやカナヲの小さい頃を思い出して、愛おしくてたまらないわ」

「それはわかったが、胡蝶。お前は自分の妹にも謝っておけよ」

「え? しのぶに?」

「最初に話してただろーが。富岡と結婚しろだとかふざけたこと言ってたって。姉とはいえ外野が余計なこと言ってるじゃねーよ。その所為で、今日は妙にあいつの機嫌が悪いんだよ」

カナエが子供、特に女兒が好きな理由を話すと、不死川は彼女の話の出だしを思い出して指摘しておいた。

本日のしのぶの機嫌の悪さは、鬼灯の悪気はない一言の所為なのだ

が、そもそもの原因はやはりカナエに起因するので、その指摘は正しい。

カナエもさすがに今朝の唐突過ぎる提案はどうかと今更だが思っているのか、苦笑しながら「そうね」と肯定して、しょんぼりしながらシロの耳をクニクニと揉む。

シロは耳のマッサージになっているのか、やたらと気持ちよさそうな顔になるのだが、それをいつものように「可愛い」と言って微笑まらず、カナエはどこか遠くを見るような眼差しで呟いた。

「……でも、私は富岡くんと同じやなくてもいいから、しのぶは結婚して、子供を作って欲しいの。」

それが絶対の幸せでないことはわかってるけど……、私の生きた時代の価値観ではどうしても『幸せの形』とか『最大の幸せ』と言えば、結婚して家族を持つて……って思ってしまうわね」

その言葉に、不死川は何も返さない。

ただ、黙ってカナエの横にヤンキー座りで腰を落とす。

ただ静かに、聞く体勢に入った。

「？ カナエさんは結婚しないの？」

代りにシロが尋ねると、カナエは笑う。

先程の「子供が好き」という答えとは違って、少し寂しげな微笑みだった。

「私はそもそも相手がいないわよ、シロちゃん」

「え、カナエさんってすっごく綺麗だし優しいから、モテモテだよ！

皆、不死川さんが怖いから告白しないだけ!!」

「ふふっ、ありがとう。……でも、それはとても申し訳ないわ。私はきつと、どんな人でもそのお気持ちに伝えてあげられないから」

「何で？」

シロの無邪気な問いかけに、カナエは答える。

「……さっきも言ったように、『結婚して家族を作る』が最大の幸せだと思っているからこそ、私はしのぶにその幸せを得て欲しいの。私が先に得るなんて考えられない」

その答えに、シロは首を傾げる。

シロの知っているしのぶは、姉が自分より先に結婚したかと言って嫉妬をするようなタイプではない。それをカナエがわかかってない訳がないと思っていたから、カナエの妙な強情さが疑問だ。

だが、黙っていた不死川は隣のカナエを見ずに言った。

「……それは……わかる」

「え？ 不死川さん、わかるんだー」

カナエを見ず、彼もどこか遠くを見るような目で言った。

それを、カナエは悲しげに、何かを悔やむように、それでも笑って見ていた。

言葉にせずとも、二人にはわかる。

二人にしかわからない。

誰よりも何よりも、幸福を望み、願い、祈っていた家族。

なのに、その最期は二人とも遺体さえ残らなかったという凄惨極まりないものだった。

そんな最期を迎える原因になったのは、自分。

しのぶも玄弥も、姉が、兄が大好きだったからこそ、その背を追いつつ続けた。

姉の、兄の呪縛に縛られ続けた結末だった。

だからこそ、二人は望む。

しのぶも玄弥も、姉や兄は自分が鬼と戦うことなんか望んでいなかったとわかっていても、戦い続けたように、二人も妹や弟が自分たちの幸福を望んでいるとわかっていても、それを全て後回しにして、彼らの幸福を望み、願い、祈り続ける。

「ふくん……。なら、安心だね！」

「安心？」

そんな姉と兄の祈りを知る訳がない、地獄のお気楽極楽犬なシロは、言葉通り安心しきった声で自信満々に言い切ったので、二人からしんみりした空気が消し飛んで、きよとんと声を揃えてオウム返し。

そんな二人に、尻尾をパタパタと楽しげに振ってシロは堂々答える。

「しのぶさんと玄弥さんが結婚するまで二人とも結婚しないなら、条

件は一緒だから焦らずにすむよね！

っていうか、いつそ二人に『早く結婚してくれないと、いつまでたつてもこつちが結婚できない』って言えばいいんじゃないかな！」

シロの答えに、二人は余計にきよとんとしてしばし言葉を失う。

そんな二人の反応に、シロはまた首をかしげる。

数十秒ほどたつてから、カナエがようやく整理がついて思い至った仮説があつているかどうかを尋ねた。

「シロちゃん。もしかして、私と実弥君が結婚するって思ってる？」

「え？ うん!! っていうか、つい最近まで結婚してたと思つてた！」

もう既にカナエの「相手がいない」発言を忘れているのか、完全に二人が恋人同士であると思ひ込んでシロは言い切る。

その断言に対し、二人の反応は……

「……ふふっ！」

「……ははっ！ まー、確かにいつそそう言つて脅した方が、あいつらには良いかもな！」

カナエどころか不死川も、顔を赤くすることも、否定することもなく、おかしげに笑つた。

笑いながら、彼らはお互いに顔を見合わせて言う。

「実弥君、だいぶ行き遅れそうだけど、お嫁にもらつてくれるかしら？」

「はん！ こつちは傷物どころか傷しかねー旦那だけど、良いのかよ？」

風情も何もないからこそ、二人の距離の近さを感じられるプロポーズだった。

* * *

「良いよね、あの互いに信頼しきつた距離感！ 俺、結婚とか恋愛に興味なかったけど、あんな関係になれる相手となら結婚したいって思つちやつた」

その日の晩、閻魔庁の食堂でシロは同席した鬼灯に、不死川とカナ

エのプロポーズを無邪気に話す。

柿助とルリオも既にもう何度か聞かされてうんざりしているが、感想は同じようなものだ。

だが、鬼灯の感想は違うらしく、彼は呆れているような苛立っているようなドン引きしているような複雑な顔でとんかつを咀嚼して、飲み込んでから言った。

「シロさん。それ、あの二人はお互いに本気にしてませんよ。完全に軽口です」

「え？」

「似たようなことを頻繁に言い合ってますけど、あの二人は付き合ってますせん。」

『友達以上恋人未満』どころか、『夫婦以上自称友人』とでも言うんでしょうか、あの二人は」

鬼灯の答えに、シロはもちろん柿助とルリオも絶句。

シロは完全にカナエの言葉を忘れて、二人は恋人同士だと思いついでいたが、柿助やルリオは不死川が「誰とも付き合っちゃいねえ」と常日頃言っていたのを覚えていた。けれど、それでもさすがにカナエとは「恋人未満」な関係だと思っていたので、ようやく正式にくつついたかと思っていたところにこれである。

三匹の反応に「わかる」と言いたげな頷きをしてから、鬼灯は率直な感想を述べる。

「伊黒さんと甘露寺さんや、しのぶさんと富岡さんより、ある意味厄介なんですよね。お互いに信頼して好意自体は自覚しているからこそ、ビツクリするほどそれ以上の意識も進展もしない」

鬼灯の感想に、食堂で鬼灯たちの近くにいた獄卒達は力強く頷いた。

柱相関言行録（あの世編）

元水柱（現鱗滝幼稚園保育士） 富岡 義勇から見た元柱たち

・煉獄 杏寿郎

「今も昔も良く話しかけてくれるから好きだ。

特に向こうが獄卒から小学校教師になってからは、共通の話題や悩みが増えたのが嬉しい」

・胡蝶 しのぶ

「生前より口調がきつくなったが、生き生きしているのは見ていて安心する。けど、炭治郎が人に戻る最後で最大の助けをしてくれたことに關しての礼を言いたいの、会うたびに何かしら怒られて言う機会を逃し続けてるから、たまには俺に話をさせてくれ。」

生前、顔色の悪さの理由に気付けなかったことが申し訳なくて仕方がない」

・時透 無一郎

「生前と同じく、あまり話したことがない。」

炭治郎たちと仲がいいようなので、俺も仲良くなりたいが何を話せばいいのかわからない」

・宇髄 天元

「今も昔も自由な感じが羨ましいが、今は妻三人つてすごく大変そうだなという感想の方が強い」

・伊黒 小芭内

「そういえば、いつの間にか悪口言われなくなったな。」

けれど何か言いたげに俺を見ていることがあるから、きつと言いたいことを我慢させているんだな。申し訳ない」

・甘露寺 蜜璃

「子供の扱いに慣れているから、よく相談させてもらってる。生前と変わらず、話しやすく明るくて好ましいが、時々園児と同じ扱いをしてしまう。」

あと、彼女の仕事柄仕方ないのかもしれないが、やっぱり肌を出し過ぎだと思う」

・ 悲鳴嶼 行冥

「子供が好きだからこそ、子供に嫌われる賽の河原の獄卒に就くその覚悟を尊敬している。」

だからこそ、遠足などで園児を連れて行った時に園児に号泣されて悲しげな悲鳴嶼を見るとこちらも悲しくて申し訳なくて仕方がない」

・ 不死川 実弥

「段々と怒りっぽかった所が穏やかになってきていて、ホツとしている。」

ただ、未だに俺がおはぎを渡すと酷く怒る。けど絶対に受け取って食べてくれるので、どう反応したらいいのかわからない」

元蟲柱（現獄卒・技術課毒物研究班） 胡蝶 しのぶから見た元柱たち

・ 煉獄 杏寿郎

「良い人。でも、本当に人の話は聞いてあげて。特に狛治さんの」

・ 富岡 義勇

「どうして！ 貴方は！ 言葉が！ そんなに！ 足りないんですか！！」

・ 時透 無一郎

「言葉が上手く選べないのは、記憶障害あんまり関係なかったんです

ね……。

けど、炭治郎君や玄弥君とは仲がいいし、お兄さんとも仲直りしているようで良かった」

・宇髄 天元

「アオイたちを連れ去ろうとしたことは今もまだちよつと怒ってますけど、私がいなくなった後、あの子達の面倒や様子を何かと見てくれましたから、そこはすごく、心から感謝してます」

・伊黒 小芭内

「さつさと蜜璃さんと祝言あげてください」

・甘露寺 蜜璃

「大好きな友達ですが、私と富岡さんのことよりもあなたがさつさと伊黒さんと祝言上げてください」

・悲鳴嶼 行冥

「……現世視察の時に職質されている悲鳴嶼さんのフォローをしようとしたのに、余計に怪しまれて不審者から誘拐犯にランクアップさせちゃって本当にごめんなさい」

・不死川 実弥

「未だに顔を合わせるたびに元気かと聞かれます。

元気ですからあなたもさつさと私の義兄になってください」

* * *

元炎柱（現焦熱小学校社会科教諭）煉獄 杏寿郎から見た元柱たち

・胡蝶 しのぶ

「今も毒の研究と開発をしている所も、戦う必要はないのに鍛錬を欠かさない所が凄い！ 尊敬している！」

・富岡 義勇

「昔より声が大きくなったな！　だがもつとハキハキ話した方がいいと思うぞ！」

手先が器用で凄いな！　小学校の学芸会などの大道具作りに協力してもらってる！　ありがたい！」

・時透 無一郎

「見た目相應の子供らしい生活をしているようで嬉しい！」

今は付き合いがめつきり減ってしまったのが悲しいな！　もう少し幼ければ、俺の生徒だったかもしれないのがなおさら惜しい！」

・宇髄 天元

「いろんな分野に挑戦する気概や行動力が素晴らしい！　俺には芸術はよくわからないが！」

あとやつぱり、妻がちよつと多すぎる！」

・伊黒 小芭内

「大丈夫だ、伊黒！　お前なら甘露寺を幸せに出来る！　自信を持って！　結婚式のスピーチは任せろ!!」

・甘露寺 蜜璃

「今も昔も可愛い後輩で妹のような子だ！　伊黒と早く一緒になって欲しい！」

・悲鳴嶼 行冥

「亡者や野干の子供ならまだしも、鬼の子供には俺は舐められがちだから、悲鳴嶼殿の体格は未だに羨ましい！」

子供に泣かれる？　大丈夫だ！　鬼灯殿は絶賛してたぞ!!」

・不死川 実弥

「いつの間にか仲が悪かった者たちと和解しているようで何よりだ！
けれど照れ隠しで、不死川を絶賛している弟達の作文を破いたのは
謝れ！」

* * *

元音柱（現獄卒・黒色鼠狼^{こくしよくぞろうしよ}処にて鼠のトレーナー） 宇髓 天元から
見た元柱たち

・胡蝶 しのぶ

「仕事内容は地味なのに、結果が派手で羨ましい。

相変わらず、安産型の尻。その尻で富岡を誘惑してさっさとくっつ
け」

・富岡 義勇

「根暗だと思ってたが、実際は須磨を無口にしたような奴だった。そ
うとわかったら割と面白い。

けど才能ありまくりの派手野郎だって自覚が未だないのがムカつ
く」

・時透 無一郎

「ポーとした地味ガキかと思ったら毒舌が派手にすさまじい。

須磨どころか雛鶴泣かせたのは、怒るより先に普通に驚いたわ」

・煉獄 杏寿郎

「もう俺より目立ってもいいから、狛治を困らせるのはマジでやめて
やれ」

・伊黒 小芭内

「とつとと甘露寺と祝言上げろ」

・甘露寺 蜜璃

「もうお前が伊黒を押し倒せ」

・ 悲鳴嶼 行冥

「最近は何魔大王の方を見る事が多い所為で、悲鳴嶼さんが小さく見える。

で、近づいたら思ったよりでかいから驚くという地味なことを良くやらかしてる」

・ 不死川 実弥

「お前もさっさと胡蝶姉とくっつけ。あいつも妹に負けず劣らずの良い尻だ」

* * *

元霞柱（現天国の住人・短期獄卒アルバイト）時透 無一郎から見た元柱たち

・ 胡蝶 しのぶ

「雀みたい。

前は燕みたいだったけど、生前より騒がしくなったのと、家族と天国で定住しているから渡り鳥ってイメージがなくなった。けど、優しい笑顔は変わらない」

・ 富岡 義勇

「……何、だろう？

前は無口で全然話さなかったから置き物みたいって思ってたけど、話すようになってからはなおさらよくわからない人って印象になった」

・ 宇髄 天元

「猿みたいって言ったら怒ったから、初江戸で見たゴリラみたいって言ったら、何か反応に悩んでた」

・煉獄 杏寿郎

「鳳凰みたい。」

前は梟みたいだったけど、亡くなっても僕や炭治郎の力になってくれた不死鳥みたいな人。少なくともTVの占いで出るあれよりずっと鳳凰みたい」

・伊黒 小芭内

「普段は山猫みたいだけど、甘露寺さんと一緒だと臆病な子猫みたい。早く結婚すればいいのに」

・甘露寺 蜜璃

「相変わらず、桃色のヒヨコみたい。」

伊黒さんと一緒にいる時の笑顔は、髪の毛と同じくらい柔らかくて優しい感じがしてキレイ」

・悲鳴嶼 行冥

「基本は前と同じく熊みたいだけど、自分を見て泣く子供をあやそうと、変な帽子やお面被っておどけて踊ってる所を見ると、何かパンダみたい」

・不死川 実弥

「狼みたいだったけど、今は玄弥とか不喜処の動物獄卒がよく後をついて回って、その面倒を見てるからカルガモみたい」

元恋柱（現獄卒・衆合地獄の囃かつ拷問役） 甘露寺 蜜璃から見た
元柱たち

・胡蝶 しのぶ

「可愛くて大好きなお友達！ 昔より明るくて生き生きしてるのは嬉

しいわ！」

・富岡 義勇

「無口でもじもじしてた頃も可愛かったけど、今の頑張って何か話そうとしている所もすごく可愛いと思うの！」

・宇髓 天元

「今も昔も大人の色気が凄くてそこがかっこいいけれど、伊黒さんにいつも何を話してるの!？」

伊黒さん、宇髓さんと話した後は真っ赤になって私とは目を合わせられなくなっちゃうのは何故!？」

・煉獄 杏寿郎

「カツコよくて大好きなお兄様！ 私も子どもだったら煉獄さんが教えてくれる学校に通いたいわ！」

・伊黒 小芭内

「……何年でも、何十年でも、何百年でも待ってる。だから、私をちゃんと『伊黒さん』のお嫁さんにしてね」

・時透 無一郎

「悟りを開いているみたいだったけど、お兄さんや玄弥君と楽しそうに遊んでいる時の方がすごく可愛くて素敵だったわ！」

あと、髪の毛を褒めてくれたの！ 嬉しい！」

・悲鳴嶼 行冥

「今も猫好きで、よく一緒に猫集会が行われる広場とかを探しているの！」

……だから、白澤様の猫好きちゃんがどんな姿をしているのか、気付かないことを祈っているわ」

・不死川 実弥

「昔は怖かったけど、今は凄く凄く優しい目をするの！特にカナエちゃんと一緒にいる時の目が優しいから、二人は幸せになって欲しいわ！」

* * *

元蛇柱（現獄卒・衆合地獄の拷問かつ囮の護衛役） 伊黒 小芭内から見た元柱たち

・胡蝶 しのぶ

「生前の努力と忍耐が報われ、幸せになったようで何よりだ。

……富岡に関しては、まあ……その……頑張れ」

・富岡 義勇

「事情を何も知らずに一方的に嫌ってたのは本当に悪かったと思っているが、お前、もう少しししゃべれ。頼むから」

・宇髄 天元

「昔は境遇に親近感を覚え、自分の行いに後悔しても暗い顔をせず前向きに生きている姿を尊敬したが、今は余計なことばかり吹き込んできてウザい。けど放っておくと甘露寺の方に余計なことを吹き込みそうだから聞いてやる。」

ほ、本当にそれだけだからな!!」

・煉獄 杏寿郎

「昔から竹を割ったようなあの性格が好きで良く話したが、今は狛治のフォローばかりしてる気がする」

・甘露寺 蜜璃

「……………必ず、必ず言うから、だから……………まだ待っていて欲しい」

・時透 無一郎

「死なないで欲しかったが、家族と再会して年相応の子供らしく幸せ
そうで何よりだ」

・悲鳴嶼 行冥

「誤解があつたとはいえ、子供に不信感を懐いていたはずなのに、今は
子供の為なら自分が嫌われることも命を懸けることも躊躇わないこ
とに、生前とはまた違った尊敬を懐いてる。

……あと正直、甘露寺と猫のことで盛り上がれるのが羨ましい」

・不死川 実弥

「今も気が合う友達だが、甘露寺のことを口出すな。出すなら、俺も胡
蝶の姉のことで口出すぞ」

* * *

元風柱（現獄卒・不喜処の拷問かつ動物の世話役） 不死川 実弥か
ら見た元柱たち

・胡蝶 しのぶ

「……何で、玄弥と同じような死に方してんだ。馬鹿娘。胡蝶（カナ
エ）に謝っとけよ」

・富岡 義勇

「色々誤解して嫌ってたのは悪かったが、とりあえず俺に会うたびに
おはぎ渡すのやめろ。たまにおはぎ忘れたからって、死ぬ程申し訳な
さそうな顔すんな。俺の主食はおはぎじゃねえ」

・宇髄 天元

「正直、兄貴面されるのは嫌じゃねえけど、胡蝶（カナエ）と俺で変な
勘繰りすんじやねえよ」

・煉獄 杏寿郎

「良い奴だし昔から好きだけど……、マジで狛治に一方通行な親友発言はやめてやれよ」

・甘露寺 蜜璃

「アホっぽい所は未だ苦手だけど、伊黒を幸せに出来るのはこいつしかいないと思ってる」

・時透 無一郎

「なんかいつの間にか玄弥と仲良くなった。

玄弥が振り回され気味なのが心配だが、互いに楽しそうで安心する」

・悲鳴嶼 行冥

「今も尊敬しているが、上弦の壱との戦闘後、半分になった玄弥を目の前に置いていたことに関してはちよつと『鬼か!』って正直思ってる」

・伊黒 小芭内

「いい加減、幸せになりやがれ。神が許さなくても、お前が許さなくても、俺が許してやる」

* * *

元岩柱（現獄卒・賽の河原の呵責や子供の世話役） 悲鳴嶼 行冥
から見えた元柱たち

・胡蝶 しのぶ

「今は無理せず、何事も楽しんで行っているようで安心する。
ただ富岡と話すのは生前より何故かこじれがちなのが心配だ」

・富岡 義勇

「口下手がマシンになっているのかどうか、判断に迷う。けれど、胡蝶のマシガントークに口を挟めないのは同情する」

・宇髄 天元

「相変わらず、大口を叩くが冷静で決して口ほど驕っておらず堅実な仕事ぶりを尊敬している。本人は地味だと言って嫌がっているのが不思議なくらい、そこが宇髄の素晴らしい所なのにな」

・煉獄 杏寿郎

「自分とは違う、子供に好かれることで正しい道にこれからも導き続けて欲しい」

・甘露寺 蜜璃

「もともと気立てのいい子だったが、伊黒の想いを知ったことで自信がなくなったのか、更に良い子になった。幸せになって欲しい」

・時透 無一郎

「生前は精神が成熟せざる得なかった環境だったから、今は子供らしくのびのびと楽しく過ごしてほしい。

そんな自分の願い通りに過ごしているのがとても嬉しい」

・不死川 実弥

「あの自己犠牲精神が報われ、穏やかに今を過ごせている事が喜ばしい。

あと、玄弥の半身を目の前に置いたことは完全に悪気はない、むしろ善意だったが、冷静になれば本当にすまなかったと思ってる」

・伊黒 小芭内

「甘露寺とお似合いだから、そろそろ自分を許して幸せになって欲しい」

* * *

【おまけ】

鬼灯から見た元柱たち

・胡蝶　しのぶ

「ミステリーハンターとは全然違うタイプですが、仕事でも個人的な趣味でも話が合うので、実は普通にかなり好みです。

ただ、金魚に関しては話が合いますが、金魚草に関しては話が合わないという点が残念ですね」

・富岡　義勇

「他人事ながらあの口下手加減には、『この人、園児の保護者とトラブル起こしてないか？　園児の方が上手く意思疎通ができるんじゃないか？』と不安を懐きます。

けれど金魚草に関しての話は合うので、私は普通に富岡さんを友人だと思ってますし、結構好きですよ」

・宇髄　天元

「見た目や口で言う事とは違って堅実な仕事ぶりを尊敬し、信頼しています。

ただ、茄子さんと組ませる際は注意が必要です。派手好きで独創性に憧れている人なので、茄子さんのような人と組ませるとたぶん悪乗りが止まらなくなる」

・煉獄　杏寿郎

「あんたはとにかく人の話を聞け」

・甘露寺　蜜璃

「動物好きな所とか、発想や行動力がぶっ飛んでる所とかが普通に好

みなんです、同時に実は少し苦手なタイプでもありますね。

根明というべき性格が、天国の極楽とんぼを連想させるからでしょうか？」

・時透 無一郎

「あの毒舌っぷりはぜひとも地獄の獄卒として發揮してほしい！ バイトではなく正社員として就職してほしい！」

・不死川 実弥

「不死川さんはあの強面だけで十分すぎるくらい獄卒として有能ですが、玄弥さんも有能だったから玄弥さんの獄卒就職を邪魔するのはいい加減やめて欲しい」

・悲鳴嶼 行冥

「正直、別の地獄の獄卒で拷問役についてほしかったんですよ、当初は。子供に直接的ではないとはいえ、害を加えるようなことができる人ではない事はわかりきっていましたし。」

まさか、ただいるだけで子供は絶叫号泣の阿鼻叫喚になる逸材だったとは……」

・伊黒 小芭内

「そろそろ婚姻届けごと市役所にブン投げてブチ込もうかと思ってる」

* * *

・粕治から見た元柱たち

・胡蝶 しのぶ

「優しくして気遣いも良くできていて、仕事仲間としては理想的だ。……童磨さえ関わらなければ。」

あと、無限城で遭遇しなくて良かったと本気で思ってる」

・富岡 義勇

「無限城での『背中が猛烈に痛い』発言時点で『ん?』と思っていたが、知れば知る程になんというか……独特な思考をしているなど思った。とりあえず、そろそろ『自分は胡蝶に好かれていない』という認識を改めて欲しい。胡蝶の機嫌が悪くなる」

・宇髓 天元

「はじめは嫁が3人という事実が悪い印象を懷いたが、彼らの事情と関係の良さを知れば好ましく思えるようになった。あの仲の良さは素直に羨ましい。」

だが、天元。俺と恋雪さんのことに口出しするな！」

・煉獄 杏寿郎

「……気持ちは嬉しい。この上なく、間違いなく嬉しい。」

だが、杏寿郎。俺の話はもう聞かなくてもいいから、周りの反応を見てください。みんな、いつもお前の『狛治は俺の親友だ』発言への反応に困っている事に気付いてくれ」

・甘露寺 蜜璃

「恋雪さんと見た目は似ていないのだが……、心根の強さや気高さがよく似ている。……女性は強いのだと、改めて思い知る人だ」

・時透 無一郎

「有一郎と喧嘩するたびに、有一郎を羽交い絞めにして鬼灯様の所まで持ってくるのはやめてやれ」

・不死川 実弥

「……『家族』を全て失って生き延びてしまったという境遇に共感して、和解出来たらと望んでいた相手だったのだが……、まさか鬼灯様に続いている土下座2人目になるとは思わなかった」

・悲鳴嶼 行冥

「まさか、会うたびに号泣されるといふのがなくなるまで20年かかるとは思わなかった……。」

今はたまたま組手の相手をしてもらってるな。最近、ようやく俺が5本中1本を取れるくらいになった！」

・伊黒 小芭内

「自分を許せなくても、相手の幸せを望むのならばお前も幸せになるべきだ。それが、甘露寺の願いなのだから。」

……俺みたいになるな、小芭内」

* * *

【おまけのおまけ】

元柱たちからから見た鬼灯と狛治について

・胡蝶 しのぶ

(鬼灯)

「清はもちろん濁も認めて受け入れ有効活用する、お館様とは違う方向性で同じくらい尊敬している上司です。」

あと、趣味とかに関して話が結構合うんですけど、実は自分でも不思議なくらいに異性としては惹かれないんですね。正直、瓜子姫とかと話しているのと同じ認識です」

(狛治)

「下手したら鬼殺隊時代含めて一番付き合ひやすい同僚かもしれない。」

本当に無限城で遭遇しなくて良かった。してたらその時は良くても、再会した後がまさしく互いにとって罪悪感と気まずさの地獄でし

たよ……」

・富岡 義勇

(鬼灯)

「俺がよく金魚草を逃がしたり枯らしかけたら胡蝶と一緒に、探したりアドバイスをくれるいい友人だ」

(狛治)

「穏やかに煉獄と同じくらい良く話しかけてくれるし、俺の悪い所を優しく指摘してくれる実によくいい奴で好きだ。

和解出来たことをこの上なく嬉しく思う」

・宇髄 天元

(鬼灯)

「他の鬼とかと比べたら見かけは普通と言うか地味だから、正直初めは舐めてた。

あれは逆らっちゃいけないが、同時に怖気付いてもダメだ。結構あれも天然だから、唯々諾々と従ってりや何をやらかすかわかんねえからな」

(狛治)

「お前というかお前ら夫婦、初心すぎるわ！ 色々教えてやるから、ちよつとこつち来い!!」

・煉獄 杏寿郎

(鬼灯)

「強い！ 思い切りが良い！ 狛治に優しい！ お館様と同じくらい尊敬している!!」

（狛治）

「もちろん俺の親友だ！ 他に何がある!?!」

* * *

・甘露寺 蜜璃

（鬼灯）

「お館様と同じように、私の人とは違う所を長所だって認めてくれたの！ それと動物が好きで、私によく珍しい動物を教えてくださいわ!!」

（狛治）

「誰に対しても優しいけど、恋雪ちゃんを本当に大切にしているのが見ててすぐにわかってドキドキしちゃう！

あんな夫婦に私もなりたいわ!!」

* * *

・時透 無一郎

（鬼灯）

「カミツキガメみたい。

兄さんと喧嘩した時に便利」

（狛治）

「大型犬みたい。

えーと、あの白くてふわふわしてて、なんか笑顔みたいな表情する犬……サモエドってやつみたい」

* * *

・不死川 実弥

(鬼灯)

「だいたいは俺の自業自得だって言うのは認めてるし反省してるけどな、だからって一瞬の躊躇も前段階もなく俺を何かとぶん投げるのはやめろ」

(狛治)

「初対面の時、玄弥に近づくな薄汚いクソ鬼って罵ったあげくにぶん殴ったのは、本当に悪かった。

その後、公衆の面前で号泣しながら土下座したのはもっとごめん」

* * *

・悲鳴嶼 行冥

(鬼灯)

「子供に対しても厳しい態度を一貫して取れる所と、子供だからと言って見下さず、個人として何かと評価して認める所は尊敬しているが、いくら何でも理不尽ではと思うことも多々あるな。

慈悲とまでは言わないが、もう少し加減はしてやって欲しい」

(狛治)

「実は今でも油断したら過去の悲しさと今の尊さで、涙が止まらなくなりそうだから常に我慢している」

* * *

・伊黒 小芭内

(鬼灯)

「……俺は何であの鬼に妙に嫌われてるんだ？」

(狛治)

「下手したら不死川よりも今は気が合う友人だ。あいつが困りさえしなければ、俺も親友だと言いたい。」

あと、心の中では師匠扱いしている。何であいつは、男の俺でも乙女心がわし掴みされるような言動があんなにも自然に取れるんだ？」

原作小ネタ会話劇15連

1：5巻34話「シロの一日」

シロ

「さすがに補佐官ともなると、休日返上もざらみたいだね。

一回、鬼灯様が……『閻魔^{ジツイ}を椅子に打ち付けて仕事させたら、休めるだろうか……』って、クマ出来た目でのたまったことがあるけどね。

そのあと鬼灯様は狛治さんに『寝てください。休んでください。頼みますから。大王なら俺が打ち付けておきますから』って説得されて寝たよ！

大王は……顔真つ青にして仕事してたから、椅子に打ち付けられずに済んだかな？」

* * *

2：7巻56話「雪鬼」、8巻57話「八寒地獄」

後日、不死川にその時の話をシロたちがしたら

シロ

「それでね、春一さんっていう雪鬼に会って……」

実弥

「春一？ ……ああ、あいつか。自由人だったろ？」

ルリオ

「え？ 不死川さん、あの雪鬼のこと知ってるんですか？」

実弥

「……70年くらい前に異常気象で、ただでさえ暑い地獄が更に暑くなった所為か頭茹った煉獄が、『今ならいける気がする!!』とか叫んで半裸で八寒地獄に突入した時、保護してくれた奴だ」

桃太郎ブラザーズ

『何してんの煉獄さん!?!』

実弥

「鬼灯はもちろん、俺や狛治、宇髄に伊黒に悲鳴嶼さんも捜索に参加したんだけどなあ……、あいつ、保護されてかまくらで石狩鍋食ってやがった。」

吹雪の中で悲鳴嶼さんがあいつの『うまい！ うまい！』が聞こえたとか言った瞬間、俺達の目的が救助から襲撃に変わった」

* * *

3：28巻238話「シロが賢い」

狛治

「ん？ シロ、どうしたんだ？ 書類を出しに来たのか？」

シロ

「こんには、狛治さん。すみません、書類の提出はまだ少々時間がかかります」

狛治

「……………!？」

ど、どうしたんだ、シロ!? 何があった!? 無惨様でも食べちゃったのか!？」

柿助

「そう来たか」

鬼灯

「ちよつと面白いので、鬼殺隊の方にも一度見せてみましょう」

結果、ほぼ全員が狛治と同じ発想。

珠世さんだけ、ちよつと違ってた。

珠世

「!? どうしたの、シロさん!? 無惨を食べてマイナスの掛け算で賢くなったの!? それでもその程度にしか賢くなれない程、あいつ馬鹿なの!？」

鬼灯

「珠世さん、無惨を罵りたいだけですよね？」

* * *

4：31巻263話「猫の紳士は悪気がない」

ルリオ

「イヤ、まくだいぶ脱線してきているが真面目な話、本当に十王補佐官が拳式しようってなったらどうすんですか？」

流石に全員、来賓になりますよね？ 裁判は一日なしですか？」

鬼灯

「実は前例がないんですが、そうなるでしょうね。」

それか、朝々昼で式に参加して、昼々夜で全員礼服のまま仕事に戻るかです」

ルリオ

「亡者、意味不明だろうな」

狛治

「間違いない裁判内容が頭に入らなくなるので、せめて着替えましようよ」

ルリオ

「てことは、アレか。チュンさんが嫁になる暁にや、白無垢角隠しで亡者にドロップキックしてる様子が見られる日が……」

シロ

「暴力花嫁!!」

狛治

「いや、来賓はともかく新郎新婦は一日休め。そしてやっぱりせめて着替えろ」

* * *

5 : : シロの足跡5巻53話「追尾」

鳥頭が精度の甘い追尾ミサイルを発明して使ってみたら……

狛治

「鳥頭さん！ あのミサイル、ちゃんと精度の実験をしてください！ 法廷を見学中だった縁壺さんご家族に向かって行ったんですよ！」

鳥頭

「なら平気だな」

狛治

「そうですね！ そうでしたけど!! 反省しろ！ 謝れ！」

確かにうたさんはミサイルが飛んできたことにも気づかなかったし、縁壺さんも自分が切ったものを危険物だったと認識してなかったけど、一応は謝ってください!!」

烏頭

「むしろ縁壹がミサイルに謝れ」

* * *

6：22巻183話「逝き先は地獄の方で宜しかったでしょうか」
葉鶏頭さんVS烏頭さんの「言葉はキツチリ派かわかればいい派か」の多数決にて

伊黒

「キツチリに決まってるだろ。ただでさえ言葉は誤解を招きやすいのに、適当に使うなんて信じられんな」

蜜璃

「私は……ちゃんと正しい日本語を使っている自信がないから、烏頭さん派かな?」

鎚丸

「わかればいいと思うよー。あんまり考えすぎると疲れちゃうもん」

伊黒

「俺もそう思う。言葉なんて移ろうものなんだから、互いに通じ合えばそれでいい」

鬼灯

「あなたは言葉がどうこうよりも、自分の主張をちゃんと持て」

* * *

7：17巻138話「色・色々」

「女性の下着の色や柄、デザイン、上下揃ってる派か揃ってない派かなどで法廷の話題が染まっていた時

ゲスメガネ

「いや、人によって似合う色や柄、デザインが千差万別なのは下着によらず当たり前なのだから、そこを言い争うのはナンセンスですよ。重要なのは、それが拝めた時の反応です。あ、閨で拝めるリア充の話はしてないんで帰れ。何なら土に還ってどうぞ。で、話は戻りますけどやっぱり油断してた時、無防備な瞬間にちらっと見えるのがいいんです。いや、無知ゆえに恥ずかしがりながらも大胆に肌を露わにしているのも最高、ご馳走様です本当にありがとうございますですけど、ち

らつと見えてるのに気づいていない、周りがなんか拝んでもきよんとしてるのだから最高です。そして気付いて赤面する様は、もうそれだけをおかずに3杯は白米いけますね、茶碗でじゃなくて釜で。あれを見れた時は、栗花落隊士のキュロット丈を胡蝶様に気付かれないようこっそり上げ続けた甲斐があったというものです」

鬼灯

「実弥さん、こいつです」

実弥

「よし来た任せろ！ 伊黒と胡蝶にも連絡しとけ!!」

鬼灯

「衆合地獄の刑場を開けておきますね」

* * *

8 : 31 卷 264 話 「名前は言霊」

鬼灯

「最近では亡者の名前もなかなかハードです。」

先日も、『白鳥……愛和……？ 愛和か？』と違って確認したところ、ラブアンドピース 和という名前の方でして、私の心が今ラブ&ピースじゃねえわ、どうにかしろと一瞬思いました」

狛治

「俺はそのパターンを疑い過ぎて、みゆき 海幸さんを『シーフード 海幸か!?』と違ってしまったことがあります」

* * *

9 : 12 卷 98 話 「三途の川」

三途の川の説明後

鬼灯

「ちなみに、三途の川は善人なら『有橋渡』という橋を渡らせて、罪が軽い人は浅瀬で水の化け物も少ない『山水瀬』、罪が重い人なら水深が深くて化け物もウジャウジャいる『江深淵』を渡るのですが……、問題です。狛治さんはどこをどのように渡ったでしょう？」

ルリオ

「え？ 狛治さんって……事情はともかく罪だけなら江深淵でしょう

？」

柿助

「いや、あのばあさんのことだからイケメンって理由で有橋渡って出たのか……」

ルリオ

「それならそれで、本人勝手に江深淵泳ぐだろうよ」

シロ

「わかった！ 江深淵だったけど、化け物が襲う前に泳いで渡り切っちゃった！」

鬼灯

「シロさん、惜しい。」

正解は、『江深淵を1分足らずで渡ってしまった為、本人が間違えて山水瀬を渡ってしまったと勘違いして戻ってきてしまった』です」

* * *

10：26巻222話「むじな」

実弥

「おう、鬼灯。どうした、その妖怪は。新顔か？」

鬼灯

「獄卒志願で、ただいまどこの部署が向いているかを見ながらの面接です」

実弥

「動物の妖怪なら、不喜処おれんどこ一択だろ」

鬼灯

「いえ、彼らは見ての通り愛嬌がありすぎて向いてません。シロさんのように豹変できるタイプでもありませんし」

実弥

「別に豹変なんかしなくていいだろ。つーか正直、俺が襲われる側なら夜叉一みたいなのに襲われるより、こいつらや普段のシロに食われる方がよっぽど怖いわ」

鬼灯

「なるほど。一理ありますね」

実弥

「こういう見た目の方が亡者も油断するだろうし、妖怪なら前足が器用だから猿みたいに出来る呵責の幅も広がるし、カワウソなんて泳ぐのが得意だから水辺の拷問もできるな。それと猫又は……えーと、ほら、小汚い見た目のわりに結構毛が柔らかくて撫で心地が良い」

鬼灯

「さては実弥さん。ただ単に可愛い動物獄卒増やして癒されたいだけだな」

* * *

11：30巻260話「大役だろうが何だろうが」

シロ

「ちなみに犬と猿と雉をやる子は、俺達に質問とかはないかな!？」

丙

「えーとね……めめちゃんが犬役だよ!!」

シロ

「めめちゃんって……」

ルリオ

「焙烙齋の孫娘だな。母々子。よく座敷童とも遊んでる」

丙

「それでねー、凄いんだけど……めめちゃん猿と雉のラジコン作って、一人三役するんだよ!!」

義勇先生と鱗滝園長先生がそのラジコンに被せる猿と雉の着ぐるみ作って、また錆兎先生と真菰先生に『やりすぎ。本物の毛皮か剥製かと思ってビビった』って怒られてた!」

ルリオ

「着ぐるみまで作ってんに、子供がやるんですらねーのか……俺らの役……」

丙 何で猿と雉は無機物がやるのに、木の役はあるんだ……」

丙

「ちなみに桃役もあるよ」

ルリオ

「何でだよ!？」

丙

「義勇先生が作った桃が大きすぎたから、『もういつそ園児に着てもらおう』って錆兔先生が言ったから」

* * *

12：5巻33話「地獄定例会議」

モブ獄卒

「私は受鋒苦処じゆほうくしよ（お布施の内容にケチつけた罪）について、一つ提案します。」

「この定義はお布施に限らず、もっと広くていいと思います。例えば……」

女A

『マジ、イラネ〜』

女B

『彼氏、センス最悪だね』

女C

『売っちゃえば?』

モブ獄卒

「こういう女も堕ちていいだろ！」

「まあ、確かに『男の独断プレゼント』は惨事なこともあるけれども!!」

狛治

「? 独断にしなければ良いだけじゃないか？」

「何で普通に何が欲しいのかを訊かなかったんだ？」

モブ獄卒

「え!?! えっと、そりゃサプライズで驚かせたかったから……」

狛治

「何で喜ばせることより、驚かせる方をメインの目的にしてるんだ？」

「喜んでもらえなかったのが悔しい、残念なのはわかるが、そもそも『相手が喜ぶもの』を考えて贈ったか? 『自分が贈りたいもの』を押し付けただけなら、相手は悲しむと思うぞ。」

それは相手が何を望んでいるのかを知ろうともせず、自分の好みを押し付けて感謝を要求しているということだからな」

モブ獄卒

「がはっ!!」

唐瓜

「粕治さん、ストップストップ!! 正論のオーバークイルしてる!!」

伊黒

「本気で疑問に思ってるのはわかったから、もうやめてやれ!!」

けど、あとでもうちよつとそのあたりの事を詳しく教えてくれ!

頼む!!」

* * *

13：15巻127話「怪奇娯楽」

本編後、鬼灯が「ホラー映画を見ていたら、のめり込んでつい映画館でも大笑いしてしまう」という話を唐瓜がしのぶにした時

しのぶ

「鬼灯様とはまた違った感覚でしょうけど、ちよつとわかります。それ。」

私とか亡者って、幽霊でしょ? だから心霊もののホラー映画だと幽霊側の視点に立ってしまって、『ああ、主人公を驚かせるためにずつとここにスタンバっていたのか』と思って、つい吹き出しそうになる時があるんですよ」

唐瓜

「ああ……、それはわかる気がします。俺も心霊ものだと、『お迎え課呼ばなくちや』としか思えなかったりするんですよ」

しのぶ

「獄卒あるあるですね。あとこれは亡者あるあるですが、死んで年月が経つと、自分の死に様は笑い話にしか思えなくなるみたいです。」

私はそこまではないですが、時透くんは浄玻璃の鏡で改めて自分の死に様を見た時、あまりのバラバラ加減と、そんな状態なお兄さんに『帰れ』と言われたことがツボにはまって、呼吸困難になるほど笑ってました」

14：シロの足跡2巻19話「チャームポイント」

カマーさんにより桃太郎ブラザーズモチーフファツションブームが起こり、3匹がモデルと共演して撮影することになって桃太郎を誘ったが、桃太郎が「モデルと並んで比べられるのが嫌だ」と断った後の、極楽満月での雑談

カナエ

「あらあら、残念。見たかったわ、桃太郎君とシロちゃんたちがファツション雑誌に載っているの」

桃太郎

「いやいや、勘弁してくださいよカナエさん。俺がプロのモデルと並んだら、下ぶくれが悪目立ちするだけっすよ」

カナエ

「そこはほら、キビ団子入れですって言えば大丈夫よ！」

桃太郎

「シロと同じ発想じゃねえか」

白澤

「というか、そうだとしたらシロちゃんたちはそこに入ってたキビ団子を食べたことになるよ……」

15：31巻266話「令和桃太郎典」

桃太郎が出店の資金繰りについて鬼灯と狛治に相談

狛治

「俺も詳しいことはよくわからないのですが、クラウドファンディングはどうですか？」

これなら天国の住人というのも、『桃太郎』という英雄としてのネームバリューも信頼につながって出資してくれる人が期待できるのでは？ それに桃太郎さん自身もちゃんと獄卒とかに信頼を得てますから、やるなら俺は絶対に出資しますよ」

桃太郎

「ははっ！俺の名前よりも出資者が狛治さんってことが、すっげー

信頼に繋がりそう！

リターンは奮発しますから、その時はよろしくお願いしますよ！」

鬼灯

「リターンは、一生薬代や診察料を無料……でも足りないかもしれないかもしれませんね。たぶんこの人、1千万くらいポンと出しますよ」

桃太郎

「ガチの出資じゃねーか!! え!?! 狛治さん、そんなポンと出せるくらい持ってんの!?!」

狛治

(かなり気まずそうに目を逸らしながら)

「……正直、俺というか俺の家は俺の給料を持って余してます」

桃太郎

「一生で一度、言ってみたいセリフだなそれ!!」

「俺のハードルを無限に上げるな」

「強さの秘訣？」

「はい！ 火車の姐さんに追いつくために、鬼灯様に色んな『強い人』を紹介してもらい、その秘訣などを聞いて回って回っているんです！」

小首を傾げて訊き返した狛治に、ピスピス鼻を鳴らしながら芥子が答える。

「ああ。この間、対決してたもんな。けどあれは一応、芥子の勝ちじゃなかったか？」

その答えと壮大な目標に、狛治は先日行われた動物獄卒勧誘を兼ねた異種族対決を苦笑しつつも思い出し、その結果で浮かんだ新たな疑問をまた尋ね返す。

「確かに試合としては私の勝ちですが、あれは私が火車さんに相手にもされていなかったからの不戦勝。試合に勝って勝負に負けたという奴で、精神的に惨敗です。」

あれで私は、強さとは肉体の事だけではなく、精神的なものも重要だと痛感させられ、強さの種類を知りたいとも思ったからこそ、色んな人に強さの秘訣を聞いて回ってます」

その疑問にも芥子はウサギ特有の可愛い無表情で、それでも大真面目だとわかる様子で答えてくれた。

芥子が真剣なのはわかっていたので、狛治は「火車あれは強さによる自信で相手にしてなかったのではなく、猫特有の気まぐれかつ寝るのが好きだけだろう」という本音の感想は封印し、自分も真剣に考える。「うくん……。悪いが俺は俺自身を『強い』とは思ってないから、秘訣と言われても何も浮かばないな。肉体面でのこと、素流とか格闘技のコツを教えてもさすがに意味ないだろうし」

だが、真剣に考えれば考える程、芥子が望むであろう答えは浮かばなかったので正直にそのことを話す狛治だが、芥子は落胆した様子もなく、むしろ感心して納得したように腕を組んで何度も頷いた。

「いえいえ、その謙虚さとストイックさこそが、私から見たら狛治さんの『強さ』ですよ。」

あと、狛治さんの『我慢強さ』も大きな『強さ』だと思ってます！」
芥子にとって狛治は獄卒としては後輩だが、鬼灯と同じくらい尊敬に値し、ウサギかつ独身なら仕事一筋の自分でもメロメロになっていると思える上司だからか、やけに狛治を褒めちぎる。

その言葉自体は、照れ臭いが素直に嬉しく思う。だが狛治からしたら、過剰というか全く心当たりがない評価でもあったので、つい無粋だとわかっていても否定してしまった。

「ありがとう。けど、我慢強いって何のことだ？ 俺はむしろ、耐えることが出来なかったからこそ、多くの罪を犯してしまった生涯だったぞ？」

「……あなたの過去は我慢が足りなかったのではなく、それだけ相手が外道だっただけですよ」

狛治のものはや自傷に近い自嘲の言葉を、芥子は否定する。

どんなに尊敬している相手でも、これだけは認めない。本人にだって否定させない。

芥子自身も「耐えられなかった」からこそ、同じ傷を持つからこそ、真つすぐに狛治を見つめて断言した。

「狛治さんが我慢強くない訳ないじゃないですか！

我慢強くない人が、鬼灯さまや無惨の部下をやれる訳ないでしょう！！」

「突然、鬼灯様に流れ弾をぶち込むのはやめてやれ」

しかしその断言に至る根拠が本当に流れ弾過ぎて、狛治はしんみりしつつ感謝する暇なく、つい反射で突っ込みを入れてしまう。

しかし芥子にとって狛治の自責による自嘲は、ある意味ではNGワード「狸」並みの地雷だったらしく、ウサギ特有の無表情さえも崩れ、泣きそうな顔で前足をじたばた動かし、後ろ足も地面をバンバン踏み鳴らして狛治の素の突っ込みも聞かずに熱弁を続けた。

「狛治さんは我慢強いです！ 百歩譲って鬼灯様は忍耐力がなくてもスルー力があればなんとかありますけど、無惨の部下なんて我慢強くないのならもうDM以外ないじゃないですかー！！」

「いや、だから鬼灯様に流れ弾をぶち込むなって……。それに無惨様

に対しても、俺は我慢してたというか自暴自棄で何も考えてなかっただけだし……、つていうかその状態でも童磨に関しては文句言ったから、やっぱり我慢強くは……」

「いやそれ、むしろ童磨凄すぎませんか？」

子供の駄々のような状態になってしまった芥子を、正直可愛いと思いつつ狛治は宥める。

そしていくら落ち着くように言われてもヒートアップし続けた芥子だが、童磨のくだりでいきなり素に戻って、したくもない感心をこちらも反射的に口にしてようやくクールダウン。

狛治も今更になってだが改めて、当時の自分の状態を考えたら確かに、奴が忘れていたが失っていたいなかった自分の地雷を踏みまくっていたとはいえ、「ウザいから何とかしてくれ」という要望を無惨に出すほどの感情を呼び起こしていたのは、ある意味すごすぎる。

しかも無惨は、その要望は無視したし、狛治に同情もしなかったが、「童磨がウザい」という感想に共感だけはしていたというのも、奴の最低最悪な唯我独尊ぶりを知っていれば、快挙そのものだろう。

「……あれもあれで強さと言えば強さだよな」

「しかも、無惨や鬼灯様も太刀打ちできないくらいですからね……」

一人と一羽は一緒になって腕を組んで俯きながら、改めて童磨の最強っぷりにドン引いた。

「……まあ、あれはある意味最強で無敵かもしれないが、参考にはならないから忘れろ。つていうか、絶対に見習うな。」

童磨はもちろん、俺よりも鬼殺隊だった奴らに聞いた方がいいんじゃないか？ 彼らこそ、肉体面はもちろん、心が優しくも強かったことはわかりきっているだろう？」

「それもそうですね。しのぶさんのお話とか参考になりそうですから、さっそく聞いてみます！

ありがとうございます、狛治さん！ ……あと、何度も言いますが、狛治さんだって心がとっても強い人ですよ」

しかしいつまでも童磨とく糞の話題を上げ続けるのは精神衛生上よくないので、狛治は話を切り上げて別方向に逸らす。

芥子もその意図を理解して、無敵のウザさを誇る虚無の塊は思考から放り捨て、奴から連想した割と親しく付き合っている同僚の名を上げ、さっそく彼女のもとに向かうと宣言。

そして狛治に礼を言つて去ろうとするが、その前にやはり芥子は狛治の自嘲を許せなかったのか、しつこく狛治を「強い」と断言した。

その言葉をまだ否定するほど、狛治に無神経な頑なさなどない。

彼は素直に嬉しそうな笑みを浮かべ、「ありがとう」と告げる。

その笑みと言葉に芥子は安堵して、次のインタビュ―相手であるしのぶの元へびよっこんぴよっこん跳ねて向かう。

「芥子」

2, 3歩ほど跳ねた背中が呼び止められる。

振り返った芥子は、可愛らしく小首を傾げた。

「……お前の、強くなりたい『理由』は、何だ？」

自分呼び留めた狛治が、淡く微笑みながら尋ねた言葉の意図がいまいち理解できず、芥子の首の角度がさらに深まる。

「え？ ひとまず、火車の姐さんに追いつくことですけど……。ん？

これは目標であつて、理由じゃないですね。あれ？」

理解できないまま答えようとして、けれど自分の答えが「理由」でないことに気付き、今度は自問自答で悩み出す。

そんな芥子に狛治は苦笑して歩み寄り、彼女の長い耳の間の小さな頭を指先で撫でてから言った。

「……大丈夫だ。きつと、彼らの話を聞いて、そして『見て』いれば思ひ出す」

その言葉の意味もわからなかった。

狛治の、少し悲しげだがとても優しい笑顔の理由も。

その笑顔に、何故か無性に泣きたくなくなった自分の心から生まれた感情の名も、まだ芥子にはわからない。

『自分の適材適所を見極め、生かす』。それが私の自負している『強さ』です」

「そうですね。あと、『相手を理解する』ことも大事な強さだと思います。」

憎しみというフィルターのかかった相手像で策を練っても、その策通りに相手が動く可能性なんて期待できません。それなら無策で臨機応変に行動した方がずっとマシなくらいです」

休憩時間だったので、しのぶは自分の仕事場ではなく閻魔庁の医務室で、珠世と一緒にお茶を飲んでおり、芥子のインタビューにはしぶだけではなく、彼女に続いて珠世も自分なりの「強さ」を語ってくれた。

「なるほど……。どちらも実体験に基づいていますから、何と云うか説得力の重さが凄いですね」

鬼の首が切れない非力さでありながら、無理やり筋力をつけるのではなく、鬼を殺す毒を開発したしのぶは、まさしく自身の適材適所を完璧に生かしている。

女性は、筋肉がつきにくい。特異体質の蜜璃でさえも、柱の中で比べたら飛び抜けて怪力という訳ではないくらいだ。

……比べる対象が悲鳴嶼とかなので、あまり参考にはならないかもしれないが。

とにかくただでさえ性別段階で不利なのに加えて、しのぶの小柄な体格に筋力がつけば、その小柄さを生かした敏捷性が間違いなく筋力と反比例して落ち、そしてその落とした敏捷性以上のメリットを得る筋力は、やはり性別と体格の問題で決して得ることは出来ないのだから、しのぶの判断は英断というより最適解だ。

そして珠世のおっとりとした言葉に騙されそうになるが、彼女の「強さ」はある意味では皆さん反応に困りまくる、無惨でさえも真つ当な反応をした産屋敷ボンバー以上に、狂的なほどの覚悟ガン決まりによる「強さ」だ。

奴を憎みに憎み抜いていた彼女にとって、もっとも考えたくもない存在、理解なんてしたくない思考だっただろう。

それでも珠世は、自分の開発した毒を生かすために、自分がどのような言動を取れば、無惨が自分の思惑に気付かず、薬の効果が現れるまで騙され続けるかを考え抜いた。その為に、憎くてたまらない男の行動原理を自分の私情で歪めず、理解して読みきった。

「そうですね。というか、珠世さんは本当に良くやり遂げましたよ。」

私の場合、あいつは空っぽだからこそ割と行動原理や思考は予測しやすかったのですが、無惨は知れば知るほど斜め下にやらかしまくりですから……。あれを理解するって、憎いとかムカつく以前に呆れとか馬鹿らしさが先立ちませんか？」

そんなある意味では肉体的な拷問以上の苦痛だったであろう、「無惨を理解する」をやり遂げた美女は、芥子からの尊敬のまなざしと、しのぶからのもはや尊敬を上回る困惑の言葉に、やや頬を紅潮させて明日も美しいと確信させる微笑みでしとやかに答えた。

「ありがとうございます。精神的苦痛は確かにあったけど、理解すること自体は楽でしたよ。」

だってあいつ、攻撃力と再生力と生き汚さは想像できる限り上に、それ以外はとにかく下に、地面にもぐりこんで掘り続けて、地球を貫通させる勢いで下に見ておけば良かっただけだから」

とてもいい笑顔で、相変わらずボロクソに無惨を貶す珠世にしのは引いた様子もなく、彼女も朗らかに笑って「なるほど」と納得していた。

そんな会話内容を無視すれば、実に目の保養となる仲の良い友人同士の優雅なお茶会風景だ。

とても珠世が、無惨に騙されたとはいえ自分の家族を食い殺し、そのことで自棄を起こして多くの人間を血祭りにあげた、間違いない「悪鬼」としか言いようがない時期があったことも、しのぶはそんな「悪鬼」を憎み抜いて、自身を毒の塊にして神風特攻をやらかした鬼殺隊であったことなど、現在の二人を見るだけでは信じられない程に仲睦まじい。

そんな二人を、いつもなら芥子は微笑ましく思うだけなのだが、今日はほんの少しだけ違った。

もちろん微笑ましいとはいっても通り思っている。けれど、今日は何か芥子のモフモフな小さな胸の奥が、ほんの少しだけチクリと痛んだ。

「けれど私たちの『強さ』なんて、芥子さんは既に持ち合わせていますよね?」

「それもそうですね。『かちかち山』で行った策は全て、芥子さんの適材適所を生かしつつ、相手の愚かさを理解していたからこそ、出来た事ですし」

決して鈍い訳ではない、むしろ敏い方な二人だが、流石にウサギの無表情から芥子自身もいまいち理解できていない感情の機微を読み取ることは出来ず、しのぶと珠世は自分たちと似た者同士な兔に、似ているからこそ生かせないアドバイスだったことを詫び、そして次のインタビュー相手を推薦した。

「悲鳴嶼さんのお話を聞いてみたらどうでしょうか?」

精神論はもちろん、あの人は聴覚を生かした戦い方するから、芥子ちゃんにとつて有益なお話が聞けるのでは?」

「なるほど。あの方は当時の柱で最強ですし、ぜひともお話は聞きたいです!」

ありがとうございます、しのぶさん! 珠世さん!」

しのぶの提案に芥子はすぐさま乗って、礼を言いつつ賽の河原までぴよこぴよこ跳ねて行く。

もうその頃には、胸の奥の痛みなど忘れていた。

* * *

「……私はそもそも体格に恵まれていたから、期待に沿えず申し訳ないが、私の話はあまり参考にならないだろう。

精々……胡蝶が言っていたように、視力ではなく聴力に頼る戦い方くらいか。目が見える者は、こちらが聴力頼りだとわかっていても、やはりそれがどんなものか想像ができず、対応できないようだ。異能を操る鬼相手でも、私が最後まで戦えたのはそこが大きいだろう。

それと、見ただけで盲目というハンデがわかれば相手は油断するから、この見た目もある意味では私の『強さ』なのかもしれないな」

「いや、むしろあなたの見かけは警戒心を限界まで引き上げますよ？」
賽の河原で悲鳴嶼が悩みながら答えてくれた言葉に、芥子も申し訳ないと思いつつ突っ込んだ。

悲鳴嶼はその突っ込みに気を悪くした様子はないが、そもそも突っ込みの意図がよくわかってないのか首を傾げている。

盲目だから、自分の体格が恵まれている事は自覚していても、盲目がハンデに思えない程の見かけだとはさすがに思っていないようだ。

「？ よくわからないが……、私が言えることは本当にこれくらいだな。

すまない。私は……自分の心が強いとはとても思えないのだ。むしろ、私は強くない、間違った恨み言を抱え続けていた愚か者だ」
小首を傾げつつ、悲鳴嶼は片膝をついて芥子の頭を撫でて、彼女に詫げる。

その視力がないはずの目は芥子に向けられてこそいるが、芥子を意識上でも見ていないことは明らかだ。

彼が見ていたのは、生前の自分。鬼殺隊に入る前。入るきっかけとなった事件。

養い子のほとんどを守れなかった挙句に、仕方がない事情が重なったとはいえ、自分を思ってくれていた子供たちの優しさを全て誤解して、「子供は保身ですぐに嘘をつく」と思い込んでいた過去を見ていたのは、その白濁している眼に湛えられた後悔と悲しみですぐにわかる。

だから芥子は、「そんなことないですよ」とフォローの言葉をかけようとしたが、それは不必要。

「あー！ ウサギさんだー！」

「泣きマツチョウがウサギさん撫でて泣いてるー」

「いいなー。ひめじまさん、私もさわりたいー！」

悲鳴嶼と芥子に気付いた賽の河原の子供たちが、無邪気に近寄ってきて、それぞれの感想やら要望やらを口にする。

悲鳴嶼は芥子が子供たちの玩具にならないように庇いつつ、芥子はただの兎ではなく獄卒であることを説明したり、芥子自身に優しくなら子供たちが撫でてもいいかどうかを尋ねて、子供たちの面倒を見る。泣きマツチョ呼ばわりに関しては、慣れているからか事実だからか、気にした様子もなくスルーしていた。

芥子も大人な対応で、多少乱暴でも大人しく子供に撫でられながら、安堵する。

「……悲鳴嶼さんは十分に強いですよ。誤解とはいえ、子供を恨んでも仕方なかったのに、不信感を懐いてもずっと守る対象であり続けたのは、十分すぎる『強さ』ですよ」

そんな独り言を呟きながら、芥子はジエンガをさぼって逃げる子供を泣きながら追いかけ、子供も泣かせにかかる悲鳴嶼を眺めた。

怖がられ、嫌われるはずの賽の河原の獄卒で、確かにジエンガ崩しをしていないにも関わらずに、その外見といきなり泣き出す奇行でやたらと怯えられているが、同時に面倒見の良さをしつかり子供たちに見抜かれ、懐かれている悲鳴嶼の優しさを「強さ」と断じる。

……その「強さ」にまた、チクリと何かが胸の奥で痛みながらも、芥子は子供達とほとんど戯れている悲鳴嶼をただ見ていた。

* * *

『強さ』の秘訣？ 稀血なんて特異体質頼りだった俺こそ、悲鳴嶼さんより元からあるものだよりだっつーの」

「そうだな。俺も鬼食って鬼化なんて、ハチャメチャな特異体質に頼りっぱなしだったからな」

「笑ってんじやねーよ!! お前はよりにもよって、なんつーもんを食ってんだ!?!」

悲鳴嶼から今度は、「酷いことを言われても、お互いを思いやり続けた不死川兄弟なら、精神論での『強さ』の話が聞けるのでは?」と言われ、不喜処にやってきた芥子が、さっそく実弥と急病で欠勤している獄卒の代わりでバイトしている玄弥の話聞く。

しかし彼らも自分達の精神的な強さに自覚がないから、お互い無惨の鬼に対して有利だった自分たちの体質を「強さ」として挙げ、玄弥は相変わらず手が早い心配性な兄にキレられ、サブミッションを決められる。

「痛い痛い！ 兄ちゃんごめん！ もうしないから許して!!」

「当たり前だ馬鹿野郎！ っていうか、ここで鬼食いたらお前はただの猟奇殺鬼犯じゃねーか!! んなことしたら、俺がお前の首切って俺も切腹するわ!!」

「どうどう、不死川さん、落ち着いて。潔い兄弟愛と責任感は素晴らしいですが、亡者のあなた方だとその償いはあんまり意味がないですよ。

っていうか、玄弥さんは本当にいったいどんな経緯でそんな特異体質に気付けたんですか？」

兄弟のじゃれ合いではなく、割とガチで実弥は弟の肩関節を外すどころか粉碎しかねない勢いで固めているので、玄弥が何とか外そうと行動でも言葉でもがんばるのだが、頭に血が上りやすい兄には何を言っても逆効果らしい。

だがさすがに第三者の言葉で少しは頭が冷えたのか、芥子に宥められて実弥は舌打ちしつつ弟を解放。

玄弥は呻きつつホツとしながら、芥子の関心はあるが同時に呆れている疑問に答えた。

「いてて……。あー……。あの時は刀の色は変わんねえわ、呼吸はどんなに頑張ってもひっひっふーくらいしか出来ねえわで、剣士としてダメダメだっというのを思い知って、もう完全にヤケクソのやけっぱち、ノリと勢いとその場のテンションで食ったら、なんか鬼の能力が使えたんだよ」

「食うな!!」

しかし正直に話すぎて、もう一回兄から雷と拳骨が落とされた。

その落とされた拳骨に数秒間しゃがみこんで悶絶したが、それでも玄弥は笑って兄を見上げて言う。

「いってー！ ごめんってば、兄ちゃん！

……けどさ、兄ちゃん。確かにこのヤケクソ経緯は俺もどうかと思うけど、俺は鬼を食ってこの体質であることに気付いて良かったと思ってるんだ。この体質に感謝はしても、後悔なんかなんにもねえよ」

「あゝ ああ？」

実弥の稀血とは違い、人間と定義すべきかどうかとも怪しい体質であることを朗らかに笑って肯定する弟に、弟を誰よりも何よりも愛しているからこそ、実弥は狂犬のような顔で唸るように凄みを利かせて睨み付ける。

だが玄弥は身内の気兼ねなさと、自分が死んだ時の兄の慟哭を知っているからこそ、兄のメンチ切りに生前のような怯えは見せず、むしろ更に嬉しそうに、誇らしげに笑って言い切った。

「だって俺は、どんな姿になっても兄ちゃんと一緒に戦いたかった。兄ちゃんと一緒にいたかったんだ。」

兄ちゃんは自分を犠牲にして、俺の安全と幸せを守りたかったんだろうけど、俺の幸せは兄ちゃんと一緒にあったから、幸せになりたいんなら兄ちゃんを追うしかなかったんだ。

だから、兄ちゃん、本当にごめん。俺は、もし過去に戻れるとしても絶対に何度でも鬼を食うし、……上弦の壺との戦いで同じ事をするよ。もちろん、今度こそ生き残ろうと努力するし、足掻き抜くけど……それでも俺は……、俺だって自分の全部を兄ちゃんにあげてもいいくらい、兄ちゃんに生きててほしかったし、幸せになって欲しいんだ」

弟の真っ直ぐな、当時も今も変わらない想いと願いを耳にして、実弥は真っ赤になって今度は照れ隠しの拳骨を落とし、玄弥もさすがにこの一撃に対しては「理不尽!!」と悲鳴を上げた。

「お二人の強さの秘訣は、『相手に嫌われても、相手の為に自分の全てを尽くすこと』ですね。もう兄弟そろって、まさしく『泣いた赤鬼』の青鬼であり、赤鬼です。」

けど、不死川さんはさすがにそろそろ素直になった方がいいと思います」

そんな兄弟のやり取りを眺めながら、芥子が出した結論にやつぱり実弥は顔を真っ赤にして、「うつせえわ!」と怒鳴った。

そんな兄をフォローのつもりか、玄弥は「いや、俺が死んだ時の号泣絶叫で兄ちゃんの本音はもう全部わかってるから、別に今のままでもいいよ」と全力で藪蛇をやらかし、今度はチョークスリーパーで締め上げられる。

そんな過激すぎる兄弟の戯れを、クスクス笑って芥子は見守る。

二人の「強さ」を自分で語っていた時、疼いた痛みから目を逸らすように。

* * *

「錆兎のおかげだ。錆兎を目標にして、錆兎に追いつこう、錆兎の死を無駄にしないと思いつけたからこそ、俺は最後まで戦えた。

まあ、錆兎には結局は追いつけないままだったがな」

「義勇。気持ち嬉しいが、たぶんとつくの昔にお前は俺を追い抜かしてる」

弟を締め上げながら不死川が次にインタビューする相手に勧めた元鬼殺隊は、現同僚である獄卒ではなく保父さんという色んな意味でギャップのある職に就いている富岡 義勇だった。

上げた理由は、他の者達のように芥子が求める「強さ」の参考になりそうだからではなく、「未だに何考えてるか全然わかんねー奴だから、ちよつと聞いてみてくれ」という、ほぼ完全に不死川個人の好奇心だった。

しかし芥子の方も、しのぶ経由である程度知っている義勇の人柄が「めちやくちや強いけど、かなりの天然かつドジっ子」だったので、彼女の方も普通に気になりインタビューを実行した結果がこれだ。

しばし考えた後に言い放った強さの秘訣というか、強くなるうと思つたきっかけ、その努力を続けられた理由としては、真っ当で友達思いの立派なものだ。

しかし、即座に後ろで本人に突っ込まれている通り、この男は真っ

すぐだけどなんかズレてる。

確かに鑄兎は、当時の最終選別に参加した隊士候補の中ではずば抜けた実力を持っており、そんな彼と比べて義勇は精々平均レベルだったのは確かだが、死んだことであらゆるものが止まってしまった鑄兎と、どんな思いであれ形であれ、生きて前に進み続けてきた義勇とでは、鑄兎の言う通り追いつくどころかとつくの昔に、それも比べ物にならないぐらい追い抜いていると考えるのが当然だ。

その当然を、意地とかではなく素で気付いていない義勇は、振り返って力強く断言する。

「そんなことはない。鑄兎だったら時透よりも早く柱になれただろうし、新しい型だつて30くらいは生み出したし、なんなら無惨相手でも一瞬で首を切り落とせた」

「出来てたまるか」

「義勇さん、鑄兎さんを何だと思ってるんですか？ 最低でも縁壺さんと同格だと思つてますよね？」

「というか、本当にそれぐらいの実力があつたら、刀が折れてもあの手鬼にやられんだろう……」

しかし普段は良く言えばクール、悪く言えばというか真実を言えばぼけっとしてゐる義勇の珍しい生気ある目ときりつとした顔による熱弁は、鑄兎本人の即答で否定された。当たり前だ。

そんな二人のやり取りに困惑しながらも芥子がひっそり突っ込み、鱗滝も弟子の拗らせ具合に頭を抱えながら、更に根本的なことに突っ込んだ。

総突っ込みをくらつても、自分の鑄兎像を曲げる気はないというか、本気で鑄兎ならそれぐらいできると信じてゐる義勇は小首を傾げ、更に周囲は「どうしよう、この天然……」と義勇への反応に困り果てていたら、彼らのやり取りを面白がつてクスクス笑つていた真菰が、助け船を出すように話を若干変える。

「ふふつ、義勇は相変わらず鑄兎が大好きだね。でも、ちよつと気持ちわかるよ。」

私も鱗滝さんの事、それぐらい強いって思つてるし、私は手の鬼に

やられちゃったけど、鱗滝さんとの約束を守りたい、鱗滝さんの元に帰りたいって一心だけで、何年もお迎え課から逃げ続けて現世に居ついちゃってたもん」

言ってから真菰は、「って、これは全然強さの秘訣の話じゃないね」と言つて、小さな舌をチロリと出した。

「ああ……。それは確かに、芥子が知りたい『強さの秘訣』とは違うかもしれないが、俺達が戦い慣れしてないお迎え課とはいえ、鬼から逃れ続け、最終的にあの世側が折れて現世に留まることを黙認させたのは、文字通り『死んでも諦めない』が出来たのは、俺たちを我が子のように慈しんでくれた鱗滝さんのおかげだ。

俺が選抜に参加した者達全員を守りたいと思ったのも間違いなく、鱗滝さんに褒められたい、恥になる人間になりたくないというのが大きかったしな」

真菰の言葉を芥子が「いいえ！ 十分参考になります！」とフオローする前に、鏑兎がその必要性をサラツと奪う発言をして、鱗滝は未だにつけ続けている天狗面の中でかすかな嗚咽を漏らしつつ、二人の愛弟子を抱きしめた。

彼からしたら、自分の捕まえた鬼と、厄除けのつもりで彫った狐面の所為で、鏑兎や真菰に限らず他の弟子たちも、才能があったのにあまりにも早くて惨い死に至らしめたという罪悪感が、生前も今もあつた。

そんな罪悪感など背負う必要はない、それどころか自分たちが強くなれたのは、強くあり続けたのはあなたのおかげだと改めて愛弟子たちから告げられたら、そりゃ感涙もする。

そして、同じように鱗滝を敬愛して、もちろん感謝もしているのだが、相変わらず話下手な義勇は完全に出遅れてなんか一人オロオロしてた。

そんな残念過ぎる鬼殺隊の最強格であった元水柱を、芥子はまたしても「どうしよう、この人……」という目で見ていたら、鏑兎が苦笑しながら「義勇だつてそうだろ？」と終わりかけていた話題に参加の手助けをしてやる。義勇さんのお守り、ご苦労様です。

「ああ、もちろんだ。園長には幼い頃の俺だけではなく、炭治郎と禰豆子のことも世話になりすぎた。俺だけではなく園長も切腹するとお館様に手紙を出してくれていたと知った時は、ショックすぎて呼吸がやつとな状態だったが、何か言えたのなら、俺が腹だけではなく自分の首も自力で切るからやめて欲しいとでも叫んでいたな。」

……思えば、俺はあまりにたくさんの人に助けられてばかりだ。鶯子姉さんに始まり、園長や錆兎、そして炭治郎の言葉や、あの兄妹の存在そのものに俺は救われ続けた。

……俺は、自分が強いとは思ってなかったし、今も思えない。だけど、俺は自分を救ってくれた人たちに恥じない生を歩みたいと思ったことがきつと……皆が俺を『強い』と思ってもらえる所以であり、秘訣なんだろうな」

言葉が足りない足りないところ100年で言われ続けていた為、義勇は必死に自分の考えを全部、正確に言葉にして、照れくさそうに笑った。

その笑顔か、それとも義勇の言葉にか。義勇の言葉だとしたら、一体どこにかなんて、芥子にはわからなかった。

自分の痛みなのに、どこに反応して痛んだのが、芥子にはわからない。

「だから、これからも俺は錆兎を目標に、精進し続けるつもりだ。とりあえず、全園児の顔と名前とアレルギーや持病の有無、家族構成や家庭環境などを入園初日で覚えられるようになりたい」

「俺のハードルを無限に上げるな」

「初日でそこまで把握されたら、親御さんがむしろ不審がるからやめんか」

「義勇、さすがにそろそろ目の前にいる錆兎本人をちゃんと見よう？」
相変わらずイマジナリー錆兎に無茶ぶりを吹っ掛ける義勇が、水の呼吸師弟に総突っ込みを食らっているのだが、それらを他人事として笑うことも呆れることも出来ないくらい、それは痛み続けた。

* * *

(……理由。私の、『強くなりた理由』とは、何でしょう？)

この胸の痛みは、それがわからない……思い出せないからこそ疼いているものなんでしょうか？)

元鬼殺隊のインタビューを一旦終えた翌日、仕事をしてても芥子は集中できずに考え続けた。

昨日の、彼らの話を聞いていた最中に感じたものよりははるかに小さい、痛みというより違和感程度のもの。それでも、確かに疼く小さな小さな痛みの理由を考え続ける。

その痛みの正体は、狛治に問われて答えることが出来なかった、自分の強さを求める「理由」が関係していることまではわかっている。だけど、それ以上がわからない。

自分の事なのに、芥子には強くなりた理由がわからない。自分が「理由」を、いつしか完全に見失っている事によく気が付いた。

だけど、目的の理由を見失っている事には気付いても、その「理由」が未だにわからない。

いや、正確に言えばわからないのではなく、自分が目を逸らして逃げているという自覚はある。

だって、その理由を見る為には直視しなくてはいけないから。

忘れたくて、なかつたことにしたくて仕方がない、あの忌々しい獣とそいつが行った、残虐非道な過去を見なくてはいけないから。

(……私はなんて……弱い……)

自分は自分で思っていた以上に弱い、トラウマを克服どころかその痛みから逃げて回っているだけだと痛感させられた。

自分が強さを求める理由は、「逃避」ではないかと思えてしまった。

「あ……」

だから、いつもとは比べ物にならぬ覇気のなさで、亡者を權で叩きのめしながら見つけた、現場を見回っている狛治からつい逃げ出そうとしてしまった。

狛治が自分に気付いたら、昨日の別れ際に問われた「理由」の答えを聞かれると思ったから。

自分の弱さを、醜さを自覚させられながらも、それでも芥子は逃げ出したかった。

しかし、狛治が芥子に気付く前に、芥子が逃げ出す前に彼が、いつも通りの能天気さで声を掛けてきた。

「あー、狛治さん！ ちょうど良かった。ほらほら、後輩君。狛治さんにも訊いてみなよー！」

シロが尻尾をぶんぶん回転させながら狛治に駆け寄り、ついて来ていた蝶ネクタイ風の首輪をつけたミニチュアピンシャーと思われる犬獄卒の後輩を呼びかけた。

狛治が尻尾振りながらびよんびよん跳ねまわるシロを宥めつつ、犬獄卒から話を聞くと、どうやら彼は十王の補佐官になることが夢らしく、鬼灯のアドバイスでシロと一緒に各庁の補佐官から話を聞いて回っていたらしい。

そんな事情を芥子も聞きながら、逃げ出そうとした足を自分の前足でピシヤリと叩いて、その場に留まる。

前向きに、自分の夢に向かって真つすぐに努力しているシロの後輩があまりに眩しくて、逃げ続けている自分が泣きたくなくなるくらいに情けなく思えたから、芥子は自分自身を「甘えるな」と叱りつけてその場に留まった。

狛治が後輩へのアドバイスを話し終えたら、自分から話しかけよう。

そして未だに昨日の答えは出てこないままであること。理由がわからないのは、自分が過去から逃げ続けているからであることを素直に告白して、向き合おうと覚悟を決める。

芥子が待ったのは、ただ単に話の途中に割り込まないという常識的なものでしかなく、むしろせつかくの覚悟が萎んでしまいそうだからさっさと話してしまいたかった。

芥子自身には関係がなく、興味のない話だった。

だけど、その長い耳は自分に向けられたものではない言葉を、はつきりと捉えた。

「……そうか。向上心があることは良いことだ。」

……ところで、お前の『補佐官になる』ことの『理由』は何だ？」「え？ え、えくと……その、鬼灯様のあの大胆で、でも冷徹な裁判の、あの、仕事ぶりに感銘を受けたというか、その……」

狛治に昨日の芥子と同じく、自分の目標の「目的」を問われ、後輩は狼狽える。

昨日の芥子のように、本気でわからないからの狼狽というより、おそらく彼はただ単に「獄卒がなれる最も高い役職が補佐官だから」という、功名心が全てであることをはつきり自覚しているからこそ、それを馬鹿正直に言う訳にもいかないから、何とか取り繕おうとしているのが、その狼狽しきった支離滅裂な発言でも理解できた。

芥子でもわかったのだから、狛治も気づいていただろう。

彼は優しく微笑み、ミニチュアピンシャーの頭を撫でて告げる。

「別に給料をより多く欲しいからだとか、どうせならトップを目指したいという動機を責める訳じゃないから、無理に取り繕うな。

向上心があるのは良いことだと言っただろう？ 動機に貴賤なんかない。特に他者を陥れるとかいった卑劣な手段ではなく、努力してその地位を得ようとしているのなら、動機は何であれ讃えるべきだ」

後輩の犬獄卒は狛治の言葉に、安堵した様子を見せる。

しかし、狛治の表情は優しい笑みのままだが、いつしか瞳には寂しげで悲しげな影があることに気付いたのか、また彼は戸惑う。

そんな戸惑いに気付きながらも、狛治は言葉を続けた。

自分が「理由」を問うた理由を語る。

「だからこそ動機を……、自分の目標や目的だけではなく、自分が選んだ手段の『理由』を決して忘れるな」

狛治は語る。

忘れたくて忘れた訳ではない。

無惨によって人間の記憶を、頭を潰された拳句に血を大量に摂取させられたことで失ったことはもちろん、その直前の凶行だって忘れてきて忘れたんじゃない。

思い出せなくなるほどの怒りと、絶望と、悲しみを叩きつけられたから。

けれど、それでも貊治は告げる。

忘れてはいけない、と。

「手段と目的が逆転して迷走し、最悪の事態に陥る原因のほとんどが、自分がどうしてその『目的』を目指したのか、何故その『手段』を選んだのか、その『理由』を見失い、忘れていくからだと俺は思う」

忘れてはいけない。

『おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸………』

一思いに殺らなかつたのは、当時の芥子に薬の知識と神の加護があつても、肉体そのものはひ弱な部類だつたから、単純に出来なかつた。

知恵を尽くすしかなかつた。手段など選べなかつた。選ぶ気もなかつた。

もしもあの時、無惨が目の前に現れて協力してやろうと言つたのなら、相手が地獄の鬼以上の悪鬼であると知つても、その手を取つたかもしれないぐらいに、存在そのものが許せなかつた。

「他者から凄いと思われたいという動機でもいいんだ。けれど、どうしてそう思われたかつたのかを忘れたらだめなんだ。

きつと、そう思われたい『理由』の根源は、幼い頃に親から褒められたとか、自分の努力を認められたからとか、そういう優しく、尊いもののはずだから」

忘れてなんかいない。

『おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸………』

一思いに殺れたとしても、きつとしなかった。

苦しんで苦しんで、自分のしたことの残虐非道さを思い知って、はじめに命乞いをして死んで欲しかった。

だから、火傷した背に塗ったのは致死性の毒ではなく、芥子味噌だった。

嗜虐心などない。痛みの絶叫も呻き苦しむ様も、心は満たされるどころか乾くばかりだった。

泥の船を作っている時なんて、虚しさで泣きたくなっただけだった。だが、それでもやめることなど出来なかった。

「……その根源である『理由』を忘れてしまい、ただ他者から認められたいという目的だけになれば、いつしか手段が正道から外れていくかもしれない。

だから……決して忘れるな。その『理由』を忘れてしまったことで犯した失敗で傷つくのは、その『理由』を与えてくれた大切な人と……、誰よりも正しく、尊かった過去の自分なのだから」

忘れられない。

『おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸……』

あの憎しみを。あの悲しみを。あの絶望を——
忘れられるわけがない。

『おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸おのれ狸……』

忘れない。

『おじいさん。こんなところに子ウサギが』

『おやまあ……。親とはぐれてしもたのかねえ……。』

あの温かさを

あの優しさを

あの愛しさを

忘れない。忘れたくない。忘れられるわけがない。

だから、だから芥子は――

『――お前なんか死んでたつて生きてたつてどうだつていいから、おばあさんを返してよ……。』

ようやく、思い出した。

* * *

「芥子」

後輩犬獄卒に、補佐官になるためのアドバイスというより、生き方そのものに対する深すぎる忠告を終え、シロと後輩が去っていくのを見届けてから、狛治は振り返って呼びかける。

どうやら彼は最初から、芥子に気付いていたようだ。

きっと、芥子が『理由』を思い出せないままにしていることにも、気付いていた。

芥子がいようがいるまいが、きつと狛治はあの犬獄卒と出会って同じことを訊かれたら、同じ事を語っていた。

だけど、他意がなかった訳ではない。

あの忠告は、昨日自分が芥子に問うた言葉の『理由』だった。

だから狛治は、余計なことは何も言わない。

「理由がわかったか？」も、「思い出せたか？」とも問わないし、芥子の「理由」を聞こうともしない。

ただ、昨日と同じように優しく微笑んで、彼は言う。

「早退するなら、俺が手続きをしておこうか？」

傍から聞けば、脈絡がなさすぎる申し出だ。

しかし、芥子はその言葉に零しそうな涙をこらえて、即座に答えた。

「——はい！ お願います!!」

言つて、芥子は背負っていた櫛も放り捨てて駆け出す。

自分が強くなりたかった「理由」の元へ。

あんな悲劇が二度と起きないように、強くなって守りたかった「理由」の元へ。

昨日、胸が痛み続けた「理由」の元へ。

大切な人と心穏やかに一緒に過ごすという、芥子が夢見て、そして忘れてしまっていた「理由」の元へ。

忘れられないからこそ、忘れていた。

何よりも大切な愛しい思い出からこそ、思い出せば酷く痛んで、その痛みに耐えきれなくて目を逸らしていた。

それがどんなに愚かでもつたいないことだったのかを思い知ったからこそ、芥子は駆け抜ける。

地獄を、地獄から天国に繋がる通路を、そして天国を駆け抜けて、会いに行った。

仇を討った後も会わずじまいだった、おじいさんとおばあさんの元まで、芥子は駆け抜ける。

ただ、会いたいから、大好きだから、逢いに行った。

「原因は、暴投しているお前のアガペーだ」

その日、新卒たちの賽の河原業務研修が行われた。

「本日は賽の河原の業務の研修です。」

現場での実技研修の前に、まずは皆さん『賽の河原』について、どれくらい知っていますか？」

今年入って来た新人獄卒を集め、まずは鬼灯が尋ねてみるとほとんどの者が自信満々に手を上げ、いつものように鬼灯に付き従っていた狛治が、適当な者を指名して答えさせた。

ちなみに手を上げていない正直者は、パツと見た限り茄子だけだった。

「はい！ 親より先に死んだ子供が、親不孝者の罪として石を積む子供の地獄であり、俺達獄卒の仕事は、その石を崩すことです！」

「はい。今は石積みではなくジエンガになっていること、そして獄卒の業務に子供の世話も含まれていますが、まあそれはいいでしょう。

……ところで、あなたは疑問に思いませんか？」

「え？ えっと……な、何がでしょうか？」

新卒の答えに鬼灯は淡々と補足しつつ肯定してから、訊き返す。

自信はあったが、それでもまだ間違っている可能性は考えていた。しかしその指摘よりも予想外の返しをされ、獄卒はしどろもどろになって聞き返すと、鬼灯ではなく先程の問いで手を上げなかった茄子がしれつと言った。

『親より先に死ぬ』ことがそこに落ちる条件なら、虐待とかで死んじゃった子もそこに落ちるのはおかしいってこと？」

「あー！」

茄子の言葉に、横にいた唐瓜が声を上げる。

「システムとしてそういうもの」と、テスト勉強のようにただ暗記していただけだから気付けなかった、根本的な「おかしな部分」に、新卒たちはようやく気付いたのだろう。あたりがざわついている。

そのざわつきを、狛治が手を2度ほど打って静かにさせ、鬼灯の代わりに話を続けた。

「茄子の言う通り、親より先に死ぬことは確かに最大の親不孝だろうが、病気や事故みたいには本人の努力で避けようがない原因はもちろん、ましてや親に殺された子供が『親不孝』はおかしい。」

そもそも、現代はともかく昔は子供なんて、『7つまでは神のうち』と言われる程に死にやすい環境だ。好きで死んだわけでもないのに、他の地獄と比べて遊びのような環境とはいえ、地獄に墮ちるのは刑罰じゃない。ただの理不尽だ。

なら、何で『賽の河原』という子供の地獄が存在するか、考えたことがある奴はいるか？」

今度の問いに、手を上げる者はいなかった。ほとんどの者が、恥じ入るように俯いている。

そんな彼らを一瞥してから、鬼灯が淡々と語る。

「別に責めてはいませんよ。学校で教えられるものでも、採用試験などでテストとして出しているものでもありませんし。」

賽の河原業務を希望している方で、知らないし考えたことがないというのなら問題ですが、そういう訳でもないのでしょうか？」

幸いながら、鬼灯は新卒たちの勉強不足を責める気はなかった。

賽の河原は不人気業務だということも、良く知っている。子供が嫌いや苦手な者はもちろん、罪人とは言えない、せいぜい腕白・おてんばレベルの子供に対し、彼らの努力を台無しにする役割なんて、グロ耐性持ちだからこそ罪人への肉体的な拷問より、自分の良心に刺さるこの業務の方が普通に嫌だ。

そんな獄卒たちの心理をわかっているからこそ、鬼灯も粕治も新卒の賽の河原研修前にこのような説明の時間を取っている。

なのでいつも通り、鬼灯は説明を続ける。

「まず最初にぶつちやけますと、現在どころか昔から、賽の河原行きになる条件として、『親より先に死んだ』はほぼ無関係です。それと、病死や本人に非がない事故、虐待や殺人などによる死因の場合はもちろん、賽の河原行きにはなりません。」

そういった死因なら、よほどの問題が本人にない限り普通に転生か、前世がギリギリ天国にいけなかったぐらいに徳を持っていたのなら、

ら、天国行きになるかもしれませんね。

現在、賽の河原にいる子供は、道路飛び出しによる事故死、食い過ぎなど食べ物のをどに詰まらせての窒息など、本人に非がある、親の言う事を聞かなかつたから起こった死因の子供か、死因に非はありませんが地獄行きになるほど本格的サイコパスではなく、けれど転生させるには生前がわがまま三昧だった問題児などですね。

ただこれも、親が早世したことで教育してくれる人がいなかった場合は情状酌量となり、結果的に賽の河原の子供たちは『親より先に死んだ子供』ばかりになるので、未だ世間一般では『親より先に死んだ子供が堕ちる』という勘違いが続いています」

ここまでの説明で、新卒たちはまさしく目から鱗と言わんばかりに、両目をまん丸くして深々と頷いている。

茄子も同じような顔をして、ちゃんと話を聞いている事を確認してから鬼灯は更に、「賽の河原」についての説明を続けた。

「だから、賽の河原は正確にいうと地獄とは違います。刑場ではないんです。

子供に行うのは罪への罰、呵責ではなく、早死にしたことで生きていく間に得られなかった、行われなかった、徳を積むための修業の場こそが、賽の河原となります。

なので賽の河原での業務は、通常的地獄での業務とは大きく異なります。

基本的に、子供を傷つけてはいけません。アホないたずらや悪ふざけ、舐めた口を叩いた時に躰としての鉄拳制裁はともかく、彼らに行う呵責は積み石……今はジェンガですが、それを崩すことのみです」
長い前提の知識としての講釈を終え、鬼灯は賽の河原の業務に関して一番注意しておくべきことの説明に入る。

「子供たちは修行として積み石(ジェンガ)を行っているので、石を崩されるのを防ごうとこちらに立ち向かって来ても、それは他の地獄の亡者と違って反乱と考えるべきではありません。

自分の努力を台無しにする理不尽への奮起と言えるので、そういう場合は暴力で解決するのではなく、大人として全力で暴力以外、知恵

を駆使してその反乱を制圧し、石を崩しなさい」

「鬼灯様。新卒たちのハードルを爆上げしないでやってください。」

とにかく、いつも通りの呵責でいいと思うな。ここにいるのは、幼さゆえの短慮さや無謀さで命を落とした子供だ。そんな形での親不孝は罪かもしれないが、お前達が普段している呵責をされるほどではない事くらいはわかるだろう？

その事を頭に入れて、決して忘れるな」

普段は「亡者に遠慮はするな。少しでも逆らったら即殺れ」を基本に教え込まれている獄卒達に、賽の河原はそうでないことを改めて伝えておくのは確かに重要だが、やっぱり鬼灯には厳しきしかなかった。

新卒には大分荷が重いことを命じ、狛治が突っ込みを入れつつ指示を訂正してハードルを下げてくれたので、新卒たちはホッと安堵の息を吐く。

「それでは、他に何か説明はありますか？」

「は〜い、鬼灯様」

とりあえずしなくてはならない説明は終わったので、締めくくりとして鬼灯が尋ねると、真っ先に手を上げたのは茄子だった。

そして彼は、鬼灯に発言許可が出される前に質問を口にした。

「あのでかくて白目むいてる坊さんみたいな人は、何で泣いてるんですか？」

「新卒のやる気に満ちたフレッシュな雰囲気感動してるんじゃないですか？」

「もしくは、怯えてる新卒を案じて泣いてるな」

茄子を咎めず、鬼灯は投げやりな即答をする。

そしてもう一つの可能性を狛治も口にしてから振り返り、新卒たちが話をちゃんと聞きたくても集中しきれなかったであろう元凶に言った。

「行冥。頼むから泣き止んでくれ。新卒が困惑して怯えている原因は、間違いなくお前だ」

他の新卒たちは知らないが、とりあえず茄子と唐瓜は泣いている不

審者としか思えない亡者の獄卒が鬼殺隊であることを確信した。

確信した理由は、今まで会って来た隊士たちと負けず劣らずの変人具合だからというのは、流石にどうよと思いながら。

* * *

「はじめまして。私はここ、賽の河原の獄卒で子供への呵責と世話を
行っている、悲鳴嶼 行冥です」

鬼灯たちの説明が終わり業務研修が始まると、新卒たちはそれぞれ
指示された業務を行うか、賽の河原の先輩獄卒に質問をしたり、指示
を仰いだりしているのだが、悲鳴嶼は明らかに新卒たちから避けられ
ていた。

避けられる理由は、まあ語るまでもなく説明中の奇行と言える、静
かな号泣だ。

「よろしくお願ひしまーす！　ところで、悲鳴嶼さんって鬼殺隊？
煉獄さんとか伊黒さんって知ってる？」

「いきなり仕事と無関係なことを訊くな馬鹿!!」
そんな避けられまくっている悲鳴嶼に、自分から寄って行ったのも
言うまでもなく、茄子と唐瓜だ。正確に言うと、積極的に寄って行っ
たのは茄子だけで、唐瓜は未だ若干引いている。

が、茄子と同じく唐瓜も悲鳴嶼が鬼殺隊であることをほぼ確信して
いる為、奇行に引きはしても怯えてはおらず、本心では茄子と同じ好
奇心と疑問を懐いていた為、彼は幼馴染を叱りつつも悲鳴嶼の答えに
期待した。

そんな唐瓜の期待にも気づいているように、そして自分を恐れずに
話しかけてくれたこと、自分を知りたいと思ってくれたことを喜ぶよ
うに、悲鳴嶼は微笑む。

同時にその喜びを落涙でも表現する為、唐瓜だけではなく茄子にも
また引かれたが。

「はい。煉獄や伊黒と同じく、私は鬼殺隊最後の世代の柱の一人、岩柱
を務めていました」

「おー、やっぱり柱だったのか」

「めちやくちや強そうでもんね」

「実際、その人は当時の柱最強で、歴代でも縁壺さんという規格外を除けば最強格の一人ですよ」

「そうですね。俺は未だに手合わせでほとんど勝てないし、鬼だった頃でも負けてたかもな」

悲鳴嶼の答えに二人が納得していると、鬼灯が補足を加えて、狛治もその言葉を肯定しながら、事実と自分の感想を笑いながら零し、聞いてた小鬼たちを驚愕させた。

人間に戻っている今現在の狛治ならまだしも、無惨の鬼だった頃でも勝率があったのなら、そりや文句なしに鬼殺隊最強格だろう。

縁壺に関しては忘れろ。彼を比較対象に入れると、基準や平均がバグる。

「悲鳴嶼さん、すげえ！ 岩属性とか筋肉モリモリの大男とか、かませの条件が揃ってるのに最強なんて……」

「失礼すぎる感心をするな!!」

茄子の正直すぎる感想に、唐瓜と狛治が同時に突っ込み、唐瓜に至っては後頭部に拳もぶち込んでおいた。

そしてそのまま幼馴染の頭を無理やり下げて、「すみませんすみません!!」と平謝り。

幸いながら悲鳴嶼は、創作物におけるかませキャラのテンプレを知らないのか、茄子の発言に不思議そうな顔をするだけで、まったく怒っていなかった。

「? 意味がよくわからないが、気にしないでいいですよ。」

それより、そろそろ研修を始めましょう」

「あ、その前に悲鳴嶼さん、一つだけ教えて下さーい」

小首を傾げながらも快く無礼千万な発言を許し、業務に取り掛かろうとした悲鳴嶼に、茄子は唐瓜の手が自分の頭から離れた瞬間に勢いよく顔を上げ、まったく懲りずに言い放った。

「悲鳴嶼さん、何で地獄の刑場じゃなくて賽の河原の獄卒なの?」

唐瓜が慌てて茄子の口を塞ごうとしたが、それより先に出てきた言

葉は幸いながら失礼発言ではなく普通の疑問だったので、唐瓜は安堵しつつ答えを待った。

彼も答えを聞く体勢に入ったのは、「当時の鬼殺隊最強」という鬼灯からの情報がなくとも、茄子だけではなく唐瓜にとっても普通に疑問だったから。

2 mを超える身長と、小鬼とはいえ決して貧弱ではない唐瓜たちのウエストくらいはありそうな腕の太さからして、力仕事、拷問という業務の方が、明らか悲鳴嶼には天職だ。

なのにジエンガ崩しと子供の世話という、そのフィジカルをほとんど生かせないどころか、初めに鬼灯たちが説明したように、問題児寄りではあるが決して悪人や罪人ではない、普通の子供に嫌われまくるという、ぶつちやけ不人気部署上位である賽の河原の獄卒であることを、疑問に持つのは当然だろう。

が、茄子のその質問に、鬼灯と狛治は「あ」と声を上げた。

明らかに、地雷を踏んだ者に対する「やっちゃったー」的な反応だった。

そんな上司二人の反応に、唐瓜だけではなく茄子も戸惑う。悲鳴嶼が答えず、沈黙という反応もまた、彼らの戸惑いと不安に拍車をかける。

そんな後輩たちと悲鳴嶼を思っただか、狛治が気まずげだが「行冥がここの獄卒なのは……」と説明を試みるが、沈黙していた悲鳴嶼が手で狛治を制するようにしてから、彼は自分で答えた。

「……贖罪……いえ、これは欺瞞ですね。私のしている事は、自己満足にすぎません。」

私は、子供が好きです。ですが、生前の私は子供に対して、あまりに酷い思い込みをしていたのです。

その罪を、十王たちは『罪ではない』と言ってくれましたが、私は自分自身を許すことが出来なかった。……だから私は、犯した罪と同じことをすること……、子供にとっての理不尽と不条理そのものになることで、彼らの業を雪ぎ、徳を積む手伝いをしています」

悲鳴嶼の答えは小鬼二人の疑問を深めるだけだったが、肝心の自分

で語ろうと決めたはずの悲鳴嶼は涙腺崩壊してしまい、彼を泣き止ませるのは狛治に任せ、鬼灯が「結局こうなったか」と言いたげな溜息を吐きつつ、また悲鳴嶼の奇行に引いている二人に説明した。

なお、狛治が悲鳴嶼に手ぬぐいを渡して「行冥！ お前は悪くない！」と説得すると、悲鳴嶼はその優しさに感激してまた泣いた。放っておいた方が良かったかも。

「はあ……。この人、生前は子供に対して疑い深いというか、人間不信気味な所があったんです。

その原因は、鬼殺隊に入るきっかけ。自分の寺で養っていた孤児たちが、無惨の鬼によって殺されたという事件です」

「え？ 何でそれで子供を信じられなくなるんですか？」

鬼灯の説明では因果関係が理解できなかつたので、率直に唐瓜が尋ね返すと、鬼灯は一度視線を地獄の刑場……大叫喚地獄の方へ向けてから、詳しく語ってくれた。

「養い子の一人が寺の金を盗み、その事を知った他の子供がその子供を寺から追い出しました。悲鳴嶼さんが知ったら悲しむと思いい、彼は黙ったまま。

そして追い出された子供は無惨の鬼と遭遇し、自分を見逃す代りに悲鳴嶼さんと寺の子供たちを差し出し、寺に侵入する手引きをした為、夜中に悲鳴嶼さん達は鬼に襲撃されました。

子供たちはパニックになりつつも、武器を取ってこようとしたり、助けを呼ぼうと行動に移しましたが、それはどれも叶わず鬼に食い殺されます。

悲劇的なのが、見ての通り悲鳴嶼さんは盲目で、普段は他の感覚で完全に視力を補って、下手したら目が見えている人よりも察しが良いくらいなんです。その時は彼も極限状態だったのに加え、鬼の侵入を手引きした者がいることを鬼自身が暴露した為、他の子供たちの行動の意図を読み違い、自分が頼りにならないと子供たちは判断したから、自分の指示を無視して、勝手に逃げようとしているように解釈してしまったのです。

トドメに、唯一生き残った最年少の少女は夜が明けて、助けに来た

者達に泣きじやくりながら、『あの人が皆を殺した』と証言したことで、悲鳴嶼さんが子供の惨殺犯だと勘違いで投獄されてしまい、これを機に子供がトラウマになってしまいました」

「……私は、沙代を信じてやれなかったのです」

もはや過去を思い出して泣いているのか、狛治の優しさに感涙しているのかわからなかった悲鳴嶼が、急に泣き止んで話に参戦して来た。

唐瓜と茄子はその唐突さに面食らうが、鬼灯や悲鳴嶼を宥めていた狛治は無反応。

これは彼らにとってはわかり切っていた反応だから。

泣くことも出来なくなるほど、彼にとっては自分を許すことができない罪そのものであることを、彼らは知っている。

「彼女の言う『あの人』は、鬼のことだった。

鬼を夜明けまで殴り潰し続けた私を恐れたのではなく、あの子は必死で私を庇ってくれた。私の無実を訴えてくれた。私が望んだ感謝をあの子はくれていたというのに……、私は気付けなかった。

私は沙代が私を恐れ、保身で、私を化け物呼ばわりして見捨てたと被害妄想し、恨んでいたのです。そのことを私は死ぬまで……死後の裁判時まで、気付くことが出来なかった……」

鬼に殺された子供達とは、自分が死んだことですぐに再会し、誤解を解いて和解することができた。

けれど沙代とは、沙代が生きてくれていたからこそ、彼女が死ぬまで悲鳴嶼は謝ることが出来なかった。

長生きしてほしかった。その願い通り、沙代は子や孫に恵まれて、長生きしてくれた。

だけどその分、彼女は苦しみ続けた。自分の足りなかった、拙かった言葉の所為で悲鳴嶼が投獄されたこと。そのことを謝ることが出来なかったという罪悪感を、背負い続けた生涯だった。

沙代は20年ほど前に天寿を全うした事で再会し、両者ともに号泣しながら謝罪し合って和解しているが、沙代が許してくれても悲鳴嶼自身が許せなかった。

自分が守った幼子に、自分を守ろうとしてくれた優しい子に、長年負う必要がない罪悪感で苦しめ続けたことは、今も許せない己の罪。

だからこそ、彼は鬼殺隊となる前のように子供を純粹に慈しみ、信じられるようになったからこそ、賽の河原という、あの世の中でも特殊な位置にある部署の獄卒になることを望んだ。

子供を慈しんでいるからこそ、彼にとってこの業務、子供の世話はともかく、ジエンガと言えど子供の努力を踏みにじることは、子供より自分自身に対する拷問。

狛治が十王から「無罪でよくない？」と思われていても呵責を望んだように、彼も優しく真つ当だからこそ、自身を痛めつけるようなことをしないと、それこそあの世でも生きて行けなくなるということ、もう語られるまでもなく唐瓜にも茄子にも理解できた。

だからこそ彼らは、悲鳴嶼のことを言えないぐらいにボロボロ涙を零し、必死に言葉を探す。

今更でも、少しでも悲鳴嶼の罪悪感が薄れるように。この優しい人が、自分を責めぬ方法を模索した。

「ひ、悲鳴嶼さんも、その沙代って子も悪くないですよ！ 間が悪かっただけで、誤解が解けたのならそれ以上、悲鳴嶼さんが自分を責め続ける方がきつと、その子は悲しみますよ！」

「そうだよ！ 悪いのは金盗んだあげくに鬼を手引きした奴だけなんだから、もう今からそいつを呵責しに行こうよ!!」

唐瓜が月並みだか精一杯の言葉をかけ、茄子がそれに同意して、話の中で鬼以外の戦犯をやり玉に挙げる。

これに関しては唐瓜も同意見だったが、悲鳴嶼は「気持ち嬉しいが、それはちよつと……」とやんわりだが茄子を止めた。

悲鳴嶼にとつては、金を盗まれても、惨劇の元凶と言っていい裏切り者であつても、その子も他の子供と同じく大切な養い子だったから、呵責を実行するのはもちろん、未だに責める気にはなれないのかと二人は思ったが、すぐに彼らは違和感に気付く。

止めた悲鳴嶼が、豪快に見えていないはずの目を逸らしている事がまず第一の違和感。

そしてその違和感に気付くと同時に、狛治と鬼灯も同じく豪快に自分たちから目を逸らして明後日の方向を見ているにも気づく。

さらに言うとき悲鳴嶼と狛治は気まずげな、何とも言えない表情をしており、鬼灯はいつも通りの無表情だが、彼は目を逸らしているというより、顔ごと別方向を向いてどこか遠くを眺めていた。

っていうか、目を逸らしている二人も視線を向けている方角は、鬼灯と同じである。

小鬼たちもポカンとしながらそちらに視線を向けると、鬼灯はやはり明後日の方向……大叫喚地獄の吼々処くくしょの方角を眺めながら言った。「参加したければ、あとでご自由にどうぞ。」

たぶん今日も元気に、桑島さんがしばき回してますから」

「いんのか！ あつちに！ っっていうか、桑島さんって誰!？」

やらかしたことからして、茄子が言うまでもなく墮獄しててもおかしくなかったが、何故か初耳な人に呵責されている事も告げられて唐瓜が反射で突っ込むと、鬼灯はやはり無表情でしれっと答えた。

「善逸さんの育手……雷の呼吸の師匠の方です。善逸さんの兄弟子なんですよ、悲鳴嶼さんの悲劇の元凶の阿呆は。」

ちなみに墮獄の理由は悲鳴嶼さんの件だけじゃなくて、他にも色々ありますが、最大の罪状は鬼殺隊を裏切って無惨の鬼になったことですな」

鬼灯の情報量が多すぎる返答に、唐瓜も茄子も困惑していたが、やはり吼々処の方をチベットスナギツネみたいな目で眺めていた二人が呟いた言葉で、二人はもう深く考えることをやめることにした。

「……確かつい最近、桑島殿は櫛様に尻たたきのコツを伝授してもらったらしいから、獺岳の尻が心配だ。いい加減、素直になって私はともかく我妻隊士に謝るのが、呵責を終わらせる一番の早道だとそろそろ気付いたらいいのだが……」

「……残念だが、まだ無理そうだな。……櫛さん直伝の尻たたきももう諦めて、それよりも天元が悪ノリして渡していた太鼓のぼちが有効活用されていないことを祈ろう」

狛治の祈りに思わず小鬼たちの目もチベスナ化したのは、言うまで

もない。

* * *

「はい。獺岳さんの尻がフルコンボで腫れ上がるのはもう決定事項ですから、心配せずにそろそろ仕事をしましょう」

どこか遙か遠くにやっていた4人の精神を、鬼灯が身も蓋も獺岳に対する一分の情けもなさすぎる発言で戻して来て、仕事するように軽く叱責する。

正論だが、獺岳に心配はしてやれ。なんで諦める方向で「心配せず」と言ってるんだ、この鬼は。

そんな事を4人も思っていたが、実際に今更心配しても手遅れであろうことは、桑島とも獺岳とも面識ゼロの小鬼たちすら想像がついていたので、改めて二人は悲鳴嶼に「よろしくお願いします」と頭を下げた。

「そうですね。それでは……もう他の方々はそれぞれ、ジエンガ崩しなどの業務についているようですから、私たちはサボっている子供がいないか辺りを見回しましょう」

悲鳴嶼も小鬼たちの言動で何とか気を取り直したのか、穏やかに笑って指示を出す。

そんな3人に、「では、私たちもご一緒しましょう」と鬼灯は言い出し、狛治も返事をしてついてゆく。

結局一緒に行動するのは、普通に鬼灯たちも業務として、子供ではなく獄卒達の様子を見回る必要があったからはもちろんなのだが、たぶん色んな意味でこの三人が心配だったのも多大にある。

「そういや、悲鳴嶼さんって性格的にも、真実知ったことで新たに生まれたトラウマ的にも、ここの業務って出来てるの?」

そんな鬼灯と狛治の心配要素その1である茄子は、相変わらず人が言いにくい、聞きにくいことも躊躇わずズバツと口にする。

実年齢はおそらく茄子たちの方が上とはいえ、獄卒としてはかなりの先輩であり、現在進行形で指導してくれている悲鳴嶼に対して、「仕事は出来るのか?」なんて無礼極まりない発言だが、これは正直言つて唐瓜も狛治も責められなかった。

だって現に悲鳴嶼は、他の先輩の指導の元で新卒にジエンガを崩された子供を見て、ボロ泣きしている。

「見ての通り、出来てるけど出来てませんよ」

心配要素その2のいつも通りな奇行を一瞥してから、鬼灯は矛盾したことを言い出す。

しかし彼も言っている通り、悲鳴嶼を見ればその発言は矛盾しないことが一目瞭然だ。

どう見ても子供は、自分の努力を台無しにした鬼よりも、なんかいきなり泣き出した悲鳴嶼に怯えている。

ジエンガを崩された直後は、子供らしく痲癢を起してジエンガを崩した獄卒に向かい、悪態について崩されたジエンガを投げつけようとしていたが、悲鳴嶼に気付いた瞬間、「ひゅっ!？」と息を呑んで、そのまま青い顔色でジエンガを拾い集め、大人しく積み上げ始めた。

「正直、私も皆さんと同じように、体格や戦闘能力的にも刑場の獄卒が向いていると思い、そっちにこの人が欲しかった。性格的にも、いくら贖罪とはいえ子供に理不尽なことができるとは思えなかったのです。

……ですが、何かただそこにいるだけで子供がビビりまくる逸材だったので、今では必要不可欠な人材です」

泣きつつも子供を宥めようとしていた悲鳴嶼は、さっきまで悪態をついていた獄卒の方にしがみついて、「なにあれ！ 怖い!!」と泣きつく子供にショックを受けているのは、その哀愁漂う広すぎる背中で一目瞭然だ。

それでも悲鳴嶼はやはり子供だけではなく、善良な者、真面目な者も心から慈しんでいるから、ものすごく気まずそうな新卒に「……とても崩し甲斐のある出来でしたなど、フォローを入れてやりなさい」と、子供を思っていることはかろうじてわかるが、それ以外が割と意味不なアドバイスを送っていた。

子供をビビらすだけではなく、本気で誰も意図せずに他の獄卒と悲鳴嶼とで飴と鞭みたいになって、悲鳴嶼一人が子供たちのヘイトタンクになり、他の獄卒があまり子供の不満を向けられないという、賽の河原の平和の大きな要因になっているのは、悲鳴嶼としても本望なの

かもしれないが、かわいそうすぎる。

ただ幸いなことに、悲鳴嶼は生前と同じく同僚に恵まれていた。自分たちにとって嫌な部分を悲鳴嶼に全部押し付けるのではなく、少しでも彼が贖罪ではなく、ただ心穏やかにしたいことができるようにと思つて、研修生を指導していた獄卒は苦笑いしながら伝える。

「あー……悲鳴嶼さん。さっき、向こうで救世主を見かけたから、そつちを頼むわ。たぶん、またあいつサボってるから」

「！ わかりました。今すぐに向かいます」

「救世主？」

獄卒の言葉に、悲鳴嶼はしょんぼりした空気が消え、わずかではあるが嬉しげな空気を纏うのは良いが、小鬼たちは唐突かつ意味不明すぎる単語をオウム返ししながら、首を傾げる。

狛治の苦笑いは、わかりやすい悲鳴嶼に対してか。それとも小鬼たちの当然の疑問に対してか。

どちらにせよ、とりあえず彼は懐いて当然の疑問に答えておいた。

「あだ名だ。つい最近、賽の河原にきたらしい子供のな。本名が木村……瑪紫愛メシアなんだよ」

二人の疑問は氷解したと同時に、「ああ……」と何とも言えない声が出た。

その声音に含まれた感情は同情なのか、「最近の若いもんは……」的な感情なのか、それとも自分の黒歴史的な何かが疼いて共感性羞恥を発症しているのか、それは本人たちにもよくわからない。

「はい。食べ過ぎによる不幸な事故で亡くなつた子供で、根は良い子供ですがかなりの腕白で、反骨心がとても強い子です。

私のことを他の子同様に恐れています、けれどいつも勇氣を持つて立ち向かう子なので……、問題児と言えば問題児ですが、環境や周囲がまともであればちゃんとその問題は修正され、頼りがいのある良き大人になると確信できる……そんな元気な子です」

唐瓜と茄子だけではなく、狛治と何なら鬼灯も懐くアレな名前に対しての感情に気付かず、悲鳴嶼は言われた方向へ向かいながら、瑪紫愛という子供について語つた。

同僚がフォローのようにその子供を任せたのも、悲鳴嶼が何だか少し嬉しそうなのも、その説明でわかったので、唐瓜は狛治と同じようにちよつと微笑ましげな苦笑を浮かべた。

贖罪の為だけではなく、本音で言えばただただ子供と関わりたいからこそ、賽の河原の獄卒に悲鳴嶼はなったのだらう。

それぐらい子供が好きだから、恐れられていても立ち向かうという形でも、自分に関わってくれる瑪紫愛を悲鳴嶼は好ましく思っているのが、誰から見ても明らかだった。

しかしその好意は自身の一方通行であることを本人がちゃんと理解できている為、悲鳴嶼は歩きながらまたちよつとしょんぼりしだして、そのことを悩みだと言って語りだした。

「私にとつてはとても好ましい子ですが……、私は瑪紫愛にとっても嫌われてしまして……。」

自由時間になれば私に話しかけてくれたり、遊んで欲しいと言ってくれる子供もいるのですが、瑪紫愛は自由時間こそ私を倒す時間だと思っているのか、最近では他の子供達なども味方につけて『れじすたんす』？ というものを結成し、他の獄卒の皆さんにも攻撃的な所が最大の悩みです」

どうやらジエンガ崩し中の奇行が、やたらと引かれて怯えられている悲鳴嶼だが、子供全員から四六時中避けられまくっている訳ではないことに、小鬼コンビはちよつとホツとする。

そして初めからそこらへんは知っている鬼灯と狛治はスルーして、悲鳴嶼の軽い愚痴兼悩み事に関しての答えた。

「多分それも一種の甘えだらう。試し行為という奴だから、悩み過ぎずやりすぎなら叱ってやれ」

「そうですね。なんなら、このリーサルウェポンをお貸ししましょうか?。」

「鬼灯様、その注射しまってください」

いきなり対子供への最終兵器を鬼灯は取り出して、悲鳴嶼に押し付けようとしたので、狛治が鮮やか即座に却下して仕舞わせた。

その事に感謝しつつ、けれど狛治のアドバイスを素直に受け取るこ

とが悲鳴嶼にはできなかつた。

「いえ、甘えというより本気で彼は私が気に食わないようです。

まあ、仕方ないでしょう。彼は名前からして、おそらくは仏教ではなくキリスト基督教を信仰しているのでしょうか」

『……ん？』

悲鳴嶼の言葉に、狛治だけではなく唐瓜と茄子、そして鬼灯も困惑の声を上げる。

「どうやら、悲鳴嶼は瑪紫愛の名前をそのまま受け取りすぎて、彼が自分を毛嫌いするのは信仰する宗教が違うからだと思っっているようだ。」

その事を4人は理解し、悲鳴嶼に「由来や将来のことを考えず、ペツト感覚で子供に名前を付ける親」の存在を教えるのもいいのだろうか？

と悩むのだが、悲鳴嶼は大真面目に瑪紫愛のことを考えて、尊重しているからこそさらに悩んでまた泣き出したため、彼らの困惑や迷いに気付かず、そのままなんかズレた答えを出して鬼灯に頼み込む。

「鬼灯殿……基督教の聖人や天使を、賽の河原に招くことは出来るだろうか？」

私なりに基督教について調べ、瑪紫愛の名前の由来は素晴らしいこと、ここは日本だから神や仏の世界だが、いつかきつと瑪紫愛が信仰する神にも会えることを伝えていたのだが、やはり仏教徒の私では説得力がないのか、いつも『訳のわからないこと言うな！ 名前を連呼するな！』と怒られてしまうので、いつかはあの子の信仰に関わる者と会わせてやりたいのですが……」

「そりゃ怒りますよ。っていうか、全力で怒らせにかかっていますよ」「行冥、それだ。嫌われている原因は、宗教の違いじゃない。宗教は欠片も関係ない。原因は、暴投しているお前のアガペーだ」

悲鳴嶼の悩みと、彼なりに努力して起こした行動を語れば、鬼灯は呆れきった顔で突っ込み、狛治は瑪紫愛に同情しているような目で指摘する。

「どう考えても、嫌われている理由は彼のコンプレックスであろう名前を常日頃連呼して、明後日の方向のフォローでまた更に瑪紫愛の名

前コンプレックスを刺激しまくっているからだろう。

* * *

狛治がかなりの確に突っ込みを入れてくれたのだが、悲鳴嶼は信仰に篤い僧であったことに加え、子供の将来も常に思いやっている善人だからこそ、将来的に苦労しか掛けないであろう名前を軽い気持ちでつける親の存在が心から想像できず、だからこそ狛治の突っ込みにも鬼灯の納得にも小鬼たちの呆れも理解できず、首を傾げた。

そして悲鳴嶼がそんな浅薄な親の存在を知ったら、また子供を憐れんで号泣するのがもう本日初対面の唐瓜たちでもわかっていたので、4人は理解させることを諦めた所で、茄子が急に「あ！」と声を上げた。

「どうしたんだよ、なす……あ!?!」

幼馴染の声に唐瓜が真っ先に反応して尋ねるが、彼も茄子の視線の先に目をやって気付く。

同時に鬼灯と狛治、そして盲目の悲鳴嶼さえ気づいた。

「!?! 瑪紫愛!?! 何をしている!?!」

子供を少しでも怯えさせない為か、口調も声も穏やかだった悲鳴嶼が怒鳴るように叫ぶ。

その叫びに、歳のわりにながしりした体格の子供が振り返り、子供らしくぷくぷくした顔を不満そうに歪ませて、「げっ! 泣きマツチョ!」と端的なあだ名で悲鳴嶼を嫌がった。

それだけなら、サボリを見つけただけのようで、彼ら以外の者からしたら微笑ましいだけなのだが、子供……瑪紫愛のいる場所が全然微笑ましくない。

瑪紫愛がいたのは、賽の河原……三途の川の石の上。

河原から自分くらいの子供なら乗れる石、岩の上を飛び乗り続けたのだろう。瑪紫愛は川の半ばとまではいかないが、1/3くらいは進んでしまっている。

川の向こう岸は此岸ではなくまだ彼岸の領域だが、それでもこちら側より格段に生者の世界に近い。

だからこそ境界線たるこの川の流れは、奪衣婆たちがいる所よりは

穏やかだが、それでも十分に激流と言っている。

そんな川の中、不安定な足場の上に立つ子供を心から案じ、思うからこそ狛治も同じように声を荒げて叫ぶ。

「戻ってこい、瑪紫愛！　そこは子供が泳げるような川じゃない!!」
「降りれなくなったアホ猫のような状況だと素直に認めるなら、私の投げ縄で助けてやりますよ」

「鬼灯様！　その縄仕舞って仕舞って!」
「なにそのカウボーイみたいな縄！　たぶんそれじゃ首締まる！　助けてない！　絞首刑になるよそれ!!」

狛治に続いて鬼灯が冷静に、脱獄したり暴れたりする亡者の捕獲用としていつも持ち歩いている縄を取り出し、投げる準備をするのは良いが、唐瓜に全力で止められた。唐瓜は悪くない。むしろグツジョブ。

何故なら茄子の突っ込み通り、鬼灯の振りかぶっている縄は先端が輪になっており、持っている人物からしてめちゃくちゃ不穩。絶対に「これに捕まりなさい」という意味でこの鬼は投げない。首に輪をひっかけて、そのまま力づくで戻す気しかない。

瑪紫愛も鬼灯の縄にギョツとしたが、悲鳴嶼に足をガクガク震わせつつも反抗し続ける根性がある彼は、距離が離れているのもあって強気に言い返す。

「いらねーし、戻ってたまるか！　こ、こんな川、大したことねーし！　それに俺は、ちゃんとキューメードーイつけてるから、落ちたって泳いで向こう側まで行って、絶対に生き返ってやる!」

「……あれ、救命胴衣のつもりだったのか」
「ど、努力は認めるがそれは取れ！　つけてる方が溺れた時ヤバイ!!　空気は一瞬で抜けて、逆に水を含んでそのまま流されるから!!」

「!?　瑪紫愛はいつたい今、どんな格好なんだ!?!」

鬼灯たちの説得や叱責を悪態で返すと、鬼灯が呆れと感心半々な言葉を呟き、狛治も同じような感情を懐きながらも健気に説得を続け、透明な世界でも見えないというか透明だからこそ見えない瑪紫愛の格好に、悲鳴嶼は盛大に困惑して尋ねる。

その困惑に、唐瓜と茄子もやっぱり補佐官たちと同じような顔をして答えた。

「……なんか、お菓子とかの袋を腕やら足やらにつけてます」「供養かなんかでもらった奴なのかな？ ポテチ食いたくなつてきた」

二人の言葉で想像がついたのか、悲鳴嶼も心配から困り果てた顔になる。

茄子の発言はほぼ彼の感想と願望だが、気持ちはわかるほどに瑪紫愛は供養などで供えてもらい、お地藏様派遣時にもらったであろうお菓子の袋などを使って、手足に膨らませた袋を括り付けて、彼なりの救命胴衣的なものを作って身に着けていた。

しかし当然ながら、所詮は幼稚園児か小学校低学年くらいの子が作ったもの。

そもそも胴衣になってないし、ポテチの袋なので耐水性は期待できるが、ちゃんとした密閉などもろろん出来てないので、水に落ちたらまず間違いなく、空気は即抜けて逆に水を溜めて体を沈めた挙句に、川の流れの勢いに引かれてそのまま抵抗できずに流される要因になる。

そこまではわかっていなくとも、瑪紫愛の体についている袋の半数以上が既に、ほぼ空気が抜けている状態なので、浮力に期待できない事くらいは幼子でも実はわかっているのだろう。

しかし彼は、悔し気に顔を歪めて「うるせー！ バーカ!!」と言いながら背を向け、そのまま水面からかすかに覗いている岩の上に飛び乗ろうと足を踏み出した。

「!! 瑪紫愛っ!!」

同時に、悲鳴嶼は何の躊躇もなく川に飛び込んだ。

彼には見えていた。視力がなくとも、黒死牟との死闘で見出した「透明な世界」でわかっていった。

瑪紫愛が岩へ飛び移る事が出来ず、川に落ちることを。

その事を理解した瞬間から、悲鳴嶼の頭に論理的な思考など存在しない。

ただ、助けたかった。

ここがあの世で、川から引き上げさえすれば蘇生が可能だなんて忘れていたし、覚えていたからとて悲鳴嶼が川に飛び込むのを躊躇する理由になどなりはしない。

悲鳴嶼自身が、死後はもちろん生前も滝行は行っていたが、盲目いうのもあり本格的な水泳経験がないことだって、関係ない。

「！ がぼっ！… ごべっ!!」

「めしっ！… ぶはっ！… めしああああっ!!」

飛距離が足りず、川の中に落ちて貊治達の懸念通り、手作り救命胴衣が最悪の働きを見せて、瑪紫愛はほとんど顔も水面から出せない。

そんな彼の元まで、悲鳴嶼は現代でも日本人離れしている巨軀を生かして水中を進むが、この川が此岸と彼岸の境界たりうるのは流れの激しさだけではなく、深さも大きな一因。

河原から2mも進めば、もう悲鳴嶼でも頭まで沈みきる深さがある為、激流も相まって水底に踏ん張って歩くより泳ぐ方が安全なので、悲鳴嶼はがむしやりに手足を動かし、自分の視力以外の感覚器官全てを総動員して、瑪紫愛の元へ向かう。

…：水泳経験がない悲鳴嶼には、クロールどころかバタ足すらよくわからない。

なのでなるべく、呼吸ができるように顔を水から出しておきたかったのだろう。顔を出している状態で手足を派手に動かしたら水しぶきも激しくなって、顔を出している意味があまりないことも本能レベルの無意識で判断したのかもしれない。

「めしああああっ!!… いまっ！… がはっ！… 今、助けるぞ!!」

「ぼべっ！… な、なぎまつ…：だすげ…：!?!?… ぼぎやああああっ!!」

結果、激流の中を爆速の犬かきでやって来る強面巨軀の男が誕生した。

素直に助けを求めた瑪紫愛が、恐怖のあまりいきなり水泳スキルが覚醒して泳いで逃げたのは無理もないくらい妖怪ぶりであった。

「…：これ、どこか他の地獄の呵責に使えませんか?」

「それは後で考えることにして、鬼灯様は行冥を捕獲してください！」

俺は瑪紫愛を捕まえますから!!」

悲鳴嶼の犬かきにポカンと呆気を取られていた鬼灯一行が、鬼灯の独り言で我に返り、狛治は上司に遠慮なく指示を飛ばして彼も川の中に飛び込み、無事に瑪紫愛とアガペーが暴走していた妖怪犬かき泣きマツチヨ（命名：瑪紫愛）は捕獲されたという。

* * *

「申し訳ない、鬼灯殿……。泳ぎ方もろくに知らないくせに、勢いだけで飛び込んで迷惑をかけて……」

「それはもうどうでもいいので、今度別の罪人に同じような感じで追いかけてくれませんか？」

「鬼灯様、それだと行冥は毒やマグマの中を泳がなくてはならないので諦めてください」

瑪紫愛が保護された事で落ち着いた悲鳴嶼が、河原で正座して鬼灯に自分の暴走を謝罪するが、鬼灯はびしょぬれのまま真剣に先ほどの妖怪ぶりを拷問に使うと検討していたので、狛治が瑪紫愛を小鬼たちに任せて上司の無茶ぶりを止める。

ここならまだしも、刑場の水辺と言えるところは獄卒に泳がせる訳にはいかない水質であることを失念していた鬼灯は、悔し気に舌打ちしてから振り返る。

唐瓜に全身を拭いてもらい、茄子が背中を叩いて飲んだ水を吐き出させている瑪紫愛を、鬼灯は睨み付けて言った。

「そういえばそうですね。まあ、その件は諦めるとして……。さて、こちらはどうしますか。子供とはいえ、これは脱獄に等しい行為ですから、拳骨で終わらせてはぬるいですね」

鬼灯の言葉というか怒りのオーラに、瑪紫愛の肩が大きく跳ね上がる。

彼の「救命胴衣」発言と全身につけていたもののインパクトでスルーしていたが、瑪紫愛は自分で「川の向こう側に渡って生き返る」という趣旨の発言も同時にしていた。

なのであれはただの好奇心や遊びではなく、明確に逃げ出そうという意思を持つての行動だった為、いくら賽の河原が正確には子供の地

獄ではないとはいえ、ここは懸衣翁がいる地点に近い。

つまりは第二裁判所に向かう亡者も見ている可能性が高いので、このまま説教程度で終わらせたら、周りの子供はもちろん、地獄落ち候補な亡者に対しても示しが見つからない。

鬼灯本人は別にさほど怒ってない、むしろ瑪紫愛の行動力や発想力を評価しているくらいだが、責任者として、大人として、厳しめに叱ろうとリーサルウェポンを取り出すのだが、それを瑪紫愛の尻にぶつ刺す前に、自分の背後で正座していたはずの悲鳴嶼が瑪紫愛を庇うように回り込んできた。

「鬼灯殿……。瑪紫愛を叱るのは当然だが、話も聞かずに叱責はやめて欲しい。

この子は確かに、どのような理由があろうともしてはいけないことをした。けれど……。それは理由を、この子の話を聞かなくていい理由にはなり得ない。

お願いします。話を……。どうか話だけは必ず、聞いてやって欲しいのです。ただ叱るだけでは、不満を懐いて余計に反抗的になり、同じ事を何度も繰り返すかもしれない。理由を知れば、もう同じことを繰り返さないように、私達の方で何か対策が取れるかもしれない。

……。『話を聞いてくれた』という事実だけで、人は救われることもあるのです。

だからどうか——、話を聞いてやってください」

鬼灯より上背のある悲鳴嶼が、深く深く腰を折って頭を下げ、頼み込んだ。

これも自己満足だと、心中で自嘲しながら。自分の話を聞いてほしかった訳ではない。

悲鳴嶼自身は、最終的とはいえお館様に話を聞いてもらえたので、当時の警察に冤罪で逮捕されたのは、仕方がないことだと受け入れている。

話を聞いてもらっても、信じてもらえるような内容ではないことをわかってから、お館様に出会えただけでも最大の幸運だと思っている。

話を聞いてほしいのではなく、自分が聞いてやりたかった、聞くべきだった。

悲鳴嶼の懇願は、自分が出来なかったことの後悔を鬼灯に押し付けているだけだ。

泣きじゃくる沙代の話を、ちゃんと聞きたかった。聞くべきだった。

これは自分のことと違って、「そんなことができる状況じゃなかった」とは思えない。警察に抵抗しても、沙代に落ち着くように宥めて、話を聞いてやるべきだったとしか思えない。

話を聞いてさえいければ、警察は信じなくとも、今度はお館様に出会えず、死罪になったとしても、自分は救われた。

そして沙代にも、笑って「ありがとう」と言えた。彼女に謝る必要などない、罪悪感など背負わなくていい、幸せでいて欲しいと伝えられなかった後悔は、彼女が転生した今でも失えない。

そして……獺岳の話も、聞きたかった。

何故、金を盗んだのか。その訳自体は、今も昔もどうでもいい。

ただ、獺岳のしたことを「悪事」で終わらせず、どうしてそんなことをしたのか、どうすればそんなことをせずに済んだのかを一緒に考え、そして獺岳一人が悪いのではなく、私刑を行った子供達のことも叱っていれば……、例え獺岳が至る結末が同じ「鬼殺隊を裏切つて鬼になる」ものであっても、最期どころか今でも「自分は誰にも評価されていない」なんて、あまりに見当はずれで寂しい思い込みをし続けることはなかったかもしれない。

そんな後悔が耐えず胸の奥で疼き続けているから、悲鳴嶼は頼み込む。

瑪紫愛の話を、何故あんなことをしてまで生き返りたかったのかを、聞いてほしいと懇願した。

その懇願を、鬼灯はぼつさり切り捨てる。

「それはあなたの仕事でしょう」

優しさなど皆無の端的な即答。

悲鳴嶼の後悔はもちろん、本当に彼がしたいことも理解しきつてい

る言葉だった。

だから悲鳴嶼は、きよとんとした顔を上げてから苦笑い、「そうですな」と頷いて振り返る。

自分の背後で、俯いたまま黙り込む瑪紫愛に向かい合って、その場に座り込んで尋ねた。

「……瑪紫愛。どうして、あんなことをしたんですか？」

瑪紫愛はうつむいたまま、答えない。黙り込んで、自分の体にまだ残っていたポテチの袋を握りしめた。

実は、鬼灯や狛治だけではなく小鬼たちも瑪紫愛が生き返りたがった理由を察している。

彼が救命胴衣として使用していたお菓子の袋。

当初はそんなものを何故、彼が持っていたのかが謎だった。賽の河原の獄卒達が、そんなものを瑪紫愛が保管している事に気付かなかったのか？ と疑問に思っていたが、川から保護した瑪紫愛が身に着けていた袋を少しよく見てみたら、その訳は一目瞭然だった。

そのすぐにわかる答えは、悲鳴嶼には見えない。

だけど、透明な世界がなくても特に支障なく生きて行けた悲鳴嶼の感覚が知らせる。

瑪紫愛が、転生ではなく「瑪紫愛」のまま生き返りたかった訳を、その耳が悲痛な願いを奏でる鼓動で悟る。

「……家族に、会いたかったですか？」

「！」

悲鳴嶼の言葉に、また瑪紫愛は肩を大きく跳ね上げた。

そしてそのまま、ぶるぶる小刻みに震え出す。

喉の奥から我慢しきれず嗚咽が零れ、溺れた所為で出ていた生理的なものとは違う涙や鼻水が溢れ出す。

握りしめる。ポテチの、お菓子の袋を。

ただ食べて終わらせなかった。ずっと持っていた、獄卒もそれを許したものを。

——「おにいちちゃんへ」とあまりにつたない字で書かれた、自分に向けられた菓子袋を握りしめたまま瑪紫愛は泣きじやくって叫んだ。

「……うう……うあああああああつっ！ いきがえりだい！
あいだいんだよ！

いぎがっであいだい！！ かーちゃんにもどーちゃんにも！ ジャ
ステイズにあいだいんだよおおおおおつっ！！」

号泣しながら瑪紫愛は、幼いあまりにも切実で純粋な願いを口に
する。

なお、瑪紫愛と悲鳴嶼以外の皆が弟の名前、「蛇^{ジャステイズ}帝寿」を即座に意
識の外に放り投げた。木村家のセンスと思い切りの良さは、このシリ
アスのノイズでしかないので全力でなかったことにする。

「瑪紫愛……」

初めからそのあたりを良くも悪くもまったく気にしてない悲鳴嶼
は、シリアスを続行させたまま悲しげな顔をして、けれど決して涙は
見せずに告げる。

「……そう願うのは、当然です。ですが……瑪紫愛。死者は決して、蘇
りはしません。したとしたら、それは初めからまだ死ぬ運命ではな
かった者です。」

「……特にあなたは、……親の言う事を聞かず、……だからこそ
死んだ。……だから、……どんなに願っても、……反省していても
……、あなたが生き返るといふことは……ないのです。」

「……あなたの死は……自業自得として……終わってしまった事な
んです」

何度も何度も言葉を詰まらせながら、それでも悲鳴嶼はあまりに残
酷な、けれど正しい言葉を告げる。

そして瑪紫愛は、幼いが決してバカではない。むしろバカなことを
懲りずに何度も繰り返すが、そのバカなことのクオリティは向上させ
るといふ、割と学習能力そのものはあるタイプだ。

何より、言われるまでもなく自分でもわかっていた。

自分の食い意地が張っていた所為で、弟に分けてやろうなんて考え
ず、独り占めしようと焦って食べ過ぎた所為で喉に詰まらせて死んだ
なんてバカすぎる死は、全部全部自分一人がただ悪いことを知ってい
た。

その事を後悔しているからこそ、会いたかった。

会いたくて会いたくて仕方がなかったけれど、そんな資格はないことなんて、本当は自分が一番わかっている。

だからもう瑪紫愛は声も出さず、出すことができないまま涙を零し続ける。

「だから……瑪紫愛。……あなたは早く、転生しなさい」

見開いた眼が絶望に染まった子供に、悲鳴嶼は絞り出すような声で、自分も泣きたいのを堪えて笑い、告げる。

「あなたは……残念ながら『瑪紫愛』として生き返ることはできない。

けれど、あなたは決して幸せになつてはいけない訳ではない。……家族に会いたいと願うことは、罪ではないのです。……幸せに、なつてもいい。なるべきです。

だから……、ここで修業を積んで業を雪ぎ、転生すればきつと……あなたは弟にもう一度出会えるはずだ。

今度は瑪紫愛が弟だろう。同じ両親の元に生まれることは出来ないかもしれない。けれど……あなたが早くに転生すれば、弟との歳の差はあまり大きくないのなら……出会って関わる可能性が高くなる。……友達になれるかもしれない」

それは、あまりに苦し紛れの希望。

転生は完全にランダムなので、同じ親の元に生まれる可能性はかなり低いし、幼い頃に出会って友達になれるようなご近所さんや、親の友人などと言った関係の所に生まれる可能性も似たようなものだ。

第一、仮に同じ親の元に生まれても前世である「瑪紫愛」の記憶はなくしているので、そこに救いがあると云えるのかどうかも怪しい。上辺だけの慰めのような希望に過ぎない。

それでも……

「……おれ……てんせー……できるの?」

悲鳴嶼を見上げ、瑪紫愛はたどどしく尋ねる。

転生という未来を、まるで想像できていなかったような言葉。

きつと彼は、自分が反抗的な問題児であるという自覚はあったのだろうか。

だからこそ、「転生」という未来がいつか訪れるとは思えず、故に子供達で「レジスタンス」を結成して更に獄卒に反抗し、お地蔵様に転生を要求すると言った悪循環に陥っていたのかもしれない。

どこまでも子供の浅はかさで、事態を悪化させている。

それは生前、悲鳴嶼が絶望して子供を信じられなくなった要因だが、今ではその浅はかさも愛おしい。

その根幹はただただ純粋な、「家族に会いたい」という願いであることを知っているから。

だから、悲鳴嶼の言葉は全て本気。

上っ面だけなんかじゃない。絶対にそうなると信じている、瑪紫愛の「罪」が償われた先にあるのは、彼の幸福であることを疑わないから。

悲鳴嶼は大きな手で瑪紫愛の頭を撫で、笑って告げた。

「出来ませよ。」

瑪紫愛は強い者に立ち向かう勇気を持ち、弱い者いじめは決してしない優しい子ですから、……少しわがままな所さえ直せばすぐに、転生できますよ」

悲鳴嶼の言葉に、瑪紫愛はむすつと頬を膨らませて「悪かったな！

っ！か、名前呼ぶなって言ってるんだろ！」といったもの悪態をついて、悲鳴嶼の手を振り払う。

拗ねながら、それでも笑っていたのを悲鳴嶼は感じ取っていたから、彼も笑ってまた泣いた。

「さて。それでは話が終わった所で、さっそくお仕置きの時間です」

「鬼灯様！ もうちよつと間を開けてやってください！ あと、その注射の中身何ですか!？」

そして鬼灯が待ってましたとばかりにリーサルウェポンを携えて登場したので、瑪紫愛は悲鳴を上げて逃げ出し、悲鳴嶼は後を追う、猫治と小鬼たちは全力で中身紫色の液体で満ちた注射器を持つ鬼灯を止めた。

* * *

多少のトラブルはあったが（紫注射はさすがに脅し用だったが、瑪紫愛は生理食塩水の注射を腕にぶっ刺された）、賽の河原研修が無事終わり、新卒たちが帰ってゆく中で鬼灯は悲鳴嶼に告げる。

「ああ、そうそう悲鳴嶼さん。忘れる所でした。あの二人、櫛さんの所でもダメでした」

「……そう、ですか。櫛様でもダメとは……。二人は、櫛様に何か失礼なことはしてませんか？」

「いえ、今回は正直言つて悪いのは櫛さんの方でしたね。暴言吐いてましたが、言つてること自体は向こうが全面的に正しかったので、お咎めはありませんよ」

鬼灯の報告に、悲鳴嶼は残念そうに気落ちして尋ねると、鬼灯が割と訳のわからないことを言う。

全面的に正しい暴言とは何だろう？ と悲鳴嶼は思いつつ、それはこれから本人たちに訊けばいいかと思つてその話は終わらせ、これらのことについて話を続ける。

「それならひとまずは安心しましたが……。もう候補はほぼ全滅ですね。」

とりあえず、明日私が二人を閻魔殿に連れてゆきます」

「そうですね。もういつそ、閻魔殿で暮らしてもらつてもいいかもしれませんね。座敷童さん達という、実年齢はともかく精神年齢の近い人が住むようになったので、お互いにいい影響を受けるかもしれませんし」

「……あの二人の逸材ぶりを思うと、正直『いい影響』を受けるとは思えないんですが」

二人の会話に、撤収作業をしていた粕治が参戦して来た。

「それに明日は休みだからいいとして、在住するなら胡蝶が問題ですよ」

率直な感想の次に出された問題点に、鬼灯と悲鳴嶼が「それな」と言わんばかりの顔で黙り込む。

三人はまだ知らない。

その明日休みのはずの胡蝶　しのぶが、姉の代わりに閻魔庁に訪
れ、「彼ら」と出会うことを。

「あれが育てたら、悪人にはならなくても真人間には育たない」

その日、本来なら胡蝶　しのぶは休みで当然、職場である閻魔庁に出向く予定などなかった。

むしろ、たまには引きこもって趣味に没頭しようと考えていたくらいで、実際に前日は鬼灯から借りた現世のホラー映画を見て夜更かししていた。

それでも真面目な性格と日ごろの習慣が根付いているからか、いつもの起床時間に起きてしまい、二度寝もせずあくびしながら居間へとやってきた。

「ええ、大丈夫よ桃太郎君。すぐに向かうから。」

謝らなくていいのよ。悪いのは遊郭から帰ってこない白澤様だから。日輪刀もちゃんと持って行くから、安心して！　え？　いらない？　あ、そっか。木刀ならお店に置いてあったもんね」

居間では、同じく休みであった姉が電話をしていた。

その内容から、どうやら納期が迫っている薬があるのに白澤が遊郭から帰ってこず、桃太郎がカナエに泣きついているようだ。

姉はもちろん弟子を責めるようなことを言わず、いつも通りおつとり快く了承しつつ、元凶の白澤には同じテンションで容赦ない。

「大変ね、姉さん。手伝おうか？」

眠気覚ましに最近嗜むようになったコーヒーを飲みながらしのぶが訊くと、カナエは微笑んで「大丈夫よ」と答えたが、ふと思いついたのかテーブルの上に乗っていた小さな風呂敷包みを妹に手渡して、別の頼みごとを口にする。

「あ、それじゃあ悪いけどしのぶには、こつちをお願いしてもいいかしら？」

これ、閻魔庁の座敷童ちゃんに渡してほしいの。お店から出て行く時に、お詫びにお赤飯をご馳走するって約束してたから」

自分から桃源郷での薬作りを手伝う提案をしたくらいなので、もち

ろんその程度の頼みは了承し、ついでに鬼灯から借りていたDVDを返却して、許可がもらえたら別の物を借りようと、地獄のNo.2をナチュラルにレンタルシヨップ扱いし、しのぶは休日に私事で職場に向かった。

そこで道行く同僚に、「あれ？　しのぶさん、今日は休みじゃなかったっけ？」と訊かれながら、鬼灯と座敷童の居場所を尋ねて、鬼灯の仕事部屋に向かつて行き、彼女は見た。

「うあああああつっん!!　あたしの方が先に鬼灯と出会ったもおおんっつ!!」

「私たちの方がずっと鬼灯様と一緒にいる」

泣きわめきながら鬼灯の右足にしがみつくと幼女の亡者と、無表情だが禍々しいオーラを放ちながら、鬼灯の背中や肩に登って相手を睨み付ける座敷童に挟まれて、途方にくれた顔をしている上司を。

そんな鬼灯と目が合って、しのぶは困惑しきった顔でとりあえず言った。

「……も、モテますね。鬼灯様」

「このモテ方は、私がお巡りさん案件になりかねないので嫌なんです」

鬼灯から至極真つ当な返答をされて、しのぶは曖昧に笑って誤魔化しながら、彼の足にしがみついて大泣きしている女の子をもう一度よく見てみた。

座敷童と違って、見覚えのない子供だった。見覚えがないと言いきれた。

何故ならその子は、顔を真つ赤にさせて涙どころか鼻水まで駄々洩れの大泣き状態なのに、それでも美しかった。

年齢は座敷童と同じくらい、小さくて5歳、大きくても8歳程度の外見なのに、それでも彼女は可愛らしい、愛らしいではなく美しいと評すべき美貌であり、その泣き顔は幼女とは思えないぞっとするほどの色気さえあるので、一度でも見たことがあるのなら絶対に覚えてる。

しかし、もはや人外じみた美しきを持つ白髪的美少女だというのに、泣きながら叫んでいるのが「あたしの方が鬼灯のこと好きだし、鬼灯もあたしのが好きだもん!!」という趣旨の発言である。

これだけ幼くとも間違いない「女」であるという嫉妬による癩癩なのだが、それでもそのストレートすぎる感情の発露は微笑ましくて、可愛く思えた。

それは、彼女はしゃくりあげながら泣きわめいているのだが、決してその嫉妬の対象である座敷童をバカにしたり、蔑むような発言をしていないというのも大きい。

「胡蝶？ 今日とは休みじゃなかったのか？」

「ああ……申し訳ない、狛治。鬼灯様。この子に気を取られ過ぎて、気付けなかった」

そんな風に、しのぶが驚愕から微笑ましいという感情を変化させていたら、実は同じ部屋にいたらしい狛治に驚かれながら訊かれ、そして同じく何故かいる悲鳴嶼が狛治と鬼灯に謝罪する。

その謝罪内容が、どうも自分の来訪に気付けなかったことに対してであるとしのぶは察するが、それよりもまた更になる人物を見つけてしまう。

「おおい、そろそろ落ち着けえ。ほら、そんなに泣きわめいたら、べっぴんが台無しだろお」

しのぶからは見えにくい悲鳴嶼の傍らに立っていたもう一人が、ひよこひよここと鬼灯に向かって行き、泣きじゃくる幼女に声を掛ける。

その人物を目にして、思わずしのぶはギョツと目を見開いた。

それは座敷童や号泣美幼女よりは年上っぽいが、それでも精々10歳くらいの子だった。

それだけなら、「何で子供がこんなにいるの？」程度の疑問で、ギョツとなどしない。

その少年は、あまりに醜かった。

顔立ちそのものは、お世辞にも整っているとは言えないが、醜いは言い過ぎと思える程度。

だが、彼の口からのぞく歯は並びがガタガタで良くない以上に、やすりのようにボロボロで色も黄ばんでいるので、しゃべるたびにその歯がちらちら見えて、知らず知らずのうちに悪い印象を根付かせる。それに加え、顔や体にいくつもの黒い痣かシミらしきものが広範囲にあるので、本来なら「中の下」程度であろう容姿が、「怖気がするほど醜い」と評される程、不気味な印象を与えてくる。

だがもちろん、しのぶは相手の容姿が悪いなんて理由で、軽くとはいえ目を剥くほど驚きなどしない。

彼女が驚いたのは、医療知識があつたから。

その知識が、この子供は妊娠中に母子感染したであろう先天性梅毒であることを告げていたから驚いたのだ。

だが、子供は敏感にしのぶの視線と驚愕を拾い上げるが、彼女が驚いた真の理由は読み取ることが出来ず、今まですつと向けられ続けたものと同じだと判断し、下から睨み付けた。

「なあに見てんだよ、綺麗なねえちゃん。そんなに、醜い俺が気持ち悪いのかあ？」

自分の不躰な視線が、相手を傷つける大きな誤解を招いている事にしのぶは気付き、慌てて謝ろうとしたが、その前にコアラのように足まで搦めて鬼灯にしがみついていた幼女の方が顔を上げ、しのぶに言葉で噛みついてきた。

「！ お兄ちゃんは気持ち悪くなんかないよ！」

何、あんた！ ちよつと……だいぶ綺麗だからって、お兄ちゃんをバカにするな！」

鬼灯から離れて今度は兄にしがみつき、キャンキャンと子犬のように幼女はしのぶに怒鳴りつけるのだが、そのお兄ちゃん大好きっぷりと何故かしのぶの美人さを妙な素直さで認めているのが、またなんか可愛らしくて面白いので、しのぶは誠実に謝りたいのに表情筋が緩んで真面目な顔が取り繕えない。

そんなしのぶが余計に気に入らず、幼女は「何笑ってんのよ!!」とまた更に噛みつくので、悲鳴嶼が兄妹二人の肩を上から押さえつけるように手を置いて、幼女のマシンガントークに割り込んだ。

「梅、落ち着きなさい。彼女は医者のようなものだ。だから、妓夫太郎の病気に一目で気付いて驚いただけだ。」

妓夫太郎も、誤解するな。ちゃんとよく見ろ。彼女はお前を見て驚いただけで、嫌そうな顔などしなかつただろう？」

悲鳴嶼の言葉に、幼女はまだ息を荒げているが怒鳴るのをやめ、少年の方は拗ねているようにもふてくされていているようにも見える顔でそっぽ向きながら、それでも「……悪かつたなあ」と一応、いきなり喧嘩腰になったことには謝った。

「ううん。私の方が悪いの。嫌な思いさせてごめんなさい。」

……あの、まあ、この件は私が悪いでいいんですが……、それより悲鳴嶼さん。つて言うか、鬼灯様」

しのぶの方もようやく口を挟む隙間が出来たので、二人に視線を合わすようにその場に膝をついて、気味悪がつていない証拠のように兄の頭を撫でて詫びたのは良いが、すぐに彼女は視線を上げて、自分の恩人と上司に訊いた。

「……あの、この兄妹の名前、お兄ちゃんの方が凄く聞き覚えあるけど、私の心当たり通りならありえない姿をしてませんか？」

しのぶの視線に、気まずそうに悲鳴嶼は目を逸らし、鬼灯は両肩に座敷童を乗せたまま、「さて、どうしますか？」と言わんばかりに軽く首を傾げる。

そんな、ひたすら言いにくいことをどう説明しようか悩む悲鳴嶼と、余計なことを言いそうな鬼灯に代わり、なんかもう色々諦めた狛治が一度溜息をついてから、しのぶの疑問に答えてくれた。

「……胡蝶。もうどうせいつかは話が耳に入るぐらいはしただろうから、改めて紹介する。」

その二人、兄の方は妓夫太郎。妹の方は、梅。……昔の名前は、堕姫。

お前の心当たり通り、その二人の生前は無惨様の鬼であり、俺と同じ十二鬼月で、二人で上弦の陸だった奴らだよ」

「なるほど」

狛治の紹介と説明に、しのぶは姉とよく似た笑顔を浮かべて立ち上

がり、そして言った。

「詳しい説明を求めます」

紹介はともかく、説明はされた方が訳が分からなかった

特に二人が幼児化していること以上に、墮姫だった梅が鬼灯にかなり懐いているのが正直、滅茶苦茶しのぶが気になって仕方がないのは、カナエとは実の姉妹の証拠というべきか、血は争えないというべきか。

* * *

鬼灯の部屋に円陣になるように椅子を置いてそれぞれ座って、しのぶへの説明会が行われた。

なお、座敷童は椅子を持ってきてくれたが、その椅子を置いたらしのぶからカナエの赤飯をもらってどこかへ行ってしまった。

感情に乏しい彼女たちが珍しく、ムキになって梅と鬼灯を取り合っていたというのに、あっさり離れてしまうのは子供らしい気まぐれかつ、座敷童らしいドライさだろう。

「さて、そもそもしのぶさんはどこまで上弦の陸ごと、この二人のことを知っていましたっけ？」

「柱合会議で宇髓さんと炭治郎君たちの戦いについては、それなりに細かく聞きましたが、この二人の人柄はほとんど聞いてませんよ。そんなの、宇髓さん達もほとんどわかってないでしょうし」

鬼灯の確認の問いに対して、しのぶはほんの少しだけ嘘をついた。しかしこの嘘は閻魔大王にも咎められず、むしろ優しさとして評価される嘘だ。

しのぶに限らず彼らと戦った当人以外が共用した情報なんて、彼らの血鬼術くらいであるのは本当だが、この兄弟の人柄を全く何も聞いていない訳ではない。

梅こと墮姫は、美に執着した高慢で嫌な女の典型だったこと。兄の妓夫太郎は、卑屈で嫉妬深く、自分より恵まれていると感じた相手に八つ当たりの言動をする、悪い意味で人間味が溢れていた程度には、宇髓からも炭治郎たちからも聞いていた。

それを「聞いていない」という嘘について話さないのは、本人の前

だからというのが第一ではあるが、普通にしのぶは今更だがその評価を疑問に思っているからでもある。

少なくとも、しのぶが見た今さっきまでの梅と妓夫太郎は、普通の子供と言っている言動しかとっていない。

梅は癩癩持ちだが、その癩癩は見た目相応程度かつ実に可愛らしい理由で、しかも癩癩真つただ中でも座敷童やしのぶに暴言と言えるようなものは吐かなかった。

妓夫太郎は卑屈ではあったが、彼が生まれる前から患ってしまった病からして、生前はもちろんあの世でも偏見に満ちた目で見られてきただろう。それならあの反応は自然で、悪いのは自分だとしのぶは譲らない。

二人とも柱合会議で知った性格の片鱗こそはあるが、人間なら誰しも持っている欠点レベルであり、更に子供であることを含めたら、責める方が大人げなしの人でなしだ。

なのでしのぶは、この時点では累と同じパターン。人間だった記憶を失い、悪い部分ばかりが肥大したのが鬼の頃の人格で、こちらが本来の人格だと解釈していた。

「まあ、そうでしょうね。ならやつぱり、初めから話しますか。

実はこの二人、狛治さんと並ぶというか、下手したら彼以上に墮獄させていいのかで悩んだ亡者だったんですよ」

しのぶの嘘を察しているだろうが、鬼灯の方もそこは突っ込まずに大前提をまず話すのだが、しのぶは「は？」と声を上げて、しばし固まる。

そんな彼女の反応に、狛治と悲鳴嶼は苦笑い。妓夫太郎の方も、何か困ったような途方に暮れているような顔をして、梅は話を聞いているのか、まだ赤い目で頬を膨らませたまましのぶを睨み付けていた。

「そんな反応もなりますよね。けど、実際に彼らの裁判には本当に困りました。

この二人、はつきり言いまして褒められるような行いを鬼の頃はもちろん、人間の頃もほとんど行っていません。ですが、そもそも彼ら

の環境があまりに悪い。真つ当な道徳が育つ訳がない、むしろそんなものを持つていたら、利用されて骨までしゃぶられるような苦界にいたんですよ」

しのぶの呆気は予想通りだったので、鬼灯は彼女の再起動を待たずに話を進める。

そしてしのぶは、鬼灯の話が進むにつれて呆気に取られていた顔がどんどん険しくなり、膝の上に置いていた手を強く強く、掌に自分の爪が食い込むほど強く握りしめた。

梅毒に犯されていた貧しい、夜鷹かそれとさほど変わらぬ最下層の遊女である母から生まれ、父を知らず、母に愛されるどころか気味悪がられ、周囲からも利用されるか虐げられるかだった、ただお互いだけを頼りに生きてきた兄妹の話。

酷い話だった。

けれど当時の価値観などを考慮すると、さほど珍しくもない悲劇だ。

彼らと同じような境遇の子供は、きつと数えきれないほどいただろう。

彼らよりも悲惨な目に遭った者もいたはずだ。

同じような境遇でも誰も恨まず、真つ直ぐに生きてた者もいたかもしれない。

けれどそれは、二人の悲劇や不幸を軽んじていい理由にはならない。

時代によって出来ること出来ないことがあるのは当然で、価値観も違うのは仕方ない。当時の普通が、現代では陰惨悲惨というべき環境なのは珍しくない。

だから、現代ほど優遇されて守られないのも、逆に加害者が不当なほど優遇されているように思えるのもしょうがないことだが、それでもこれだけはどの時代でも「仕方がないこと」と諦めて、「悪」であることを否定してはならない。

生まれてきた子供を、醜いから、気味が悪い髪色だからなんて理由で殺そうとすることも。

まったく世話をしないで、ただ痛めつけたことも。

善悪ではなく、ただ自分たちにとって都合のいいことだけを教えてやらせた挙句に、それが一転して都合悪いものになったら責めたて、奪い、殺そうとすることを、少なくともあの世はいつの時代であつても許さない。

「悪」と断じ続けてきた。

だからしのぶだけではなく、狛治も悲鳴嶼も同じように、自分の掌から血がにじみ出る程に強く握りしめていたのだが、当の本人たちはどちらもしらつとした顔で鬼灯の話を聞き流していた。

それを救いと取るべきか、それとも嘆くべきなのかは、しのぶにはわからなかった。

「こういつた事情から、この二人が真つ当な道徳や倫理観を求める方が残酷だと十王は初めから判断して、裁判を行つていたんですが……、ここで問題なのは二人とも、ああいう経緯で鬼になったので、人間不信が酷くて、十王や亡者の獄卒への反抗が酷すぎました。

……そしてまた更にややこしいのは、二人とも、鬼に対してはわりと素直だったんですよ。

基本的に自分たちがしてきたことを反省してない、する気なしなのに、鬼の指示には割と素直に従つて、反論して納得しませんでしたが、鬼からの話なら十王と同じ内容でも聞く耳を持ったので、情状酌量や更生の余地があるのかなのかサツパリだったんですよ」

自分たちの人間だった頃の過去に関しては他人事のように流していたが、死後の話となると彼らにとつては割と最近に思えるのか、兄弟は全く似てない顔立ちなのに、よく似ていると思わせる表情で拗ねたようにそっぽ向く。

前半は痛ましい理由だったが、後半の「鬼には素直」という情報は、現在の二人の行動と相まって微笑ましく思え、しのぶの表情が苦笑ではあるが少し緩んだ。

「なるほど。確かにそれは、どんな判決にしたらいいかわからない裁判になりますね。」

けれど、今を見る限りこの子達は人に対してそんな悪感情を懐いて

いるようには見えませんが、結局どういった判決になったんですか？」

苦笑しながら、最初の呆気にとられた情報に関しては納得できたが、それ以外の謎が深まった。

特に、二人の性格は鬼の頃と人間の頃とでさほど変わっていないかつたことが判明すれば、今の良い子とはまだ言えないが、苦笑いで済ますことができる程度の悪ガキぐらいに更生しているのが気になりすぎる。

あと、二人が子供になっている理由も未だ明かされていないので、しのぶは話を進める為に尋ねた。

「そこは逆ですね。判決の結果、更生したのではなく、あるきっかけで人への不信が和らいだおかげで、十王たちは彼らには情状酌量と更生の余地ありと判断したからこそその現在です」

「きっかけ？」

しのぶの疑問は前提条件がそもそも間違っていたので、鬼灯がまずそこを正す。

修正された情報を、小首を傾げてしのぶがオウム返しすれば、答えたのはそっぽ向いていた梅だった。

彼女はふてくれた顔をして、ボソリと呟くように言った。

「……鬼灯があたしを。お兄ちゃんはあるの女が助けてくれたの」

「あの女？ 助けた？」

しかし梅の答えは、しのぶの疑問の数を増やしただけだった。

その情報でわかることは、梅が泣きじゃくってしがみつくとともに、鬼灯に懐いていた訳だ。そこが正直言って一番気になっていた所だが、そもそも「助ける」とはどのような状況だったのかが、しのぶにはさっぱりだ。

なので更なる説明を求めるように、他の者に視線をやると、いつの間にか悲鳴嶼が静かに号泣しており、久々の光景にしのぶは相手が恩人であることを忘れて本気で引いた。

狛治はそんな悲鳴嶼に、自分とは逆に慣れた様子で手ぬぐいを無言かつ、奇妙なほど硬質な無表情で渡しており、子供二人はというと、率

直に「うぜえな」と言わんばかりの顔だった。口には出さないだけ、偉いかもしれない。

そして鬼灯も悲鳴嶼の奇行はいつものことかつ、彼なら泣いて当然の話だと分かっていたので、無視して話を進める。

「これは私達あの世側の失態なので、助けたという認識はないんですが……」

宋帝庁から五官庁への死出の旅の道中に、漢さんのジャブを食らっても反省皆無な亡者がいたんですよ。で、その亡者と文句は言いつつも二人で協力し合い、五官庁へ向かっていたこの兄妹がかち合っつてしま……」

漢のジャブで反省皆無という時点で察したしのぶは、目を見開いて唇を強く噛みしめた。そうしていないと、口汚い罵倒がとめどなく溢れ出そうだったから。

狛治のやたらと「作った」無表情は、悲鳴嶼に対して何らかの感情を隠していたのではなく、しのぶと同じものを我慢していたからだということも、理解できた。

そして梅は当時のことを鮮明に思い出したのか、やや顔色を悪くして隣の兄に座ったまましがみつき、妓夫太郎は妹を宥めるように背中をポンポン軽く叩きながら、ボソボソと鬼灯の話に補足を加える。

「……人間の頃から、腕つぶしに自信はあつたがなあ。相手がその岩坊主ほどじゃあねえけど、俺よりずっと体格がいい奴で……、しかも俺は鬼の頃の戦い方に慣れ切ってたからあ……、ぶん殴られて、梅を奪われたんだ……」

死出の旅の道にも獄卒が見張り、試練としての仕掛けの調整などはもちろん行われているが、地獄の刑場でも監視の目が行きとどいているとは言えない人不足なので、当然こちらもどこかしら隙や死角は存在する。

その死角を脳みそ下半身な性犯罪者は突き、妓夫太郎から梅を奪い、下劣や下種という表現でも上等な行為に及ぼうとしたのだろう。

しのぶも、「カナヲや蝶屋敷の子達を悲しませた」という罰の一環で死出の旅は経験した為、逃げることや罪の隠蔽といった後先を考えな

ければ、それは可能なことだと理解できた。

そんな最悪の状況を救ったのは、仕事の都合で宋帝庁にタクシーで向かい、その付近上空にいた鬼灯と……、加害者の男同様たまたまそこに、同じペースで死出の旅を行っていた、二人とは縁もゆかりもない、完全に赤の他人だった女だと妓夫太郎は淡々と語る。

その女が、泣き叫ぶ梅を何とか取り戻そうともかく妓夫太郎と、彼を蹴り飛ばそうとしていた男の間に飛び込み、妓夫太郎を庇いながら大声を上げて助けを求めた。

その声に気付いた鬼灯が、隼車に指示を飛ばして現場に向かい、飛び降りて男を処理（物理）した。

……鬼灯が来るまで、その女は男に何度蹴られようが、妓夫太郎を庇い、そして梅を逃がそうと彼女を担ぎ上げていた男の腕に飛びつき、噛みつき、ひっかいた。

だから、妓夫太郎の怪我は最小限で、梅は着物もほとんど乱されていない無傷で済んだ。

最悪の展開が一転して最善の結果を迎えた訳だが、ことが終わってある程度の時間がたっても、妓夫太郎と梅は状況が理解できなかった。

人間不信であることを抜いても、彼らにはできなかつたのだ。

見知らぬ他人が、血みどろになりながらも自分たちを守ってくれたことが。

しのぶも、彼らほどではないがその女性に対し「善人過ぎない？」と思ひ、理解が追い付いてなかつたが、妓夫太郎にしがみつきながら梅が咳くように加えた、彼女の特徴で全てを察することができた。

「……………あの女、鼻がなかつたの」

鼻に膿が溜まり、壊死して挽げ取れる。

重度の梅毒患者に見られる特徴だ。吉原に潜伏していた二人なら、おそらくは見慣れたものだったはず。

だからこそ、信じられず、理解できないものだった。

そんな状態になった者に、他人を助ける余裕などあるはずないことを二人はよく知っていたから。

そんな状態になった者は、自分にその病を移した者、治してくれなかつた者、健康な者を妬み、逆恨みし続けるものだと思つていたから。「……あの女は、全然綺麗じゃなかつた。気持ち悪いくらいだった」自分たちが見下し続けていた存在に、助けられ、そして自分たちが無事だったことを笑つて喜ぶ人間など、いながつた。

「……でも——」

だから、信じられなかつた。

だから、信じたいと思えた。

「あの人が母親だつたら良かったのにつて……思つたわ」

* * *

女性がどうして身を挺にして兄妹を助けたのか、明確な理由を誰も話はしなかつた。

だがしのぶは後日、鬼灯からその女性は嫉妬深く陰險な遊女で、何人もライバルを貶め、後輩遊女を自殺に追い込むほどイビリ倒した、良くて餓鬼道、悪いと等活の多苦処堕ちだったことを教えてもらつた。

決して生前から、犯罪を見逃せない善人ではなかつた。むしろ環境の所為というもあるが、悪人よりの人間だつた。

だが……それでも彼女が二人を庇つたのは、助けた事実は変わらな
い。

きっと彼女は良心とかさういつた善性のものではなく、ただの自己満足で行つただけ。

そう、例えば先天性とはいえ自分と同じ病を患っている妓夫太郎に、誰かの面影を見たとか。

だから、生前の彼女なら嫉妬の対象でもおかしくない梅も、妓夫太郎を「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と呼び慕つて離れなかつたから、助けようと思つたのかもしれない。

助けたいと、思つたのだろう。

助けられなかつた、その腕から取りこぼした「誰か」の代わりに。

その行いは彼女を地獄落ちから、簡易地獄を経ての転生という恩赦を与えられると同時に、兄妹の未来も救い上げた。

「獄卒わしたちにとつては、恥ずべき事件ですが、このおかげで二人は人間も信じてみようかと思うきっかけとなり、それ以降の裁判の態度はマシになりました。

それでも反省はやはりしてないというか、二人にとつては本心から何が悪いのかがわからなかった、自分たちが悪いのなら、他のものはどうなんだ？ という心境だったんでしよう。

そこら辺の言い分は、割と正当です。鬼になってからも、吉原というか遊郭という、非常に狭くて偏った世界に居続けたのですから、修正が効かなかったのは本人たちのみの非ではない。

なので、出された判決は執行猶予というか保護観察で、賽の河原行き。

そこから徐々に常識や道徳を身につけてゆき、真人間と言えるようになったら転生。それが出来ずまた新たな罪を犯したら、生前すべての罪を含めて、それに見合った地獄へ堕ちるというものになりました」

ようやく、二人に下された判決内容が明らかになり、しのぶは納得する。

確かにこれは、狛治よりも「地獄に堕としていいのかこいつ」案件だ。

狛治は自ら贖罪を求めていたので、ある意味話は早かったのだが、この二人の場合は無罪に出来る訳がない程の犠牲を出し、その理由も身勝手極まりない。

だが、そもそも環境が悪くて認知が歪んでいるのだから、一概にすべて二人の自己責任という方が無責任だろう。

賽の河原に送られるのは子供だけだが、「環境や周囲の所為で、年齢相応の情緒が育たなかった者」は、例外的にその精神年齢に見合った姿にまで若返らせて、賽の河原送りにすることが稀にあることを、悲鳴嶼うみが本当にその獄卒で業務が出来るか心配して、結構詳しく調べた過去があるしのぶは知っていた。

だからその例外扱いで、彼らはこの姿なんだと己に言い聞かせた。優しさなんかではない。正真正銘、自分が胸糞の悪いものを見たく

ないという、身勝手な理由でしのぶはある可能性から目を逸らす。

……無惨の鬼、特に上弦レベルなら姿をかなり自由に変えられること。そして鬼灯は、彼らの人間の頃の年齢を決して言わなかったこと。

この兄妹の姿は、「精神年齢に見合った姿」ではなく、本当に「人間としての享年」の姿である可能性から、しのぶは逃げた。

「それで……この子達がここにいるということは、賽の河原での修業はもう終わりということでしょうか？」

「一応はそうなるな。ただ、この子らは累とは違い、偏って歪んでいるとは言え『大人』として人と関わり、人として過ごしてきた期間が長いからこそ、子供と同程度の常識や道徳を得ただけでは、『真人間として更生』したとはまだみなされない。実際、彼らの言動は子供だから微笑ましいが、大人なら非常識極まりない。

だから、今度は出来れば『一般家庭』に近い環境で、学校などに通って交友関係を育み、徐々に大人としての責任感などを学んでもらうはずなんだが……」

しのぶの逃避に、当事者以外はきつと気付いていた。しかしはつきりとした答えを出すことを誰も望んでいなかったから、彼女の確認の問いに、涙を止めた悲鳴嶼が隣の妓夫太郎の頭を撫でつつ答える。

が、最後の方は何も言えず空いている片手で頭を抱えてしまった。

「……言つとくけど、俺らの所為じゃねーだろお」

「そーよー。 櫛に言ったこと、あたし謝らないわよ！ 本当のことだもん!!」

「いや、確かにあれは櫛さんが全面的に悪いが、言い方つてもんを考える。梅も怒鳴りつけられるより、優しく言ってもらえた方が、素直に謝れるだろう？」

妓夫太郎は悲鳴嶼の手を頭からどけながら、鬱陶しそうに彼の苦悩の原因は自分らではないと言い、梅も自分は悪くないと主張する。

そして粕治も、梅の主張をやんわりと叱責するが、彼でもどうやら梅が櫛に言った内容自体は責めないらしい。

そんな彼らの反応に、またしのぶが困惑。櫛の人柄を知っているか

からこそ、なおさらに「櫛が全面的に悪い」事をするとは思えなかった。相手が子供なら、なおさらに。

しのぶの頭部に、？マークの幻が見える程あからさまな困惑だったからか、鬼灯はさすがにもうほぼ真面目な話は終わっているのもあって、やや姿勢を崩して片手で頬杖をついて、その疑問に答えてくれた。「彼らは賽の河原で100年……、これは彼らが更生するまでかかった年月ではなく、累さんと同じく仮に最初から反省していても、犠牲が多すぎるから負うべきペナルティなんです。まあそれを終えた後は保護監督の獄卒の家に居候して、賽の河原で学べなかつたものを学ばずだったんですが……、今、絶賛その保護監督役と居候する家探しが難航しているんですよ。」

まず最初は平等王の補佐官、弟切さんが候補でした。彼は子でくさんですから、正直今更一人二人増えた所で負担はそう変わりませんし、家族が多いからこそ学べるものも多いと思っただんですが……土下座で『勘弁してください！』と断られましたよ」

しかし櫛に梅が何を言っただか、そもそも櫛が何をやらかしたの前に、語るべき情報をまず語る。

そしてその情報は、初っ端からカオスだった。

「……一応、弟切さんは二人の世話や保護監督自体は全く不満なんか
ない、むしろ受けてやりたいと言ってくれたんだが……、『もう未申^{ひでのぶ}
で子供は打ち止めだと公言してるのに、後になってまた子供が増えたら、私の隠し子と思われる！ それだけなら私の自業自得なので構わないが……ご近所のママさんが、「迷惑はかけないから私も!!」と言ってくるかもしれないから勘弁してください！』と、土下座で懇願されたんだよ……」

「……それは……断って当然の自衛ですね」

これまた弟切がどういった人物かもしのぶは知っているので、全面的に悪い櫛と同じくらい、土下座する程に彼らの保護者を嫌がるのが意外過ぎたが、狛治の非常に遠い目をしながらな補足で、しのぶも同じ目になって納得。

台詞だけ見れば自意識過剰で気持ち悪い発言だが、彼の顔と腹違い

の兄弟3人という実績からして、それは想定して当然の危険性だと理解できるのがまた嫌だ。

「二人目は禊萩さんだったんだが……、試しで数日一緒に暮らしてもらって、当初は特に問題なく良好だったんだが……、二人が禊萩さんに『どうしてモテないの?』『モテるコツ教えてやる』と、悪意ゼロ、むしろ気に入って好きになったからこそその善意でそういうことを言いまくって、禊萩さんがダウンした」

「……それはさすがに善意でも、叱るべきなんじゃ……」

「だって猫・漢ちゃんが『禊萩にモテる極意を教えてやれ』って言った!」

(漢さーんっつ!!)

そしてそのまま、遠い目も続行させて粕治が二人目のについて語り、しのぶはコメントに困りながら何とか発言を絞り出したが、兄妹の揃って主張する元凶に頭を抱えた。マジでこれ、誰も悪くないからこそ禊萩が一番可哀そう。

「その後も、地獄大夫さんだと1日どころか1時間で、『何言ってるかわからない! 話を通じない!』と、梅さんどころか妓夫太郎さんもマジ泣きするわ、天の御柱様は裁判時の虫がトラウマで、名前を聞いただけで『ごめんなさいごめんなさいごめんなさい』としか言えなくなるわ、輝哉さんはリラックスさせるためにも思っで見せようとしたアニメのDVDと、布教用に焼いていた無惨の地獄めぐり動画を間違えて再生させてドン引かれるわといった感じで、保護監督役と住む家が全く見つからないんですよ。

あ、ちなみに笹さんも保護監督に立候補してくれましたが、こちらで却下しました。あれが育てたら、悪人にはならなくても真人間には育たない」

鬼灯が困っているのか面白がっているのか全くわからないローテーションで、まさかの兄妹は悪くない、むしろ獄卒側に非がある問題で監督役が見つからない実情を語り、もうしのぶは何も言えない。特にお館様のやらかしに関して、二人に土下座したくなった。

しのぶの方でも、「他に誰か……誰かまともな人!!」と保護監督に向

きそうな同僚を脳内検索する。

そこで実は検索するまでもなく目の前にいた人物を思い出す、それは口にする前に打ち砕かれた。

「……狛治が保護監督という話もでたんだがな……」

『あたし・俺・他人ひとのことより、自分の子供をまず作れ』

「余計な世話だ!! っていうか、鬼灯様まで何言ってるんですか!!」

その自分で思いついた相手の名を悲鳴嶼が上げ、思いついた瞬間に自分でも突っ込んだことを、保護される当人たちだけではなく鬼灯からも突っ込まれた狛治は、椅子から立ち上がって真っ赤な顔でちよつとキレた。

兄妹はともかく、鬼灯は全力でセクハラ案件だが……、病気や宗教、または経済的な事情で「子供をつくらない」もしくは「つくれない」なら、余計なお世話すぎる下種発言だが、「恥ずかしいから」で一世紀も白い結婚続けている相手には、もう言っていないと思う。

「なんというか……とりあえずお館様が本当にごめんなさいだけど、話を聞けば聞く程、櫛さんしか適役はいないと思うんですが、一体櫛さんは何をしたんですか?」

とりあえず土下座はしなかったが謝って、しのぶは未だ解消されていない、むしろ深まる疑問を口にする。

本人が言った通り、考えれば考える程に櫛が保護観察役に相応しい。

見た目通り母性愛の塊でありながら、現場から叩き上げの獄卒だからこそ、彼らが試し行為的な悪戯をしても、それらを受け止める度量と同時に、厳しく叱りつけることもできる鬼女ひとなので、彼女が全面的に悪いことなどするとは思えない。

「あー……正直、俺は櫛さんとこ気に入ってたけど、梅がなあ……」

「あ、あたしだつて櫛のこと、嫌いじゃないわよ! 怒ったら怖いけど、あたしのことをいつも可愛いって言ってくれるし、お兄ちゃんのこともすごく大事にしてくれたし、ご飯も美味しかったし、櫛のこともお母さんだったらいいなって思ってるよ!」

でも……でも……!」

実際、やはりお試し期間でしばらく暮らして、関係は良好だったようだ。

そして妓夫太郎の方には不満がなく、梅の方が櫛と何か問題があったらしい。

だが梅も、櫛のことを嫌っていたとは思われないのか、慕っていたのがよくわかる弁明をする。

同時に、そこまで慕っていても許容できなかった、暴言を思わず吐いてしまった櫛の唯一にして最大の欠点を、我慢しようと思つたがやっぱり我慢しきれず、本人に言い放つた時と同じように叫んだ。

「櫛のご飯が美味すぎるのが悪い！ そんでもって食べ過ぎを叱らない、お腹がすいたら間食も夜食も全部許して満腹まで食べさせる櫛はもつと悪い!!」

あんた含めて養豚してんじゃないわよ!!」

「暴言が正論すぎる!!」

梅の美意識高いソウルシャウトで、しのぶの疑問は完全氷解する。

梅の言う通り、櫛は保護者として、母親として優しさも厳しさも備え合わさった理想形だが、唯一にして最大の欠点は、彼女は食に関しては自他共に甘いところ。

美味しいものが好きだから料理好きになったタイプなので、櫛は好き嫌いに関して厳しいが、カロリー制限などダイエットに関しては激甘、魔の優しさでダメになるしダメにするタイプでもある。

なので確かにこれは、梅も言い過ぎではあるが発言内容そのものは責められないし、櫛が全面的に悪かった。

* * *

最大の謎が解けた所で難題にぶち当たり、しのぶは再び頭を抱える。

櫛がダメなら後は悲鳴嶼くらいしか適任がないのだが、この保護監督探しは彼らの視野を広げる為、環境を変えろという意味合いが強い。

遊郭ほどではないが、賽の河原に居続けてもやはり「偏った世界」しか知らないことになり、そこだけで常識や道徳を育んでもやはり「真

人間」とは言えないだろう。

そこらは学校に通えば解決するかもしれないが、賽の河原にいる他の子供達からしたら、自分達より自由が許される二人を、羨ましく思うかもしれないのもまた、二人をこれ以上賽の河原に置いておけない理由の一つ。

「もう本当に全然見つからないので、いつそのこと座敷童さんみたいに閻魔庁に住んでもらい、獄卒全体が保護監督ということにしようかとも思っただんですが……」

「やだ！ あの一二人キライ!! 鬼灯とるからキライ! 鬼灯とずっと一緒に自慢してくるからキライ!! やだ! やだ!!」

うわああああああああん! 何で鬼灯、あたしと結婚してくれないのー!!」

「……あなたが大人顔負けの色気を持つ美少女だからこそ、軽口でも言えませんよ。言ったら即、鴉天狗警察のお世話になってしまう」

鬼灯の大きっぱだが、「視野を広げる」という点では良い案かもしれないことを語るのだが、梅が「座敷童」に反応してまた泣き出して、鬼灯に再び縋りつく。

どうやら友達になれるかもと期待して会わせた所、久しぶりに大好きな鬼灯に会えると期待していた梅にとって、鬼灯と親子のように自然体で寄り添う座敷童たちを目の当たりにしたのが、相当ショックだったらしい。

その結果がしのぶの見た光景であり、現在だ。

ちなみに宇髄たちの報告時点から、相当なシスコンだったと聞いていた妓夫太郎だが、妹が鬼灯にぞつこんであることに不満は特にないらしい。

相手が妹を救った恩人かつ、元々人間より信頼していた鬼なのと、梅が絶世の美人であることを認めつつ、幼女だからという常識的判断で振っているからも大きいだろう。

きつと、鬼だった頃、そして人間として生きていた頃なら、妓夫太郎は鬼灯を妬み、恨んで、何かを取り立てていただろう。

自分から妹を奪う存在だと思っていた。そのくせ、梅の相手をしな

いのなら妹を侮辱したと思つて、怒り狂つていた。

そんな被害妄想と言えるほどの嫉妬心が、今はない。

それは、あの鼻欠けの女のおかげか。それとも悲鳴嶼や他の獄卒達、そして賽の河原の子供達によつて育まれたものゆえか。

それは、しのぶにはわからない。

しのぶは、彼らに会つたことがなかったから。

「……なあ、鬼灯さんよお。俺らの暮らす家つて、俺らがバラバラならまだ見つけることができるもんなのかあ？

あの蛇の姐さんは、寮つてとこで暮らしてるから、梅だけならいいけど俺が無理だつて話だつたらう？ なら、俺は衆合地獄の遊郭かどつかで奉公に出るから、梅はその姐さんに任せたらいいんじゃないか？」

妓夫太郎にとつて、その提案は困り果てている鬼灯たちの為ではなく、全て妹の為だった。

妹が嫌う、ライバル視している座敷童と暮らさず、けれどなるべく鬼灯の側にいさせてやつて、そして女性としての理想形に近いお香が育てたら、きつと妹はいい方向に向かう。真人間に、善良と断言される女性に成長すると思つたから、彼は最愛にして唯一の家族と離れることも選択肢に入れて提案した。

「!? やだ！ それ、もつとヤダ!! お兄ちゃんと離れない！ 別々に暮らすなんてヤダ!!」

お兄ちゃんが奉公に出るなら、あたしもそこで働く!! 遊女でもしゅーごーの囀役でも何でもやるから、置いてかないでえええええつっ!!」

「それじゃあ生前と同じで意味がないだろう……」

しかし、兄の身を切るような思いでの提案は、梅が更に大泣きして拒絶。

またコアラ状態になつていたのに、兄が自分から離れようとしていると理解した瞬間、すぐに鬼灯から離れて妓夫太郎にしがみつき、ぎゃんぎゃん泣きながら一緒に訴える。

梅の号泣懇願に、彼女に激弱な妓夫太郎はもちろんタジタジで、「会

えなくなるわけじゃないんだから、我慢しろ」と説得することは出来ない。

悲鳴嶼も同じく、兄の自己犠牲的な愛情も、妹のワガママだが自分も苦勞を背負う覚悟を決めた願いを尊いと思うと同時に、兄妹の悲惨だがそれしか生き方を知らないからこそ、今でも浮かぶ選択肢は「遊郭で働く」であることが痛ましく、感情の振れ幅が酷くてほとんど何も言えない。

まあ、どちらにせよ彼の涙腺を崩壊させるには十分すぎたので、いつも通り悲鳴嶼は梅を宥めながらダバダバ涙を流し、兄妹に引かれていた。

そして鬼灯は「衆合の囮役、言質ということの内定させてもいいですかね?」と、人材ハンターの目を輝かせて狛治に言うので、狛治から貼り付けたような笑顔で「鴉天狗警察に通報しますよ?」と言われている。

この鬼、美少女の告白には不器用だが常識と良識を兼ねた返答をしているのに、人材になるとそのどちらも吹っ飛ばらしい。知ってた。なので鬼灯への突っ込みは、もはや相方の狛治に任せ、そして悲鳴嶼に関してはそろそろ昔の勘を取り戻したので普通スルーして、椅子から立ち上がったしのぶは兄妹に告げた。

「ねえ、私の家は嫌かしら?」

しのぶの提案に、悲鳴嶼も狛治も、鬼灯さえも言葉を失った。

兄妹も、ポカンとしている。

誰も、彼女が自分でそんな提案をしてくるとは思ってたのだから。当然だ。

獄卒の三人はもちろん、二人だって知っている。

先ほど、自分たちの過去を鬼灯が話していた時、しのぶがあからさまに反応していたから二人も気づき、そして鬼灯が二人の過去と同じくらい淡々と、端的に告げていたから。

絶望の淵どころかどん底に叩き落されていた二人救った、記憶を失っても、数多の犠牲を出しても、それでも間違はなく救われていた日々をくれた、二人にとっての「恩人」は……、しのぶを絶望させて憎悪に心を染め上げた、姉の仇だったことを知っているから。

だから、しのぶは恩人のいる部署ということでもたまたまに賽の河原に顔を出し、業務を手伝っていたというのに、二人の存在を知らなかった。礼儀正しく、アポはちゃんと取る性格だからこそ、隠し通すことができた。

その気遣いには、感謝している。
きつとこのタイミングでなければしのぶは、この提案をしなかった。

憎みこそはしなかっただろうが、それでも関わりたいとは思えなかった。関われば嫌なことを思い出して、八つ当たりしてしまいそうなのが怖いからこそ、二人の為にも関わらないという選択を取っていただろう。

けれど、今は――

「……何、考えてるんだあ?」

「……あたし達、童磨のこと今はどうでもいいし、正直昔から嫌いだったけど、流石に拷問の手伝いとかする気はないわよ」

兄妹から童磨関連で何か企み、それに自分たちが利用されると思われ、しのぶは自嘲の苦笑をしたいやら、「あんなだけ恩を売つといて、どうでもいいし嫌いって言われる、あいつつて一体……」と呆れるやら複雑な感情を懐きつつ、二人に視線を会わせるようにその場にしゃがみこむ。

「そんなことはさせないわ。」

そりゃ、私は確かに未だあいつのことは憎いし、気色悪いし、仮に反省して改心しても許せる自信はないというか、もつと気色悪いとか思えないけど……、それでも、流石にこれだけは認めなくっちゃって思ってたの」

梅のボロクソ加減を非難出来ないしのぶの童磨評だが、それでも彼女は一つだけ認める。

二人の生前の環境は、理不尽と不条理のあまりに惨い地獄だった。その残酷さを直視することからは逃げたが、これだけはもう逃げない。向き合うと決めたものを口にする。

「あいつは、間違いなくあなた達を救った……。そして私は、私の家族を殺したのが鬼ではなく強盗とかで、助けに来たのが悲鳴嶼さんじゃなくてあいつだったら……。あいつに縋りついてたと思う。家族が鬼になっても生き返ってくれたのなら、私はあいつに感謝して崇拝してたかもしれない。

……あなた達と同じ間違いを犯し、あなた達と同じくらいの罪を重ね、そして反省することが出来なかったかもしれない。

そう考えたらね、放っておけなくなったの。

たまたま人間と鬼の役割が逆だっただけで、私とあなた達の立場がこんなに違うのは、申し訳なく思ったの。

……私は今、すごく幸せだから、その幸せをあなた達にもあげたいって思ってる。……兄妹がバラバラで暮らすなんてして欲しくない、遊郭で働くにしても、学校に通って卒業してから、多くの選択肢の中で自分の意思で選んで欲しいから……。どうか、うちの子になってくれませんか？」

生前は、向き合えなかった。

珠世との交流で彼女を「人」と認めたが、それは向き合ったというより諦めに近いものだった。

向き合えなかった。

自分が姉の理想を、夢を引き継ごうと誓ったくせに、鬼のことを信じられず、姉が信じていた存在そのものであった禰豆子を殺そうとした、自分の醜さから逃げ続けていた。

あの直前、身勝手で嘘つきな鬼と対峙していたなんて言い訳に過ぎない。

彼女に言ったことは、贖罪としての行為の提案などではなく、憎悪による八つ当たり過ぎなかったし、今になって思えば彼女だって鬼になって人格が歪んでいただけで、人間としての彼女は善良ではなくとも普通の人間だったかもしれない。

それなのに、しのぶは鬼の存在そのものを邪悪だと、生かす価値などない害悪そのものだと思っていて疑わなかった。

彼らは元が人間だということを、ほとんどが無惨の被害者であることを知っていたのに、「苦しまずに殺して、鬼という存在から解放してやろう」とすら思わず、「苦しんで死ね!!」とさえも思っていた。

毒を使っていたのは非力だからで、相手を苦しませる余裕を持つ実力などないからこそ、毒作りにそのような他意はなかったが、あったらそういう意図を持って作っていたかもしれない。

そんな自分の醜さを、自覚したから。自覚させられたから。

自分達の恩人が、しのぶにとつての仇だと知った兄妹の、あまりに悲しげな二人の瞳によって突き付けられ、自覚する。

二人はカナエの死を、自分たちと重ね合わせて傷つき、悲しみ、恩人を許せないと思ってくれたのに、しのぶは童磨の名が出た瞬間に二人のことを忘れ、自分の恨みを再燃させていた。

成長していないのは自分の方だと思いつたから。

だから、保護監督なんてほとんど名目だけだ。

幸せだからこそ、自分の間違いから逃げ続けた事への償いがしたいだけ。

そして、自分の鏡像だったかもしれない二人を幸せにしてやりたかっただけの提案。

そんな、結局はしのぶの身勝手な自己満足にすぎない提案に、二人は目を丸くしつつもしばし考え、そして同時に言った。

「梅・お兄ちゃんを守ってくれる・のかあ?」

互いに、最優先で「守って」と望んだのは相手のことだった。

しのぶはその問いに、まばゆいものを見るような笑顔で即答した。

「もちろん。だって私は、あなた達のお姉ちゃんなんだから」

どちらを優先して守るかなんてない。どちらも同じくらい、全力で守る。

それが、姉としての矜持だとしのぶは笑って答えた。

姉と同じ答えを、姉に似ているが姉の真似ではない、間違いなくしのぶ自身の笑顔で。

「えっと、勝手に言い出してしまいました、いいでしょうか鬼灯様？」

「私よりご家族に許可を求めるべきでしょう。こちらとしてはむしろ助かります」

しのぶが気まずそうに事後承諾を得ようとしたら、鬼灯はさっさと必要書類の準備を粕治に命じていた。

「うちは大丈夫ですよ。なんせ、座敷童の可愛さだけを目当てに連れて帰ろうとした姉と、そんな人を育てた両親ですよ？」

鬼灯の仕事の速さに感謝しつつ、言われて当然の突っ込みに苦笑しながらしのぶは返答し、微笑ましげな優しい目で「4人」を眺めた。

「ごめんね。意地悪言つて」

「梅ちゃんが来た時は、鬼灯様から離れておくね」

「あ、あたしも……いきなり嫌いつて言つて……ごめん」

「えらいなあ、梅は。ちゃんと謝れてえ」

「その代わり、妓夫おにいちちゃんと遊ぶ」

「二人つきりにさせてあげる」

「え!?! それは、えっと、それもヤダけど、でも嬉しいけど、えっと、ど、どうしようお兄ちゃん! どうしよう!!」

「へっ!?! お、俺もどうしよう! ど、どうしたらいい、累!?!」

「誰に助言求めてるの?」

しのぶの視線の先には、妓夫太郎と梅、そして双子の座敷童の4人でお赤飯を食べながら、実に微笑ましい会話が繰り広げられていた。

しのぶの話が終わった途端、どこかに行ったのではなく実は天井に潜んでいたらしい座敷童たちが、「話し終わった?」と言つて降つてきた時は、心底驚いた。

だが、その後からはしのぶだけではなく、悲鳴嶼も粕治も胸が射貫かれる程に可愛らしい子供同士のやり取りだった。

座敷童は、梅に謝った。

天井で梅の過去や現在の境遇、鬼灯を好きになった訳も知ったことで、自分たちのムキになって張り合った言動を反省したらしい。

座敷童たちも鬼灯が好きだからこそ、100年間も大好きでい続けているのに、滅多に会えなかった梅がどれほど今日を、鬼灯に会える日を、その時間を楽しみをしていたかは想像がついた。

そんな彼女にとって、好きな時に好きだけ会える自分たちが妬ましく思うのは、当然だと理解した。

……それでも、「嫌い」こそは言っても、座敷童をブスだの不気味だのといった悪口は決して口にしなかったのは、しなかった事こそが、鬼灯に会えなかった日々で育んだ彼女の成果だということも知ったのだろう。

妹の為に泣き止ませようと宥めこそはしても、自分たちを鬼灯から力づくで引き離さなかった兄も同じ。

だから座敷童は謝り、友達になりたいと言った。

そして梅と妓夫太郎は戸惑い、照れ、それでも領いた。

そんな子供たちの交流を、悲鳴嶼は泣きながら「ありがとうございます、ありがとうございます……」となんか妙なオタクみたいに拝みながら礼を眩き続け、それをしのぶは「どうしよう……」と思いつつどうしようもないことを知っているの、やはりスルーを続行して眩いた。

「……本当に、仲がいい兄妹ですよね」

座敷童に「鬼灯と二人つきりにしてあげる」と言われて、「え、なんでお兄ちゃんをあたしから引き離すの!？」と言わんばかりの顔になった梅を見つめ、眩く。

その眩きに込められたのは、まだ遠いが必ず訪れると確信している未来への心配。

二人が十王から「真人間になった」と断言された時に訪れる、転生という別れの時。

妓夫太郎は妹の為なら、一人で地獄に堕ちる覚悟もあったが、梅は兄と離れるくらいなら地獄に堕ちたかった。

何度生まれ変わっても彼の妹になると叫び、願うほどにその存在

は、彼女の全てだから。

だから、「真人間」と判断されるくらい成長したのなら、その別れも受け入れられるかもしれないが、きつと本音は別。

本音を我慢できず、外間を投げ捨てて泣きじゃくられるのも困るが、我慢された方がきつと彼女たちを見守ってきた者達が耐えられない。

そんな、まだ遠い未来を先走って心配しているしのぶに、鬼灯は言った。

「しのぶさん。あの二人は便宜上は、『地獄道』に堕ちた扱いなんですよ」

鬼灯は子供たちのやり取りを見ても、表情は全く変わらない。むしろ限界オタク状態の悲鳴嶼を見た時の方が、表情豊かだった。ただのドン引きだったけど。

そんな彼が、淡々と告げる。

「六道は全て、極楽へ至る為の徳を積む修行の場です。だから……地獄でも徳を積んで積んで積みまくれば、転生ではなくそのまま極楽行きになる場合もありますよ。」

……前例は、『まだ』ありませんが」

淡々と告げる。

必要書類を用意しに行った、狛治が出て行った扉を見ながら。

表情はやつぱり、1ミリたりとも変わっていない。

けれど、その眼は姉が自分やカナヲを見る時とよく似ていた。

とても優しい光を帯びた目だった。

「……じゃあ、なおさら私は頑張らなくちゃいけませんね」

しのぶは同じ光をその眼に宿して、答えた。

新しい、今度こそずっと一緒にいたい弟と妹を見つめて答えた。

無惨様の地獄じゃないけど巡ってもらおう番外編

「さて本日も、『逃げるは恥だが役に立つ』、『定時退社』、『奈落の後継者』、『ザラキを打って来る、経験値のないはぐれメタル』でおなじみの無惨に小地獄巡りをしてもらう……と言いたいところですが、無惨が巡る地獄も残り2つ。

それらが終わったらどうするのか？ 他に企画はあるのか？ 続編はあるのか？ という問い合わせが最近よく届くので、今回は試しの番外編です」

「試すな！ 今すぐにやめろ!! あと地味に産屋敷の希望に応えた汚名大喜利をするな!!」

いつものように真顔のバリトンボイスで汚名大喜利を並べながら、鬼灯はいつもとは少し違う前口上を述べると、いつも通り簀巻きで地面に転がされていた無惨がビチビチ跳ねて、お前以外が言うなら割と真つ当な抗議をする。

それを諦めたような遠い目で眺める粕治もまた、いつもの光景だ。

いつもと違うのは、鬼灯の「番外編」発言以外にもう一つ。

「私はこいつが唯一、本当に唯一と言えた長所を捨てた瞬間の大喜利が好きですね。

『遊星からの物体X』はカッコよく思えてしまうのが癪ですが、『クリオネ』は見事に特徴をそのまま表していて秀逸ですし、『アジの開き』は本当にはしたくないくらいに笑ってしまいました」

クスクスと可憐さと妖艶さを違和感なく調和させた笑みをこぼしながら、無惨の頭を踏みつけてしゃべれなくさせている珠世が、本日のゲストである。

前回のゲストに産屋敷 耀哉を招聘したことで、事情は理解しているが非常に羨ましがっていたとしのぶから聞いた鬼灯が誘ったら、「ぜひ!!」と食い気味の即答だったそう。

その時の珠世は、愈史郎が見たら口から魂吐いて、またその魂の口からも魂を吐いて……を永遠繰り返し返す魂^{タマ}リヨーシカが完成しそうな程、嬉しそうで幸せそうな輝く笑顔を浮かべていた。

そんな珠世なので、無惨の頭をグリグリゲシゲシと踏みつけまくりつつも、うきうき笑いながら鬼灯と無惨の無限かと疑うほどにある汚名大喜利で盛り上がり上がっていたので、流石に狛治が遠くにやっていた意識と目を戻して突っ込む。

「お二人とも、カメラ既に回ってます。そこら辺にして、鬼灯様はそろそろ今回は何をするのか教えてください」

「どうやらいつものように、鬼灯はわりとその場のノリと勢いで企画を立てて実行に移したらしく、狛治も今回の「番外編」とやらで何をするのかを知らないようだ。」

「そうですね。」

今回は、こいつの汚名大喜利ネタを見返してみたいと思った企画です」

「……何で思いついてるんですか、鬼灯様」

「それは実に楽しみですね!!」

時間を無駄にするのが嫌いな鬼灯は、素直に狛治の言葉に頷いて進みましょうとするが、相変わらず発想が鬼だということ以外全く予測がつかないので、狛治はもう既に疲れ果てたような声で突っ込み、珠世は更にテンションが上がる。

前回以上に今回の動画撮影、狛治の胃は大丈夫だろうか？

「こいつの汚名大喜利に、『平安のダーウィン賞』というのがあったんですよ。なので、それにちなもうと思います」

「ダーウィン賞？ こいつ、嫌いなものは変化だと言いつつ、逃げるなら姿は変わりまくるくせに、頭の中は千年無変過ぎたバカですよ？」

そんな進化論を説いた方の名を関する賞を取れるような生き物じゃありません」

「おい！ 断言するな!! 私が好きなのも求めていたのも、『完璧』や『完全』なのだから、その為に『進化』し続けた私こそ相応しいだろうが!!」

鬼灯が今回の企画を思いついたきっかけの汚名を出す、「ダーウィン」がどのような功績を遺した人物なのかは知っていても、「ダーウィン賞」が何なのかを知らなかったらしい珠世が、困ったように小

首を傾げて否定すると、同程度の知識はあったらしい無惨が無理やり頭を上げて、見事に自爆した。

その自爆を、無惨が頭を上げた事で踏んでいた珠世が転ばぬように後ろから支えた狛治は、本気で憐れむような目で見つめていたので、その視線に気付いた無惨が不愉快そうに顔を歪めた。

「何だ、その眼は？ 何か言いたいことがあるのなら言ってみろ、猗窩座!!」

挙句、余計なことを言わなければいいのに、墓穴の底で更に自爆した。

なので狛治は遠慮なく告げる。

「……無惨様と珠世さん。ダーウィン賞というのは、ブラックジョークの意味合いが強い賞で、権威があるものではありません。

これ、『後世に愚かな遺伝子を残さない者を讃える』という意味で進化論を説いたダーウィンの名を冠しているだけで、受賞資格者は『愚かな自らの行いで自分の命、または生殖能力を失った者』ですよ」

「……………」

しばし二人は沈黙。

その沈黙が破れた後の反応は、爆笑と「笑うなーっ!!」と叫ぶガチギレという正反対のものだった。

「無惨がようやく自分の頭無惨さを自覚したのは良いことですが、ここで残念なお知らせを。

ダーウィン賞の受賞資格は、『子孫(直系であって、兄妹の子などは問題なし)を残していない事』、『死に方が愚か極まりないこと(ダーウィン賞受賞目当ての自殺は含まれない)』、『自らの意思で行ったこと』だけではなく、『他者を巻き込むなどで傷つけていない事』と『正常であること』……、つまりはまともな判断力があると思える知能や精神状態であることも含まれますので、結局こいつは受賞しません」

「どういう意味だ!! 私を精神異常者呼ばわりする前に、鏡見て自覚しろ!!」

「いえ、私は何より条件に合わない部分は知能だと思ってますので、あなたの精神異常はどうでもいいです」

「なおさらどういう意味だーっ!!」

無惨の勘違いをわかっただけながら大真面目に受け取って煽る鬼灯に、更にキレながらやつぱりお前が言うな案件だが、割とどころか完全に正論で突っ込んで来た。

だが当然、鬼灯は異常者呼ばわりを一切合切気にせず完全スルーして、「お前の頭が受賞できないぐらいにバカだと思ってる」と、破れまくったオブラートに包んで言い放つ。

もはやこれ投げつけてるから、オブラートがもう破けてるとか溶けてるとかすら関係ない。

「……ほ、鬼灯様……、こ、今回の企画は……、そ、その受賞者と同じ……死に方をこいつにさせるということでしょうか？」

腹を抱えて笑っていた珠世が、未だに息絶え絶えな状態で企画の内容を確認する。

笑い過ぎで出た涙に濡れる瞳は、明らかに涙以外のもの、期待という感情で煌めいていた。

「そのつもりですが、先ほども言った通りこいつはダーウィン賞の資格が正確にはないので、ダーウィン賞に限らず私が世界各国のあの世で見聞きました、もはや笑ってやるのが供養な死に方を紹介していいこうと思っっています。

っっていうか、ダーウィン賞に限定すると、むしろやりにくいんですよ。

井戸に落ちた鶏を助ける為に、井戸に飛び込んで亡くなった6人とか、他人が見聞きする分にはコント染みていますが、笑いのネタとして使うにはあまりに不謹慎ですし、保険金目当てで友人に頼み、自分が入った車を燃やしてもらったら、間違えてナイフで自分の首を切って死んだ者なんて、本当にバカとしか言いようがありませんが、これは再現しにく……、生前の下弦解体とかがほぼそれか。なら別の意味で、やはりする意味ないな」

「おい！ 役立たずの一斉処分と、どうやってたらそんな間違いを犯すんだと言いたくなるようなアホと一緒にするな!!」

珠世の質問に肯定してから補足を加え、その補足の理由を説明して

いたら、途中で「再現しにくい」と思っていた事例とほぼ同じアホさ加減のやらかしを無惨がしていたことを思い出し、意見を少し訂正。もちろん、鬼灯の訂正に無惨はキレて怒鳴り散らすのが、鬼灯と珠世どころか、狛治にも「一緒ですよ」と即答されて、またキレた。

* * *

「そういう訳で、本日は一か所で様々な拷問を行う唐×望処で、『無惨がやらかしそうな死に方』を再現してゆきます。

さて、今回は番外編かつ移動する必要はほぼなしなので、このようなものを用意しました」

いつものように無惨の喚きは無視して、鬼灯は現在地を告げてから狛治が持っていた箱を受け取って掲げる。

その箱は上部に穴が開いており、振るとかさかさとして紙らしきものが擦れる音がした。

どう見ても、くじ引き用の箱である。

狛治は持つている間、これをどう使うのかを気にしていたが、内容を説明されていなくても大体予想していた通りの使い道なのだろう。

そして珠世も狛治と同じ予想をしているのか、そわそわと体を小さくだが上下に揺らすように、弾む心が抑え切れないという様子で彼女は、鬼灯に訊いた。

「鬼灯様！ それ、もしかして私が……」

「はい。もちろん珠世さんが引いてください。中に書かれている通りの死に方を無惨にさせます」

「するか!!」

鬼灯が珠世の質問にも期待にもこたええると、無惨の突っ込みと同時に珠世が勢いよく箱の中に手をつ込み、一枚の紙を引き抜く。

そして、そこに書かれている内容を読み上げた。

「はい！ それでは初めはこれです！

えーと、『体中に牛糞を塗りたくり、それを寝転がって乾かすことで身動きが取れなくなった所で野犬に襲われて死亡』」

「するか!! してたまるか!!」

「というか、それは一体どのような状況と発想でそうなったんだ!? 肥溜めに落ちたとかそういう事故の結果ではなく、自分の意思で塗ったのか!?」

珠世が引いた内容に、無惨が全力拒否しつつも素で気になったのか、思わず後半は拒否ではなく盛大に元ネタの人物に引いて突っ込んでいる。

この反応に関しては、粕治だけではなく引いて読み上げた珠世本人も、「俺・私もそれ知りたい!!」と心から同意した。

「ああ、さっそくダーウィン賞と無関係のものを引きましたね。」

それ、紀元前が4世紀とか5世紀ぐらいの話なので、あなた方が思うほど訳のわからない発想ではないんですよ。一応は水腫の治療の一環、体の水分を蒸発させようとしてたので、変な趣味の一環ではないです。

だから無惨も、治療の一環だと思ってさあレッツトライ!」

「そうか。なら納得すると思ってるのか!?!」

話を聞いても訳のわからない発想だったが、無惨すらも生まれていない頃の話なので、訳のわからない部分は当時の文化だろうで、納得というか理解を諦めて放り投げることは出来た。

だがもちろん、これをやれと言われてやる奴は相当レベルの高い変態でもそうはいないだろう。

当然、感性は腹立つことにまともと言える無惨が、何故かノリ突っ込みを披露してブチ切れ拒否するが、鬼灯は「安心してください」と告げる。

カメラに。

無惨は金棒で踏みつけている。

「もちろん、汚物を塗りたいくる作業は一般獄卒にはさせません。」

フンコロガシ課のエリートたちが、全身痒くなる成分と速乾性の成分を配合した汚物を調査して用意し、塗りたくる準備は万全です。

そして最期に汚物痔無惨を食い殺す野犬も当然、不喜処の犬獄卒ではありません。

闇魔庁の技術課と変成庁のからくりオタク達が作り上げた、ロボット犬が行います。地獄にいる鋼鉄の犬ではなく、完全にロボットです。生き物ではありません。

なので、さっそく皆さんどうぞ。

そしてもし、汚物の調合・配合に興味のあるフンコロガシさん。そしてロボットという単語に浪漫を感じる方々は、ぜひとも一度は地獄に見学でもしてみてください」

当たり前だが無惨ではなく、視聴者が「やりたくないな」「やらせるなよ、そんなこと！」と思いきや、平気で行える者が行っていると説明しつつ、鬼灯はナチュラルに勧誘しだした。

どうやら今回の番外編は、あまりスポーツが当たらない部署を紹介して、興味を持ってその部署の未来の獄卒を獲得しようとする目論みだ。うだ。

しかもその目論みに、珠世の「ぜひ、お願いします」と笑顔で言わせて利用しているのが、狛治は愈史郎が来ちゃったらどうしようとかちよつと心配になった。

「はい、お次の死には『バンジージャンプ失敗』です。なので、アイキャンフライどうぞ」

「失敗するとわかってるバンジージャンプはただの投身自殺だろうが!!」

さすがに汚物まみれのままおバカ死を続行させるのは、無惨本人が不快なのは本人以外大歓迎なのだが、付き合う獄卒達の方が嫌すぎるので、ロボット犬に食い散らかされたあと、クレンザーと便所ブラシで丸洗いされてから、無惨は既に珠世が引いていた死の方を告げられ、盛大に「せやな」としか言えない突っ込みを入れる。

「いえ、これはゴム紐やその土地に問題があったから起こった事故ではなく、流石にひもなしバンジージャンプを決行での死でもないのです、もしかしらただのバンジージャンプで終わる可能性はありますよ」

しかし意外なことに鬼灯は、「それをわからずやるのがダーウィン賞受賞者で、お前だ」と暴論同然な正論を吐くでもなく、むしろバンジーに使うゴム紐を見せつつ、無惨に渡して触らせて不良品ではないことを確認させ、飛び降りる場所もアイドルを罰ゲームでバンジーさせようとした場所なので、地獄の中では比較的安全であることまで告げる。

「さすがの無惨も地獄に来て約100年、本来なら「地獄の刑場という時点で安全なバンジーが出来る所がある訳ないだろ！　つて言うか、アイドルに何をさせてる!？」と突っ込むべきなのだろうが、そこに関しては「ああ、確かにあそこなら安全だな」と完全に地獄に毒された安心と納得をってしまった。

だが、鬼灯がそこまで安全性を考慮などする訳がないこともよく知っていたので、「一体何を企んでる？」と彼を睨み付けて訊く。

もちろん無惨が思っている通り、鬼灯は安全性など皆無に「良いから飛べ」と無惨を蹴り落とした。

そしてそのまま、無惨は崖下の火の海まで墜ちて、地面に顔から激突という死因が焼死なのか脳挫傷なのか不明な死に方をした。

「……何であいつ、鬼灯様にあそこまで言われて、しかも全然信用してないのに、バンジー失敗の理由が『ゴム紐が長すぎたから』って気付かないのかしら？」

しゃがみこんで耐火性のゴム紐がびよんびよん伸び縮みしながら、火の海の中で無惨が地面に顔面スタンプしているのを、あきれ果てた目で眺めながら珠世は言った。

「……そういう細かい所に気付ける人ではないからこそ、『平安のダーウィン賞』と呼ばれる所以でしょうね」

珠世の疑問に粕治はわかり切っていた答えを返しつつ、ゴム紐を引っ張って無惨を回収。

そして珠世は「そうですね……」と苦笑しながら、また勢いよく次のおバカ死決定くじ引きを引いていた。

* * *

「次は……、これ、ちよつとやりにくそうですね。」

『SNSのプロフィール画像撮影のため、滑走路で自撮りして着陸しようとした航空機に翼で頭を強打されて死亡』です」

「地獄というかあの世に飛行機はありませんしね」

「そもそもそんな所にそんな理由で入り込むか!!」

次に引き抜いた内容に、愈史郎が見たら悶絶死しそうな程に艶やかな悩まし顔をして珠世が読み上げると、狛治も「どうすんだこれ？」と言いたげな顔をしてその理由を口に出し、そして復活した無惨が根本的なことに突っ込む。

「産屋敷家に無意味なレスバトルしに行つて、ボンバーされたの何が違う？」

しかし生前に本気でほぼ同じ愚行を犯していたことを、三人から真顔で突っ込まれる。

こいつ本当に自爆が大得意だな。

「狛治さんの言う通り、あの世に飛行機はありません。なので代りに、こちらの閻婆^{えんばはどしよ}度処の獄卒が飛行機代りになってくれるそうです。

無惨、特別に選ばせてやりましょう。さあ、閻婆（地獄のバカでかい怪鳥）とプテラノドン、どちらがいい？」

「！……どれも嫌に決まってるだろ!!」

無惨がビチビチ跳ねながら、「あれは向こうが異常者極まりなかっただけで、私が愚かだったから起こったことではない!!」と、愚かはともかくまあ起こった原因自体は無惨の馬鹿さ加減ではなく、耀哉の闇深さ故だというのは否定できない事実を喚いていたが、当然それらは無視して、鬼灯は飛行機の代わりはどうするかを説明する。

飛行機代りに滑空してもらおう鳥が翼で首挽ぎリアットをかましやすいように、無惨を張りつけにしながら鬼灯は、そのリアットをかます相手を選ばせた。

無惨はどっちも嫌だと至極当然のことを言うが、一瞬言葉が詰まったのはなんかちよつとだけ少年心が疼いて、反射的にプテラノドンを選びそうになったのだろう。

なので、鬼灯はプテラノドンに首挽ギリリアットを決行してもらった。

わかっているが、無惨への無意味すぎるサービスではなく、そもそも初めからプテラノドンにしてもらう予定だった。

「はい、これを見てわかるように、恐竜は現在、刑場で獄卒として活躍しています。プテラノドンだけではなく、大焦熱地獄の悲苦吼処ひくくしよなら首長竜が、焦熱地獄の龍旋処りゆうせんじよならティラノサウルスが活躍していますので、恐竜に興味がある方はぜひこちらの小地獄の獄卒をお勧めします。

転生というシステム上、恐竜は数を減り続けていますので、本物を間近で見えるのも交流するのも今の内ですよ」

その理由である恐竜をアピールして少年心を刺激し、獄卒に勧誘する鬼灯は、相変わらずの人材ハンターだった。

ちなみに、プテラノドンによる首挽ギリリアットは本当に本人無認可SNSのプロフィール写真になり、即刻垢BANされた。当たり前前だ。

* * *

「今度は、『ロシアンルーレット失敗』？ ずいぶんシンプルですね」
珠世の言う通り、今度はシンプル極まりない内容だった。

「何だ？ ロシアンルーレットの主旨を理解できず、弾が出るまで撃ち続けたアホの話か？ する訳ないだろそんなこと!!」

「お前の虎の尾タップダンスに逆鱗DJは、ほぼほぼそれですけどね」
「似たような事例は確かにあったと思いますが、これは違いますよ」

無惨がその内容から想像できるおバカ死を口にして否定するが、やっぱり鬼灯に自爆を指摘され、もう無惨の自爆は産屋敷家に嫌だが連なる血筋だと思ふことにして、狛治がその予測内容を否定した。

一発だけ弾が装填されたセミオート拳銃を手にして。

「ロシアンルーレットの意味がまるでないだろ!!」

「ですよー。拳銃ならどれでも出来ると思っただんですかね？」

どうやら無惨はリボルバーではないとロシアンルーレットは出来ないことを知っていたようで、見て即座に突っ込み、狛治も遠い目で同意している。

「その通り。これ一発撃つてもただの銃殺で、ロシアンルーレットが成立していませんので、今回は少し内容を変えて、弾詰まりするまでひたすら銃を替えて撃ちまくります」

「少しどころじゃないだろ！ 結局それもロシアンルーレットじゃない!!」

鬼灯も同意したかと思つたら、もう本当に無惨の方に同意しかない突っ込みが入る改定案を提示して、様々な銃火器をその場に用意する。

狛治もさすがに突っ込みも思つたが、セミオート拳銃だけではなくショットガンやら対戦車用バズーカーまで用意されているわ、珠世が可愛らしいアクセサリーや美味しそうなスイーツを前にした乙女のような、愈史郎がスケッチブック10冊秒殺で使い果たしそうな実に可憐すぎる笑みを浮かべ、「鬼灯様！ 私でも使えそうなものがありますか？」と訊いていたら、もはや突っ込むのも疲労がたまるだけ。

なので狛治は諦めて、ただ黙々と獄卒や珠世に武器を渡して、ジャムるまで終わりません、無惨射撃逆ロシアンルーレットをチベスナ顔で眺めていた。

「地獄では昔ながらの金棒や鉞まさかりなども未だ現役の武器ですが、このような現世の近代兵器も取り入れていますので、こちらに興味がある方、使ってみたいと思つている方は是非、獄卒を目指してみませんか？」

そしてやはりここでも、鬼灯はがつつり獄卒募集の宣伝をかけた。

* * *

「……鬼灯様、これはさすがにこの地獄では……」

「はい？ ……ああ、これは確かに八寒の部類ですね。けれど大丈夫

です。改定してやらすつもりだったので」

「またしても珠世は、自分が引いた紙の内容に小首を傾げ、鬼灯に躊躇いがちに中を見せた。」

その内容を読み、彼女が何に困っているのかがすぐにわかったので、鬼灯は彼女の不安を否定する答えを返して、狛治にノーパソからある動画を再生するように命じる。

「おい、今度は何を見せる気だ?」

先程のほぼほぼ銃の点検作業みたいなノリで、ひたすら撃たれまくってミンチだったのが再生した途端、相変わらず自分の罪に何の自覚もない無惨が、警戒心を露わに尋ねる。

「安心してください。呪いのビデオでとかではないですよ」

今度はカメラだけではなく、無惨にもちゃんと「大丈夫」と告げて動画を再生するが、無惨はもちろん、他の獄卒も狛治も、なんなら珠世も鬼灯の「大丈夫」は信用していない。

だが今回は実際に、ブラクラと言えるような内容でも、無惨の黒歴史だけを映した悶絶死目的な動画でもなかった。

……普通の動画でもなかったが。

初めに映ったのは、一面の白。

カメラの前でチラチラキラキラ光って舞うものと、ビュービューという環境音からして、それは一面の銀世界を映している事が理解できた。

そんな静謐とも言えた光景は、10秒も続かない。

初めは風の音に混じってくらいの音量だったので、気のせいかたまま風の音がそのように聞こえたか程度にしか思えなかったが、徐々に音量が上がり、ついには「人の悲鳴」だと気付けるようになって、動画内でもそれは視認出来るようになる。

《ぎゃああああああああああああつ!!》

まさしく雪だるま状態になって、はるか向こうからこちらに転がり続ける亡者と……

《ひゅー、今日は結構あったかいから、服脱いでて正解だったな!》

《お前はほぼいつでも服脱いでるだろ!!》

シロクマに並走されながら突っ込まれている、かろうじて^{モラル}パンツは履いたブナピーみたいな頭の雪鬼、春一が巨大な鉞の刃の部分に裸足で乗り、見事に転がる雪だるま亡者という障害をスルスルよけながらスノボの要領で滑って来る光景だった。

この光景に、無惨だけではなく珠世も、動画を再生させた粕治も目が点。

幸いと言えるのかはわからないが、動画はそこで終わり、鬼灯がこの動画を見せた訳というか目的を語り出す。

「これ、最近はやりの雪山から早く降りる方法だそうです」

「どつちが!?!」

三人の突っ込みは、狙ったかのように一致した。

そりや訊きたくなるだろう。っていうか、全員が「あのブナピーは嫌だ」と思っていないとやってられない。

「もちろん亡者の方です。別に春一さんの真似をしたければ止めませんが、やるなら八寒でやってくださいよ。あれ、雪鬼以外がやると絶対に金属に皮と肉が張り付いて、熱湯をかけるか肉ごと脱皮を試みないと取れませんから」

「そのポイントで八寒を勧めるのはおかしいだろうが!　っていうか、亡者でも普通に嫌だ!　流行りって嘘だろ!!」

鬼灯は三人の突っ込みに、安心させる答えを返すが、やはり罪人に対しての容赦は皆無だった。

より酷くなる変態の方を勧められて無惨が切れている横で、なんとなく鬼灯がやりたいことを察した珠世は今更だが今回のおバカ死にの死に方をカメラの前で教えてくれた。

「えくと、今回は『雪山を滑落する仲間を見て、あれが早く降りる方法だと勘違いしてマネして死亡』です」

「ですが、八寒にまで行くのは時間がかかるため、今回はあの針の山を雪山の代わりにします」

「代わりになるか!!」

珠世の説明に、いつもと違ってほぼ移動する気がない鬼灯が、先ほどのロシアンルーレットと同じく代替案を提示すると、やっぱり無惨

からされて当然の突っ込みを入れられた。

だが先ほどのロシアンよりは代わりになっていたからと、相手が無惨なのでその訴えは「あーはいはい、わがままはダメですよー」と子供相手のように流され、無惨は針山から転がり落とされた。

……動画を見せた意味はあるのだろうか、これは？

「この方のフリーダムさは雪鬼という特性というのがありますが、同じくらいフリーダムな方々も数多く獄卒として働いているので、『公務員は堅苦しい職場』というイメージはまず捨てて、興味がありましたら見学だけでもどうぞ」

一応あった。春一の自由さを見せつけ、獄卒を勧誘するという鬼灯の人材ハントの為という。

……むしろ希望者減らないか、これ？

* * *

今度は無惨が針山から転がり落とされて、雪だるまならぬ血まみれ針だるま状態のまま、ちよつとした塔の上まで連れて来られてから蘇生された。

「くそっ！ 本当にお前らは頭のおかしい異常者だな！ 今度は何だ!?! どこだ!?! 何をさせる気だ!?!」

「今度はこの塔の中、その窓から脱出してください」

蘇生された途端に喚き散らす無惨へ、鬼灯は淡々と指示を飛ばし、無惨はいぶかし気な顔をして、部屋の様子と指示された窓を見る。

部屋の中には小さなベッドが一つだけで、窓の外の高さは5階ほど、地面を見る限り見張りなどの獄卒はいないが、窓ははめ殺しで開かない作りだった。

しかしこんこんと軽く叩いて確認した限り、特に分厚い強化ガラスという訳でもないの、普通に割ることは可能だ。

高さも人間の無惨が飛び降りたら大怪我必至だが、ベッドのシーツとカーテンを使ってロープを作れば、例え地面にまでの長さには足りなくても、怪我は精々軽傷で済む高さまで降りることが出来る。

まさしく逃げるにはふさわしい条件が揃っているのだが、本当に逃がす為にやる訳がないことくらい無惨もわかっているのです、疑わし気な顔で「一体珠世は何を引いたんだ？」と振り返って訊けば、鬼灯がチエーンソーのエンジンを入れていた。

「5分以内に脱出しなければ、私がお前の内臓でロープ作って消防隊員のように降りる」

「ホラーの猟奇殺人鬼の間違いだろうが!!」

とんでもなさ過ぎる脅し文句で制限時間をつけられ、無惨はひとまず窓ガラスを割り、カーテンとシーツを引っぺがして硬く結びつけ、ロープを作ってベッドにくくりつけて初めに想定したようにそのまま窓の外へ脱出。

それを見ていた珠世と狛治は、バンジージャンプの時と同じような顔をしていた。

「……今度は鬼灯様が脅しているからというのもあるでしょうけど、……やっぱり先のこと全然想像できない奴よね、あのバカは」

「……まあ、今回は本当に鬼灯様の脅しとその想像力を焦りで無くしてますから」

別にしたくはないが、流石に自分も同じような状況だと同じ事をしとしまいそうだからという理由で、狛治は一応無惨をフォロウした。

しかし割った窓ガラスの処理が甘く、窓枠に嵌ったままのガラスの破片が無惨の重みで、ロープになっている布を突き破って破き、千切れてそのまま落下する無惨の「こういうことか陰険闇鬼神がああああ!!」という負け惜しみの声で、だいぶ台無しになった。

* * *

7回目でも珠世は明日もこれから美しいと確信できる笑みでおバカ死くじを引くのだが、今回は内容を見た瞬間に何とも複雑な顔をした。

あえて表現するなら、「して欲しいが見たくない」と言いたげな顔だった。

そんな顔になった理由は、読み上げた内容で狛治も無惨も他の獄卒

達も即理解できた。

「……『ゴキブリを食べ過ぎて死亡』」

『ぎゃあああああああああああつつつつ!!!』

鬼灯と読み上げた珠世以外の全員が、想像をしまつて絶叫。狛治も顔面蒼白で絶叫していた。

「それでもダーウィン賞の資格ないだろ!! 異常者だろどう考えても!!」

「そこはわりと同感ですが、なんか爬虫類ショップのイベントだったそうです。4分間でどれだけのゴキブリを踊り喰い出来るかという大会だったそうですよ」

『大会!? しかも踊り食い!?』

無惨の同意しかない突っ込みに、鬼灯もさすがに深く頷きながら補足を加えると、今度は珠世も叫んだ。

そりやなおさらに信じられないだろう。一人なら承認欲求が酷いアホが何かやらかしたで済むが、大会となるとおそらく複数人が挑んだということになる。更に追い打ちで踊り食い……。

ゴキブリを異常に毛嫌いするのは日本人だけらしいが、それでも生きた虫を食べる文化圏はそう多くないので、これは大概の国では絶叫案件だと思いたい。

「なので本家リスペクトで踊り食いさせたいのですが、それだと食べさせにくい為、残念ながら今回はこちらの死んだものを使います」

『ぎゃあああああああああああああつつつ!!!』

そんな風に思っていた所、鬼灯が用意したものを見てまだ一同絶叫。

……鬼灯が用意したのは、90リットルのゴミ袋にパンパンつまつたGの死骸だった。

「どうやって用意したんだそれ!? とうか、本家もそれだけ食つたのか!？」

「用意はEU地獄に協力してもらいました。本家の方はというと、数十匹程度だったそうですが……、死因はどうかやらゴキブリが持っている細菌などによる感染症などではなく、ゴキブリアレルギーだったか

らのようでした……」

「……………おい、まさか……」

日光克服のために一応は研究をしていたからか、無惨はアレルギーに関しての知識があったようだ。あったがゆえに、あんなにバンジーや先ほどの脱出では察しが悪かったのに、今回に限っては察してしまった。

「アレルギーを発症するまで食べさせます」

「貴様はもはや鬼ですらない!! 鬼を超えた異常と恐怖の体現そのものだ!!」

「ありがとうございます」

「鬼灯様! さすがに褒められたと認識しないでください!!」

箸でゴキをつまんで阿鼻地獄を超えた「あーん」の準備万端にしなから、無惨が察してしまったことを宣言するので、もはや無惨は半泣きで負け惜しみではなく心からの感想というか、鬼灯への評価を口にしたら、鬼灯は素で礼を言う。

なので狛治は腰が引けながらも、「その評価を喜んだらアウトだ」と説得するのは部下の鑑過ぎた。

あと、これで確実にこの動画は鬼灯の目的である獄卒勧誘の成果が果たせないことも鬼灯以外の全員が確信した。

鬼灯様、マジで加減して。

* * *

「こ、今度は可愛いです! 某夢の国の映画みたいです!!」

まだ先ほどの絶叫案件バカ死から回復しきれていない顔色のままだが、それでも無惨を苦しませることをやめる気皆無は珠世が、次に引いた内容の感想を叫ぶ。

だが、先ほどよりはどれを引いてもたぶんマシになるだろうが、可愛いとは一体どういうことかと思ったら、読み上げられた内容は「慈善事業として1000個の風船で空を飛び、ロサンゼルスまで向かうとしたら遭難して死亡」だった。

なるほど。確かに可愛い。
だが、一つ問題があった。

「……鬼灯様。この状態で蘇生された場合って……食べたものはどうなるんですか？」

無惨にとつて不幸極まりないことに、結局アレルギーを発症しなかったので、胸糞で名高い七つの大罪をモチーフにした某サイコサスペンス映画の「暴食」被害者のように、胃どころか食道の限界まで詰め込まれて死亡した無惨を眺めて狛治は鬼灯に尋ねる。

鬼灯も同じく無惨を見下ろしながら、眉間に皺を寄せて答えた。

「……………私もさすがに経験なければ、想定外ですね。消化された状態で蘇生されたら一番ですが、満腹状態で浮かび上がって重力でリバースされたらこちらが最悪ですし、もしGも腹の中で蘇生されたとしたら……………」

『やめてやめてやめてやめてください!!』

そして鬼灯の方も、やってから「これ、蘇生させた場合はGどうなるの？」問題に気付いたらしく、最悪を想定しながら答えたので、またしても一同が全身に立った鳥肌を撫でながら絶叫。

結局、無惨の死体は一回適当な刑場の炎で焼かれてから蘇生となった。Gごと燃やして分離させることで、無惨だけ生き返らせるという理屈だ。

その後は普通に飛ばされた。

あえて水素ガスを使つての浮遊だったので、飛んでる最中に地獄の業火で引火して空中で無惨は爆発炎上。何度燃やされるんだろうか
いつと、狛治はまさしく汚い花火を眺めながら思ったとか。

* * *

「次は……、王道って感じですね。『オートバイのヘルメット着用義務化に対する抗議のため、ノーヘルでオートバイを走行させ、途中で事故死』です」

言っちゃなんだが、まさしくアホの自業自得。他者を巻き込まなく

て本当に良かった、ダーウィン賞のお手本のような死に方をお出しされた。

「私はむしろ、ヘルメット着用義務は賛成派だ！」

Gを満腹超過しても、空中爆発炎上しても、相変わらずブレない無惨がなんか今度はマジで真つ当な主張をし出すので、獄卒達は困惑。

まあ、彼の生き汚さと詰めは激アマだが臆病者ゆえの用心深さなら、確かにノーヘルはむしろしない、着用義務賛成派は納得だ。

「そうですか。なら良かったです。では、予定通り無惨は巻き込まれる被害者役でどうぞ」

「はっ？」

そして鬼灯は何故か無惨の主張を「良かった」と言っ、訳のわからない予定を口にしながら簀巻き無惨をポイッと前に投げ出した。

その行動に無惨はもちろん、狛治や珠世も困惑していたが、数秒後に爆音と共に火車が改造して趣味全開のヤンキー仕様の火車バイクにまたがって、無惨をぱっかーんと軽やかに跳ねて参上。

その後、思いきり棒読みで「うわー」とか言いながらわざとコーナーを曲がり切れず転ぶが、本人は猫の俊敏さを生かしてももちろん無事。

バイクから投げ出されたが、地面に軽やかに着地して顔の毛づくろいをした。

「はい。こんな感じで、あの世は基本的に意思を持った乗り物ばかりですが、現世に視察する機会のある獄卒の皆さん、ノーヘルはもちろん運転は一步間違えば自分はもちろん他人も巻き込む危険なもので、運転する側もしない側も気を付けましょう」

「鬼灯様、結論が取ってつけすぎて説得力が皆無です」

どうやらあの世の乗り物事情でバイクの調達が難しかったので火車に協力を頼んだが、そのバイクは彼女の趣味のたまものなので無惨を乗せて壊すこと前提のこの企画には、マジギレで却下されたからこそその妥協案。火車が無惨を轢くという形で何とかこのおバカ死再現をしたようだ。

再現できてないよ、鬼灯様。狛治の言う通り、取ってつけた教訓も説得力はマジでなかったので、無惨が良い感じで飛んで行ったところ

しか見どころがない動画になってしまった。

……それで十分に需要があるのは、無惨が凄いのか、喜ぶ皆様方の恨みの深さが凄いのかは、考えない方がいいだろう。

* * *

「えっと……今度も再現できますか？」

『山道を走行していた車のブレーキが利かなくなり、ドライバーが同乗者達に何も告げずに一人だけ脱出。同乗者達は何とか車を停車させ、怪我人ゼロ。一人だけ脱出したドライバーは頭を強打して死亡』
「なんですが……」

先程と似たような、あの世にはない乗り物関連が出たため、珠世は愈史郎が見たら「珠世様は何も悪くありません！ そのような顔をさせる要因は全て滅殺してきます!!」と本気で宣言する申し訳なさそうな顔で尋ねる。

「ああ、大丈夫ですよ。これは技術課と変成庁の方々で作ってもらってますから」

「無駄に凝るな!!」

しかし何故か、バイク以上にあの世では普及していない自動車を鬼灯は再現して用意していた。

そして内容再現の為か、車には無惨だけではなく助手席に鬼灯、後部座席には珠世と狛治が乗り込む。

狛治は、流石に珠世は危険ではないかと反対したが、珠世本人が強く望んだのと、鬼灯がエアバッグ代わりにでかいぬいぐるみを渡していたので、それを膝に乗せて抱きかかえる形で乗り込み、安全性を高めたことで狛治は渋々納得。

結果、むしろ隣に座る狛治が危なくなつた。愈史郎の嫉妬という意味で。

狛治が既婚者でなければ、間違いなく滅殺対象確定だろう。

「おい、事故るとわかってる車を何故私が運転すると思ってる？」
「良いじゃないですか。上手くいけば、本家とは逆の成果が出るかも」

しれませんよ」

運転席に乗せた無惨が不満そのものな顔で突っ込むが、鬼灯はいつも通り余裕で煽って来る。

さすがに無惨も彼の発言を「そうかも」と鵜呑みすることはしなかったが、逆に自分が脱出しようと思わず、わざと更にスピードを上げて暴走させれば、自分も死ぬが他の3人も巻き込めるのではないかと考えた。

その場合、狛治と珠世は大怪我しようが死のうが蘇生することが出来るが、鬼である鬼灯は丈夫な代わりに死んだらそれっきりだ。

そこまで思い付き、久々に余裕を携えた色気のある笑みを浮かべて、「そうだな。もしくは、お前こそが一人で逃げて本家を再現するかもな」と煽り返して、アクセルを踏む。

だが、アクセルにはほぼ全体重をかけて踏みつけた瞬間、無惨の座っていた運転席がビヨン！車の屋根を突き破って上空に跳ね上がった。

「は？」

後ろでそれを見ていた狛治と珠世は啞然。

そして横にいた鬼灯は、「まさか、流星に発進させずにこうなるとは……」と呆れていた。

どうやら無惨が自爆覚悟の嫌がらせを思いつくことを、鬼灯の方も予測していたらしく、初めからこの車は一定以上の強い踏み込みをしてスピードを上げようとしたら、運転席に仕込んであった巨大発条バネが作動して、漫画のように運転席が上空に吹っ飛ばされるといっような仕様だったらしい。

どうりで、わざわざ技術課や変成庁協力の元、作らせた訳だ。

結果として、見事に「一人だけ逃げたが、残された3人は無傷で、逃げた当人は頭を強く打って死亡」を再現した無惨の芸術点は割と高いと思う。

「捕まえた亀の甲羅を割ろうとした鷺が、彼の光る頭を岩だと勘違いして、彼目がけて亀を落として死亡」。

あ、これ本家知ってます。紀元前の詩人ですよ、確か」

今度は割と有名な笑える逸話なので、珠世は読み上げてすぐに元ネタを看破した。

「正解です。紀元前5世紀の悲劇詩人として知られる、アイスキュロスさんです。彼は『落下物によって死亡する』と予言されていたらしく、その予言通りの死を迎えました」

「……おい、その死に方とお前が手に持っている剃刀は何の関係がある?」

鬼灯が珠世の答えにさらに補足を加えるが、無惨にとってはそこはどうでもいい。

それより気になるのは、イギリスの都市伝説系殺人理髪店兼ミートパイ屋が持つてそうな、極悪な剃刀だ。

あと鬼灯よりマシだが、狛治が何とも言えない困り果てた顔で、靴やらフロアリング用やら各種のツヤ出し用ワックスを持つているのも気になる。

しかし鬼灯は、無惨が疑問に思うことが理解できないのか、割とマジで不思議そうな顔をして小首を傾げながら答えた。

「あなたをハゲにしなくてはいけないのだから、関係あるに決まっているでしょう」

「する必要ないだろ!!」

「何言ってるんですか。鷺が亀を落とした理由は、『光る頭を岩と間違えたから』ですよ。必要に決まっているでしょう。」

毛抜きで一本ずつ抜いて、痛みと長いお友達とお別れしてゆく様を見せつけたかったのですが、流石に時間がかかりすぎるので剃刀にしてやったのに、なんと贅沢な」

「私が贅沢なら、それをしたがる貴様は異常者の暇人だろうが!!」

かなり陰険なことをやりたがっていた鬼灯に、無惨は的確に突っ込みを入れる。本当に、鬼灯相手だと無惨が常識人に見えてしまうのが困る。

「むしろお前のせいで暇がないんですよこっちは!!」

しかし突っ込みは的確だが、相変わらず無惨の特技は自爆だった。暇人からほど遠い鬼灯が、今は別に無惨案件で忙しいことなどないのに、討伐前の日々を思い出したのか剃刀を放り投げて無惨の髪を筆りながらキレた。

そして楽し気に珠世が参戦しに行ったのを、狛治は死んだ目でただ眺めていた。

結果、筆った所為でむしろ頭部は全然光らなかったのも、特に意味もなくただ苦痛が増幅しそうだからという理由でワックスを一回塗ってから、無惨を再生させて今度こそ剃刀で剃った。

珠世曰く、「顔だけは本当に整っているから、ハゲてもそんなに情けなくならないのが不快」とのことだった。

* * *

「……何故、そこにもぐりこんだの？」

次は、『妻と喧嘩をし、家を飛び出してどこか落ち着ける場所を探していた男が、教会裏の大型ごみ容器の中にもぐりこんで一晩を過ごし、寝過ごした所為でゴミ収集車にゴミと一緒に放り込まれ、水圧圧縮機に挟まれながら死亡』です」

またしてもお手本のようなおバカ死に、珠世は本家の人というか、彼の奥さんやゴミ収集車の運転手に同情を懷いて読み上げた。

そしてもはや芸の域に達している無惨は、ここでも盛大に自爆した。

「私が妻に追い出されることがあると思ってるのか!? むしろ私が追い出し、なんならゴミ箱に詰めて……」終式、青銀乱残光」

見事に狛治の地雷をぶち抜く発言をかまし、無惨はその場でミンチになった。

そしてそのミンチになった無惨を狛治は淡々と集めてゴミ箱に詰め、鬼灯に言う。

「鬼灯様、ごみの蘇生をお願いします」

狛治にすら「ごみ」と言い切られた無惨は、蘇生させてすぐに本家

どおり生ごみと一緒に水圧圧縮機に放り込まれる。

説明はされていなかったが、本家通り圧死するまで壁をガンガン叩いていた生き汚さを見事に自分から発揮して再現してくれた。

そして狛治は珠世に、「何て素敵……」と言わんばかりの視線を向けられたので、しばらく彼はマジで愈史郎に会わない方がいいだろう。

* * *

「そろそろ動画的にもいい時間なので、これで最後にしますか」「そうですね、残念ですけど。」

では、最後のバカ死を引きます。……これです!」

くじの中身がなくなるまで続きそうだったが、流石に鬼灯がストツプをかけ、珠世もある程度の満足は得れたので、素直に納得して最後のくじを引く。

その最後の無惨の無様な最期はというと……。

『『バンを無免許運転しつつ屋根の上にマットレスを敷いて寝ていた女だが、バンは縁石に乗り上げてその反動で落下して死亡』。』

どうやったんですか、これ!」

思わず読み上げた珠世が突っ込む。最後のバカ死は、今までとは方向性の違うバカだった。

「これは本気で私というかその女以外、どうしろと言うんだ!」

これには無惨も逆ギレではなく、本気で困惑して突っ込むし、珠世も癪だが同意だった。

まずどうやって無惨にやらすかではなく、どうやってこの女がやったのかを真剣に知りたい。

「変化は嫌いですが、進化はし続けてきたんでしょう?」

だが鬼灯は、無惨はもちろん珠世や他の獄卒達のガチな疑問に答えず、最初の無惨のダーウィン賞に関する勘違いで発したセリフを取り上げて、ロープを構えて言った。

「どうしろと? やるんですよ。出来るまで」

「……車の屋根に寝ながら運転ということは、腕か足がもつと長くな

いとむずかしいですね。

関節を外して引つ張れば、1メートルくらいは伸びますかね？」

無惨の突っ込み兼ガチ疑問に、「雨が降るまで雨乞いの踊りを踊り続ける」みたいな理屈で答える鬼灯。

それを止めるどころか、かなり怖いことを言つて協力体制を取る狛治。

どうやら先程の、「妻を追い出しどころか、ゴミ箱に詰める」発言でまだキレているようだ。

そんな補佐官コンビに無惨と獄卒は本気でビビるのだが、珠世は「そうか！ その通りだわ！」と斜め上の納得をして、彼女もしのぶが開発した累の兄の毒で短くなった手足を回復させるための薬を思い出し、それを応用しようと言いつ出した。

こうなったら、もう誰も止められない。

結果、流石に一日では無理だったが鬼灯の調教と、狛治と珠世の協力により手足を伸ばしたことで無惨は見事、「バンを運転しつつ屋根の上にマットレスを敷いて寝る」といういらぬすぎる高度なテクニクを三日で身に着け、そしてそのまま事故った。

そしてさすがに我に返った狛治は改めて、この動画は何の意味があるんだろうと思った。

もうゴキブリの時点で鬼灯もたぶん獄卒募集は諦めていたので、これはマジで珠世へのサービス回兼、輝哉あたりのボーナスにしかないと思う。

あの世コソコソ噂話【キャラクターの現在編】

【無惨の鬼のその後】

まず前提として、「鬼になった経緯」「鬼になる前の人間性」「鬼になつてから犯した罪」「人間の記憶を取り戻して、後悔や反省をしているかどうか」、これらの情報がない鬼は地獄に落ちたのかそうじゃないのかすら判断つけようがないので、本作には登場しません。っていうか、出来ません。

なので、手鬼や蛇鬼など名無しの雑魚鬼たちはもちろん、パワハラ解体された下弦たち、朱紗丸、矢琶羽などのネームド鬼たちも話題に上がるくらいはあるかもしれないけど、出番は諦めてください。

・魘夢

叫喚地獄の「火雲霧処」と大叫喚地獄の「唐×望処」に墮獄。

「火雲霧処」は「他人に酒を飲ませて酔わせ、物笑いにした罪」で落ちる地獄なので、「酒」を「夢」に置き換えて適用。

「唐×望処」は「病気で苦しんだり、生活に困ったりしている人が助けを求めているのに、助けると口先ばかりで嘘をついて、実際には何もしてやらなかった罪」なので、こちらも夢の中でさえ掌返しで人々を絶望させた罪が適用された。

本編の謀反後は、孤地獄に隔離されて本当に恋雪視点というコンセプトの狛治家の日常鑑賞という尊い拷問を受けている。

それ以外にも、未だに狛治を傷つけた、目を抉った（狛治の自傷だと皆が知った上で元凶許すまじという発想）ことで獄卒や元鬼殺隊の方々がマジキレの呵責に来る。

少なくとも、鬼滅原作で名前ありの元鬼殺隊は全員、本編の直後くらいに駆けつけて最低3巡はした。

・玉壺

人間の頃から動物虐待を繰り返していたので、「屎泥処」「闇冥処」「不喜処」「極苦処」など等活地獄をたぶんほぼコンプリート。

なお、鬼の頃の姿がアレすぎる所為で、狛治は刑場で何度も会ってるが未だに玉壺だと気付いてない。

・半天狗

大叫喚の小地獄をほぼコンプリート。

何故か「十六小地獄」なのに二つプラスされている「血髓食処」「十一炎処」は王や貴族など立場が高い、上の者専用の地獄なのでここだけは例外的に無関係なのだが、たぶんついでだからと雑な理由でここにもたまに落とされてる。

・巖勝（黒死牟）

嫉妬による罪は餓鬼道の分野なので、「刀輪処」くらいしか落ちる地獄がない。

お館様を殺して鬼になったことは、そもそも巖勝は鬼殺隊にもお館様にも縁壺にも恩を感じていないのと、実際に縁壺に助けられなかった方が彼は救われていた為「恩を仇で返した」にはならず、「吼々処」に墮獄とはならなかった。

なので変則的だが餓鬼道と刀輪処を行ったり来たりするはずだった（鬼灯原作で「地獄と比べたら餓鬼道の方がずっとマシ」という描写がある為、「餓鬼道に落ちるから地獄はなしで」というのはない、逆はまだあり得ると思われる）が、人間の記憶を取り戻したことで狛治と同じく人を食った事実がトラウマとなり、食事という行為そのものが受け入れられなくなつて餓鬼道の意味がなくなり、仕方ないので刀輪処で粛々と刑罰を受け続けている。

そして盆と正月に縁壺が面会にやって来る。

縁壺とは話すどころか、来ても背を向けて無視し続けている。

「鬼を屠ったことが助けられた側からしたら重要で、動機は私の自己満足だったことが関係ないように、私が己の罪と向き合つて刑を受けようが、今までと同じ呵責の受け方なら、被害者にとつても今までと同じく納得できないだろう。

だから、そこらの大岩が私の犯した罪の象徴、被害者に見えるよう

に幻術をかけてくれ。

その岩を刑場の最深部から刑場の出口まで、獄卒の呵責を受けながら、底いながら運び出せば少しは私の贖罪が被害者に伝わり、納得してもらえらると思うのだ」

本編のお盆の後、鬼灯に上記の呵責内容を希望して鬼灯はこれを受諾。

現在はやはり「刀輪処」で黙々と、今まで縁壺を盾に見ていなかった被害者と己の罪に向き合って、刑罰を受け続けている。

きつと彼が最後に運ぶ岩の幻は、黒曜石のような瞳を持った妊婦。彼女を刑場の外まで助け出した時に見えるものは、幻ではなく許しの光。

・ 獺岳

恩を仇で返した者が落ちる「吼々処」に墮獄。

そしてじいちゃんこと桑島さんはここの獄卒。死ぬ直前も死んでもからも善逸の努力を認めず、口汚く罵り続けたことにじいちゃんがキレた為、今日も元気にシバかれています。

・ 鳴女

ファンブック2にて人間だった頃の詳細が発覚したことで、地獄落ちが決定しました。

ギャンブル狂いの夫を金槌で殴殺してしまった辺りは、情状酌量の余地あり扱いだが、その後「人を殺した後の演奏が称賛されたから」との理由で、琵琶を演奏する前のルーチンとしての殺人は完全にアウト判定を食らった。

ただ、このサイコな動機に当てはまりそうな地獄が見つけれなかったため、等活地獄の名前だけが伝わっている詳細不明な地獄のどれか辺りにいると思っただけ。

あとこれは完全な余談ですが、感想スレとかではネタ扱いですが「鳴女さん、ロックすぎ」みたいな感想を見るけど、私は仕事前の殺しはモチベやテンション上げる為のものとか、そういう前向きな意味で

のルーチンではなく、ただ流されるがままに「これやったらいい結果だったから」という思考停止ゆえのルーチンだったと思ってる。

このコソコソ噂話を読んだ瞬間、私にとっての鳴女の印象は「胡蝶姉妹と出会わなかったカナヲの末路」だった為、そういうイメージなんでしょう。

唯一「自分の意思」で起こしたのが夫の撲殺で、その罪悪感や犯罪がばれることへの恐れや焦りが良い結果で終わってしまったからこそ、元々意志薄弱だった彼女は完全に思考を停止させてしまったんだと私は思ってます。

・珠世

功績は大きいですが、本人が贖罪を望んだので狛治と同じ「殺した数だけ殺される」罰を受ける。狛治より古株なのと自暴自棄になってやんちゃしてた時期があった所為で、狛治より長いがそれでも2年ちよつとくらいで刑は終わり、現在は閻魔庁に医務室作ってそこで医者をやってる。

しのぶと同じく薬物研究でスカウトされたが、毒より薬を作って人を癒したいという意思が結果的に尊重された。でもたまに、しのぶさんとノリノリでえげつない効果の毒を作ってる。

・愈史郎

懸念通りマジで鬼のまま現代まで生きていたので、原作最終回の通り現世で珠世様だけを描き続ける画家をやってて、あの世からは現世の妖怪扱い。

あの世の存在は知っており、鬼灯とも面識あり。本作では無惨戦後、獄卒が珠世様のその後などを伝え、鬼のままあの世に移住することも可能なことを伝えられた後に、炭治郎の所にお見舞いに来てた。

あの世に移住する気満々だったが、炭治郎からの「死なないでください」という頼みで改めて、このままただ移住するのと自殺するのに違いがあるのか、珠世は自分がそんな生き方と死に方をして喜ぶのかと考えた結果、まずは自分が納得するまで現世で生き続けようという

結論を出した結果があれだよ。

なお珠世は罪を償い、獄卒として働き現世に行く許可が出て真つ先に会いに来てくれたのだが、周りが気を遣っていた結果、愈史郎の作品を知らなかった為、ドン引いた。

そして愈史郎の腕が良すぎる所為で珠世はある意味有名人になっているので、滅多に現世に來れず愈史郎に会えない弊害が生まれているが、どう考えても自業自得。

ファンブック2にて、「珠世が夫と子供のことは忘れられないのわかってるから、告白はしない」「生まれ変わったら夫婦になって欲しいという約束を交わした」ということが判明。

一応珠世は罪は償ったが天国永住権を得てない、今はうたや縁壺の子供と同じ長い転生までの猶予期間なので、この約束は果たされる可能性があります。

・茶々丸

愈史郎と同じく鬼猫のまま現世で生きていますが、同時にお迎え課の獄卒で火車の弟子。ちなみに茶々丸も鬼灯世界の動物たちと同じくしゃべります。

獄卒なのは、愈史郎と四六時中一緒はウザいと思っっているから、仕事という口実で離れる時間と珠世に会いに行くため。だけど地獄に移住しないで現世で愈史郎と未だに一緒に暮らしているのは、現世で生きると決めた愈史郎を一人取り残すのは後味悪いという腐れ縁。

・響凱

人間の頃も鬼になってからの事もあまり描写がないけど、とりあえず自分を馬鹿にした知人をカツとなって殺しているの、「極苦処」あたり落ちたと思われる。

ただし炭治郎のおかげで反省して模範囚だったので、現在は刑務を終えて自由の身。生前、挫折してしまった伝奇小説をコツコツと書き続けている。

・母蜘蛛だった女の子の鬼

年齢といい状況といい、鬼になってからの殺人は正当防衛に近い不可抗力と判断され、後悔と反省もあったので無罪放免。

母親と再会してその後しばらくあの世で平穏に暮らすが、母娘共に天国永住の判決がもらえる程の徳はなかった為、母親と同時期に転生。なので、本編で登場することはないです。

・浅草の人

普通に人間化薬で人間に戻って、妻と仲睦まじく子宝にも恵まれて幸せに天寿を全うして天国行きか転生したとかじゃないと許さないぞ、原作。

・沼鬼

「16歳になったばかりの少女だけを執拗に狙って食い殺した」のは、弱い者を狙ったと判断して等活地獄か、拗らせた性癖と判断して衆合かで十王の裁判で物議をかもした。

結果、性癖と判断されゴールデンボールが抜かれる「大量受苦悩処」に墮獄。

・弥栄（姑獲鳥）

お手本のような代理によるミュンヒハウゼン症候群だったので、「唐とうきぼうしよ望処」（病気で苦しんだり、生活に困ったりしている人が助けを求めているのに、助けると口先ばかりで嘘をついて、実際には何もしてやらなかった者が落ちる）と、「金剛こんごうしうしよ嘴鳥処」（病気で苦しむ人に薬を与えるとayingっておきながら与えなかった者が落ちる）にストリート墮獄。

……下弦の壺、唐望処に二人もいたのかよと今更になって気付く。魘夢の謀反時は金剛嘴鳥処にいたと思ってください。

ただ、唐望処にいたとしても謀反に参加してたかと言えば微妙。こいつの性質上、悲劇のヒロイン気取って受けて当然の呵責を理不尽な暴力と脳内変換して一人で悦んでそうだから。

「下弦の壺、拗らせたDMばっかか!!」

なお、娘であり弥栄最大の被害者である紗江ちゃんは、櫛さんがしばし面倒を見て本物の母性による愛を得た後、弥栄が不死川に退治される前に転生しました。

旦那の方は「吉備津の釜」の正太郎とほぼ同じことをしてたので、たぶん「吼々処くくしよ」にいます。……小地獄は違うとはいえ、夫婦そろって大叫喚地獄に墮獄してんのか。まさしく、割れ鍋に綴じ蓋だったんだな。紗江ちゃん、マジで可哀相。

・ 佩狼

情報不足で本編後の設定が決められないキャラはそれなりにいるけど、彼の場合一番重要な情報がおそらくはこの先も確定することはないので、何で書けないのかという理由を明記しておきます。

人間だった頃は新撰組、それも戊辰戦争まで参加していたことがほぼほぼ確定なんですけど、彼の正体が歴史に名前が知られていないモブ組員だったのか、それとも鬼の副長だったのかで大きくその後が変わってきてしまうからです。

モブでも副長でも、人間の記憶を取り戻しているのなら、普通に鬼になって犯した自分の罪を悔やんで贖罪して、100年後の今は自由になってもおかしくなさそうなんですけど、モブなら煉獄外伝での描写のみの人物像、副長なら史実やら世間一般のイメージと佩狼のすり合わせが必要なので、マジで正体がどっちかで設定が結構変わりそうなの、本編に登場どころか名前が上がる可能性もかなり低いです。

佩狼は普通にわりと好きなキャラ、特に頭に昇った血を銃で物理的に抜くあの奇癖は鬼灯世界と相性がいいので、出せないのは私も残念ですが上記の理由で納得していただけたらありがたいです。

・ 綾木 累

本編通り、幼さと環境故に倫理観をちゃんと学べてなかった所と、死後はちゃんと反省している点が情状酌量の余地とされ、通常の刑罰を受けることはなかったが、無罪にするには犠牲が多すぎた事から1

00年という異例の長期間、賽の河原で石積みという罰を受ける。

その期間中、実の両親とは手紙のやり取りと盆の期間中に会うことは許されたが、それ以外の接触は禁止されていた。

現在はその罰をやり遂げたことで両親と再会。天国永住権は両親ともにもらえていないが、だいぶ転生までの猶予はもらっているので、親子水入らずで平和に過ごしている。

原作というか鬼の頃と違って、性格はだいぶ気弱で内向的。これは小学校入学して初っ端、自分の無神経な言動で竹雄達の反感を買った為、罪悪感と自己嫌悪で自分の言動に自信を無くしているから。

本質的には普通に良い子なのだが、病弱でそもそも叱られるようなことをしたくても出来なかったから叱られたことがないという環境、つまりは変則的な優しい虐待を受けていたようなものなので、実は未だにナチュラル自己中な所がある。

もちろんこれは人生経験の少なさから生じたものなので、親が真つ当なのもあって徐々に改善してゆくとされるが、まだ教育不足だからか凶々しかったり無神経な部分が時々飛び出る。

とりあえず、竹雄達に嫌われているのをわかっているのに、炭治郎たちに駆け寄ったのはそういう上記の事情。

本編後は竹雄と花子と完全和解して友達になる。

生前よりマシだが、今も病弱な部類なので部活は手芸部で花子と一緒に。さりげなくフラグを立てているのかもしれない。

・謝花 妓夫太郎・梅

本編で説明した通りの経緯と判決を経て、そこそこ可愛げはあるが、まだまだ問題ありな子供程度にまで更生して、胡蝶家に引き取られました。

しのぶの両親はさすがに急すぎたのでちよつと戸惑いましたが、もちろん大歓迎。梅だけではなく、「男の子も欲しかった」と言って、妓夫太郎のことも同じくらい可愛いと言って歓迎した為、妓夫太郎は大いに戸惑ったが梅はそれで彼らを信頼して、慕うようになります。

カナエさんに関しては、帰ってきた瞬間に「きゃあああーっ!!」

と歓喜の悲鳴を上げて、悲鳴嶼さんみたいに「しのぶ……ありがとう……ありがとう」と拝んだ為、兄妹だけではなく実の妹からも引かれた。

あと同じような立場であるカナヲにも連絡して伝えたら、カナヲと一緒に炭治郎もやってきて、炭治郎は子供化している二人にビツクリ。

妓夫太郎はひたすらに気まずい思いをしたけど、梅は炭治郎に「嘘つき!」といきなり言い出し、泣き笑いながら「味方してくれる人はいたわ! 助けてくれる人はいた!! だから……だから……あたしたちはここにいる!!」と、自分たちの最期の喧嘩を止めた時の炭治郎の言葉を否定した為、炭治郎も泣きそうな笑顔を浮かべて、「そっか……。嘘になって良かった」と、彼らの現在を祝福した。

苗字の「謝花」は、学校に通うことになったのでつけた。

胡蝶家は完全に養子にする気満々だったが、二人はまだ人間不信を克服した訳ではないので、素直には言わなかったが、「胡蝶の苗字をもらったのに、捨てられたら耐えられない」という思いから別の苗字を選択し、カナヲと同じやり方で苗字は決定。

妓夫太郎は小学生で煉獄のクラスに編入。つまりは累と竹雄と花子のクラスメイト化する。

竹雄が炭治郎そっくりなので、これまた気まずい思いをするが、賽の河原で同じ刑期で親しくなった累が橋渡しになってくれたことと、部活を竹雄と同じ鎖鎌部を選択したことで徐々に親しくなっていく。

梅は幼稚園児で、鱗滝幼稚園の義勇のクラスに編入。母々子や丙、閻魔大王の孫と同クラス。

担任が義勇ということ、胡蝶家は梅の送り迎えをしのぶに一任してしのぶはキレル。そして梅も、義勇との関係をニヤニヤしながら察して、花魁の経験を生かしたアドバイスを送るので、しよっちゅうしのぶからグリグリ攻撃でお仕置きされる羽目になる。

その後は定期報告も兼ねて、ちよくちよくしのぶに閻魔庁へ連れて行ってもらえるようになり、梅は座敷童との交流を深めて親友にな

り、座敷童に対してのライバル心を完全になくしました。

これは座敷童が「私たちは永遠に子供だから、鬼灯様の『娘』になれても、それ以外にはなれない」と言われたから、安堵と同時に彼女たちに申し訳なく思い、だからこそ自分が本当の大人になってもずっとずっと友達だと約束した。

あと、マキミキの存在を知って、ライバル認定がそちらに移ったのもある。特にマキに対しては完全に敵認定しており、それが原因で梅はアイドルを目指す。

妓夫太郎は学校に行って勉強をさせてもらうことで地頭の良さを発揮し、勉学の楽しさを知ったのと、胡蝶姉妹が自分の先天性梅毒をどうにか出来ないかと奮闘してくれているのを知って、自分も薬学の道に進みたいと思うようになり、しのぶの研究室に入り浸ることになる。

鬼だった頃が毒使いでもあったので、しのぶのように毒の研究をするか、カナエのように薬の研究をするかで悩んだ末に、梅の「どっちでもいいけど、お兄ちゃんの病気は治って欲しい」の言葉で薬を選び、まだ遠い未来だが彼も極楽満月に就職する。

もうその頃の彼は、流されて影響を受けやすい妹の為に、一番妹に影響を与える自分が「良い子」であろうとするのではなく、元からあったのだから環境故に梅にしか発揮できなかった、「誰かの為に頑張れる」という本質で動いていたことは自覚できてないまま、白澤の尻を蹴り飛ばして知識を搾り取りながら、薬剤師の道を歩んでゆく。

そして妹の方はというと、衆合の囚役兼闇魔庁広報の公認アイドルというカオスな立ち位置を獲得し、花魁だった頃の教養を生かして文系は才媛、だけど理系は算数の時点でヤバイ、マキと並ぶクイズ番組でのお笑い枠として名を売り、兄と胡蝶姉妹は頭を抱える羽目になる。

まあ、とりあえず幸せそうでないよりだと思ってください。

【鬼殺隊と関係者たちのその後】

最終回で子孫と来世と思われる方々が大量に登場しましたが、本作では鬼殺隊の主要キャラは無惨討伐の功績と普通に善人だったので裁判で天国永住が決定している方々ばかりなので、一応最終回に登場した人たちは子孫か他人のそら似であって、生まれ変わりは基本いない設定。

本作とは矛盾しない設定、輝利哉がまだ現世で生きている事や、炭彦やカナタは炭治郎の子孫である事などは採用しています。

ファンブックなどで明かされなかった情報（義勇・実弥の嫁などは、鬼滅と作品自体まだアニメの2期などで動きがある作品な為、完結後も新たな情報が明かされる可能性がある）なので基本的に捏造設定を作り出すより曖昧なままにぼかしておくという方向で行くつもりです。

・ 狛治家

狛治は本編通り。

40年ほど前から彼は第3補佐官という役職を与えられているが、与えられる前から鬼灯の補佐に板が付きすぎて、仕事内容が全く変わらなかった為、本人その役職をすっかり忘れている。

つていうか他の獄卒も忘れてるし、閻魔大王も忘れてる。鬼灯様も年度末に、「そろそろ狛治さんに何か役職を付けないと……」と考えてから、第3補佐官だったことを思い出す。覚えてるの、第2補佐官の麻殻先生くらい。

恋雪は専業主婦。慶蔵さんは素流を地獄の獄卒たちに教えてる。たまに煉獄家と異種格闘技戦をやってるかもしれない。

狛治の父親は、生前面倒ばかりをかけた息子の為にできることを考えた結果、肉が食べれない狛治の為に家庭菜園で野菜を作り始め、今日も美味しい野菜を作りすぎている。

あと鬼灯様が狛治と恋雪の結婚祝いに送った金魚草を、贈られた本人たちは持て余していたが狛治父と慶蔵が気に入って育てたため、今では狛治家の庭にそれなりの数と大きさの金魚草畑があり、皆元気に

泣いている。うるさそう。

狛治と恋雪の母親に関しては、狛治の母親はマジで情報ゼロだし、恋雪の母親とは再会しても気まずさMAXなので、どちらもとつくの昔に転生したと思ってスルーしてください。

・煉獄家

キメツ学園での設定をあの世に持ってきた感じ。

たださすがに弟の千寿郎は学生じゃなくて社会人。兄と同じく教職。自分は剣の腕がなく剣士としては挫折してしまっただが、才能がなかったからこそアドバイスの的確なエルメロイⅡ世的な才能を發揮した結果、その才能を生かすために担当科目は体育。……兄弟で担当科目逆の方が良くね？ とは言わないであげて。

そして他のご先祖様たちはさすがに知らん。あんな同じ顔がいっぱいいたら、煉獄さん以外は本人同士も困りそうだから大半は転生してるんじゃないかな。

・不死川家

実弥は以前、活動報告で書いた通り等活地獄の獄卒。等活全般の拷問やら雑事をやってるはずが、いつの間にか不喜処の指導員というか飼育係の獄卒という立ち位置を確立してた。この人も伊黒みたいに、ツンデレを不喜処の動物たち（主にシロ）に暴露されてると思う。

玄弥は今はまだに獄卒のバイトという立場だけど、元々は彼の方が先に就職してた。けど暴力的に心配症で過保護なお兄ちゃんが、危ないし罪人とはいえ人を傷つける仕事に弟を就かせたくなかったので辞めさせた。

バイトは許しているのは、本作の捏造設定で「亡者が実体化して現世に旅行は、面倒な手続きやら費用が高額やらで敷居が高いが、獄卒だと研修や視察、お迎え課の手伝い名目で実体化して現世に行ける機会が多い」と、「亡者が実体化して現世にいけるようになるのは、獄卒でも死後100年たってから。理由は100年後なら身内や顔見知りと出会うことはまずないし、会ったとしても他人のそら似で済むか

ら」というのがあり、玄弥や他の兄弟の「現世行きたい」「現世のお土産欲しい」という希望までは却下できなかったから渋々。

でも玄弥にとっては現世行きたいこそが建前で、本音は兄に頼りたいし兄と同じ場所にいたいので、実は実弥が把握しているよりも隠れてちよくちよく他の部署でバイトをしに来てて、コツコツとキャリアを積んでる。

他の家族は天国在中でほのぼのと暮らしてる。実弥だけ、地獄の獄卒の寮で暮らしてます。

以前、活動報告で書いた当時は父親の情報がDVクソ親父としかなかったのでスルーしてたが、本誌で実弥そっくりなツンデレだった可能性が高まったので、彼に関してはコソコソ噂話で補足待ち。補足がなかったら、こちらでこじつけます。

ただ、父親が本当にツンデレなだけだったら実弥だけ寮暮らしの経緯を少し変更。

父親は実弥があこの世に来た頃には転生してあこの世にはいない。ただ転生の順番が来たからじゃなくて、「あいつは他の家族と自分がいるのを嫌がるだろうから」という気遣いだったこと、母親は夫の本心を理解して本当に愛してたことを知ってしまったので、その罪悪感から母親と他の家族から離れてしまったという感じに変わります。

ちなみにどちらの設定でも、今は母親とは普通に仲は良好ですよ。

彼の嫁に関しては、ファンブック2でも情報がなかったのに、まさかの「実弥↓カナエ」という可能性の補強が来た為、本作の「ほんのりさねカナ」は継続。

なのでお嫁さんには申し訳ないが、彼のお嫁さんは「善人だけど天国永住できるほどではなかったので、本編の時期には既に転生している」という設定にしていることをご了承ください。

なお、お盆の時期は玄弥と一緒に現世へ自分の子孫の様子を見に行くが、自分そっくりの子孫が玄弥そっくりの後輩と一緒にいるのを見て、兄弟そろって「お前、いつ生まれ変わった!」「え!?! あれ俺の来世!?!」「いや、お前がここにいるんだから来世な訳ないか!」「じゃああれ誰!?! 俺の子孫!?! 俺、いつ産んだ!?!」「俺が訊きてえよ! つー

か、お前が産むのか!？」と盛大にパニくった。

・ 桑野 匡近

天国在住で実弥が死ぬまであの世で見守り、裁判で結審が行われる日は天国の入り口で出待ちしてくれていたのだが、母親を殺したことや弟を守れなかったこと、挙句の果てに自分だけ生き残って妻子を得たことが幸福だからこそ大きな罪悪感となって、天国行きの判決に納得できず、地獄に墮とせと駄々をこねていた実弥は、キレた鬼灯によってブン投げられて天国にシュートされ、そのまま待っていた匡近に激突という感動もクソもない再会を果たす。

今現在も仲は良好の親友。実弥がああ世に来た当初は、彼と彼の家族の仲を取り持とうと尽力し、実弥が仕事を理由に家族と疎遠にならないように、一緒に獄卒となった。

そんな理由で獄卒になったので、元は同じ等活地獄で働いていたが、今は衆合地獄に勤務している。

これはまだぎこちなくはあるが、それはただ単に照れているだけというくらいに実弥の家族仲が改善している事と、不喜処で動物の世話という罪悪感ではなく自分の楽しみや好きなことを仕事にしている事に安心したからと、20年ほど前に結婚して、嫁が衆合地獄の獄卒だからそのボディガード役として部署異動を希望したから。

嫁さんは、弟切さんの娘さんで彼女が新卒で入ってきてすぐに一目惚れ。

その時横にいた実弥に、「さ、実弥！ どうしよう、可愛い！ 綺麗！ 美人過ぎる!! いやあの一族は皆美人揃いなのは知ってたけど、あの子は別格だよ空気が違うよキラキラ煌めいてるなに天使？ 弟切さんは天使も落としたの？ できそうだなあの人なら。それはともかく、マジでどうしよう胸がどきどきしてヤバイマジでヤバイああああああ生まれる前から好きでしたー!! 結婚してください!!」と、実弥が突っ込みを入れる間も止める間もなく、初対面で土下座プロポーズをやらかした。

……ごめん、匡近。小説でやたらとモテたがっていたから、私の中

で君のイメージは割と善逸寄りなんだ。

そんな親友もドン引きさせたプロポーズだったが、告られた側は父親がアレだからこそ、初心で不器用ながらも真つ直ぐで一途な彼に好印象を懐いて、「結婚はさすがに無理ですね。まずはお付き合いしましょう」と、何とそのままカップル成立。実弥は「正気か!? 考え直せ!」と思わず彼女を説得し、匡近自身も「嘘お!? マジで!」と衝撃を受けていた。

そして数年後にあの忍者屋敷のトラップをかいくぐって、「お義父さん!! 娘さんを俺に下さい!!」というミッションをやり遂げて無事結婚。

今も嫁さんとはラブラブで、実弥によく「結婚はいいぞ」。実弥も早くカナエさんと結婚しろよ」とにやけては、「俺は生前に結婚した既婚者だっつーの」と突っ込まれている。

・悲鳴嶼 行冥

この人も活動報告で書いたまま。

原作で養い子たちが迎えに来たから、三途の川で再会というくだりがなくなっただけで、後は以前と同じく死後の裁判で沙代の真実を知り、彼女を信じてやれなかったことを激しく悔やみ、その罪滅ぼしとして「子供の努力を台無しにする」という、自らが最もやりたくない職務である賽の河原の獄卒を望んで就任。

だけど根の優しさゆえに積んだ石を崩すことが出来ず、子供の前で泣きながら棒立ちするしかないのだが、白目で号泣する2m越えの大男を目の当たりにした子供たちは恐怖で絶叫号泣鬼灯様大絶賛という、本人が意図しない方向で活躍中。

・嘴平家

伊之助は動物枠で不喜処に就職。私はこれ以外にする気は一切ない。

実のお母さんとも、イノシシのお母さんともあの世で再会しており、不喜処ではイノシシ母と一緒に仕事して、終われば琴葉さんとア

オイちゃんが待つ家に帰ってる。

炭治郎や善逸と違って、彼だけ獄卒として働いているのは、ただ単に二人と違って戦ったり暴れ回ることが好きなので、普通に拷問役としての獄卒に向いているからと、せっかく彼らやアオイちゃんのおかげで人間らしくなったのに、天国で特に規則もなく好き勝手暮らすようになったら、また野生に戻ると周囲に危惧されたから。

ちなみに琴葉さんは、最終決戦時で霊界通信によるバフ効果を期待して現世に派遣されてたはずだが、忙しすぎて獄卒が琴葉さんをちゃんと見てなかったのと、ちよつと頭がわりとアレだったのでいつの間にかあの世に帰って来てて、童磨戦を浄玻璃の鏡で獄卒たちと一緒に観戦してた。

途中で鬼灯たちが気付いて、「何でいる!?!」と激しく突っ込まれたが、当然本人は何が何だか未だに何にもわかってない。

アオイちゃんは伊之助と未だに喧嘩ツプルな感じで、口うるさく面倒を見ているし、なんなら姑のはずの琴葉さんの面倒も彼女に生活力がなさすぎるから、放っておけなくて見ている。

嫁姑の仲自体は良好。琴葉さんはちよつと怒りっぽいけど、生前の旦那や姑のような理不尽な罵倒ではなく、自分や伊之助を思っているからこそこの叱責であることを理解している為、アオイちゃんのことを好き好き大好きでめっちゃ懐いている。

アオイの方も普通に琴葉の事は好きだし、生活力はないが母性の塊である琴葉を姑ではなく母親として慕っているくらいなのだが、彼女がとびっきりの美人であることと、享年が自分よりはるかに若い為に、伊之助の嫁は自分ではなく琴葉の方だと勘違いされることが多々あり、その事に劣等感やモヤモヤした不満を抱えて、そしてその劣等感や不満を懐く自分に激しい自己嫌悪の悪循環を起こしている。

・時透家

基本は家族全員、生前と同じような生活を天国で送っている。無一郎は暇潰しと鬼殺隊の仲間達に会いたいという理由で、たまに獄卒の

バイトをしている。

有一郎は自分の死後の裁判で、どここの庁でも自分を生き返らせろ、弟の元に帰せと駄々をこねまくり、現世に帰ろうと脱走を試み続け、理由が全面的に弟の為だったので十王や獄卒たちも厳しい手段を取れなかったのだが、もちろん鬼灯は甘くなく、拳骨落として説教して大人しくさせた。

その後は実はお迎え課に就職してたが、これは弟が死んだ時に職権乱用して無理やりでも生き返らせるつもりだったから。なので、原作の「帰れ！」ですよ。無理言うな。

もちろんこれも鬼灯様にばれて、櫛さん直伝の尻100叩きの刑に処されてから鬼灯が本格的にトラウマ化して、獄卒を辞めて鬼灯を避けまくっている。

・ 鱗滝 左近次とその弟子たち

死後、手鬼に殺された自分の弟子たちが約束を守って狭霧山に帰ってきてくれたことを知り、自分は子供が好きなんだと自覚して子供を育てる仕事に就くことを望むが、自分の所為で13人の弟子が犠牲になったトラウマから「教師」という立場にはどうしてもなれず、結果幼稚園の保父さんになった。そしてそのまま順調に出世して、今では園長先生。なお、天狗の面は今でもつけてる。外せよ。

弟子たちは鱗滝さんを慕っているので、同じく保父さん保母さんになった。少なくとも、錆兎と真菰と義勇が鱗滝園長の幼稚園で今も働いている。

義勇のコミュ症ぶりは錆兎と真菰がフォローして何とかなっている。っていうか、幼児のあっちこっちに飛ぶ話でも義勇は大真面目にちゃんと聞いて、そしてやはり大真面目に受け答えをするので、保護者からはともかく園児からは割と人気だったりする。

あと鱗滝さんと義勇さんは手先の器用さを存分に発揮して、年々幼稚園内の飾りつけやお遊戯会での大道具や衣装のクオリティが上がりにまくって、やっぱり錆兎と真菰に「手加減しろ」と怒られている。

そして鱗滝さんの弟子じゃないけど、義勇・錆兎と同期&水の呼吸

繋がりで、たぶん村田さんも保父さんやってるんじゃないかな。

・富岡 義勇

上記の通り、鱗滝さんが園長を務める幼稚園で保父さんをしてい
る。

最終巻で結婚して子供を得たことが判明したが、ファンブック2で
こちら情報もゼロ。そして「義勇↓↑しのぶ」の両片思い補強の情
報がブチ込まれたので、こちらも同じく「ほんのりぎゆしの」は継続。
彼のお嫁さんも申し訳ないが、「天国永住権が持てる程ではなかつ
たので、本編時点で転生済み」だということにしておいてください。

ちなみに、しのぶさんが義勇さんは生前に結婚したことを、彼があ
の世に来て20年以上経つまで知らなかった。

知った経緯も、義勇死亡から約二十数年後のお盆のすぐ後になんと
なく機嫌の良い義勇さんとたまたま出会って、「何かいいことがあつ
たんですか？」と訊いたら、「現世で孫が生まれた」と答えられたから。
この答えに、しのぶさんが目玉がすっぱ抜けそうぐらいに驚いたの
は言うまでもない。

なお、同じく義勇さんが結婚して子供もいたことを同じく知らな
かった姉にしのぶさんが伝えたら、カナエさんは真顔で「ええっ?!
しのぶ！ いつ産んだの!？」と言い出し、しのぶさんのマジビンタが
姉に炸裂した。

・富岡 蔦子

死後は家族で暮らしていたが、義勇があの世界にきて十数年後に両親
が転生。

蔦子は弟を自分の命に代えて守った事、義勇は言わずもがな鬼殺隊
としての働きで天国永住が認められていたので、少し寂しく思いなが
ら姉弟二人暮らしをしていたが、数年前に長年の遠距離恋愛の末に国
際結婚した。

夫はギリシヤの渡し守、「カロン」。ただ本物ではなく、ペルセフォ
ネプロデュースの代行者である美少年。

30年ほど前に日本に観光旅行に来ていたカロンが道に迷っていた所を蔦子が助け、その際にカロンに一目惚れされて、文通から付き合いが始まり、最近ようやく結婚して今現在はギリシャに住んでる。出会いから結婚までに時間がかかりすぎたのは、遠距離と文化の違いにより価値観のすり合わせなどに時間がかかったのもあるが、弟である義勇が一人暮らし出来るように教育した期間も割合としては大きい。ちなみに、義勇は姉の結婚を祝福して賛成していたので、悪気の類は一切ない。

なお、生前結婚するはずだった婚約者とも再会したが、相手は普通に蔦子の死を悲しみ、普通に時間をかけてその悲しみを乗り越え、普通に新しく愛した人と結婚して生涯を終えた為、わだかまりなどはない。

婚約者側があので世で再会した時に申し訳なさそうに謝っていたが、蔦子は純粹に祝福して喜んでいた。

・胡蝶家

姉妹は本編通り。

両親など他の家族は日本の天国で（ものすごい気軽にちよくちよく行ってるから忘れがちだけど、白澤様がいる桃源郷は言ってみれば中国の天国です）薬屋やってる。あとカナヲどころかアオイちゃんやかんたん三人娘もナチュラルに娘扱いで可愛がってる。

そして姉同様、義勇との仲をおっとりとしのぶの主張をナチュラルスルーして応援してる。話聞いてあげろよ。

・宇髓家

宇髓は獄卒。衆合で女の罪人相手に囚役兼拷問したり、しのぶたちと同じく毒物研究やら爆弾を新しく作ったりと広く浅く色々な部署でなんかやってるけど、メインは黒色鼠狼処でネズミのトレーナー。ムキムキねずみが量産されているのか、あの地獄……。

そして嫁3人も同じく獄卒。衆合の囚役をメインに、こちらも広く浅い業務。

どの仕事も「地味だ」と言っただけで不満そうだけど、真面目にやってる。というか、獄卒やつてる理由は実体化して現世に行くため。新しいものに興味津々なので、鬼滅キャラの中で一番現世に行きたがってる人。

だけど死んだのが結構あとなので、たぶんあと十年ちよつとは現世に行く資格が得られない。だから既に現世に行ける狛治達が視察で現世に行く時は、お土産を大量に頼んでる。

趣味で絵やら彫刻やらの芸術活動もしているので、実は本編開始時の時点で既に茄子と知り合ってる。けれど、展覧会などの繋がりで知り合い、お互いに獄卒だとは思ってなかった為、職場で再会した時はお互いに「獄卒!？」嘘だろ、おい!？」という反応（特に宇髄の方が真剣に）をした。

・伊黒 小芭内

あの世での職や人間関係は本編通り。

鬼灯の世界観無関係の独捏造設定だけど、本作の伊黒と煉獄兄弟は幼馴染という設定。

煉獄父が伊黒家の事情を知らずに、「生き残り同士の身内」だと思っただけで、再会させたのが最悪の裏目に出たことを申し訳なく思っただけで、あ後は煉獄家に引き取られたと思ってる。で、呼吸の適性が水よりだったので、それが判明した頃に水の呼吸の育手に預けた感じ。

・伊黒の従姉妹

ファンブック2にて生き残った従姉妹は、鬼が人を殺して奪ってきた財産をそのまま相続し、あの屋敷で悠々自適に暮らして、結婚して子供にも恵まれたというドン引き事実が判明した為、現世ではなかった因果応報を見事にあの世で受けました。

って言うか、伊黒家は基本的にみんな黒縄地獄の「畏熟処（貪欲のために人を殺し、飲食物を奪って飢え渴かせた者が落ちる）」、もしくは大叫喚地獄の「随意圧処（他人の田畑（財産）を奪う為に嘘をついた者が落ちる）」や「人閻煙処（十分な財産を持っているのに、嘘をつ

いてだまし取ろうとする者が落ちる」などに墮獄してます。

彼女もあんな家に生まれたら、蛇鬼に従う以外の生き方なんか出来ない、あの時代に幼い女一人で生きるのなら出所はどうであれ金は必要なのは正論なので、情状酌量の余地はあるっちゃあつたんですが……、伊黒さんを加害者扱い、自分は被害者という認識を改めない限りは呵責が終わらないでしょうね。

・ 鑄丸

カナヲに引き取られて、彼女の友達として家族としてそして盲動蛇として過ごし、天寿を全う。

動物なので死後の裁判はないが、動物好きな初江王が生前から気に掛けない訳がなかったので、死後すぐに彼の計らいで伊黒と蜜璃に再会。

今現在は生前と同じく伊黒と一緒にだが、カナヲももちろん大好きなので、ちよくちよく遊びに行ってる。

・ 甘露寺 蜜璃

伊黒と同じく、職などは本編通り。

こちらも同じく本作の捏造設定だが、蜜璃の家は藤の花の家紋で煉獄家とはご近所さん。っていうか、そうでもない蜜璃が鬼殺隊の存在を知った経緯の説明がつかない。

煉獄家とご近所だったので鬼殺隊入隊の相談しに行ったら、炎の適性があったのでそのまま煉獄に弟子入りした。

ご近所さんだけとお隣レベルではないし性別も男女なので、煉獄兄弟とは弟子入り前までは顔見知りくらいの関係で幼馴染ではない。だから一時期、煉獄家にいたはずの伊黒と面識を得たのも柱になってから。

・ 産屋敷家

お館様は獄卒。秦広庁で小野 篁の補佐をしてる。つまりは狛治と同ポジション。

秦広王は篁と違って真面目で穏やかで有能な部下に喜んでいますが、時々飛び出るぶつ飛んだ闇の深さにちよつと怯えてる。

死後は病が治ったというより、一番健康だった時期の姿になっている。つまりは見た目、14、5歳。

虚弱体質であることは変わってないが、それでも生前よりは動けるし、死んでも生き返るとヤバすぎるポジティブさを発揮して、結構活動的。この人も宇随ほどではないけど現世の新しいものに興味を持ってるので、現世視察は積極的に行く。

あまねさんは生前、自分の代わりに働かせすぎたとお館様が思っており、あまねさん本人はどっちでもいいのだがお館様が気にしているからという理由で今は専業主婦。

子供たちには「自由にしなさい」と言っているのだが、親譲りの闇の深さからか全員結局獄卒に。でもやっぱり虚弱体質なので、現場で拷問はせずに記録課などの事務員として働いている。

・桑島 慈悟郎

死んだ直後は獺岳が鬼になったことへの責任感で鬱状態だったが、善逸の健闘で気力を取り戻し、そして獺岳の善逸に対する罵倒と見当はずれな嫉妬にブチ切れて、善逸を三途の川で現世に送り返した直後、獄卒に就職を希望。そして即時採用。ついでに全盛期の姿に若返って、獺岳の性根を今度こそ叩き直そうと日々奮迅してる。

じいちゃんとしては最初こそは善逸を見下し、嘲り、罵ったことにキレていたが、現在は自分が「獺岳の価値を正しく評価しないクソジジイ」でいいから、善逸が獺岳を兄弟子として尊敬して慕っていたことを素直に受け入れて欲しいと真摯に願っている。

その結果やっтерることが呵責なのは、獺岳まったくまだ反省してないのと、生まれ育った時代柄、じいちゃんにとつて躰罰だし、地獄でその認識を現代風に直してくれる人は鬼灯を筆頭にいないから。獺岳、反省するのが一番幸福への近道だぞ。

善逸が天寿を全うした時はお迎え課に頼んで自分も迎えに行つたが、若返った姿だった為善逸はじいちゃんだと気付けず、それどころ

か感涙しながら自分に抱き着こうとする知らない男に「誰っ!? 誰なの!？」とガチで怯えられ、じいちゃんもマジで凹んだ。それ以来、普段は享年の姿、キレた時は若返るようになる。

・ゲスメガネ（前田 まさお）

漢さんに見られて1秒でジャブを食らったぐらい、衆合地獄落ちがほぼ決定事項なアホだったが、縫製係としての腕が良すぎて功績がありすぎた為、簡易地獄で済んだ。いや、結局落ちとるやんけ。

その後は、衆合地獄に就職。そこで誘惑役の衣装デザインや誘惑方法の企画立案などを手掛け、なんか毒をもって毒を制する的な適材適所ぶりを発揮して、今日も地獄の風紀委員の不死川さんにボコボコにされてます。

・半天狗裁いたお奉行さま

キャラは強いけど名前も判明していないし、名奉行過ぎて閻魔大王どころか他の十王のキャラも食ってしまいそうなので、本編には話題が上がる程度の登場しかせません。

転生してもいいけど、転生してないもしくはする前は鴉天狗警察に就職してた。生前は身分が高すぎて奉行という現場に出ない立場だったけど、正義感が強いので本当は現場にバリバリ出る職に就きたかったからという設定。

・刀鍛冶の方々

転生してない限りは、地獄の技術課で武器を作ってるか、個人で武器屋を営んで作ってるかと、基本は生前通り。

某37歳は地獄の技術課所属で、その並ならぬ拘りに相応しい武器の出来は称賛されているが、武器が壊れたらキレル所も健在。

だけどキレて刃物持って追っかけ回したら、鬼灯様の金棒が飛んでくるので生前よりはマシ。騒動が早めに終わるって点で。37歳、何も反省してねえ。っていうか、何度鬼灯様にシバかれても改善しないって、すごいなこいつ。

・継国家

兄弟の両親は下手したら縁壺が死ぬ前どころか巖勝がやらかす前に転生してるんじゃないかな？ たぶんその方が全員にとって幸福だし。

縁壺とうた、その子供は本編開始時の数か月前に転生している。縁壺は天国永住出来るだけの功績があったが、うたは善良だけど早世してしまっただからこそコツコツ善行を積んで天国行きにはなれなかった。うたのお腹の子供も同じく、つて言うか生まれてさえないのだからなおさら無理。

本来なら死んですぐに転生でもおかしくなかったが、彼女たちというより縁壺に対しての慈悲で長期間の天国での転生待ちをしていて、その期限が来たのを機に縁壺が本編で明かした通りの事情と一緒に転生しました。

転生前は天国で妻子と共に自給自足の穏やかな暮らし、たまに獄卒や元鬼殺隊やら義経やら脳筋なあゝの世の住人や亡者たちに乞われて剣術や呼吸などを教えてるといふ生活を続けていた。

無惨討伐後から穏やかに笑うことが多くなったとうたは語ったが、それでも地獄に訪れた時は悲しげに寂しげに「刀輪処」の方向を眺めていた。

転生後の縁壺は少なくとも今現在、赤ん坊にしては感情表現が薄いぐらいの普通に健康的な子供。

妙に泣かない子らしいが、産院を退院する時に同時期に出産された黒曜石のような目の女の子と別れるのを嫌がるように大泣きして、その子に頭を撫でられて天使のように笑って泣き止んだ。

それがきっかけで親同士が友人になり、今も二人の交流は続いている。

・竈門家

「働かなければダメになりそう」という考えの元、天国でも炭焼きをしている。

生前と違って生活自体は働かなくても出来るので、炭治郎はカナヲや善逸、禰豆子と一緒に天国中を旅してる時期とかがあって、手紙は送ってくれるけど現在地は不明というのをたびたび起こす。

竹雄と花子は、本編で書かれた事情で累を嫌っていたが、和解後は子供らしく仲の良い友達になった。

そして下の兄弟である茂と六太は、元々累に反感を持ってなかった（幼さと、最初のミスコミュニケーションがなかった）、累には最初から懐いている。

竹雄は小学校で鎖鎌部に入部し、兄譲りなのか割と高い投擲技術を持っており、もう一人と合わせて期待のエース扱い。

花子は手芸部で累と一緒に。裁縫には自信があったのだが、累の方が上手かったのがショックで、売り物になるレベルの裁縫スキル持ちの禰豆子に頼んで特訓中。

炭治郎とカナヲは、自分たちの子供があの世界に来るまでは炭治郎の両親や兄弟が暮らす家に同居していた。

子供も天寿を全うしてこちらに来てからはさすがに別居になったが、それでもすぐお隣に自力で家を建てた。

カナヲはもちろん、義理の父母や弟妹たちの仲は良好。ただあの世に来て挨拶を交わす時はガツガツに緊張していたが、最初からめちゃくちゃ可愛がられすぎた所為でパニックってテンパって何したらいいかわからなくなり、その後しばらくコインで行動を決める癖が再発した。

なお、炭治郎と結婚後も生前は禰豆子やアオイが、死後は炭治郎の実母が側にいた状態だった為、調理スキルが上がらず、未だに料理が苦手。そのことを誰も責めていないのだが、本人的にはすさまじいコンプレックスらしい。

・我妻 善逸・禰豆子

無事、禰豆子とちゃんと結婚してたことが判明した為、やっとここでも夫婦であることを断言します。

善逸はひ孫の燈子と面識があるくらいに長生きしたっぽいので、お

そらく彼の子供はまだ現世で健在と思われれるのと、善逸の過去からして家族に飢えているだろうから、今のところは嫁の実家である竈門家にマスオさん状態で同居。

炭治郎たちと同じく、子供がああ世に来たらすぐ近所に家を建てて別居予定。

女好きは健在なので白澤とやたらと話は合うが、禰豆子と結婚してからはあくまで他の女性は「目の保養」ぐらいにしか思っていない。セクシーな美人を見かけたら鼻の下を伸ばすが、それ以外は何もしないし、向こうから迫られても「妻がいるから！　めちやくちや可愛い世界一可愛い宇宙一可愛い妻がいるから!!」と妻自慢で撃退する、相変わらずの株の乱高下が激しい奴です。

禰豆子はたぶん、善逸のそんな清濁併せて全部を受け入れて大好きなんだと思う。

きっと、ドラえもんの静ちゃんみたいな心境なんじゃないかな。肝心な時にしか役に立たない奴だけど、肝心な時に役に立たなくなったらいい。誰に認められなくても、誰かの為に、誰かの幸せの為に何かを守って動ける人である事を知っているのだから。

あの世コソコソ噂話【質問回答&小ネタ編】

・粕治の食事情

「人を食べた」こと自体がトラウマの為、あの世に来た当初は食事という行為の時点でPTSD発症レベルで酷かった。

しかし家族から生前の恩返しと言わんばかりの献身的なサポートのおかげで、食事そのものに対しては思ったより早くに克服。

トラウマの根源が「人を食べた」ことなので、肉類はもちろん肉つばい触感の食べ物や人形焼きも見た目でアウトだったが、逆に言えば牛乳やてんぷらの衣などで使われた卵、煮干し鰹節でとった出汁類は食事行為を克服した時点で平気。

卵料理も、どう調理しても「人肉」に近いものにはならない為、積極的には食べないが早い段階で克服している。逆に魚卵は全般的にダメ。見た目がモロに内臓だから。

人形焼きや鯛焼きなど、生き物の形をした菓子類などは「人間」の形をしたものが未だ全般的に無理だが、それ以外ならこれも積極的に食べないがお土産などでもらったら普通に食べれるようになってる。

そもそも心因性なので、肉だと気付けない見た目・触感・味なら気付かずに食べれるだろうが、気付いた時点でPTSD発動。なので絶対に、食べさせないであげて。

地雷が非常に多く、しかも条件が細かいので、基本的に恋雪手作りの弁当でしか安心して食べれない。ただ、人が食べるのを見る分には焼き肉屋やステーキハウスとか周囲全部肉オンリーとかじゃない限りは平気。

現在は魚介類を克服しようと努力中（哺乳類系の肉と味も触感も全然違うので、忌避感がまだマシだから）。たぶん最終的には魚介類なら刺身、切り身、丸ごとなど「生き物の死体」とはつきりわかる形じゃない限り、克服して食べれるようになると思う。それ以外の肉は一生無理。

ちなみに、珠世・累・巖勝も現在の程度は違えど同じトラウマPT

SD持ち。

珠世は、大体狛治と同じくらい克服しているが、我が子を食べってしまったトラウマの所為で、彼女は卵が鶏卵も魚卵もダメ。

・あの世で子供って出来るの？

私も疑問だったけど、「夜叉一とクッキーの間に子犬が産まれてた」という意見を感想でもらったので、たぶんできるでしょう。

でも本作でオリキャラを出す気はないので、今の所は狛治夫婦は白い結婚でいってもらう。

この連載の最終話が、狛恋の子供誕生で締めたら綺麗じゃない？

・弟切さんと宇髄さん

共通点が多い二人ですが、私欲は全くなかったとはいえ情報を得たり任務に利用する為に何人もの女性を道具扱いだっただのが愛妻家の逆鱗だったので、弟切さんは仲良くなりたがってるけど宇髄さんはめっちゃ嫌ってます。

けど、弟切さんの子供とは全力で遊んでやるし、なんなら学校や幼稚園の送り迎えも手伝ってやる。ツンデレではなく、「子供には罪はない、むしろ被害者」を地で行ってるだけ。良い人には変わりなさすぎる。

・EU地獄勢による無惨様の感想

ベルゼブブとサタンはドン引きしてるけど、引いている理由がいたいブルーメランで返って来る感じ。

リリスは一目見た程度なら「あら、いい男」だけど、アダム大嫌いな理由が「上を絶対に譲らず、神の後ろ盾で自分を正当化したから」なので、アダムと同じかそれ以上に「他者を思いやって自分の希望を引いて譲る」を絶対にしない無惨は特例的に大嫌いです。

・産屋敷家の短命の呪いについて

本編の第二回講習回で説明しているが、本作では神仏からの呪いで

はなく無惨の無自覚な奴自身の能力、自分の血縁者から強制的に生命力をジワジワ奪い取っていたから産屋敷家は無惨が鬼になってから短命になったという設定です。

鬼灯の世界観とリンクさせているのに、無惨関係であるの世がほとんど動かなかつたのは不自然な為、色々としじつつけた結果、本当に神仏からの呪いになると「無惨本人にかけろよ！」と至極真つ当な突っ込みが入って鬼灯側に理不尽なヘイトが集まってしまうので、上記のように無惨に全部ヘイトは被ってもらいました。あの頭無惨、本当にこういう時は便利。

ただ正直この設定、結構マジで原作もそうだったんじゃないかなって思う。「無惨本人にかけろよ！」は本作だけじゃなくて鬼滅原作の方にも言えるし、そうだとしたら輝利哉さまがいきなりギネスになるまで長寿になった説明もつくんだけど。

・無惨が被害最小限で細々と人間界で生きる鬼だったら？

質問では「医者の治療をちゃんと受けて」という前提がありました。が、私としては医者の治療ちゃんとしてたら最終的には健康な人間になってたと思う。食人鬼になるとは思えないから、悪いが前提がまらずありえない。「善意の医者」が嘘ではない限り、最低でも食人衝動は何とかするだろ。

まあ、医者を殺したのではなく治療途中で事故死したせいで、無惨様が真つ当な精神してるのに鬼になったのなら、大正どころか下手したら平安時代の内にあの世に移住してたんじやないかな？

平安時代なら筮と面識ある可能性があるんで、その繋がりであるの世に移住が精神真つ当なら一番自然な選択肢だと思う。

産屋敷家との関係は、ぶっちゃけ知らない。想像のしようがない。本作では産屋敷の短命の呪いは、無惨の無自覚な能力によるエナジードレインによるものとしているけど、上記で説明しているように「無惨を生み出したことによる神罰」が短命の呪いなら鬼灯側にヘイトが溜まってしまいうからという、鬼滅と鬼灯の両作のつじつま合わせによるものなので、このクロスオーバーの根本が崩れるような仮定の

IFはさすがに想像する意味がないのでしません。
って言うか正直、この疑問は私よりもワニ先生に訊いて欲しい。

・彌豆子や珠世様のように善良な鬼を殺した場合や、鬼を必要以上に痛めつけて殺した場合の鬼殺隊をあの世は裁くの？

まず「善良な鬼」というのは炭治郎のような当事者か、神視点の読者じゃない限りは長い時間一緒にいて相手を知らない限りは区別のつけようがない（心音で相手の心理がわかる善逸でも彌豆子を信頼していたのは、「可愛い女の子」という外的要因と炭治郎に対する信頼からだし）ので、蜘蛛山でのしのぶさんや 柱合会議での柱たちのような状況で殺しても、罪には問われません。熊が人里に現れたから駆除したような判定です。

ただ、「あれ、本当に善良で誰も殺していないただの被害者だったんですよ」とは教えられます。この答えで懐く罪悪感こそが罰となるでしょう。

鬼に拷問など、必要以上に痛めつけて殺した場合は、その拷問がただその人の性癖などによるものなら有罪対象ですが、家族を殺された憎しみが抑え切れなかった場合は程度によっては情状酌量って所です。

・ 青い彼岸花の特性とその結末を知った時の反応

上記とは別の方からですが、質問をされたのでとりあえず知りたいたいと言われた方々の反応を纏めておきます。

【鬼灯】

特性の皮肉っぷりにちよっと吹き出す。

全部枯れた結末には少し惜しむけど、研究したかったんじゃないかってただそれを無惨に見せて、「ねえねえ、今どんな気分？ どんな気分？」をしたかっただけ。

【無惨】

特性と結末、どっちも知って1分くらいは口をポカンと開けて呆けてから、「あの藪医者ーっ!!」と医者に八つ当たりの歪みなさ。

【狛治】

「そりゃ見つからないよな」と言つて苦笑。けれど見つからなくて良かったとも、本心からホツとしたように笑つて答える。

枯れたことに関しては、コメントにひたすら困っていた。

【白澤】

もともと存在も特性も知っていたので、青い彼岸花に関してのコメントや反応はなし。

無惨に関しては、「本当に頭が残念な奴だよね〜」と実はかなり珍しく、ストレートに蔑む発言をする。

【しのぶ】

特性の皮肉さに彼女も苦笑。

研究したかったので枯れてしまったことを残念に思うが、枯らしたのがおそらく彼女と縁深い二人の子孫だと知つて、興味の対象が彼岸花からそちらに移る。

【珠世&耀哉】

爆笑。無惨に会いに行つて、「ねえねえ、今どんな気分？　どんな気分？」を実際にやった。

【その他鬼殺隊などの関係者】

そもそも「無惨が太陽克服のために青い彼岸花を探していた」という情報を、ほとんどの関係者が知らない為、特性を知つても「皮肉だなあ」、枯れたと知れば「ふーん」ぐらいで終わると思います。

・恋雪たちが無惨をどう思っているか

自分たちを殺した剣術道場の連中以上に、狛治の空っぽの続きを利用し、蔑み、犯したくないはずの罪を強要し続けたことに対し、深い憎悪を懐いてましたが、狛治自身の無惨への印象が「珍獣」でしかないことを知つて、何か全部がどうでもよくなった。

ちなみに狛治は訊かれて「珍獣」と即答した訳ではなく、しばらく考え込んだうえで「思い返せば返すほどに、自滅的なことや無意味なことしかしなかったから、今では変な生き物だったなあと思えない」と、これはこれで酷い感想を言い放ちました。

つまりは、今現在は粕治と同じく家族も「珍獣」扱いのほぼ無関心でも動画で粕治を罵る無惨を見ると、空気が怖くなる（恋雪はそもそも動画の存在知らないけど）。

・元鬼殺隊の獄卒としての仕事服は？

今の所制服のある役職や部署（第一補佐官とかお迎え課とか）に所属にしている鬼滅キャラはいないので、基本的に私服です。

ですが鬼滅キャラって扉絵でも私服をほとんど披露してくれなかったので、彼らのイメージに合った似合う私服というのが私自身想像できてないので、基本的に具体的な服装の描写はわざと避けています。読者と私服イメージの解釈違いで事故を起こしても不毛なだけです。

なので読んでいる方が好きな格好、私と同じくイメージできないのなら鬼殺隊の隊服（滅の刺繍なし。理由は普通に地獄の鬼たちになんか失礼だから）だと思ってくれたら幸いです。

・現世視察で鬼滅キャラはどこを回る？

人数が多いので、とりあえず特に目立ってるキャラだけ上げます。

まず、残念ながら煉獄・炭治郎・禰豆子・善逸・カナヲ・義勇は獄卒じゃないので、現世視察はしません。

そして実弥・宇髄・伊之助は、本作の独自設定ですが「存命の身内や顔見知りと出会ってしまう混乱を避ける為、人間の獄卒が実体化で現世に行く許可が出るのは死後100年後」という規約に引っかかって、まだ視察経験はなし。煉獄さんは元獄卒だけど、それは50年前の話なのでやっぱり規約に引っかかったた。

逆に玄弥と無一郎はバイトなので、普段は獄卒扱いじゃないけどたまに視察させてもらってる。

そして肝心のどこを回るかは、視察は仕事なので基本的には指示された所で指示された通りにするだけです。自由時間や「好きにしている」という指示だったのなら以下の通り。

【蜜璃&伊黒】

基本は食べ歩き。

蜜璃が伊黒に気を遣ってどこに行きたいか聞くけど、伊黒は「甘露寺が行きたい所」としか言ってくれないので、飴細工を扱っているであろう浅草とか、祭りの縁日などを中心によく回ってる。

後は蜜璃は猫好きなので猫カフェに連れて行ってやりたいと伊黒は思ってるし、川柳や俳句が好きで伊黒はそれらが盛んな愛媛県あたりが喜ぶかな？ と蜜璃は考えてる。爆発しろ、伊黒。

【玄弥】

強いて上げるならゲーセン。

シューティングゲームでハイスコアを出したら、写真を撮って実弥に送ってドヤ顔。

あと他の兄弟の為にクレイゲームで散財して、実弥に「普通に買え」とよく叱られてる。

【無一郎】

現世にあまり興味が無い為、自由行動してもいい現世視察にさほど魅力を感じていない。

ただ刀鍛冶の里と兄上戦で玄弥と親しくなったので、なんとなく玄弥についてゆくことが多い。

結果、強面モヒカンと童顔美少年の組み合わせでゲーセンにいるもんだから、カツアゲかと思われて玄弥が可哀相なことになる。

【しのぶ】

映画館巡り。

ホラー好きなのでマニアックなレイトショーを見に行きたがつてるけど、小柄な所為でたまに補導されそうになる。

なので都合がつかなくなら鬼灯を誘ってよく一緒に見るのだが、その所為で今度は鬼灯とデキてる疑惑が閻魔庁で上がって頭を抱えている。

【狛治・お館様・悲鳴嶼】

特定の施設やイベント等を回ることはない。平和で人々が笑い合っている場所をのんびり散歩するのが好き。

ただ、お館様は本当にそれだけで平和だが、狛治は不幸体質を發揮して現世に降りるたびに何かしらのトラブルに巻き込まれる。

そして悲鳴嶼は幼稚園や公園など、子供が集まる場所で子供の楽しそうな声を聞けば感涙する為、お巡りさん案件になりまくっている。

・今の現世で好きなTV番組は？

これも私側の事情ですが、私がTVも動画もあまり見ないので具体的なイメージはほとんどないです。

精々、しのぶさんは怪談好きなので「世にも奇妙な物語」とかが好き。

実弥は「ダーウィンが来た」みたいな動物系好きで、志村園長の訃報には本気で動揺した。

伊之助は料理番組を見ては、アオイちゃんに「あれが食べたい！」と言ってるくらいですかね。

・地獄めぐり動画は見る派？ 見ない派？ 爆笑する派？

これも特に目立つキャラだけ上げときます。

【見ない派】

炭治郎・禰豆子・カナヲ・伊黒・実弥・義勇・悲鳴嶼・蜜璃（第一回目は見た。結構笑えたが、視聴後の後味がなんとも微妙だった為、それ以降は見てない）

【見る派】

善逸・伊之助・宇髄・無一郎・玄弥・カナエ・煉獄（狛治が出ているからという理由。無惨に興味なし）

【爆笑する派】

耀哉・珠世・愈史郎・しのぶ（当初は伊黒と同じ理由で見る気はなかったが、珠世に勧められて試しに見て嵌ってしまった）

・剣術道場の連中が落ちた地獄は？ If 回の後、鬼殺隊はどうした？

道場連中が落ちた地獄は、黒縄の小地獄である「畏熟処（食欲のため）に人を殺した者が対象」。

主犯であるバカ息子はそこに加えて、等活地獄の「極苦処（生前に

ちよつとした事で腹を立てて殺生)、大叫喚の「一切闇処(セクハラを被害者に責任転嫁)」、大焦熱の「木転処(恩人の娘などにセクハラ)とかなり多彩な地獄に落とされました。木転処は正直、こじつけに近いけど。

If 回の後には、鬼殺隊が皆で仲良く剣術道場連中呵責大会、誰が一番汚い花火に出来るかな? を鬼灯主催でやらしました。

狛治さんは必死で皆を止めようとしたが、再会しちゃったバカ息子が「何で今更になってまた俺は責められるんだ!」「何でお前の方が俺より早く自由になれるんだ!」と反省皆無な自爆をかまし、見事に狛治さんが汚い花火製造選手権で優勝しました。

・本編後(閻魔庁以降)の狛治の裁判と、再審の補佐官たちの反応

【⑥変成庁】

焙烙齋が孫娘である苺々子が恋雪と同じような目に遭ったら……と考えると、かなり感情移入して同情的だった。

感情移入しすぎて興奮し、裁判中に倒れて変成庁大パニック。狛治がめつちや的確に指示出して心マなどを行い、復活。

この一連のトラブルの所為で、うっかり判決出し忘れたまま狛治を先に進ませかけた。

【⑦太山庁】

変成庁から太山庁までの道である、左右に鉄の棘が無数に付いた壁があり、生前の行いで道の幅が変わる閻鉄所が、かなり余裕を持って通れる幅だったのに獄卒たちが更に幅を広げようとしていたので、狛治「そこまでしなくていい!!」と言ってまず止める。

天の御柱は、「あなたの行いは、私の眷属がちゃんと見て、教えてくれました。だから卑屈にならないで」と言ってくれたが、眷属の虫の集合を見せられ、狛治は顔面蒼白になって「ひゅっ!」と息を呑んだ。第八裁判所からは再審なので、狛治は受けていない。なので彼らとは、獄卒になってからの反応です。

【⑧平等庁】

弟切とは亡者同士、生きてた頃の時代が近い、基本的に常識人とい

うことで仲はいいが、弟切が「結婚歴なし死後31人子持ちのシングルファーザー」であることと、その理由を知った時は汚物を見るような目になった。

【⑨都市庁】

葛が「舌切り雀」のチユン子が姪っ子であることを話し、復讐する気持ちはわかると言ってくれたり、シンパシーを感じているらしいが、狛治は正直葛が何言っても「可愛い……」で頭が一杯になるらしい。

あと、ノリで光明箱ルーレットさせてみたが、狛治が選ぶと善の箱なのに間違えて化け物が入っていたり、どっちも悪の箱だったり、鬼灯が「狛治さんが触れた瞬間、中身が変わってる可能性があるのでは……」とマジで疑うほど、in化け物の箱を引き当てる不幸っぷりを発揮した。

【⑩五道転輪庁】

狛治と会った瞬間、何故か両目を抉り出そうとするチユン。大パニック起こしながらも必死で止めて訳を訊くと、「自分の見る目の無さ(付き合っている相手が白澤である事)に嫌気がさして、つい」と答えられた。

・スマホ使える人はどれくらいいる？

スマホに限らず、あの世は現世よりいくらかは遅れてですが科学技術もちやんと入ってきているので、使える人はたぶん割と多いです。特に獄卒は事務職ならもちろん、現場仕事の獄卒も現世視察などの仕事で使う必要性がある為、新しいもの好きとか個人的な興味のあるなし関係なく、現代人並みに使える者がほとんどです。

……まあ、たまに例外がいるけど。

逆に獄卒以外、特に天国の住人は物欲とかがほとんどないから、現世の最新技術品にも興味がなくて使わない、使えない者が多いです。そこらを基本にして、鬼滅の主要キャラは以下の通りにランク分け。

【スマホを使うし、アプリやPCの知識も結構ある方々】

○宇髄、善逸

(完全に新しい物好きなミーハー気質だから)

○耀哉

(普通に仕事に使うからと、生前よりも色んな意味で自由になったからか、割と好奇心旺盛で上二人ほどではないが、新しい物がこの人も好きだから)

○しのぶ

(完全に仕事で必要だから使ってるし、専門分野は薬学だが技術課所属の為、つまりは同僚が烏頭や蓬なので彼らの話に付き合っている内に自然と詳しくなった。別に嫌いではないが、獄卒じゃなかったらスマホ自体を積極的に得ようとはしない)

【スマホを使うが、現代人と同レベルかやや下くらいの知識の方々】

○狛治、実弥、煉獄

(完全に仕事で必要だから使ってる。しのぶと同じスタンスで、あればあったで便利だと思ってるが、仕事に必要なのなら得ようとはしない人たち)

○蜜璃、禰豆子、カナヲ、玄弥

(蜜璃と玄弥は上と同じく仕事で必要というのものもあるが、仕事関係なく禰豆子やカナヲと同じく好きで使っているが、宇髄&善逸ほどの熱意はないからこのランク。スマホ自体が好きというより、自分の趣味のサポートに使ってる感じ)

○伊黒、珠世

(仕事に使うからと、伊黒は蜜璃が使っているからというだけでlineやインスタなど連絡・交流系アプリを入れて使い方を覚えた。同じく珠世さんも仕事に必要なからと、現世にいる愈史郎との交流用として使ってる)

【ガラケー使ってますな方々】

○無一郎

(ただ単に興味がないから、連絡用に持たされているだけ。教えたらスマホでも普通に使える)

○炭治郎、義勇

(水の呼吸コンビも興味が薄いに加え、何か機械オンチっぽい私のイメージにより、このランク。今でこそ電話とメールは普通に使えるけど、それこそケータイを持ち始めた当初は、件名に本文を書くわ、濁音とか漢字の変換が出来ないわ、着信が来たら間違えて通話切るわという、ケータイ音痴あるあるをやらかしまくってた)

【例外】

○悲鳴嶼

(盲目に加え、もうその状態での生活に慣れ切っているわ、透き通る世界を習得しているわ、しかもあの世は妖術など科学より便利な技術が昔からあるわなので、普通のスマホはもちろん、全盲の人向け仕様やアプリが入っていても、別に大したメリットになってないので興味はなく、使っていない)

○伊之助

(メンコとして使ったら良い方だろ、こいつにスマホは)

・鬼滅メンバーが金魚草を初めて見た時の反応は？ 金魚草に興味持っている・飼っているキャラは？

鬼滅メンバーはほぼ全員が、まずはドン引き。特に悲鳴嶼さんが、見えてないので泣き声の正体が掴めず、本気で警戒して困惑してた。

ドン引きの後の反応はそれぞれ、炭治郎のようなボケ枠キャラは、「あの世の植物ってこんななんだ……」と間違った認識で納得し、善逸等の突っ込み枠は、「名前の通り過ぎるだろ！ っていうか、これって植物!?! 魚!?!」と叫びました。

伊之助？ アオイちゃんに天ぷらにしてもらおうと思っただけ狩ろうとして、鬼灯様にぶっ飛ばされたよ。

結婚祝いでもらった狛治家以外に育てているのは、しのぶさんというか胡蝶家と、珠世さん、つまりは薬学関係の方々が研究目的で栽培

しています。

ペット枠で飼って（栽培？）しているのは、義勇さん。

何故か、この質問が来た瞬間に、「あ、義勇さんは何か金魚草好きそう」と思ってしまった。理由はない。

ただ義勇さん、育て方が上手くなくて（これも完全な私個人のイメージ）、しょっちゅう枯らしかけたり、逃がしかけたりしているで、しのぶさんが育て方を教え込んでます。

そして素人だからこそ奇跡なのか、義勇さんは10年に一度くらいの割合で完全な偶然による突然変異種の金魚草を開花（？）させるから、鬼灯様がやけに注目してる。

本作では原作の「ざわめくトルコ石」とか呼ばれる、チアノーゼ起こしているような色に紅葉する金魚草の生産者が義勇さんってことにしてます。（二股に分かれた金魚草も義勇さん作だったら面白いと思っただけ、原作を確認してみたら鬼灯様が「自分の畑で発見」と言ってたから断念）

しのぶさんは金魚好きですが、金魚草はたぶん……「あんな鯉を超えて鮪サイズを私は金魚とは認めない」と思って結構引いてる。

けれど鬼灯原作の初期では、金魚草って見た目こそは変わってませんがサイズは普通の植物の金魚草くらいの背丈で、金魚部分も普通かやや大きめの金魚サイズなんですよね。

あれくらいのサイズなら、最初こそは名前の通り過ぎる金魚草にやや引くくらいで、その後は普通に可愛がりそうですけどね。

なお鬼灯様は派手好きの宇髓さんなら、金魚草の魅力をわかってくれると思っただけで勧めてみたら、普通に「キモい」と言い放たれた事で、ケンカになったことがあります。

あと善逸の汚い高音による悲鳴を気に入って、「Mr. 金魚草大使」にしようと思論んでいる。

・マキミキ出演予定の鬼殺隊が元ネタドラマ

このドラマはあくまで鬼殺隊の物語が元ネタな為、舞台はあの世で時代は現代、鬼殺隊は地獄の住人である鬼、敵は西洋の悪魔とかをモ

デルに使ったら国際問題になりかねない為、クトゥルフ神話を元ネタにしている、超絶カオスドラマです。

たぶん、ドラマの善意の医者枠の正体はニヤル様。善意が欠片もねえけど、こつちの方が自然だな。

マキミキの役は、マキが蜜璃モデルのキャラ、ミキがしのぶモデルのキャラなんだろうなーと思ってます。

この程度にしか考えてないけど、どうしよう。割と見たいぞ、この爆死しそうだけどカルト的人気も誇りそうなカオスドラマ。

・竈門家など、子孫がいるキャラたちは現代の子孫をどう思ってる？

普通におじいちゃんおばあちゃんの愛情で、「平和な世界で健やかに育っていてくれていて嬉しい」ぐらいですね。

それ以外にあるとしたら、禰豆子とカナヲが自分の子孫が恋人同士になっているので、嬉しいと同時に自分と容姿が似ているものあって、お互いになんかちよつと恥ずかしがってます。

……かと思ったら、カナヲと燈子付き合ってたよ！

なので、このことを知ったカナヲはあのワニ先生独特のかんたん作画のきよとん顔で、禰豆子に土下座しました。

炭治郎は自分似の子孫が長男じゃなくて次男とはいえ結構な問題児であることに、善逸はひ孫が自分の黒歴史っぽい自伝を読み漁ってるわ、性格も自分似だわという点に嘆いて頭を抱えています。

伊之助は自分と違って、気弱っぽい子孫にちよつとイライラしてるかな？

そして煉獄さんは自分の直系ではないとはいえ、炭治郎の子孫と自分の血縁者が友人なのを喜んでいるし、桃寿郎の元気の良さや殴られるまで集中して素振り続ける所とかを「俺も見習おう！」とか言ってる。見習うな。

・あの世の学校について

当たり前ですが、鬼灯の原作は基本地獄と閻魔庁が舞台なので、地

獄の学校などに関して詳しい設定は何もないから、私が勝手に色々とかじつけてます。

映画公開記念回で、兄妹である竹雄と花子が同じ学年なのは、ただ単に一緒に登場させたかったというメタ的な理由もありますが、「鬼のほぼない扱いの寿命を考えると、成長速度は人間より遅いんじゃない？」という考えと、弟切さんは江戸時代半ばに死んだってことは、約300年で子供を赤子から育てて31人中、今現在も未成年の子供が4人いるって亡者の成長速度も遅いんじゃない？ という仮定が生まれた為、本作では5年単位で一学年という設定です。その為、学年が上がるのも5年後。

原作で年齢がちゃんと判明していない為、かなり適当かつ本編登場の際に一緒に動かしやすいという理由で決めたが一応、累・竹雄・花子は同学年の小学生で担任は煉獄。

茂と六太は鱗滝さんの幼稚園に通っており、担任は義勇さん。鬼灯キャラの閻魔の孫・丙・莓々子とも同クラスで友達。

不死川家の長男・次男以外の兄弟に関しては、ごめん。情報がなさすぎるので勘弁して。

・鬼灯キャラの「無意識領域」はどんな感じ？

鬼灯キャラは原作がギャグ漫画っていうのもあって、良くも悪くもほとんどのキャラに裏表も闇もないから、無意識領域が想像できないんですよね。

無意識領域前の、夢の中での願望なら唐瓜はお香姐さんとかくつついてる、烏頭さんはガンダム作って操縦してる、蓬さんならチャイニーズエンジェルの世界でなんかモブキャラ化してる、白澤様なら鬼灯様が下手に出ててハーレム築いてる、シロならひたすら肉食べてるみたいに想像できるんですが……。

ただ鬼灯様だけは明確にイメージが浮かんだので、彼だけ明記しておきます。

【鬼灯様の無意識領域】

無意識領域に近づくとつれて、女性の声が聞こえてくるが何を言っているのかはよくわからない。更に周囲が暗くなり地面から鍾乳石みたいな棘が生えており、侵入者の行く手を拒む。

無理やり先を進むと、棘は更に鋭くなり、数も増えて最終的には地面だけでなく上下左右から棘が伸びている状態になっており、炭治郎の心の光の小人サイズくらいじゃないと先に進めない程の隙間しかなくなるが、「精神の核」がある無意識領域の中心だけは半径1mほどの空間があり、ぼんやりと光っている。

中心には精神の核を抱きしめて胎児のように丸くなって眠っている「丁」（子鬼の頃ではなく、人間の頃）がいて、そこまでくると女性の声が子守唄であることがわかる。

・本作でのぎゆしの・さねカナについてのスタンス

原作で確定・断言されていないカップリングは本作中でも「断言は」しないというスタンスを取っていますが、一応は下記のような妄想での2組を私は書いてます。

まず4人とも、相手に対する好意自体には流石に自覚を持ってます。ただ、それは友情だったり、尊敬だったり、とにかく恋愛感情以外の好意だと信じて疑ってないです。

それに加えて、さねカナはお互いに「相手は自分の事、好きか嫌いかで言えば好き」くらいには理解している。

対してぎゆしのは、「自分は相手に嫌いとはまではいかないが、苦手意識を持たれてる」と思っている。

2組とも、合っただけで決定的に間違っただけでずれている状態。

まだぎゆしのに関しては、お互いに好意を持っているのに関係の認識が「元同僚の知人」レベルで友人ですらない為、とりあえず友人になろうと不器用とツンデレの牛歩とはいえ努力しているので、かろうじて進展が期待できるが、さねカナに至っては間違っただけで両想いが成立している為、どっちかが恋愛感情を自覚しない限り関係が不動過ぎる。

ぎゆしのは周囲から微笑ましく見守られているが、さねカナに関し

てはある意味、おぼみつ以上に「早く結婚しろやお前ら!!」と周囲にマジギレされていると思う。

・個別で死後、狛治と出会った時の反応

原作の最終決戦終了時に亡くなったいる方々は、If 回の反応ほぼそのままなので、生き残り組がどんな反応を取ったかを下記に記しておきます。

【義勇の場合】

再会してまずは警戒したが、丁寧に誠実に謝罪されて困惑。

鬼灯に過去を説明されて同情したが、それでもまだ消化しきれない負の感情がモヤモヤとあったが、「炭治郎には感謝している。まだまだこちらには来てほしくないが、いつか必ず礼を言いたい」という狛治の言葉で全部許した。

【実弥の場合】

紹介される前に、玄弥と仲良く会話している狛治を見つけ、色々と誤解して殴り掛かって暴言を吐いた為、玄弥がキレて鬼灯に「鬼灯様！ ちょっと浄玻璃の鏡貸してください！ 兄ちゃんに狛治さんの過去、見せてやって!!」と頼み、鬼灯は承諾。

視聴終了後、真っ赤な目と真っ青な顔で倒れ込むように狛治に土下座で謝った。

【炭治郎の場合】

本編の宴会の次の日、かなり気になっていたので閻魔庁に来て見せてもらった。

その後、廊下を歩いてた狛治を呼び止め、廊下でスライディング土下座を決行。

【宇髄の場合】

初めは義勇と同じように警戒と困惑していたが、「嫁を殺された復

「讐」という過去を知ったら、もう完全に和解。笑顔で「今からその剣術道場の連中、ぶっ殺しに行くわ」と言い放って、狛治に止められた。

【彌豆子・カナヲ・善逸・伊之助の場合】

この4人の場合、亡くなった順によって反応が少し変わって来る（と言っても、モヤモヤ期間が長いか短いかわからない）ので、ほぼ同時期に亡くなったとして考えると、彌豆子・カナヲ・善逸は周囲が狛治に同情しているからこそ、あまり詳しく過去を話して説明しようとはしないのと、直接的な因縁はほぼほぼない為、3人も詳しく知ろうとはせずに、出逢った当初の義勇と同じような「納得してはるけど、消化しきれないモヤモヤ」を抱える。

伊之助は炭治郎の次に煉獄の死に際に近かったので、結構狛治に敵対的だった。

その為、狛治がもう罪を償っているという事実には納得しきれずに暴れたので、彼をきっかけに他3人も浄玻璃の鏡で過去を視聴し、あとはほぼIf回通りの反応。

伊之助は過去を見てからは一転して、狛治にめっちゃ懐く。っていうか、1年近くは狛治（と恋雪）を見かけるたびに無言でボロボロ泣きながら、しばらくしがみついて離れないという可愛すぎる奇行を行っていた。

3人が伊之助より後に亡くなっている場合は、伊之助が鼻息荒く「狛治は悪くない！ いい奴だ！ すっげーホワホワする奴だ!!」と熱弁してくれるので、消化しきれないモヤモヤ期はない。

・本作での義勇・実弥の嫁について

鬼滅最終巻のおまけで、義一君や強面のお巡りさんが義勇・実弥の直系子孫と判明し、本作でのカップリングをどうしようか、そもそも彼らの嫁ってどんな人で、どういう経緯でくっついた!? と大変混乱しながらファンブック2で詳細が明らかになることを期待しましたが、まったく彼らの嫁に関しての言及はなく、それどころかむしろ何故か悲鳴嶼さんからぎゅしのとさねカナの補強情報がブチ込まれる

珍事に見舞われました。

その為、キャラクターの現在編でも書きましたが、彼らの嫁は「善人だったけど、流石に天国永住権を得られるほどではなかったので、本編時点で既に転生済み」ということにして、ぎゆしのさねカナは継続します。

一応明記しておきますが、私はあの二人に妻子がいたことや、しのぶやカナエ以外のカップリングが嫌だとか認められないとかはないですよ。むしろご祝儀渡したいから、詳しく知りたい教えろって心境。

ただ上記の通り、期待していたファンブック2にも妻子の情報はなく、それどころか公式というか悲鳴嶼さんから補強の情報ぶつ込まれたからこそその継続です。

今は情報はないままですが、鬼滅は本編が完結していてもまだまだアニメなどという媒体で動きはある作品なので、この先にまたファンブック3が出る可能性、その中に嫁の情報が出てくるかもしれない為、本作はどうとでもこじつけられるように嫁の情報は最小限にするつもりです。

一応、私の中では下記のような女性像とくつついた経緯と嫁が転生で別れた時の様子などを妄想して、それを軸にして義勇や実弥を動かしていくつもりです。これは私個人の妄想なので、本作の作中に具体的に描写や言及はされなれないと思っいていてください。

【富岡 義勇のお嫁さん】

勝ち気でサバサバ系な姉御の見本なイメージ。宇髄の嫁の一人、まきをが一番近いかな。

義勇さんに助けられたことがきっかけで隠になって一応前々から面識があり、助けられたことで惚れていたけど、だからこそ義勇さんとしてのぶさんの本人たちの無自覚な思いに気付いていたので、しのぶさんが健在の時は隠としての役割に従事し、身を引いていた。

最終決戦後、義勇さんは明るくなったけど「どうせ痣の副作用で長くはない」という悪い意味でのポジティブさがあつた為、その明るさ

はあかんやつや！ と焦って矯正しようとした結果、勢いで告白してしまい、そのまま開き直って押し押して押しまくって結ばれた。

そんな経緯な為、義勇が明るく、前向きになった真のきっかけは炭治郎であること、彼の真の想い人はしのぶであること、自分は後からいいとごどりをしたただけだという罪悪感を死ぬまで抱え続けていたからこそ、死後はしばらく天国で過ごしてから転生も出来たのに、すぐに転生することを選ぶ。

義勇が何のしがらみも罪悪感もなく、本当に好きだった人と今度こそ結ばれることを真に望み、願っていたからこそ、「私なんかさつさと忘れなよ」と言い残して。

その言葉が、義勇自身でも奪えないし失えない、忘れることができない彼女だけのものになるとは知らないまま。

自分が彼にとって二人目の、「本当に愛した人」であることを知らぬまま、それでも満足して彼女は生まれ変わっていった。

【不死川 実弥のお嫁さん】

おしとやかで物静かだけど、カナエさんのような芯の強さはあまりなく、どちらかという恋愛に近い気弱げな女性。

なんとなく隠どころか藤の家紋でもない、鬼とも鬼殺隊とも完全無関係の人が良いなと思つてます。

柱就任のきっかけとなる下弦の壱討伐の少し前に、カブトムシを取りに入った山の中で遭難している姉弟を見つけ、保護して麓の村まで送り届けた。

弟の為に興味ないのに付き合つて山に入って、自分に怯えながらも弟を励まし続けて山を降りた姉に、自分の母親の面影を見るが、その後は特に交流どころか不死川は彼らに名乗りもせず別れる。

最終決戦後、なんとなくまたその山にカブトムシを捕まえに行つて、今度は遭難せずに山を探索していた姉弟と再会。

姉はやはり自分に怯えていたが弟の方に懐かれたので、今度は弟の方にも玄弥の面影を見たことで邪険には出来ず、そのまま交流を続けていくうちに、姉弟の両親が関東大震災辺りの影響で死亡し、二人の

生活が困窮して、姉は体を売るぐらいしか弟を養う手段がないことを知り、金は有り余っていたので彼女らを援助する。

金を受け取らない姉に不死川は「俺が怖くて信頼できないのはわかるけど……」と説得し続けていたが、弟から姉は最初から怖がっていたのではなく、一目惚れだから照れていただけ、金を受け取れないのは好きだからこそそこまで甘えられないということを暴露され、めちやくちや照れて困惑しつつも、そこから姉を異性として意識し、姉も弟からの援護もあって何とか結ばれた。

しかし痣の影響で、不死川は早世。その後、姉は彼の遺産や産屋敷の援助で弟や彼の子を女手一つで育てたが、晩年に自分と同じく連れ合いを早くに亡くした男性と知り合い、再婚。

彼女が寿命を全うし、あの世に来た際には泣いて不死川に再婚したこと、不死川以外の人を愛してしまったことを謝ったが、不死川は間違いなく彼女を愛していたが、そのきっかけは母親の面影を彼女に見ていたからであり、彼女自身を本当にちゃんと見ていたのかが自分でも不安だった為、彼女が再婚したことには喜びつつ自分には人を、女性を愛する資格なかなかったと、ネガティブな思い込みをし始める。

不死川は彼女の再婚理由を「彼女自身を愛してくれる男性だったから」だと思っているが、それは違う。

相手も昔に亡くした連れ合いの面影を彼女に見ていたし、そして彼女自身も相手の笑顔が不死川そっくりだったからこそ惹かれたことを、不死川は知らない。

愛する資格がなかったとしても、愛され続けたことを彼は知らない。

・狭霧山にいた鱗滝さんの弟子たちについて

感想での質問では「特に決めてない」としてましたが、無惨討伐前まではお迎え課から逃げていた浮遊霊、無惨討伐後は一旦はあの世で裁判を受けてから、守護霊としての資格を得て鱗滝さんが死ぬまで傍で見守り続けたという設定に決定しました。

無惨討伐前の浮遊霊時代は、お迎え課を返り討ちにしてた訳ではなく、正確に言えばぼぼあの世側が黙認してた感じですよ。

鬼灯原作で明言はされていないけど、お迎えから逃げて罪になるのは、「裁判が嫌だから」「幽霊の利点を悪用しているから」という場合だと思ってます。

そんな解釈をしているので、錆兎や真菰のような事情なら生きていく人間などに危害を加えることはまずない、居場所が狭霧山だとわかってる、鱗滝さんが死んだら素直に一緒に来ると思われる、トドメにお迎え課が下手に強硬手段を取ればむしろ返り討ちに遭う可能性が高い為、黙認して静観が一番平和だとあの世というか鬼灯様は判断するなと思います、このような設定に決定。

その後も、別に本当に鱗滝さんが亡くなるまで放置でも良かったけど、無惨討伐後なら鬼への恨みや不信感もマシになってるだろうと思います、一応説得でお迎え課を鬼灯様は派遣するだろうなと考え、そして鱗滝門下は無惨討伐後なら説得にに応じてくれると思って、上記のような前半は不法滞在、後半は合法的な鱗滝さんの守護霊という形になりました。

・鬼灯世界での自殺者の扱い

鬼灯世界というか仏教でも自殺は、「自分を殺した」という罪扱いです。ただし、キリスト教ほど殺人以上の最大タブーというほどではないです。

そして鬼灯世界のあの世は、現代に合わせて罪状や刑罰をアップデートしているので、犯罪を犯しておいて警察から逃げる為の自殺だとか、ギャンブルなど自業自得な借金が原因の自殺は、殺人レベルの罪として扱いますが、いじめ等の理由で精神を追い詰められて自殺を選んできました人には、かなりゆるい、形式上レベルの罰しか与えないという設定にしています。

アップデートしても、形式上とはいえ罰を受けるのは絶対です。

私個人の考えですが、どんなに苦しい目に遭っても、懸命に生き抜いた人が一番正しいからこそ、自殺も殺人扱いで罪なんだと思っ

す。

だから、自殺で逃げたことを責められない悲惨な目に遭っていたとしても、同じ境遇で自殺しなかった人が結局は報われることなく死んでしまい、そんな人と自殺した人が同じ扱いならば、一番頑張った「自殺しなかった人」が「無駄な我慢をした愚か者」になってしまうので、今後現世やあの世がどう移り変わってもこのあたりは変わらないと思います。

しかしやはり理不尽な目に遭って、生きていたいのには死ぬ以外の道を見失ってしまった人に、簡易地獄とはいえ舌抜きという呵責は更なる理不尽すぎる為、自殺を責められない程悲惨な生涯だった亡者が受ける形式的な罰は、「血の池地獄に提供するための献血（一般的な献血レベルの量）」というくことにしてます。

ただ、「誰かのために自ら死を選んだ」場合は、自殺扱いにならないパターンもあります。お釈迦様の為に、自ら火の中に「私を食べて」と飛び込んだ兔とかもいるので。

なので狛治の最期は、無罪というか炭治郎たちを守るための正当防衛扱いでセーフです。

・EU勢（サタン・ベルゼブブ・リリス）が、狛治の生涯を浄玻璃の鏡で見た時の反応

ベルゼブブとリリスは、IF回の鬼殺隊とほぼ同じ反応です。

ベルゼブブはこと切れた恋雪を抱いて泣く狛治を見た瞬間、伊黒さんと同じく大号泣。泣き声は、「おぼぼぼぼぼぼっ!!」ってギャグ時空仕様だけど。

そして狛治に会った瞬間、本編の恋雪拉致未遂のことを本気で申し訳なく思い、スライディング土下座を執行して、狛治を盛大に困惑させた。

なお狛治は、この謝罪で普通にベルゼブブを許して和解。狛治の過去を知ればベルゼブブはマウンティングもしなくなるので、元々似た立場でお互いに愛妻家というのもあって、割と仲というか関係は普通に良好。

それより土下座している夫の上に座って、「うちの旦那様がごめんなさいね」と謝るリリスをどうしたらいいかで困っていた。

サタンは悪魔としての価値観と男に興味がないで、狛治の実父の悲劇に関しては興味ゼロだったが、恋雪とのやり取りで狛治のナチュラルイケメン具合にキュンと来てしまい、勝手に狛治を師匠認定し、ベルゼブブ夫妻同様に恋雪の亡骸に縋りついて泣く狛治で涙腺決壊。

その後、彼も狛治に謝ろうとしたが、ベルゼブブとリリス、あとスケープにも全力で「もうお前はあの夫婦に近寄るな！ 汚れる!!」と怒られて、その後も恋雪はもちろん、狛治にさえ仕事上でもベルゼブブが全力ガードされて、ほぼほぼ接触する機会を抹消されている。

サタンが部下たちに止められず狛治に謝っていた場合、実害はなかったのもあって狛治は大人の対応で一応許そうとしたが、謝罪の直後に「女の子を胸キュンさせる師匠」扱いされて、そのコツを教えてくださいと請われたことで、「現実の女性をギャルゲの攻略キャラ扱いしてんじやねえ!! 何も反省してないだろお前!!」とブチ切れ、サタンに「砕式 万葉閃柳」をブチかまします。

止められた方がサタン本人にとっても幸いだこれ。

・EU勢は狛治の過去を知った後、剣術道場連中をどうするか
ベルゼブブはとりあえず蠅による蟲攻め。サタンのペットのGも借りてきて、とにかく全力で蟲攻め。

リリスは娘（リリン）を引き連れ、美女と美少女によるメンタル拷問を行い、男の自尊心を抉りに抉って搾り取り、女性という存在そのものをトラウマにさせます。

サタンは恋雪を毒殺したことよりも、連れ出しからの喘息発作放置に、「美少女はなあ！ 触れずにただそこにいるのを愛するのが一番いいんだよ!!」と実に気色悪いキレ方をしていた為、ベルゼブブにすら「もうGだけ貸してくれたらいいよ。後は何もすんな」とさじを投げられました。

・本作の賽の河原の設定について

鬼灯原作でも賽の河原の詳しい（鬼灯世界の独自）設定が明かされてなかった為、ほぼ私の妄想こじつけによる設定です。

賽の河原行きになるのは、物心がついた（大人との会話や善悪の判断がある程度は成立する）くらいから、義務教育卒業前まで。

つまりは下は低くて3歳くらい、上は15歳が上限。

下はともかく上限は戦後くらいから決まった事で、江戸時代なら10歳くらい、大正なら12歳くらいと時代によってこの辺は変わりますが、基本は「その時代の人にとって、『子供』と言える年齢」だと思ってください。

しかし稀に、「甘えや怠惰などと言った本人の非はなく、環境などが要因で情緒が育たず、精神年齢が完全に子供」と裁判で判断された場合は、その精神年齢くらいまで若返った姿でこちら行きになる場合があります。

また昔は親より先に死んだことが親不孝だからとの理由で、子供の地獄として賽の河原で石積みをさせられていたが、現在はもちろん昔から親より先に死んだことは無関係。

というか、賽の河原は子供の地獄じゃないし、石積みも拷問ではない。親不孝だったから賽の河原行きになるというのも、実はちよつと違う。

上記の誤解は、ただ単に本来のあの世側の意図が現世では正しく伝わっていない結果。その正しい意図は、下記の「賽の河原の本来の役割」をご参考にどうぞ。

現在の賽の河原行きになる年齢以外の条件は、生前に犯罪行為とまではないかないが、ちよつと度が過ぎてわがままだったなどの問題行動が多かったか、もしくは本人の死因が親の注意や叱責を無視した結果（信号無視や飛び出しによる事故死など）によるものかなので、むしろ現在の方が正しく「親不孝」による裁判結果。

感想返信などのコメント返しあたりで一度答えたが、上記以外の罪というか、性質が悪すぎて刑事罰相応なレベルのイジメなどを行い、更に自分が子供であることを言い訳にして罪を認めず反省もしていない者は、15歳以下でも普通にその罪にあった地獄に叩き落されま

す。

そして獄卒も、賽の河原ではなく普通の地獄にいる子供は、子供の皮を被ったサイコパスの悪魔だと裁判で判断されたということを知っている為、容赦しません。

・賽の河原の本来の役割

ここから更に私の妄想による独自設定が強くなりますが、本作では賽の河原は「子供の地獄」というより、「早死にによって起こる、徳と業のバランス崩壊が起こらないようにする調整の場」としています。「徳と業のバランス調整」とは何ぞや？ となるでしょうが、鬼滅はもちろん鬼灯という作品からも離れて、本格的に仏教に関しての話になります。

そもそも輪廻転生というのは、「何度も生まれ変わること徳を積み、最終的に極楽に至る為の修業」であることは、鬼灯の世界観でもなんとなく程度ですが説明があり、ほんの少しでも輪廻転生や仏教について調べたことがある人は、知っている事でしょう。

つまり死後の裁判は、一度の人生だけではなく前世やその前も総合して行き先を決められるので、十王たちは前世を含めた総合的な徳と業も見なければならぬので、私はその徳と業の割合を見ただけで感覚的にわかる者が、十王だと勝手に設定してます。

裁判のたびにいちいち、その人の前世全てをさかのぼって調べることなんてできませんので、その割合を見て、さらに今世の行いによる徳と業をポイントのように振り分けて、英雄や聖人と言えるような目立った善行がなくとも、前世含めてコツコツ積んでいた徳が一定数に達していたら天国、逆にその人生では善行よりやや悪行が多かったレベルでも、前世がずっとそんな感じで業が溜まっていたら、地獄行きにはならなくても他の六道、畜生道あたりに落ちる……と言った感じですよ。

で、この設定のどこが賽の河原に関わるかというと、昔の子供の死亡率に関わります。

「七つまでは神の内」と言われる程、昔は子供がすぐ死ぬのは当たり前

という扱いです。

そして子供は、これも当たり前ですが「善行」と呼べるものより「悪行」と言えることをしてしまいます。それらを学んでいる最中なので、すから、育ちさえすればそれらの「悪行」は学習して行わず、逆に行うようになった「善行」で相殺されてゆくのですが、学ぶ前、学んでいる最中に亡くなる可能性の方が昔は高かったのです。

もちろんこれもちゃんと死後の裁判を行って、「これは子供ゆえの行いであって、業としてカウントすべき事ではない」と判断したら解決なんです、やはり子供の死亡率を考えたらいちいち裁判を行うのは非効率この上ない。

加算される業としては微細だから、そのまま来世持越しで転生させるという手段もありますが……、繰り返しますが、昔は子供の死亡率が半端ない。

つまりは、生まれ変わってもまたすぐに死んでを繰り返して、子供ゆえの微細な業が塵も積もれば山となって、裁判時に前世をいちいち調べはしないというのもあって、早死にしまくっただけで本人何も悪くないのに、いつかは地獄は免れても畜生道落ちになってしまう可能性があるんです。

なので子供の亡者は？生神の報告をざっと見て、特異な所がなければ一律全員を賽の河原に送り、現世で学べなかつた善悪、積みなかつた徳を積んで、子供故に得てしまつていた業をここで相殺してから転生するというシステムが「賽の河原」です。

石積みを崩すという理不尽も、ガチの理不尽ではなくて子供が被害者になることで、業をさつさとすすいですがすぐに転生できるようにという、あの世側の優しさだったりします。

こういった事情やシステムなので、たいていどんな子供でも賽の河原行きになっていた為、現世では臨死体験者や篁さんみたいに一時的なあの世滞在をした人が誤解して、「親より先に死んだ子は親不孝の罪で賽の河原行きになる」という話が現代に伝わっています。

で、現代は子供の死亡率が下がつてきたのもあって、微細な業なら来世持ち越しでも普通に生きていたら相殺されるので、そのまま転生

でもよくなり、子供だから一律全員賽の河原行きというのとはなくなつて、現在の「ガチの地獄行きにするほどではないけど、すぐに転生させるにはちよつと問題のある悪ガキ更生の場」となったということにしています。

・ 妓夫太郎と梅が鬼滅原作であの世に行く前のやりとり

ある意味、狛治よりも「地獄に墮としていいのか？」案件だった兄妹ですが、原作の二人の最期、妓夫太郎が梅に「お前は明るい所に行け」と言っていたやり取りは、裁判前に「この子達は情状酌量の余地が本来にあるのか？」という確認をあの世側が行っていたことにします。

ぶつちやけ梅は、「反省している態度がなくとも累と同じ賽の河原行きで良かったとあの世は判断しています。

梅の年齢は、一番高くて実年齢で13歳なので、うちの設定じゃ現代ならともかく江戸時代は賽の河原行きにはならない年齢だけど、環境からして精神年齢は絶対に13歳相当じゃないのと、同じく環境の所為で反省を「しない」のではなく「出来ない」ぐらいに善悪をほぼ知らず、また他者を排除したがる人間嫌いになって当然の扱いだったので、彼女は心のケアも兼ねて裁判なしで100年間の賽の河原行きでも良かったくらい。

だけどさすがに、あそこまで妹に献身し続けた兄を見捨てて、何も言わずに一人で明るい方に行けば、彼女は賽の河原行きにはならない例外的サイコパス扱いで地獄行きだった。

そして、ある意味では梅の存在が妓夫太郎にとっての蜘蛛の糸。

彼女を使って明るい方へ、もしくは彼女を暗い方へ行かせて自分が明るい方へ行こうとしたら、問答無用で地獄行きが決定していたが、あの世側の予想通り、妓夫太郎は妹だけを明るい方へ、少しでもマシと思える方に行くように伝え、自分は妹の罪も負って地獄に墮ちる覚悟を決めていた。

そして梅も、自分から明るい方向へ背を向け、兄と一緒に地獄に墮ちることを決めたので、十王たちは彼らには情状酌量、そして更生の

余地はあると判断され、だからこそあの「きつかけ」が起こる前から裁判中はどんなに態度が悪くても、根気強く接し続けた。

ちなみに兄妹のやり取りはあの世とこの世の狭間、秦広庁までの道のりで牛頭馬頭がいる所の手前からへんで行われてました。

そして「明るい所」の演出は、お迎え課が茶吉尼の眷属に協力してもらって狐火で演出していたという、シリアス台無しの裏話。

もしも梅がお兄ちゃんの説得に応じて、泣きながら明るい所に行っていたら、結果としては本編と同じ扱いだろうけど、その前に火がトラウマの彼女は泣き叫んで、お兄ちゃんがキレて大暴れしたというトラブルが発生するから、マジで梅がお兄ちゃん大好きで良かった。

なお、この演出をしてたお迎え課は、兄妹のやり取りに感動して号泣して、ネタばらしをして彼らをあの世まで案内という仕事が出来ず、あとで鬼灯にめっちゃ怒られた。

【仕事して】妹とその上司と同僚が洒落怖ハントする話【吉兆】

1：姉
立ちました？

2：名無しの獄卒さん
たってるよ

3：名無しの獄卒さん
スレタイww
意味不明ww

4：名無しの獄卒さん
何で吉兆ww

5：姉
投下予定の話をメモ帳に書き溜めていたら、なんかもう感想が【内
に集約されてしまったので・・・

6：名無しの獄卒さん
洒落怖で仕事する吉兆って、それむしろハントできなくね？

7：名無しの獄卒さん
＜＜5
どういことなのwwww

8：名無しの獄卒さん
そもそも 洒落こわハントってなんぞww

9：姉

◇6, 7, 9

それらの疑問を含めて解消するために、まずは私や主要登場人物のスペックを紹介します

姉：立て主である私

桃源郷の薬局勤務。薬剤師。

妹：私の妹。小柄で華奢で可愛い。

研究職の獄卒。怪談とかホラー映画が好きなので、現世の洒落怖に詳しい。

鬼神様：妹の上司。

厳しいし怖い所があるけど、結構気さくで優しい地獄の黒幕。

妹以上に怪談やホラー系が好き。この人発案で洒落怖ハントが行われてる。

狛犬君：妹の同僚。

役職的には彼も上司だけど獄卒になったのは妹の少し後だから、鬼神様と区別もつけて同僚ということ。

愛妻家で気配り上手な洒落怖ホイホイの不幸体質。

神獣様：私の上司。

妹目当てと洒落怖が女性だということで何故か参加してる。

10：名無しの獄卒さん

・・・は？

11：名無しの獄卒さん

・・・もしかして1は、元鬼殺隊？

12：名無しの獄卒さん

花の呼吸の使い手で上弦式相手に殉職した柱？

13：名無しの獄卒さん

妹さんは虫の息の人？

14：名無しの獄卒さん

◇ 13

瀕死じゃねえかwww

15：名無しの獄卒さん

コテハンでおにやのこだー!!とテンション上がったのに、スペック見たらハアハア出来る人じゃなかった

スペックに情報あんまり書いてないのに、何でこんなにも全員すぐにわかるの？

16：名無しの獄卒さん

花姉さん何してんの!?

17：名無しの獄卒さん

っていうか名前ぼかしてる意味あんのかこれ？

コテハンだけで全員特定できるぞ スペックいらなレベル

18：姉

大体皆さんお察しの通り、私は生前鬼殺隊の花柱だった現薬剤師です。

妹は同じく生前は蟲柱だった子だし、鬼神様は補佐官様だし、狛犬君は元上弦の参だし、神獣様は白澤様です

19：名無しの獄卒さん

スレタイの吉兆って何のことかと思ったら、神獣のことか

20：名無しの獄卒さん

仕事しろって、そういうことか

◇ 妹目当てと洒落怖が女性だということは何故か参加してる。

21：名無しの獄卒さん

∟ 神獣様は白澤様です

花姉さん、名前出してる出してる!!

22：名無しの獄卒さん

他はかろうじてぼかしてたのに上司は盛大に暴露www

23：名無しの獄卒さん

どれだけ仕事さぼってることにキレられてんだよ、白豚様www

24：姉

あ、普通に間違えて出しちゃった

ごめん、神獣様。本当は白沢って表記にするつもりだったけど、正しい字で変換しちゃった

あと、タイトルの「仕事して」は私の上司としてじゃないの。吉兆の印として仕事してあげてって意味

25：名無しの獄卒さん

花姉さん、天然か（知ってた）

26：名無しの獄卒さん

ぼかしてんのかダイレクトなのか・・・

∟ 白沢

あとこれどういう意味？

∟タイトルの「仕事して」は私の上司としてじゃないの。吉兆の印として仕事してあげてって意味

27：名無しの獄卒さん

っーか、これ本当に花姉さんか？

あの人、ほんわかしてて危機感とかなさそうだけどこんな個人情報

を無防備に出すほど頭花畑じゃねーぞ

28：名無しの獄卒さん

＜＜27

（。ム。）ハッ！

29：名無しの獄卒さん

＜＜27

え？釣り？なりすまし？

30：名無しの獄卒さん

神獣あたりが花姉さん名乗ってる？

31：神獣

僕じゃないよ

32：名無しの獄卒さん

＜＜30

それにしても、妹の情報を持ちすぎじゃね？

俺、獄卒で妹さんとは顔見知りだけど怪談好きなんて知らなかったぞ

33：名無しの獄卒さん

＜＜32

ますます花姉さん経由で情報知った神獣の可能性が高いな・・・っ
て思ってたら

＜＜31：神獣

＜＜僕じゃないよ

おい

34：名無しの獄卒さん

◇ 3 1

いたのかよ、スケコマシ!!

3 5 : 名無しの獄卒さん

◇ 3 1

何してんだよ淫獣!!

3 6 : 名無しの獄卒さん

◇ 3 1

養豚場に帰れ白豚

3 7 : 姉

◇ 3 1

仕事して、神獣様

3 8 : 名無しの獄卒さん

◇ 3 1

彼女返せ白澤
!!!!!!

3 9 : 神獣

皆、いきなり酷い!

4 0 : 名無しの獄卒さん

酷くない

仕事しろ

4 1 : 名無しの獄卒さん

仕事しろ

もしくはくたばれ

4 2 : 名無しの獄卒さん

仕事しろ

43：名無しの獄卒さん

花姉さんと桃さんに謝って仕事しろ

44：姉

とりあえず13時まではお昼休憩ということで大目に見ますが、13時になったら仕事に戻ってください。

早く金丹つくってあげて。狛犬君が大怪我したの知ってるでしょう？

45：神獣

◇44

・・・はい（・ω・）シヨボーン

46：名無しの獄卒さん

流石は花姉さん

完全に神獣の手綱を握ってやがる

47：神獣

もはや僕のお嫁さんだね、花ちゃんは

48：姉

違います

49：名無しの獄卒さん

◇47

くたばれ

50：名無しの獄卒さん

◇47

鬼殺しの狂犬さん、こつちです

51：名無しの獄卒さん

◇◇ 47

誰か鴉天狗警察と閻魔庁と不喜処に通報して

52：名無しの獄卒さん

◇◇ 47

お前の嫁ポジは桃の英雄の方だよ

53：名無しの獄卒さん

◇◇ 52

桃さん、とばつちりwww

54：名無しの獄卒さん

つか花姉さん、即レスww

55：名無しの獄卒さん

あの・・・なんか流すべきではない情報がサラッと出てるんですけど

◇◇ 狛犬君が大怪我したの知ってるでしょう？

56：名無しの獄卒さん

57：名無しの獄卒さん

・・・え？

58：名無しの獄卒さん

狛犬君って、あれだろ？

反則チート級血鬼術揃いの上弦にフィジカルだけで上り詰めた人

だよね？

59：名無しの獄卒さん

四徹目の鬼神様なら殴って寝かせることが出来る狛犬殿が？

60：名無しの獄卒さん

鬼神様に投げっぱなしジャーマンを決めた伝説を持つ狛犬殿が？

61：名無しの獄卒さん

何があつたの花姉さああああん!!!!

62：名無しの獄卒さん

待て

狛犬殿に何があつたかもすごく気になるけど、それよりも▽60

狛犬殿が鬼神様に投げっぱなしジャーマン決めたってどういうこ

と？

あの人、実力的に出来てもおかしくなさそうだけど、性格的に無理

だろ

四徹目に殴ってでも寝かせるはまだわかるけどさ

63：名無しの獄卒さん

▽62

何、お前知らねーの？

7徹目の投げっぱなしジャーマン事件って伝説

64：名無しの獄卒さん

▽63

知らねえよ!!

何それ!? 鬼神様、狛犬殿に何したの!?

65：名無しの獄卒さん

狛犬殿に7徹させたの!?
そりゃ狛犬殿もさすがにキレるわ

66：名無しの獄卒さん

▽狛犬殿に7徹させたの!?

違う

あの人、部下に対して業務内容はともかく時間は超ホワイトだから
そんなことさせない

したのは鬼神様の方

67：名無しの獄卒さん

・・・あ（察し）

68：名無しの獄卒さん

……自愛しないことにキレたのか、狛犬殿

70：姉

ああ、その事件は私も妹から聞いたわ

いくら休めと言っても聞いてくれない狛犬君はもちろん、七徹して
も仕事が終わらないことに鬼神様も最高にイライラしてたらしくて、
二人で取っ組み合いの大げんかしたらしいの

それでさすがに徹夜続きだった鬼神様の分が悪くて、最終的に狛犬
君がジャーマンを決めたそう

ちなみに投げっぱなしになったのは、その取っ組み合いで片腕が腕
げかけていたから最後まで抱えていられず離してしまっただけで、わ
ざとじゃないみたい

71：名無しの獄卒さん

花姉さん、伝説の説明はありがたいけどいらない!

色々突っ込んだり深掘りしたいところ満載だけど、昔の事より今
の狛犬殿のこと教えて!!

72：名無しの獄卒さん

◇71

（。ん。）ハッ！

そうだった！

狛犬殿って亡者だよね!? 怪我って治せるはずだよね!?

神獣様に作れって言ってる金丹って狛犬殿用!?

73：名無しの獄卒さん

仕事しろや神獣ー!!

74：名無しの獄卒さん

休んでねーで今すぐ万能薬作れオラア!!

75：名無しの獄卒さん

狛犬殿がいなきやあんた、鬼神様にすり潰されるってわかってんのかゴルアツ!!!!

76：神獣

今作ってるのは使用した分の補充だよ!

狛犬君はもう投与済みだよ!!

77：名無しの獄卒さん

なら許す

けど仕事しろ

78：名無しの獄卒さん

休むな働け過労死するくらいに働けスケコマシ

79：名無しの獄卒さん

良かった・・・

でも金丹投与されるくらいの重傷負ったの狛犬殿・・・

80：名無しの獄卒さん
え、待ってマジで何が起こった？

81：姉

狛犬君に何が起こったかは、最後に投下する予定の話で分かると思
うわ。

という訳でそろそろ最初の洒落怖ハント話を投下します。

82：名無しの獄卒さん

この流れで投下すんの花姉さん!!?

83：名無しの獄卒さん

最初に投下して！狛犬殿に何があったの!?

84：名無しの獄卒さん

このマイペースさ・・・

マジで花姉さんだなこれ

なんかまだらしくない所がちよいちよいあるけど

85：姉

スペックにあるように、私の妹と鬼神様は怪談とかが好き。現世の
ホラー小説とか漫画とか映画とかも集めて語り合う趣味友みたいな
関係だったりするの

それである日、視察で現世に降りてた鬼神様・狛犬君・妹と、同じ
く現世の薬屋さんに商品を卸しに行つてた神獣様がたまたま出会つ
てなんかそのままついて行ってたら、洒落怖の元ネタっぽい地域と伝
承を知って、鬼神様が「獄卒にスカウトしましょう」と言い出し、そ
のまま急遽洒落怖ハントを実行

鬼神様が唐突にそういうことを言い出してやる人なのは知ってた

けど、妹はホラー好きだけど肝試しとか廃墟探索は不謹慎だから嫌う子だし、なにより地獄の良心である狛犬君が止めなかつたのかしら？と私は初め思っただけど、鬼神様がハントしようと言いだした洒落怖がなんなのかを知って納得

その伝承が元ネタと思える洒落怖は、「姦姦蛇螺」って呼ばれてるものだったの

86：名無しの獄卒さん

あー、あれか

狛犬殿と相性悪そうだな

87：名無しの獄卒さん

現世の怪談は古典しかわからん

誰か教えてくれ

88：名無しの獄卒さん

姿からして体術とは相性悪いだろうな

それ以上に相性悪いというか、狛犬殿がほっとけないのは成り立ちだけど

89：名無しの獄卒さん

◇87

話自体は、田舎のアホガキが肝試しにいつて余計なこととして化け物に遭って呪われて、しかし最悪の事態だけは回避してたから何とか助かり、けれど元凶の化け物はそのまま・・・という昔からよくある話のテンプレートですね

獄卒にスカウトしようとした肝心の「姦姦蛇螺」という化け物はその昔、巫女がある村から依頼されて人食いの化け大蛇を退治しようとしたが、大蛇に巫女は下半身を食われてしまう。

下半身を失っても巫女は村を守るために術などを使って戦い続けましたが、下半身を喰われた時点で村人は巫女に勝ち目無いと思ひ、

大蛇に巫女を生贄にするから村は見逃してくれと交渉し、大蛇はそれを承諾。

村人は巫女を裏切ったあげくに、大蛇の命令で食べやすいように腕を切断。だるま状態にされて巫女は大蛇に食われましたが、食われた巫女は大蛇と一体化してラミアのような上半身は人間の女、下半身は大蛇の姿になり、そして巫女個人の恨みからか、それとも大蛇に乗っ取られているからか、この姿でまたしても村人を襲うようになり、特定の儀式によって封印されています。

以上が「姦姦蛇螺」の雑でぎつくりとした説明です。

90：名無しの獄卒さん

・・・あー、女で被害者なのか

91：名無しの獄卒さん

守った相手が卑怯者で裏切られた末路か

そりゃ狛犬殿は放っておけないわ

人間襲う加害者として現世には置いておきたくないだろうな

92：姉

▽89

説明ありがとうございます

すみません、有名所なので説明しなくても大丈夫かと思って書き溜めていかなかったの

妹も姦姦蛇螺に同情的だからこそ、鬼神様のスカウトには賛成

狛犬君は全然、洒落怖とか知らなかったから三人がかり（何故か神獣様もよく知ってた）でかなり事細かく教えてもらって、皆さんの想像通り放っておけなくて賛成してくれたそう

神獣様は姦姦蛇螺が女の子ってだけで、なんかウキウキだったらしいわ

神獣様、姦姦蛇螺は下半身蛇だけじゃなくて、上半身の腕は6本よ？話によっては蛇部分の下半身にも、姦姦蛇螺になった後に村人か

ら奪った腕をくっつけてムカデみたいな姿になってるらしいけど、本当に良いの？

93：名無しの獄卒さん

本当に節操ねえな、あの駄獣

94：名無しの獄卒さん

ある意味ではスケコマシの鑑

95：名無しの獄卒さん

焦熱地獄のトマホークという正妻がありながら・・・

96：名無しの獄卒さん

正妻www

下手すりや頭無惨以上の問題児専門の獄卒かwww

97：名無しの獄卒さん

あの人でも流石にあの天邪鬼には腹の底から絞り出すような「おう・・・」って声が出たらしい

でも、「無理」って言ったの性格面で外見に関しては一言も文句つけなかった所だけは尊敬してる

98：名無しの獄卒さん

・・・腐っても天国の住人で神なんだな、白豚様

99：名無しの獄卒さん

▽98

見直してるようで貶しまくってるよね？

100：姉

とりあえず神獣様の守備範囲は置いといて、全員が姦姦蛇螺を探す

こと自体には賛成だったから、そのまま姦姦蛇螺が封印されていると曰くの森にレッツ不法侵入

森の中を鬼神様が大王に似た不思議生物が出てくる映画の主題歌をバリトンで歌いながら進んだり、妹に「疲れたら僕が抱っこして運んであげる」と言っていた神獣様が真つ先にダウンして狛犬君が運んでくれたり、鬼神様と神獣様がしり揚げ足とりを始めて喧嘩しながら進んでいたら、六本の木に注連縄が張られ、その六本の木を六本の縄で括って六角形の空間がつけられている場所を発見

洒落怖の記述通りの場所の中心には、やっぱり洒落怖の記述通り賽銭箱みたいな物がポツンと置いてあったそう

妹と狛犬君はもちろん、鬼神様と神獣様も喧嘩をやめてその中心の箱みたいな物に近づいて中を見てみたら、細かい所は洒落怖と記述とは違う所もいくつかあったけど、やっぱりほぼ同じ中身

少なくとも、箱の中央の赤いつまようじみたいな棒で奇妙な・・・蛇の下半身と人間の上半身に見えるような凶形が描かれていたらしいわ

それを見てなんだかんだで知識の神である神獣様、それが姦姦蛇螺と呼ばれるものになってしまったものを弱体化させ、特定の土地から出ないように封じてるもので、彼女を浄化させてあげるようなものではない、彼女を土地に縛って憎悪を忘れさせてやることもしないで、彼女の邪気で外からの悪いものが寄ってこないように利用しているだけのものだって説明してくれたわ

101: 姉

けれどあの神獣様、知識は間違いなく神様級だけど、壊滅的に画力がないのよね・・・

女の子だったのもあって神獣様は真面目に姦姦蛇螺の封印を、呪いを解いてあげようと頑張ってくれたようだけど、その為のお札の凶形がどう見ても浄化の為のものじゃなくて、新たな呪いをかける為のものですよね？って出来だったらしいの

そのことを鬼神様が指摘したら、自分の画力の自覚が皆無な神獣様

は怒って言い返して、また喧嘩が勃発。ただ、二人とも疲れていたのと、姦姦蛇螺の扱いのひどさに傷ついていたからか、いつも以上に頭に血が上りやすかったみたい

二人とも、口喧嘩じゃなくて取っ組み合いの喧嘩をし出して、慌てて妹は止めようとしたけど口喧嘩じゃなくて取っ組み合いだから危ないって、狛犬君が庇うように前に出たのよ

でも、駆け出そうとした時に前に出られたから、妹はぶつからないように急に止まった所為で体のバランスを崩して転びかけて、それも狛犬君が受け止めてくれたのは良いんだけど・・・これ全部、箱の近くで起こったことなのよね

で、妹は狛犬君が支えてくれたから倒れたり転んだりこそはしなかったけど、手で触れて崩しちやったわ

洒落怖の話のように、箱の中の棒の凶形を

102：名無しの獄卒さん

・・・あ

103：名無しの獄卒さん

・・・妹さん、やっちゃった

つかこれ、悪いの全面的に鬼神様と神獣様だな

104：姉

妹が棒の凶形を崩した瞬間、その場の空気が一気に変わったらしいの

ただでさえ重くて淀んでいるように思えた空気が、さらに重くなったのと同時に薄くなったような感覚に陥って、妹や狛犬君は冷や汗が止まらなくなるし、神獣様も顔色が悪くなるし、鬼神様も神獣様を殴るのをやめたくらい

そして、がさりという物音がした時、妹は「見てはいけない！」とわかっていたのに、姦姦蛇螺の話を知らなくても見たくないと思えるような空気と威圧感だったのに、操られるように顔を上げて、見てし

まった

木々の影から、2 mは優に超える異様に高い位置からこちらを、妹をこの上なく、仇を見るように恨めしく、同時に絶好の獲物を見つけたと言わんばかりの、嗜虐心に満ちた愉悦っていう、人に裏切られた巫女と人に害成す大蛇が融合して、けれど一つになり切れていない、あまりに歪んだ形で無理やりこの世に留められているのが一目でわかる顔をして、姦姦蛇螺は妹を見ていたの

105：姉

鬼殺隊の柱に上り詰め、未だに鍛錬を欠かしていない妹だけど、流石に日輪刀は持っていけないし、そもそも突発的な洒落怖ハントだったから、妹の武器は職質とかされても護身用ってことでまだ誤魔化せる警棒ぐらいしかなかったのと、無惨の鬼とは違って姦姦蛇螺に妹は恨みなんかない、むしろ同情的だったから、戦う気力が全く出てこなくて、ただただ恐怖で頭が真っ白になってその場に座り込んでしまったと本人は後悔していたわ

そんな妹の前に出てあの子を守ってくれたのは、もちろんみんなの紳士、狛犬君

彼は未だよっぽどの例外じゃない限り女性亡者の呵責は出来ないのに、妹以上に姦姦蛇螺に同情的で傷つけたくないって思っているのに、それでも棒を崩して姦姦蛇螺のターゲット認定されたであろう妹を守ろうとしてくれたの

そしてそのまま、狛犬君と姦姦蛇螺のバトルがスタート

106：姉

わかっていたけど、狛犬君は劣勢どころじゃなかったわ

ただでさえ徒手空拳という格闘スタイルだから、下半身が大蛇なんて人外味が強い相手だと戦い辛いのに、傷つけたくない想いが強いから、ほぼ姦姦蛇螺のサンドバッグ状態

しかも狛犬君、ほとんど姦姦蛇螺の顔というか上半身を狙わないし見ないで戦っていたそう

姦姦蛇螺の上半身、巫女の部分を見ただけならまだ呪われても被える可能性があるけど、大蛇である下半身部分を見たらアウトだつて事前に教えていたから、妹はその行為を自分の為、ターゲットの優先順位を凶形を崩した妹から大蛇部分を見た狛犬君自身に挿げ替えようとしているつて解釈したの

・・・まあ、その意図は別にたぶん間違いではなかったでしょうけど

とにかく、狛犬君が大蛇に弾き飛ばされまくってボロボロになっていくのを、腰が抜けた状態でただ見ていることしか出来ない自分に怒りながら、泣いて妹は鬼神様と神獣様に狛犬君を助けてと叫んだそうだけど、何故か二人ともその場に立って真顔でじつと姦姦蛇螺を見ていたのよ

その視線の先を辿って、妹は気付いたわ

姦姦蛇螺、上半身すっぽんぽん

鬼神様と神獣様ガン見

よく見れば狛犬君、耳まで真っ赤

・・・気付いた瞬間、妹の抜けていた腰が瞬間回復して「何してんですかあんた達は!？」と、ガン見してた二人の腹筋に警棒をフルスイング

107：名無しの獄卒さん

wwwwwwwwwwwwwwww

108：名無しの獄卒さん

鬼神様お前もか

109：名無しの獄卒さん

W
W
W

まって花姉さん、どんなテンションでこれ書いてんのW
W
W

110：名無しの獄卒さん

コメントもできないシリアスかと思ったら、全力でぶっ壊されたW
W
W

111：名無しの獄卒さん

狛犬殿が戦えない理由がまた増えたW
W
W

つか、神獣は元々期待してないけど、マジで何してんだんだよ鬼
神様W
W
W
W

112：名無しの獄卒さん

つか、そういうのに興味あったんだな鬼神様

仕事一筋でストイック超えて、性欲とかそういうものはない以前に
理解すらしてないのかと思ってた

113：名無しの獄卒さん

あの人、結構ムツツリだぞ

いや、仕事中は賢者モードというか無我の境地なだけで、むしろ
オープンなぐらいか？

114：名無しの獄卒さん

どうでもいいが、鬼神様は平気だろうけど神獣様の腹に警棒フルス
イングって大丈夫か？

絶対に妹さん、呼吸も使ってただろ
神獣、二つになってない？

115：姉

∨ 109

正直、この話を聞かされた時のテンションが蘇って打鍵した記憶がありますけど、どんなテンションだったかは思い出せません

精々、徒の芍薬を神獣様と鬼神様に決めたくなっていたような気がします

◇ 114

なんだかんで鬼神様に殴られたり、金棒でホームランされたり、家を投げつけられて下敷きになっても五体満足なので、大丈夫でした
しばらく痙攣してたようですけど

116：名無しの獄卒さん

◇徒の芍薬

大分殺意高い技を決めたがってる!!

117：名無しの獄卒さん

鬼神様と神獣様、蝶々姉妹に土下座な

118：名無しの獄卒さん

いや、土下座の対象は狛犬殿だろ

119：名無しの獄卒さん

狛犬殿に土下座した相手がまた増える・・・

つか鬼神様は二回目か

120：名無しの獄卒さん

◇なんだかんで鬼神様に殴られたり、金棒でホームランされたり、家を投げつけられて下敷きになっても五体満足なので、大丈夫でした
改めて見ると、神獣様の耐久がやべえな
もうこれ、神獣様を盾に逃げよう

121：名無しの獄卒さん

!!

しまった！その手があった！そうしとけば良かった！

122：姉

話を戻して

妹の一撃で、ガン見している場合ではないことに気付いてくれた鬼神様と、ある意味ショック療法で色んなものが回復した妹が、狛犬君と選手交代

狛犬君を下がらせ、そして鬼神様は悶絶している神獣様のお尻を文字通り蹴っ飛ばして、姦姦蛇螺をどうにかする術を考えろと指示を出す

さすがの神獣様も、この時は鬼神様に突つかからずにゼイゼイ言いながらも彼女を鎮め、大蛇部分だけを祓うお札を必死で作ってくれたの

・・・ただ、この時全員忘れていたわ

妹が棒の凶形を崩し、姦姦蛇螺が現れた原因は鬼神様と神獣様の喧嘩

そしてその喧嘩の原因が、神獣様の画力がもはやホラーの域に達している皆無さだということ

123：名無しの獄卒さん

・・・（一人ー；）南無

124：名無しの獄卒さん

（ノ、）アチャー

125：名無しの獄卒さん

・・・これ、誰に同情すりゃいいの？

126：姉

◇ 125

姦姦蛇螺でいいと思います

神獸様作のお札は・・・効きました。効くことは間違いなく効いた
そうです。むしろ効果は抜群だったと妹は死んだ目で言っていました

ええ、本来の鎮めたり大蛇のみを祓うという意味ではなく、ダメー
ジ与えて更に呪うって方向で

姦姦蛇螺、何故かそのお札から召喚された猫好^{マオハオハオ}ちゃんと同じ画風
な大群の蝶々にまわりつかれ、パニックになってその場で大暴れ
妹と鬼灯様はもちろん盛大にキレて、鬼灯様が先に神獸様のトドメ
を刺そうとしたから狛犬君が必死になって止めたそう

127：名無しの獄卒さん

・・・猫好の絵柄の・・・大量の・・・蝶？

高熱が出た時に見る悪夢か？

128：名無しの獄卒さん

ヤクを決めてたら見そうな幻覚だな

姦姦蛇螺、怖かっただろうなあ・・・

129：名無しの獄卒さん

狛犬殿、どいて

そいつ殺せない

130：名無しの獄卒さん

もう本当に先に神獸殿を始末しておいた方が、物事がスマートに進
みそう

131：名無しの獄卒さん

◇ 130

落ち着いて。気持ちはわかるけど、落ち着いて

画力が最悪すぎただけで、そいつの知識がないと姦姦蛇螺を救えないから

132：姉

◇ 131

妹も同じことを言って、とりあえず神獣様を塵にするのは後回しにするように鬼神様を説得したらしいわ

で、鬼神様もその説得に応じて狛犬君に、神獣様の指示通りにお札を描くように指示を出したの

これが正解

神獣様、物事を教えるのは結構うまいのと、狛犬君は絵心がそれなりにあったから、かなり複雑な凶柄のお札だったけれど無事完成して、それを妹が素早さと小柄だからこそその身軽さを発揮して、鬼神様が姦姦蛇螺と神獣様のお札で発生した悪夢蝶を引き受けていなしている隙に、神獣様の指示通りの箇所にお札を貼りつけ、見事に姦姦蛇螺を鎮め、元凶の大蛇を祓うことに成功！

133：名無しの獄卒さん

おお！どうなるかと思っただけど、良かった良かった

134：名無しの獄卒さん

っていうか、狛犬殿って絵心あるんだ

ちよつと意外

135：名無しの獄卒さん

◇ 134

狛犬殿、普通に結構うまいぞ

桃太郎ブラザーズがす○っこぐらし化するけど

136：名無しの獄卒さん

◇ 134

写実的な奴じゃなくてイラスト的だけど、良い絵を描くよ
この間落書きで描いた針口虫が、なんか勝手に地獄のゆるキャラに
応募されて優勝して公式化してたし

137：名無しの獄卒さん

∨ 134

上手いですよ

サン○オのイラストレーターに就職できそうぐらい

138：名無しの獄卒さん

狛犬殿の絵が可愛いことはわかった

139：名無しの獄卒さん

狛犬殿の絵柄が可愛いことはわかった

140：名無しの獄卒さん

狛犬殿が可愛いことはわかった

141：名無しの獄卒さん

∨ 140

知ってる

142：名無しの獄卒さん

∨ 140

なんならあの人、たまに嫁より可愛いぞ

143：名無しの獄卒さん

∨ 142

おい！訂正しろ！

狛犬殿は「たまに」「嫁より」可愛いんじゃない!!

「いつも」「嫁と同じくらい」可愛いんだ!!

144：名無しの獄卒さん

◇ 143

落ち着いて

愛でる会の過激派さん、落ち着いて

145：名無しの獄卒さん

姦姦蛇螺より注目されて話題になる狛犬殿はマジ愛されアイドル

146：名無しの獄卒さん

しまった！ちよつと本気で姦姦蛇螺のこと忘れてた！

147：姉

私も忘れかけて、今必死で狛犬君の可愛いエピソードをメモ帳に書き溜めてたわ

148：名無しの獄卒さん

◇ 147

おいこら、スレ主

149：名無しの獄卒さん

◇ 147

見たいけど、すげー読みたんだけど、花姉さんは忘れるな
一旦話を終わらせてからそのエピソードを投下して

150：名無しの獄卒さん

◇ 149

要求すな

151：姉

それもそうね

というか、今思い出したけどそのエピソード、次の洒落怖ハント中のエピソードだった

書き溜める必要、まるでなかったわ

だからその話は次にして姦姦蛇螺の話だけど、さっきの話でもうほとんど終わりなのよね

大蛇を祓った事で、その場に残ったのは人間の上半身と蛇の白骨
そして巫女の魂は解放されて、人間の姿でお礼を言ってくれたそう
・・・ただ幽霊状態でもスツポンポンだったから、狛犬君は真っ赤
になつて背を向けながら上着を脱いで妹に渡し、鬼神様もさすがに二
度目は同じ轍を踏まず紳士的に明後日の方を向き、まったく懲りずに
ガン見した神獣様には、持っていた水筒を使って天面砕きを妹は決め
て、狛犬君の上着を着せてあげたそう

あと、巫女も上着を借りて着た後に神獣様にマジビンタしたらしい
わ

そして姦姦蛇螺だった巫女をあの世に連れて帰って、死後の裁判を
行つて普通に姦姦蛇螺になつてからのことは大蛇と村人たちの所為
だから不問、彼女自身は人々を救い続けたから天国行きの判決とな
り、彼女が望んだ通り穏やかな暮らしをしているわ

姦姦蛇螺を獄卒にスカウトしたかった鬼神様にとっては、ちよつと
残念な結果かもしれないけど、あの方も彼女が普通の人間として穏や
かに過ごせているのは喜んでくれたそうよ

まあ、そんな訳で第一回洒落怖ハントの姦姦蛇螺はこれでおしまい

152：名無しの獄卒さん

うん、姦姦蛇螺だった巫女さんが救われたのは本当に良かったけ
ど・・・

余計なノイズが盛大に入って、素直にめでたしめでたしで終われな
い

153：名無しの獄卒さん
神獣様、本当にブレねえな

154：名無しの獄卒さん
っていうか、花姉さん
妹さん、蟲の呼吸じゃない技使ってない？

◇ 持っていた水筒を使って天面砕きを妹は決めて
それ、俺の記憶が正しかったら岩の呼吸の技なんだけど

155：名無しの獄卒さん
wwwwww
妹さん、色んな意味でキレツキレだなwww

156：名無しの獄卒さん
◇ 154
まって、岩の呼吸の技ってこれどんな技なの!?

157：名無しの獄卒さん
◇ 156
本家だと頭上に鉄球を落とす技だから、水筒をぶん回して駄神獣の
脳天に叩き落した感じだと思う

158：名無しの獄卒さん
鉄球じゃないなら、ギリ妹さんでも再現できそうな技だな
安心した

159：名無しの獄卒さん
良かった・・・

まさかのこのタイミングで痣が覚醒して、マツチヨ化したかと思っ
た

160：名無しの獄卒さん

∨ 159

痣にそんな効果はねえよ!!

161：名無しの獄卒さん

：・・ところで、狛犬殿が金丹を投与される羽目になったのって、姦
姦蛇螺にボコボコにされたから？

162：名無しの獄卒さん

あ

163：名無しの獄卒さん

!!忘れてた!盛大に忘れてた!!

164：名無しの獄卒さん

そーいやスレの最初の方でそんなこと言ってたな!!

165：姉

いえ、違いますよ

それは最後に投下する予定の話です

166：名無しの獄卒さん

そしてこれも忘れてた!!

そーだこれは狛犬殿の現状とは無関係の話だった!!

花姉さん!順番入れ替えて!そっち先に投下して!!

167：姉

ごめんなさい

そういえばお昼がまだだったから、ちよつと食べてきます
帰って来たら次の洒落怖ハントの話を投下しますね

168：名無しの獄卒さん

◇ 167

花姉さあーん!!

リロードしてー!!

169：名無しの獄卒さん

あなたのおつとりマイペースな所は好きだけど、ここでそれを
発揮しないでえええええ!!
戻ってきてえええええ!!

170：名無しの獄卒さん

下手したら食後は忘れてこのままスレ落ちるぞ、これ

171：名無しの獄卒さん

・・・とりあえず、保守しとこう

花姉さんの性格からして思い出しさえすれば、どんなに時間が経つ
ても面倒くさがらず、責任を持って続きを投下してくれるだろうし

172：名無しの獄卒さん

せやな

173：名無しの獄卒さん

・・・花姉さん、マジで何でこのスレ立てたんだ？

【洒落怖ホイホイ】妹とその上司と同僚が洒落怖ハントする話【狛犬

君
に
続
く

色恋沙汰のあれやこれ

(玄弥???)
(×)

「実は……女の子に告白されたんだ。いや、告白って言うか、ほぼプロポーズ」

とある昼下がりの甘味処。

その一角で、実に神妙な顔と空気でもヒカン頭の強面な少年が懺悔するように呟く。

それを聞いていた傷だらけの顔に瞳孔開きっぱなしな四白眼という、向かいの少年と負けず劣らず強面な青年が呆気に取られて、しばし硬直。

不死川兄弟はそのままたつぷり3分ほど、向かい合って沈黙し続けた。

兄である不死川 実弥は、返答に迷っていた。

弟の玄弥から、他の家族には話せない、自分にしか話せない相談があると真剣な顔で告げられ、どうか時間を作って相談に乗ってくれと言われた時は生前のトラウマが色々ぶり返して、亡者だがまさしく生きた心地がしない状態だったのに、重苦しく公開された内容はまさかの恋バナである。

普通なら割とガチでキレてもおかしくない状況だが、玄弥にとって幸いなことに沸点がかなり低い不死川が珍しく怒っていなかった。

それは誰よりも何よりも大切に守りたかった、その為なら自分の何もかもを犠牲にしても惜しくなかったのに、自分の後を追い続けて、自分と同じものを捨て続け、拳句の果てにもはや人間の末路とは言えない最期を迎えた弟に、ようやく春が来たと思える内容だったからだ。

だからこそ不死川は、「よっしゃよくやった！ 今すぐ祝言上げろ準備は全部俺に任せる!!」と脊髄反射で即答しそうになったのを堪え、自分でハイテンションな内なる自分を宥めていた。

「……お前、付き合ってる相手がいたのか？」

「!? 違う違う！ 付き合っていない!! 言ったじゃん告白って！」

付き合ってくださいをすっ飛ばして結婚してくださいって言われたんだよ!!」

頭の中の全力お祝いモードな自分を殴り潰して、ひとまず交際の事実を確認してみたら、俯いていた玄弥が真っ赤な顔を跳ね上げ、全力で否定する。

その否定内容で、まだ自分は浮かれていたことを自覚して不死川は、自身を落ち着かせるために抹茶を一口すすする。

「あ、ああ、そうだったな。……ってというか、段階飛びすぎだろ。言っちゃなんだが、大丈夫かその女」

「まあ、今すぐ結婚してくれは本当に最初、テンションがハイだった時に言われたやつだから、あんま気にしてないんだ。けど、それから会うたびに……その……俺のことを好きだって、結婚したいくらい好きだって言ってくれて……」

少し落ち着いたところで弟の発言を吟味してみたら、積極性が過ぎる女だということに気付き、ようやく脳内のお祝いモードが納まり、しかし今度は逆に過保護な兄バカが顔を出す。

だが玄弥は兄バカに気付かないまま、対象をフォロー。

どうやら積極的なタイプであることには間違いないが、ストーカーのように一方的で狂的な好意の押し付けをするタイプではないことを、弟の照れつつ嬉しそうというか、まんざらでもなさそうな反応で不死川も理解し、兄バカも鎮火。

「めちやくちや惚れられてるな。何やったんだよお前」

「……道に迷ったあげくに何か酔っ払いに絡まれてたところを助けて、家族の元に送り返した」

「よし。結婚しろ」

「兄ちゃんも結論が早えよ!!」

更に不死川がそうなった経緯を聞けば、確かにテンションがハイになって初手で段階スキップ求婚してもおかしくないことを弟はしていた。

そして不死川は、自分も弟も強面で女子供からの第一印象が最悪に近いことを知っている。

なので、これだけ「少女漫画のヒーロー」的な行動をしていても、加害者に対してと同じように怯えられたり、慇懃無礼な態度を取られた事は珍しくない。

不死川はそのあたりのことを「どうでもいい」と割り切り出来ているが、弟は繊細に傷つき続けていたことも知っているのも、玄弥の外見に引きも怯えもせず、助けられたことで好意を懐いて積極的にその好意を表してくれる女性は、不死川にとつてもはや理想の義妹だった。

なので一瞬とはいえない危ないストーカー女と疑ったことは脳内土下座で謝りつつ、不死川も段階をすつ飛ばしてその女性と結婚するよう玄弥に命令する。

「しないから！… つか、どうやってたらその子が俺のことを諦めてくれるかを、兄ちゃんに相談したかったんだよ!!」

「はあ？」

しかしその命令は、玄弥の本意とは反しまくる事だったので、実はまだ入っていないかった本題をぶちまけて玄弥が拒否り、不死川は本気で困惑の声を上げる。

「なんだそりゃ？ 一体お前、そいつの何が不満なんだ？ 顔か？」

「んな訳ねーよ。俺は他人の顔に文句つけれるような顔じゃないし、そもそも顔が綺麗ならブサイクをバカにしているとも思っていないし。

あと、その子めっちゃやくちや美人。だから、美人すぎて目を見て話せない所が不満つちや不満だけど、諦めて欲しい理由とは無関係」

不死川としては、色恋沙汰に奥手な弟が一応とはいえ生前結婚した自分にアドバイスを求めていると思っていたが、その前提を完全否定されてしまったので、困惑しながらまずありえない理由を上げてみた。

兄の思った通り、玄弥は顔が好みではないから振りたくない訳ではないと告げる。

それどころか相手が美人だと言いつ切るので、なおさらに何でその相

手の告白を受けないのかが不死川にはわからない。

「いや、意味わからん。お前、そいつのことを嫌ってる訳じゃねーんだろ?」

「まあ、ちよつとシビアで言うことがキツイけど、素直で明るくて優しい良い子だから、好きか嫌いかで言えば普通に好きだけどさあ」

「大好きじゃねーか。マジで何が不満なんだ?」

「そりゃ……」

聞けば聞く程にその義妹候補な女性の印象は良くなり、そして語っている玄弥も嫌ってないどころか好意的であることを認めている。

これが生前なら、鬼殺隊であることや鬼喰いによる特異体質という、玄弥自身の問題で躊躇っているという想像がつくが、現在は鬼殺隊という前職はもちろん、特異体質も鬼が敵ではなく隣人という関係だからこそ生かされることはまずないので、気にする必要などない。

なので、もう相談に乗るといふより完全に兄弟の雑談モードで不死川はおはぎを食べながら尋ねると、玄弥もみたらし団子を食べながら、「なんでまだわかってくれないのかなあ?」とちよつと不満げな顔をして答えようとした。

「あー、玄弥ちゃん!!」

しかし、答える前に答えそのものがやってきて、座っている玄弥の腰に抱き着いた。

「!?」

「……………は?」

その声と抱き着かれたことに玄弥は顔を真っ赤にさせ、不死川は最初の弟のカミングアウト以上に目を見開き、呆気にとられた。

そんな兄弟の反応に気付いていないのか、それとも気付いた上での行動なのか、彼女は玄弥の腰に抱きついたまま、艶やかな髪を揺らし顔を上、上目遣いで玄弥をその大きな瞳に映し、満面の笑顔で元氣よく言い放つ。

「玄弥ちゃん、大好き! 丙が大人になったらお嫁さんにして!!」

5, 6歳の幼女が無邪気にプロポーズし、その背後で兄姉らしき男は微笑ましげに笑って見守りつつ、今にも玄弥に手裏剣を投げそう

な平等王の補佐官兼、丙の父である弟切を宥めていたのを不死川は眺め、途方にくれた。

* * *

しばし途方に暮れてしまったが、現状というか玄弥の相談事、弟に懸想する義妹候補が誰であるかを知ってから不死川がしたことは、とりあえず立ち上がって正面の玄弥の頭を割と本気でぶん殴る事だった。

「最初に言え!!」

「何を?」

「相手が年齢一桁の子供だつてことに決まってるんだろが!!」

突っ込まれてもわかってなかった玄弥は殴られつつ抗議し、余計にキレられた。

玄弥としては「女の子」と言った時点で、相手が子供であると伝えたりもりだったのだが、もちろんキレている兄にその言い訳は火に油どころかガソリン塗れのダイナマイト投下同然だ。

「玄弥ちゃん!? 誰!? 玄弥ちゃんをいじめないで! ……あれ?」

「……よお」

幸いながら玄弥が空気を読まない言い訳を口にする前に、丙が驚きつつ抗議し、そしてすぐに彼女は気付く。

相手は幼稚園の遠足で、完全にふれあい動物園扱いだった不喜処で世話になった獄卒のおにーさんだということに。

そして不死川も、彼女のことは覚えていた。というか、彼女の父と知り合いだつたので、父親そっくりな丙は嫌でも印象に残っていた。

なので、丙に対してはその一言で終わらせて、彼は視線を弟と丙から彼女の父親であり、自分の知り合いへと移す。

「……久しぶりっすね、弟切さん。なんか、……弟がスマン」

「……いえ。むしろ自分の方がなんとというか……申し訳ない」

不死川がもうどんな顔をしたらいいのか全くわからない、ひたすらに困惑した顔でひとまず謝れば、相手もひたすらに気まずそうな顔で手裏剣を懐に仕舞って謝った。

「あれ? パパも知ってるの?」

「丙、匡近くんの親友だよ」

「！ 匡近お義兄ちゃんのこと？」

二人の反応に丙が小首を傾げて尋ねると、父ではなく兄が答えて、丙は無邪気に瞳を輝かせた。

不死川と弟切に面識がある理由は、互いが獄卒であることは勤務地も業務も違い過ぎていたのでほぼ無関係。

面識の理由は不死川が鬼殺隊に入るきっかけであり、そして柱になったきっかけでもある親友の糸野 匡近が弟切の娘と結婚したからだ。だから互いに家族構成や家庭の事情、相手の性格などといったものは知っているくせに、どちらにしろ別に親しい訳ではない。

その為お互いに気まずい思いをしているのだが、結婚前のトラップ掻い潜りに好成绩を叩きだし、嫁である姉はもちろん他の家族も大切に尊重してくれる糸野は、数人いる義兄の中でも特に父親に気に入られているのを、丙は父譲りの観察力で気付いていた。

なので、彼女はこれまた父譲りの異性を一瞬で魅了する笑顔を浮かべ、計算なのか本心の無邪気さなのかわからない発言をぶちかます。

「玄弥ちゃんのお兄ちゃんが、匡近お義兄ちゃんの友達なら、玄弥ちゃんも絶対うちの罫をクリアできるね！」

玄弥ちゃん！ 丙は絶対に姉妹で一番の美人になるから、頑張つて大人になった丙をお嫁さんに迎えに来て!!」

「いやいやいや！ 丙ちゃんマジで待つて！ 無理だって俺、何度も言ったよな！ 言いましたよ！ だからその手裏剣と殺気しまつて弟切さん!!」

熱烈な求婚を続ける丙に、玄弥は顔を真っ赤にさせタジタジだが、それでもハッキリ断つて弟切の殺気を鎮めようとするのだが、殺気の元凶である娘本人は全く引かない。

「無理なのは、今すぐ結婚することでしょう？」

……玄弥ちゃん、丙が大人になつても無理なの？ こんなに丙は玄弥ちゃんが好きなのに、子供つてだけで丙は玄弥ちゃんのことを諦めないといけないの？」

「おいこら、俺の弟にハニトラ仕掛けるなガキ。そもそも、お前の結婚

相手は『少なくともパパくらいかつこよくて誠実で、許せる程度に安心な欠点のあるお殿様』だろうが」

きよとんとした顔で反論し、そして徐々に悲しげな顔になってハラハラ涙を零す丙は、幼子とは思えぬほどに美しく、ただでさえ未だに女性への免疫は皆無に等しい玄弥は、しちやいけないとわかつていてもドキツとしてしまうわ、けれど根の善良さで泣かせてしまったことにもものすごい罪悪感を抱いて、泣き止ませてやりたいと思うわ、でも下手になんか言えば丙の後ろの弟切に殺されそうで怖いわと大混乱していたので、実は既に色々見抜いていた不死川が代わりに突っ込んでおいた。

「お、俺はお殿様じゃないし、それにほら、弟切さんとは違って全然カッコよくねえから！」

丙ちゃんならマジで、弟切さんみたいな人以上の難易度高い相手のほうから結婚してくださいって言うってくれるからー！」

兄の突っ込みで少しは混乱が納まった玄弥は、ついでに暴露された丙の理想に便乗する。

だが玄弥はもちろん不死川も、このハニトラの申し子である弟切の娘に敵うはずなどなかったとすぐに思い知らされた。

「うん、知ってる。お殿様じゃないことも、玄弥ちゃんは全然カッコよくないことも。」

けど、その何が悪いの？」

殿様ではない事はともかく、カッコよくないと言い切られたことにちよつとショックを受けるが、いつの間にか玄弥の膝上に登って座る丙が、クリンと首を傾げて尋ね返したことに、兄弟は何も返せなかった。

「玄弥ちゃんは、酔っぱらった気持ち悪いおじさんから丙を助けられた。パパとはぐれて泣いてた丙の側にずつといてくれて、泣き止ませようと頑張ってくれた。鴉天狗のお巡りさんに、誘拐犯だって勘違いされた時は、お巡りさんに怒っても丙には怒らなかつた。丙は悪くないって笑ってくれた。丙をお巡りさんに任せるんじゃないって、玄弥ちゃんがパパたちを探してくれた。」

丙の『結婚して』に『子供だから』で断ったけど、『大人になったら』はテキトーに誤魔化さない。いつもすごく真面目に考えてくれる事、丙は知ってる。

丙を子供だから大切に守ってくれてるけど、子供だからって下に見ないで、ちゃんとひとりの人間だって認めて、話を聞いてくれるところが大好きなの。

だから、パパみたいにカッコ良くなっていいの。完璧なんかじゃなくていいの。玄弥ちゃんは、そのままの玄弥ちゃんがいいの。そのままの玄弥ちゃんじゃないとダメなの。

ねえ、それじゃダメなの？ 理想は理想だよ。本当に好きになったのは、ママみたいに苦しんだって恨まなくらいに丙が愛しちやったのは、不器用で照れ屋で正直で頑張り屋さんで優しい玄弥ちゃんだよ。

その何が悪いの？」

見た目は5歳ほどだが、実年齢は下手すれば不死川兄弟よりも上かもしれないからか、幼子とは思えぬほどしっかりした主張をぶつけてきた。

ハニトラの申し子なので、自分の魅力を最大限に生かす言動は意図的に行っているだろう。しかしそれは生前の父のように、将来の夢である衆合の囀役のように、相手を誑かす為ではない。

それは自分が相手しか見えないから、相手も同じように自分のことしか見えなくさせたいからしている事。

熱烈だが同時に素朴な本心の恋心に「悪い」と返せるものはいない。口車に長けているはずの弟切ですら、反論など何も思いつかない。

というか、弟切はある意味この「娘が他の男にベタ惚れ」という地獄を見せられているのは、自分の生前の行いというか顔面の業による自業自得に近いものだという事にショックを受け、その場に倒れ込んでいた。甘味処にすごく迷惑。

そんな瀕死の父親のフォローは実子に任せ、不死川は丙の発言にポカンとしてからまた更に真っ赤になって固まる弟の肩に手を置き、言った。

「俺と匡近が修行つけてやる。だから、お前はこいつと結婚しろ」
「兄ちゃん!？」

「! お義兄ちゃんも大好き!!」

こうして、玄弥の最大級の外堀が埋められた。

【あの人のどこが良いのと尋ねる人に、
どこが悪いと問い返す】

* * *

(鬼灯×梅)

空から言葉通り降ってきた時は、兄から引き離された挙句に力づくで穢されるという恐怖も、兄が傷つけられる怒りも、見知らぬ女の献身が理解できない困惑も、全部が一気に吹き飛んだ。

男を金棒で殴り飛ばしつつ、自分の腕を掴んで引き寄せたのは乱暴だった。兄から引き離された時と同じような状態だったのに、その腕は兄の腕と同じ、自分を守るものだと思えた。自分の胸に満ちるものは、安堵だった。

そして、すぐに放り投げられるように兄の元へと返された。

自分の元に戻ってきたことで、泣いて妹を力加減なく抱きしめたその腕とあの鬼の腕が似ていたことに気付く。

加減をする気がなかったのではなく、加減など出来ぬほどに自分を案じてくれていたことがわかった。

自分を見ていたはずなのに、その鬼は表情を全く変えなかった。

欲情、肉欲、劣情、それらを懐いているくせにそれらを抱かせる相手が悪いと見下す目などしていなかった。

兄を見ても、やっぱり無表情だった。

恐怖、嫌悪感、嘲りなんてなかった。汚物を見るような目なんかしないで、自分と平等に見ていた。

そして、鼻が欠けた女。

元は美しかったのだろうが、だからこそ余計に崩れた部分が際立って、醜く、悍ましく見えた女相手でも無表情だった。

けれど、目だけは違っていた。

「助かりました。ありがとうございます」

女を見てそう言った鬼の目は、優しかった。

まばゆいものを見るように、慈しむような目をしていた。

——自分を見てくれないその眼に、射貫かれた。

遊女や花魁としてのプライドではなく、ただの「梅」としての心が望んだ。

ただの「梅」として見てくれたからこそ、ただの「梅」を見てほしくなった。

その透明な目を、自分と同じ「恋」で染めたくなったのだ。

* * *

「信じらんない！ 鬼灯、本気でその名前がいいと思ったの？ 座敷童たちかわいそー!!」

右手で鬼灯の左手を掴み、そして左手の先にはいつものように兄と一緒に、彼らを伴って地獄のシヨツピングモールを歩きながら、梅は言った。

胡蝶家に引き取られて約1ヶ月。二人はカナエやしのぶの両親から、見た目の年相応なお小遣いを初めてもらって、そのお小遣いで梅が買いたいと望んだものは、友達になった座敷童へのプレゼントだった。

初めて会って喧嘩の仲直りに、自分たちがもらったお赤飯を分けてくれたから、その礼がしたいと自ら主張した時は胡蝶家全員と妓夫太郎が、あまりの尊さに思わずしばらく言葉を失って、梅を盛大に困惑させた。

そんな尊さによる絶句から回復したカナエが、提案した。「鬼灯様を選んでもらったらどうかしら？」と。その提案に同意して、鬼灯に買い物の付き添いを頼んだのはしのぶであり、そして健全に優しく育てている梅への最大の「ご褒美」に全力で狛治や閻魔大王たちが協力して、鬼灯に時間を作らせたのと言うまでもない。

だがしかし、そこに梅が望むデートらしい空気は皆無だ。

それは梅が幼女であり、鬼灯は健全だからこそが大前提であり、また梅自身が鬼灯と二人つきりよりもお兄ちゃんも一緒が良いと望んだ割と自業自得な部分も多大にあるが、一番の要因は鬼灯自身が挙げた最近の座敷童についての話題の所為だろう。

鬼灯が名付けた座敷童の個人名は、梅から大変不評だった。

幼女に非難されて、鬼灯はちらりと彼女に視線を向ける。

その眼は100年前のようにもう透明ではない、見ているが必要な情報以外は認識していない無関心ではないが、残念ながら梅が望んだ「恋」の色も一切見当たらない目。

だけど、ほんの少しだけあの鼻欠けに向けられたものと似た光を帯びた目で彼は言う。

「わかりやすくていいと思っただんですけどね」

「わかりやすさしかないの間違いでしょ」

「俺の名前がマシに見える名前なんて、初めて聞いたなあ」

言い訳を口にする鬼灯に、梅は呆れた目で即答し、妓夫太郎も正直な感想を口にして、鬼灯は拗ねた子供のように唇を尖らせて黙った。

黙ったということは、本人が「良いと思った」のは事実でも、妓夫太郎の感想の方が正しいことは認めているのだろう。実際、正しい。

なんせ鬼灯が双子の座敷童に「名前が欲しい」と言われてつけた名前が、「二子」と「三子」。しかも最初は「子」すらなかった。それは名前ではなく、ただの識別ナンバーだ。

「二人とも今風の名前が良いって言ってたのに、何でそれよ？ あたしだったらもつと可愛い名前つけてあげたのに、ホント二人が可哀相！」

「まあ確かに。今思えばお香さんとか女性を呼んで、考えれば良かったかもしれませんね。私と桃太郎さんで可愛い名前を考えろというのが、そもそも無理な話です」

「お香じゃなくて、あたし！ あたしを呼んで!!」

子供向けのファンシーショップで、ヘアピンなどを吟味しながらしつつこく鬼灯のセンス以前の問題だった点を責める梅に、ようやくその

あたりのことを認めた鬼灯が反省点を口にする、梅は鬼灯の口から他の女の名前が出たことに不満を懐いて、キャンキャン喚きだす。

それを鬼灯が注意する前に、妓夫太郎が話を逸らす。彼は鬼灯なら相手が子供という点だけしか考慮してない力加減の鉄拳制裁をしてくることが理解していたので、妹が痛みと鬼灯に叱られたショックでギャン泣きするのを防ぐために行動した。

「梅なら、良い名前を付けるんだらうなあ。梅が頼まれてたら、どんな名前にしたんだ？」

「そうねえ。蘇芳姫と浅葱姫とかどう？」

「梅さん。それは源氏名です。花魁センスの名づけは、悪い方向で今風です」

その行動は成功したと言えましたが、梅が呆れられて突っ込まれるという方向だった。

読みが変なぶった切りや当て字ではないだけマシだが、梅の遊郭での常識と花魁のセンスがある意味では現代でも通じる所為で悪い方向に突っ走っている。

それでも梅が好んでつける「姫」さえ取っ払えば普通に鬼灯案よりマシなので、梅は頬を膨らませて「鬼灯に言われたくなーい」と言い出し、鬼灯はそれを「はいはい」と流しながら妓夫太郎に目を向けて言った。

「妓夫太郎さんなら、なんて名付けますか？」

話を向けられた本人は、「何で俺に訊くんだよ？」と言いたげな顔をしたが、それでも彼はしばし考えて答えた。

「……桜と桃とかかあ？」

「！ 可愛い！ 双子っぽくてすごく良い！ お兄ちゃん凄い！ ね！ 鬼灯もお兄ちゃんを見習いなさいよ！！」

妹と違い教養がなく、彼女が挙げた蘇芳や浅葱の意味など妓夫太郎は知らない。梅は座敷童たちの着物の柄の色からイメージして取っただけだということもわかってない。

そんな自分が挙げた名前なのに、妹は無邪気に「可愛い」と言っ喜び、その上げた名前である花をイメージして二人のプレゼントを選

び始めた。

可愛らしいピンク色の花を選びながら、「……いいなあ。可愛い名前」と呟いたのを、妓夫太郎は聞き逃さなかった。

だけど、何もしてやれない。言えなかった。

母の病氣から取られた名前。

そんな名前だけど、妓夫太郎にとっては世界で一番可愛くて綺麗な名前だから、そこから連想してつけたとは言えなかった。

言えないまま、妹がプレゼントを選ぶのを見守っていた妓夫太郎は気付かない。

いつの間にか鬼灯がしれっと二人から離れ、そして何かを買ってから二人の元へと戻ってきたことに彼も、プレゼントを真剣に選んでいた梅も気づかなかった。

* * *

「見て見て鬼灯！ 桜と桃の髪飾りにしたの！ 桃の方が先に咲くから、一子に桃、二子に桜を渡すわ！」

鬼灯のアドバイスをもらいつつ、自分が選んで買ったプレゼントを鬼灯に見せ、無邪気に笑う梅に鬼灯は「二人とも喜ぶでしょう」と言つて、梅の頭を撫でてやる。

そして、同じテンションと無表情で彼は言った。

「梅さん。あなたは自分の名前が嫌いですか？」

言われた瞬間、無邪気に笑っていた梅から笑顔が消え去り、凍り付いたような顔になる。

そして妓夫太郎も驚いたように目を見開いてから、梅を鬼灯から庇うように二人の間に割り込んで、鬼灯を下から睨みつけた。

梅は兄を止めないが、鬼灯に対して怒り出したり泣き出したりもしない。

ただ、唇を噛みしめて彼を見上げいた。

肯定も、否定も出来ない。

肯定をしてしまえば、愛おしげに優しく自分の名を呼んでくれる兄を否定することになる。

けれど否定もしたくない。兄が呼んでくれる自分の名前は大好き

だ。けれど、その由来は決して好きになどなれない。

「梅毒の子」なんて、産まれた時から汚れていると言われていたような名前ではなく、兄が座敷童につけたような、華やかで、望まれて生まれて来た子だと一目でわかる名前が良かったと思う気持ちに、嘘はつけなかった。

「嫌いなら、私がつけ直ししょう」

鬼灯は言った。

梅の答えを待たず、更に目を見開いて「やめろ！」と懇願するように叫んだ妓夫太郎の声も無視して。

けれど、その眼にははつきりと怯えるような、今にも泣きそうな二人の兄妹を映して言った。

「あなたは、『梅』。松竹梅の、『梅』です」

同じ名前を、付けた。

「縁起物で松竹梅は基本ですが、何故あれらが縁起物なのか由来や意味はご存知ですか？」

ポカンとする二人に、鬼灯は懐をぐそぐそ探りながら尋ねると、梅は目をきよとんとさせたまま答えた。

「……え？ ……えっと、三寒三友っていう、縁起のいい3つて数字に冬でも緑の松と竹が長寿を現してるからよね？ それから梅は、春になると一番最初に——」

100年以上吉原で花魁という地位を保っていただけあって、文系の知識はかなりあった梅が割とすらすら語り、そして気付く。

同じ名前を鬼灯がわざわざつけ直した意味、「松竹梅」の「梅」の意味に気が付いた。

「桃よりも、桜よりも先に、冬の寒さの中でも咲き誇り、春を告げる花。

そして梅は幹に苔が生すほどの樹齢になっても、花を咲かせることから『気高さ』の象徴でもあります」

別の意味で言葉を失った梅に、鬼灯が続きを語りながら彼は懐から先ほど購入したものを取り出し、梅の髪にパチンとつけてやる。

梅が座敷童たちを選んだものと似たテイストのヘアピン。

白い髪によく映える、赤い梅の花の髪飾りがそこにある。

「良い名前でしょう？　なので、その名前に見合う大人になりなさい」
もうそこに、「梅毒」なんて意味はない。

梅が捨てたかったものだけを捨て、大事に守ってきたものを残し、
そして欲しかったものが与えられた。

その与えられたものに、梅だけではなく、妓夫太郎も受け止めきれず
にまだまだポカンと固まっていたら、鬼灯は懐からもう一つ物を取り
出し、今度は妓夫太郎に渡す。

「はい。妓夫太郎さんにはこちらをどうぞ。良く似合いますよ」

梅だけに何かを買ってやるのは不公平かと思つたのか、どうも妓夫
太郎にも買ってやっていたようだ。

だがそれは緑色の素朴な鳥笛。鶯の鳴きまねが出来るオモチャ
だった。

なので妓夫太郎は素直に受け取りこそはしたが、正直言つてどうし
たらいいかで困つた。

見た目こそは子供であり、環境の所為で情緒は子供並なのは確かだ
が、あくまで子供並なのは情緒であつて、妓夫太郎の精神年齢は割と
高い。

そもそも見た目も10歳くらいなので、見た目通りの精神年齢でも
こんなオモチャで喜ぶような年ではない。

妓夫太郎からしたら妹のついでにオモチャをくれるほど気にか
けてくれたこと自体は、照れくさいが嬉しいのだが、それ以上に思うこ
とはない。

だが、それは妓夫太郎にとってはの話。

梅はその鳥笛を見て軽く目を見開き、そしてまた鬼灯を見上げた。
鬼灯はやはり、いつも通りの無表情。

しかしその眼は、あの鼻欠けを見ていた時と同じ光を帯びていた。
『梅に驚』ということわざがあります。意味は、帰つてからご自分で
調べなさい」

鬼灯の言葉の直後、梅は大きな目に涙を溢れさせて妓夫太郎を
ギョツとさせたが、その涙が嬉し涙だと確信できるほど綺麗な、雪の
中で咲き誇る紅梅のような笑顔で鬼灯に飛びついて叫んだ。

「鬼灯、大好き!! 小指を本当にあげたいくらい大好き! 絶対に結婚する!!」

「遊女流の求婚はやめてください。いろんな意味で通報される」

妓夫太郎には、そのことわざの意味はもちろん、鬼灯のチョイスや妹の反応の意味がわからなかった。

だから、勉強に興味などなかったがそれだけは言われた通り、胡蝶家に帰ってから自分で調べた。妹に訊いても教えてもらえなかったから。

調べて知って、そして鶯の鳥笛は「もらっても困るもの」から「宝物」になった。

「梅に鶯」

その意味は、「取り合わせのよいもの、美しく調和するもの」たとえば。または、仲の良い間柄のたとえ」。

【惚れて惚れられなお惚れ増して、これより惚れよがあるものか】

* * *

(?)×
??(ミキ)

「はあく……」

髪を下ろしてメガネをかけた書生スタイルのオフモードで、ミキはトボトボと帰路に着いていた。

手には、スープジャー。中身は、同じくオフだったマキに習って作ったみそ汁。

そのみそ汁入りスープジャーをちらりと眺めて、また深い溜息が零れる。

「なんで私は、料理が出来ないんだろう……」

前々からコンプレックスだった料理下手がマネージャーにばれ、「プロならそれをネタにしろ。絶対に上達するな」と厳命されたが、ミキはそれに逆らってマキに頼んで料理の特訓を始めた。

今はまだその「料理下手」というキャラを使う気がないので、公開されて公式化する前に上達してしまつて没にしてやろうというという魂胆だ。

だが、その第一回目の結果がこれで既に心は折れかけている。

ミキ自身はいわゆるメシマズと呼ばれる人たちがやらかすこと、レシピを見もせず作つたり、見てもわからない部分を無視したり、勝手な解釈を加えてアレンジしたり、分量が目分量どころか適当極まりなかったり、好き勝手作つて自分では食わずに他人に丸投げなどと言つた非常識は行わない。

ただただ単純に不器用と野狐という種族柄、魚は生で丸のみなどと言つた鬼や亡者とはズレた味覚事情ゆえの料理下手だからこそ、自分には料理の才能が本気でないのだと思ひ知り、ミキ自身は余計に凹む。

「はあ……。なーんでレシピ見て作つて、マキちゃんにも教えてもらったのに、自分でも不味いものが出来ちゃうんだろう?」

ここまできるとマネージャーが慧眼だった、自分はむしろ面白おかしく非常識な料理を作るキャラでいるべきなんだろうか? と、望んでいない方向に根が真面目だからこそ思いつめて極めようかと本気で考える。

本気で自分を色物芸人枠にしようと考える自分に、心のどこかが冷静になつて「アイドルって何だっけ?」と自問自答。

そしてそのまま、「自分は何でアイドルになつたっけ?」「子供の頃の将来の夢って何だっけ?」と、現実逃避なんだか、むしろ現実を思い知っているんだかな思考に迷い込む。

そんな思考をしていたからだろうか。兄たちの職場に寄るつもりが、いつの間にかミキの足は自分の母校、焦熱小学校へと向かつていた。

しかし、ミキは小学校に着く前に、小学校近隣の住宅街で思わず見

つけて立ち止まる。

個人宅の玄関前で、その家の玄関を背にして門番というかもはや守護神のように腕を組んで堂々と仁王立ちしている男に。

なんかやたらと神々しくて頼もしそうな不審者に、見覚えがあった。

「……れ、煉獄さん？」

「ん？ 君は……ミキくんだなー！」

呼びかけたというより困惑ゆえの独り言だったが、それに反応した煉獄が一瞬だけ戸惑ったが、すぐに笑ってミキの名を呼んだ。

たった一度、鬼殺隊の歴史の講習回で会ったとも言えない、顔を合わせただけの相手を互いに覚えていた。

* * *

気付かれなかったら、初対面とそう変わらない関係なので、ミキはかなり気にしつつめちやくちや困惑しながらも、声を掛けずにそのまま兄の店まで帰っていただろう。

だが相手の方にも気づかれ、しかも誰かまでハッキリ認識されたのもあって、ミキは会釈してから近寄り、せつかくなので下手すれば一生解けなかったであろう疑問を口にした。

「こ、こんにちは。……えっと、煉獄さん。ここで何を？」

「うむ！ ここは俺の受け持つクラスの生徒の家だ！ 親御さんに用があるのだが、共働きの帰りが遅くなるそうなので、ここで待たせてもらっている!!」

煉獄の明朗快活な答えにミキは一瞬「なるほど」と納得してから、

「いや、何でだよ!」と心の中で突っ込んだ。

「……家の中で待たせてもらえないんですか？」

「生徒は塾に行っていて今は無人だ！ それと、家庭訪問などと言った学校行事ではなく、俺が個人的に訪問しているだけだからな！」

何度か都合のいい日を訊いたんだが、いつも『忙しい』と言われ続けたので、これはもう時間を作ってもらうのではなく、俺が仕事終わりまで待つべきだと思った！」

その心の突っ込みをオブラートで包んで問いかけたら、ミキが思っ

たよりも重い事情がありそうなことを軽やかに言い放たれたので、ミキは余計に反応に困る。

ミキは教員免許を持っているので、多少はモンペや毒親などへの対処法を学んだこともある。どうやらそれ系の事情で、煉獄はこの家庭に見た目通りの熱血さを発揮して首を突っ込みようとしているようだ。とりあえずの疑問は解決したが、ただの疑問だった時より重苦しいものを抱え込んでしまったミキ。

そしてその重苦しいものに現在進行形で関わる当の本人は、どこまでも元氣よく真つ直ぐだった。

「ミキくんは、今日は休みなのか？ ずいぶんと疲れたような顔をしているが」

まさかおそらく教師としても、人としても関わりたくない面倒事に関わろうとしている人に心配されるとは思っておらず、ミキは曖昧に笑って誤魔化した。

「あはは、今日はオフだったんですけど、せつかくのオフだからこそマキちゃんと一緒にちよつと色々しすぎて……。ちゃんと休まないダメですね。」

煉獄さんもその……あまり無理せず……。っていうかそんな所で出待ちというか帰り待ちしてたら、鴉天狗警察が……」

「心配してくれてありがとう！ だが大丈夫だ！ もう既に2回ほど職質されたからパトロール中の警察にも情報は回ってるだろう！」

「それは大丈夫じゃなくて手遅れ!!」

テキトーに誤魔化してもうミキは立ち去るつもりだったが、流石に生徒の家の前で守護神状態はどうかと思つてそのことをやんわりと忠告したら、堂々と全然大丈夫じゃないことを自信満々に告げられて思わず本心からの突っ込みが飛び出た。

「煉獄さん、あつちで待ちましよう！ あつちの公園で!!」

あそのこのベンチならこの家のリビングあたりの窓が見えるから、親が帰って来たら電気がついて気付きますから！

っていうかここで待ってたら、たぶん親御さんが家に入る前に警察に通報する！」

「む？　そうか。なら移動しようー」

もうこの人は放っておいたらダメだと、兄や橋、マキと付き合って磨き上げられた面倒見の良さを発揮してミキは煉獄の腕を掴んで、近くの公園で見張るように説得すると、煉獄はおそらくミキが何を心配しているのかは理解していないが、それでも素直に言う事は聞いてくれた。

そしてそのままミキは勢いでベンチに座り込む。煉獄の隣に座ってしまい、すぐに立ち去るつもりだったのに、そのタイミングを完全に逃してしまった。

「……その、大変ですね。小学校の先生って。授業だけでも大変でしょうに、こういう家庭の事情にも関わらなくちゃいけないってのは……」

座ってしまったのにすぐに立ち去るのはおかしいが、黙っていても気まずいだけなのでミキが正直な感想を口にする。

その感想に、煉獄は即答した。

「大変なのは俺じゃない。一番大変なのは生徒自身。その次が親だ。

俺は彼らの問題が解決したり、少しでも力になれたのなら誇らしいが、たいていは無力だ」

真つ直ぐ、問題の家を見つめながら煉獄は先ほどよりは静かな声で語る。

語りたいた弱音や愚痴を隠した自分の理想論ではなく、天気の話でもするような当たり前のことのように。

「あの子は、学校ではとてもしっかりした子だ。宿題を忘れたことはなく、遅刻などもしない。掃除もサボらない、とてもいい子だ。

だからこそ、問題ないと思ってしまう。そう思って、なかなか気づけなかった。弁当の日に持ってきているのは、いつもコンビニの弁当だったこと。作文で休日の思い出がテーマだったら、なかなか書き出せず、書いたものも他のテーマの時よりずっと短く、内容もほとんどなかったことに俺はなかなか気づけなかった。

……こんな時、生徒の為に何かをしたい、力になりたいという己の心映えが無価値に思えて、流石に虚しくなる」

それは、弱音だったのかもしれない。

個人名を出していないとはいえず、他人のミキに語るべきではない家庭事情を話してしまうくらい、教師としての自分の力量、出来ることの無さに苦しんでいたのかもしれない。

内容だけを聞けば、そう思えた。

けれどミキには、思えなかった。

真っ直ぐに、彼は見ていた。

おそらく仕事を言い訳に子供にネグレクト気味な親を待っているのに、その親を責めるような色はその金の瞳にはない。

自分の無力さを本当に嘆いているのかも怪しい、燦爛とした光しかそこにはなかった。

「だから、待つことでも何でも出来ることがあるのなら、それは苦ではない。とても有意義なことだ」

笑ってそう締めくくった煉獄を、無力だとは思えなかった。

「……気付けた時点で、煉獄さんは良い先生ですよ。行動してくれたのなら、きつとその生徒さんはたとえ親のことが解決しなくても……、それでも煉獄さんのしたことに意味がありますよ。」

気付いてくれた、行動してくれた人がいるっただけで……自分を見てくれたというだけでも、きつとその子の力になりますよ」

だからミキは、煉獄の心映えは決して無価値ではない、煉獄は無力ではないと告げる。

自分がそうだったから。

自分も、正直言つて親に恵まれたとは思えない。

兄を遊郭へ奉公に出し、妹である自分をその店に預け、拳句の果てにミキがアイドルになり、けれどその芸風が痛い系であったことを恥として電話を拒否するような親だ。

そんな親で、優しく好きだが頭が相当残念な兄達だったから、ミキは幼いころから「私がすっかりしなくちゃ」という思いで生きてきた。

自分の弱音を出せず、他者が望むように自分を押し殺して自分を演じるのに慣れてしまっていた。

「はい。……あの、実は私、料理が苦手でこれは練習で作ったものなので……、正直言って全然美味しくない、不味いくらいなんです、それでも良かったらその……あ、アドバイスとかもらえたら上達するんじゃないかなって……」

もはや何を言いたいのか、ミキ本人でもわからなくなってきた。

なぜ自分は、ほぼ初対面同然の相手に、不味いとわかっている自分の手作り品を飲ませようとしているのか？ メンヘラのストーカーでももう少し段階を踏むぞ、など思いながら、それでも彼女はしどろもどろになりながらも言い切った。

また煉獄はミキの言い分をきよとんとした顔で聞いていたが、ミキからしたら訳のわからない「アドバイスとかをもらえたら上達」で何故か納得して、「なるほど！ 俺は料理をしないから見当はずれなことを言うかもしれないが、任せろ！」と言ってくれた。

もうその返答の時点で大いぶ見当はずれだが、そもそもミキの主張の段階で割と意味不だから、問題しかないが問題にならないだろう。

なのでミキは、自分で言うっておきながら「どうしてこんなことに？」と思いつつ、スープジャーを開けて蓋部分を器にしてまだ湯気が立つほどにあたたかいカボチャのみそ汁を煉獄に手渡した。

煉獄をそれを受け取って、「いただきます」と丁寧に言ってからずっつと一気に半分ほど飲む。

そして笑顔で勢いよく言った。

「うむー、美味くはないな!!」

味見は作った直後からしていたのでわかっていたし、煉獄ならたぶんハツキリ言うだろうとミキでもわかっていた。

だからシヨックというより、直球ストレートに言われて反応に困りそうだと思っていたのに、思った以上にミキはその言葉に自分の心が凹むのを感じる。

その凹み具合で、自分が何故あんなことを言いだしたのかを理解した。

（ああ……。私はこの人に甘えてたんだ。

もし、この人が私が子供の頃の先生なら、笑いものにせず、……私

が失敗しても失望なんかしないで、嘘でも美味しいって言うてくれるんじゃないかって……勝手に期待してたんだな)

別に子供の頃、調理自習で先生に笑いものにされた訳ではない。

ただ、普段は優秀なミキだったのでいつも通り放っておかれて、出来上がったものがあまりに残念な出来だったので、とても気まずく笑われた事はあった。

その気まずい笑顔と、「ミキちゃんにも苦手なものがあったのね」と語る言葉の端々に「失望」が見えたのは、きつとミキの被害妄想だと自分で言い聞かせていた。

だから、どつちにしる煉獄の反応はマシだと今回もミキは自分に言い聞かせる。

マネージャーが企んでいるように、大勢の人に笑いものにされた訳ではない。勝手に期待して放っておいたくせに、勝手に失望された挙句に氣遣われた訳でもない。

ただただ誠実に、正直な感想を口に出されただけ。

それは、ずっとマシな反応。喜ぶべき反応だと自分に言い聞かせ、ミキは笑う。

笑って、「ですよ、ありがとうございます。もうこれを機に、料理下手をネタにしていきます」と言った。

その後は器に残っているみそ汁を回収して、口直しのお詫びにコンビニで何かを買って渡して帰ろうとしていたのに――

「……アイドルという仕事は、俺にはよくわからない。

けれど、『人に笑顔を与える仕事』と『人に笑われる仕事』は別物だということくらいはわかる」

「えっ？」

ミキが取り返す前に、煉獄は残りの味噌汁も飲み干し、そして空になった器をミキの前に差し出す。

差し出して、言った。

「おかわりを頼む」

「……は？ いやいやいや！ 無理しなくていいですよ！ わかっていますよ、不味いってことくらい！」

味見をしたから、ミキだつてわかつてる。レシピを見ながらだったし、マキに手伝ってもらったので、檜に以前食べさせたもののように緑色のゲロを吐く心配はいらないが、それでもこのみそ汁は不味い。出汁の煮干しの内臓がよく取れてなかったようで変なえぐみがあり、具のカボチャが水つぽかったせいかな味噌が薄いのにカボチャが溶けたせいでドロツとした舌触りが最悪な出来栄えだ。

それなのに、煉獄はミキに器は返さずおかわりを要求する。

「確かにこれは、美味くはないな。けれど、俺は教師になって生徒の作ったものをもらい、食べる機会が多くなつたからか、料理をしなくてもわかるようになったものがある」

ミキと地味に器の引つ張り合いを行いながら、煉獄は優しい笑顔で告げる。

「相手のことを何も思っていない、自己満足の品物か。それとも、相手のことをよく考え、思つて作ったものかくらい、俺でもわかる。

そしてこれは、間違いなく食べる相手のことを考え、思つて作ったものだ」

煉獄の言葉に一拍の間を開けて、ミキは顔を赤くして固まる。

引つ張り合っていた力が抜けたのを良いことに、煉獄は勝手にスーブジャーもミキの手から抜き取つて注ぎ、セルフおかわりを実施しながら話を続けた。

『今は』残念だが美味くはない。だが、他者を想つて作るものが、上達しない訳などない。

そう考えると、君が想つた『誰か』を羨ましく思う。その者はきつと、いつでも一番美味しい君の料理を食べるのだから」

煉獄の言葉に、更にミキの顔に熱が溜まる。

彼の言う通り、これは具体的な人物など想定していないが、それでも「誰か」を……自分の恋人や旦那に食べさせるというイメージで作ったもの。

そんな風に考えて作れば、「どうせ自分が食べるんだし」という甘えがなくなつて上達するんじゃないかとマキが言い、自分も期待して作った結果がこれだったからこそ凹んでいた。

なのに、まさかのポジティブかつイケメンすぎる感想をもらって、ミキは何も返せない。

兄の奉公先兼自分の託児所が遊郭だったので、異性からの甘い言葉に関しては何しろ耐性が高い方だと思っていたのに、これは反則もいい所。

そんな感じで大ダメージを食らっている真っ最中だというのに、この鬼殺隊の柱は野狐にも全く別の意味かつ無自覚で容赦が皆無だった。

「俺は、食べ物を無駄にする番組などが嫌いだ」

脈絡があるようでない言葉を紡ぎ、みそ汁を全部飲み干して煉獄は言う。

「笑われる必要なんかない。きっとそれは、アイドルの仕事なんかじゃない。

ミキくんは大切な人の為に料理の練習をしたらいい。笑われたら、泣いて『笑うな』と怒っていい。少なくとも、俺は自分の生徒が恥ずかしい思いをして、他人に笑われるのは我慢ならない」

ミキはこの発言でようやく、煉獄の脈絡がないと思われた言葉は全部、自分の強がりと諦めで言った「料理下手をネタにする」へのフォローだったと理解した。

理解しても、言葉が出ない。

何と返せばいいのかわからない。ミキの方が実年齢は絶対に上なのに、煉獄の方があまりに大人だった。

「……俺が教師になる前でも、それでも君はあの学校の生徒だった。

だからきつと、俺と同じように思う者はいる。そして俺は、その者の代わりに、その者と一緒になって、君を応援しよう。

君が、『笑われる』のではなく、『笑顔を与える』仕事ができる力になりたいと思っっている」

スープレジャーの蓋を閉めて返し、そう告げられてもミキは何も返せなかった。

ただ幸いというべきか、その直後に煉獄の目的の家の電気がついたので、ミキが行動せずとも煉獄の方が離れるタイミングとなる。

煉獄は女性を一人残していくことに難色を示したが、そこは何とか「兄に迎えに来てもらう」とミキが主張することができたので、彼は安堵したように笑って去って行った。

「ありがとう、ミキくん！ みそ汁が上達するといいなー！」

その笑顔を、ミキはずっと見ていた。

煉獄が去って行っても、兄から「店に寄るんじゃないのか？」

今、どこで何してるんだよ？」と心配の電話がかかって来るまで、彼女はそのベンチから動けず、ただ煉獄の笑顔を何度も思い返し続けた。いた。

* * *

後日、閻魔庁でまたマキミキが企画のゲストとして参加することになり、その打ち合わせをしていた時の休憩中にミキは、狛治に訊いた。「あ、あの……狛治さん。あの……煉獄さんの好物ってなにか、知ってますかニヤーン」

その問いとミキの真っ赤な顔で色々察した狛治は、煉獄の春に喜ぶやら、一体何があつてこうなったのかがめちやくちや気になるやら、煉獄に恋愛が出来るのか不安になるやら、とにかく様々な感情が一気に頭で湧き上がって混乱し、その結果とっさに出た言葉が「正気ですか!？」だった。

単純に「本気」と言い間違えただけなのに、「思わず本音が出た」と周囲に確信されたのは間違いなく狛治ではなく煉獄の所為だろう。

【かくて降りたる幕引きの裏、
忍ぶる恋は始まりて】

* * *

色恋沙汰のあれやこれ

つまるどころはこんなもん

お医者様でも草津の湯でも
恋の病は治りやせぬ